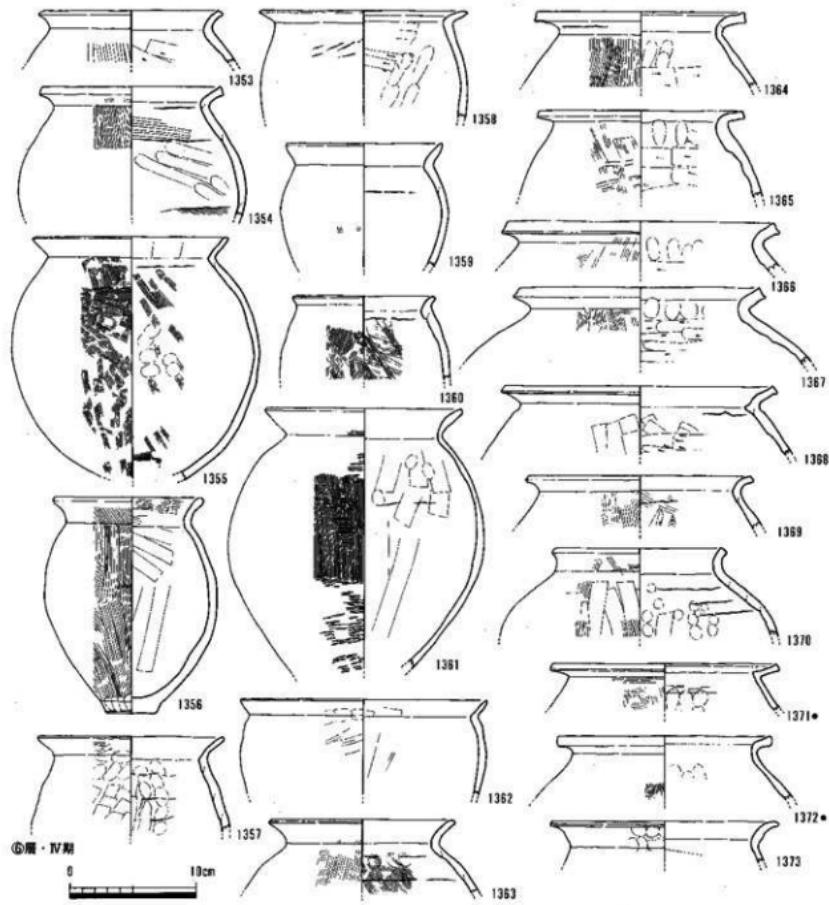


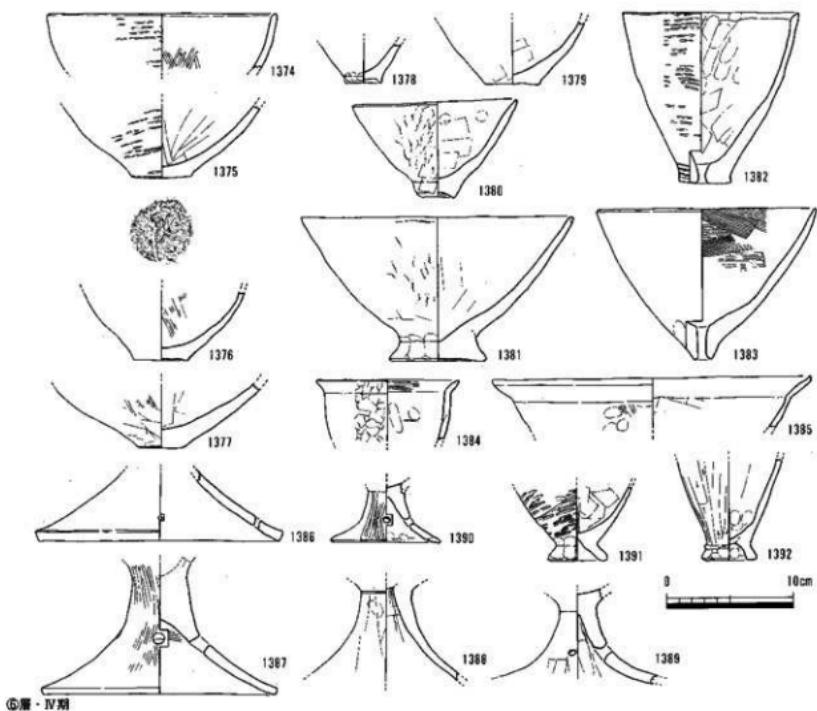
第124図 土層断面V-V' 参照

第164図 SRM03 (第128図B-④地区) 出土遺物実測図 (1/4) ③



第124図 土層断面V-V' 参照

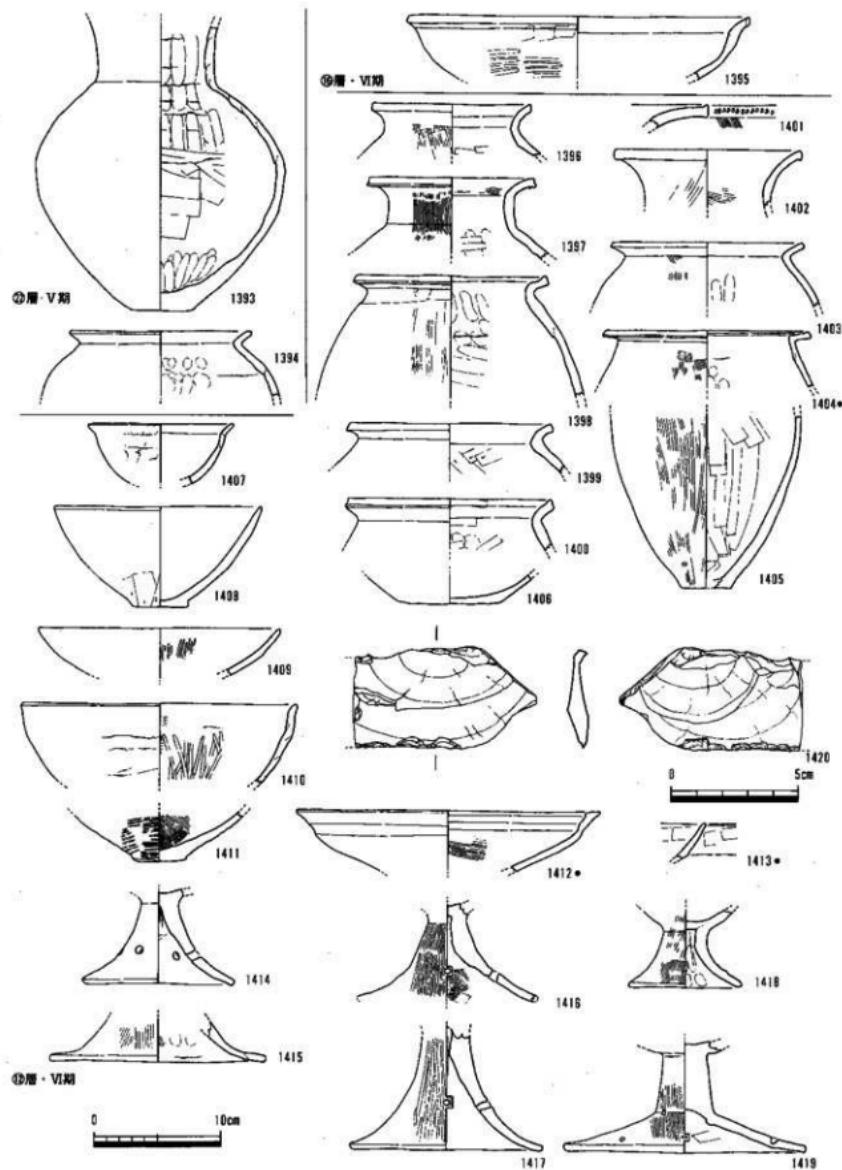
第165図 SRM03 (第128図B-④地区) 出土遺物実測図(1/4)④



⑤層・Ⅳ期

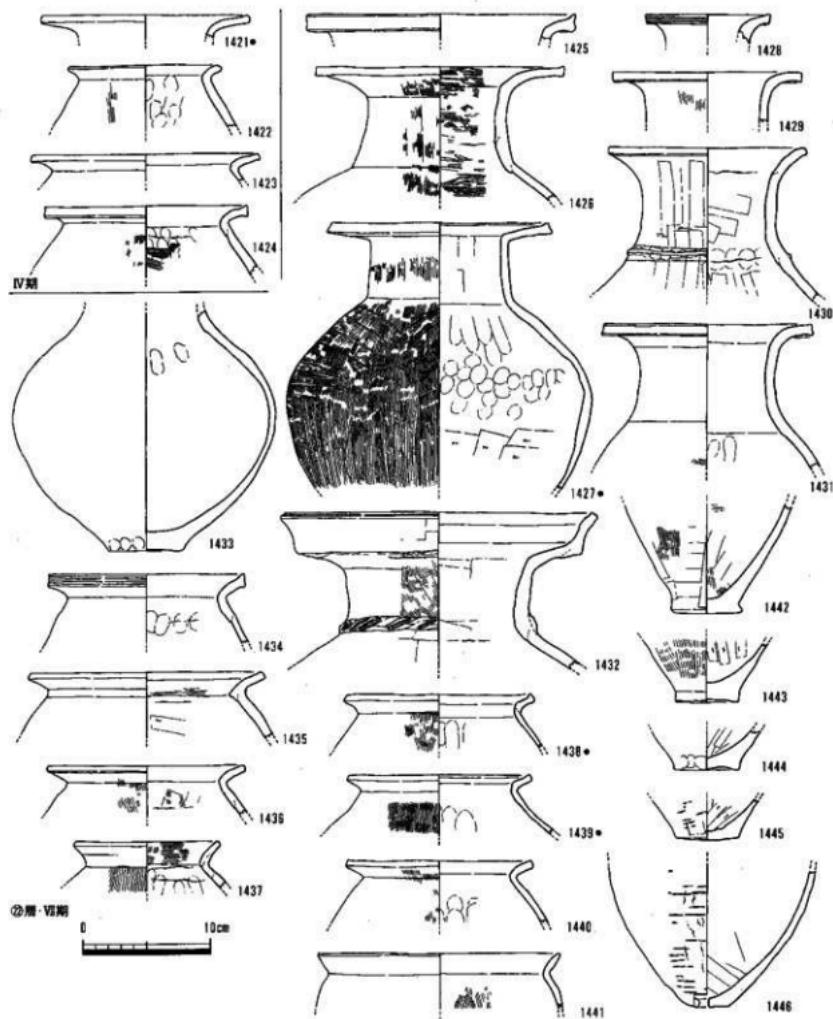
第124図 土層断面V-V' 参照

第166図 SRMII03 (第128図B-④地区) 出土遺物実測図(1/4)⑤



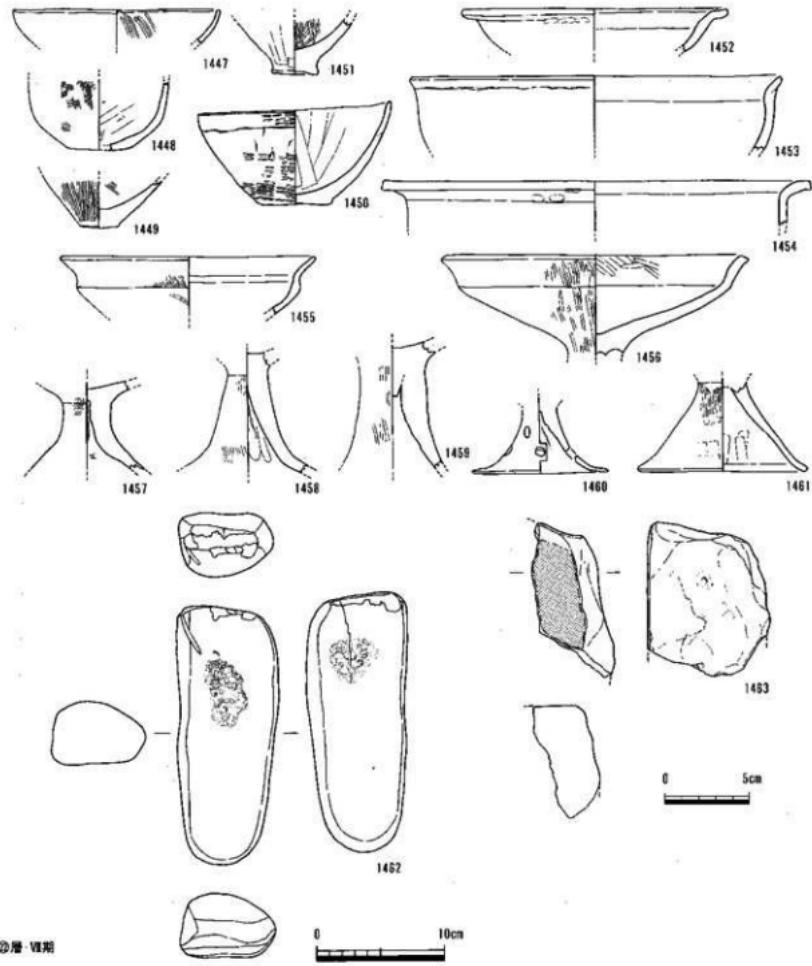
第124図 土層断面V-V' 参照

第167図 SRⅢ03 (第128図B-④地区) 出土遺物実測図(1/4)⑥



第124図 土層断面V-V' 参照

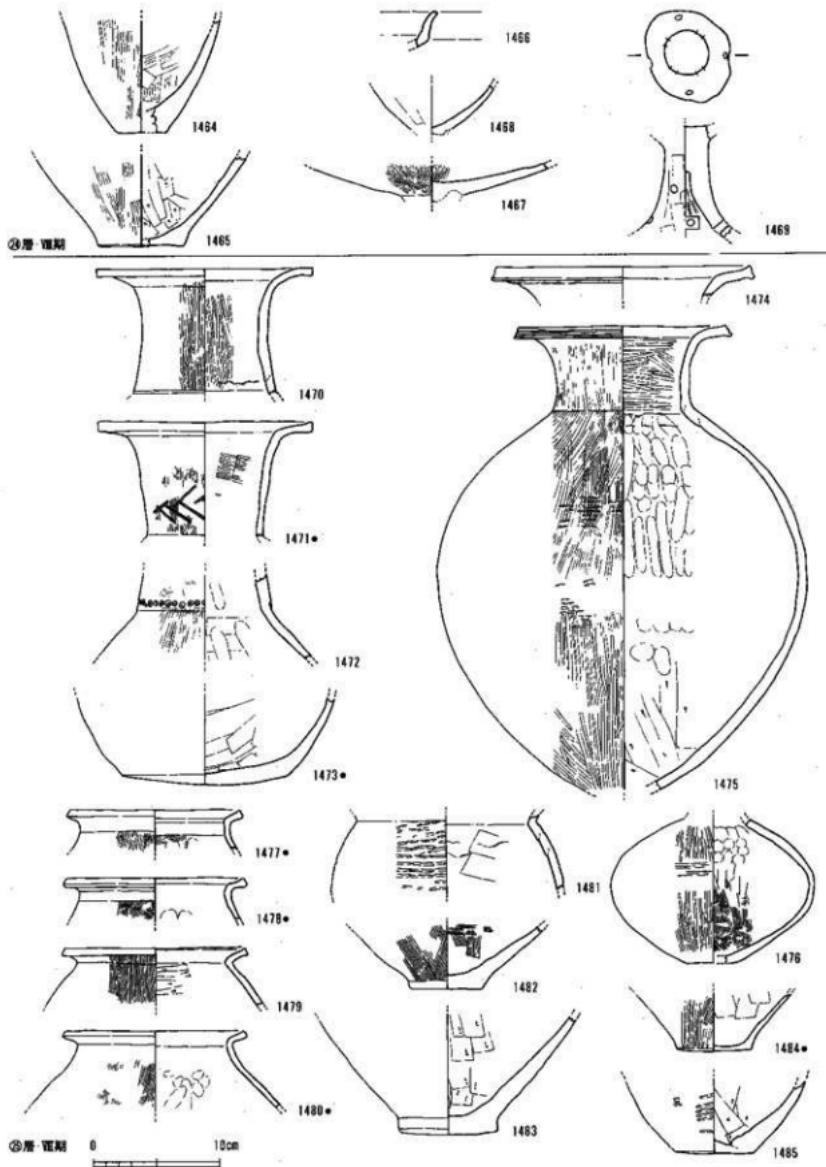
第168図 SRM03 (第128図B-④地区) 出土遺物実測図(1/4)⑦



②層 Ⅳ期

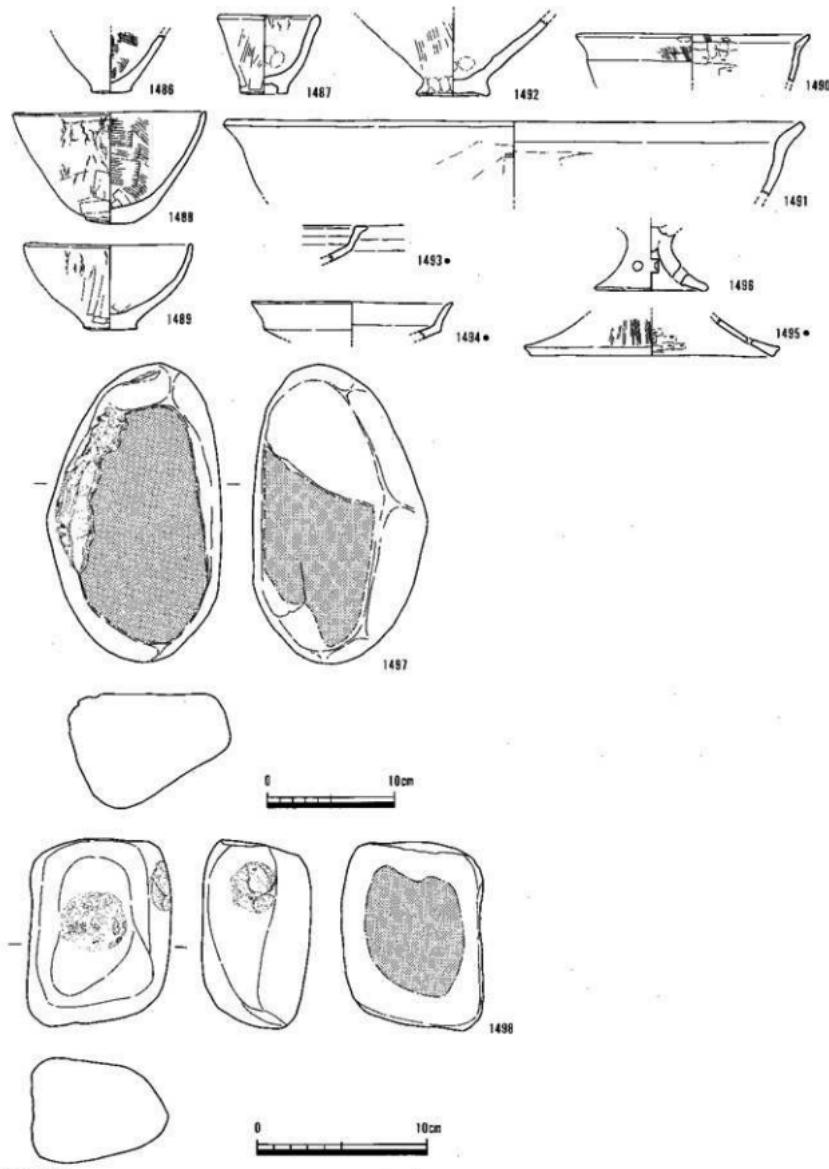
第124図 土層断面V-V' 参照

第169図 SRMII03 (第128図B-④地区) 出土遺物実測図(1/4)⑧



第124図 土層断面V-V' 参照

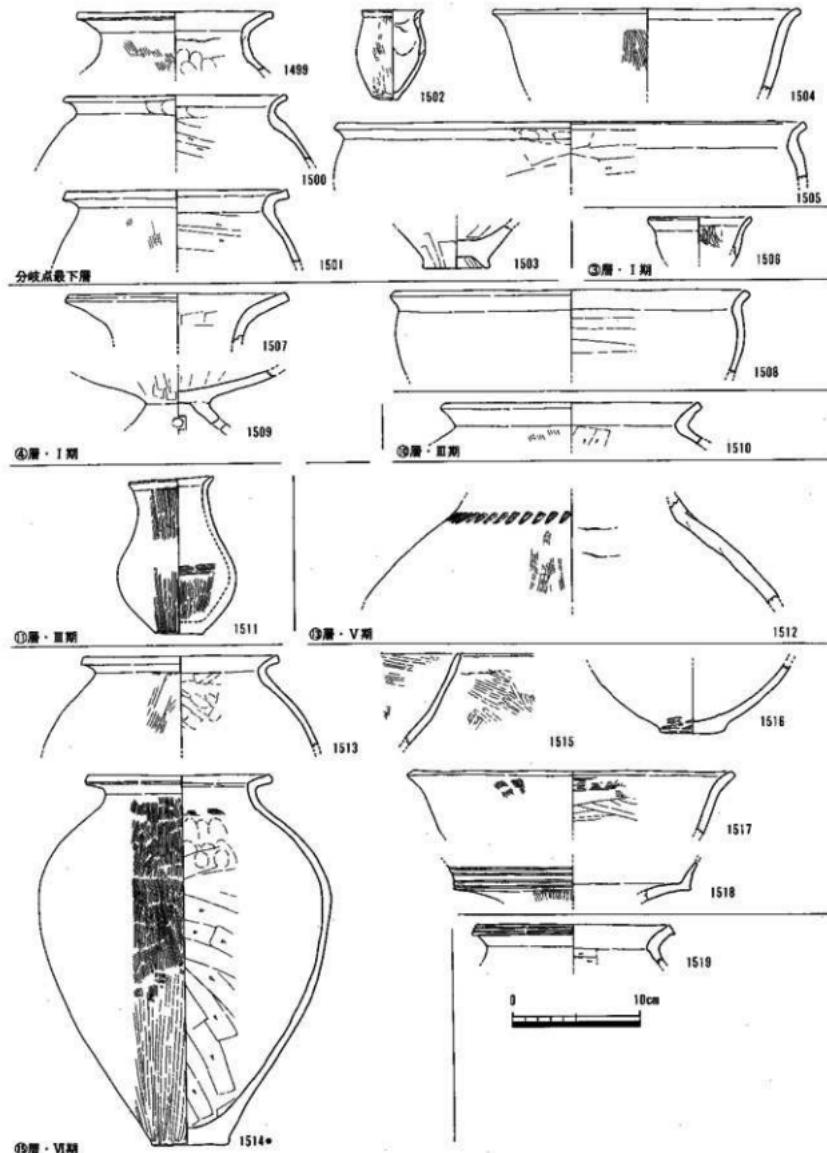
第170図 SRMII03(第128図B-④地区)出土遺物実測図(1/4)⑨



◎層 植物

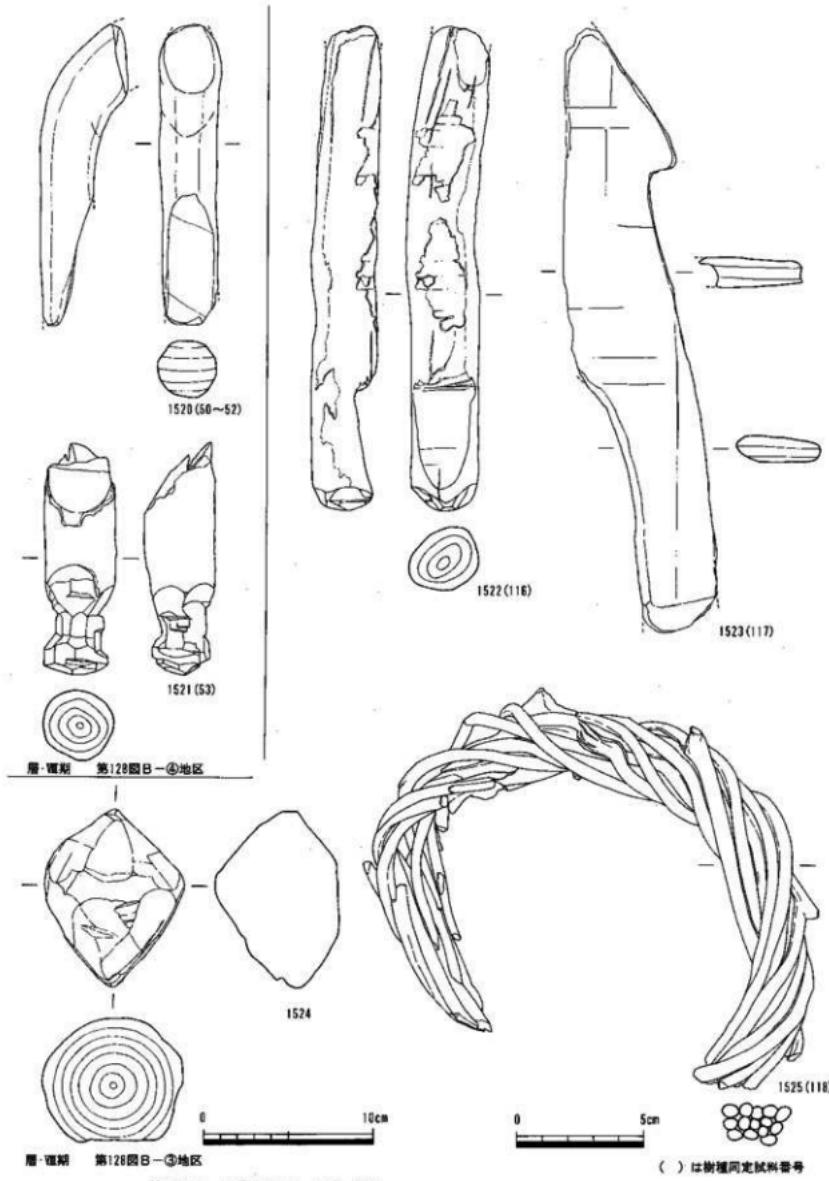
第124図 土層断面V-V' 参照

第171図 SRM03(第128図B-④地区)出土遺物実測図(1/4)⑩



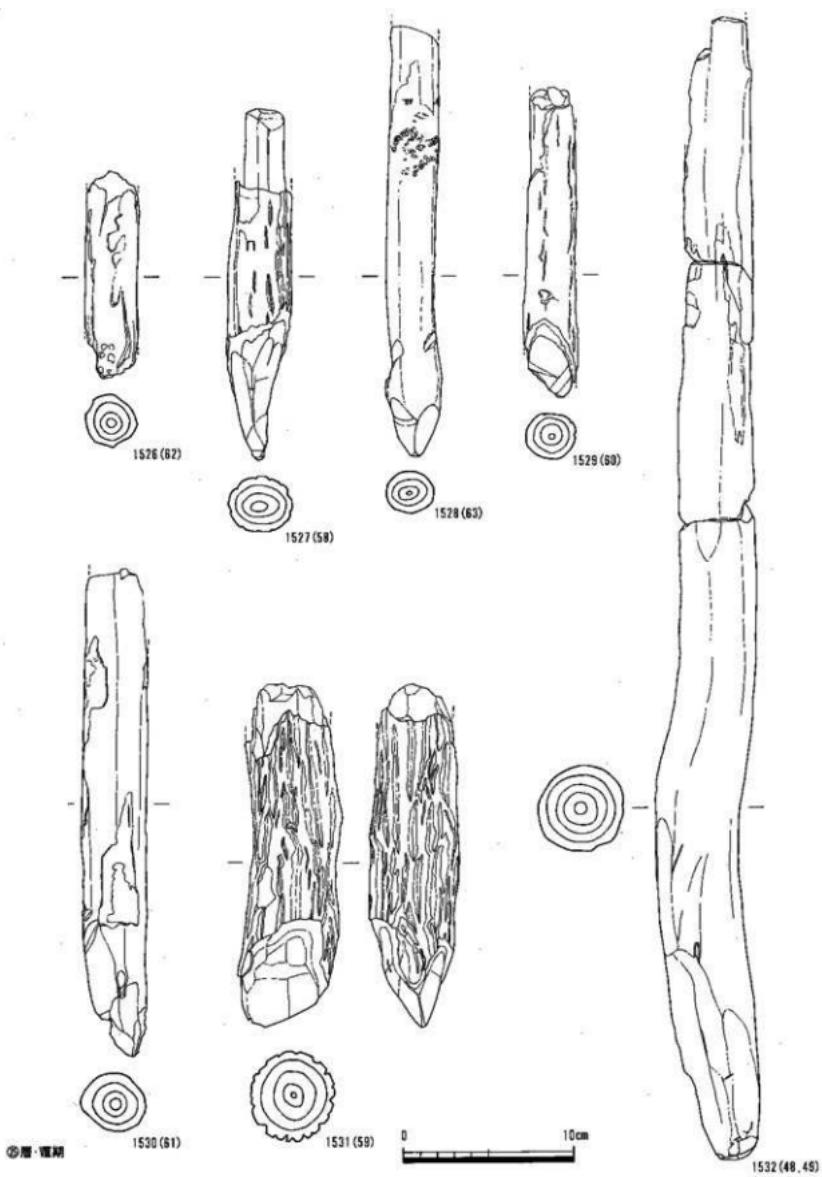
第124図 土層断面V-V' 参照

第172図 SRMII03 (第128図C地区) 出土遺物実測図(1/4)



第124図 土層断面V-V' 参照

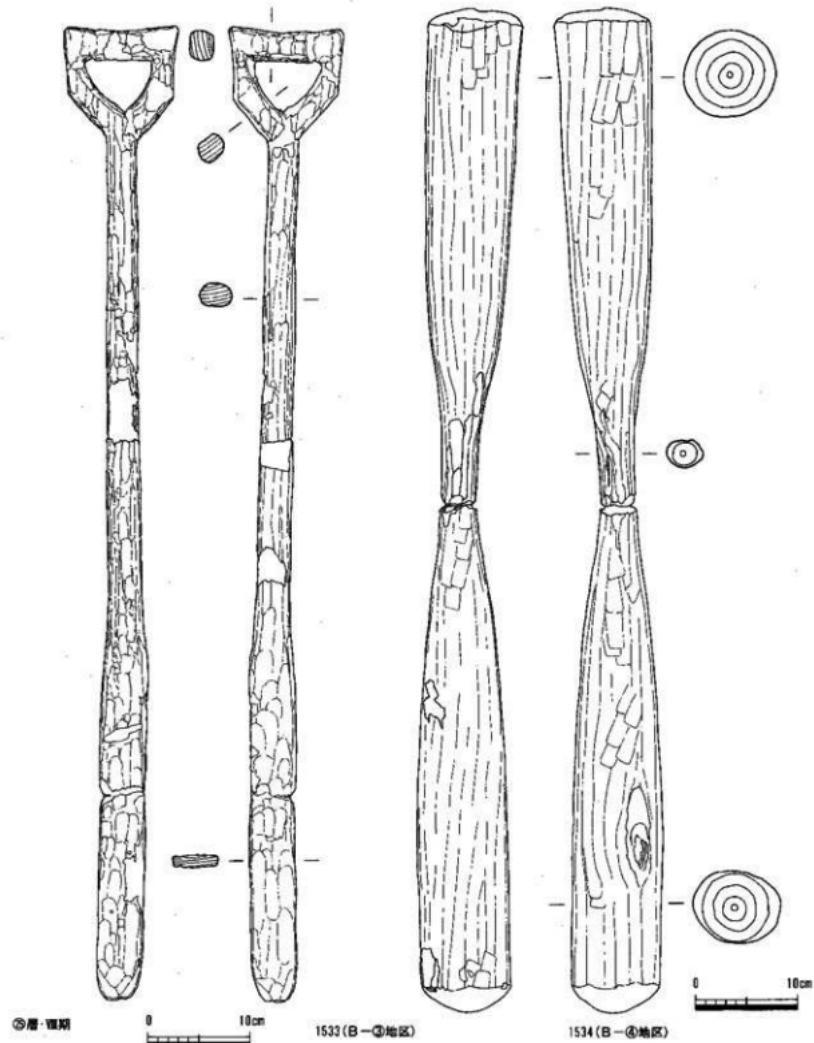
第173図 SRM03 (第128図B-③・④地区) 出土遺物実測図(1/4)



第124図 土層断面V-V' 参照

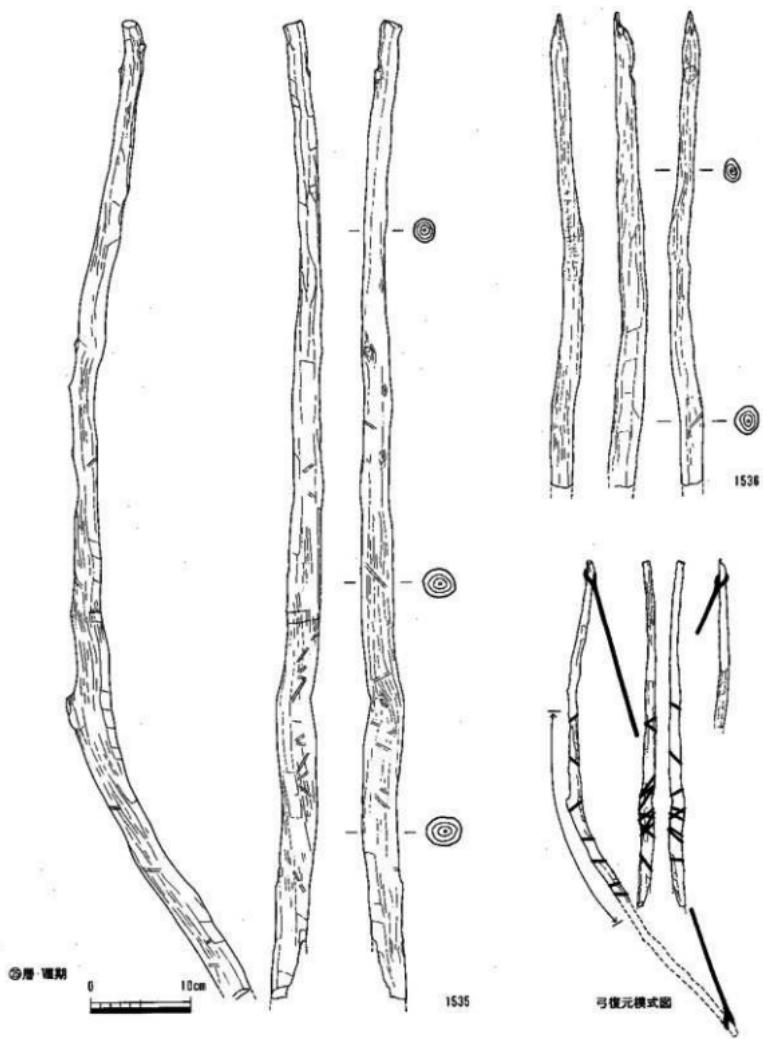
( )は樹種同定試料番号

第174図 SRIII03（第128図C地区）出土遺物実測図(1/4)



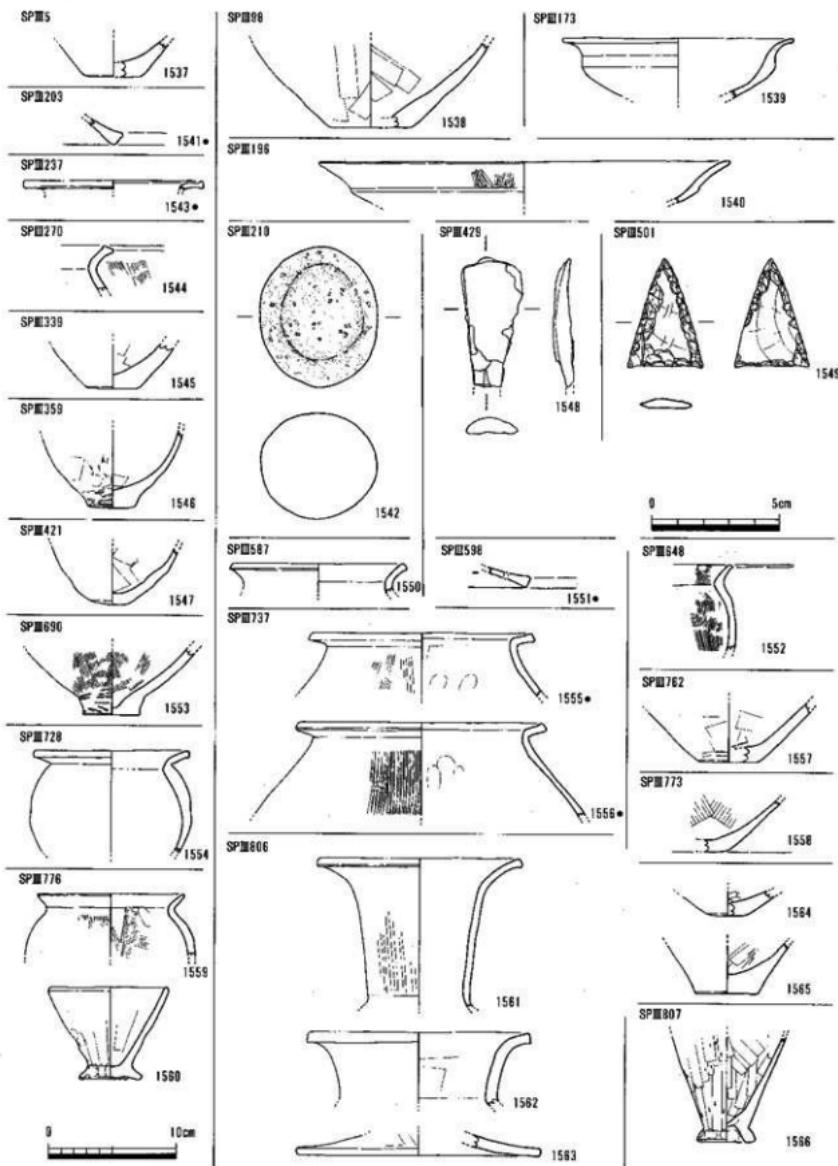
第124図 土層断面V-V' 参照

第175図 SRIII03 (第128図B-③・④地区) 出土遺物実測図 (1/4)



第124図 土層断面V-V' 参照

第176図 SRIII03 (第128図C地区) 出土遺物実測図(1/4)



第177図 柱穴出土遺物実測図(1/4)①

### 柱穴出土遺物

第III調査区で検出した柱穴を見ると弥生時代以降一部中世の柱穴が混じるがそのほとんどは弥生時代の柱穴である。

弥生時代の柱穴から出土した遺物の器種は壺・甕・鉢・高杯・製塙土器と他の遺構から出土した器種と同じである。特にSPIII429からは鉄製の鎌（第177図1548）と考えられる製品が出土している。形態は逆台形状を呈しており、断面は反りぎみである。

中世の柱穴は遺物が出土し、時期を確定できるものは1145個中3個と非常に少ないと解る。

のことからも解るように第III調査区では弥生時代の遺構を最後にこれ以降集落は營まれなかったものと考えられる。この現象は古川の度重なる氾濫で、この地区が不安定な場所であったことを示している。

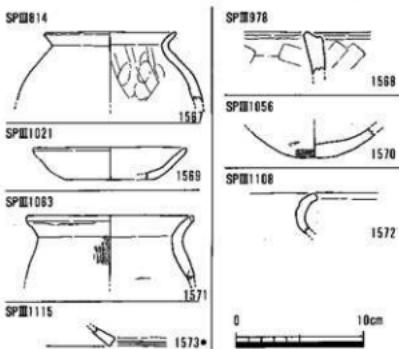
### 包含層出土遺物

第III調査区で検出した遺構が弥生時代に限定できることは包含層出土遺物を見ても確認できる。

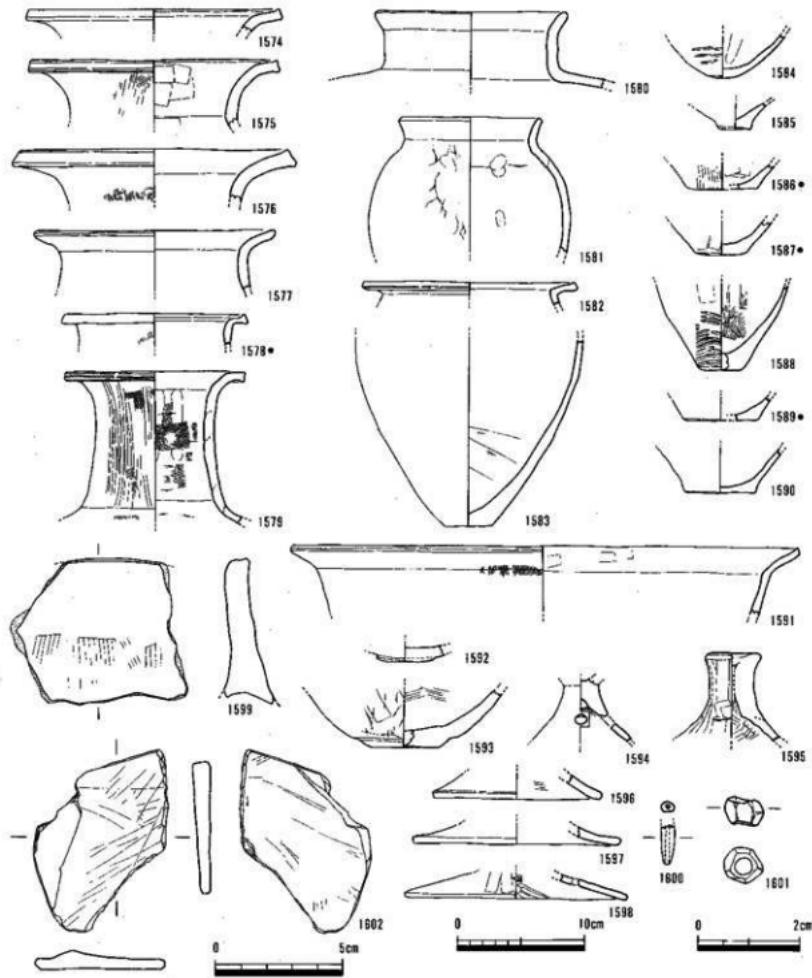
包含層からはほとんど弥生時代以降の遺物が出土していない。

弥生時代の遺物の中で、第179図1601はガラス玉である。平面形態が5角形を呈し、断面形態は中央に稜を持つ算盤玉状を呈する。大きさは最大幅で8mm、高さ5mmを測る。上・下に面を持ち、中央に約3mmの穿孔が認められる。

平面形態の5角形は歪で、明瞭な縦や面を持っていないことから、弥生時代のものと考えられる。



第178図 柱穴出土遺物実測図(1/4)②



第179図 包含層出土遺物実測図(1/4)

### 第III調査区 小結

#### 1. 集落内の遺構変遷

第III調査区は微地形復元・予備調査により確認した南から北方向に延びる微高地（微高地a）を中心にある。また調査の結果、この調査区の遺構の中心部は予備調査により西側で低湿地部分を確認し、また発掘調査によって東側で旧古川（現古川5mも含む）、北側ではほぼ南東方向から北西方向へ流路を取るSHIII03を確認したことによって西・北・東をこれら流路・低湿地によって区画されていることが解った。

この流路・低湿地により区画された部分で竪穴住居跡9棟（不明遺構SXIII03も含めると10棟）掘立柱建物跡6棟、土壙墓8基、井戸跡1基、土坑30基、不明遺構4基、溝23条、自然流路7条、柱穴多数を検出した。これらの遺構は前述したように西を低湿地部（低湿地a）、北をSHIII03の溝、東を現古川（おそらくこの位置には旧の古川があったものと考えられる。）で囲され、南はSHIII09から以南にかけて徐々に遺構が希薄になることを考慮すると直径約60mのほぼ円形の範囲に収まる集落であることが判明した。

以下この範囲に収まるそれぞれの遺構をそれぞれに検討することにより、時期的な変遷や集落内構造とその有機的な繋がりについてまとめてみたい。

竪穴住居跡は南から北方向に延びる微高地の稜線上となる最高所にはほぼ一直線になるように検出した。ほぼ中央に張り出し付の竪穴住居を3棟検出しており、一部重複することから立て替えられたことが解る。この中心部分と考えられる張り出し付の竪穴住居3棟以外は近接するが、切り合いを持たず検出されていることから竪穴住居の築造位置に居住者の意図的な配置が読みとれるのではないだろうか。つまり張り出し付の竪穴住居（集落内家長）を中心として周囲にその他の竪穴住居が位置することで、集落内の身分的構造が読みとれる。

平面形態でみると円形のもの6棟（うち張り出し付の円形のもの4棟）、方形のもの3棟（SXIII03を含めると4棟）がある。円形のものは規模（床面積）でみると大小に区分でき、張り出し付のものが概ね40～50m<sup>2</sup>と大型で、それ以外のものが20～30m<sup>2</sup>と小型のものというように張り出し付くものと付かないものという平面形態により規模（床面積）の格差が認められる。一方方形のものも規模（床面積）でみると大小に区分でき、40～50m<sup>2</sup>の大型のものと、10～20m<sup>2</sup>の小型のものとに明確に規模の格差が認められる。

内部構造についてみると削平を受けているが、規模の格差として明確に表れるようには構造差が認められない。しかし敢えて言うならば円形の竪穴住居の中で張り出し付の竪穴住居は所謂「10土坑」を炉として持ち、特にSHIII07は北側の円形炉の周囲に土手を持つことから機能的に充実した構造を持っていることが解る。また方形の竪穴住居の中で小型方形竪穴住居は中央に炉を持つものもあるが、SHIII04のように主柱穴もなく、炉を持たないものもある。これは用途の違いによるものかもしれないが、円形・方形の竪穴住居ともその規模の差及び形態差に内部の構造差が認められる。

出土遺物からみるとそれぞれの竪穴住居出土土器には壺・甕・鉢・高杯を主とする器種組成が成立しており、個々の竪穴住居間に総合的な出土量の偏差及び器種ごとの偏差は確認できない。しかし石器及び土製品でみると張り出し付竪穴住居 SHIII07 では結晶片岩製の石窓、土器転用の紡錘車、土製土玉を持ち、他の竪穴住居と比べると少量ではあるが生産用具・祭祀用具の面で偏差を確認できる。また床面直上で台石が出土していることからも偏差性を指摘できる。掘立柱建物跡は微高地の高所

から西側に若干傾斜する部分、一部墓域に重複するように検出しているが、明らかに堅穴住居域とは区分された位置にある。

掘立柱建物の間数は $1 \times 3$ 間にを中心に $2 \times 3$ 間、 $1 \times 4$ 間のものがそれぞれ1棟ずつ確認できる。また床面積では土壙墓の覆屋であるSBIII05と桁行が4間あるSBIII03(24 m<sup>2</sup>)を除くと概ね15~17 m<sup>2</sup>程度に纏まりを持つ。柱穴掘り方の規模では掘り方が50~85 cmと大きいもの(SBIII02・03)と10~30 cmと小さいものがある。

これらはSBIII05・06を除く全ての掘立柱建物は堅穴住居群に伴い倉庫的な収納機能を持つものと考えられ、特に掘立柱建物SBIII06はこの小地域の中核となる堅穴住居が密集する部分にあることからこれらの堅穴住居が廃絶した後建てられたシンボリックな建物かあるいは住居が堅穴住居から掘立柱建物になった可能性が伺える。

土壙墓は微高地の高所から西側に若干傾斜する部分、堅穴住居の西側に総数10基の内9基が纏まっている。それぞれの土壙墓群を画する溝等の施設はないものの堅穴住居群と土壙墓の纏まりが明確に分けられることから住居群に隣接した墓域を構成しているものと考える。

平面形態では方形周溝状遺構もあるがほとんどは長方形の土壙墓で、頭位方向は不明であるためにここでは長軸主軸で分類したい。長軸主軸でみると真北より東にとる一群と西にとる一群に分けられる。真北より東にとる一群をA群とし、さらに10~15°東にとるA1群(STIII02・03)、30~40°東にとるA2群(STIII05・06)とに細分する。また真北より西にとる一群をB群(STIII04、STIII07~10)とし、これらは長軸主軸を真北より20~60°西にとる。このB群は切り合いや若干の主軸方向に幅があるが、これを維続性ととらえた。特にB群とした土壙墓にはSTIII07のように覆い屋として掘立柱建物を配するものがあり、モガリヤを彷彿させる覆屋の可能性を指摘できる。

出土遺物からは明らかに土壙墓に供獻された遺物がないために明確な時期を決定するまでには至っていないのが現状である。しかし埋土中から出土した少量の遺物と土壙墓同士の切り合い関係からの時期決定及び前後関係を考えるとSTIII06(A2群)、08・10(B群)が若干古く、STIII09(B群)は若干新しいと考えられ、これを基にA2群→B群→A1群の変遷が考えられる。

井戸跡は微高地高所部の南北に列をなす状態で検出した堅穴住居群のほぼ中央部で検出した。検出した位置は高所であるが、ちょうど旧河道(SRIII06)の流路に位置し、明らかに湧水地を選んでいることが解る。

出土遺物を時期的にみるとこれらの遺構は全て弥生時代後期後半の時期に比定できる。そのなかで小地域の中核となる張り出し付の堅穴住居SHIII05~07は規模に多少の差はあるものの平面形態が同じで、近接することから立て替えられたものとして、この3棟の堅穴住居を基軸とし、この3棟以外の遺構を遺構I期からIV期に細分した。この堅穴住居の変遷に当たっては真鍋編年と大久保編年を参考にした。

まず遺構I期は自然流路SRIII04~07のみの時代で、遺物が出土していないため、時期は不明であるが、検出した遺構が全て自然流路を切っていることから弥生時代以前である。遺構II期は堅穴住居SHIII01・06、土壙墓STIII05・06が、遺構III期には堅穴住居SHIII02・07・08、掘立柱建物SBIII02・04・05、土壙墓STIII07が、遺構IV期には堅穴住居SHIII03・05、掘立柱建物SBIII03、土壙墓STIII02・03、遺構V期には堅穴住居SHIII04、井戸SEIII01が同時併存していたと考えられる。V期で弥生時代の集落は終

焉する。遺構VI期は古代以降の自然流路 SRM01のみで、古川が現位置に固定した頃のものである。

以下に弥生時代の遺構の変遷（遺構II～V期）について説明したい。

この時期的な堅穴住居の同時併存関係から遺構II期には張り出し付の円形堅穴住居1棟に対し、やや小型の円形堅穴住居1棟が併存するように平面形態的には円形を基調とするもので占められ、規模には大・小が認められる。遺構III期になると張り出し付の円形堅穴住居1棟に対し、ほぼ同規模の方形堅穴住居1棟、小型の円形堅穴住居1棟、掘立柱建物1棟、土壌墓が併存するように平面配置的に中核となる堅穴住居は張り出し付の円形を基調とするが、併存する堅穴住居は平面形態が方形のものへと移行し、小型のものとの差が顕著になる。この小地域（第III調査区）での最盛期である。遺構IV期になると張り出し付の円形堅穴住居1棟、小型方形堅穴住居1棟、掘立柱建物1棟、土壌墓が併存するように平面配置的には中核となる張り出し付の堅穴住居に変化は認められないが、併存する堅穴住居は小型の方形となる。遺構V期では小型の方形堅穴住居1棟と掘立柱建物1棟、井戸1基となり、この小地域での集落の終焉時期で、以後集落は廃絶する。

のことからこの小地域の同時併存する堅穴住居は2～3棟ということになる。

以上第III調査区で検出した弥生時代の遺構をそれぞれの時期において検討した結果、この集落は約60mの範囲内で完結し、その中には微地形上の高所を選択し堅穴住居が配され、西側に確認されている低湿地に向かい傾斜する方へ掘立柱建物・墓域が造られている。のことから居住域と墓域は明瞭に分けられ、構成されることが解った。また出土遺物・切り合ひ関係で概ね4時期が設定でき、それぞれに堅穴住居2～3棟・掘立柱建物1棟・土壌墓2～3基がこの集落の最小単位集団であることが判明した。この最小単位は原間遺跡弥生集落内的一家族と考えられ、この最小単位集団は居住範囲西側に隣接して推定できる水田城の經營を行っていたものと考えられる。

## 2. 自然流路及び溝との関係

遺構II～V期と自然流路 SRM03とSDM01・02の関係を検討したい。

自然流路 SRM03は①微高地を横切るように検出され、水田城に導水したと考えられる点、②B地区の4回の蛇行が水流・水圧に対する制御機能を持っていると考えられる点から人為的に掘削された溝の可能性が非常に強い遺構である。しかし第III調査区には遺構I期に認められるように南東方向から北西方向に向かっての蛇行した自然流路がかなり認められ、この自然流路が弥生時代の集落を構成するに当たり、再掘削した可能性も考えられ、当初から意図的に掘削したとは必ずしも判断できない。

まずSRM03であるが、土層断面に認められる埋没状況から流路I期～VII期に大別した。

出土遺物からこの各期と遺構の各期を対応させると流路I～III期が遺構IV（下川津Ⅲ式併行期）・V期に、流路IV期が遺構III期（下川津Ⅱ式併行期古）に、流路VI・VII期が遺構II期（下川津I・Ⅱ式併行期新）となる。流路V期については出土遺物が少量であったため、時期は不明である。

一方溝 SDM01はSRM03から派生する溝で、流路VI期、遺構II期に機能しており、SDM02はSRM03を切っていることから、遺構V期より後出す。

SRM03、SDM01・02は古川主流路から西側に展開する水田城に水を引き込む導水路の役目を担っており、明らかに人為的なものと考えられる。

### 3. 下川津B類土器の出土傾向

ここで述べる「下川津B類土器」は大久保氏が「素地粘土の調合から、おそらく焼成法までを含む土器製作の諸過程において、特定技術の共有が推測しうる土器群」と規定した土器に当たるものとして筆者が認識した土器について報告している。

第Ⅲ調査区で出土した所謂「下川津B類土器」の器種は広口壺（広口壺E）・長頸壺（広口壺Fの系統）・細頸壺・甕・高杯・製塙土器で、少量複合口縁大型壺（土器棺に転用 第231図1776）？を確認できるが、小型丸底壺・鉢は出土していない。

堅穴住居跡出土遺物の中に占める「下川津B類土器」の出現頻度をみると遺構Ⅱ期では3.1～5.2%で、遺構Ⅲ期では2.3～12.8%、遺構Ⅳ期では1.5～7.6%、遺構Ⅴ期では0.1～0.5%となる。

この結果を見ると下川津B類土器の出土状況は今回の調査区で遺構が確認される遺構Ⅱ期に少量確認でき、遺構数・規模ともこの集落の最盛期である遺構Ⅲ期に多量に出土することが解る。しかも次の遺構Ⅳ期になるとその量は徐々に減少するようで、遺構Ⅴ期になるとほとんど出土しなくなることが解る。

遺構Ⅲ期の遺構の中で下川津B類土器を多量に含むSHIII02は平面形態が方形で、床面積も45m<sup>2</sup>と第Ⅲ調査区では最大規模のものである。堅穴住居の平面形態が概ね円形から方形に変わっていく中で、張り出し付堅穴住居とは系譜を異にし、いち早く方形の堅穴住居形態を取り入れた居住者の存在は注目できるものである。

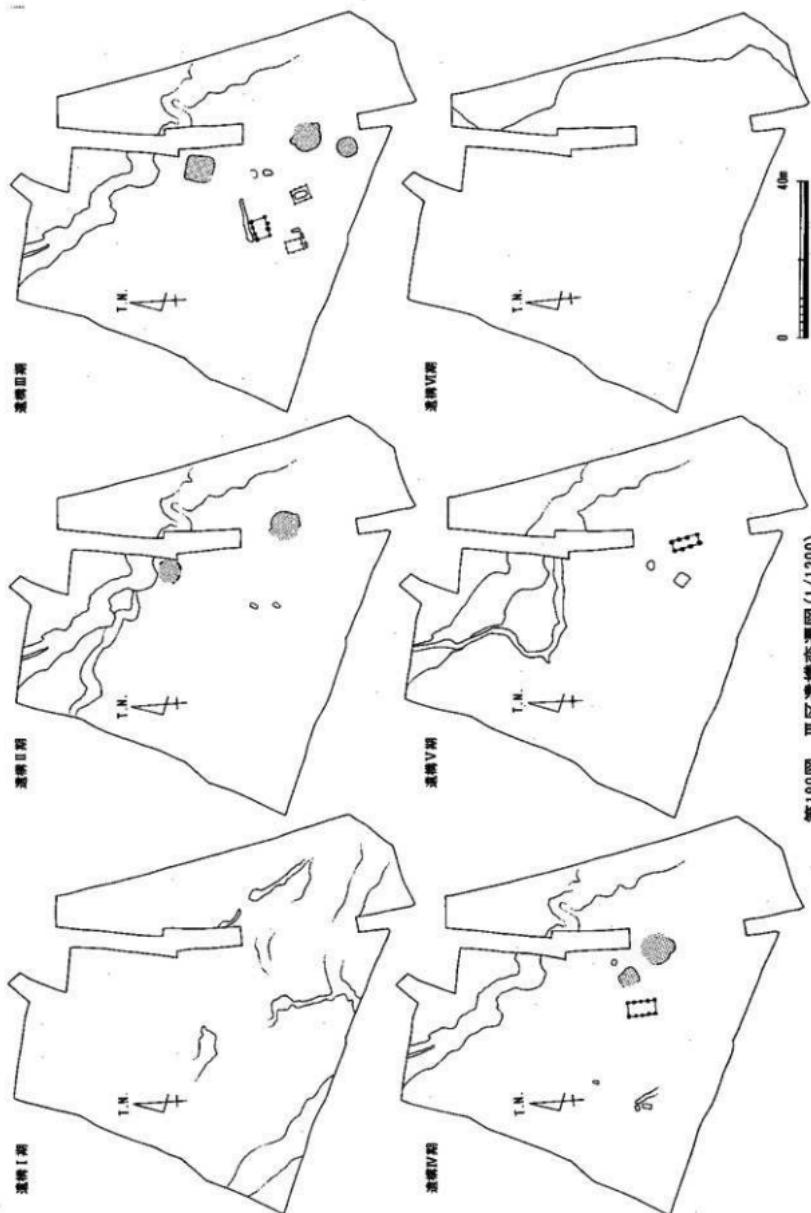
### 参考文献

真鍋昌宏「四国地域の様式と編年－讃岐地域－」『弥生土器の様式と編年－四国編－』木耳社 2000

大久保徹也「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ下川津遺跡』香川県教育委員会他

大久保徹也「下川津B類土器の定義」『第22回庄内式土器研究会 追加資料』庄内式土器研究会 2001.11

第180图 III区遺跡位置図 (1/1300)



#### 第IV調査区

第IV調査区は虎丸山から北方向に派生する丘陵に挟まれた僅かな平野部分、現古川の東側に位置する。ちょうど東の丘陵と現古川に挟まれた僅かな平地部分に南北に長い調査区を設定した。

調査前から地形をみると現古川に平行するように2段の段崖状の痕跡が確認でき、地形の改変が予測された。

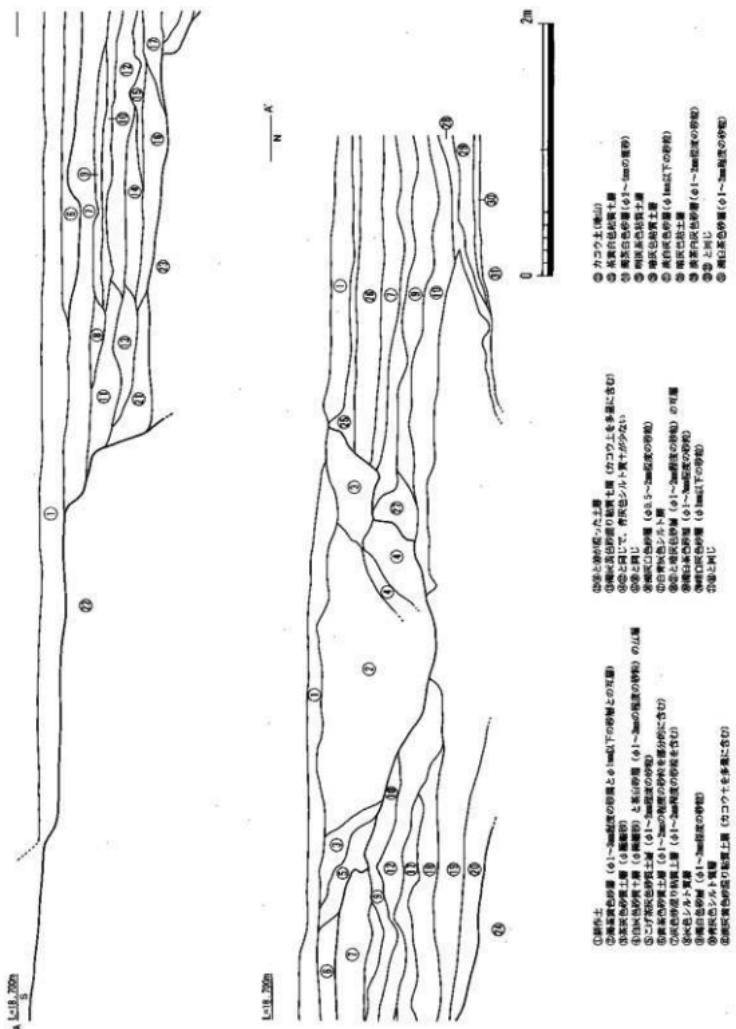
予備調査の結果、上段では東西断面で明白茶色砂混り粘質土を地山とした面が丘陵裾部（東）から古川（西）に向かって傾斜していることが確認できた。この面の上部に部分的に粘質土層を含むが、砂層・砂質土層・シルト層を中心とした洪水層を確認し、遺構はこの地山面上と洪水層上面の2面で確認した。土層断面B-B'でみると土層⑭・⑮・⑯の上面と土層⑰・⑱上面で遺構を確認し、この間の堆積層間にには確認していない。この堆積層は古川の旧流路洪水層と考えられ、傾斜堆積土層と水平堆積土層があり、2~3面の水平面が確認できることから、数回の洪水があったことを伺わせる。

下段では耕作土・床土直下地山面となり、現古川に近い部分に古川の旧流路が蛇行して確認でき、土層断面C-C'から明茶灰色砂質土層を遺構面とする層を切っていることが確認できた。

現在この調査区は南北に長い調査区で、遺構面検出範囲も細長くなっているが、本来はもう少し東西に幅のある居住域があったものと考えられる。

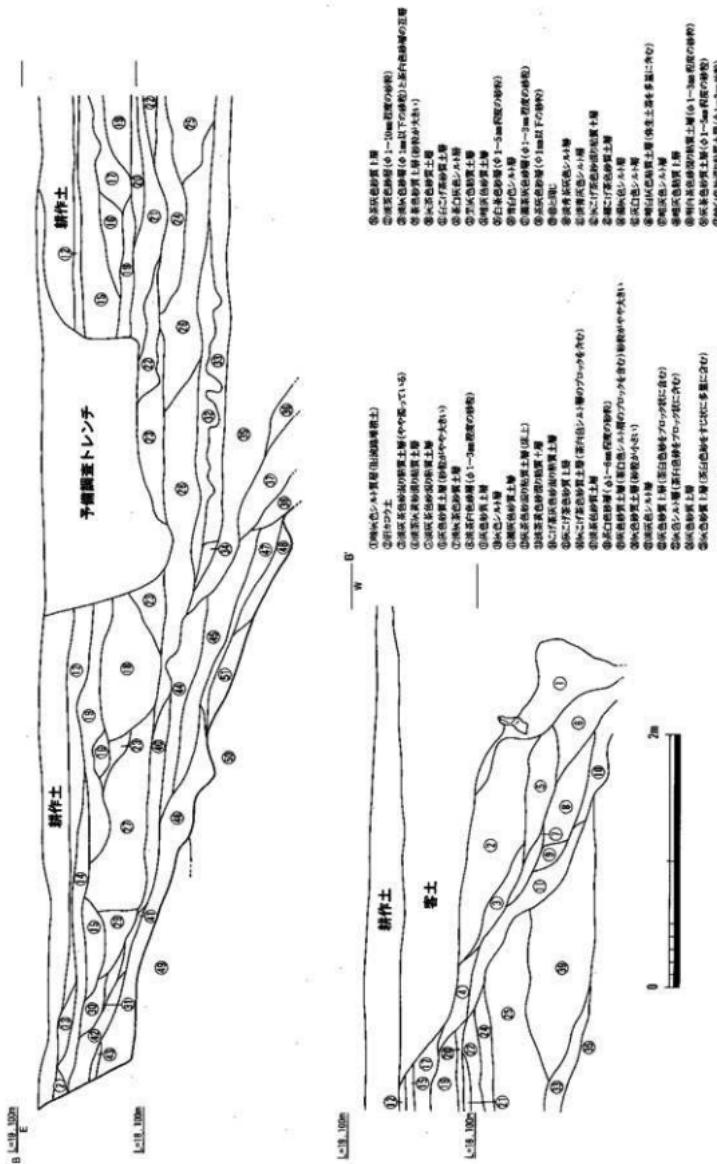
この調査区は地形的にみると古川の蛇行の屈曲部、ちょうど流路の影響を直接受ける位置にあり、かなり不安定な場所であったことが予想される。それは土層断面からも1m程度の洪水砂層が堆積していたことからも伺われる。

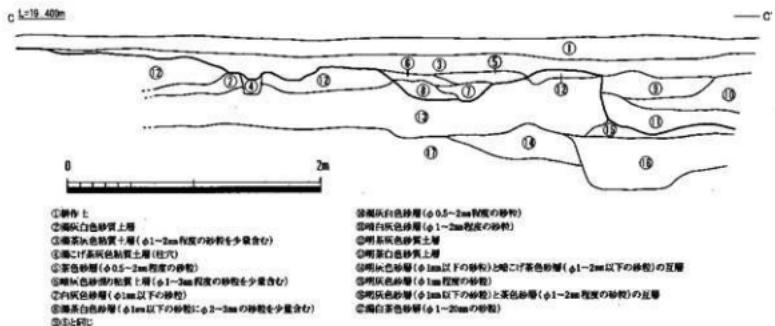
この調査区では竪穴住居跡32棟、掘立柱建物跡9棟、土壙墓9基、土坑10基、不明遺構2基、溝15条、自然流路5条、柱穴多數を検出した。これらの遺構は上面とする第1面に古代（7世紀）を中心とする時期の遺構が、第2面に弥生時代後期の遺構を検出した。



第181図 IV-A-A' 土層断面図 (1/40)

第182図 IV区 B-B' 土層断面図 (1/40)





第183図 IV区 C-C' 土層断面図(1/40)

### 竪穴住居跡

SHIV01

SHIV01は第IV調査区中央、標高約19.6mにおいて検出した竪穴住居跡で、平面形態はコーナー部が隅丸で、東西にやや長い長方形を呈し、北辺ほぼ中央部に作り付けの竪を持つ。規模は長軸(南西-北東)約4.06m、短軸(北西-南東)約2.98mを測り、床面積約12.1m<sup>2</sup>、検出面からの深さは約0.25mを測るもので、全体的にかなり削平を受けている。

住居内の堆積土は土層②(黄灰こげ茶色砂混り粘質土)が主流を占め、竪部分には竪上部を構成していたと考えられる黄色砂混り粘質土とともに焼土ブロック・炭が多量に堆積している。

主柱穴は4穴で、それぞれのコーナー部に直径20~30cm程度の円形の柱穴が確認できる。北辺中央部にある作り付けの竪は上面が削平を受けているために竪穴住居外部まで延びない。住居内での構造をみると平面形態は横長の梢円形を呈し、規模は長(東西)1.22m、短(南北)0.76mを測る。北辺部からやや内湾する「ハ」字状に延びる壁体を検出し、内部は焼き口部から焼成部をやや窓ませてある。この壁体はベース層が砂層ということもあり、土層④(淡茶黄色砂層、ベース層)上部に土層②(茶黄色粘質土層)を基調とした粘土層を積み上げて構築しており、僅かに内面が赤変している。

竪穴住居の主軸はN-30°Wをとる。この竪穴住居は東丘陵の裾部に位置し、裾まで約6m程しかなく、丘陵裾部がほぼ竪穴住居主軸と同方向をとっていることから地形に制約を受けた主軸方向の可能性がある。

竪穴住居内から多量の須恵器と少量の土師器が出土している(第185図)。

住居内床面南部直上から少量の須恵器が出土しているが、原位置とは考えられず、出土遺物のほとんどは包含層からの出土である。

1603~1622は包含層から出土した遺物で、1603~1617が須恵器、1618~1621が土師器・土師質土器である。

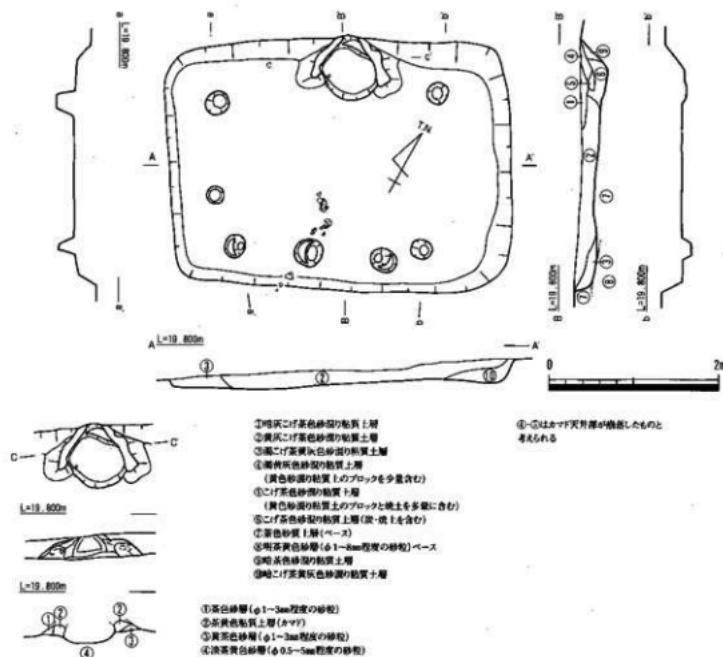
須恵器には坏身・坏蓋・ハソウ・高坏・壺があり、坏身は内傾する立ち上がりが短く、口径も約12.3cmと小振りである。また坏蓋は天井部から体部へと緩やかに屈曲するもので、口径は11.8cmと坏蓋と同様に小振りである。坏身・坏蓋の底部及び天井部にはヘラ切りが認められる。高坏は脚部が短く、スカート状に広がるもので、壺は体部外面に叩きの後描き目が、内面に同心円状の当具痕が施されて

いる。

土師質土器では甕が出土しており、やや胴長で、口縁部はやや外反する。

1608と1618は堅穴住居柱穴以外の柱穴から出土した遺物で、ここでは参考資料として掲載した。

時期は須恵器坏身・坏蓋からTK217型式併行期で、ほぼ7世紀中葉頃である。



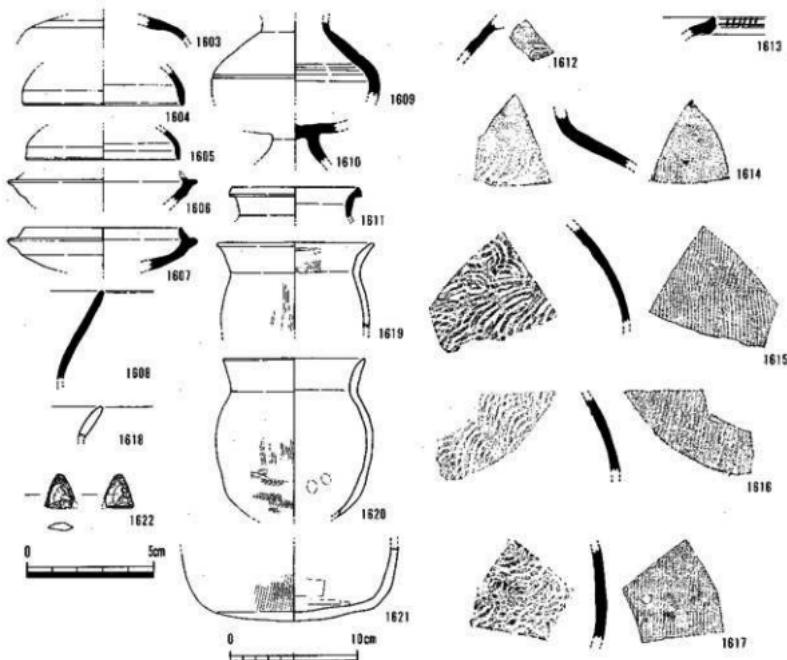
第184図 SHV01平・断面図(1/60)

#### SHV02

SHV02は第IV調査区中央南、標高約19.9mにおいて検出した堅穴住居跡で、ちょうど掘立柱建物SB IV03と切り合いがあり、堅穴住居が掘立柱建物を切っている。平面形態はコーナー部が隅丸で、東西にやや長い長方形を呈し、北辺ほぼ中央部に作り付けの竈を持つ。規模は長軸(東西)約5.38m、短軸(南北)約4.09mを測り、床面積約22.0m<sup>2</sup>、検出面からの深さは約0.20mを測るもので、全体的にかなり削平を受けている。

住居内の堆積土は土層①・②暗茶灰色系の混り粘質土が主流を占め、堆積している。

主柱穴は4穴で、それぞれのコーナー部に直径40~50cm程度の円形の柱穴が確認できる。北辺中央部にある作り付けの竈は上面が削平を受けているが、約30cm程外側に突出している。住居内・外での構造をみると平面形態は縦長の楕円形を呈し、北辺部から「ハ」字状に延びる壁体を検出し、内部は竈奥部の焼成室部分をやや窪ませている。この壁体はベース層が砂層ということもあり、土層③(淡茶黄色砂層、ベース層)上部に土層②(黄灰色砂混り粘質土層)を積み上げて構築している。また床



第185図 SHIV01出土遺物実測図(1/4)

面には焼土及び壁体構築土と同じ粘土塊が竈を中心として住居内中央部で検出した。

竪穴住居の主軸は N-2°-W で、ほぼ南北をとる。この竪穴住居は SHIV01 と同様に東丘陵の裾部に位置し、裾まで約 2 m 程しかなく、丘陵裾部がほぼ竪穴住居主軸と同方向をとっていることから地形に制約を受けた主軸方向の可能性がある。

竪穴住居内から須恵器・土師器・製塙土器が出土している(第186図)。

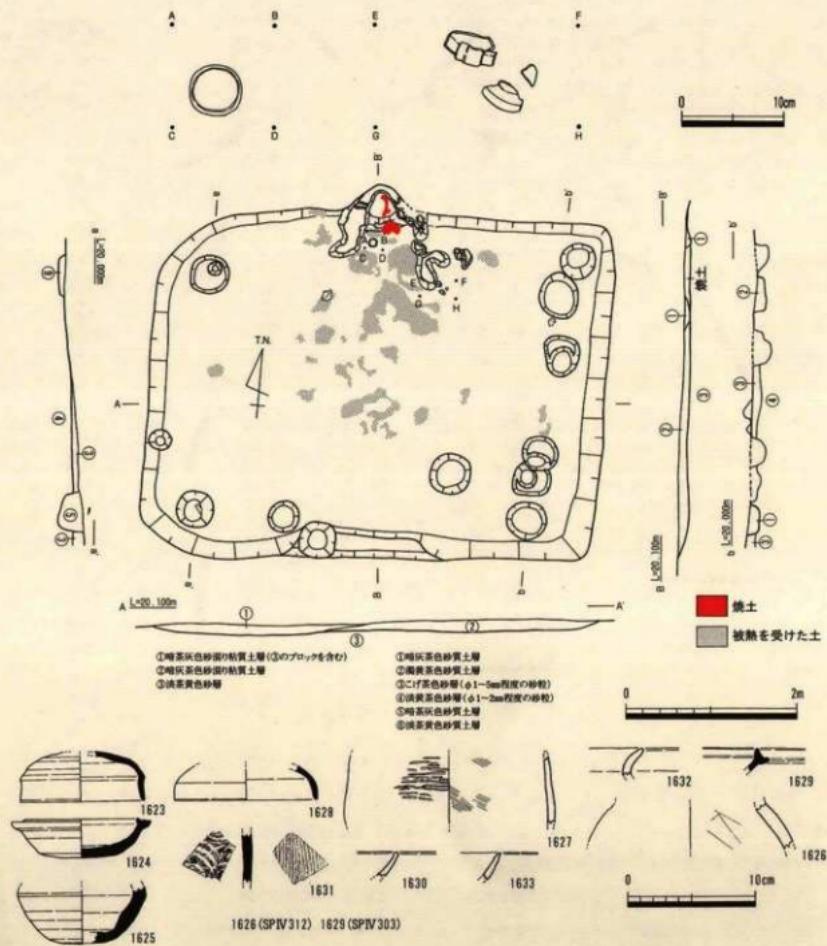
住居内竈部分の床面直上から須恵器坏身(1624)が、竈の外側から須恵器坏蓋(1623)が出土している。この2点以外は包含層からの出土である。

須恵器には坏身・坏蓋・ハソウ・壺があり、坏身は内傾する立ち上がりがかなり短く、立ち上がり部分の口径で約 8.7 cm と小振りである。また坏蓋は天井部から体部へと緩やかに屈曲するものと境に明瞭な段を持ち、屈曲するものがあるが、口径は約 9.8 ~ 11.0 cm と坏蓋と同様に小振りである。坏身・坏蓋の底部及び天井部にはヘラ切りが認められる。壺は体部外面に叩きの後描き目が、内面に同心円状の当具痕が施されている。

土師器・土師質土器には椀・壺が出土しており、壺はやや胴長で、口縁部はやや外反する。

1629 は竪穴住居内の主柱穴以外の柱穴から出土した遺物で、ここでは参考資料として掲載した。

時期は須恵器坏身・坏蓋から TK217 型式併行期新段階で、ほぼ 7 世紀中葉後半頃である。



第186図 SHIV02平・断面図(1/60), 出土遺物実測図 (1/4)

### SHIV03

SHIV03は第IV調査区中央南、標高約20.1mにおいて検出した竪穴住居跡で、平面形態はコーナー部が隅丸で、東西にやや長い長方形を呈し、北辺ほぼ中央部に作り付けの竈を持つ。規模は長軸（東西）約4.09m、短軸（南北）約3.55mを測り、床面積約14.5m<sup>2</sup>、検出面からの深さは約0.10mを測るもので、全体的にかなり削平を受けている。

住居内の堆積土は土層①（暗こげ茶灰色混り粘質土）が主流を占めている。

主柱穴は4穴で、それぞれのコーナー部に直径40～50cm程度の円形の柱穴が確認できる。北辺中

央部にある作り付けの竈は上面が削平を受けていたために竪穴住居外部までほとんど伸びない。住居内での構造をみると平面形態は三角形状を呈し、規模は南北約1.30m、東西約1.60mを測る。北辺部から「ハ」字状に延びる壁体を検出し、内部は焚き口部に土手を巡らし、燃焼部をやや壅ませ、さらに焼成部から煙道に繋がる部分が円形状に壅ませている。この壁体はベース層が砂層ということもあり削り出しではなく、土層②（淡黄茶色砂層、ベース層）上部に黄灰色系の砂混り粘質土を積み上げて構築している。

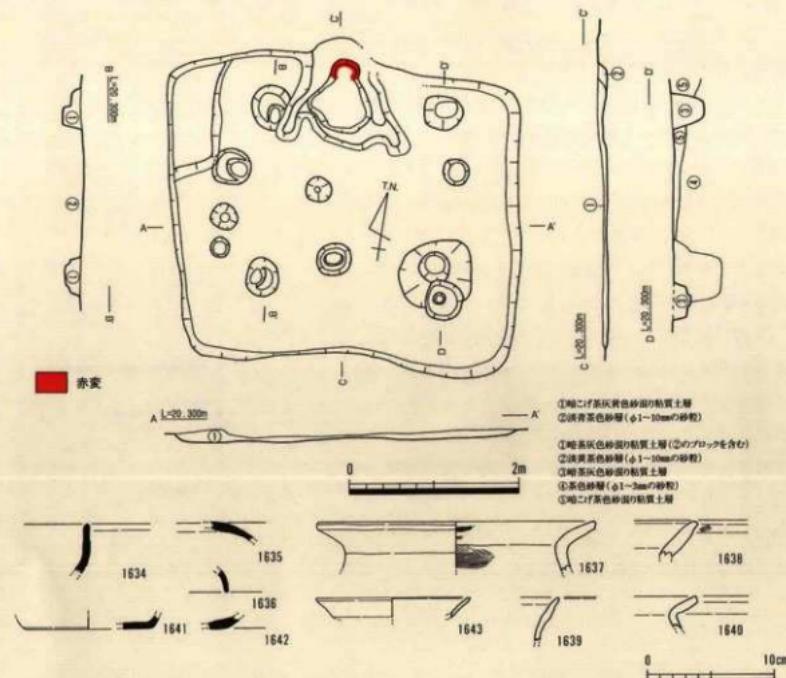
竪穴住居の主軸はN-8°-Wをとる。この竪穴住居は東丘陵の裾部に位置し、裾まで約2m程しかなく、丘陵裾部がほぼ竪穴住居主軸と同方向をとっていることから地形に制約を受けた主軸方向の可能性がある。

竪穴住居内から須恵器と土師器が出土している（第187図）。

1634～1643は包含層から出土した遺物で、1634～1636、1641～1642が須恵器、1637～1640、1643が土師器・土師質土器である。

須恵器には坏身・坏蓋・椀があり、坏蓋は天井部から体部へと緩やかに屈曲するもので、小振りである。坏蓋の天井部にはヘラ切りが認められる。

土師器は壺が出土しており、やや胴長で、口縁部はやや外反する。



第187図 SHIV03平・断面図(1/60), 出土遺物実測図 (1/4)

1641～1643は時期的にはやや後出する須恵器と土師器で、ここでは参考資料として掲載した。時期は須恵器坏身・坏蓋からTK217型式併行期新段階で、ほぼ7世紀中葉後半頃である。

#### SHIV04

SHIV04は第IV調査区中央南、標高約20.2mにおいて検出した竪穴住居跡で、検出した部分のはば中央に土坑SKIV01・柱穴が竪穴住居を切るように検出している。またSBIV03の西側に並列している。平面形態は西半分が削平を受け判然としないが、コーナー部がほぼ直角に屈曲することから（長）方形を呈すると考えられる。他の竪穴住居と同様な作り付けの竪を持つかは不明である。規模は東西は不明であるが、南北約3.96mを測り、検出面からの深さは約0.20mを測るもので、全体的にかなり削平を受けている。

住居内の堆積土は土層①（灰こげ茶色混り粘質土）が堆積している。

主柱穴は4穴と考えられ、その内東側2穴を検出した。それぞれのコーナー部に直径30～40cm程度の円形の柱穴があるものと考えられる。

竪穴住居の主軸はN $2^{\circ}$ Eをとる。この竪穴住居は東丘陵の裾部に位置し、裾まで約7m程しかなく、丘陵裾部がほぼ竪穴住居主軸と同方向をとっていることから地形に制約を受けた主軸方向の可能性がある。

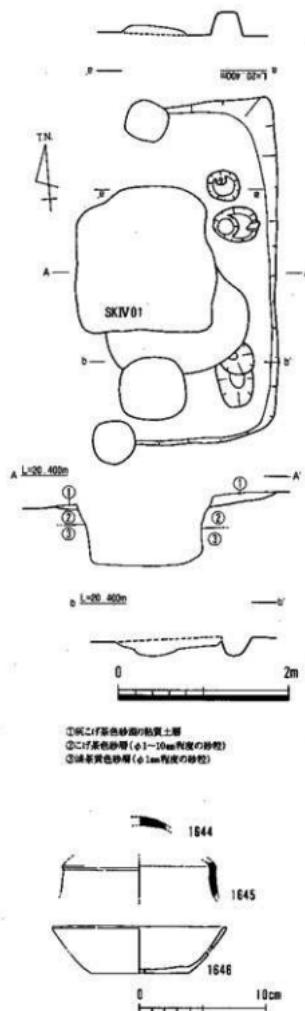
竪穴住居内から須恵器が出土している（第188図）。

出土した遺物は全て包含層出土で、1644・1645が須恵器、1646が土師器である。

須恵器は坏蓋で、天井部から体部の境に明瞭な段を持ち、屈曲する。口径は約12.0cmと小振りである。坏蓋の天井部にはヘラ切りが認められる。

1646は時期的にはやや後出する土師器で、おそらくSKIV01から出土した遺物と考えられ、ここでは参考資料として掲載した。

時期は須恵器坏身・坏蓋からTK217型式併行期新段階で、ほぼ7世紀中葉後半頃である。



第188図 SHIV04平・断面図(1/60),  
出土遺物実測図(1/4)

#### SHIV05

SHIV05は第IV調査区北部、標高17.9mにおいて検出した竪穴住居で、全体的にかなり削平を受けているが、主柱穴と考えられる柱穴の配置及び僅かに残存する壁溝の位置から復元すると平面形態は円形を呈する。規模は壁溝の位置で復元直徑約5.85m、床面積約26.9m<sup>2</sup>を測る。

主柱穴は推定5穴と考えられ、直徑約20~30cm程度の円形で、深さ約20~30cmを測る。

中央土坑は確認できなかった。壁溝は幅約10cm程度のものが途切れながらも弧を描く状態で検出した。

供伴する遺物は出土していない。

時期は遺物が出土していないため詳細は不明であるが、おそらく弥生時代後期後半頃のものと考えられる。

#### SHIV06

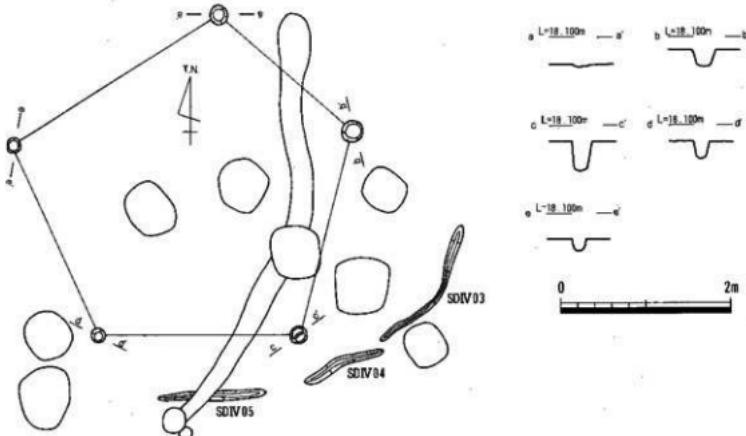
SHIV06は第IV調査区北部、標高18.1mにおいて検出した竪穴住居で、全体的にかなり削平を受けているが、主柱穴と考えられる柱穴の配置及び僅かに残存する壁溝の位置から復元すると平面形態は円形を呈する。壁溝が2重に確認できることから、立て替えがあったものと推定でき、そのため規模は内側の壁溝の位置で復元直徑約5.17m、床面積約21.0m<sup>2</sup>を測り、外側の壁溝の位置で復元直徑約6.23m、床面積約30.5m<sup>2</sup>を測る。

主柱穴は推定6穴と考えられ、直徑約20~40cm程度の円形で、深さ約20~40cmを測る。

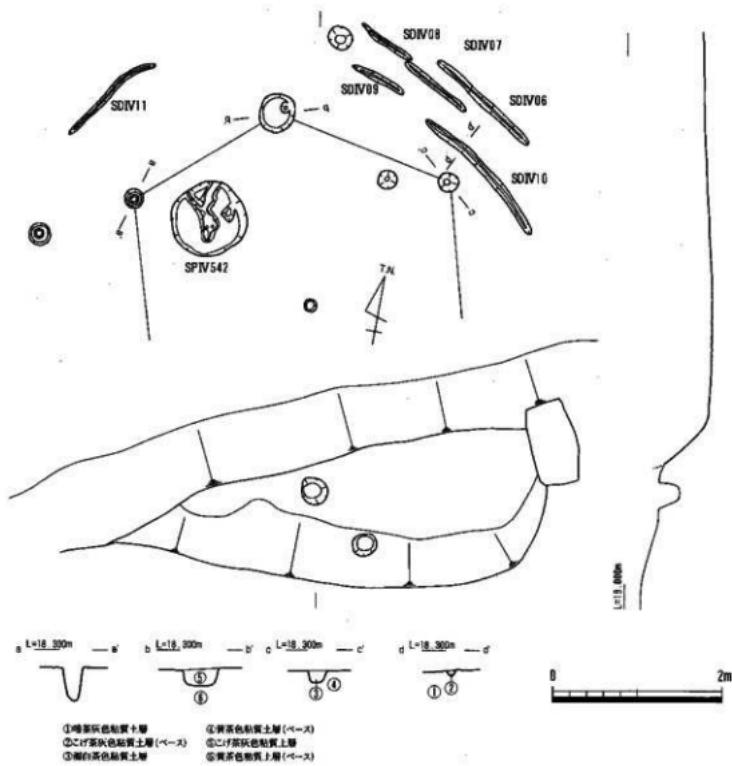
中央土坑は北西部分で円形の土坑を検出したが、其時性は確認できなかった。壁溝は概ね2重に確認でき、幅約10cm程度のものが途切れながらも弧を描く状態で検出した。

供伴する遺物は出土していない。

時期は遺物が出土していないため詳細は不明であるが、おそらく弥生時代後期後半頃のものと考えられる。

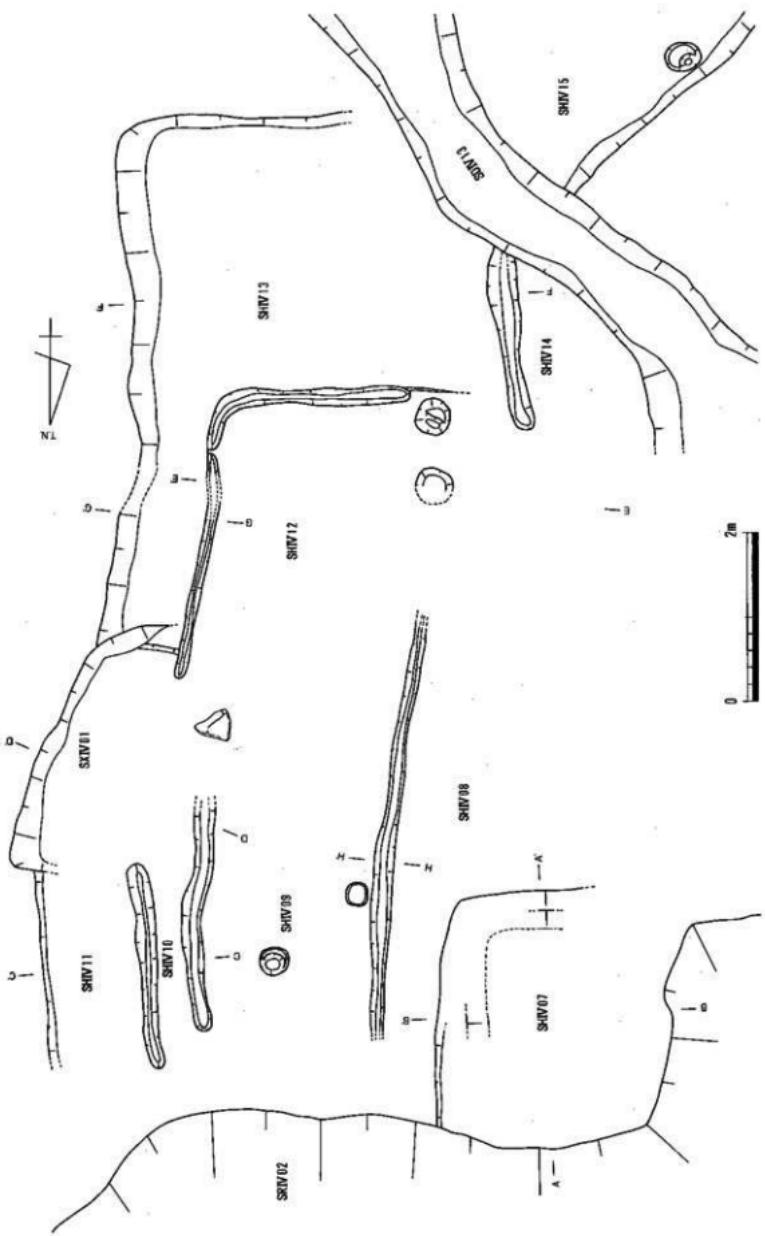


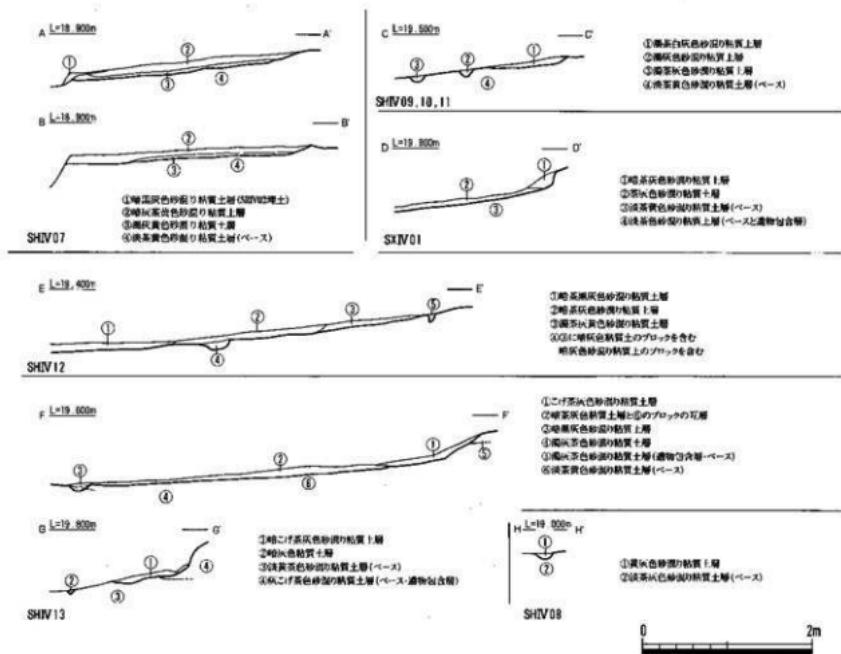
第189図 SHIV05平・断面図(1/60)



第190図 SHIV06区平・断面図(1/60)

第191図 SHIV07～SHIV14・SHIV01平面図(1/60)





第192図 SHIV07～SHIV13・SXIV01断面図(1/60)

これ以下報告する堅穴住居は第1遺構面（古代遺構面）を形成する洪水砂層によって削平を受けたり、古川沿いが丘陵側よりかなり削平を受けているためにそのほとんどが半分程度の残存となる。またかなり重複しているために一定程度の纏まりごとに報告する。

#### SHIV07～14

SHIV07～14は第IV調査区中央部、標高19.5～18.5mにおいて検出した堅穴住居群である。

SHIV07は南東隅部分のみ検出した堅穴住居で、平面形態が方形を呈する。内部は東側のみ20cm程度の半らな部分を持つ。南北主軸は概ね真北をとるものと考えられる。規模は不明である。

SHIV08・09・10は壁溝のみを検出した堅穴住居である。壁溝は幅約10～12cmで、深さ約6cmを測り、ほぼ南北で検出した。

SHIV11は堅穴住居東側部分と南側の一部分を検出したもので、おそらく方形の体穴住居と考えられる。

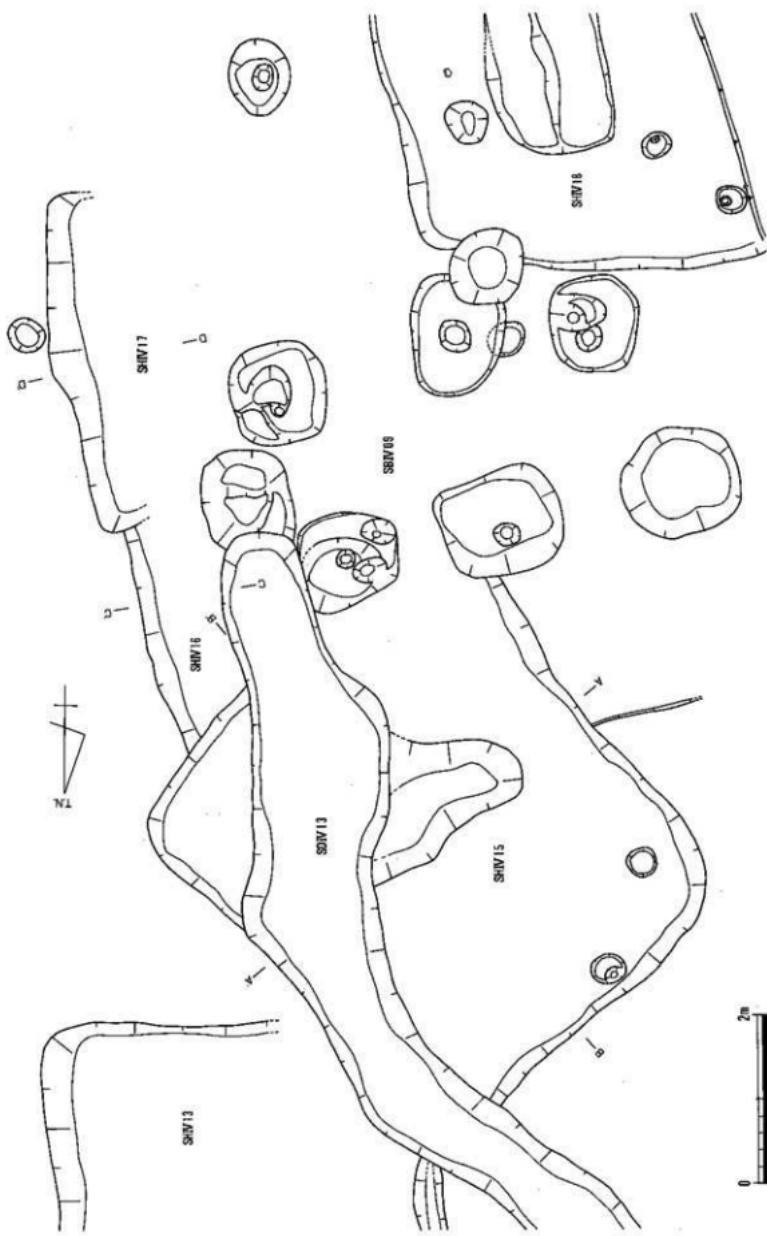
SHIV12は南東隅部分とそれに伴う壁溝を検出した堅穴住居で、平面形態は方形を呈する。壁溝は幅約10cm、深さ約10cmを測る。

SHIV13は南東隅部分を検出した堅穴住居で、平面形態は方形を呈する。

SHIV14は壁溝のみを検出した堅穴住居である。壁溝は幅約10～20cmで、深さ約6cmを測る。

これらの堅穴住居は弥生時代後期と考えられるが、詳細な時期については遺物が出土していないため不明である。しかし堅穴住居の切り合いから古い順からSHIV13→SHIV11→SHIV14が解り、これ以外

第193圖 SHIV 15~SHIV 17平面圖(1/60)



の同時性や前後関係については不明である。

### SHIV15～17

SHIV15～17は第IV調査区中央部南、標高19.5～18.8mにおいて検出した堅穴住居群である。

SHIV15はSDIV13に切られてはいるもののかなり全容が解るもので、平面形態は隅丸の長方形を呈する。規模は長軸（北西～南東）約5.64m、短軸（北東～南西）約4.76mを測り、床面積約26.8m<sup>2</sup>、検出面からの深さ約0.10mを測る。ほぼ中央に土坑状の落ちを検出しているが、炉とは考えられず、また主柱穴も確認できなかった。長軸の主軸はN-42°-Wをとる。

SHIV16は北側をSHIV15・SDIV13、西側をSBIV09、南側をSHIV17によって切られているために堅穴住居東側部分と北側の一部分を検出しただけであったが、おそらく方形の堅穴住居と考えられる。

住居内から壺・甕・瓶が出土している。

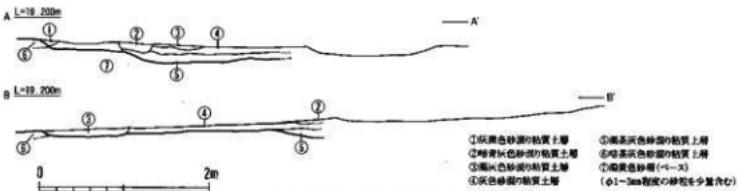
時期は弥生時代後期後半と考えられる。

SHIV17は東側のみの検出で、一边約4.1mを測る方形の堅穴住居である。

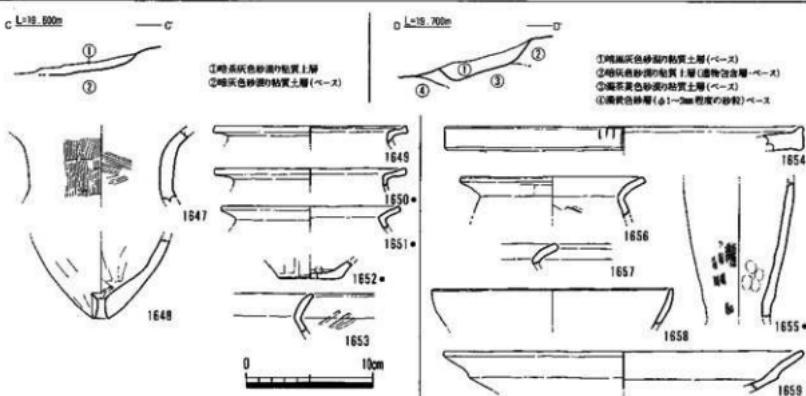
住居内から壺・甕・鉢・高杯が出土している。

時期は弥生時代後期後半と考えられる。

堅穴住居の切り合いから古い順からSHIV16→SHIV15・SHIV17→SBIV09→SDIV13であったことが解る。

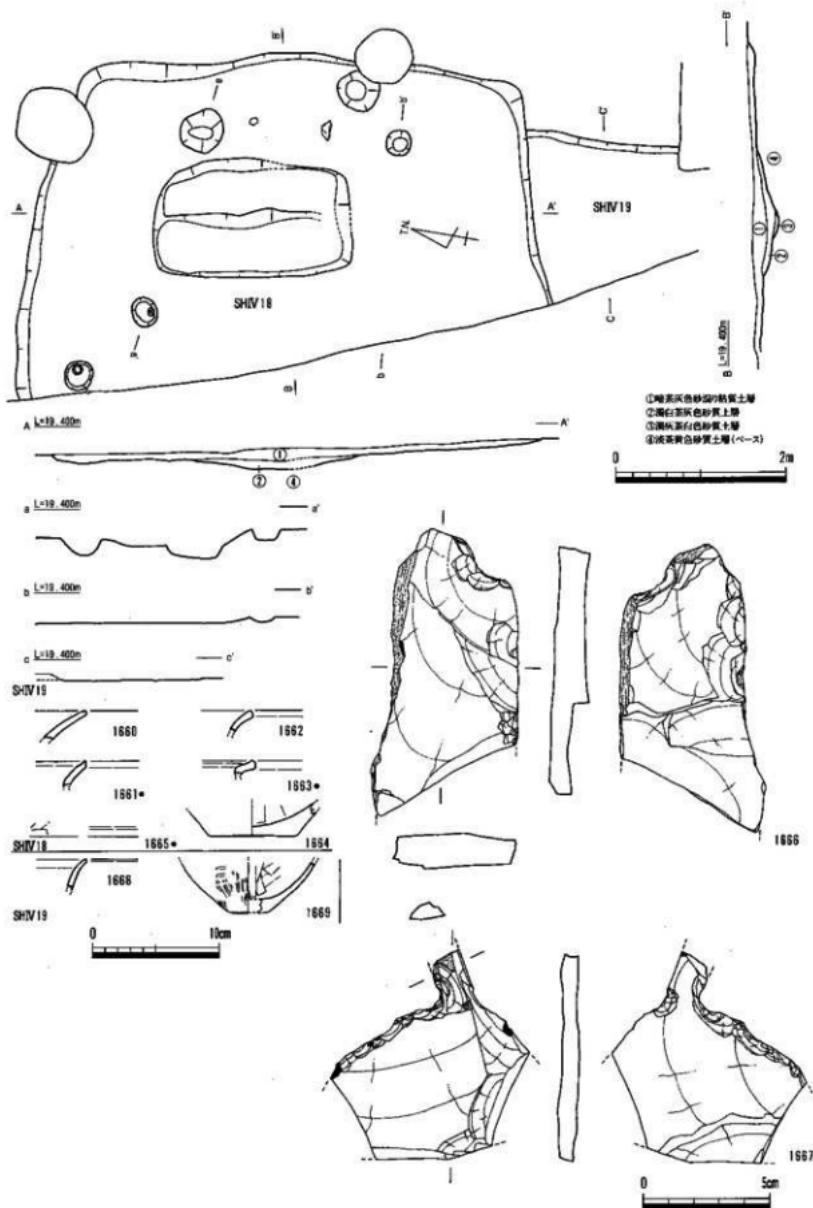


第194図 SHIV15断面図(1/60)



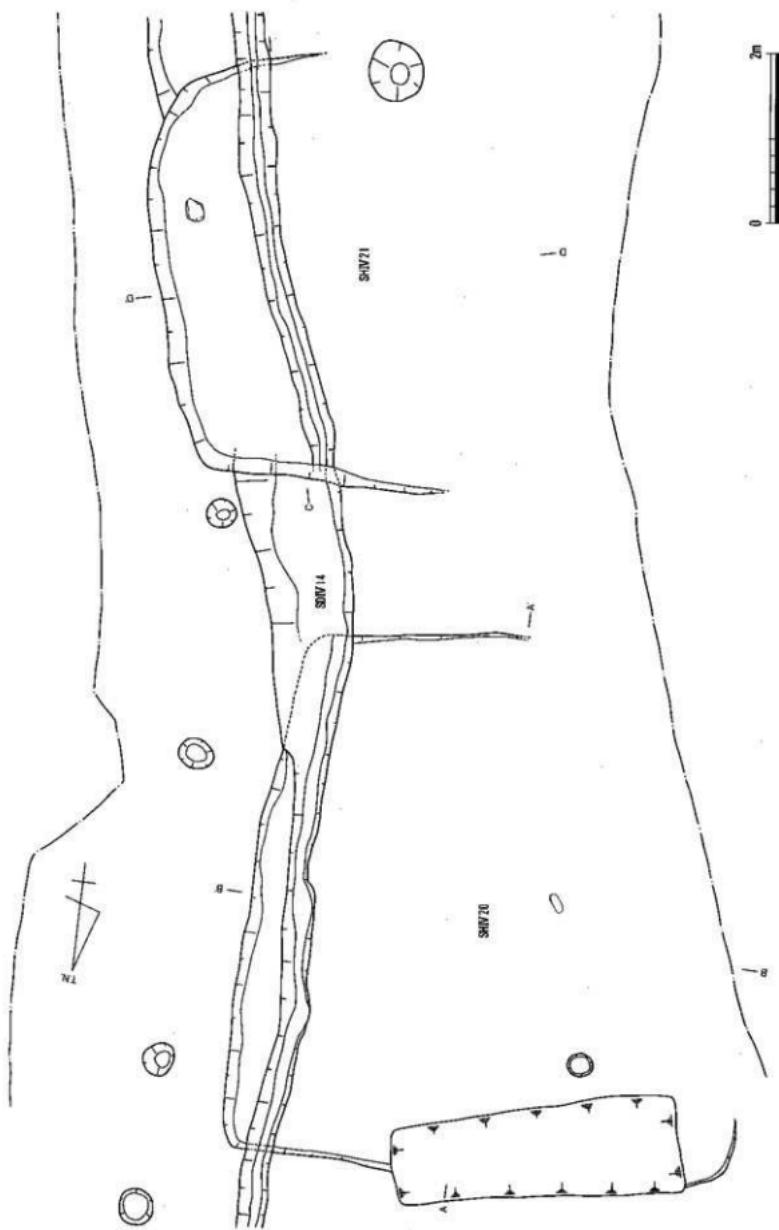
第195図 SHIV16断面図(1/60),出土遺物実測図(1/4)

第196図 SHIV17断面図(1/60),出土遺物実測図(1/4)



第197図 SHIV18・SHIV19平・断面図(1/60),出土遺物実測図(1/4)

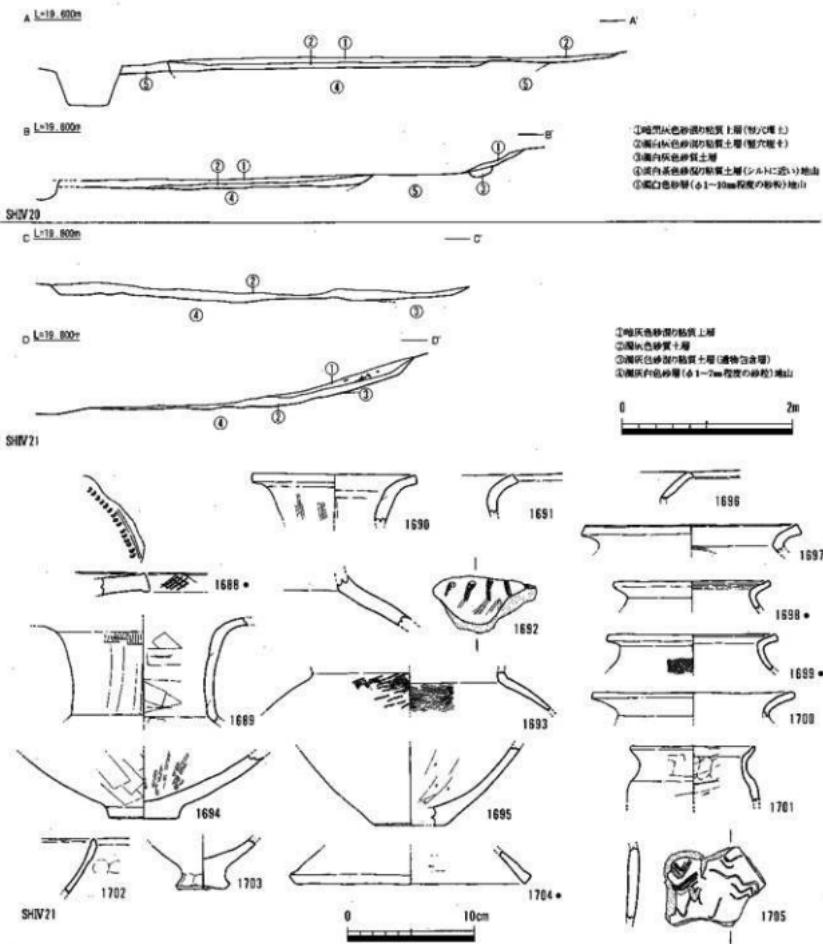
第198圖 SHIV20 · SHIV21平面圖(1/60)



SHIV18は第IV調査区中央南、標高19.2mにおいて検出した堅穴住居で、西側を現行の水路によって削平を受けているために全容は不明である。しかし残存する東側から平面形態は隅丸方形で、住居内からは主柱穴と思われる柱穴と中央土坑（が）を検出している。規模は南北約5.95m、検出面からの深さは約0.10mを測る。長軸の主軸はN-11°-Wをとる。

住居内の堆積土は土層①暗茶灰色砂混り粘質土が主流を占めている。

主柱穴は4穴と考えられ、その内確認できる3穴はそれぞれのコーナー部にあり、直径30～50cm程度の円形を呈する。中央東寄りに南北に長く、長方形を呈する中央土坑を検出している。規模は南



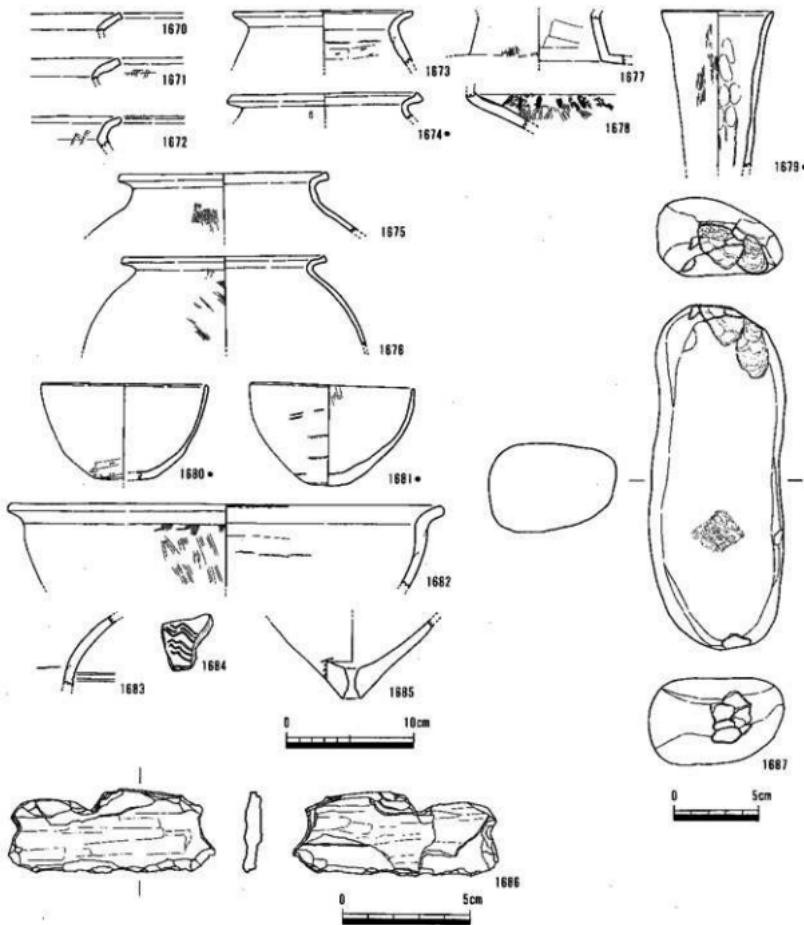
第199図 SHIV20・SHIV21断面図(1/60),出土遺物実測図(1/4)

北約2.33m、東西約1.43m、深さ約0.10mを測る。

住居内から弥生土器とサヌカイトが出土している。

弥生土器は壺・甕・鉢・高杯で、全て小片である。サヌカイトは住居内東部の床面直上で纏まって出土した。点数は3点と少量であったが、大型の石器素材剥片が出土しており、他の住居と比べると居住者の優位性が指摘できる。

SHIV19は東部分を検出した竪穴住居で、平面形態は方形と考えられ、検出面からの深さは約10を測る。



第200図 SHIV20区出土遺物実測図(1/4)



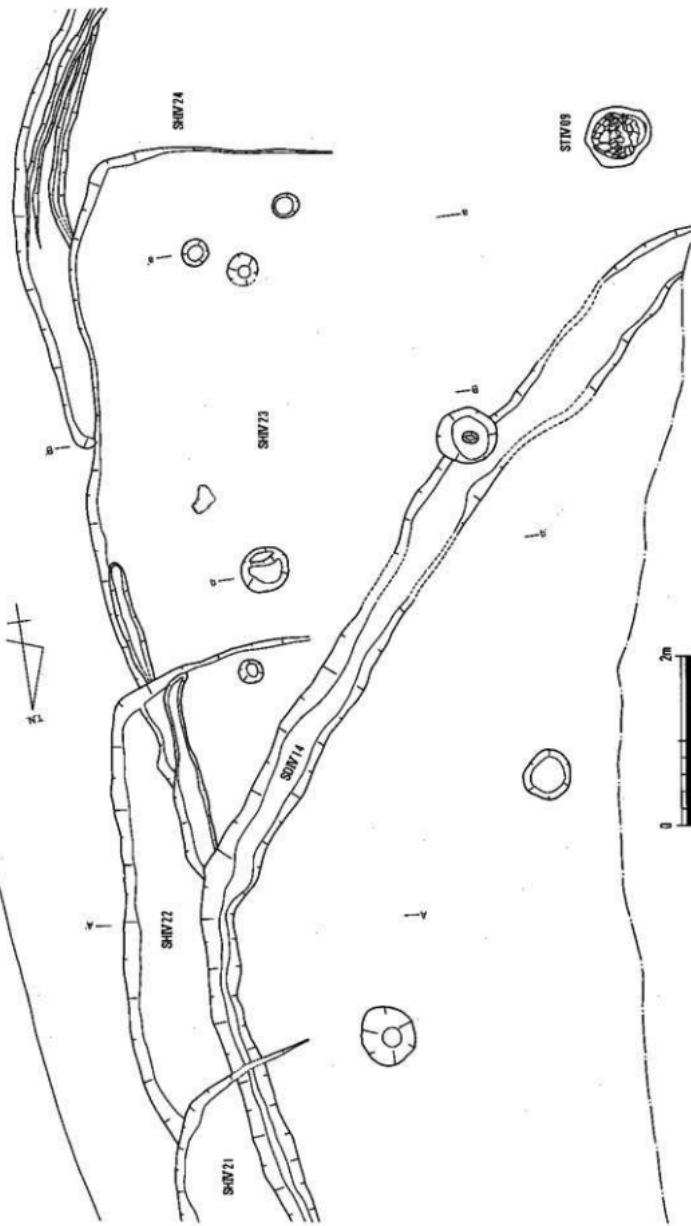
SHIV

SHIV23

SHIV22

SHIV21

SHIV21



SHIV20は第II調査区南部、標高19.1mにおいて検出した竪穴住居で、東側部分をSDIV14によって切られており、北側の一部が予備調査トレンチで、南西コーナー部が洪水砂によって削平を受けている。しかし残存する部分から平面形態は方形を呈し、規模は南北約6.40m、東西約6.05m、床面積約38.7m<sup>2</sup>、検出面からの深さは約0.10mを測る。長軸の主軸はN-1.5°-Eをとる。

住居内の堆積土は灰色系の砂混り粘質土が主流を占めている。

主柱穴等は確認できなかった。

住居内から弥生土器と石製品が出土している。

弥生土器は壺・甕・鉢・瓶である。

石製品には結晶片岩製の石庖丁や砂岩製の叩き石が出土している。

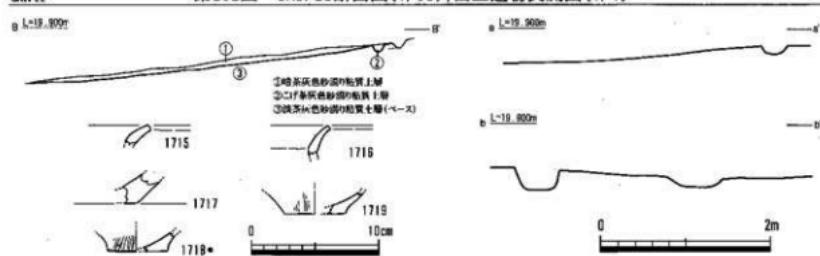
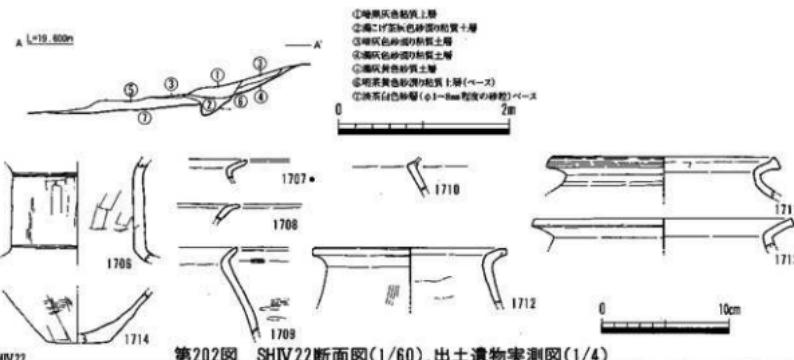
SHIV21は第IV調査区南部、標高19.3mにおいて検出した竪穴住居で、東側部分をSDIV14によって切られており、西側は削平されていた。しかし残存する部分から平面形態は方形を呈し、規模は南北約5.0m、検出面からの深さは約0.10mを測る。長軸の主軸はN-12°-Wをとる。

住居内の堆積土は灰色系の砂層と砂混り粘質土が主流を占めている。

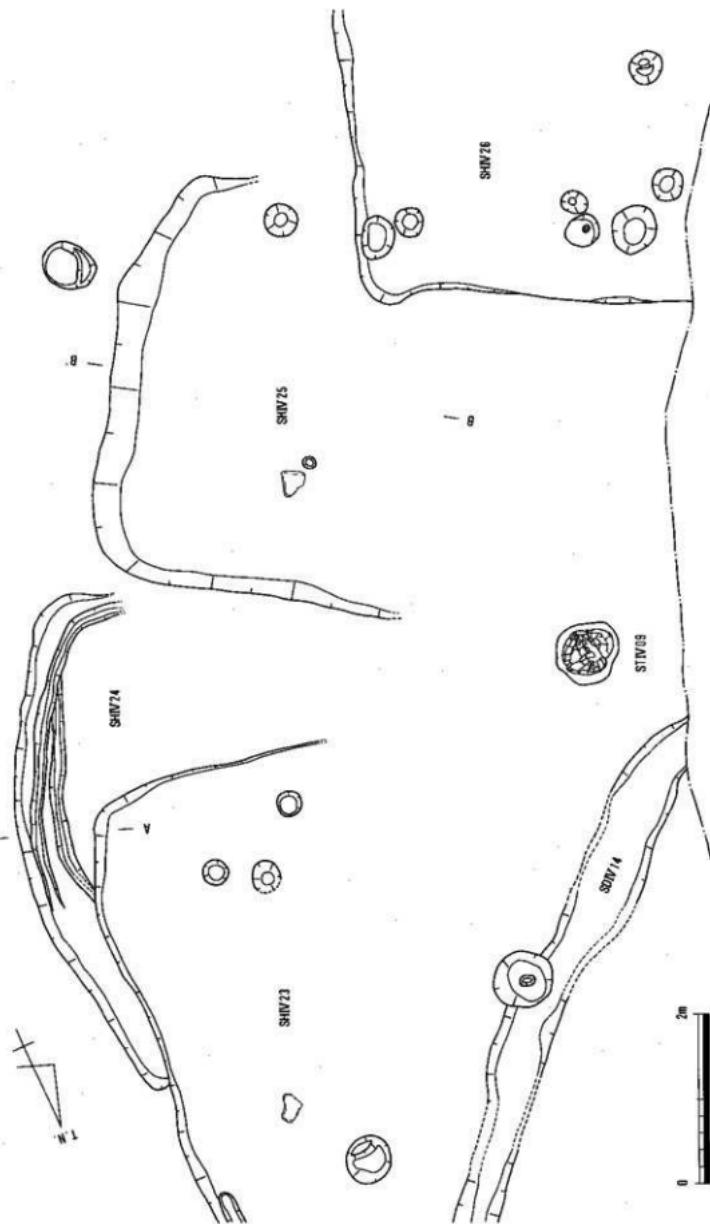
主柱穴等は確認できなかった。

住居内から弥生土器が出土している。

弥生土器は壺・甕・鉢・高杯である。



第204図 SHIV24・SHIV25平面図(1/60)



## SHIV22・23

SHIV22は第IV調査区南部、標高19.4mにおいて検出した竪穴住居で、北側をSHIV21に、東側をSDIV14によって切られ、西側は削平を受けているために全容は不明である。しかし残存する部分から平面形態は方形を呈する。長軸の主軸はN-4°-Eをとる。

住居内から弥生土器が出土している。

弥生土器は壺・甕・鉢・高杯で、全て小片である。

時期は弥生時代後期後半と考えられる。

SHIV23は第IV調査区南部、標高19.7mにおいて検出した竪穴住居で、北側をSHIV22によって切られ、西側は削平を受けているために全容は不明である。しかし残存する部分から平面形態は隅丸方形で、住居内からは東側部分で壁溝と主柱穴と思われる柱穴を検出している。長軸の主軸はN-4°-Eをとる。

住居内の堆積土は土層①(暗茶灰色砂混り粘質土)が主流を占めている。

壁溝は幅20cm程度で部分的に残存する。主柱穴は4穴と考えられ、その内確認できる2穴はそれぞれのコーナー部にあり、直径30~50cm程度の円形を呈する。

住居内から弥生土器が出土している。

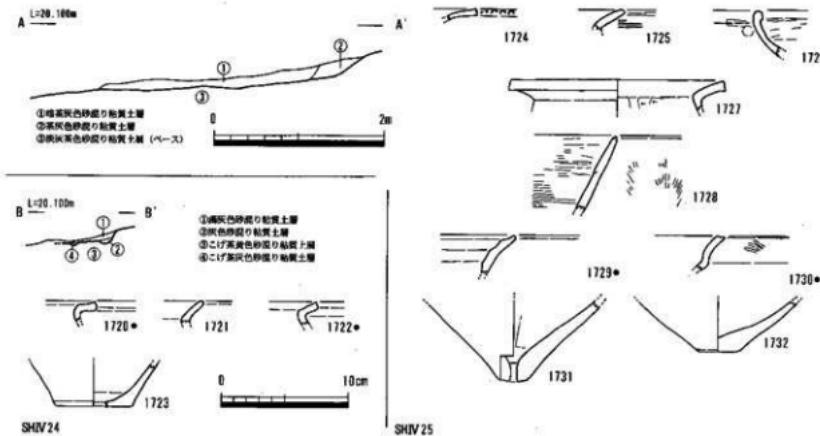
弥生土器は甕で、全て小片である。

時期は弥生時代後期後半と考えられる。

竪穴住居の切り合いから古い順に SHIV24 → SHIV23 → SHIV22 → SHIV21 である。

## SHIV24・25

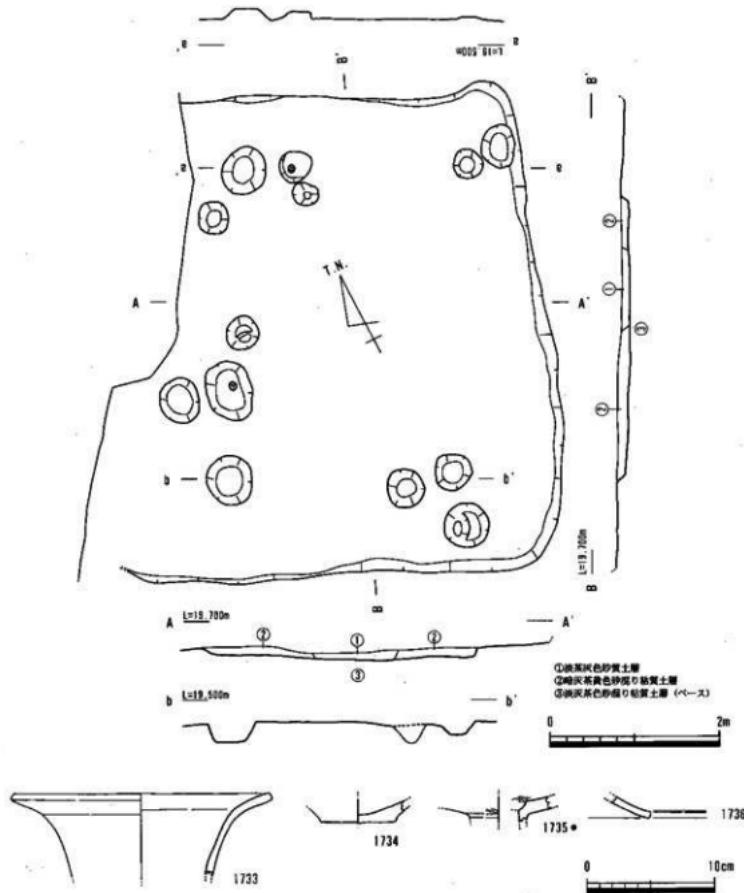
SHIV24は第IV調査区南部、標高19.9mにおいて検出した竪穴住居で、西側部分をSHIV23によって切られ、大半は削平を受けている。しかし残存する部分から平面形態は方形を呈し、東側部分で壁溝を検



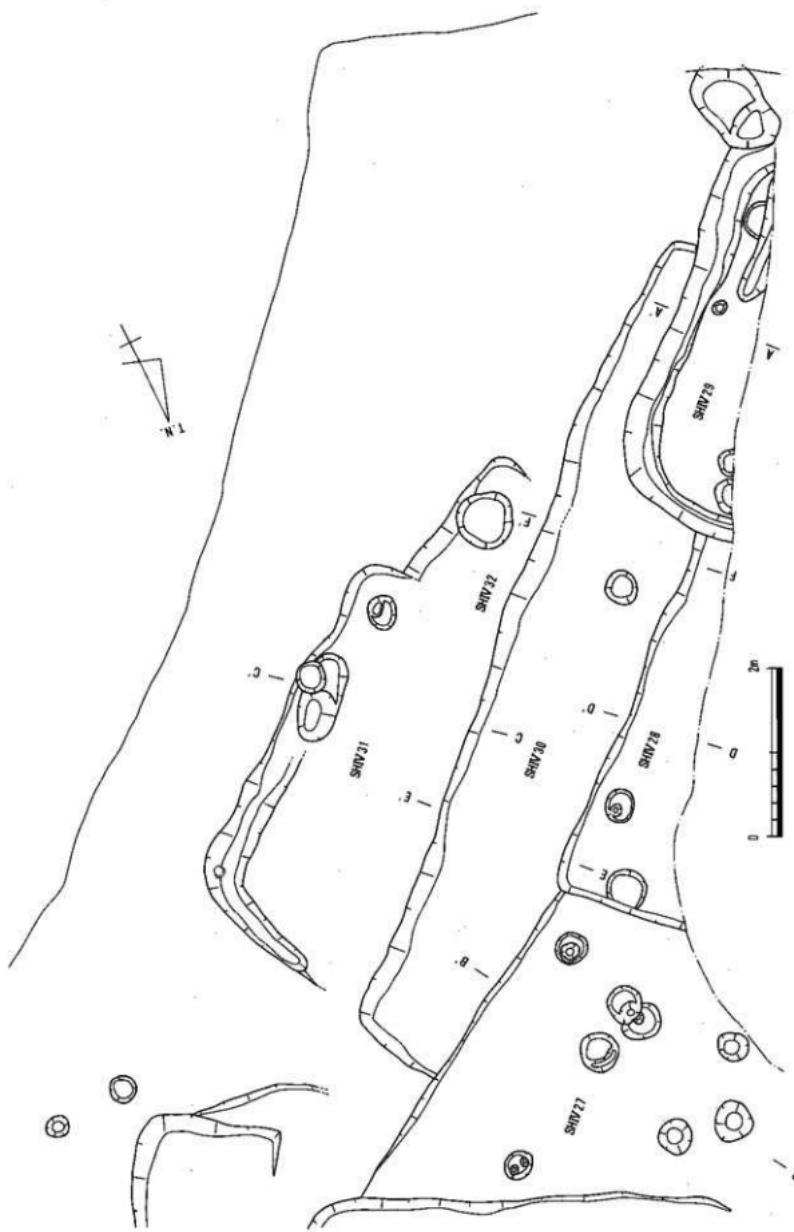
第205図 SHIV24・SHIV25断面図(1/60)、出土遺物実測図(1/4)

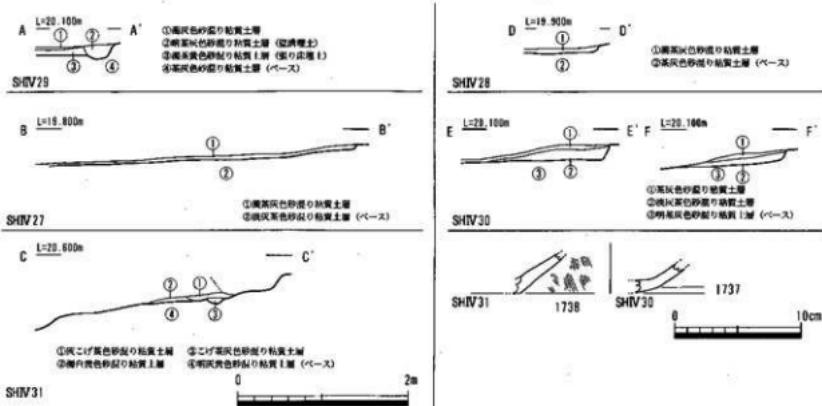
出している。規模は南北約 6.0 m、検出面からの深さは約 0.20 m を測る。  
 住居内の堆積土は土層①（濁灰色砂混り粘質土）が主流を占めている。  
 壁溝は幅約 15 cm で、2 条確認でき、重複することから建て替えがあったものと考えられる。  
 住居内から弥生土器が出土している（第 205 図 1720 ~ 1723）。  
 時期は弥生時代後期後半と考えられる。

SHIV25 は第 IV 調査区南部、標高 19.8 m において検出した竪穴住居で、西側は削平されていた。しかし残存する部分から平面形態は隅丸方形を呈し、規模は南北約 4.9 m、検出面からの深さは約 0.10 m を測る。長軸の主軸は N-33°-E をとる。



第207圖 SHIV27~SHIV32平面圖 (1/60)





第208図 SHIV27~SHIV32断面図(1/60), 出土遺物実測図(1/4)

住居内の堆積土は土層①(暗灰茶色砂混り粘質土)が主流を占めている。

主柱穴等は確認できなかった。

住居内から弥生土器が出土している(第205図1724~1732)。

弥生土器は壺・甕・鉢・高坏・瓶である。

時期は弥生時代後期後半と考えられる。

#### SHIV26

SHIV26は第IV調査区中央南、標高19.5 mにおいて検出した竪穴住居で、南側でSHIV27を切り、西側を現行の水路によって削平を受けているために全容は不明である。しかし残存する東側から平面形態は隅丸方形で、住居内からは主柱穴と思われる柱穴と周囲にベッド状遺構を検出している。規模は南北約5.64 m、検出面からの深さは約0.10 mを測る。長軸の主軸はN-24°-Eをとる。

検出面がかなり削平を受けているために住居内の堆積土は不明であるが、ベッド状遺構内の堆積は土層②(暗灰茶色砂混り粘質土)が主流を占めている。

主柱穴は4穴で、それぞれのコーナー部にあり、直径30~50 cm程度の円形を呈する。周囲のベッド状遺構は幅約1 mを測り、全周する。主柱穴はほとんどがベッド上面から掘り込まれている。

住居内から弥生土器が出土している(第206図1733~1736)。

弥生土器は壺・甕・高坏で、全て小片である。

時期は弥生時代後期後半と考えられる。

#### SHIV27~29

SHIV28は第IV調査区南部、標高19.9 mにおいて検出した竪穴住居で、西側部分は現在の水路によつて削平を受けている。しかし残存する部分から平面形態は方形を呈するものと考えられる。住居内から壁溝を検出している。推定する南北の規模は約4.7 mを測る。長軸の主軸はN-47°-Eをとる。

住居内の壁溝は幅 40 cm を測る。

住居内から遺物は出土していない。

SHIV28 は第IV調査区南部、標高 19.7 m において検出した竪穴住居で、南側は SHIV29 によって切られており、西側部分は現在の水路によって削平を受けている。しかし残存する部分から平面形態は方形を呈するものと考えられる。長軸の主軸は N-47°-E をとる。

住居内から遺物は出土していない。

SHIV30 は第IV調査区南部、標高 19.9 m において検出した竪穴住居で、西側を SHIV27・28・29 によって切られている。しかし残存する部分から平面形態は方形を呈するものと考えられる。規模は東側の辺から約 10.12 m を測る巨大な竪穴住居となる。長軸の主軸は N-45°-E をとる。

住居内から甕あるいは鉢の底部が出土している（第 208 図 1737）。

SHIV27 は第IV調査区南部、標高 19.6 m において検出した竪穴住居で、北側部分を SHIV26 によって切られ、南側を SHIV28 によって切られており、西側大半は削平を受けているため東側の一部を検出したのみである。しかし残存する部分から平面形態は方形を呈するものと考えられる。住居内から柱穴を検出しているが、主柱穴かどうかは不明である。長軸の主軸は N-60°-E をとる。

SHIV31 は第IV調査区南部、標高 20.4 m において検出した竪穴住居で、西側大半は削平を受けているため東側の一部を検出したのみである。しかし残存する部分から平面形態は方形を呈するものと考えられる。規模は東側の一辺から約 4.7 m を測る。住居内から幅 40 cm を測る壁溝を検出している。長軸の主軸は N-50°-E をとる。

住居内から甕の底部が出土している（第 208 図 1738）。

竪穴住居内からはほとんど遺物が出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、おそらく弥生時代後期後半と考えられる。

これら竪穴住居跡は切り合いが確認でき、古い順に SHIV31 → SHIV30 → SHIV27 → SHIV28 → SHIV29 であったことが解る。

## 掘立柱建物跡

### SBIV01

SBIV01は第IV調査区北部、標高19.9mにおいて検出した2(梁間)×(1)(桁行)間で、南北棟の掘立柱建物である。規模は梁間4.89mを測り、南北主軸はN-28°-Wをとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が円形を呈し、規模は直径0.4~0.6mと大きく、深さ0.36~0.46mを測るしっかりとした掘立柱建物跡である。平面及び土層断面から柱痕が確認でき、20cm程度の柱材であったことが解る。

地形の改変によって北西部が削平を受けているために全容は不明である。

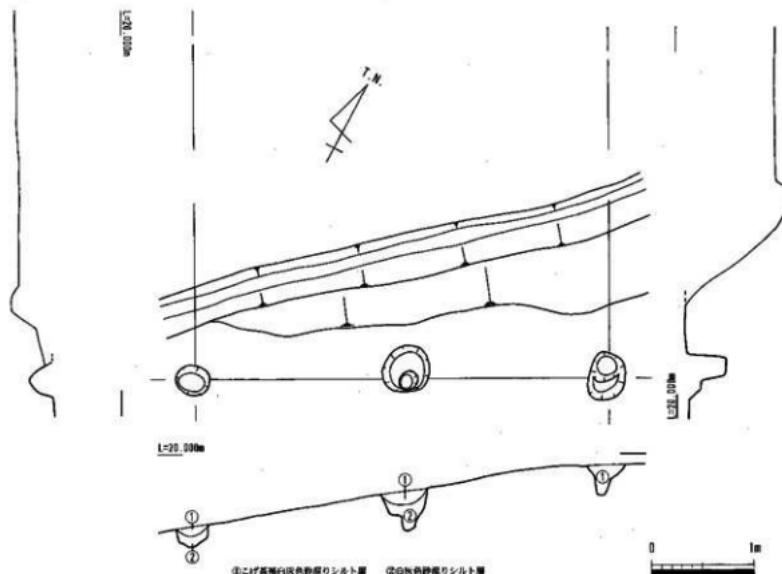
柱穴から遺物が出土していないために詳細な時期は不明であるが、おそらく古代と考えられる。

### SBIV02

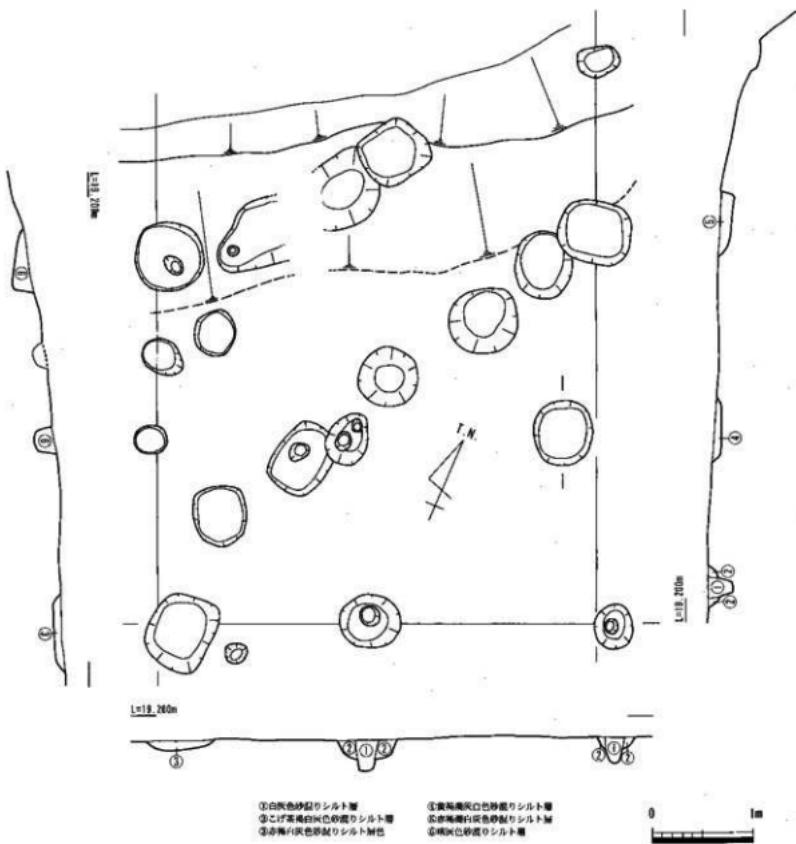
SBIV02は第IV調査区北部、標高19.0mにおいて検出した2(梁間)×(3)(桁行)間で、南北棟の掘立柱建物である。規模は梁間5.18m、桁行(6.7)mを測り、南北主軸はN-24°-Wをとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が円形及び隅丸方形形状を呈し、規模は直径0.4~0.9mと大きく、深さ0.3~0.4mを測るしっかりとした掘立柱建物である。土層断面から柱痕が確認でき、20cm程度の柱材であったことが解る。

地形の改変によって北西部が削平を受けているために全容は不明である。

柱穴から遺物が出土していないために詳細な時期は不明であるが、おそらく古代と考えられる。



第209図 SBIV01平・断面図(1/50)



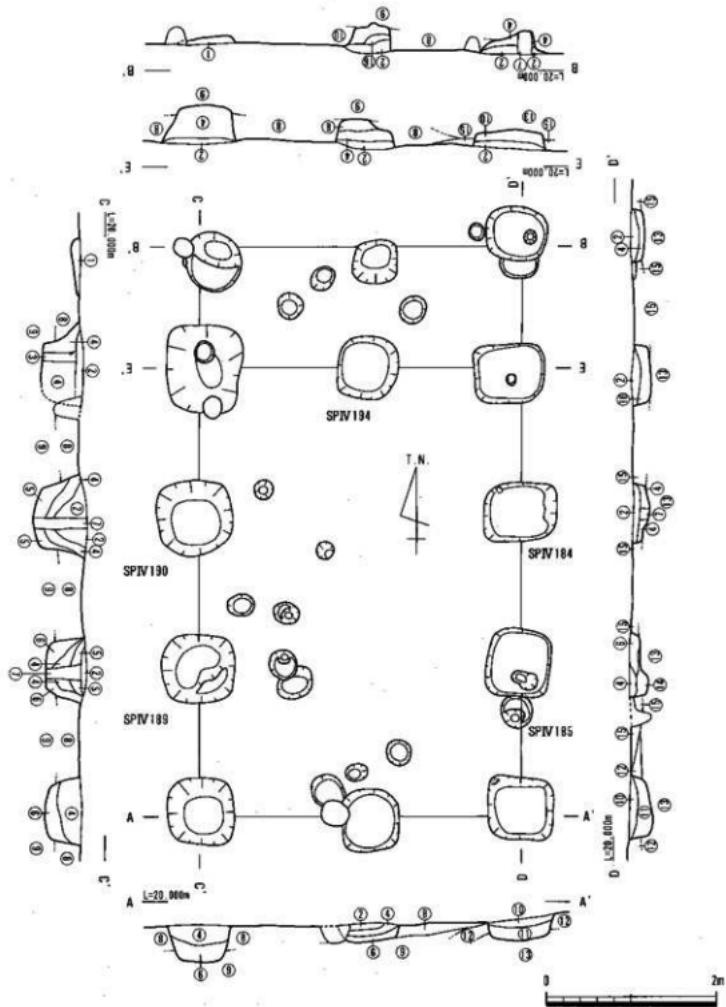
第210図 SBIV02平・断面図(1/50)

### SBIV03

SBIV03は第IV調査区中央部、標高19.7 mにおいて検出した2(梁間)×3(衍行)間で、南北棟の掘立柱建物で、北側に庇が付くものである。規模は梁間3.81 m、衍行5.35 m、床面積20.1 m<sup>2</sup>を測り、南北主軸は真北をとる。北側の庇は1.7 mの間隔で、若干小振りの柱穴である。この建物を構成する柱穴は平面形態が方形を呈し、規模は一辺0.67～1.0 m、深さ0.27～0.64 mを測るしっかりした掘立柱建物である。土層断面から柱痕が確認でき、13～15 cm程度の柱材であったことが解る。

柱穴内から須恵器・土師器が出土している(第213図1739～1745)。

須恵器壺身の立ち上がり及び壺蓋の返りがかなり退化傾向にあることから、掘立柱建物の時期はTK217型式並行期で、7世紀中葉と考えられる。



①茶色の粘土層

②泥じごけ茶色砂礫り粘土層

③泥じごけ茶色砂礫り粘土層と黄褐色白色粘土層が混じた上層

④泥じごけ茶色砂礫り粘土層 (帶黃褐色砂礫り粘土層のブロックを少含む)

⑤泥じごけ白いブロックが混じる

⑥泥じごけ白い砂層

⑦泥じごけ茶色砂礫り粘土層

⑧泥じごけ茶色砂層 (0.1~1cm程度の砂粒) ベース

⑨泥じごけ茶色灰岩層 (0.5~3cm程度の砂粒) ベース

⑩泥じごけ茶色砂礫り粘土層 (上)

⑪泥じごけ茶色砂礫り粘土層 (上のブロックを含む)

⑫泥じごけ茶色砂礫り粘土層 (ベース)

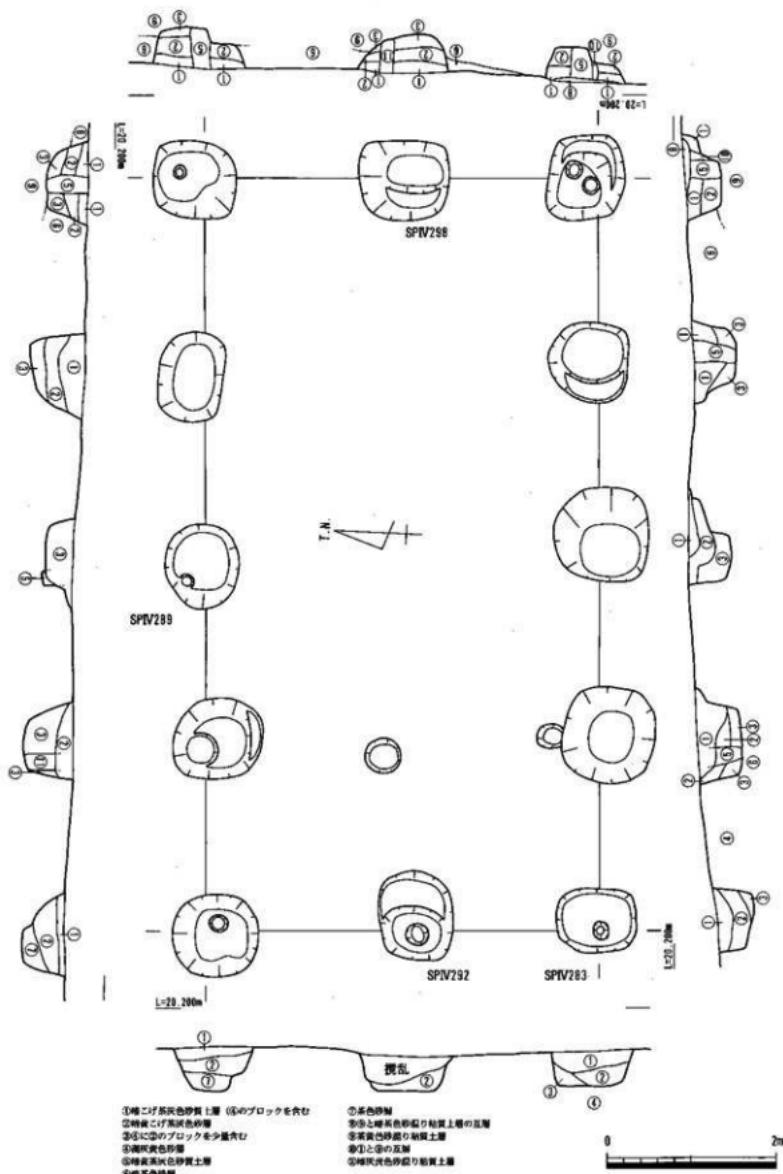
⑬泥じごけ茶色砂層 (上)

⑭泥じごけ茶色砂礫り粘土層 (ベース)

⑮泥じごけ茶色砂礫り粘土層

⑯茶色砂層 (小細粒と1~3mm程度の砂粒)

第211図 SBIV03平・断面図(1/60)



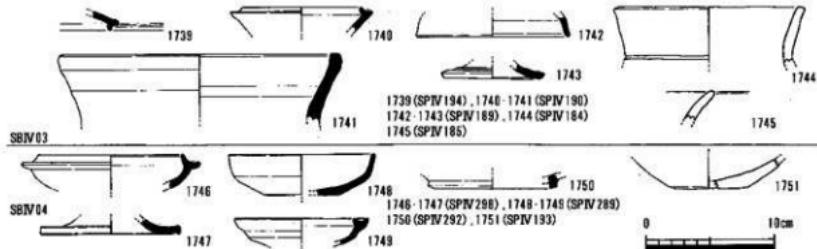
第212図 SBIV04平・断面図 (1/60)

#### SBIV04

SBIV04は第IV調査区中央部、標高19.9mにおいて検出した2(梁間)×4(桁行)間で、東西棟の掘立柱建物である。規模は梁間4.66m、桁行8.97m、床面積41.8m<sup>2</sup>を測り、南北主軸はN-2°-Wをとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が隅丸方形を呈し、規模は一辺0.8~1.2m、深さ0.42~0.52mを測る。土層断面から柱痕が確認でき、20cm程度の柱材であったことが解る。この掘立柱建物は整穴住居SHIV02に切られている。またSBIV02とはL字状に建物が配置されており、この2棟は同時期の可能性が考えられる。

柱穴内から須恵器・土師器が出土している(第213図1746~1751)。

須恵器坏身の立ち上がりがしっかりしていることから、掘立柱建物の時期はTK217型式並行期古段階で、7世紀中葉前半と考えられる。またSHIV02が7世紀中葉後半であることからも整合性が認められる。



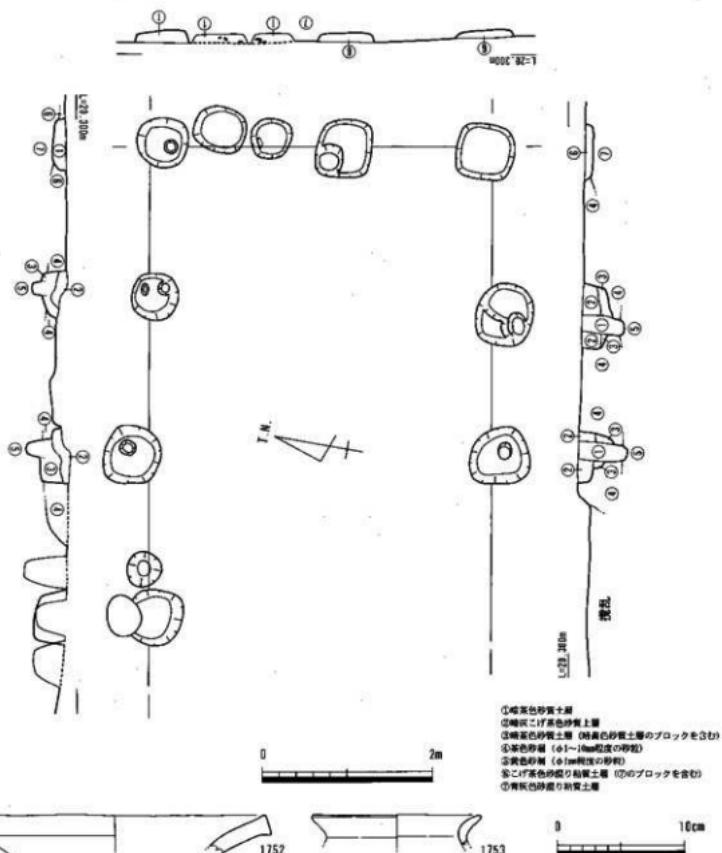
第213図 SBIV03・SBIV04出土遺物実測図(1/4)

#### SBIV05

SBIV05は第IV調査区南部、標高20.1mにおいて検出した2(梁間)×(3)(桁行)間で、西側を現在の水路により削平を受けているが、東西棟の掘立柱建物である。規模は梁間4.04m、桁行(5.6)mを測り、南北主軸はN-10°-Wをとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が隅丸方形を呈し、規模は一辺0.55~0.68m、深さ約0.58mを測る。土層断面から柱痕が確認でき、20cm程度の柱材であったことが解る。柱穴から出土したものは弥生土器しかなく、詳細な時期決定は行えないが、古代と考えられる。

#### SBIV06

SBIV06は第IV調査区南部、標高20.0mにおいて検出した2(梁間)×(1)(桁行)間で、西側を現在の水路により削平を受けているが、東西棟の掘立柱建物である。規模は梁間3.58m、桁行(1.9)mを測り、南北主軸はN-12°-Wをとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が隅丸方形を呈し、規模は一辺約0.6m、深さ約0.2mを測る。土層断面から柱痕が確認でき、20cm程度の柱材であったことが解る。柱穴から出土したものは土師器の小片しかなく、詳細な時期決定は行えないが、古代と考えられる。

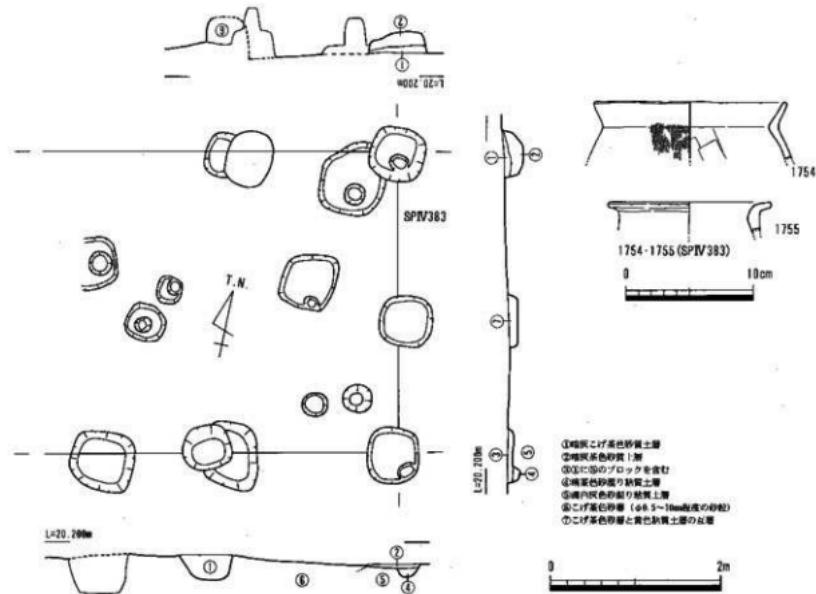


第214図 SBIV05平・断面図(1/60), 出土遺物実測図(1/4)

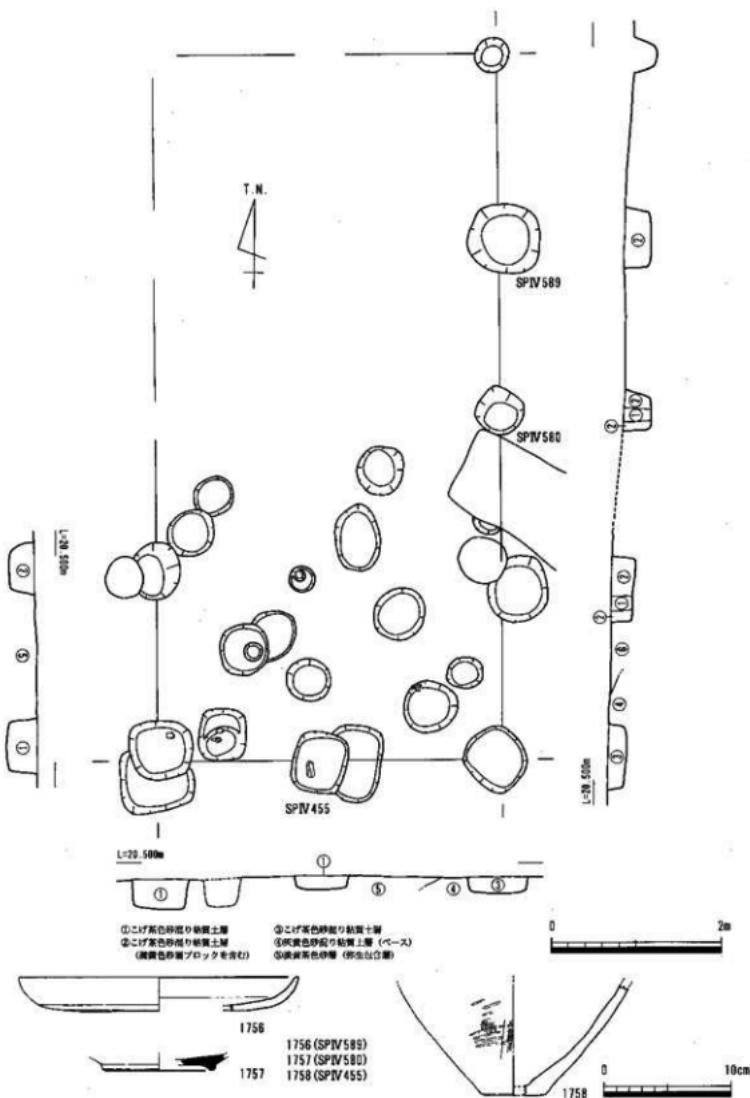
## SBIV07

SBIV07は第IV調査区南部、標高20.3mにおいて検出した2(梁間)×4(桁行)間で、北西側を現在の水路により削平を受けているが、南北棟の掘立柱建物である。規模は梁間4.07m、推定桁行8.39m、床面積34.1m<sup>2</sup>を測り、南北主軸はN-2°-Wをとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が隅丸方形を呈し、規模は一辺0.6~0.7m、深さ約0.15~0.35mを測る。土層断面から柱痕が確認でき、20cm程度の柱材であったことが解る。

柱穴からは土師器皿（第216図1756）・須恵器高台付き壺（第216図1575）が出土しており、概ね8世紀頃と考えられる。



第215図 SBIV06平・断面図(1/60), 出土遺物実測図(1/4)

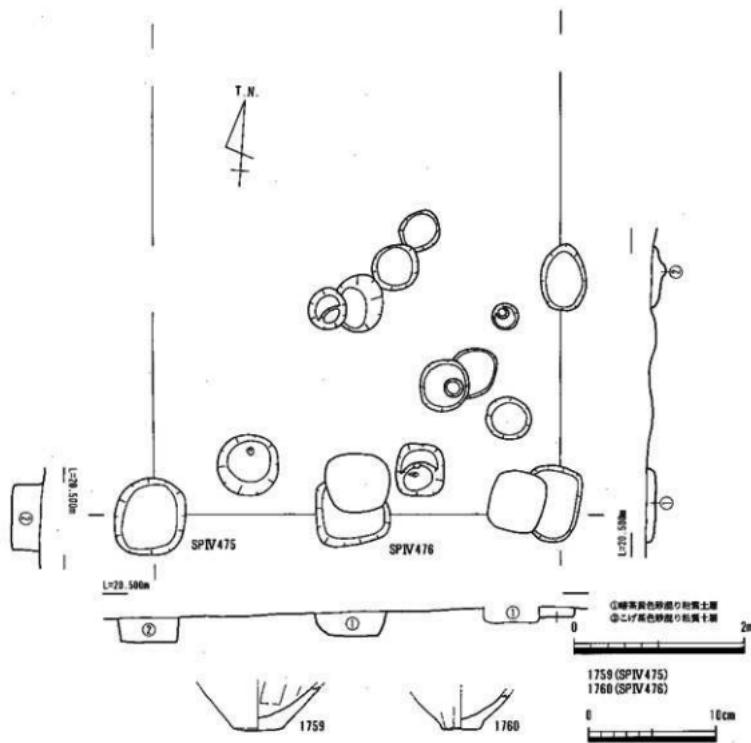


第216図 SBIV07平・断面図(1/60), 出土遺物実測図(1/4)

## SBIV08

SBIV08は第IV調査区南部、標高20.3mにおいて検出した2(梁間)×1(桁行)間で、北西側を現在の水路により削平を受けているが、南北棟の掘立柱建物である。規模は梁間4.80m、桁行(2.8)mを測り、南北主軸はN3°Wをとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が隅丸方形を呈し、規模は一边0.8~0.9m、深さ約0.12~0.28mを測る。

柱穴から出土したものは弥生土器しかなく、詳細な時期決定は行えないが、古代と考えられる。

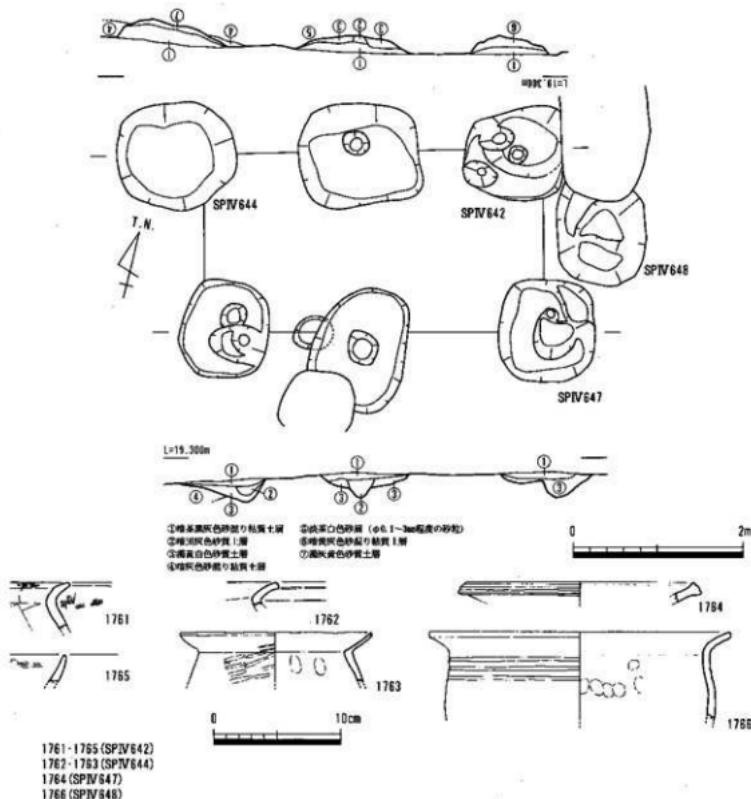


第217図 SBIV08平・断面図(1/60), 出土遺物実測図(1/4)

## SBIV09

SBIV09は第IV調査区中央部、標高19.1mにおいて検出した1(梁間)×2(桁行)間で、東西棟の掘立柱建物である。規模は梁間2.18m、桁行4.0m、床面積8.7m<sup>2</sup>を測り、南北主軸はN-13°-Wをとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が隅丸の方形を呈し、規模は一辺1.2~1.4m、深さ約0.2~0.3cmを測る。この建物は小型にもかかわらず構成する柱穴は1mを越す大型のもので、その内5穴からは30~40cm程度の柱痕が確認できる。また東辺には棟持ち柱と考えられる同規模の柱穴を確認している。

柱穴内から弥生土器壺・壺・鉢が出土しており、弥生時代の所産と考えられる。



## 土 墓 墓

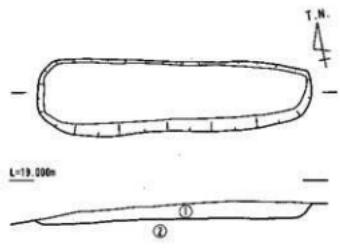
第IV調査区では墓と考えられる土壙を合計11基検出した。しかし内部より土器棺が出土していないもので平面形態が長方形を呈するものについてはどれも明確に墓と認定できる根拠がなく、推定の域を出ない。ここでは平面形態が長方形を呈し、長幅比（短軸÷長軸×100）が概ね50以下のもので、断面形態が箱形を呈する土坑を土壙墓として記述する。

### STIV01

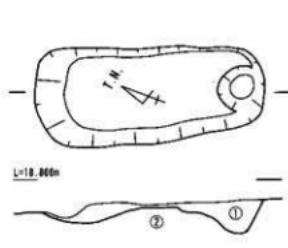
STIV01は第IV調査区北部、標高18.8mにおいて検出した土壙墓で、上部は削平されている。平面形態は隅丸の長方形を呈している。規模は長軸2.17m、短軸0.60m（長幅比28）、検出面からの深さ0.13mを測り、南北主軸はN-89°-Wをとる。

出土遺物は全て小片であることから詳細な時期決定までは至っていないが、埋土の状況から概ね弥生時代と考えられる。

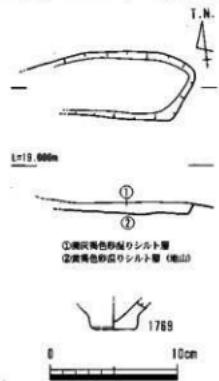
土坑内から遺物は出土していない。



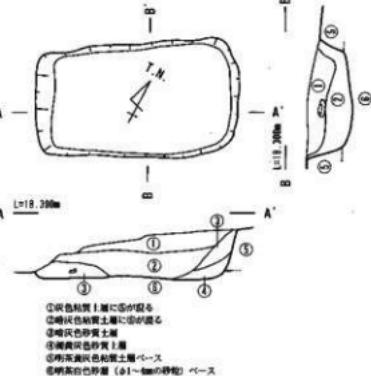
第219図 STIV01平・断面図(1/40)



第220図 STIV02  
平・断面図(1/40), 出土遺物実測図(1/4)



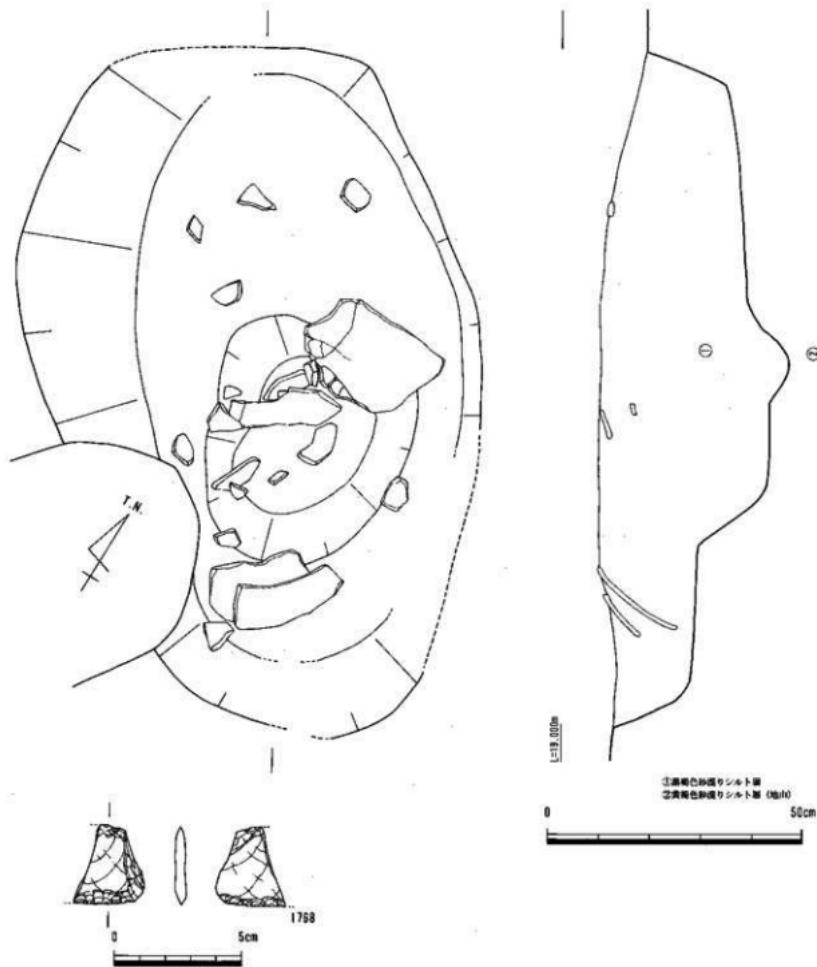
第222図 STIV04  
平・断面図(1/40), 出土遺物実測図(1/4)



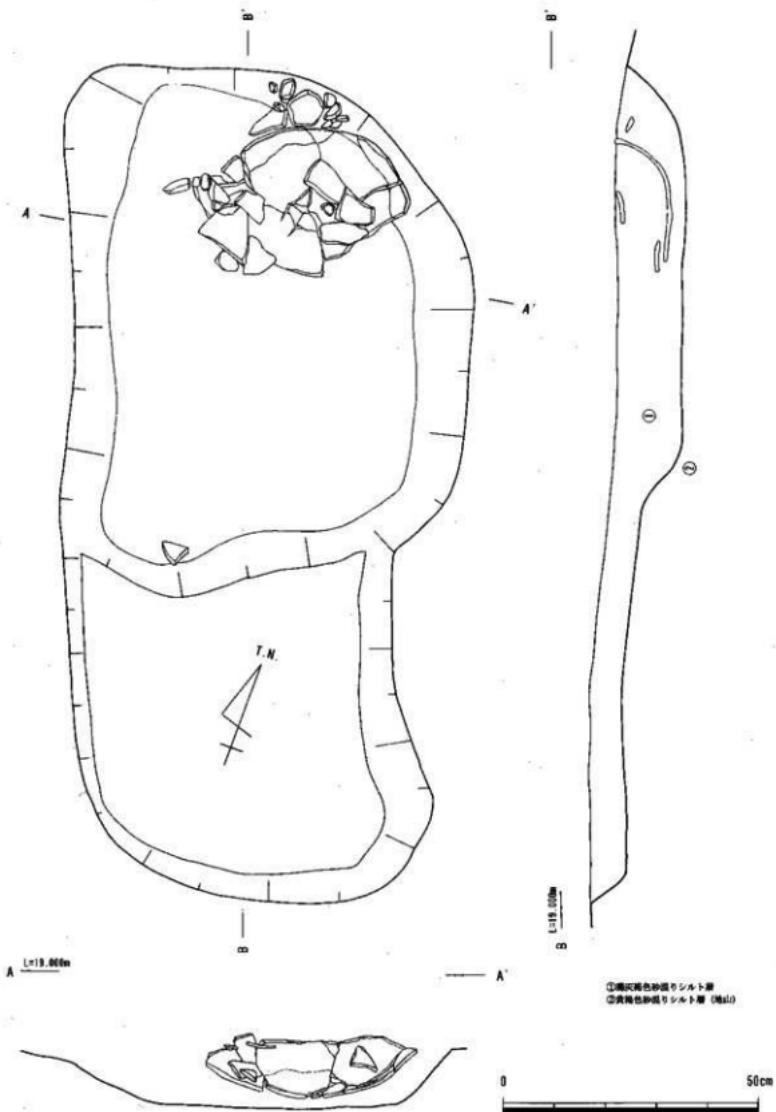
第226図 STIV07平・断面図(1/40)

STIV02

STIV02は第IV調査区北部、標高18.65mにおいて検出した土壌基で、上部は削平されている。平面形態は長方形を呈する。南小口部分に柱穴の痕跡が確認でき、床面には若干の凹凸が確認できる。規模は長軸1.82m、短軸0.78m（長幅比43）、検出面からの深さ0.1mを測り、長軸主軸はN-24°Wをとる。



第221図 STIV03平・断面図(1/10), 出土遺物実測図(1/2)



第223図 STIV05平・断面図(1/10)

出土遺物は全て小片であることから詳細な時期決定までは至っていないが、埋土の状況から概ね弥生時代と考えられる。

#### STIV04

STIV04は第IV調査区北部、標高18.7mにおいて検出した土壌墓で、西側小口を削平されているが、平面形態は長方形を呈する。規模は短軸0.53m、検出面からの深さ0.1mを測り、長軸主軸はN-84°-Wをとる。

出土遺物は全て小片であることから詳細な時期決定までは至っていないが、埋土の状況から概ね弥生時代と考えられる。

#### STIV07

STIV07は第IV調査区中央北、標高18.2mにおいて検出した土壌墓で、上部は削平されている。平面形態は長方形を呈する。規模は長軸1.60m、短軸0.89m(長幅比56)、検出面からの深さ0.38mを測り、長軸主軸はN-27°-Wをとる。

出土遺物は全て小片であることから詳細な時期決定までは至っていないが、埋土の状況から概ね弥生時代と考えられる。

#### STIV03

STIV03は第IV調査区北部、標高18.9mにおいて検出した土器棺墓で、上部は削平されている。平面形態は隅丸の長方形を呈する。規模は長軸1.36m、短軸0.91m、検出面からの深さ0.18m、最深部で0.34mを測る。土壌の断面をみると2段になっており、またちょうど2段目の上部に土器片が集中していることから土器棺の掘り方とやや東よりの窪みは土器棺を安定させるための掘り方と考えられる。

墓壙内からは図化不可能な土器片とサヌカイト製の石庖丁が出土している(第221図1768)。

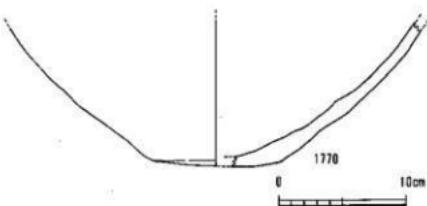
出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね弥生時代後期後半と考えられる。

#### STIV05

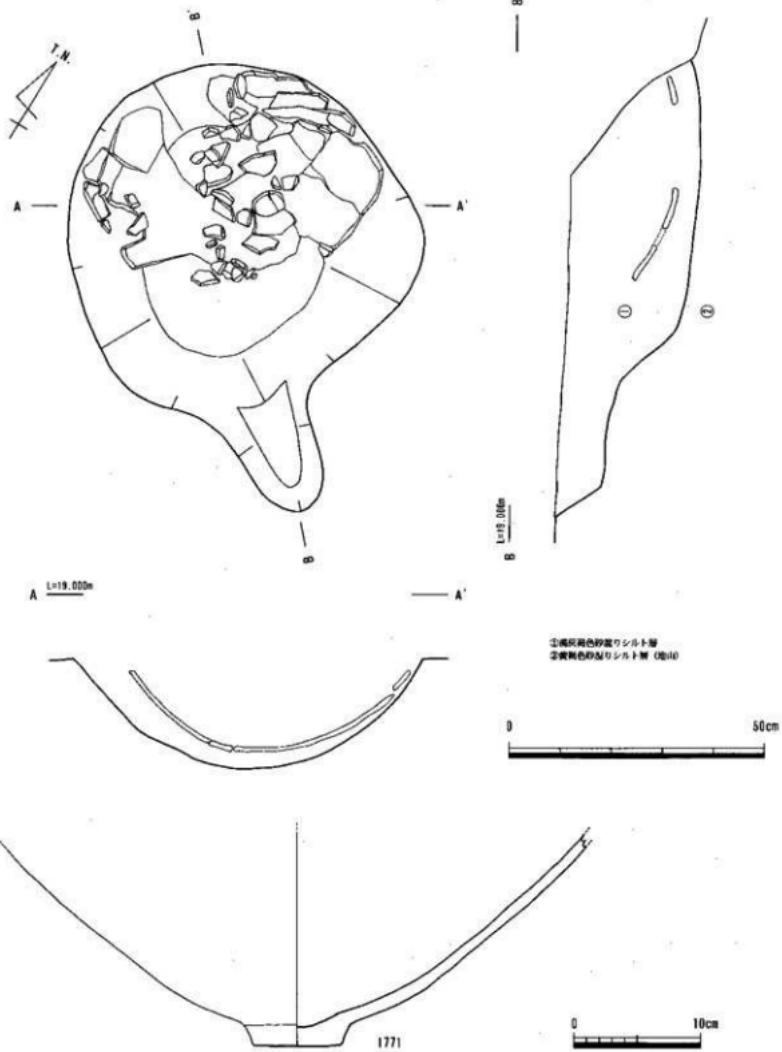
STIV05は第IV調査区北部、標高18.95mにおいて検出した土器棺墓で、上部は削平されている。平面形態は隅丸の長方形を呈する。規模は長軸1.66m、短軸0.78m、検出面からの深さ0.07m、最深部で0.13mを測る。土壌の断面をみると2段になっており、またちょうど2段目の北小口部分において土器が据え付けられた状態で出土した。このことから土器棺の掘り方と北よりの窪みは土器棺を安定させるための掘り方と考えられる。

墓壙内からは土器棺の底部が出土している(第224図1770)。

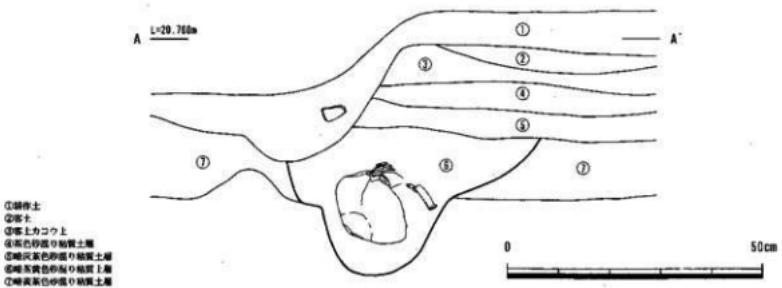
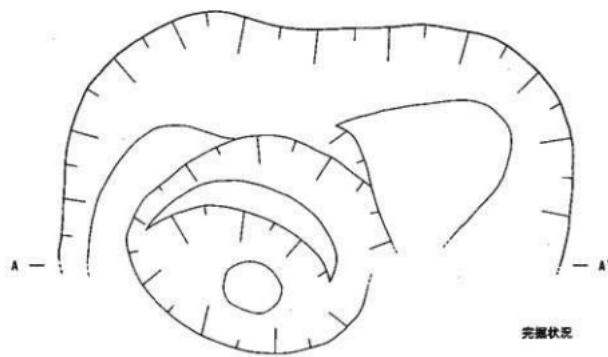
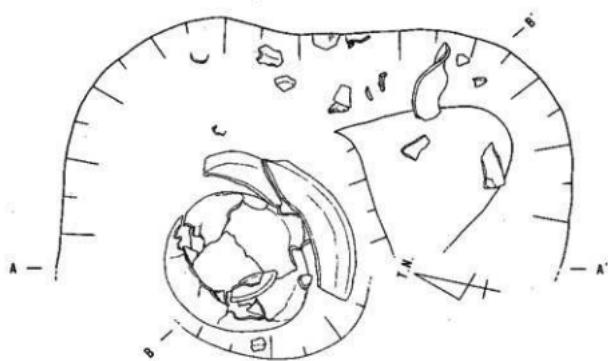
出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね弥生時代後期後半と考えられる。



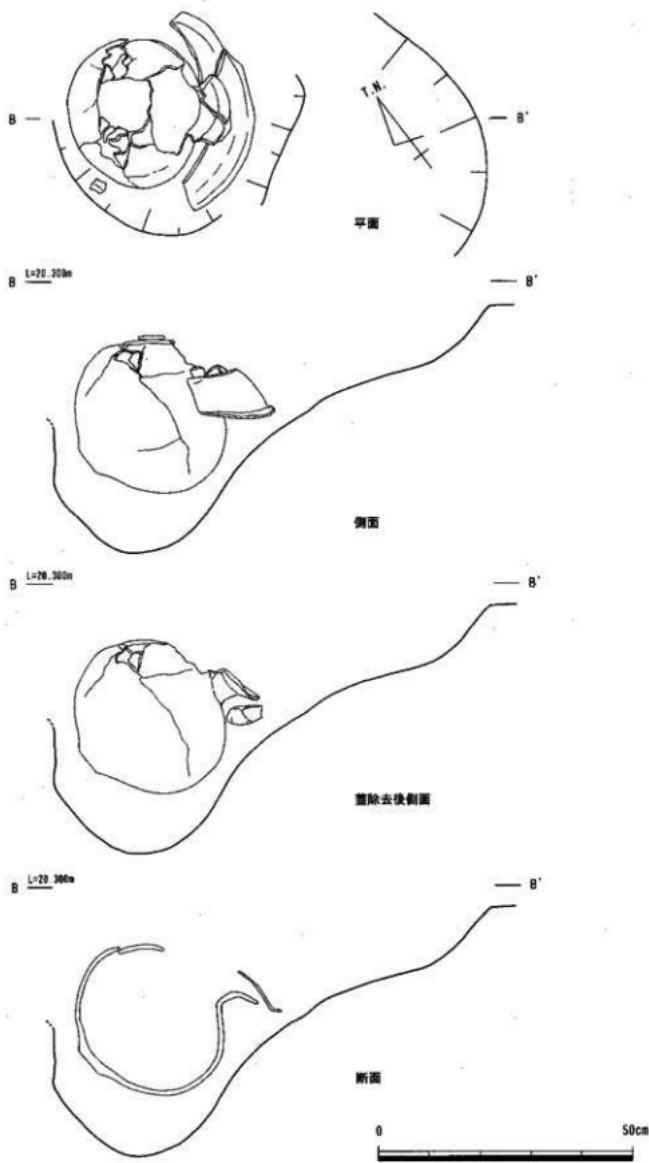
第224図 STIV05出土遺物実測図(1/4)



第225図 STIV06平・断面図(1/10), 出土遺物実測図(1/4)



第227図 STIV08平・断面図(1/10)①



第228図 STIV08平・断面図(1/10)②

#### STIV06

STIV06は第IV調査区北部、標高18.9mにおいて検出した土器棺墓で、上部は削平されている。平面形態は南東側に僅かな突出部を持つが概ね歪な円形を呈する。規模は直径0.67m、検出面からの深さ0.25mを測る。

墓壙底面は円形に掘削され、若干透き間を空け、土器が据えられている。

墓壙内からは底部が突出する土器が出土している（第225図1771）。

出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね弥生時代後期後半と考えられる。

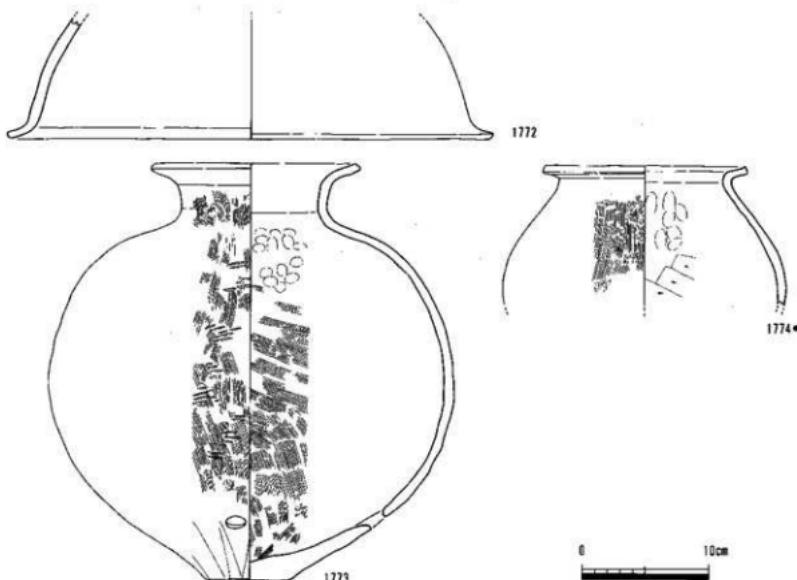
#### STIV08

STIV08は第IV調査区南部、標高20.3mにおいて検出した土器棺墓で、完全な埋没状態で検出した。平面形態は椿円形を呈し、規模は長軸1.05m、推定短軸0.8mを測る。掘り方は完掘状況及び断面から2段掘を呈しており、検出面からは深さは1段目が0.25m、2段目最深部が0.59mを測る。

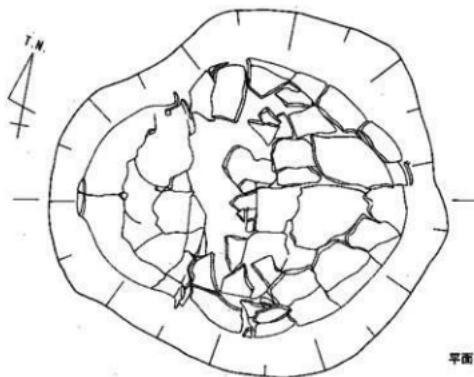
墓壙内部からは2段目部分に壺を傾かせ、口部に鉢で蓋をするような状態の土器棺を検出した。

土器棺の検出状況は墓壙は1段目がすり鉢状に、2段目が球形状に掘削し、その底部から13cm上部に壺を据える。壺は口縁を真南から41°東に向け、尚かつ正位置から40°傾けるように置かれている。壺には体部下半に穿孔が認められ、穿孔位置は下位である。

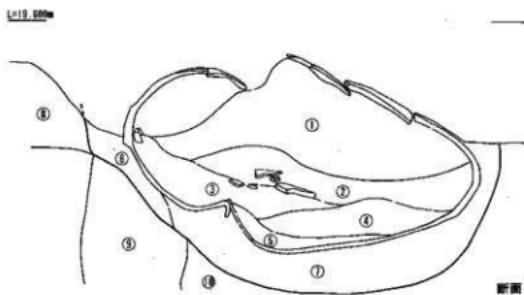
土器は口縁部から体部にかけて部分的に打ち欠き、一部は口縁端部まで残存する。その残存する口縁部を下方に置き、頸部外面（口縁部下位）に拳大の石で支えている状態であった。また蓋は鉢を転



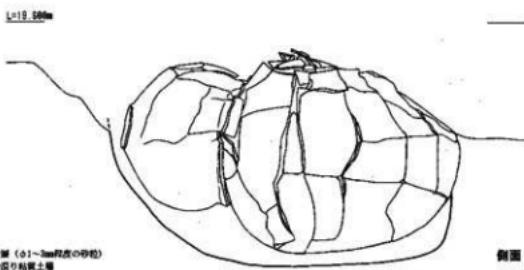
第229図 STIV08出土遺物実測図(1/4)



平面



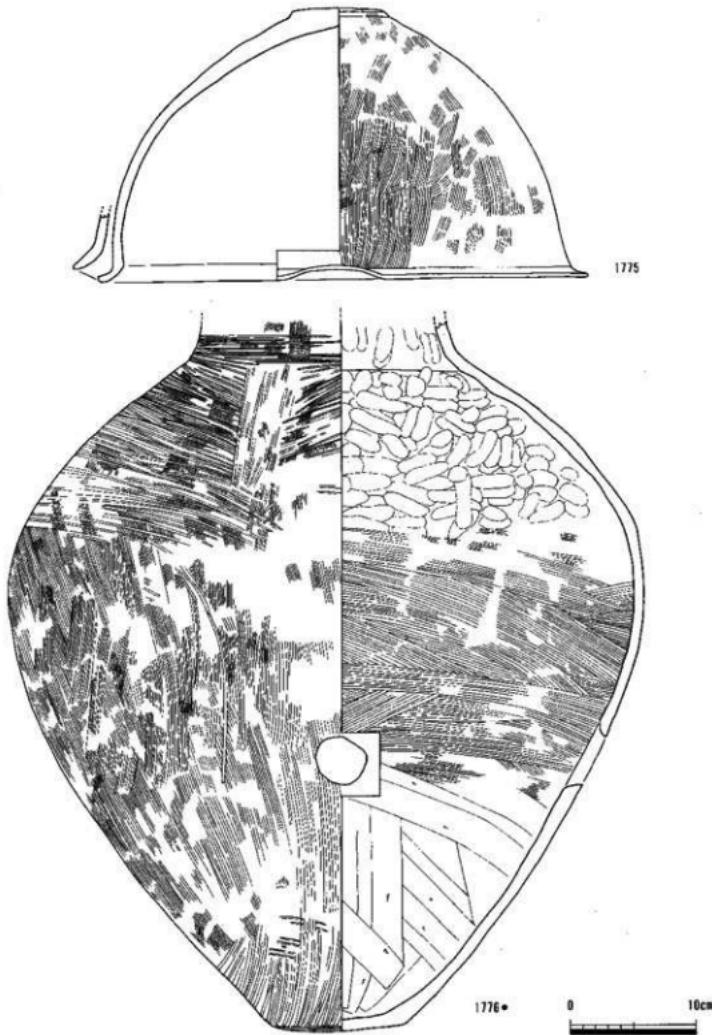
断面



側面

- ①暗茶色砂層 (0.1~3m程度の厚さ)
- ②暗茶灰色砂礫り粘質土層
- ③灰白色質土層
- ④暗灰色彩土層
- ⑤暗灰色彩砂り粘質土層
- ⑥暗茶色砂礫り粘質土層
- ⑦暗茶灰色砂礫り粘質土層
- ⑧暗茶灰色砂礫り粘質土層
- ⑨暗茶色砂礫り粘質土層 (ベース)

第230図 STIV09平・断面図(1/20)



第231図 STIV09出土遺物実測図(1/4)

用し、完全に埋没していた状態から考えると完形ではなく、底部を打ち欠き、口縁部の約半分程度を蓋として使用したものと考えられる。

土層は土層⑥(暗茶黄色砂混り粘質土)の単層で、掘削から土器の安置、さらに埋め戻しまで一気に行つたことが解る。

時期は土器棺に使用した壺から弥生時代後期後半と考えられる。

#### STIV09

STIV09は第IV調査区南部、標高19.5mにおいて検出した土器棺墓で、古代の遺構面を形成する洪水砂で掘り方上部が削平を受けているもの概ね完全な埋没状態で検出した。掘り方の平面形態は土器棺の形態に応じたように掘削されているため、やや歪な椭円形を呈し、規模は長軸0.78m、短軸0.73m、検出面からの深さ0.3mを測る。掘り方は断面U字状を呈している。

墓壙内部からはほぼ水平に壺を置き、鉢で蓋をするような状態の土器棺を検出した。

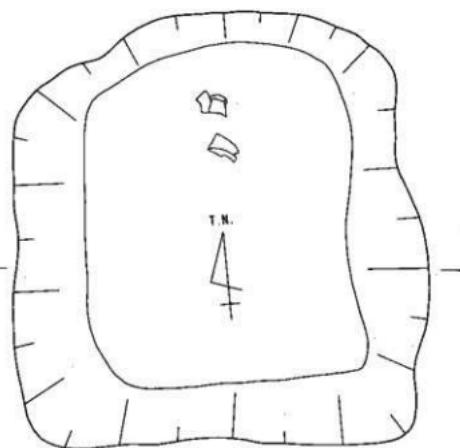
土器棺の検出状況は断面U字状の墓壙の底面から2~10cm程浮かせた状態で据える。壺は口縁を真西から10°南に向け、尚かつ正位置から80°とほとんど水平の状態で置かれている。壺には体部下半に穿孔が認められ、穿孔位置は下位である。

土器は頸部から上部を打ち欠き、蓋は完形の鉢を転用し、被せていた。壺及び鉢はかなりの土圧で上部ほど細かく割れていた。

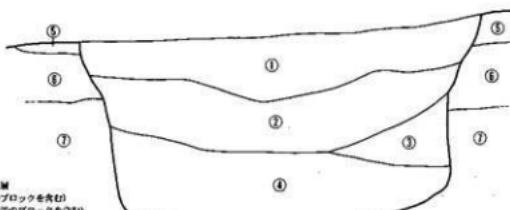
土層は土器棺下位に土層⑥(灰色砂混り粘質土層)・土層⑦(淡茶黄色砂混り粘質土層)の2層が認められる。この堆積状況から土壤の掘削から土器の安置、さらに埋め戻しまで一気に行つたことが解る。

壺は外面にヘラ磨きと刷毛目が施され、肩部のヘラ磨きは分割である。内面は下半にヘラ削りが、中位に刷毛目が、上位に指頭痕が施されている。胎土に角閃石を含み、チョコレート色を呈していることから下川津B類土器と考えられる。

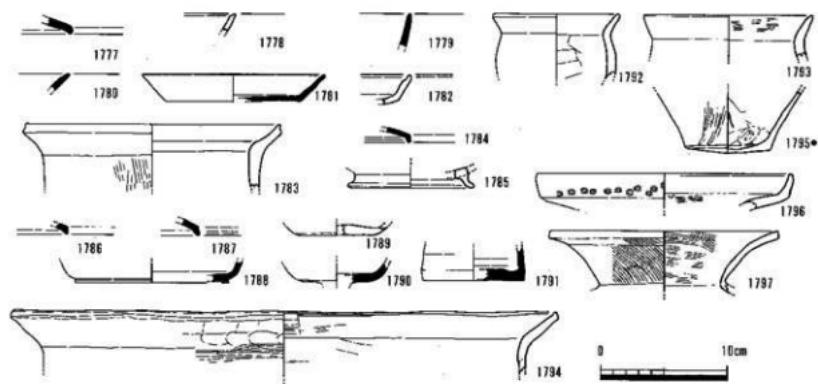
時期は土器棺に使用した壺から弥生時代後期後半と考えられる。



L=20.200m



- ①暗灰系色砂割り粘質土層
- ②明灰色砂質土層 (このブロックを含む)
- ③暗灰系灰白色砂質土層 (このブロックを含む)
- ④暗灰系灰白色質土層
- ⑤灰・こげ茶色砂質り粘質土層
- ⑥こげ茶色砂層 (0.1~1.0m程度の厚さ)
- ⑦明灰色砂層 (0.1m程度の厚さ)



第232図 SKIV01平・断面図(1/20), 出土遺物実測図(1/4)

## 土坑

### SKIV01

SKIV01は第IV調査区中央南、標高20.2mにおいて検出した土坑で、平面形態は方形を呈する。規模は一边1.62m、検出面からの深さ0.74mを測る。ちょうどSHIV04と重複して検出した。

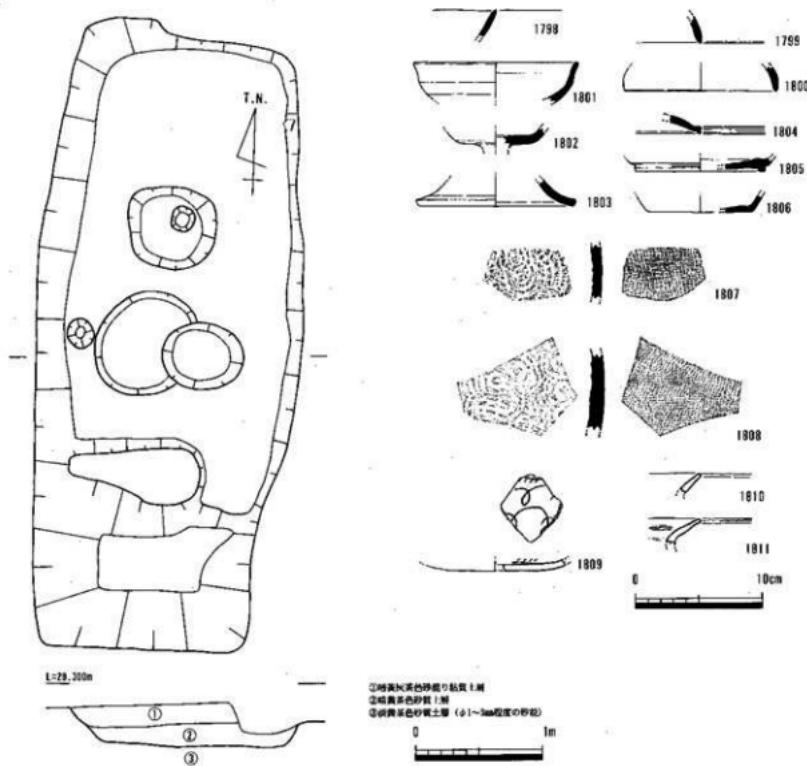
断面箱形を呈し、土層は4層に細分できる。

土坑内から多量の遺物が出土している（第232図1777～1797）。

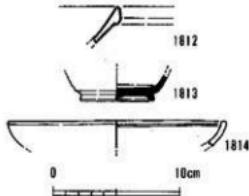
出土遺物は須恵器・土師器・土師質土器・弥生上器が出土している。これらの遺物には7世紀、8世紀、9世紀とかなり時期幅があり、須恵器皿（1780・1781）、須恵器壺（1791）が9世紀代のものでこの土坑の時期も9世紀後半としたい。

### SKIV02

SKIV02は第IV調査区中央南、標高20.1mにおいて検出した土坑で、平面形態は南北に長い長方形を呈する。規模は長軸5.0m、短軸2.08m、検出面からの深さ0.32mを測る。



第233図 SKIV02平・断面図(1/40), 出土遺物実測図(1/4)



第234図 SKIV06出土遺物実測図(1/4)

断面箱形を呈し、土層は2層に細分できる。完掘状況で南側で東西に区切るように高まりがあり、その南側が一段低くなっている。

土坑内から多量の遺物が出土した（第233図 1798～1811）。

出土した遺物の器種は須恵器壺身・壺蓋、高台付き壺・蓋、高壺、土師器壺、土師質土器壺である。須恵器には7世紀の壺蓋（1799・1800）もあるが、1805・1806は8世紀の壺と考えられるものも出土している。1809は土師器壺Cで、内底面に連結輪状の暗文が施されている。

出土遺物から8世紀後半頃と考える。

#### SKIV06

SKIV06は第IV調査区南部、標高18.8mにおいて検出した土坑で、西側をSRIV01に切られているために全容は不明であるが、現状では歪な長方形を呈している。規模は現存長軸約2.0m、現存短軸約1.0m、検出面からの深さ約0.48mを測る。

土坑内から須恵器・土師器・輸入磁器が出土している。

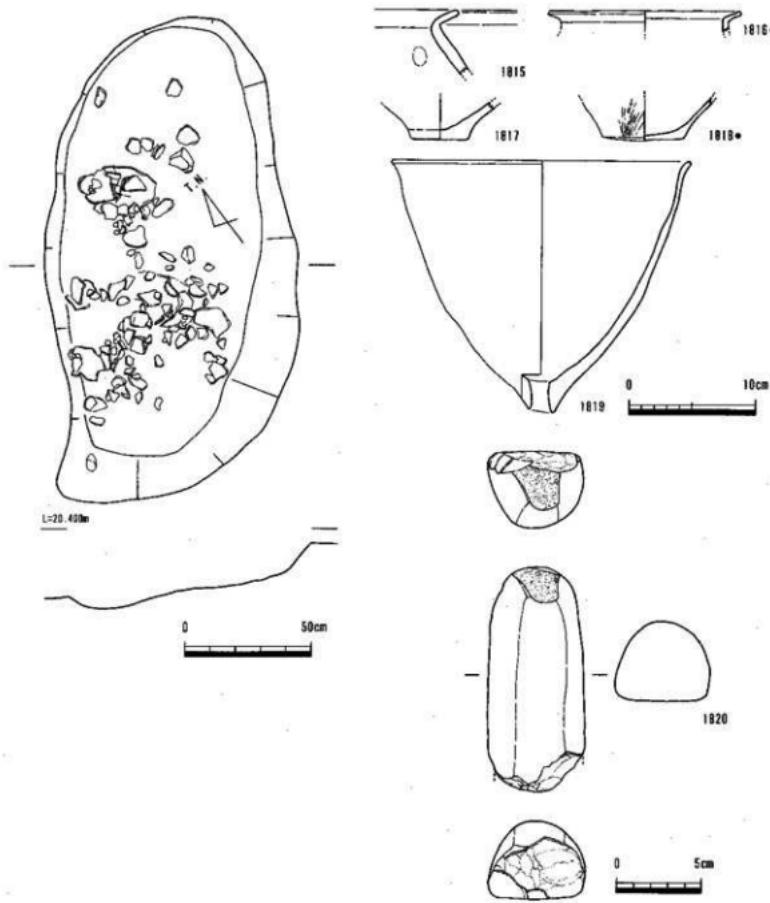
出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね中世と考えられる。

#### SKIV08

SKIV08は第IV調査区南部、標高20.3mにおいて検出した土坑で、平面形態は梢円形を呈する。規模は長軸3.94m、短軸1.97m、検出面からの深さ0.20mを測る。豊穴住居SHIV31の東辺を切っている。

土坑内から多量の遺物が出土した（第235図 1815～1820）。器種は壺・瓶で、かなり摩滅している。

出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね弥生時代後期後半と考えられる。



第235図 SKIV08平・断面図(1/20), 出土遺物実測図(1/4)

### 溝状遺構

#### SDIV13

SDIV13は第IV調査区中央部、標高18.9mにおいて検出した溝状遺構で、蛇行しながら南東方向から北西方向に流路を取り、先是現在の流路により削平を受け、不明である。この溝はSBIV09、SHIV13・14・15・16を切って、掘削されている。規模は幅約1.0～1.6mで、現存長約12mで検出した。溝は断面浅い「U」字型を呈し、検出面からの深さは約0.08mを測る。

溝からは甕・鉢・高壺などの弥生土器が少量出土している（第237図1821～1823）。

溝から出土した弥生土器及び埋土の状況も合わせ、弥生時代後期後半と考えられる。

#### SDIV14

SDIV14は第IV調査区南部、標高19.9mにおいて検出した溝状遺構で、現古川方向から流路を取り、屈曲し、北方向に流路を取る。この溝は堅穴住居SHIV20・21・22を切っている。

溝内から多量の遺物が出土している（第238図1824～1850）。

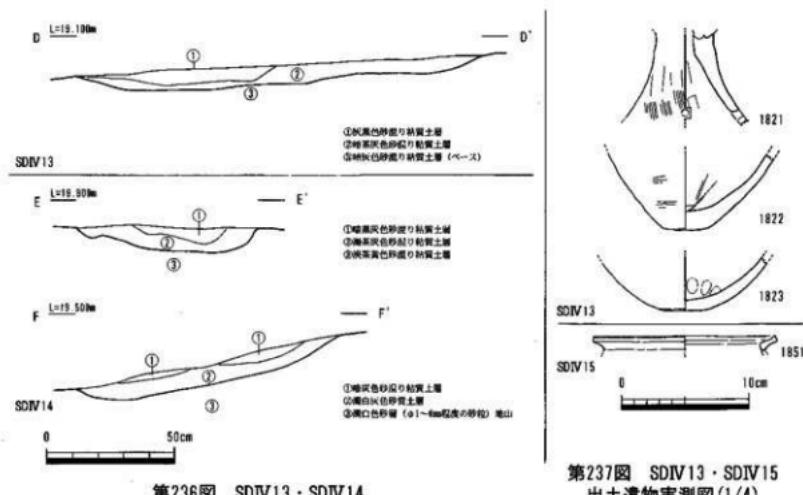
溝から出土した弥生土器及び埋土の状況も合わせ、弥生時代後期後半と考えられる。

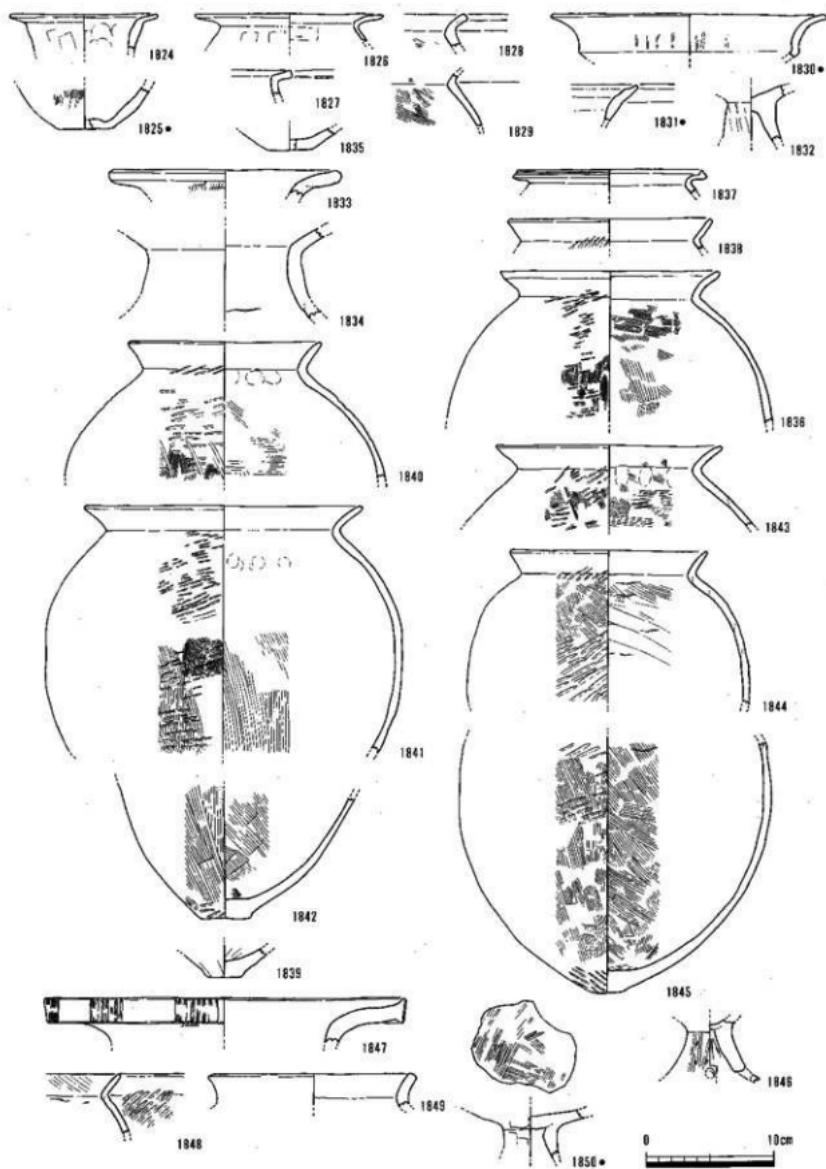
#### SDIV15

SDIV15は第IV調査区南部、標高19.8mにおいて検出した溝状遺構で、調査区内では一部しか検出していない。この溝はSHIV29を切っている。

溝からは少量の弥生土器が出土している（第237図1851）。

溝から出土した弥生土器及び埋土の状況も合わせ、弥生時代後期と考えられる。





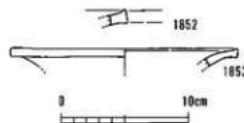
第238図 SDIV14出土遺物実測図(1/4)

## 自然流路

### SRIV01

SRIV01は標高18.4m前後で、第IV調査区西側を蛇行しながら北流するように検出した自然流路で、最北部では北東方向に屈曲する。調査区内で検出した一番新しい旧古川と考えられる。第III調査区で検出した自然流路 SRIII01 の対岸（東側）の肩部と考えられる。

時期は出土遺物及び埋土の状況から中世と考える。



第239図 SRIV01  
出土遺物実測図(1/4)

### SRIV02

SRIV02は第IV調査区中央部、標高18.2mで検出した自然流路で、SRIV01に切られており全容は不明である。流路方向は北東方向に流路を取っていたものが、北西方向に流路を取るように屈曲しており、「コ」の字に検出した。

この自然流路も旧古川と考えられ、第III調査区で検出した自然流路 SRIII03 に繋がる可能性も考えられる。

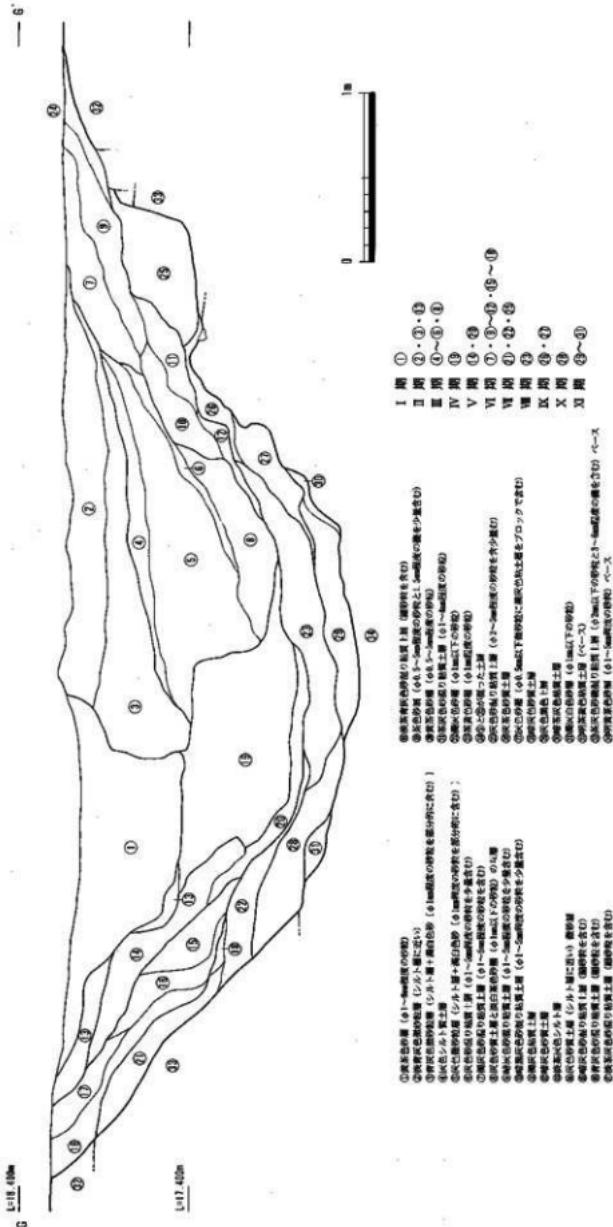
堆積土層は中央部のほとんどが洪水砂層とシルト層で、肩部から底部にかけて砂混りの粘質土層・粘土層が堆積している。

この堆積層は構成する土質や含まれる砂粒の多少でI～XI期に大別できる。I期は土層①黄茶色砂層で、この流路の最終堆積層（洪水砂層）である。土層断面をみるとレンズ状堆積を呈しておらず、特に右部はオーバーハング状態になっていることからII期としたシルト層を抉り取るような堆積状況であったことが解る。II期は土層②・③・⑩で、I期とした洪水砂層に削られているものの概ねレンズ状堆積を呈している。土質はシルト質に近い微砂粒層である。III期は土層④・⑤・⑥・⑧で、シルト層を基調とするが、下位になるに伴い砂粒を含む層になる。基本的にはII期とさほど時期差がない状態の堆積と考えられる。IV期は土層⑪で、I期と同様に洪水砂層である。I期とIV期の洪水砂層中には多量に遺物を包含しており、II・III期のシルト層中にはあまり遺物を包含していない。V期は土層⑫・⑬で、土質はシルト層と砂層を基調としており、III期の下位の土層に酷似する。V期の土層⑬（黄茶色砂層）からは多量の土器が出土しており、土層⑭と土層⑮は細分できる。

このI期からV期は土質及び堆積状況からみると大きく纏められ、砂層（V期土層⑬、IV期、I期）とシルト層（V期⑭、III・II期）が交互に堆積する状況であったことが解る。I期からV期の流路の規模は幅約5m、深さ1.4mを測る。

VI期は土層⑦・⑨・⑩・⑪・⑫・⑯・⑯・⑰・⑱で、流路肩部分を中心に確認できる。これらは暗灰あるいは灰色系の砂混り粘質土を基調とし、遺物を包含している。土層断面からレンズ状堆積が確認できる。VII期は灰色系の砂混り粘質土を基調とするが、下位の砂層には多量に遺物を包含する。VIII期は土層⑯（茶黄色砂層でシルト層）をラミナ状に包含し、洪水砂層の様相を呈するが、I・IV期の洪水砂層とは砂粒の大きさに明確な違いが認められる。この層には遺物を多量に含む。IX期とX期は砂質土層を基調とすることから同一時期と考えても良い。XI期は土層⑯（灰黒色粘土層）で、この流路の底に堆積する。

I～V期の砂層を中心とするものとVI期からXI期も大きく纏められ、さらに後者はVI・VII期とVIII～XI期に分けられ、明らかに土層の堆積状況に違いが認められる。I～V期の流路の規模は幅約5.0m、深さ約1.4mを測り、VI期からXI期の流路の規模は幅約6.74m、深さ約1.8mを測る。



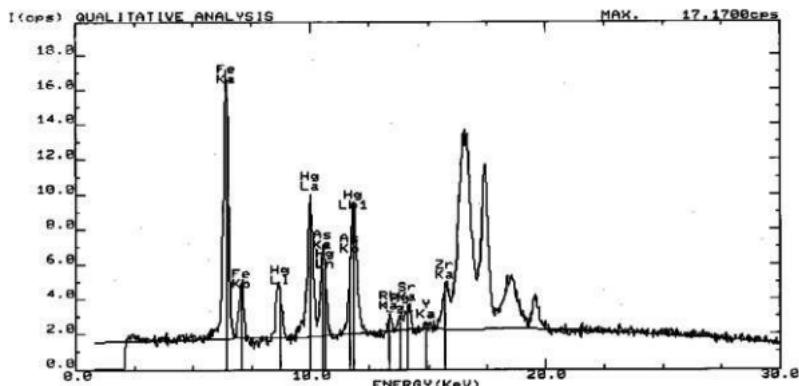
第240図 SRIV02断面図 (1/30)

次に各期における出土遺物の特徴について説明する。

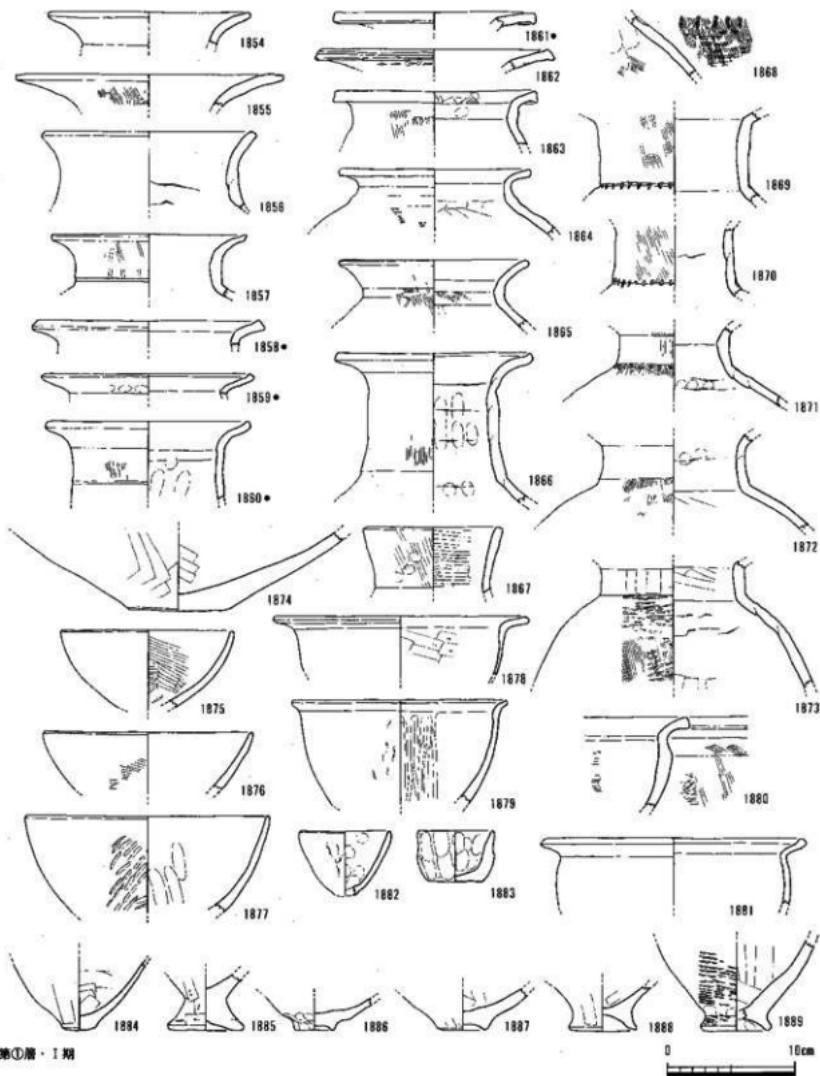
I～V期は砂層を中心とするもので、微妙な違いにより5つに細分できるが洪水砂層の堆積と考えられる。また出土遺物にはかなり幅があり、出土遺物には壺・甕・鉢・高壺などの器種が出土している。実際出土遺物をみると壺・甕については口縁端部を拡張するものと丸く終わらせるものがあり、時期差が認められる。また鉢は小型・中型・大型のものがみられ、その量もかなり多いことが解る。相対的には甕の口縁端部の特徴や鉢の小型化、多量化からみると弥生時代後期後半～終末頃で、下川津Ⅲ・IV式に併行するものと考える。

特に第242図1875は小型の鉢で、内面に朱の痕跡が認められた。徳島県立博物館の魚島氏の協力で、朱の分析を行った結果、第241図にあるようにHgが確認できることから水銀朱であることが判明した。原間遺跡で多量に出土している土器の中でこの1点のみで、しかも水銀朱であることは今後水銀朱の生産地を持つ徳島県との関係が注目できる。また第246図1982・1983、第255図2193は2重口縁の甕で、1982は口縁部外面に6条の凹線があり、全て胎土には結晶片岩を含むものである。結晶片岩は県内の土器には含まれず、阿讃山脈以南の土器に含まれるという特徴がある。水銀朱の付着した鉢の胎土は県内産と考えられ、土器とともに持ち込まれてはいないが、かなり徳島県との「もの」「ひと」の交流があったものと考えらる。

No.	元素	ENERGY(keV)	積分強度cps
1	F e - K $\alpha$	6.408	113.4287
2	F e - K $\beta$	7.068	21.1679
3	H g - L I	8.729	29.1068
4	H g - L $\alpha$	9.996	61.1088
5	A s - K $\alpha$	10.496	48.3854
6	H g - L $\eta$	10.618	46.5524
7	A s - K $\beta$	11.697	67.9579
8	H g - L $\beta$ 1	11.862	59.1750
9	R b - K $\alpha$	13.341	4.2357
10	H g - L $\gamma$ 1	13.807	10.5324
11	S r - K $\alpha$	14.126	15.3929
12	Y - K $\alpha$	14.911	1.7650
13	Z r - K $\alpha$	15.720	33.5680

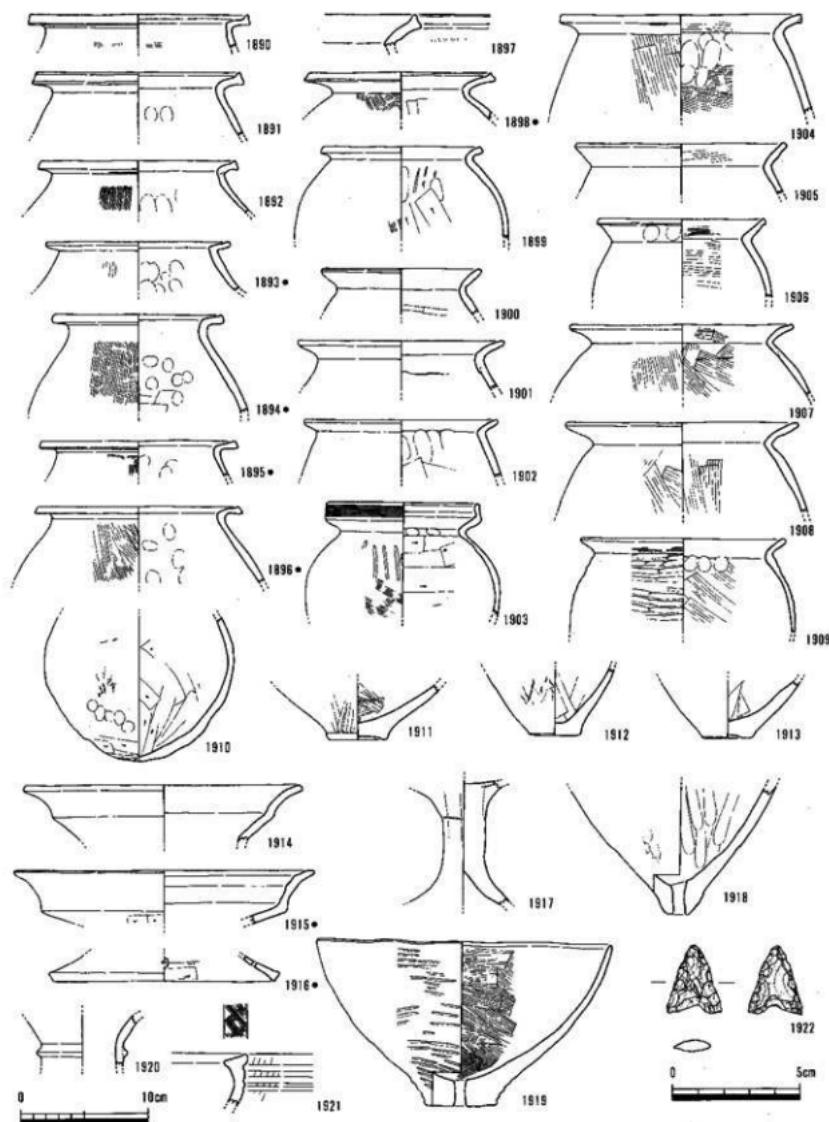


第241図 蛍光X線分析



第①層・Ⅰ期

第242図 SRIV02出土遺物実測図(1/4)①



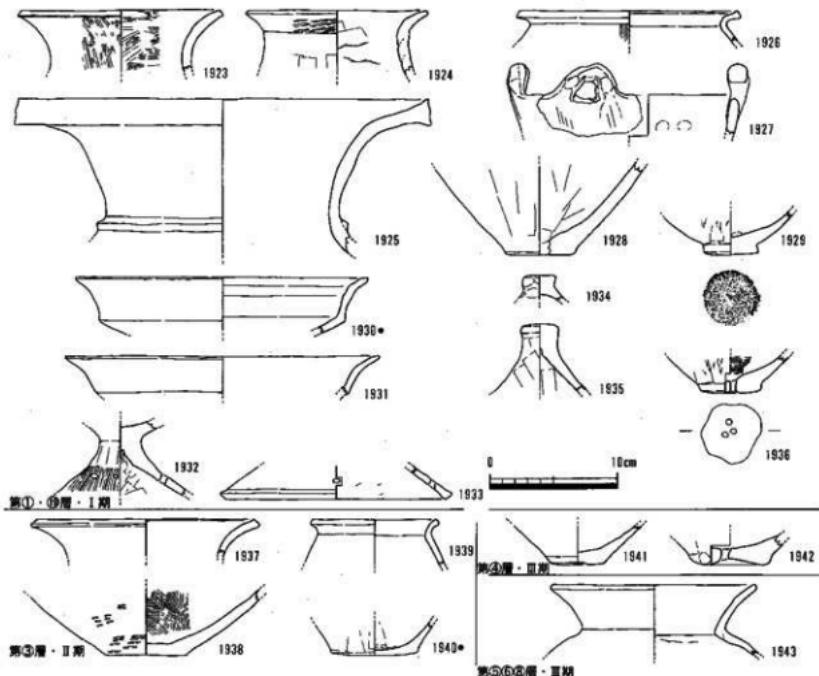
第243図 SRIV02出土遺物実測図(1/4)②

VI・VII期は砂混り粘質土層を中心とするもので、SRIV02の両肩部で確認できる。これらの層からは多量の遺物が出土しており、器種は壺・甕・鉢・高杯などが出土している。甕の口縁端部はやや拡張させるものが多く、鉢も出土量が減少する。第259図2303は鉢で、底部はヘラ削りにより丸底化していることから弥生時代後期終末の様相を示しているが、量的にはこの1点のみで混入の可能性もある。

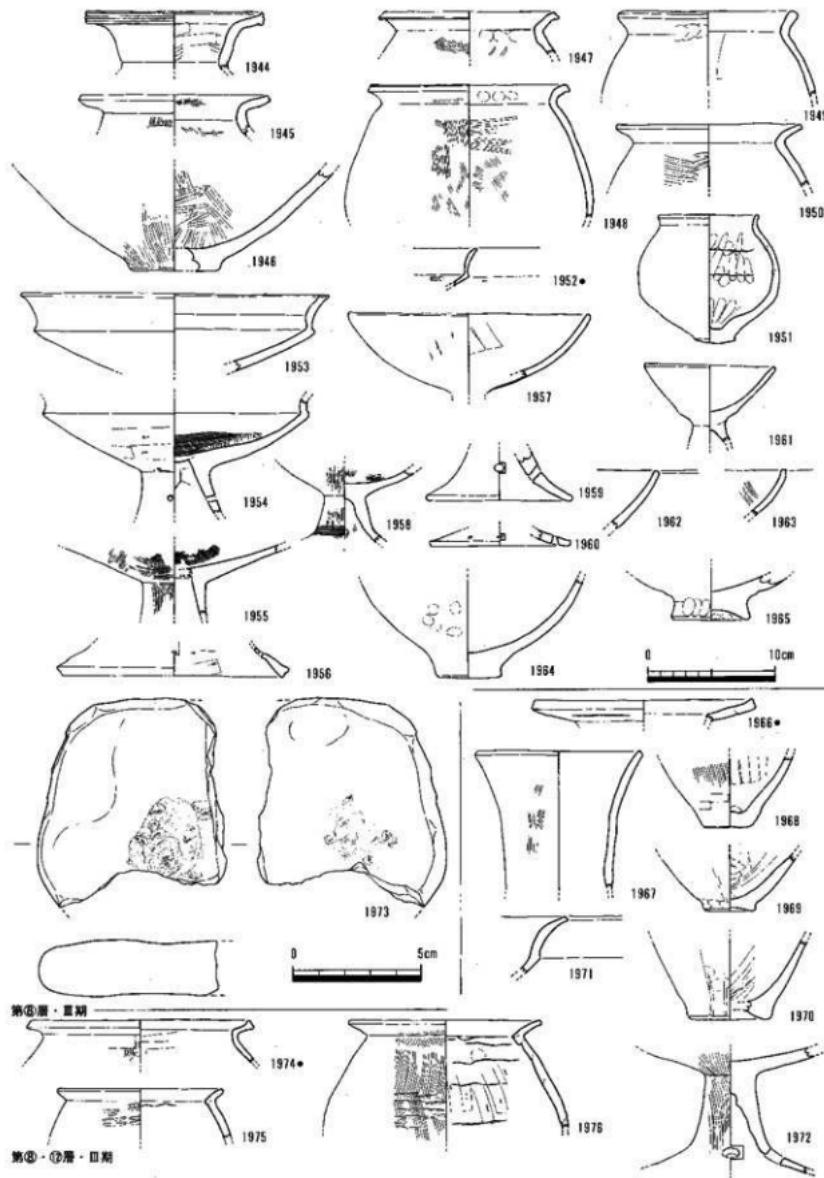
時期は弥生時代後期後半で、下川津II・III式に併行するものと考える。

VII～XI期は砂層と粘質土層・粘土層の互層で、SRIV02の最下層に位置する。全体的にみるとあまりVI・VII期と同じ器種組成で、それぞれの形態もあまり差がないと考える。鉢も多量に出土しており、小型・中型・大型のものがみられる。第264図2417のように底部にヘラ削りが施されているものもあり、やはり時期差が確認できる。

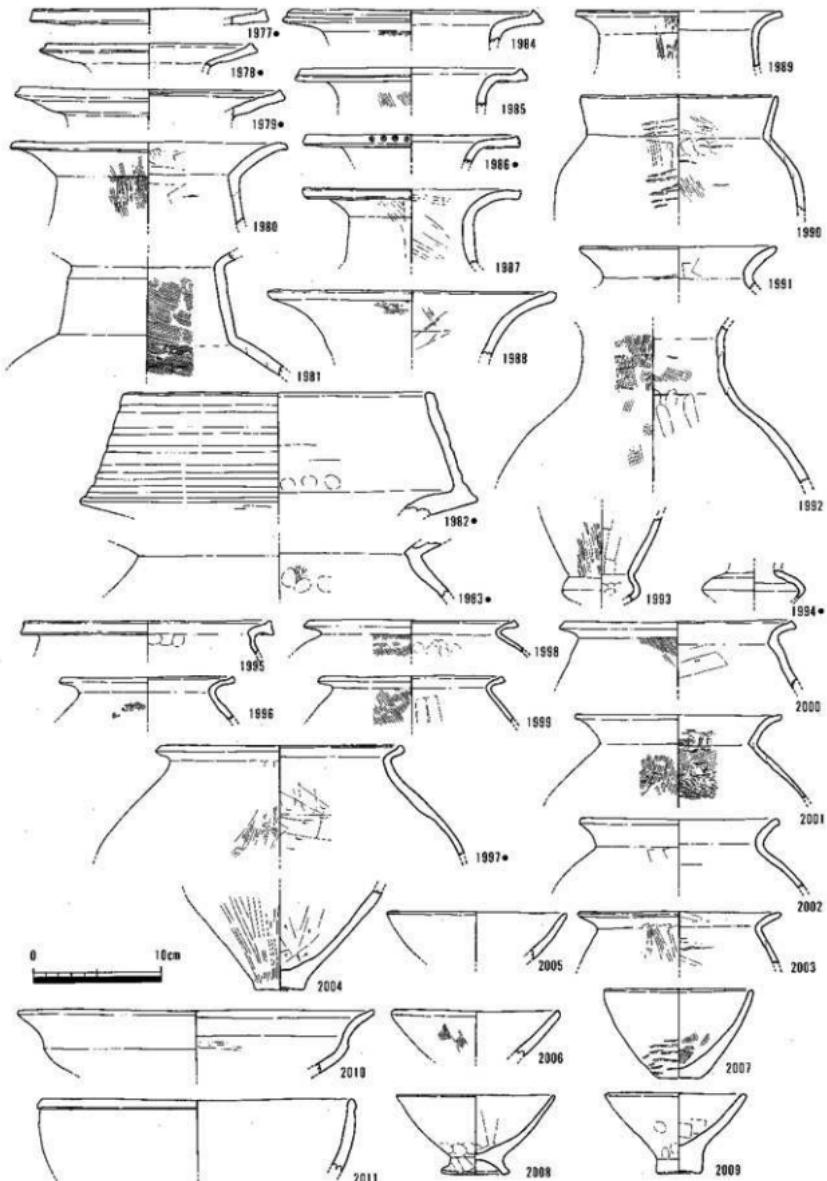
自然流路ということで出土遺物にはかなり時期幅があり、明確な時期を決定できない。しかし概ね第三調査区で設定した遺構II～V期と同時期のもので、第四調査区で検出した遺構との同時性を考えるのに貴重な資料と考える。

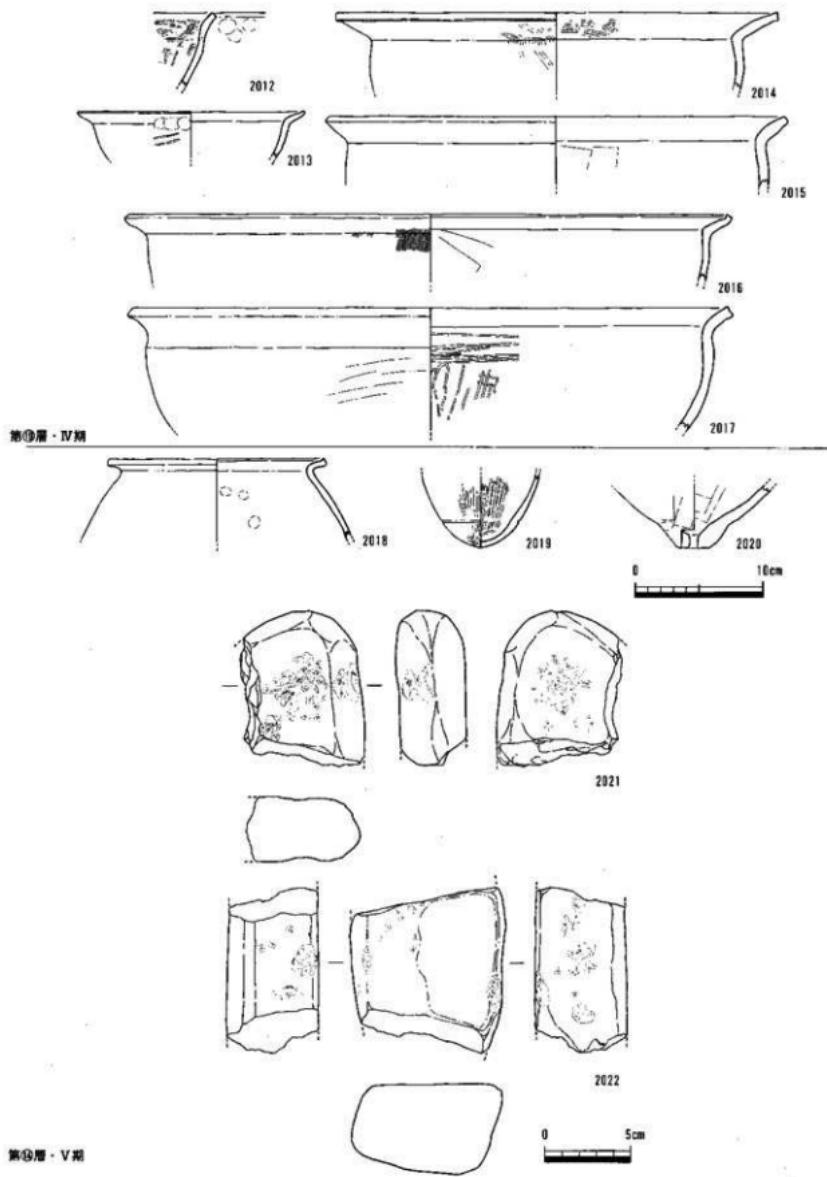


第244図 SRIV02出土遺物実測図(1/4)③

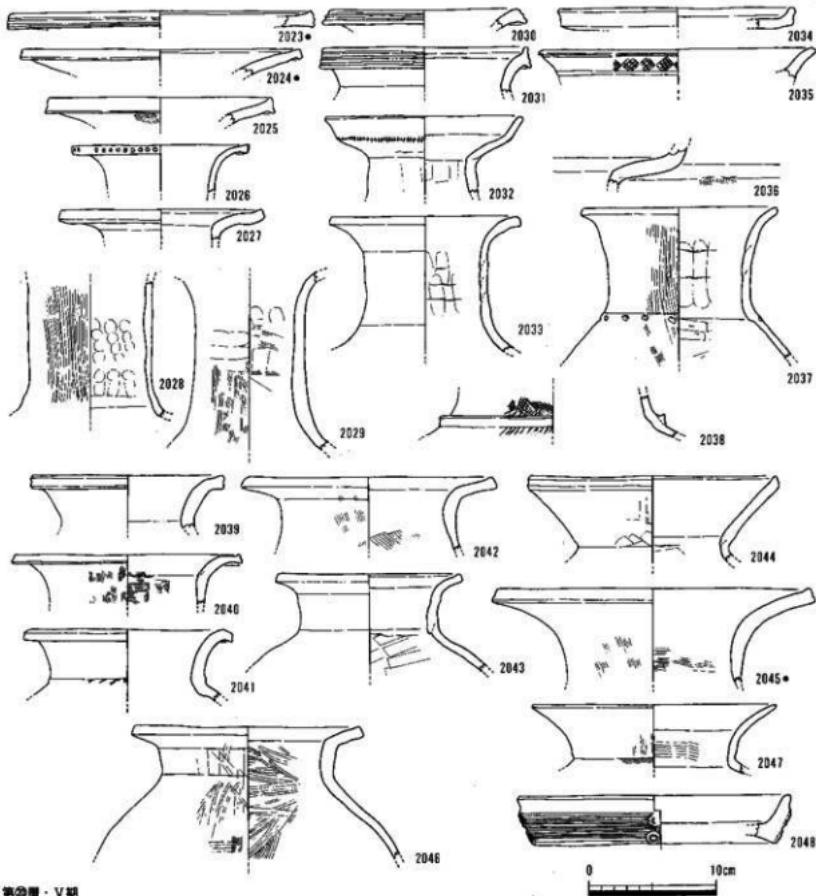


第245図 SRIV02出土遺物実測図(1/4)④

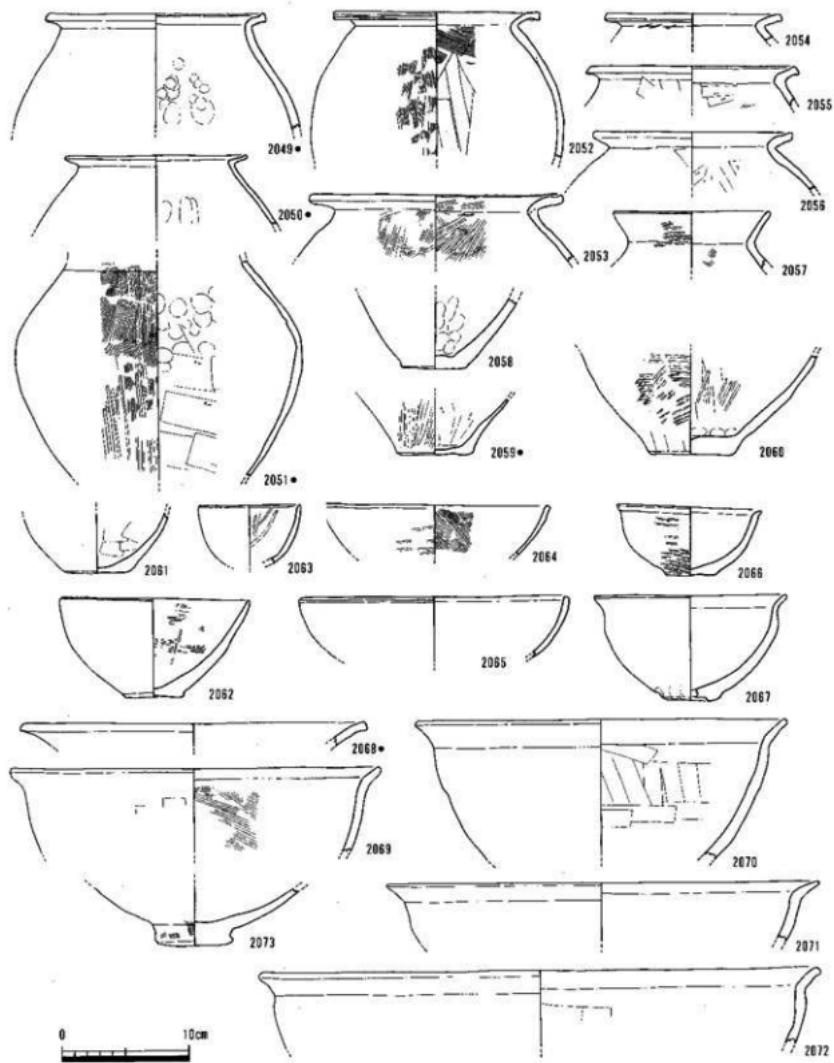




第247図 SRIV02出土遺物実測図(1/4)⑥

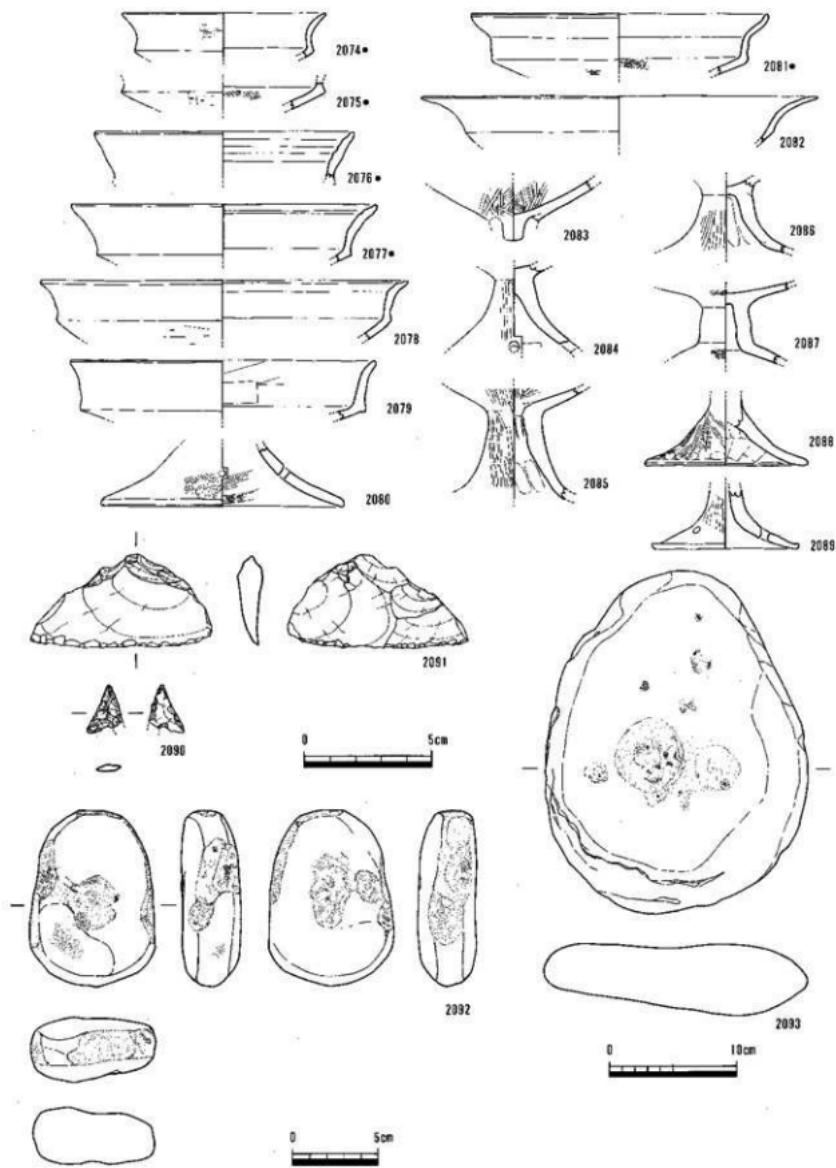


第248図 SRIV02出土遺物実測図(1/4)⑦



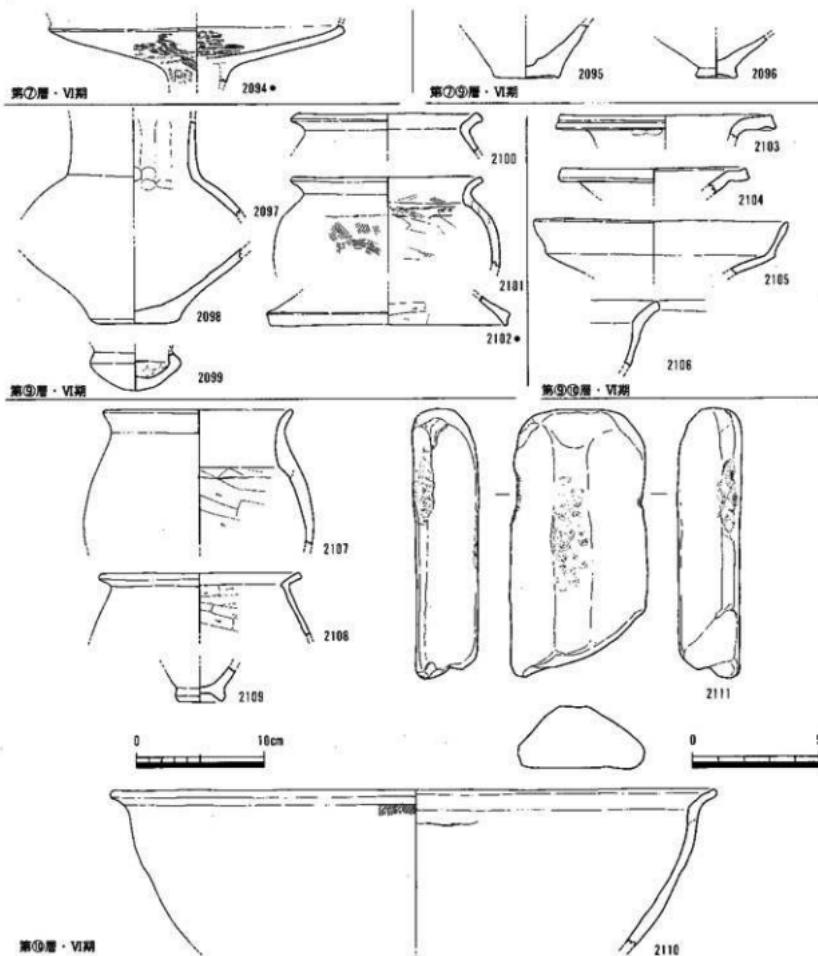
第249図 SRIV02出土遺物実測図(1/4)⑧

第249図 SRIV02出土遺物実測図(1/4)⑧

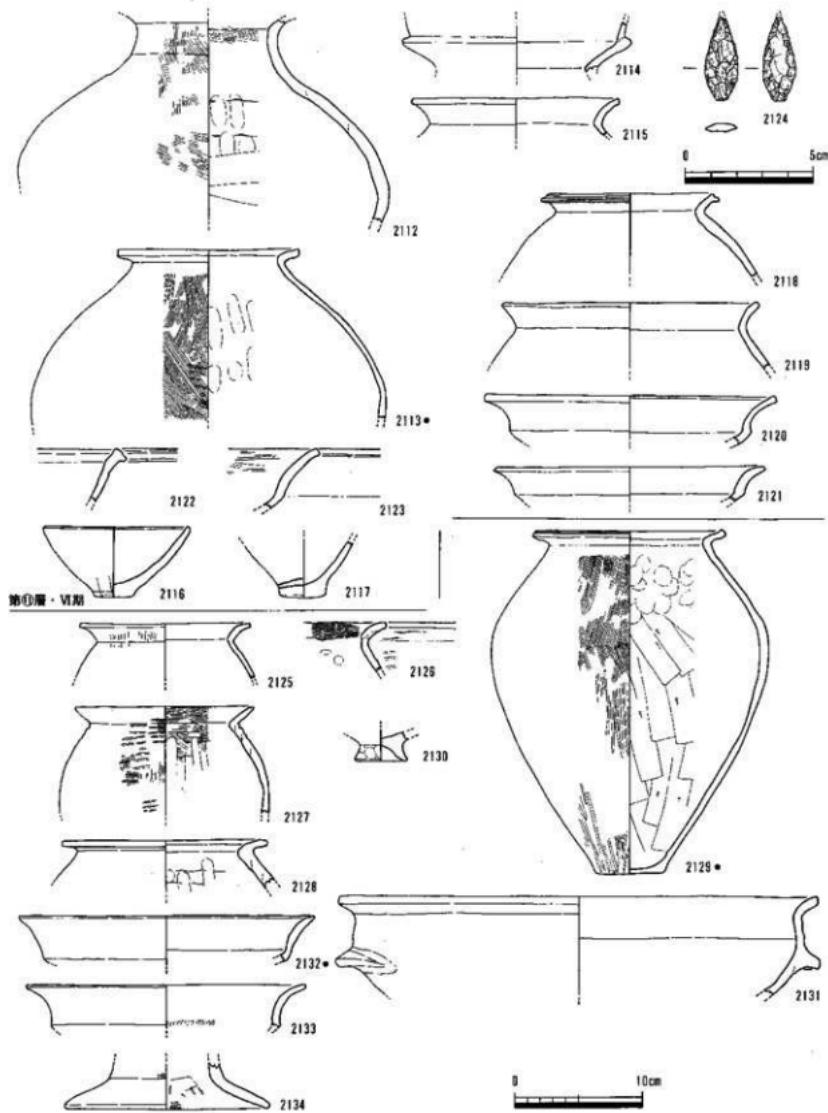


第三層・V期

第250図 SRIV 02出土遺物実測図(1/4)⑨

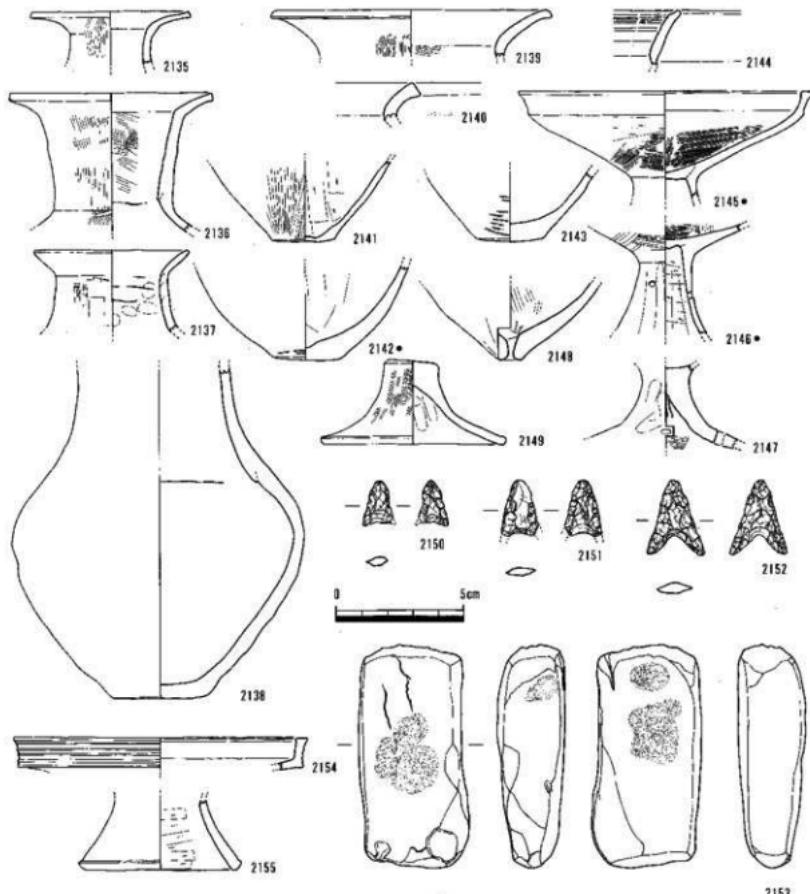


第251図 SRIV02出土遺物実測図(1/4)⑩

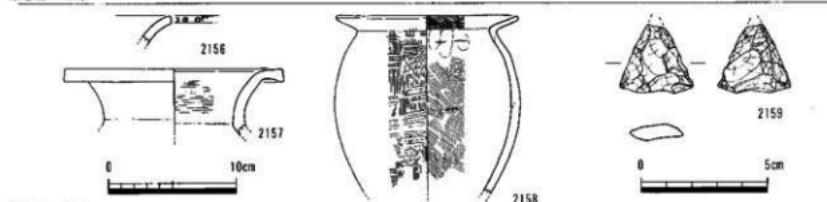


第③層・VI期

第252図 SRI V02出土遺物実測図(1/4)①

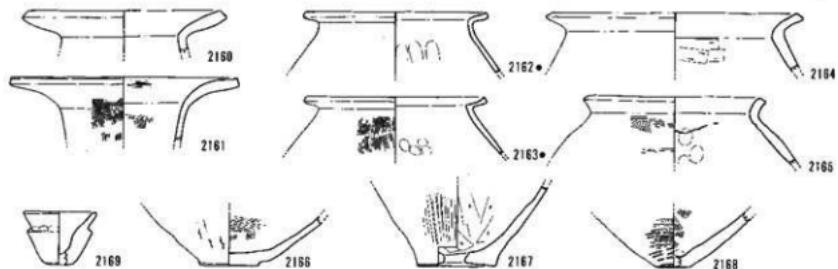


第⑤層・VI期

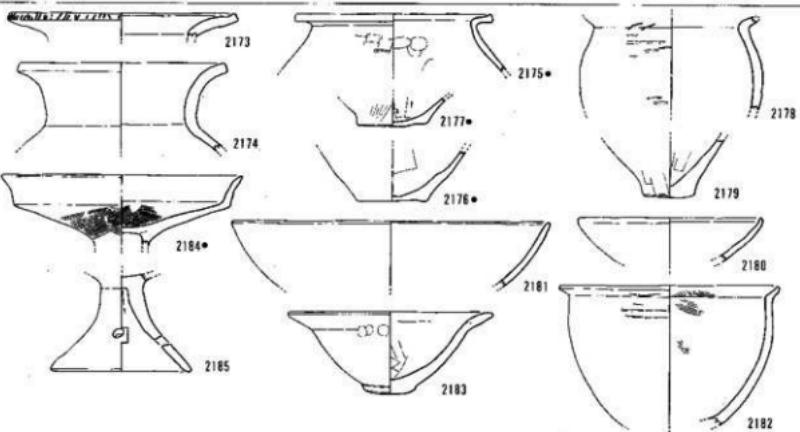


第⑥層・VI期

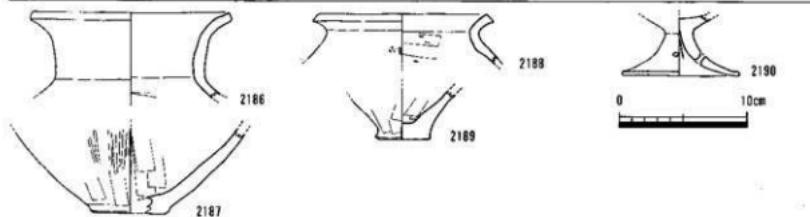
第253図 SRIV02出土遺物実測図(1/4)②



第⑤⑥層・VI期

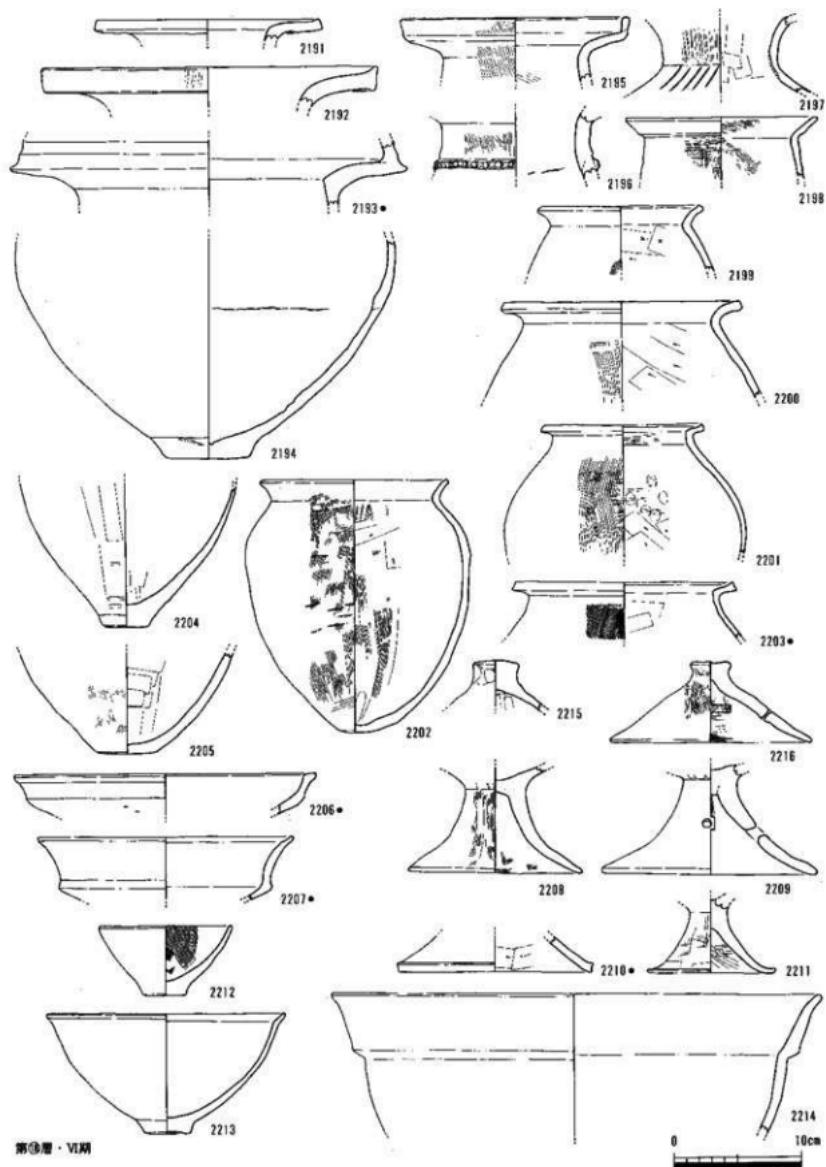


0 10cm



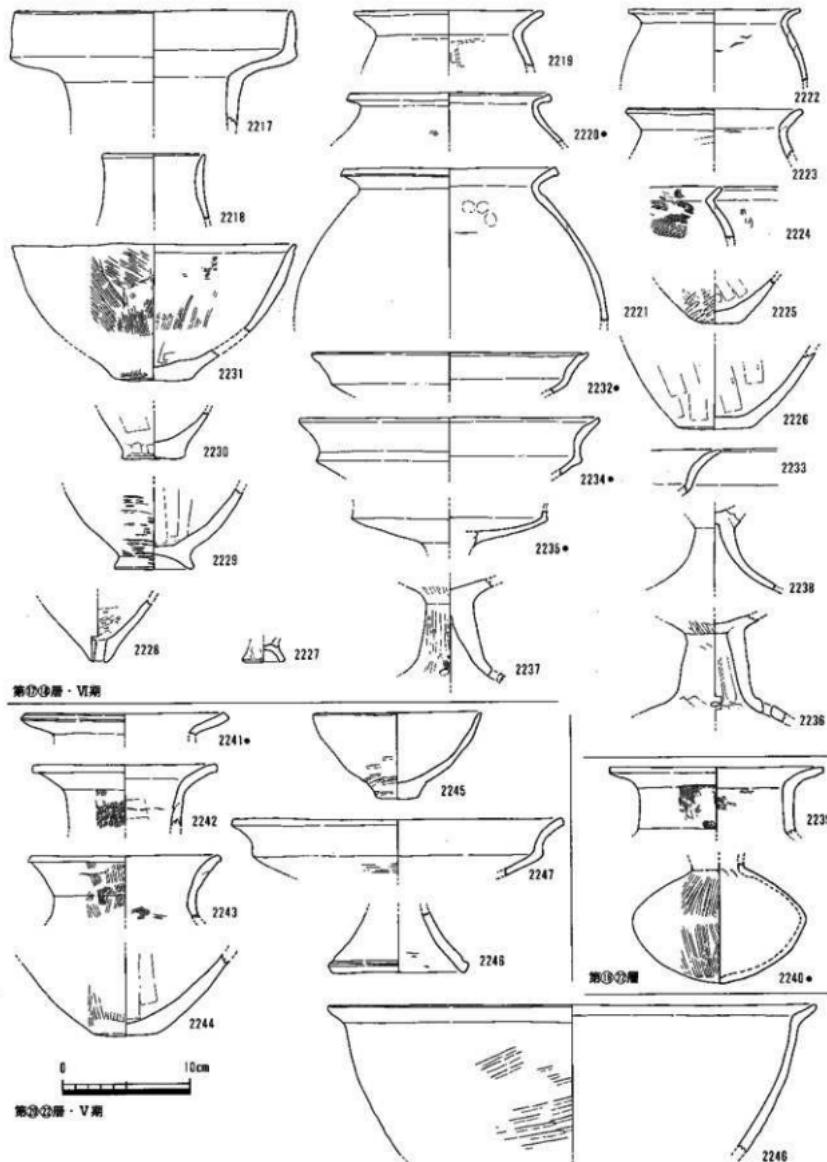
第⑤⑥層・VI期

第254図 SRIV02出土遺物実測図(1/4)⑬

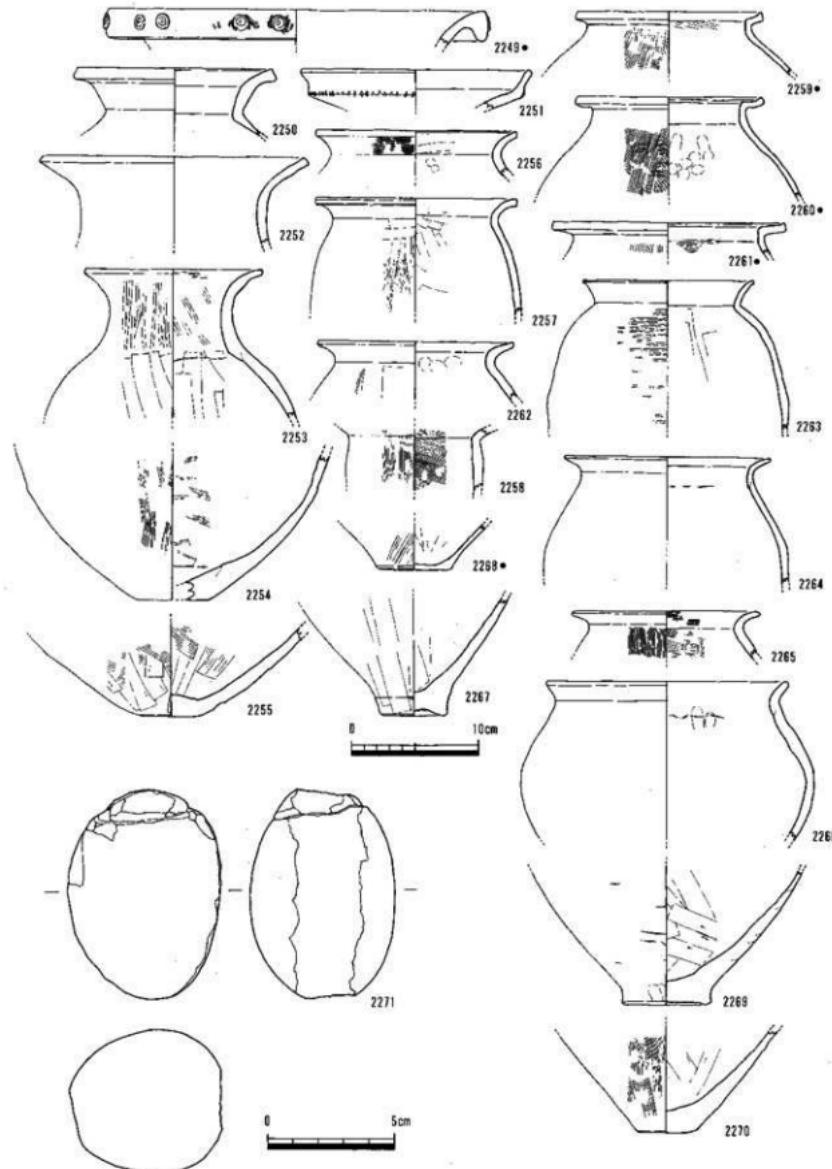


第⑤層・VII期

第255図 SRIV02出土遺物実測図(1/4)⑩

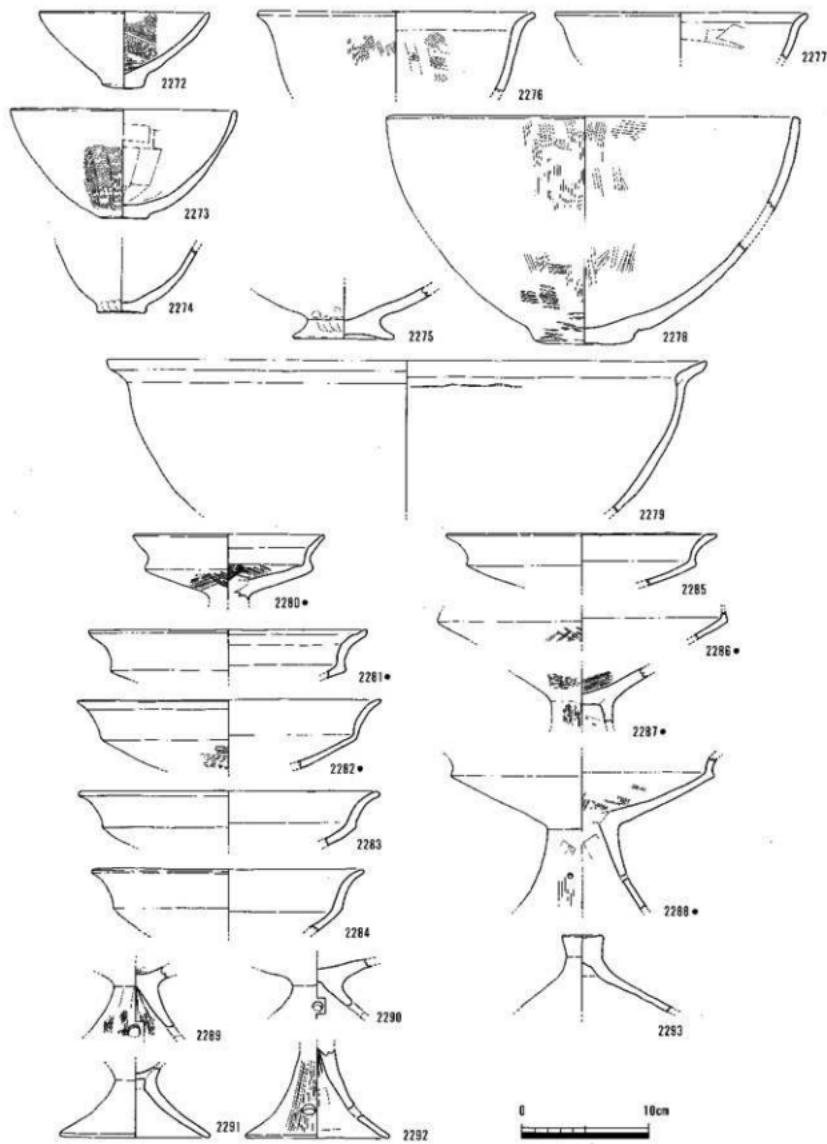


第256図 SRIV02出土遺物実測図(1/4)⑯



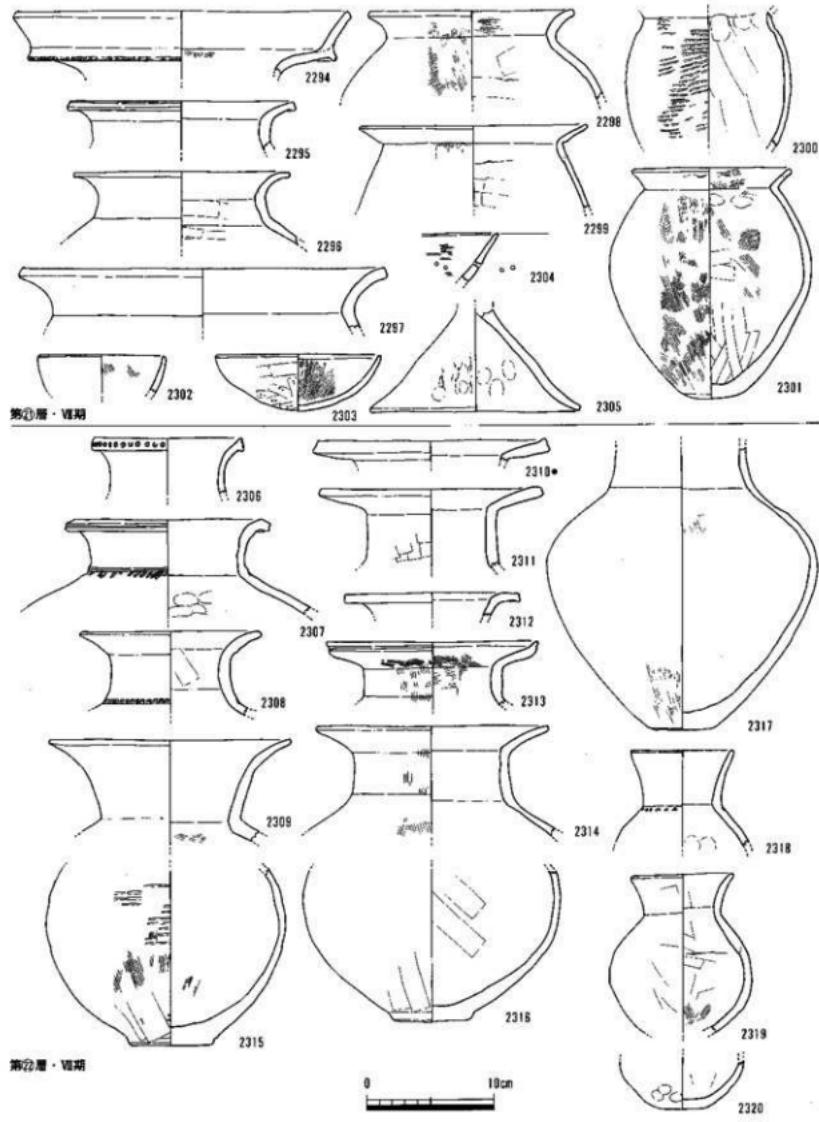
第⑤—⑧層・VI期

第257図 SRIV 02出土遺物実測図(1/4)⑯

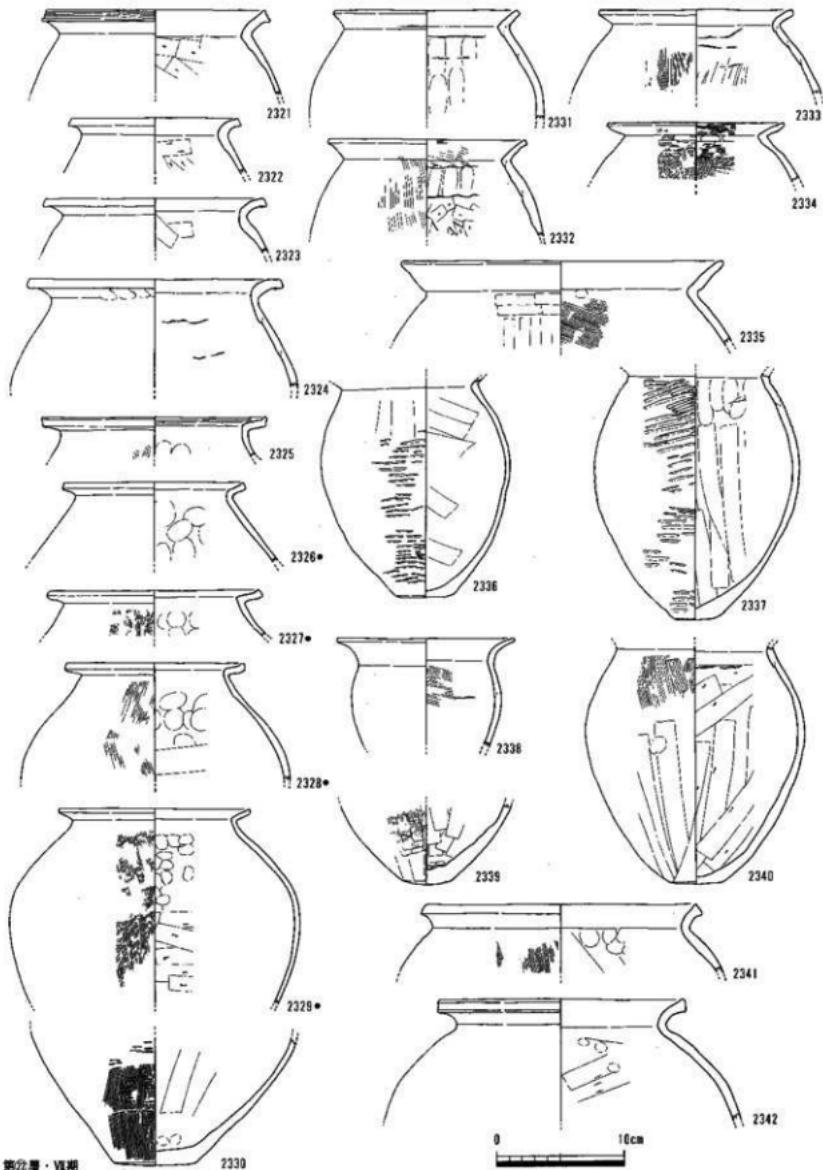


第⑤～⑩層・VI期

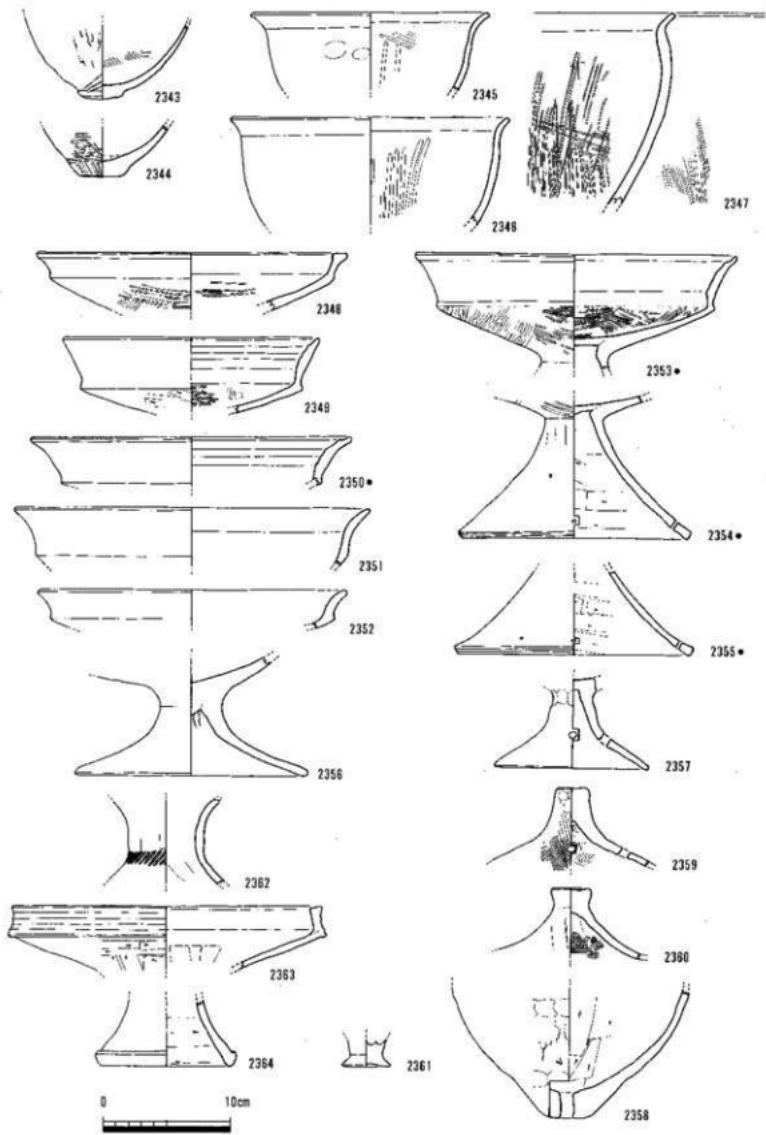
第258図 SRIV02出土遺物実測図(1/4)⑦



第259図 SRIV02出土遺物実測図(1/4)⑩

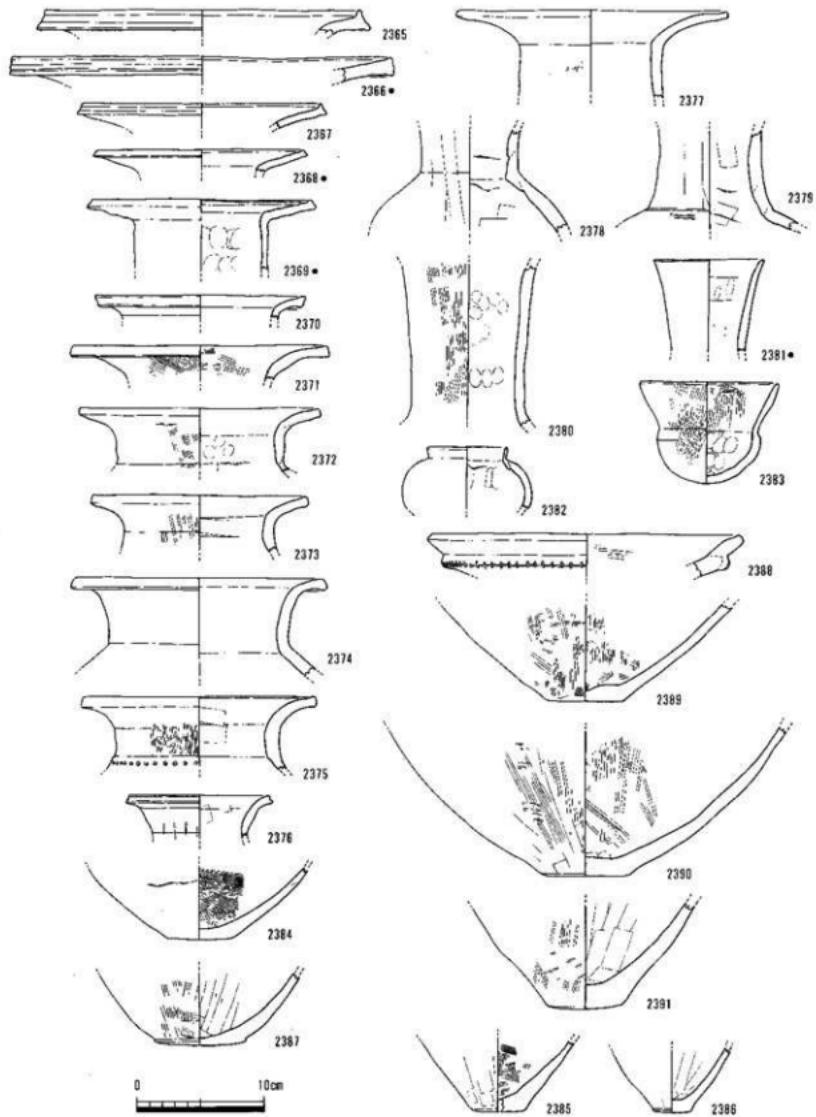


第260図 SRIV02出土遺物実測図(1/4)①



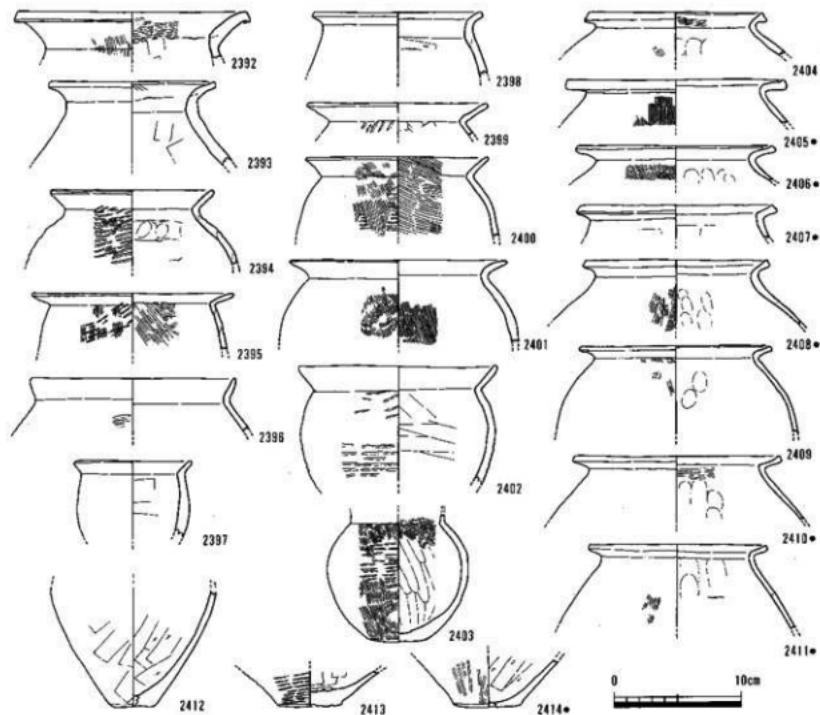
第22層・VII期

第261図 SRIV02出土遺物実測図(1/4)②



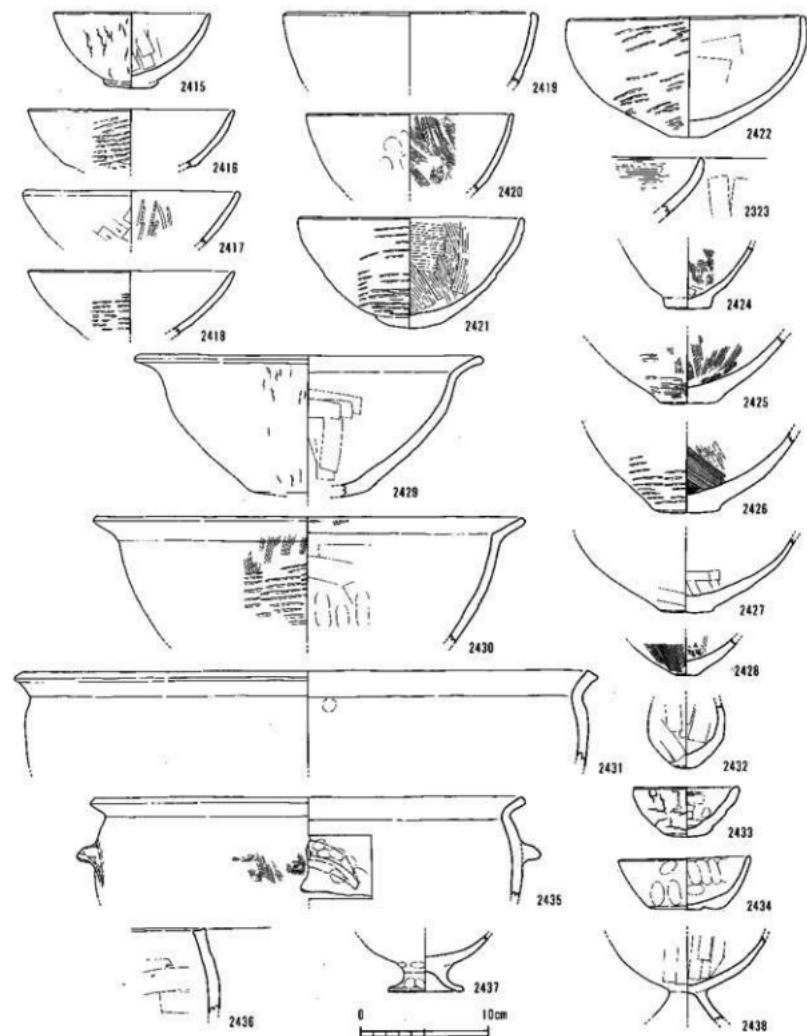
第262図

SRTV02出土遺物実測図(1/4)②



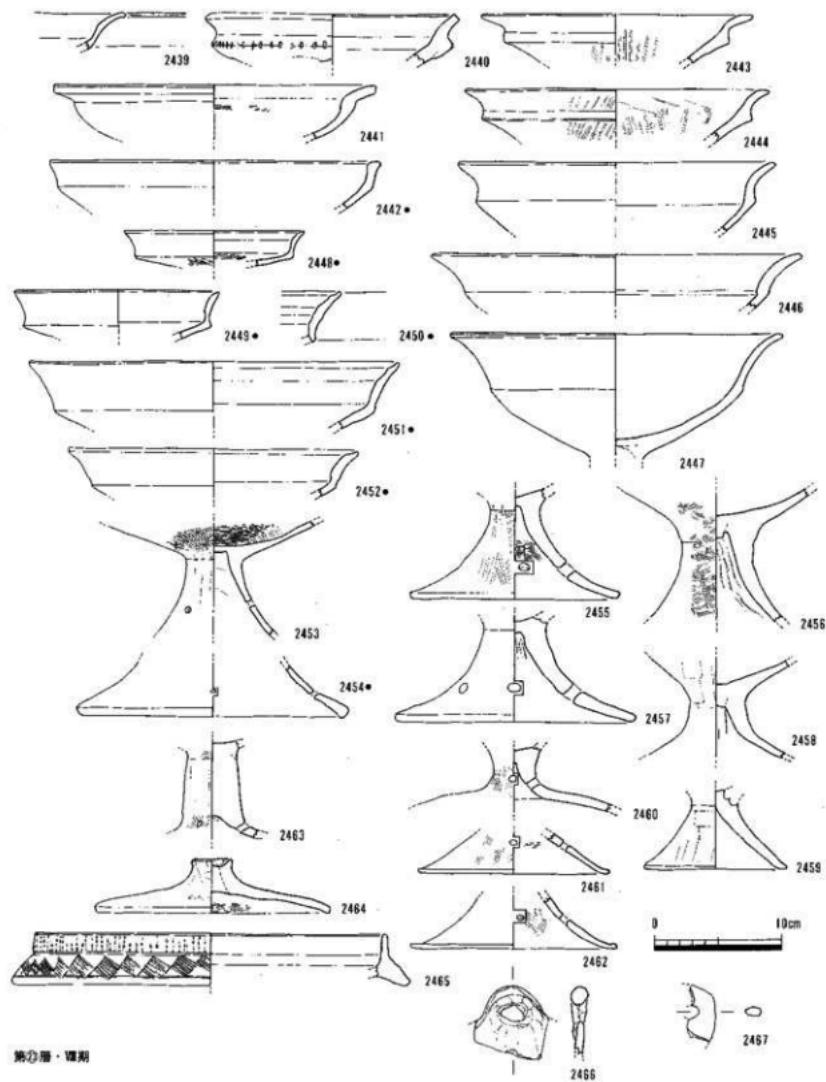
第263図

第263図 SRIV02出土遺物実測図(1/4)②

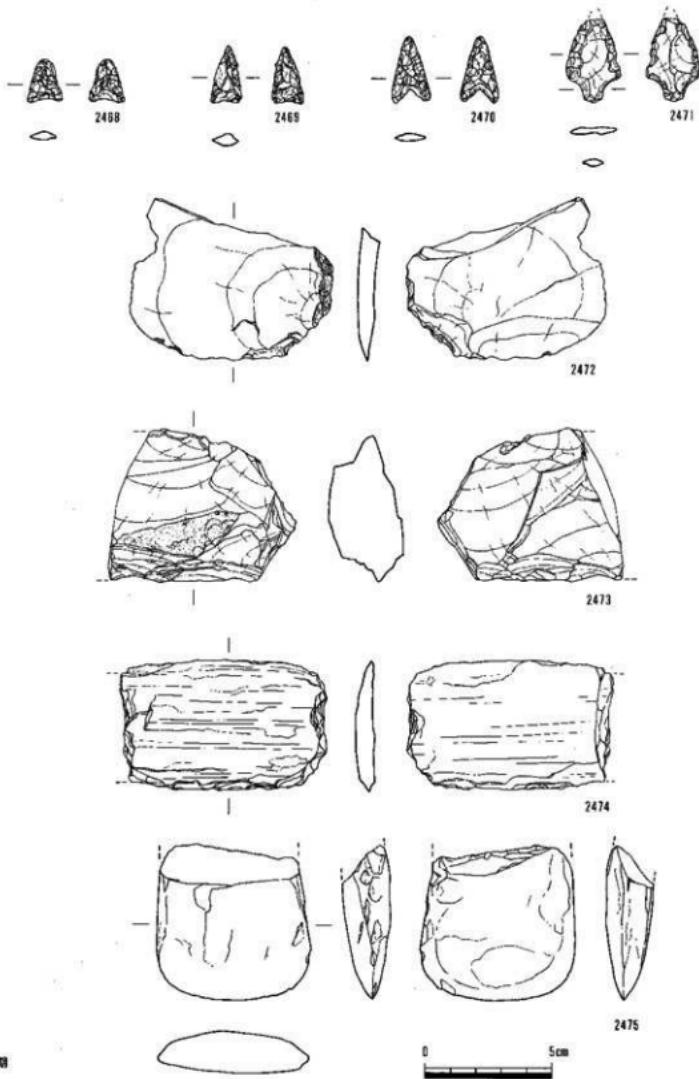


第2層・直期

第264図 SRIV 02出土遺物実測図(1/4)②

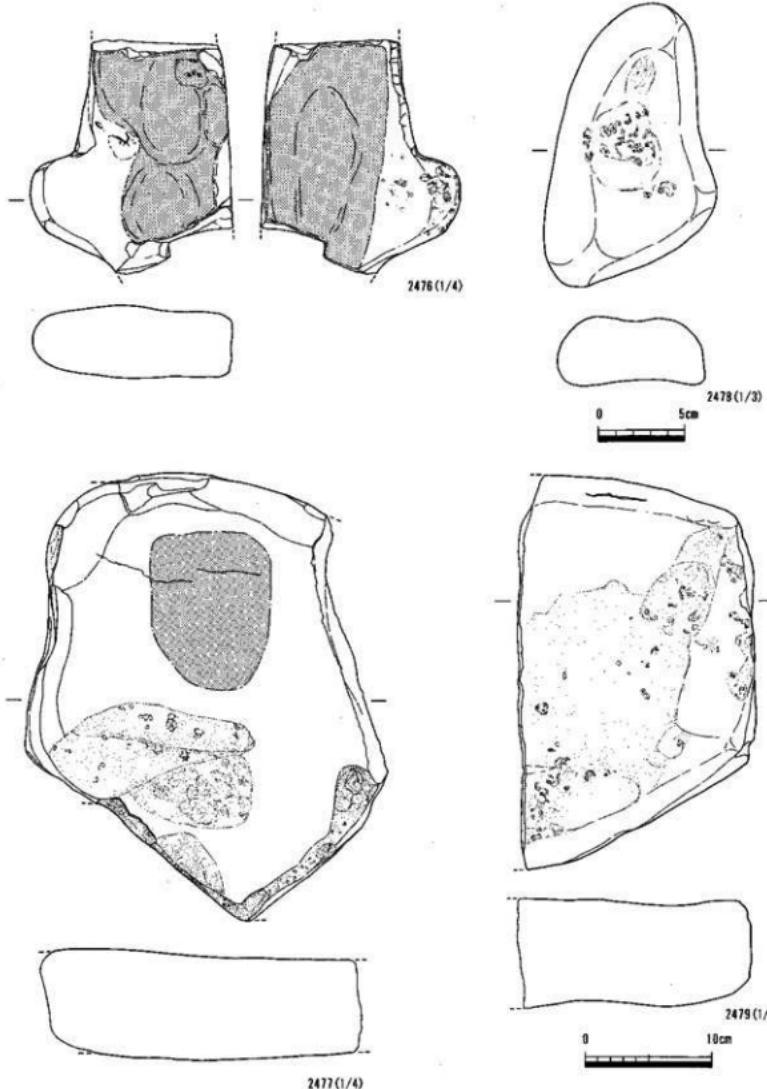


第265図 SRIV02出土遺物実測図(1/4) ④



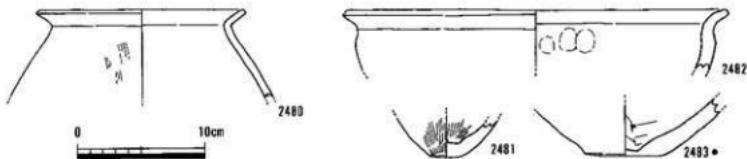
第266図 SRIV02出土遺物実測図(1/2) ㉕

第2層・初期



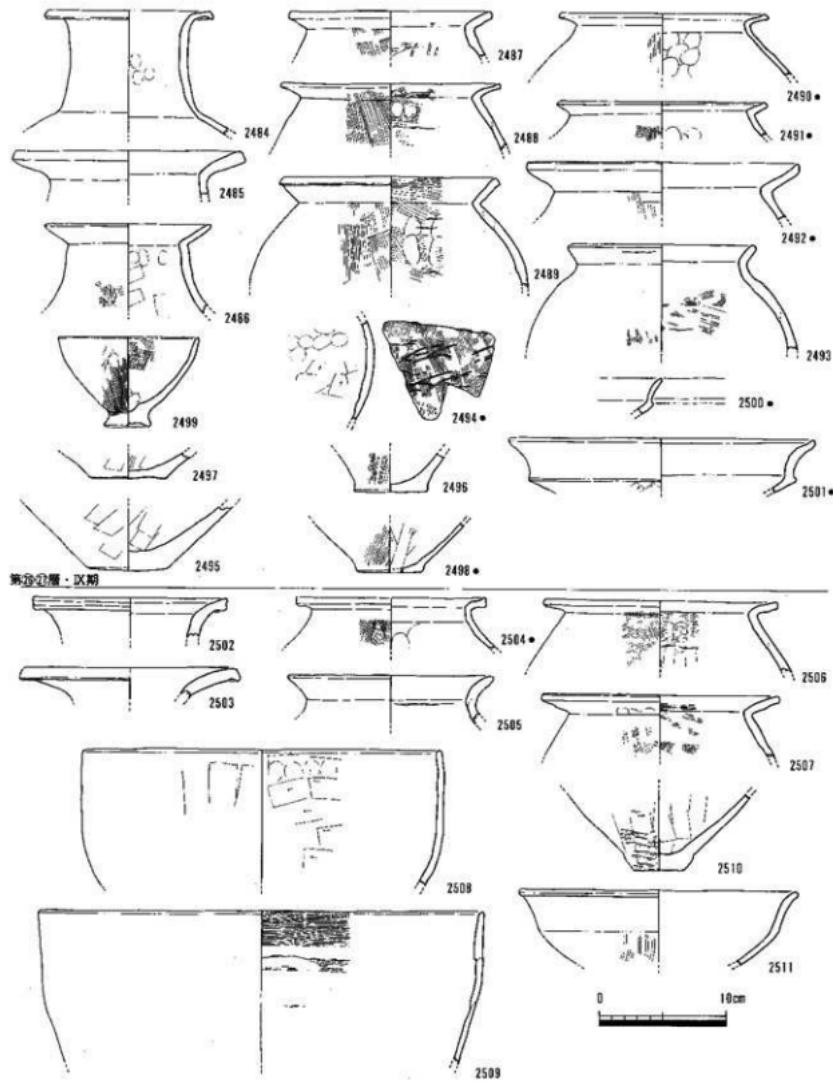
第2層・復期

第267図 SRIIV02出土遺物実測図(1/4) ②

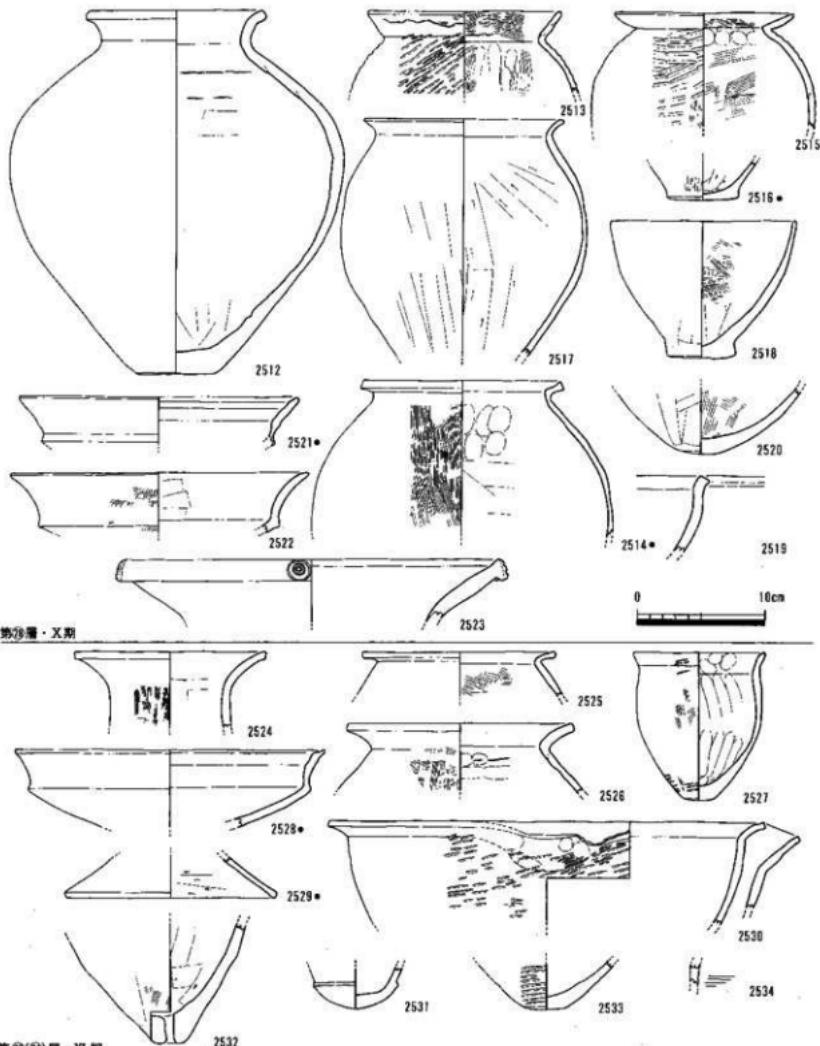


第六章・VI期

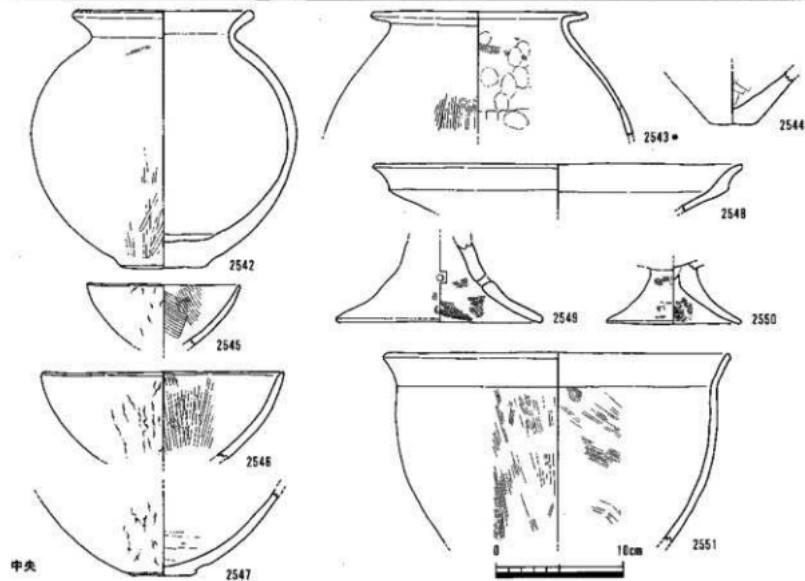
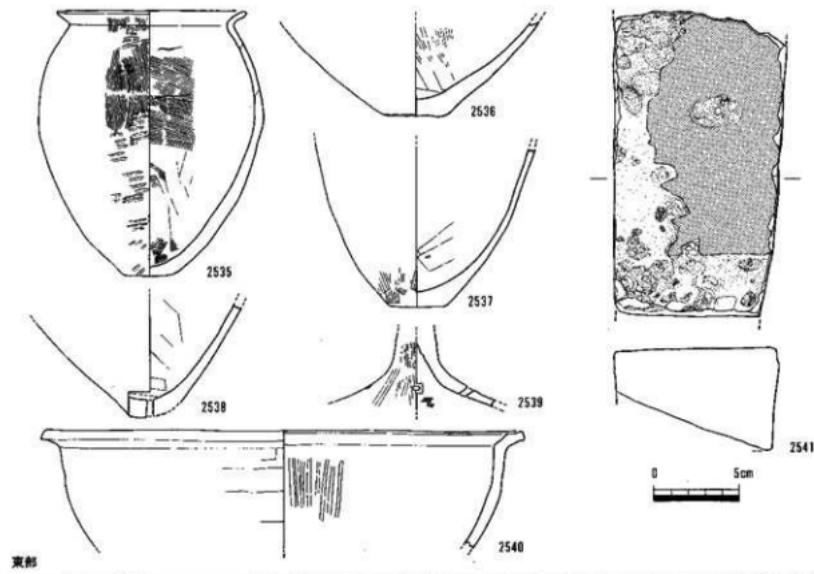
第268図 SRIV02出土遺物実測図(1/4)②



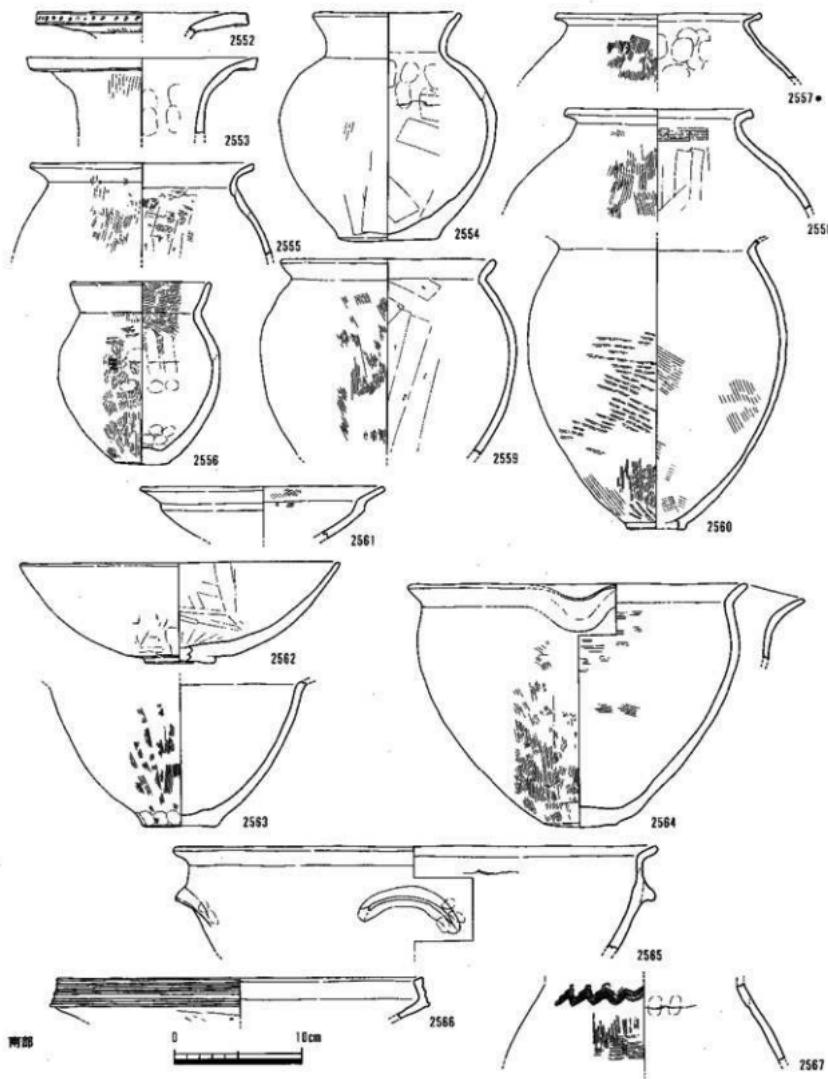
第269図 SRIV02出土遺物実測図(1/4) ②



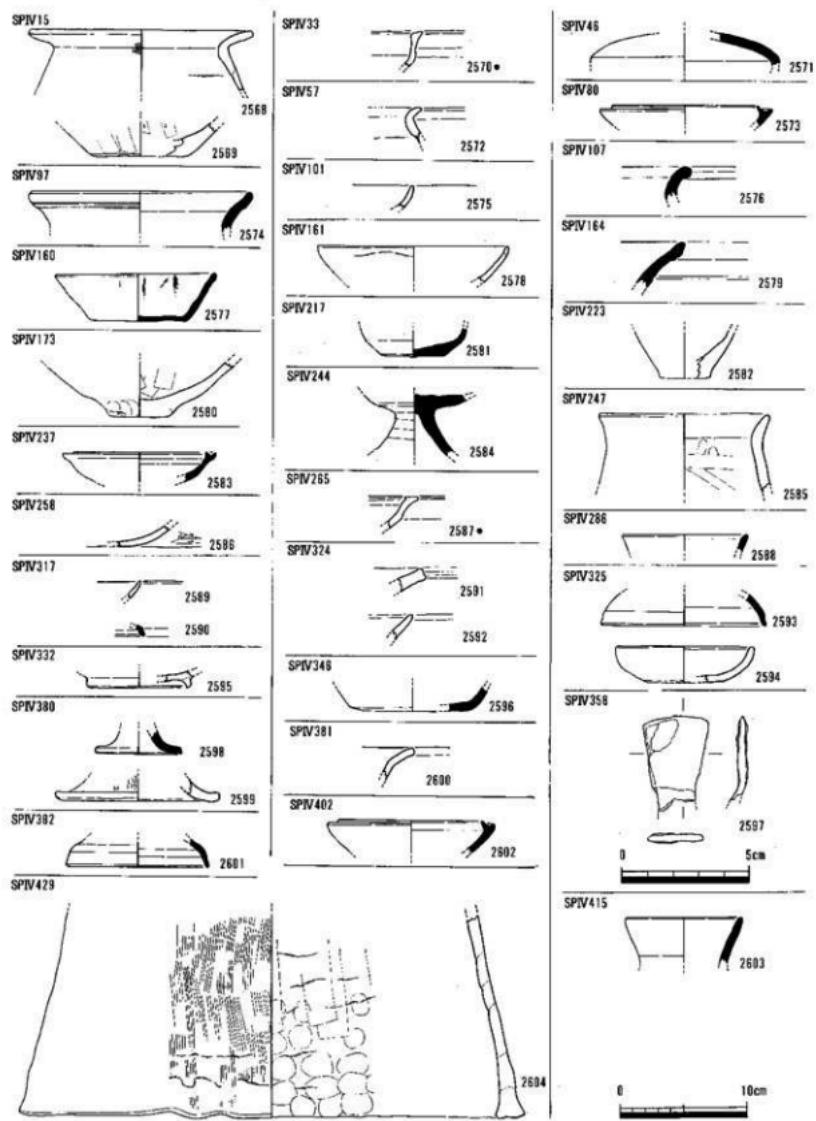
第270図 SRIV02出土遺物実測図(1/4)②



第271図 SRIV02出土遺物実測図(1/4)⑩



第272図 SRTV02出土遺物実測図(1/4)①



第273図 柱穴出土遺物実測図(1/4)①

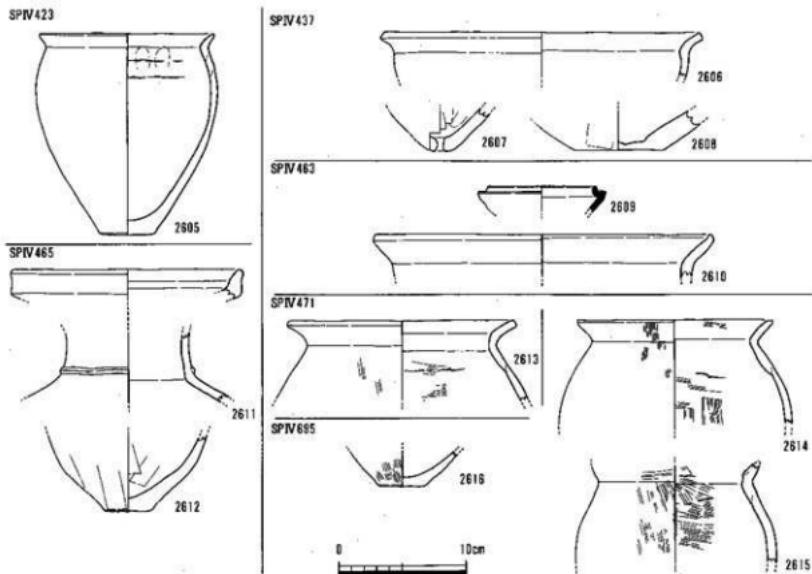
### 柱穴出土遺物

第IV調査区で検出した柱穴はそのほとんどが第1遺構面からのものである。そのため出土遺物には須恵器・土師器・土師質土器が多く確認できる。一方これら以外には弥生時代後期の遺物を出土する柱穴で、調査区北部や第2面での検出である。

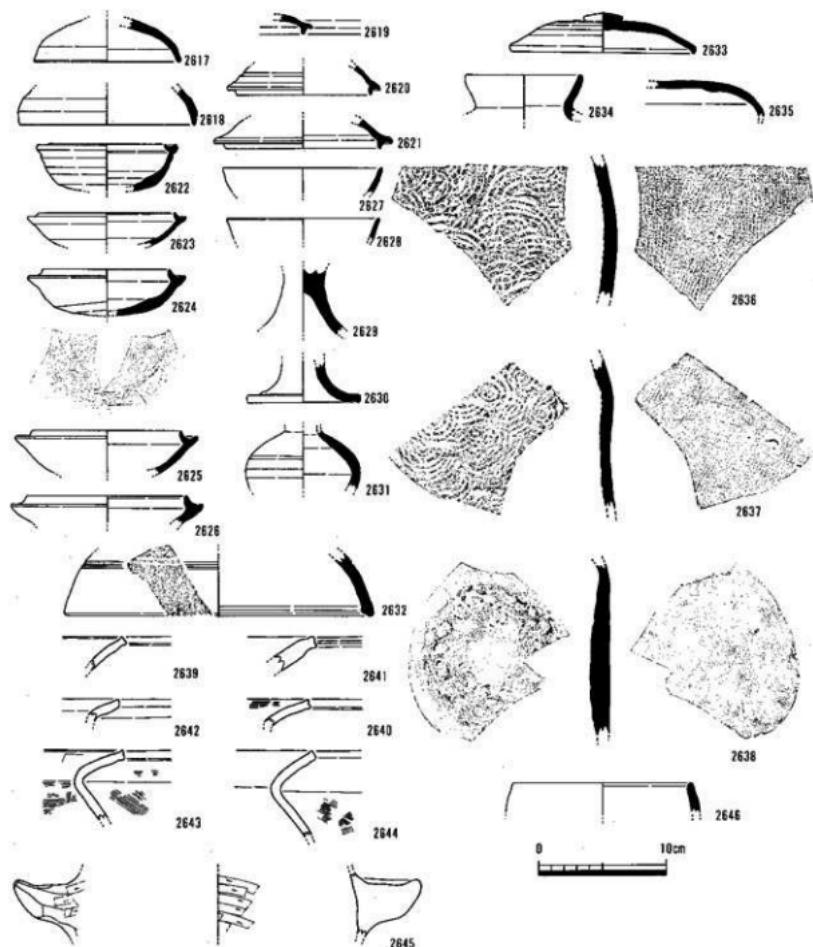
第1面検出の柱穴出土遺物には7世紀中葉、7世紀末～8世紀前半、9世紀末～10世紀前半の概ね3時期に分けられる。ただし7世紀末～8世紀前半及び9世紀末～10世紀前半ものは少なく、7世紀中葉の柱穴が主体を占める。

出土遺物は須恵器壺身・壺蓋を中心とし、壺身はかなり立ち上がりが退化するもので、中には受け部と差がないものがある。土師器壺は底部外面に不定方向の手持ちヘラ削りが施されているものがあり、小型のものも認められる。

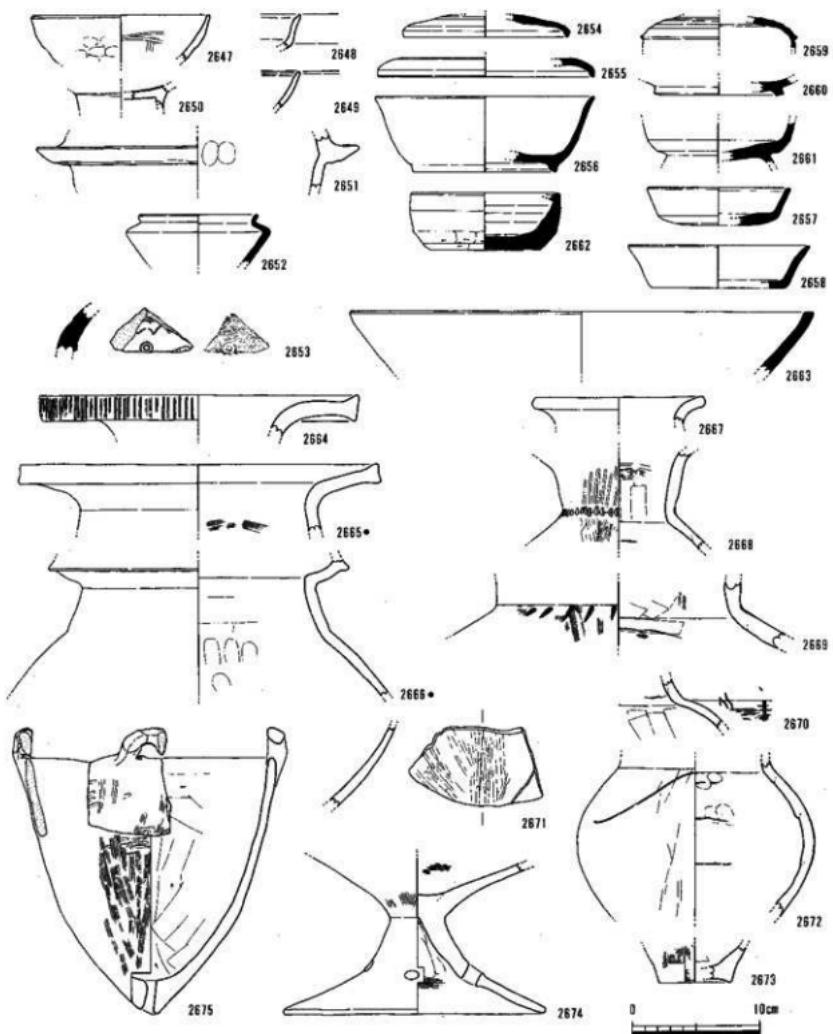
SPIV429出土の土師質土器窓は底部の出土で、外面に縦方向の刷毛目、内面に粘土紐の接合痕・指頭痕が顕著に認められる。SPIV358出土の鉄製品は鐵と考えられ、鐵身部が逆台形状を呈する。



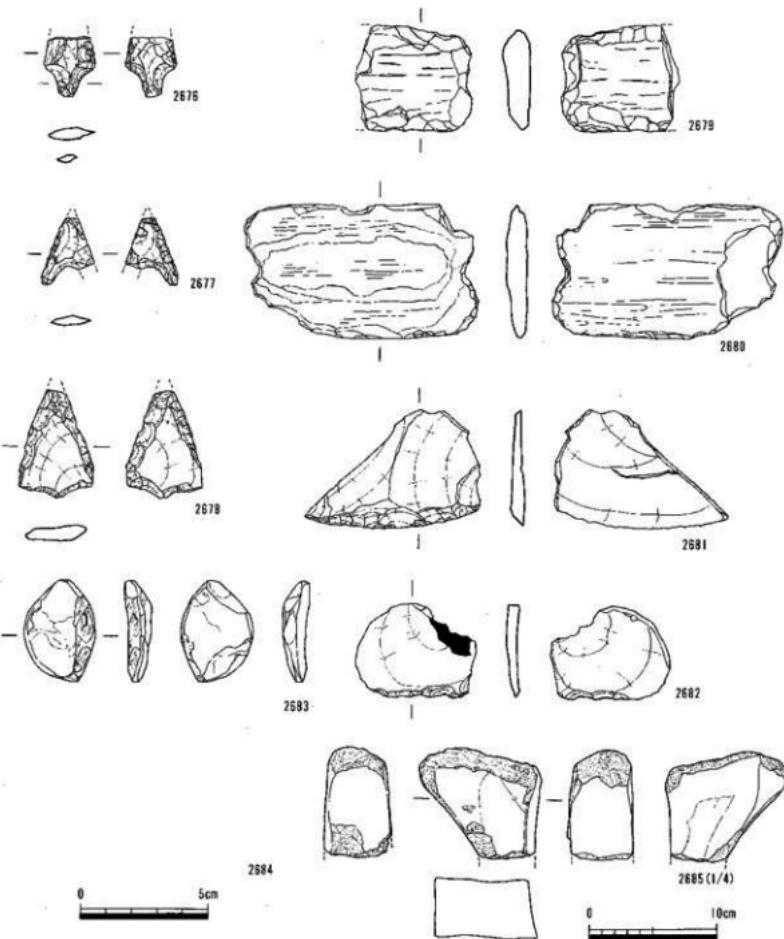
第274図 柱穴出土遺物実測図(1/4)②



第275図 包含層出土遺物実測図(1/4)①



第276図 包含層出土遺物実測図(1/4)②



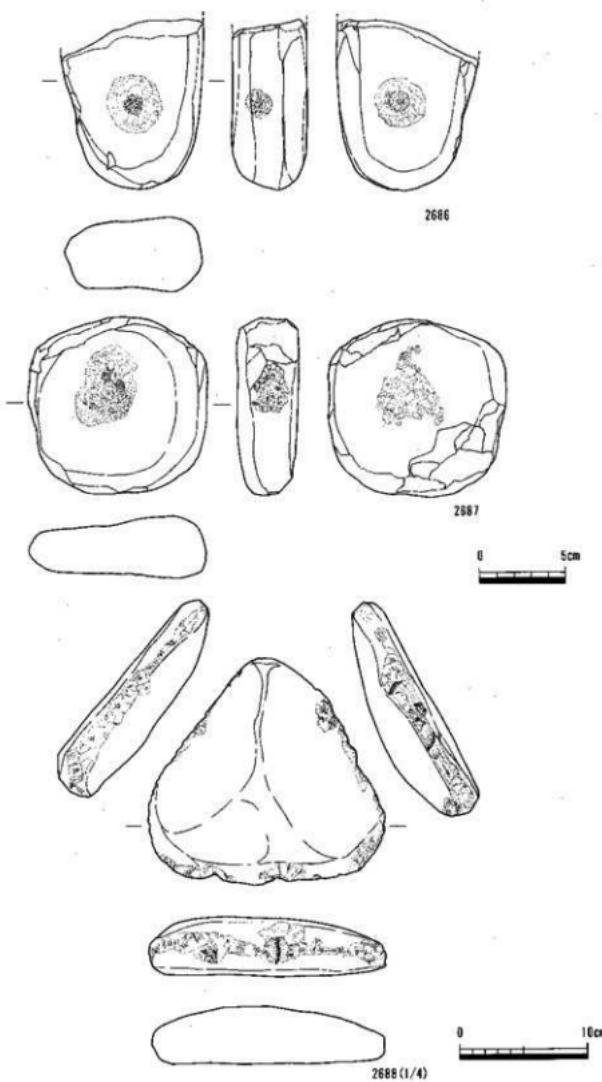
第277図 包含層出土遺物実測図(1/2)③

#### 包含層出土遺物

第275～278図は包含層出土遺物である。

出土遺物には弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、土師質土器、輸入磁器、石製品が出土している。弥生土器は壺、高壺、甑などが出土しており、時期は後期後半である。須恵器は須恵器壺身、壺蓋、高壺、高台付壺、壺などが出土しており、時期は7世紀～8世紀にかけてのものである。土師器は壺で、時期は8世紀のものである。瓦器は椀で、口縁端部内面に沈線が認められる。12世紀頃の楠葉産瓦器碗と考えられる。土師質土器は甕で、口縁部が僅かに上下に拡張し、面を持つ。第276図2650は白磁

様II類である。石製品には石鏃・石庖丁・くぼみ石・砥石が出土している。第277図2684は全面に摩滅痕が認められ、製作途中の石製品である。材質はおそらくヒスイ製と考えられ、勾玉の未製品と考えられる。



第278図 包含層出土遺物実測図(1/3)④

## 第IV区調査区 小結

第IV調査区では弥生時代・古代・中世の遺構を検出した。検出面は古代の第1面と弥生時代の第2面の2つ面があり、概ね4つの時期に分けられる。

第1面で検出した遺構は中世も若干含まれるが、そのほとんどは古代、それも7世紀を中心とするもので、遺構の切り合いと遺構埋土の土色・土質及び出土遺物で細分すると7世紀中葉（前半）と7世紀中葉（後半）～8世紀初の2つに分けられ、前者を古代I期、後者（後半）を古代II期とする。またこれ以降の時期として古川の旧流路である自然流路の時期を古代～中世として1期設定し、弥生時代も含め合計4時期を設定した。

その結果が第279図の遺構変遷図である。

### 弥生時代

弥生時代の遺構は第2面で、竪穴住居跡26棟を中心に掘立柱建物、土壙墓（土器棺墓）、土坑、溝等を検出した。これらの遺構は検出面が東から西方向に傾斜しており、遺構面全域に厚さ約1mほど堆積する洪水砂層によって削られているためにその残存状況は非常に悪い。

竪穴住居跡を検出した位置は概ね北部と南部に分かれている。

北部は東丘陵の先端が北西方向に延び、分岐した窪み部分に位置する。この部分は現道を挟み、北側に第V調査区があり、そこで検出した弥生時代の遺構との関係が考えられるが、古代～中世のSRIV01によって北部が削られていることから判然としない。検出した遺構はかなり削平を受け、壁溝と主柱穴しか残存していないが、復元すると円形の竪穴住居が2棟確認でき、さらに丘陵際（奥部）高所に土壙墓・土器棺墓が検出されている。これらの土壙墓・土器棺墓は弥生時代後期終末頃と考えられ、竪穴住居とは若干の時期差があるものと考えている。

南部は東丘陵西側裾部であり、竪穴住居を24棟検出しているが、古川の旧流路によってかなり削平を受けていることが解る。ここで検出した竪穴住居は全て平面形態が方形を呈し、かなり切り合いが確認できる。削平を受けているために出土遺物は少量であるが、そのなかでもSHIV20からはやや古く位置づけられる細頸壺が出土し、SHIV17からはやや新しく位置づけられる細頸壺が出土している。

のことからこの地区では方形の竪穴住居を主体とし、下川津I式併行期から下川津III式併行期まで連続と集落が形成されていたものと考えられる。

古代の遺構は7世紀を中心とするもので、7世紀中葉（前半）を古代I期とし、7世紀中葉（後半）から8世紀初を古代II期とした。

### 古代I期

古代I期の遺構は第1面、洪水砂層上で掘立柱建物を主として検出した。検出した掘立柱建物は4棟で、南北主軸が真北あるいは真北から2～3°程度西に向くものである。調査区南部で検出した掘立柱建物が重複することから、厳密に見ると同時期には3棟が建っていたものと考えられる。この内掘立柱建物SBIV03・04は「L」字配置を呈しており、SBIV04の東側桁辺を北部へ延長すると南北棟を呈するSBIV03の中心部分と合致し、それぞれが4.7mの間隔をあけて、規格的に整然と建てられていたと考えられる。

古代I期の掘立柱建物は意識的に南北に主軸を取っている。SBIV03・04の南北主軸は、東丘陵裾部と同じ方向をとり、地形に制約を受けているようにみえるが、調査区南部で検出したSBIV07・08が南

部の丘陵方向に合致せず、南北主軸を取っていることからこの古代Ⅰ期においては、主軸を南北にするという意識で掘立柱建物が建てられたと考える。

#### 古代Ⅱ期

古代Ⅱ期の遺構は古代Ⅰ期と同様に第1面、洪沢砂層上で竪穴住居と掘立柱建物を検出した。竪穴住居は4棟で、南北主軸が概ね真北を向くもの(SHV02～04)と30°程度西を向くもの(SHV01)がある。SHV01は丘陵裾部と同じ方向を向くことから地形に制約されているものと考えられ、また後述する掘立柱建物も同様に地形に制約を受けた建物主軸になっている。SHV02はSBIV04とほぼ同じ場所で重複している。この時期差が古代Ⅰ期とⅡ期の差である。

掘立柱建物は北部と南部で合計4棟検出している。北部では南北棟の掘立柱建物を2棟検出している。ちょうど弥生時代の竪穴住居・土壙墓が検出された部分で丘陵先端に挟まれた奥部に位置する。この掘立柱建物は南北主軸を真北から24～28°西に取り、丘陵裾部に直交するようで、地形に制約を受けていることが解る。一方南部で検出した掘立柱建物は南北主軸が真北から10～12°西に向く一群で、概ね丘陵裾部に併行しており、古代Ⅰ期としたほぼ真北を向く一群とは若干主軸を違えている。

古代Ⅱ期の竪穴住居と掘立柱建物の配置を見ると北に竪穴住居、南に掘立柱建物と整然と建て並べられていることが解る。

以上のように古代Ⅰ期では建物主軸に南北という方向性の規制があり、古代Ⅱ期になると建物主軸が地形に制約を受けるということが解る。

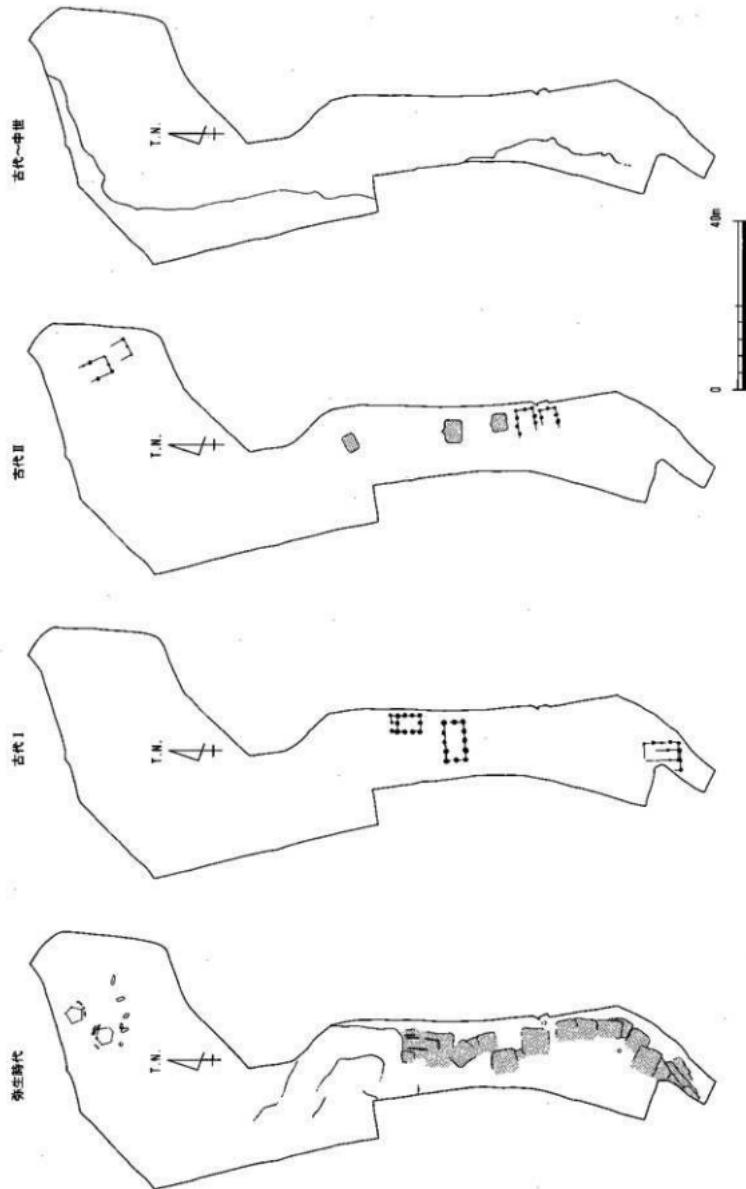
#### 古代～中世

古代から中世の遺構は第IV調査区西側、古川沿いで自然流路 SRIV01を1条検出した。このSRIV01は東側の肩部のみで、調査区内で西側の肩は検出していない。出土遺物・堆積埋土の状況から西側の肩は第III調査区で検出したSRIV01と考えられ、両者から幅約31mと考えられる。この流路はかなり蛇行しており北部では北東方向に流路を取っている。この流路は予備調査段階で想定した旧流路cに当たり、旧の古川が原間池、そして渓川に流れ込んでいたことを示唆している。

以上第IV調査区で検出した4つの時期の検出遺構から、その変遷およびその利用が解る。

弥生時代においては東丘陵裾部を中心に集落が形成されたが、度重なる古川の氾濫を受けていたようである。この調査区が安定する時期はその氾濫による洪沢砂が約1m程堆積した7世紀になってからで、この時期を中心に集落は形成される。第1面で検出した遺構には7世紀(古代Ⅰ・Ⅱ期)以外に平安時代の遺構も検出されているが、その量は僅かで7世紀以降集落の形成を見ない。

第279图 IV区遗存变迁图 (1/1200)



## 第V調査区

第V調査区は虎丸山から北方向に派生する丘陵に挟まれた僅かな平野部分、現古川の東側に位置する。この平野部分では微地形復元・予備調査により、南から北方向に延びる微高地aとその東側で微高地bを確認した。第III調査区はこの微高地aの中程に位置し、この東側微高地bに第V調査区は位置する。ちょうど東丘陵の先端から北方向に延びる微高地とも考えられるが、東丘陵とは旧流路cによって分断されている。

またこの調査区の西側には現古川が北流する。予備調査の結果、現古川は現位置（微高地aと微高地bの間）で機能していた上限が中世まで遡れ、古代・中世段階には渓川方向への流路も確認している。現古川は河床低下（下刻）が認められることから古代末から中世初頭には現位置にあったことが確認できるが、弥生時代まで遡るかは不明である。したがって微高地aと微高地bが同一の微高地であったかは不明である。また第IV調査区の東部及び北東部で低湿地を確認している。

上記の結果から弥生時代ではこの微高地部分に集落が立地し、東部と北東部に低湿地が存在する。それぞれの微高地が同一と考えると旧古川が微高地の中央を分断していたとは考えないので主流は渓川方向のみの流路を取っていたものとも考えられる。

第V調査区で検出した遺構の北限はそれぞれの微高地が同一と考えると平成9年度に実施した県道原間遺跡ではほとんど弥生時代の遺構を検出していないことから、この当たりと考えられ、また独立した微高地と考えると周囲を現古川（SRV01）、SRV05、SRV07～11、低湿地bによって囲まれた独立の微高地と考えられ、この範囲内に収まるものと考える。

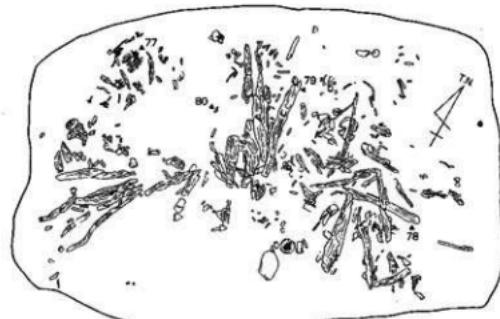
古代末から中世以降には低湿地部分は埋没し、古川の旧流路は渓川方向に延びる流路と現古川部分の2つであったと考えられる。

その後近世になり、原間池の構築を目的とし、渓川方向の流路は埋め立てられ、現古川のみの流路となる。

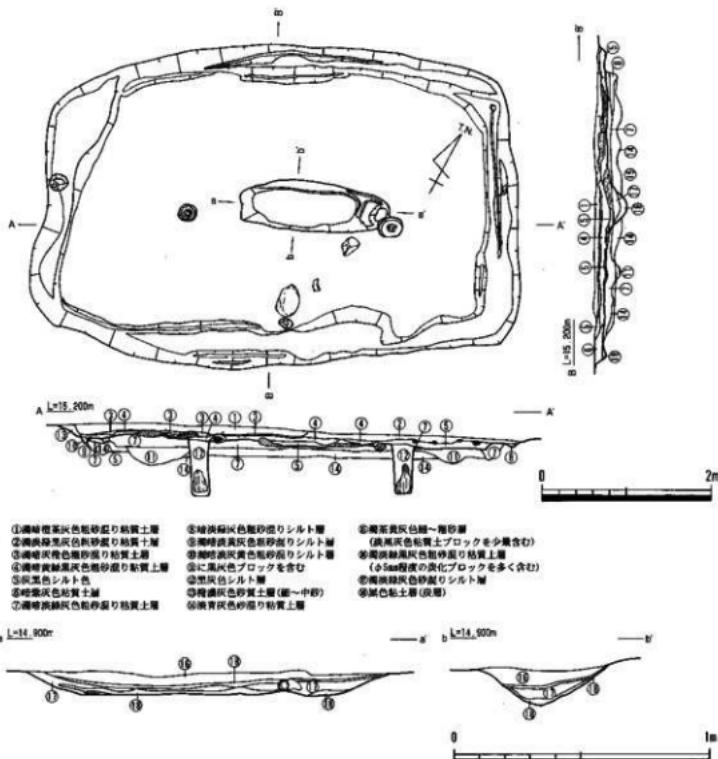
予備調査の結果、下段面では現古川に近い部分に古川の旧流路が蛇行して確認でき、丘陵側では耕作土・床土直下明茶黄灰色粘質土の弥生時代の遺構面となる。一方上断面では下段面から続く遺構面上部に茶・灰色系の砂質土・砂層を基調とする洪水砂が堆積しており、その上面が古代以降の遺構面となっていることを確認した。

したがって検出遺構面は二面で、古代・中世の遺構面と弥生時代の遺構面がある。

この調査区では堅穴住居跡5棟、掘立柱建物跡7棟、土器棺墓2基、土坑30基、不明遺構27基、溝59条、自然流路11条、柱穴多数を検出した。



第280図 SHV01遺物出土状況平面図(1/60)



第281図 SHV01第1次床面平・断面図(1/60)

## 竪穴住居跡

SHV01

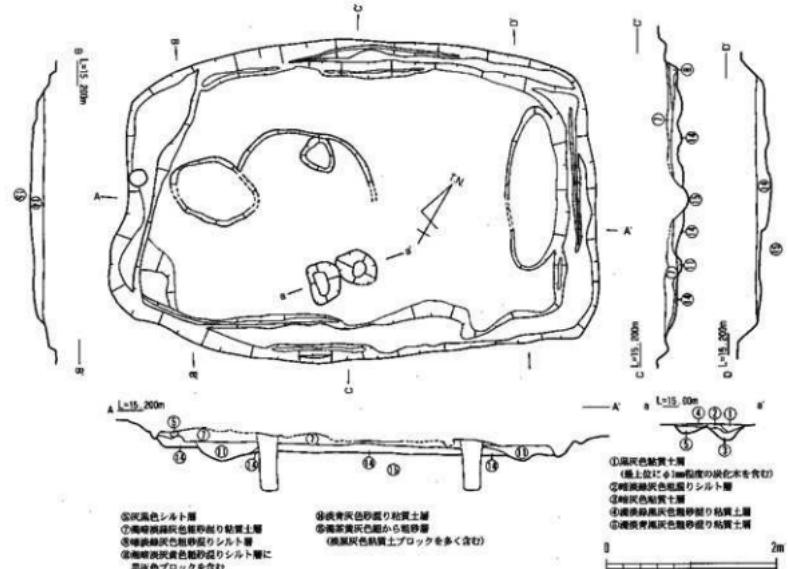
SHV01は第V調査区北部、標高約15.1mにおいて検出した竪穴住居跡で、平面形態はコーナー部が隅丸で東西に長い長方形を呈する。規模は長軸（南西—北東）約5.62m、短軸（北西—南東）約3.80m、床面積約21.4m<sup>2</sup>、検出面からの深さは約0.33mを測る。

この竪穴住居はほぼ全面に炭化木材及び茅状の炭化材を検出したことから焼失家屋と考えられ、また焼失面及び主柱穴・中央炉掘り込み面が土層⑦上面であることから掘り方最終下面をあわせると2面が確認できる。

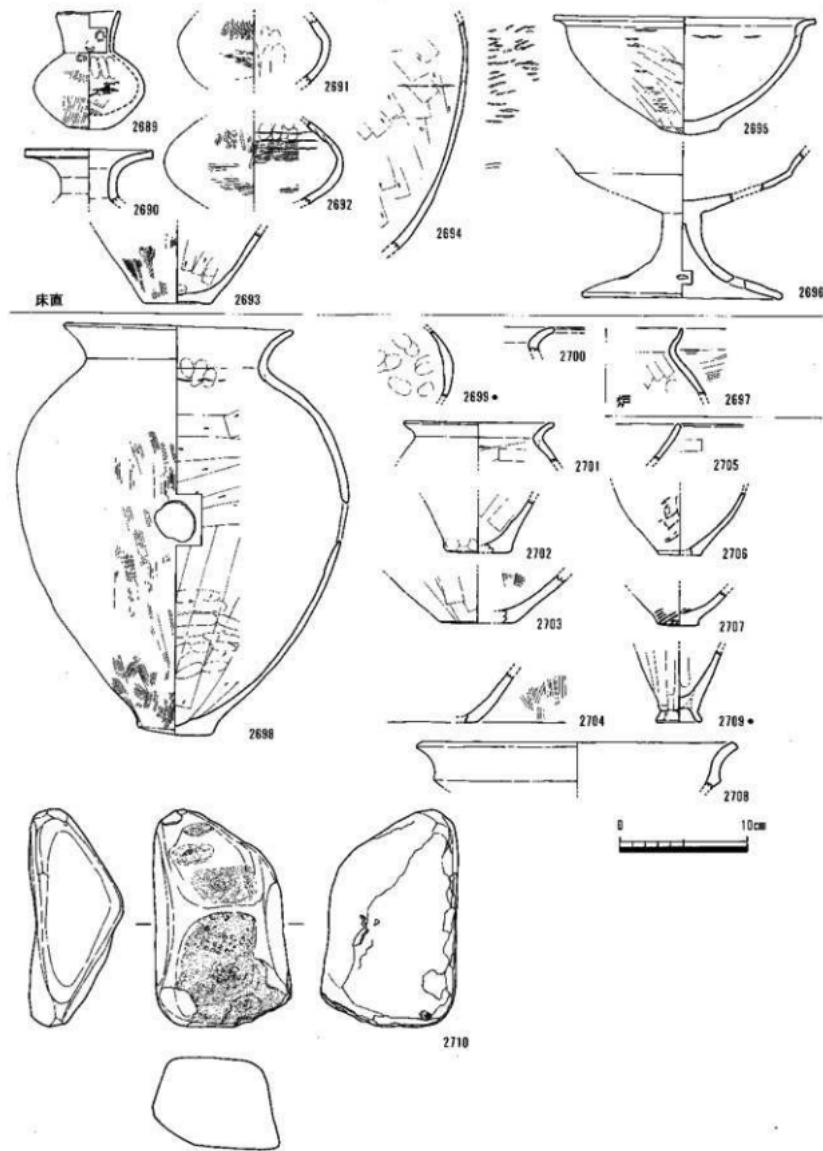
住居内の堆積土は土層①（濁暗橙茶灰色粗砂混じり粘質土）・土層②（濁淡緑黒灰色粗砂混じり粘質土層）が主流を占め、炭化木材と若干の堆積層を挟み第1次の床面となる。さらに土層⑦（濁暗淡緑灰色粗砂混じりシルト層）・土層⑧（淡青灰色砂混り粘質土層）の堆積土の後第2次の床面となる。

炭化木材は竪穴住居中心から放射状に検出した炭化木材、所謂垂木を中心としており、東部分で残存状態が良好であった。この炭化木材は材質鑑定の結果からヒノキ属・コナラ属クヌギ節・ヒノキであることが解った。この使用木材の状況は第III調査区のSHIII07が使用した炭化木材とは違いがみられ、どちらかというとクヌギを多用している点から第III調査区で検出したSHIII08に近いものがある。西側部分では炭化木材とともに茅状の炭化材を検出した。この炭化材を詳細にみると茅状の炭化材を束ねるように縄状の炭化材も混じっており、図示できなかったものの竪穴住居の上部構造が解る資料となつた。

この炭化木材を取り除くと竪穴住居の内部構造が判明した。ほぼ中央に東西に細長い梢円形の中央



第282図 SHV01第2次床面平・断面図(1/60)



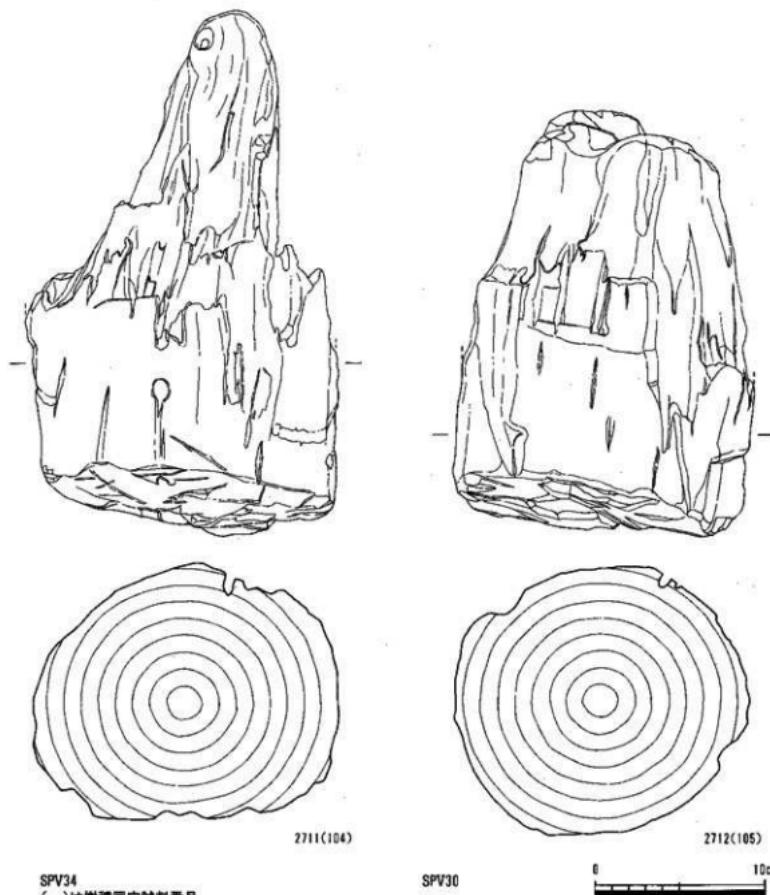
包含層

第283図 SHV01出土遺物実測図(1/4)①

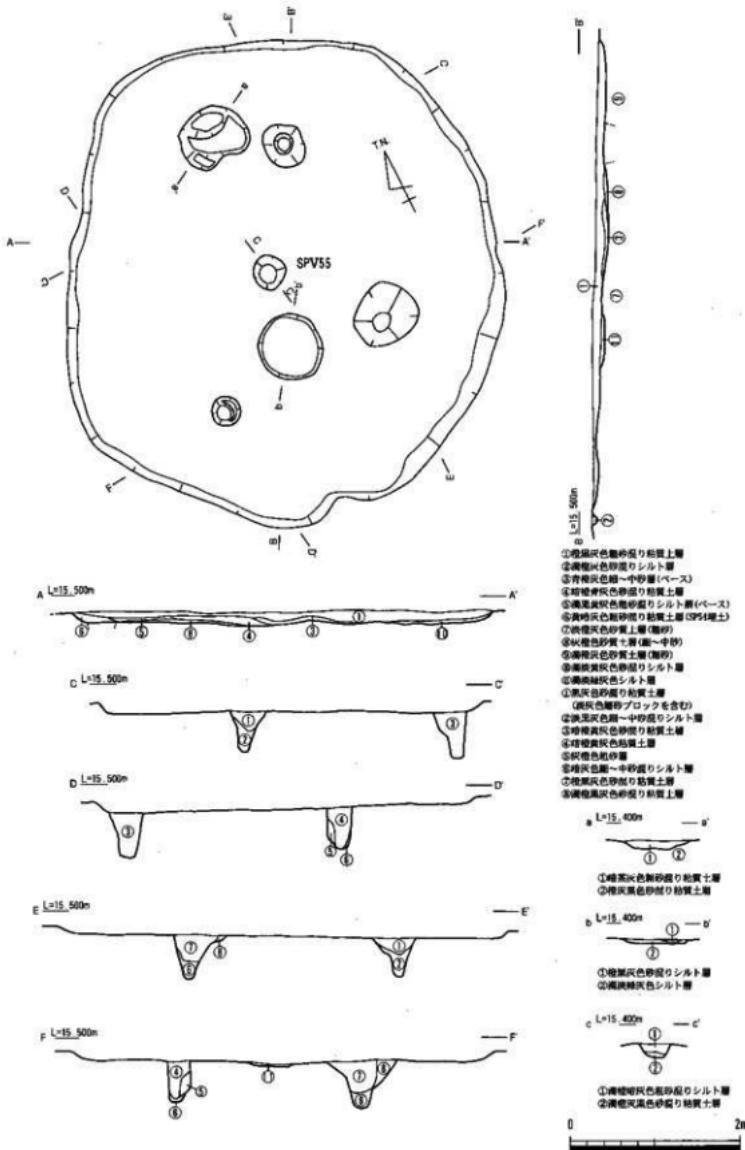
土坑を配し、中央土坑の短辺側に2穴の主柱穴を配する構造である。またほぼ周囲には10cm程度の段を持ち、部分的に壁溝が認められる。

主柱穴は平面形態が円形で、直径約0.25m、深さ約0.65mを測る。両者とも柱材が残存しており、材質鑑定の結果两者ともヤナギ属を使用していたことが判明した。主柱穴と炭化木材から2本の主柱穴に梁材を架け、放射状になるように垂木を架ける上部構造であることが解る。この柱材は直径17～18cmで、芯持ち材を使用していることが解る。底面には削り痕が確認でき、ほぼ平らに切断している。

中央土坑は主柱穴のやや東よりに検出され、東西約1.75m、南北約0.6m、深さ約0.17mを測る。堆積土層をみると厚さ約4cm程度の炭層を最下位と中位に検出した。このことから炉は2回に分けて使用されたものと考えられる。



第284図 SHV01出土遺物実測図(1/3)②



第285図 SHV02平・断面図(1/60)

この面を第1面とすると土層⑦・⑩の堆積土層の下位に竪穴住居第2面の床面を検出した。この第2面の床面上で検出した遺構は東と西側の短辺部に浅い土坑を検出したのみで、主柱穴・中央土坑などの竪穴住居に伴う施設は検出できなかった。

竪穴住居の南北主軸はN-30°-Wをとる。

竪穴住居内から弥生土器が出土している。(第283図2689~2710)。

住居内第1次の床面及び中央土坑からは壺・甕・鉢・高杯などが出土している。

包含層からは製塙土器が出土している。また体部ほぼ中位に穿孔の認められる甕が出土している。これを土器棺とするならば、この住居の廃絶時に埋葬行為が行われた可能性が指摘できる。

時期は出土遺物から弥生時代後期後半である。

## SHV02

SHV02は第V調査区北部、標高約15.3mにおいて検出した竪穴住居跡である。平面形態は歪な円形を呈している。規模は直径(南北)約5.85m、床面積約26.9m<sup>2</sup>、検出面からの深さは約0.15mを測るもので、全体的にかなり削平を受けている。

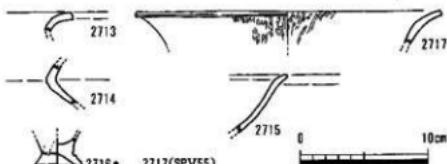
住居内の堆積土は土層①(橙黒灰色砂混り粘質土)が主流を占め、堆積している。

主柱穴はそれぞれの約2.5mの間隔で4穴確認できる。現存する柱穴は直径0.35~0.55cm程度の円形で、深さは0.5mを測る。土層断面から柱痕が確認でき、推定17cmの柱材であることが確認できる。

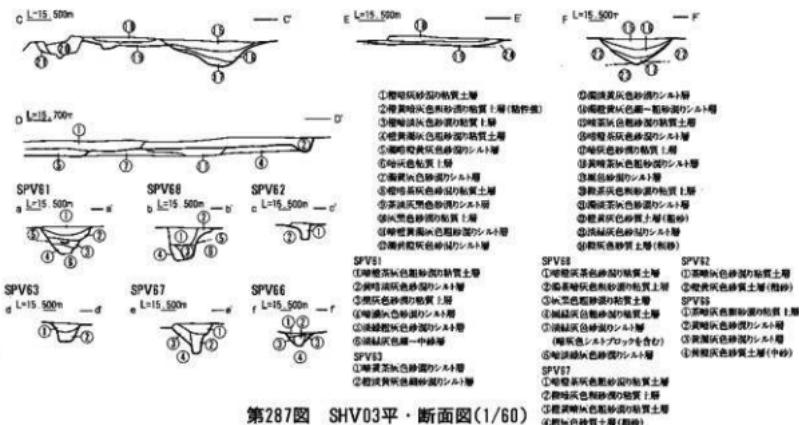
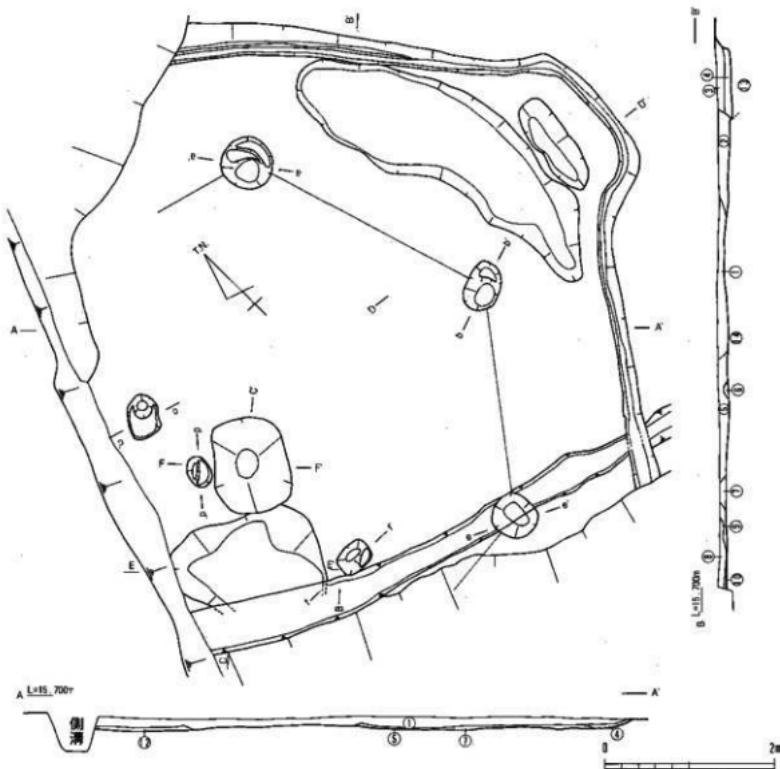
ほぼ中央に平面形態が円形で、断面箱型を呈する柱穴を検出した。規模は直径約0.4m、深さ約0.2mを測る。さらに南側に接して平面形態が円形で、規模は直径0.75m、深さ0.05mの土坑を確認した。堆積土は炭層で、北側に接する柱穴とともに炉と考えられる。

竪穴住居内から弥生土器が出土している(第286図2713~2716)。

時期は出土遺物から弥生時代後期後半である。



第286図 SHV02出土遺物実測図(1/4)



第287図 SHV03平・断面図(1/60)

## SHV03

SHV03は第V調査区北部、標高約15.4mにおいて検出した竪穴住居跡で、平面形態は円形を呈し、東側に張り出しを持つ。規模は推定直径約10m、床面積約78.5m<sup>2</sup>、検出面からの深さは約0.15mを測るもので、西部と南部を現流路により、また全体的にかなり削平を受けているが当調査区内では大型の竪穴住居である。

住居内の堆積土は土層①（橙暗灰色砂混り粘質土）が主流を占めている。

主柱穴は推定8穴と考えられ、その内東側の3穴を確認している。主柱穴は直径50～60cm程度の円形で、深さは0.4m程度を測る。土層断面から柱痕が確認でき、14cm程度の柱材を使用していたことが解る。

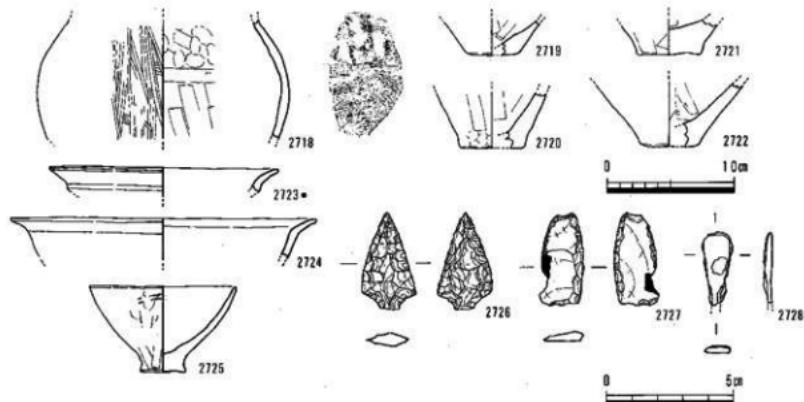
ほぼ中央部南寄りに歪な円形を呈する中央土坑を検出した。北側の土坑は直径約0.9m、深さ0.3mを測り、断面はすり鉢状を呈する。この土坑に接する南側の土坑は約1.5m、深さ0.10mの浅い土坑である。堆積土層から明確な炭層は検出されなかったものの、おそらく炉と推定できる。

検出した東部分の周囲に幅12cm程度の壁溝を検出し、その壁溝は張り出し部にも認められる。また張り出し部の基部には画るように溝状の落ちとさらに内側に深い土坑状の落ちが認められる。

竪穴住居内から弥生土器・石製品・鉄製品が出土している（第288図2718～2728）。

かなり削平を受けていることもあり住居内からの遺物の出土量は少量であったが、石製品（石鎌2726・石鐵未製品2727）と鉄製の鎌（2728）が出土したことは、他の竪穴住居出土遺物に比べると特異な傾向と考えられる。第III調査区で検出した竪穴住居でも確認できるように張り出し付の竪穴住居が出土遺物に特異な傾向を示していたことと合致する。

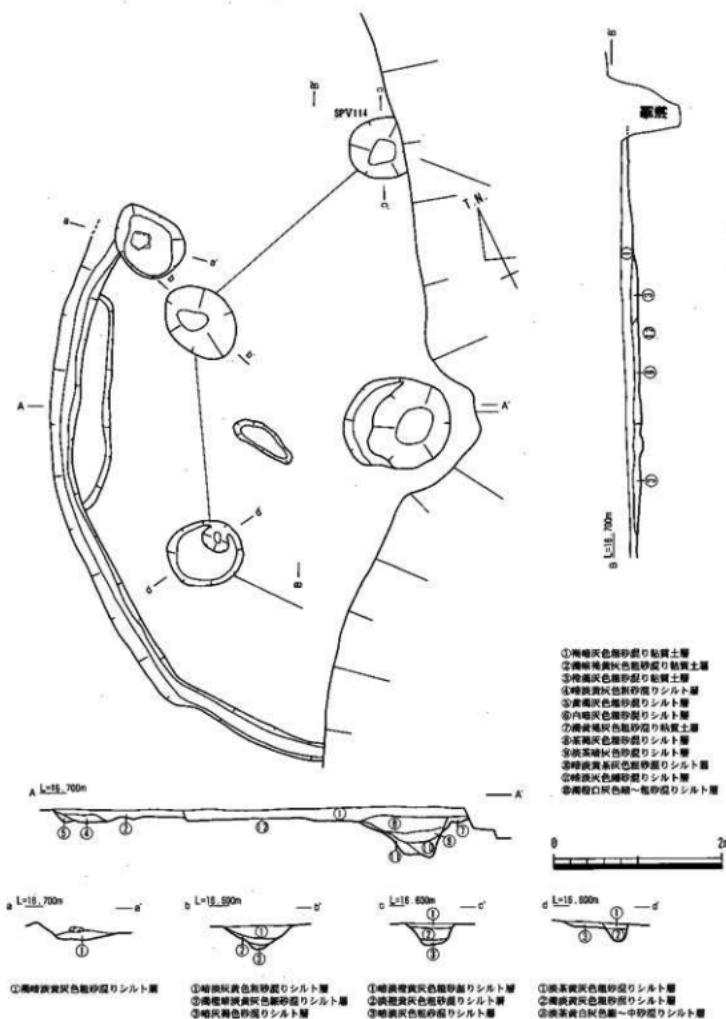
時期は出土遺物から弥生時代後期後半である。



第288図 SHV03出土遺物実測図(1/4)

SHV04

SHV04は第V調査区南部、標高約16.6mにおいて検出した竪穴住居跡で、東側をSRV08に切られしており、全容は不明であるが、平面形態は円形と推定できる。規模は推定直径約8.50m、床面積約56.7m<sup>2</sup>、検出面からの深さは約0.20mを測る。



第289図 SHV04平・断面図(1/60)

住居内の堆積土は主として土層①（褐暗灰色粗砂混り粘質土層）が堆積している。

主柱穴は推定6穴と考えられ、その内西側3穴を検出した。主柱穴は直径0.7～0.8m程度の円形で、深さは0.3m程度を測る。

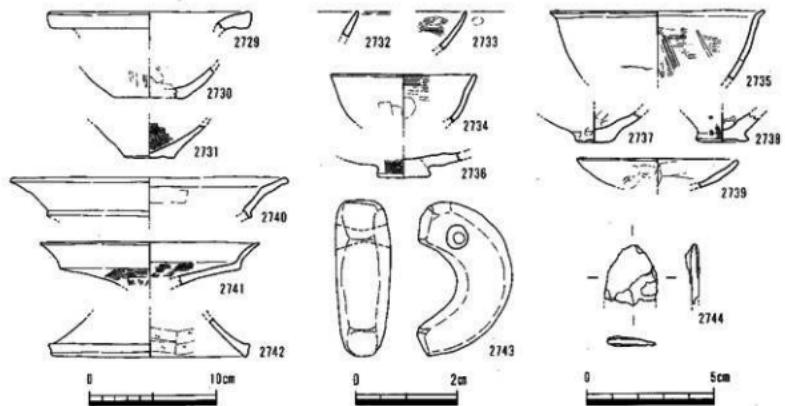
ほぼ中央部に円形を呈する中央土坑を検出した。規模は直径約1.24m、深さ0.44mを測り、断面はすり鉢状を呈する。堆積土層から明確な炭層は検出されなかったものの、おそらく炉と推定できる。

検出した西部分の周囲に幅25cm程度の壁溝を検出した。

竪穴住居内から弥生土器・石製品・鉄製品が出土している（第290図2729～2744）。

かなり削平を受けていることもあり住居内からの遺物の出土量は少量であったが、石製品（蛇紋岩）の勾玉（2743）と鉄製の鏃（2744）が出土したことは、他の竪穴住居出土遺物に比べると特異な傾向と考えられる。第Ⅲ調査区で検出した竪穴住居でも張り出し付の竪穴住居が出土遺物に特異な傾向を示していたことと合致する。

時期は出土遺物から弥生時代後期後半である。



第290図 SHV04出土遺物実測図(1/4)

SHV05

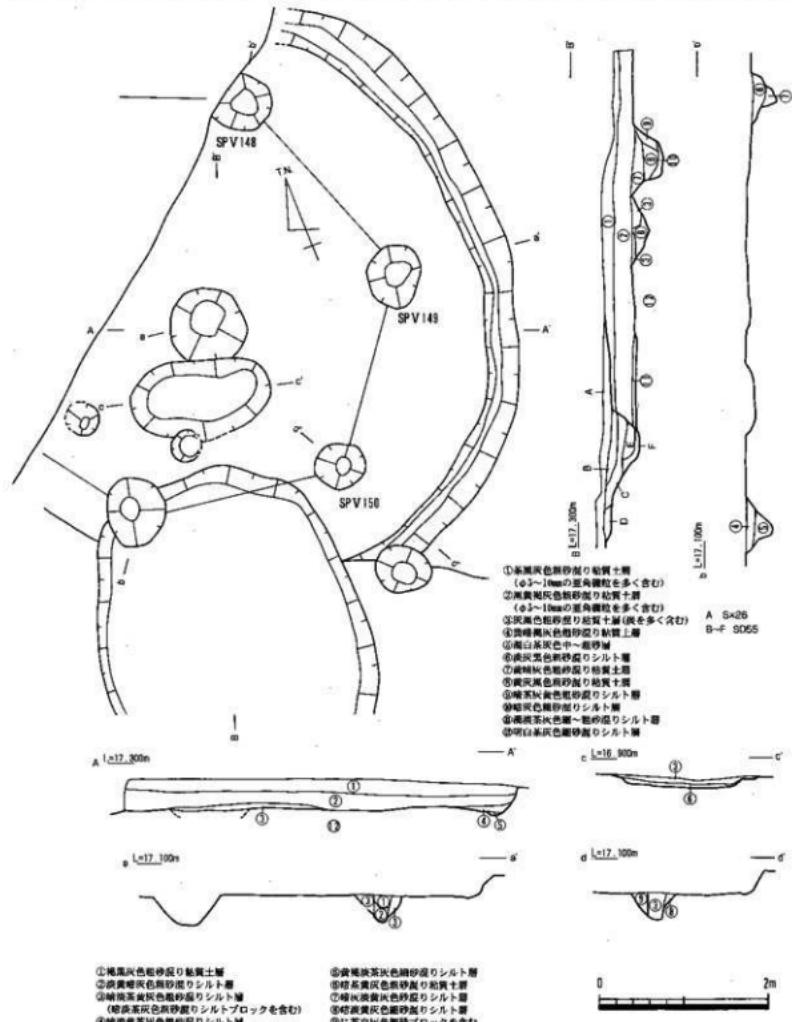
SHV05は第V調査区南部、標高約17.1mにおいて検出した竪穴住居跡で、西側が調査区外に、南側がSDV55、SXV26に切られており、全容は不明であるが、平面形態は円形と推定できる。規模は推定直径約7.7m、床面積約46.5m<sup>2</sup>、検出面からの深さは約0.38mを測る。

住居内の堆積土は土層①（褐黒灰色砂混り粘質土層）、土層②（淡黄暗灰色粗砂混じりシルト層）が堆積している。

主柱穴は推定6穴と考えられ、その内東側4穴を検出した。主柱穴は直径0.6～0.8cm程度の歪な円形で、深さは0.3m程度を測る。土層断面から柱痕が確認でき、約20cm程度の柱材を使用していたことが解る。

ほぼ中央部に円形と東西に長い梢円形を呈する中央土坑を検出した。北側の円形の土坑は直径約0.9m、深さ0.34mを測り、断面は逆台形状を呈する。堆積土層から明確な炭層は検出されていない。南側に接して検出した梢円形の土坑は長軸（東西）約1.67m、短軸（南北）約0.99m、深さ約0.01m

を測る。堆積土層③(灰黒色粗砂混り粘質土層)に炭を多量に含むことが確認されている。この2つの土坑は平面的にも断面的にも切り合いで確認でき、南側の楕円形の土坑が北側の円形の土坑を切っている。しかしその切り合いで確認できる土層は炭を多量に含む層である。また切り合から北側の円形の土坑が先行するものと考えられるが、炭を多量に含む土坑と含まない土坑は2つで1つの炉、所謂「10」土坑であると考えた方がよく、土層③が北側の土坑状面に部分的に被ったものと理解し、



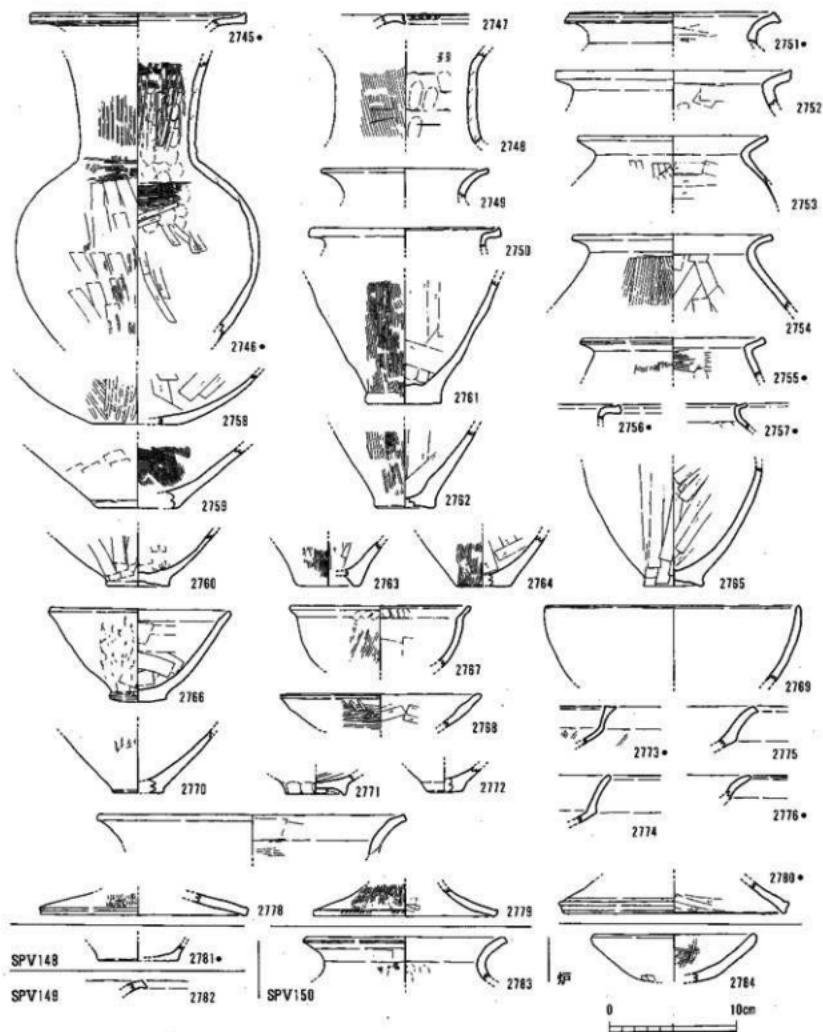
第291図 SHV05平・断面図(1/60)

これらは同一時期のものと考えたい。

検出した西部分の周囲に幅26cm程度の壁構を検出した。

堅穴住居内から削平を受けているにもかかわらず、多量の弥生土器が出土している（第292図 2745～2784）。

時期は出土遺物から弥生時代後期後半である。



第292図 SHV05出土遺物実測図(1/4)

## 掘立柱建物跡

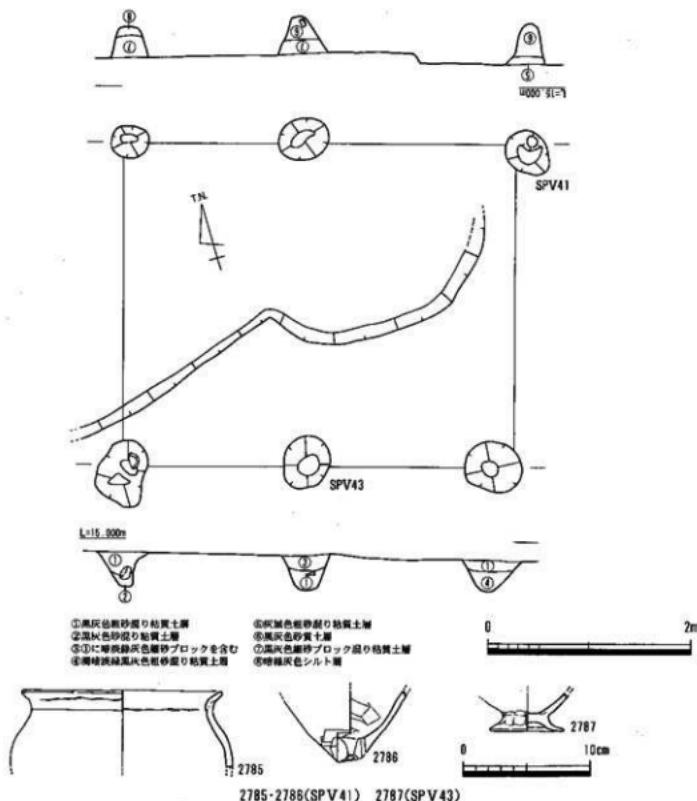
### SBV01

SBV01は第V調査区北部、標高14.9mにおいて検出した1(梁間)×3(桁行)間で、東西棟の掘立柱建物である。規模は梁間3.23m、桁行3.82m、床面積12.3m<sup>2</sup>を測り、南北主軸はN-16°-Eをとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が円形を呈し、規模は直径0.3~0.5m、深さ約0.3~0.4mを測る。

柱穴内から弥生土器壺・甌・台付き鉢（第293図2785~2787）が出土しており、弥生時代後期後半の所産と考えられる。

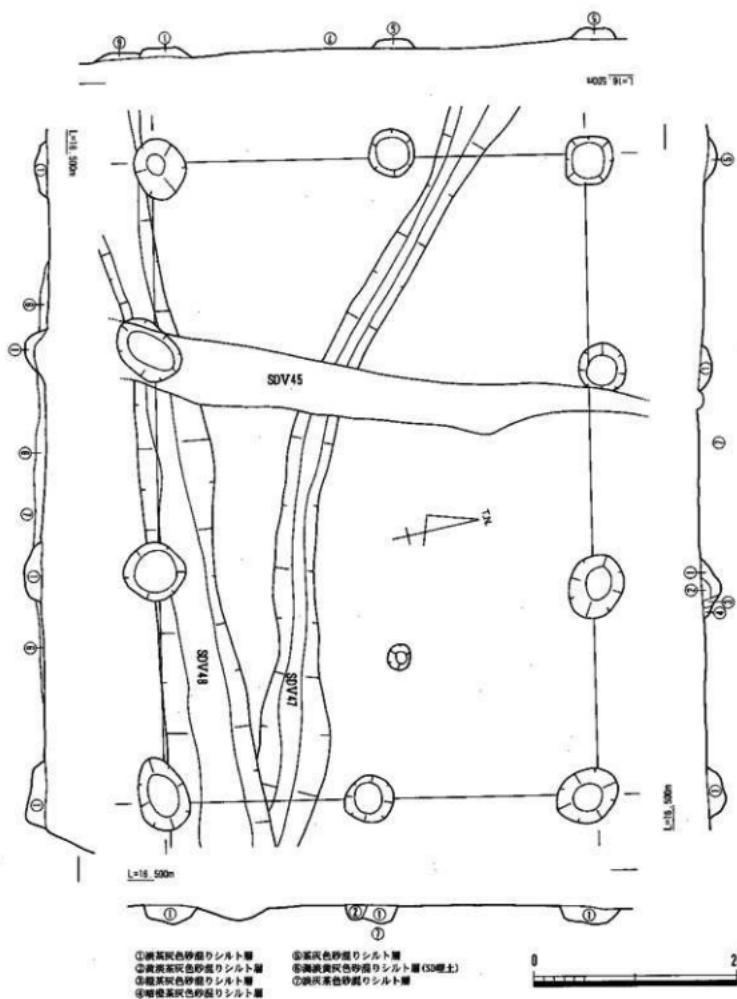
### SBV02

SBV02は第V調査区南部北、標高16.2mにおいて検出した2(梁間)×3(桁行)間で、東西棟の掘立柱建物である。規模は梁間4.30m、桁行6.37m、床面積27.4m<sup>2</sup>を測り、南北主軸はN-13°-Eをとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が円形を呈し、規模は直径0.5m、深さ0.2mを測る。



第293図 SBV01平・断面図(1/50),出土遺物実測図(1/4)

柱穴から遺物が出土していないために詳細な時期は不明であるが、SDV45によって柱穴が切られており、この溝の時期が12世紀代と考えられることから、それ以前のおそらく古代と考えられる。



第294図 SBV02平・断面図(1/50)

### SBV03

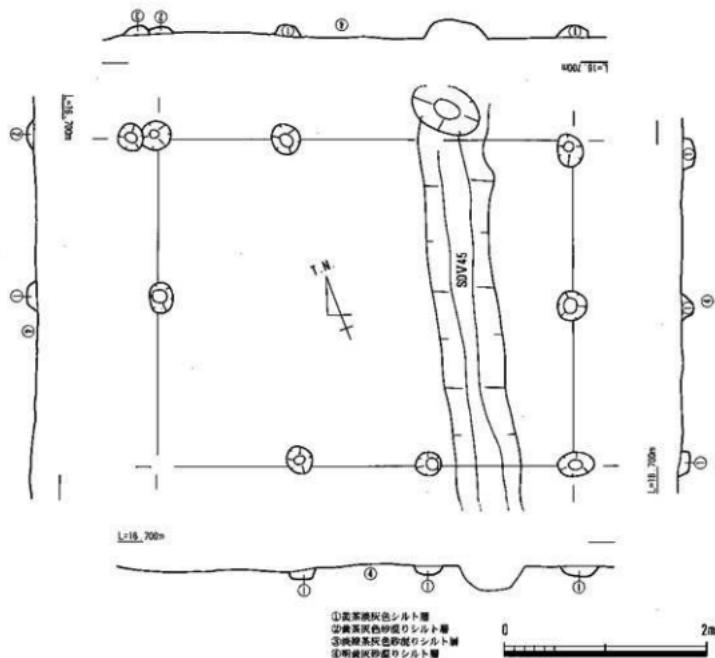
SBV03は第V調査区南部北、標高16.5mにおいて検出した2(梁間)×3(桁行)間で、東西棟の掘立柱建物である。規模は梁間3.27m、桁行4.13m、床面積13.5m<sup>2</sup>を測り、南北主軸はN-20°-Eをとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が円形を呈し、規模は直径0.25～0.3m、深さ0.1mを測る。

柱穴から遺物が出土していないために詳細な時期は不明であるが、SDV45によって柱穴が切られており、この溝の時期が12世紀代と考えられることから、それ以前のおそらく古代と考えられる。

### SBV04

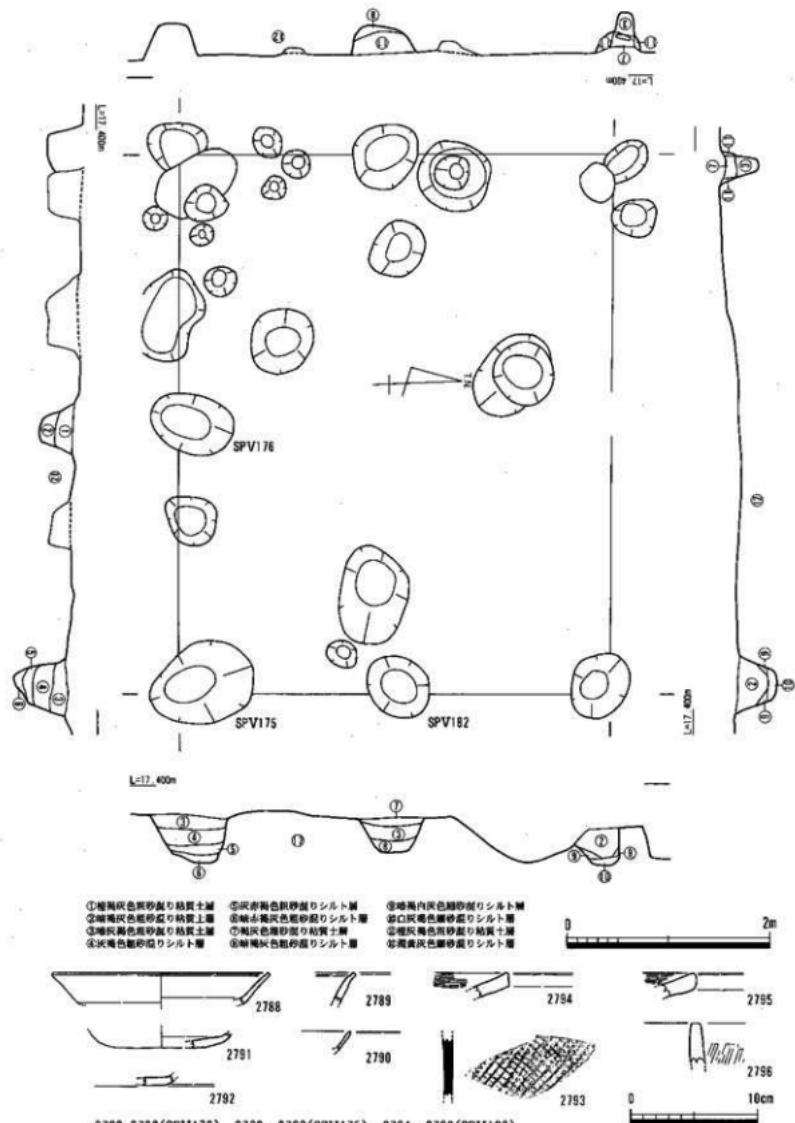
SBV04は第V調査区南部、標高17.1mにおいて検出した2(梁間)×2(桁行)間で、東西棟の掘立柱建物である。規模は梁間4.25m、桁行5.36m、床面積22.8m<sup>2</sup>を測り、南北主軸はN-2°-Eをとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が歪な方形を呈し、規模は直径約0.6～0.8m、深さ0.4～0.5mを測るしっかりした掘立柱建物である。土層断面から柱痕が確認でき、22cm程度の柱材であったことが解る。

柱穴内から須恵器・土師器が出土している(第296図2788～2796)。



第295図 SBV03平・断面図(1/50)

2788・2789は口縁端部内面に沈線を持つもので、形態は浅い皿状を呈する。これ以外に須恵器壺の体部片や土師質土器長胴甌が出土しており、これらの出土遺物から時期は9世紀頃と考えられる。



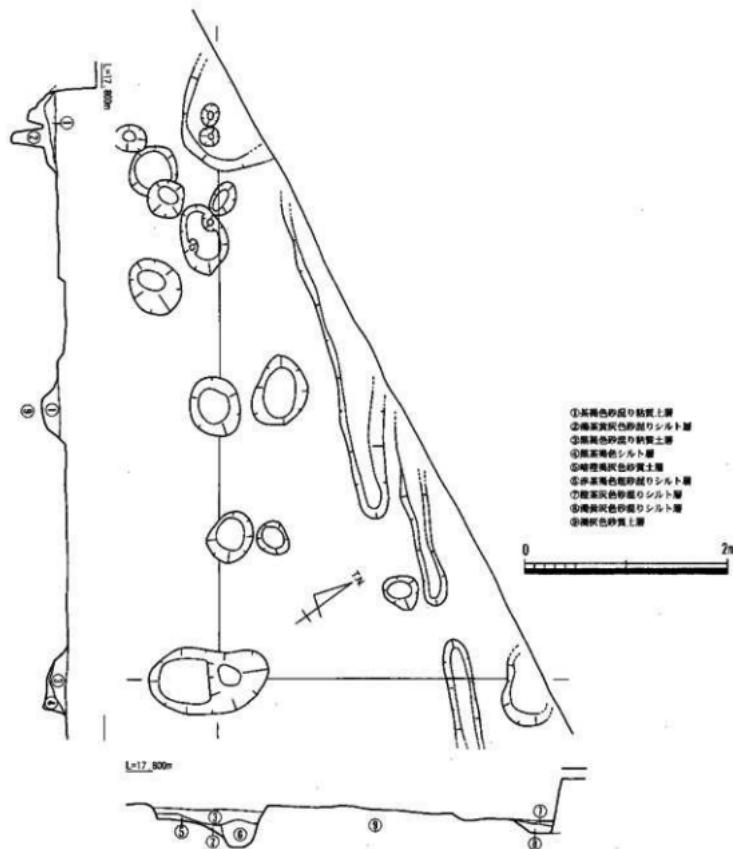
第296図 SBV04平・断面図(1/50),出土遺物実測図(1/4)

SBV05

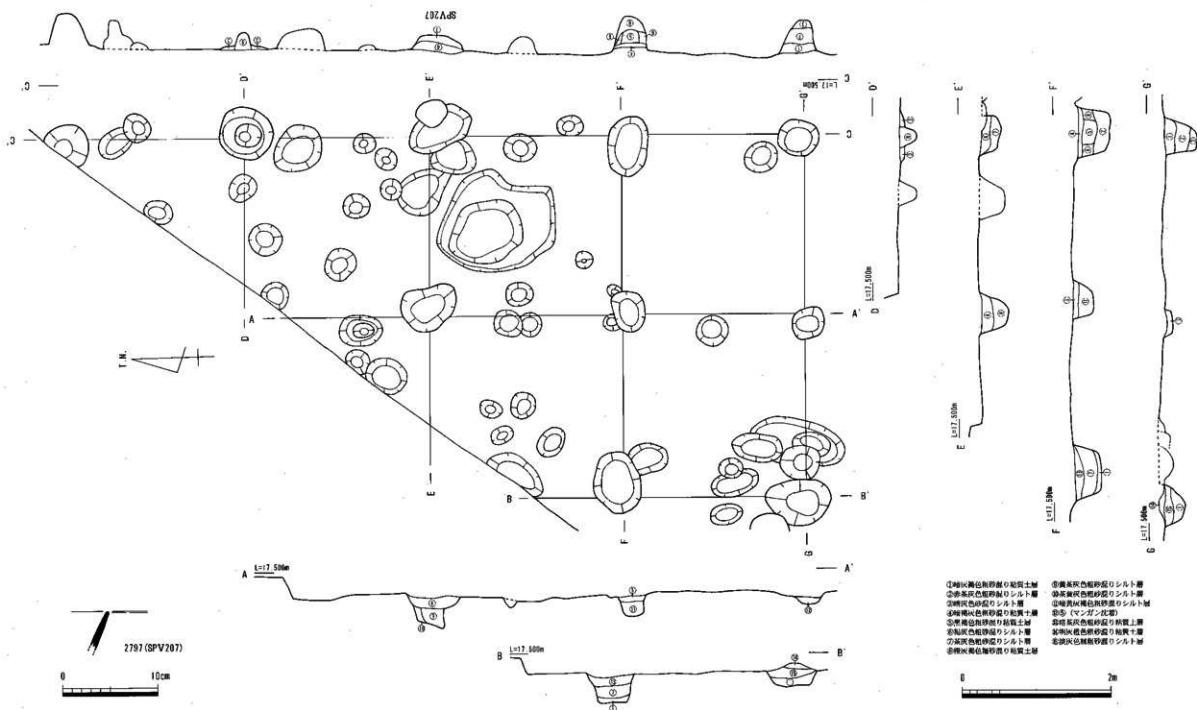
SBV05は第V査区南部、標高17.4mにおいて検出した2(梁間)×4(桁行)間で、南北棟の総柱の掘立柱建物である。規模は梁間4.82m、桁行(9.7)m、床面積(46.8)m<sup>2</sup>を測り、南北主軸はN-1°Eをとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が円形を呈し、規模は直径0.45～0.7m、深さ0.3～0.4mを測る。土層断面から柱痕が確認でき、20cm程度の柱材であったことが解る。この掘立柱建物は北東部が調査区外になるために全容は不明である。

柱穴内から須恵器が出土している(第297図2797)。

2797はおそらく須恵器壺の口縁部と考えられ、掘立柱建物の時期は8～9世紀頃と考えられる。



第298図 SBV05平・断面図(1/50)



第297図 SBV05平・断面図(1/50), 出土遺物実測図(1/4)

### SBV06

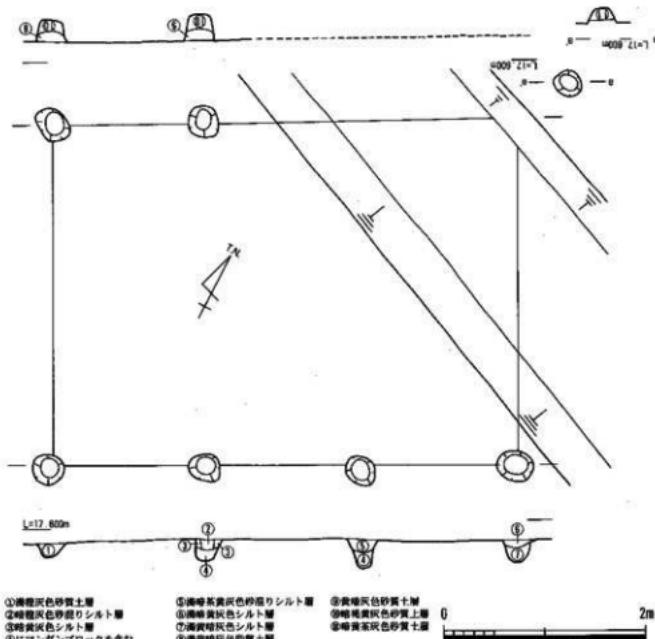
SBV06は第V調査区南部、標高17.5mにおいて検出した(2)(梁間)×(3)(桁行)間で、北側が調査区外に延びるが、東西棟の掘立柱建物と考えられる。規模は梁間(3.1)m、桁行(5.6)mを測り、南北主軸はN-36°Eをとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が歪な円形を呈し、規模は直径0.7m、深さ約0.4mを測る。土層断面から柱痕が確認でき、20cm程度の柱材であったことが解る。

柱穴から遺物が出土しておらず、詳細な時期決定は行えないが、古代と考える。

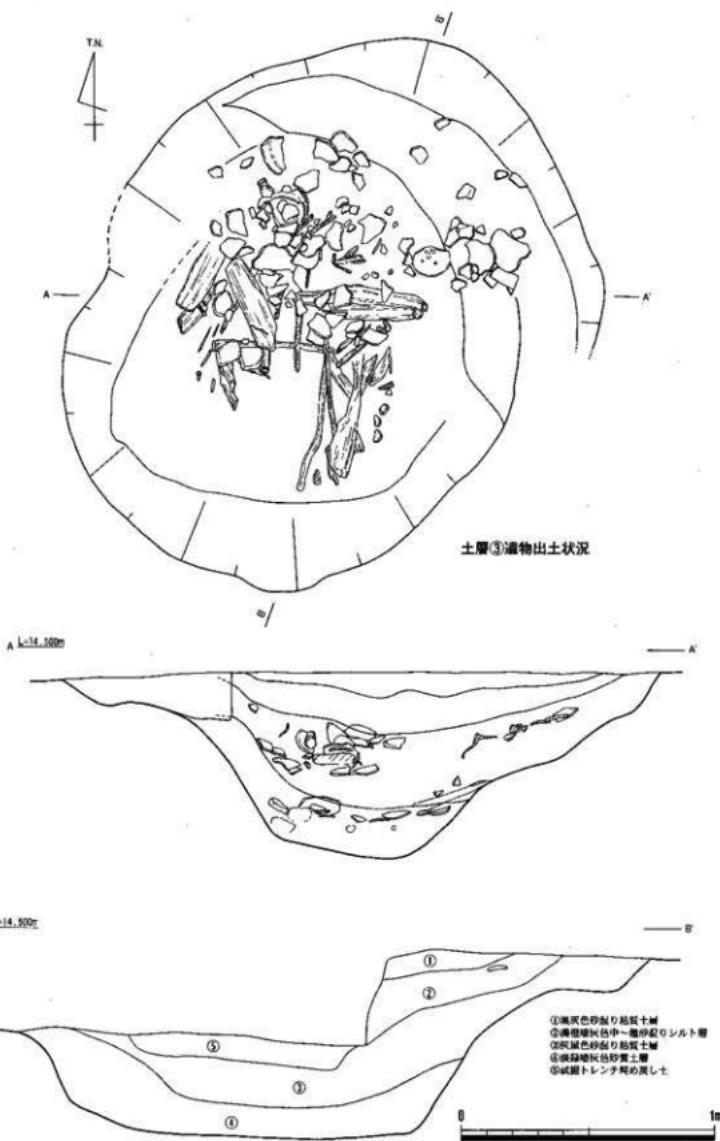
### SBV07

SBV07は第V調査区南部、標高17.5mにおいて検出した1(梁間)×3(桁行)間で、北東部が予備調査トレーナによって削平を受けているが、東西棟の掘立柱建物である。規模は梁間3.38m、桁行4.6mを測り、南北主軸はN-62°Wをとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が円形を呈し、規模は直径約0.3m、深さ約0.3mを測る。土層断面から柱痕が確認でき、13cm程度の柱材であったことが解る。

柱穴からはほとんど遺物が出土しておらず、詳細な時期決定は行えないが、南北主軸が他のSBV01を除く掘立柱建物に認められる主軸方位の真北を向くグループと真北から12°程度東に向くグループに合致しないことからここでは弥生時代の所産と考える。



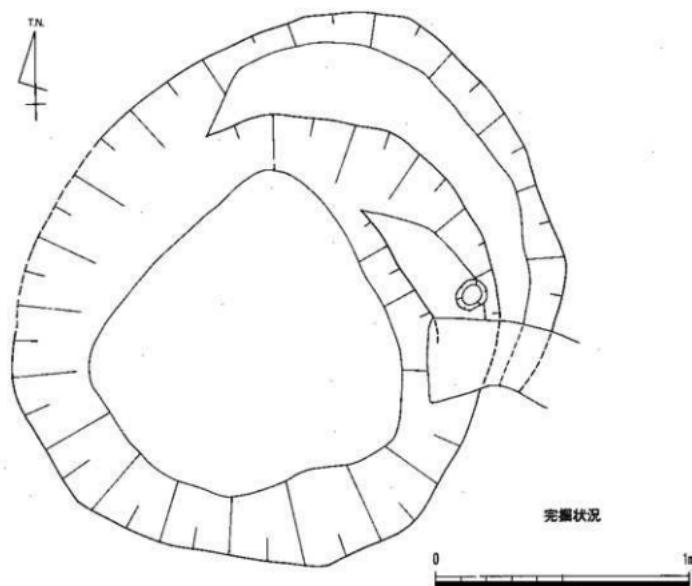
第299図 SBV07平・断面図(1/50)



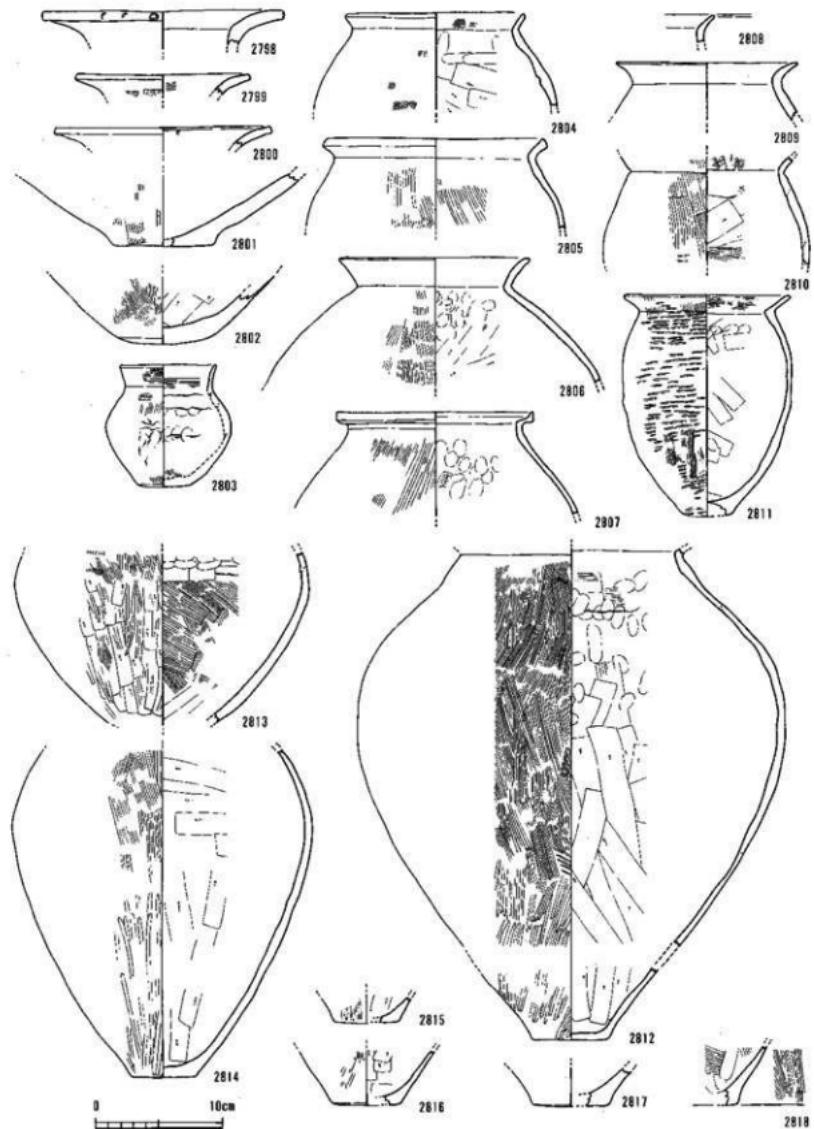
第300図 SEV01平・断面図(1/20)



土層④遺物出土状況



第301図 SEV01平面図(1/20)



第302図 SEV01出土遺物実測図(1/4)①

## 井戸跡

### SEV01

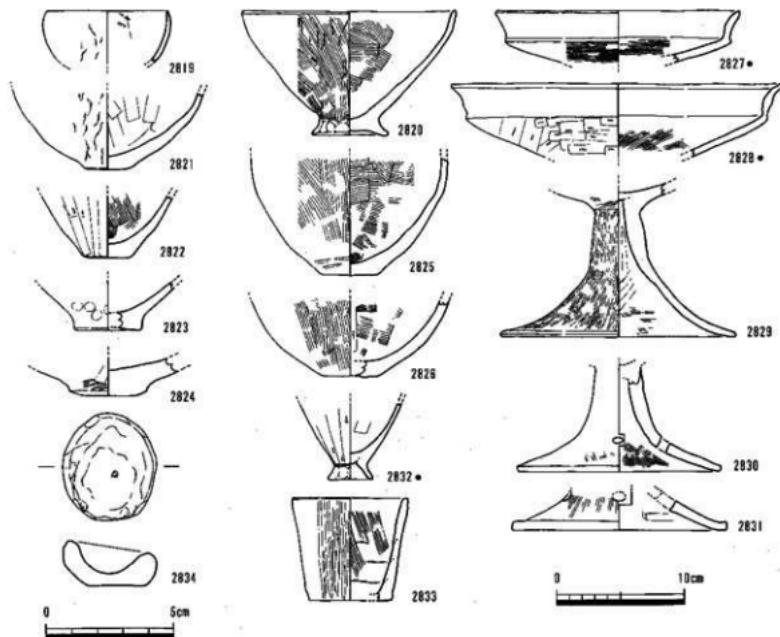
SEV01は第V調査区北部、標高14.4mにおいて検出した素掘の井戸である。平面形態はやや南北に長い梢円形を呈し、掘り方は上部が広がる緩やかな「U」字状を呈する。規模は長軸（南北）2.34m、短軸（東西）1.77m、検出面からの深さ0.75mを測る。

堆積土層は4層に分けられ、土層①・②にはほとんど遺物を含まず、土層③・④に土器及び木材片を多量に含む。

第300図平面図は土層①・②を除去後の土層③内土器及び木材片の出土状況で、これらの出土の傾向としてやや北側に土器が集中し、木材片は中央に集中することが解る。また断面から土器はレンズ状に堆積する埋土（土層③）に沿って包含されていること、平面的に北部に集中することから、北側から投げ込まれた可能性が指摘できる。第301図平面図は土層③を除去した状況である。土層④は中央部の窪み部分に堆積した土層で、土器と枝などの木材片と茅状の植物が堆積している。

この井戸を検出した位置は第V調査区の北部で、この調査区の北側の部分は予備調査の結果、低湿地であることが確認されている。そのためこの当たりからかなり湧水が認められ、井戸を構築するのには適した位置と考えられる。

2798～2834は井戸から出土した遺物である（第302、303図）。

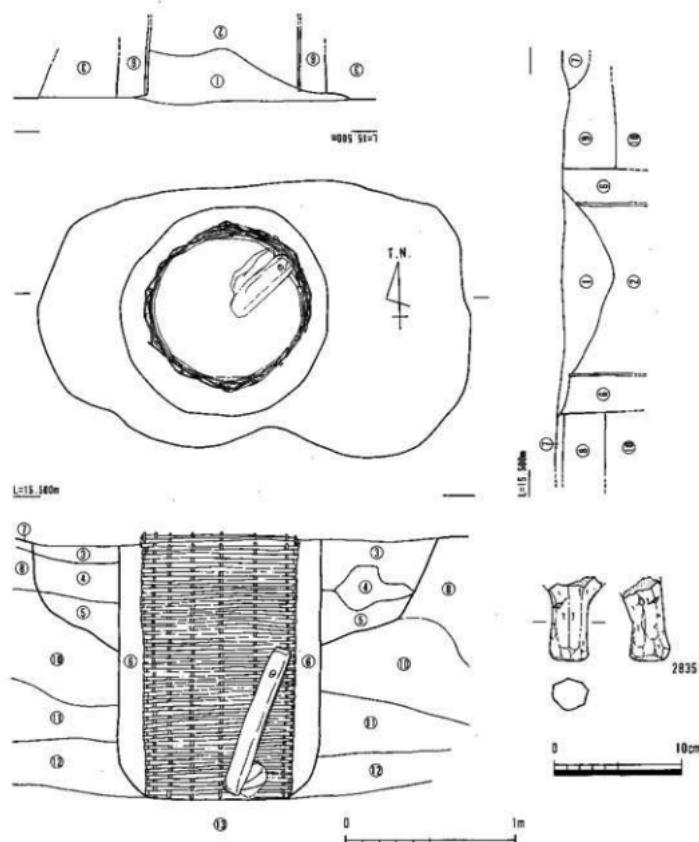


第303図 SEV01出土遺物実測図(1/4)②

これらの出土遺物を土層③・④で細分して取り上げていない。しかし出土遺物から全体的に時期差などの違和感はなく、ほぼ同一時期のものと考えている。器種は壺・甕・鉢・高杯・製塩土器と一般的な器種は揃っており、時期は丸底の小型鉢・製塩土器の体部がやや丸みを持つことから弥生時代後期後半のやや新しいところと考える。

#### SEV02

SEV02は第V調査区北部、標高15.1mにおいて検出した井戸である。この井戸は掘り方が2重に確認できる。外側掘り方の平面形態は東西に長い楕円形を呈し、内側の掘り方の平面形態は円形を呈する。



第304図 SEV02平・断面図(1/30), 出土遺物実測図(1/4)

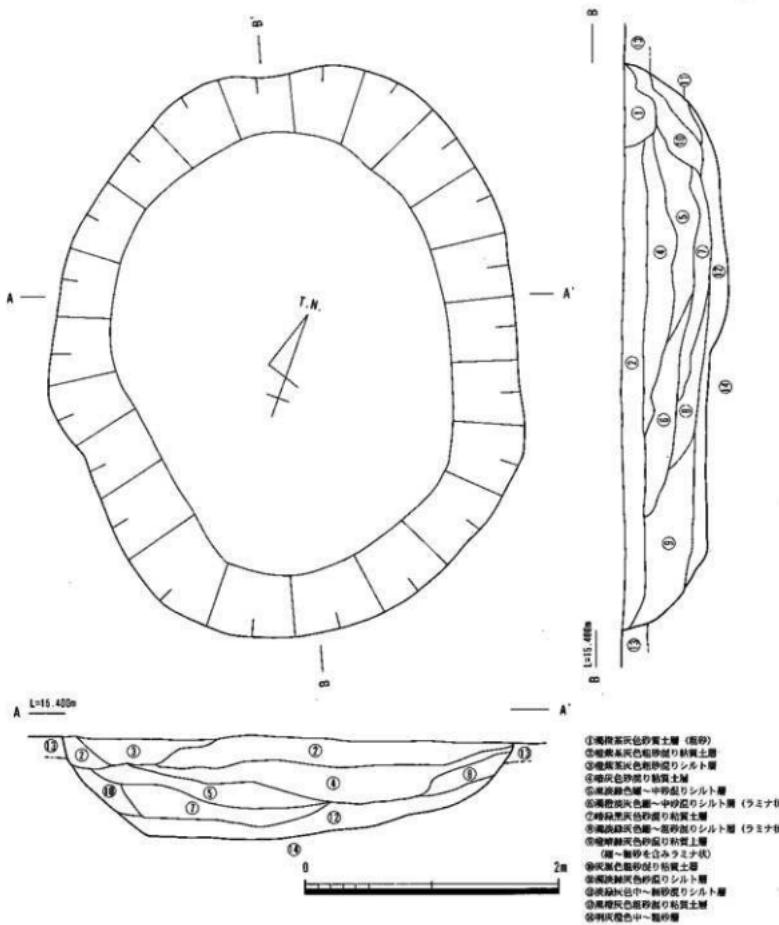
掘り方断面は外側が全体の中位まで掘削され、緩やかな箱状を呈する。内側の掘り方はその内部にある竹籠とほぼ同じ筒状を呈する。掘り方の規模は外側が東西 2.5 m、南北 1.5 m、深さ 0.62 m を測り、内側が直径 1.26 m、深さ 1.56 m を測る。

内部の構造は内側の掘り方に竹籠を円筒形に編み、これを井戸枠としている。

土層断面から湧水層は砂混りのシルト層あるいは砂層である土層②・⑩～⑬と考えられるが、特に上層⑪（淡青灰色細～粗砂層）を中心となる。

2835 が井戸から出土した遺物である（第 304 図）。

2835 はおそらく上馬の脚と考えられる。胴部の基部から欠損した状態で、外面には下方から上方へ



第305図 SEV03平・断面図(1/40)

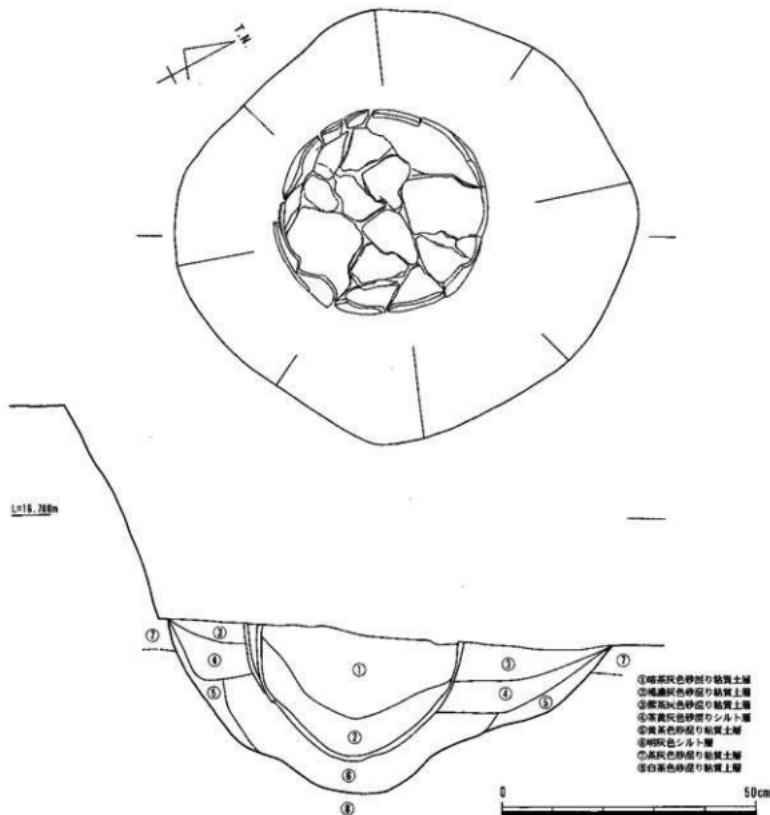
のヘラ削りが丁寧に施されている。接地面は平らに造り、やや前方に爪先を表現するように摘み出している。この遺物の時期はおそらく古代と考えられるが、この井戸の時期は構造及び堆積土の状況から近世と考えられる。

#### SEV03

SEV03は第V調査区北部、標高15.2mにおいて検出した素掘の井戸である。平面形態はやや南北に長い橢円形を呈し、掘り方は上部が広がる緩やかな「U」字状を呈する。規模は長軸（南北）4.46m、短軸（東西）3.67m、検出面からの深さ0.81mを測る。

堆積土層がかなり細分され、主として砂粒を多量に含むシルト層で形成されていることやベース層の下層土層④が砂層で、調査時にかなり湧水したことからここでは井戸とした。

井戸からほとんど遺物が出土していない。



第306図 STV01平・断面図(1/10)

## 土器棺墓

### STV01

STV01は第V調査区南部、標高16.45mにおいて検出した土壙墓で、上半は削平されているものの、下半は完全なままで検出した。掘り方平面形態は歪な円形を呈し、規模は直径0.86m、深さ0.31mを測る。掘り方断面は上部が広がる緩やかな「U」字状を呈する。

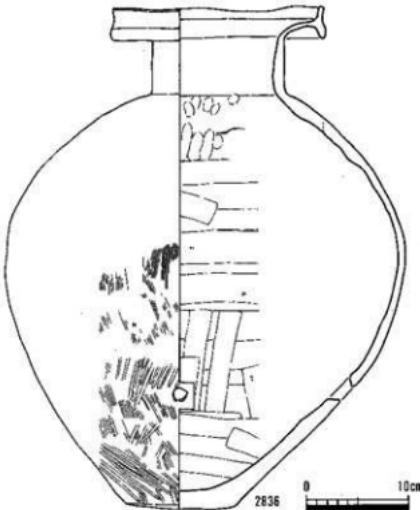
墓壙内土層は大別して土器棺内堆積土層（土層①・②）、土器棺固定土層（土層③・④）、土器棺底部安定土層（土層⑤・⑥）に分けられる。

この堆積状況からまず墓壙を掘削し、最下部に土器棺下半部を安定させるための土層⑤・⑥を置く。その際に土層⑥は土器棺底部に合わせて窪ませる。土器棺を安定させた後、徐々に周りを土層③・④によって埋めていったものと考えられる。

土器棺の検出状況は土層断面から解るように土器棺を安定させる土層⑥を置いたため、墓壙最下部から6cm程度浮いた状態で、やや斜めに傾けて置かれている。土器棺上半が削平のため検出できなかつたので、口縁部の方向、傾斜角度等については不明である。

土器棺内の堆積土層中から土器棺上部の破片が出土している。口縁部が完全には復元できないことや頸部から体部の一部にかけて復元できなかったことから、壺の口縁部から体部にかけて破壊し、土器棺に転用したものと考えられる。また通常確認できる蓋の存在も不明である。

時期は土器棺に使用した壺から弥生時代後期後半と考えられる。



第307図 STV01出土遺物実測図(1/5)

## STV02

STV02は第V調査区南部、標高17.15mにおいて検出した土壙墓で、上部がかなり削平を受けていたため、底部だけの検出である。

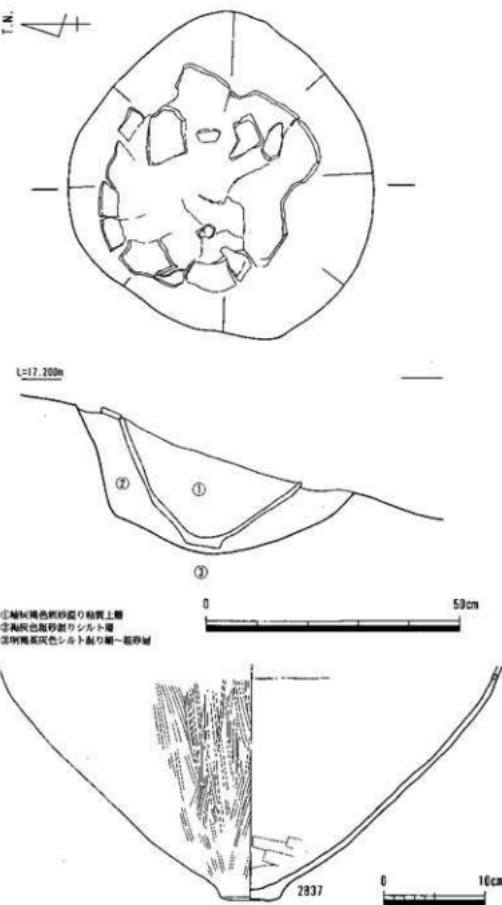
掘り方平面形態は歪な円形を呈し、規模は直径0.60m、深さ0.30mを測る。掘り方断面はほぼ土器棺と同じ形状を呈し、緩やかな「U」字状を呈する。

墓壙内土層は大別して土器棺内堆積土層（土層①）、土器棺固定土層（土層②）に分けられる。

この掘削断面及び堆積状況からみると、まず墓壙を土器棺の大きさとほぼ同程度に掘削し、最下部にはほぼ土器棺の底部を接するよう置き、土層②で固定したようである。土器棺上半がかなり削平を受けていたため、口縁部の方向、傾斜角度等については不明である。

検出した土器棺が完全には復元できないため、この土器棺が完形のまま転用されたものかは不明である。また通常確認できる蓋の存在も不明である。

時期は土器棺に使用した壺から弥生時代後期後半と考えられる。



第308図 STV02  
平・断面図(1/10), 出土遺物実測図(1/5)

## 土坑跡

### SKV01

SKV01は第V調査区北部、標高14.45mにおいて検出した土坑で、平面形態は隅丸の長方形を呈する。規模は長軸1.07m、短軸0.73m、検出面からの深さ0.23mを測る。

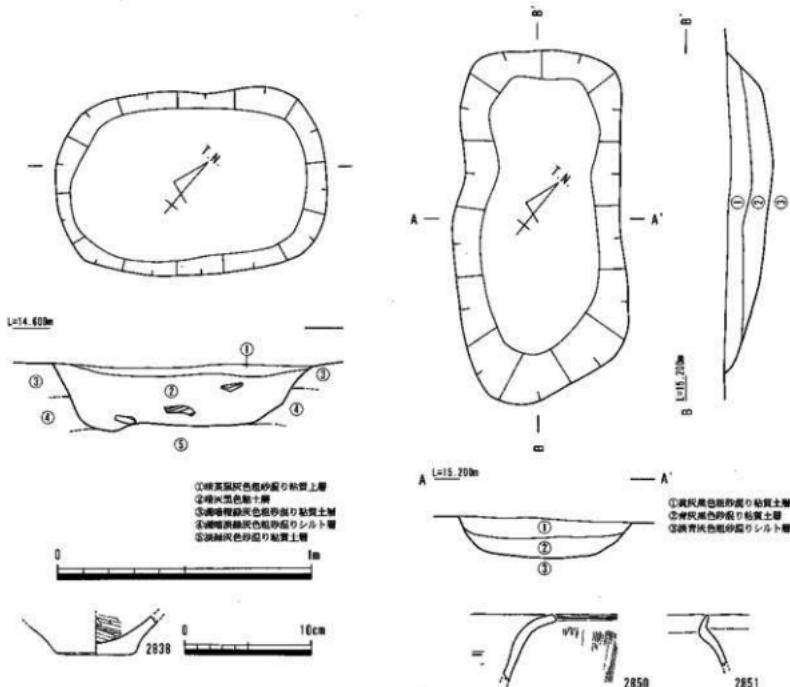
断面は角の取れた箱形を呈し、土層は2層に細分できる。遺物は土層②（暗灰黒色粘土層）から出土している。

土坑内から少量の遺物が出土した（第309図2838）。

出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね弥生時代後期と考えられる。

### SKV03

SKV03は第V調査区北部、標高14.55mにおいて検出した土坑で、平面形態は梢円形を呈する。規模は長軸1.57m、短軸0.97m、検出面からの深さは最深部で0.55mを測る。掘り方断面は上開きの「U」字状を呈し、土層は2層に細分できる。遺物は土層①（黒色粘土層）の上面に集中し、下位からはほとんど出土していない。

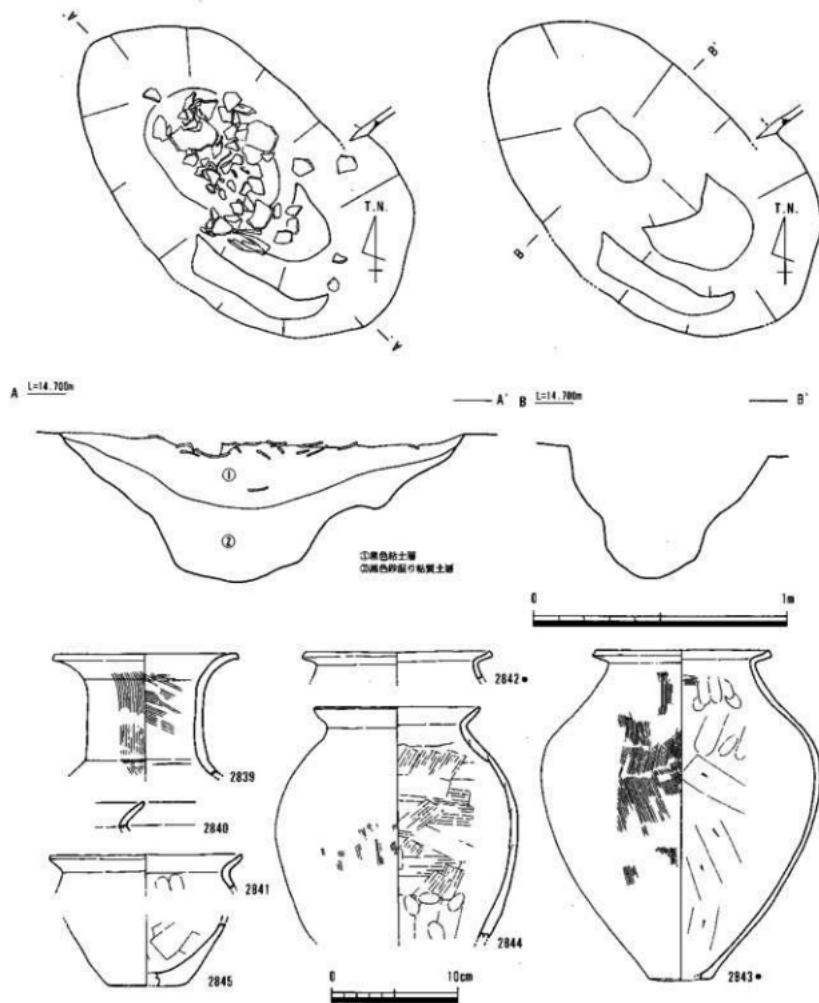


第309図 SKV01  
平・断面図(1/20), 出土遺物実測図(1/4)

第312図 SKV03  
平・断面図(1/20), 出土遺物実測図(1/4)

土坑内から多量の遺物が出土した（第310図 2839～2845）。

出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね弥生時代後期後半と考えられる。



第310図 SKV03平・断面図(1/20), 出土遺物実測図(1/4)

#### SKV04

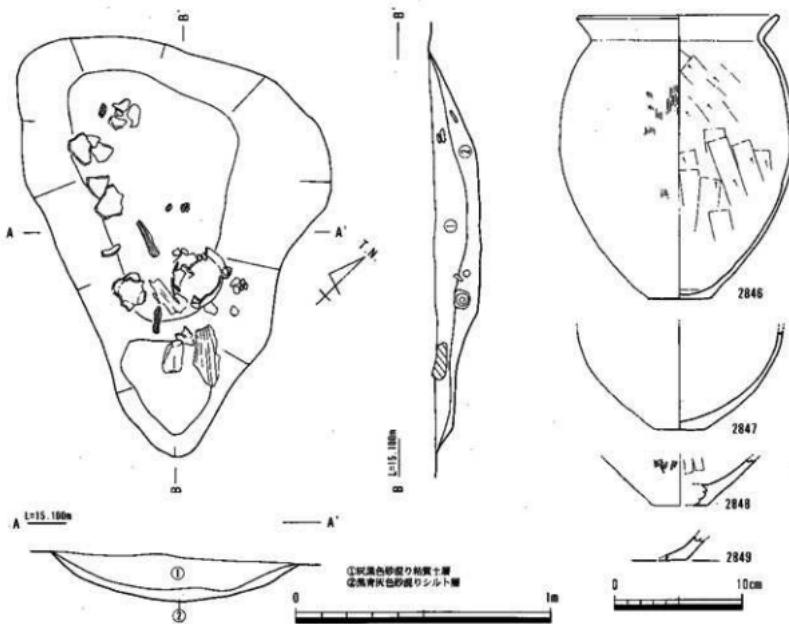
SKV04は第V調査区北部、標高15.0mにおいて検出した土坑で、平面形態は三角形状を呈する。規模は長軸1.62m、短軸1.0m、検出面からの深さ0.18mを測る。掘り方断面は上開きの緩やかな「U」字状を呈し、土層は2層に細分できる。遺物は土層①（黒青灰色粗砂混りシルト層）の下位に集中している（第311図2846～2849）。

出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね弥生時代後期後半と考えられる。

#### SKV05

SKV05は第V調査区北部、標高15.05mにおいて検出した土坑で、平面形態は長方形を呈する。規模は長軸1.41m、短軸0.67m、検出面からの深さ0.16mを測る。掘り方断面は上開きの緩やかな「U」字状を呈し、土層は2層に細分できる。堆積土からはほとんど遺物は出土していない。

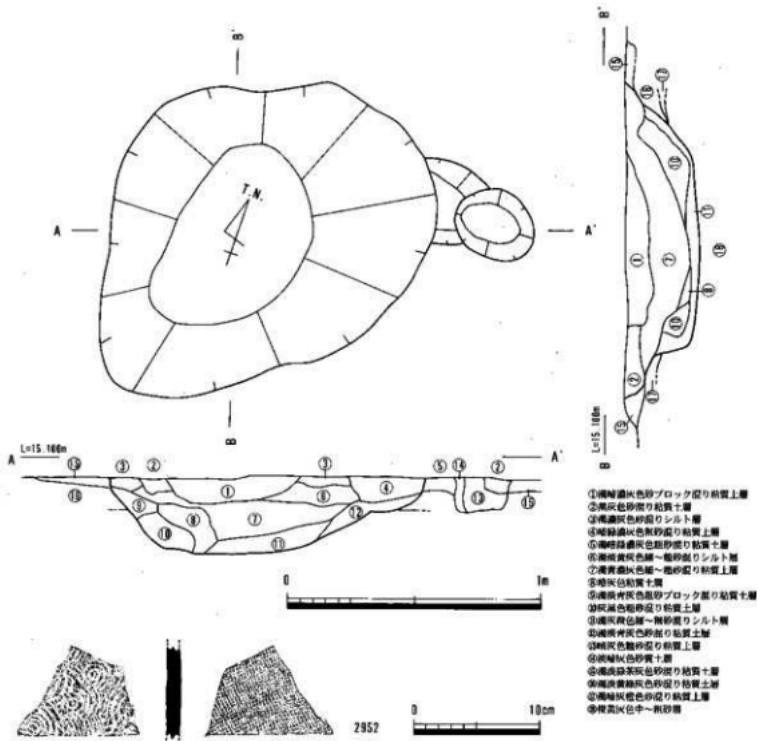
出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね弥生時代後期と考えられる。



第311図 SKV04平・断面図(1/20), 出土遺物実測図(1/4)

SKV12は第V調査区北部、標高15.0mにおいて検出した土坑で、平面形態は隅丸の三角形状を呈する。規模は長軸1.51m、短軸1.18m、検出面からの深さ0.31mを測る。掘り方断面は上開きの「U」字状を呈し、土層は砂粒を含むシルト層で、かなり細分できる。遺物は土層①（濁暗濃灰色砂ブロック混り粘質土層）の下位に集中している。

出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね古代と考えられる。

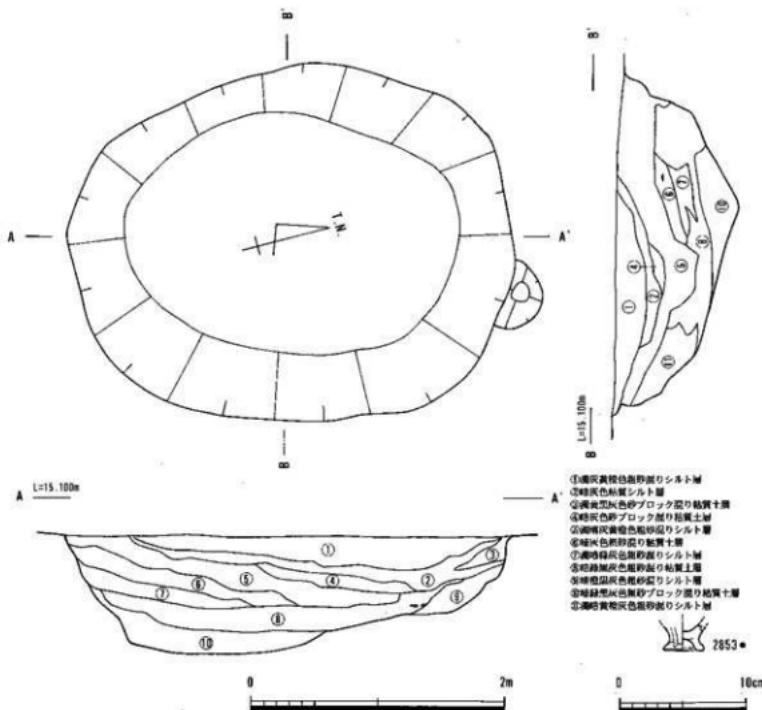


第313図 SKV12平・断面図(1/20), 出土遺物実測図(1/4)

## SKV14

SKV14は第V調査区北部、標高15.0mにおいて検出した土坑で、平面形態は橢円形を呈する。規模は長軸1.78m、短軸1.41m、検出面からの深さ0.46mを測る。掘り方断面は上開きの緩やかな「U」字状を呈し、土層は砂粒を含むシルト層で、かなり細分できる。堆積土からはほとんど遺物は出土していない。

出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね弥生時代と考えられる。

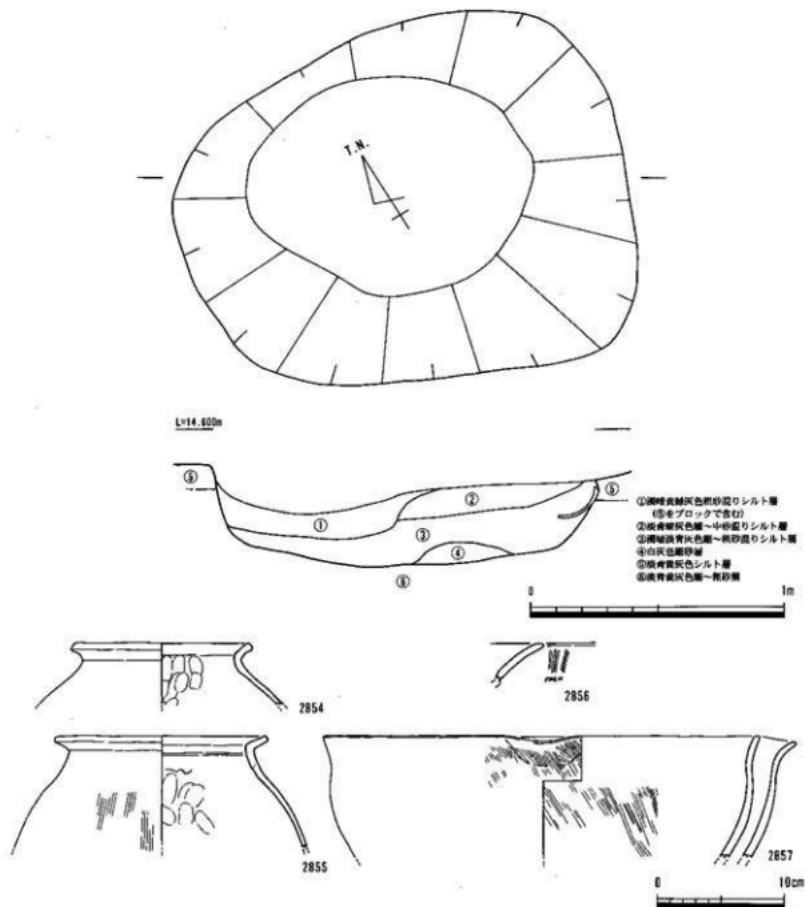


第314図 SKV14平・断面図(1/40), 出土遺物実測図(1/4)

## SKV16

SKV16は第V調査区北部、標高14.5mにおいて検出した土坑で、平面形態は隅丸の長方形を呈する。この土坑はSRV03・04によって切られている。規模は長軸1.80m、短軸1.44m、検出面からの深さ0.30mを測る。掘り方断面は上開きの緩やかな「U」字状を呈し、土層は4層に細分できる。堆積土土層③（濁暗青灰色細～粗さ混りシルト層）の東肩部から少量遺物が出土している。

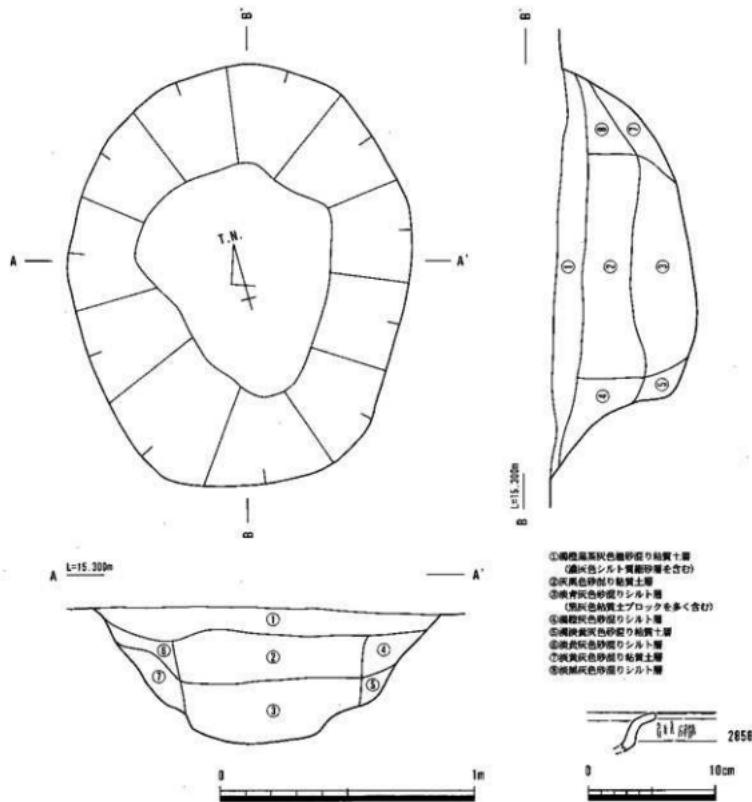
出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね弥生時代と考えられる。



第315図 SKV16平・断面図(1/20), 出土遺物実測図(1/4)

SKV19は第V調査区北部、標高15.2mにおいて検出した土坑で、平面形態は橢円形状を呈する。ちょうど堅穴住居SHV02・03との間に位置する。規模は長軸1.67m、短軸1.36m、検出面からの深さ0.53mを測る。掘り方断面は上開きの「U」字状を呈し、土層は砂粒を含むシルト層で、かなり細分できる。

出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね弥生時代と考えられる。

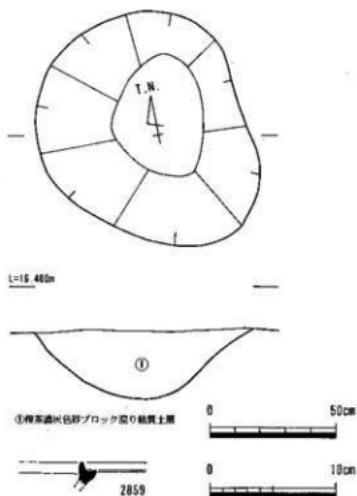


第316図 SKV19平・断面図(1/20), 出土遺物実測図(1/4)

SKV25

SKV25は第V調査区南部、標高16.2mにおいて検出した土坑で、平面形態は亜円形を呈する。この規模は直径0.9m、検出面からの深さ0.27mを測る。掘り方断面は上開きの緩やかな「U」字状を呈し、土層は単層である。

出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね古代と考えられる。

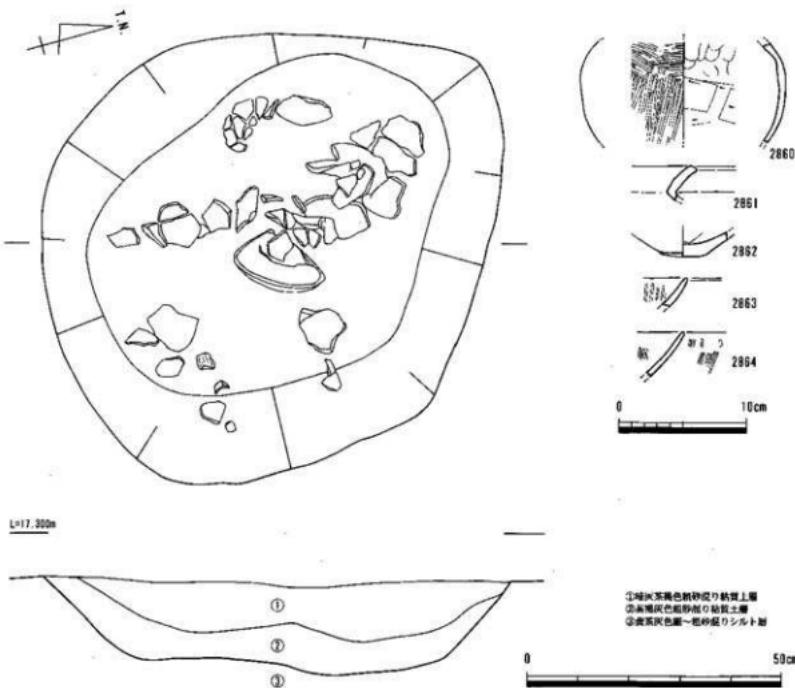


第317図 SKV25  
平・断面図(1/20)、出土遺物実測図(1/4)

SKV30

SKV30は第V調査区南部、標高17.1mにおいて検出した土坑で、平面形態は歪な円形を呈する。規模は直径1.76m、検出面からの深さ0.41mを測る。掘り方断面は上開きの箱形状を呈し、土層は砂粒を含むシルト層で、3層に細分できる。遺物は土層①(暗灰茶褐色粗砂混り粘質土層)に含まれ、土層②・③からはほとんど出土していない。

出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね弥生時代と考えられる。



第318図 SKV30平・断面図(1/10), 出土遺物実測図(1/4)

#### 溝状遺構

##### SDV23

SDV23は第V調査区中央部、標高16.15mにおいて検出した溝状遺構で、南東から北西方向に流路を取り、検出したほぼ中央で流路を真北から東に約7°東偏するように屈曲する。この溝は中央で屈曲するが、ほぼ直線的に延び、人為的に掘削されたものと考えられ、この北半分の流路方向は大内町に認められる条里方向とほぼ同じことが解る。この流路はSDV43と切り合いが確認でき、SDV43以前に掘削されたものである。

規模は幅約0.3~0.5mで、現存長約29mで検出した。溝は断面「U」字型を呈し、検出面からの深さは約0.20mを測る。

溝からは弥生土器・黒色土器・須恵器が出土している（第322図2867~2869）。

時期は溝から出土した黒色土器から12世紀である。

##### SDV30

SDV30は第V調査区中央部、標高17.1mにおいて検出した溝状遺構で、蛇行しながら南東方向から北東方向に流路を取り、さらにはほぼ直角に東方向に屈曲する。ちょうど屈曲後に延びる流路はSRV03と重なるようになり、さらに流路幅を広げ、消滅する。かなり蛇行し流路幅も一定していないことから人為的なものとは考えられない。

規模は幅約0.4~0.7mで、現存長約45mで検出した。溝は断面浅い「U」字型を呈し、検出面からの深さは約0.20mを測る。

溝からは少量の弥生土器が出土している（第322図2874~2879）。

時期は溝から出土した弥生土器及び埋土の状況も合わせ、弥生時代後期と考えられる。

##### SDV24

SDV24は第V調査区中央部、標高16.4mにおいて検出した溝状遺構で、現在の水路の下部から検出した溝である。流路方向はN-108°-Eを取り、後述するSDV45・43・53と直交する。

規模は幅約0.5mで、現存長約10mで検出した。溝は断面「U」字型を呈し、検出面からの深さは約0.54mを測る。

溝内から弥生土器・黒色土器・磁器が出土している（第322図2870~2873）。

時期は溝から出土した磁器から近世と考えられる。ただし古代の土器片も出土していることから古代から継続的に機能していたものと考えられる。

##### SDV36

SDV36は第V調査区中央部、標高15.9mにおいて検出した溝状遺構で、ほぼSDV23と同様に屈曲し、流路方向をN-16°-Eを取り、直線的に延びる。

規模は幅約0.3~0.5mで、現存長約31.5mで検出した。溝は断面浅い「U」字型を呈し、検出面からの深さは約0.30mを測る。

溝からは少量の土師質土器が出土している（第323図2881）。

時期は溝から出土した遺物から古代と考えられる。

#### SDV42

SDV42は第V調査区南部、標高16.2mにおいて検出した溝状遺構で、検出長は短く、流路方向はほぼSDV43と併行している。

規模は幅約0.15～0.4mで、現存長は途切れ途切れではあるが、約11mで検出した。溝は断面「U」字型を呈し、検出面からの深さは約0.1mを測る。

溝内から土師質土器が出土している（第329図2886）。

時期は出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね古代と考えられる。

#### SDV43

SDV43は第V調査区南部、標高16.15mにおいて検出した溝状遺構で、ほぼ直線的にN-17°-Eに流路を取る。

規模は幅約0.4～1.4mで、現存長約52mで検出した。溝は断面「U」字型を呈し、検出面からの深さは約0.25mを測る。

溝内から須恵器・土師器・黒色土器・土師質土器が出土している（第329図2887～2900）。

時期は出土遺物と埋土の状況も合わせ、12世紀後半と考えられる。

#### SDV45

SDV45は第V調査区南部、標高16.5mにおいて検出した溝状遺構で、ほぼ直線的にN-15°-Eに流路を取る。

規模は幅約0.4～0.6mで、現存長約40mで検出した。溝は断面緩やかな「U」字型を呈し、検出面からの深さは約0.25mを測る。

溝内から土師器壺・黒色土器・土師質土器・石器が出土している（第329図2901～2907）。

時期は出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね12世紀と考えられる。

#### SDV47

SDV47は第V調査区南部、標高16.15mにおいて検出した溝状遺構で、やや蛇行しながら南東方向から北西方向に流路を取る。

規模は幅約0.4～0.7mで、現存長約11mで検出した。溝は断面「U」字型を呈し、検出面からの深さは約0.15mを測る。

溝内から弥生土器が出土している（第325図2882～2885）。

時期は出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね弥生時代と考えられる。

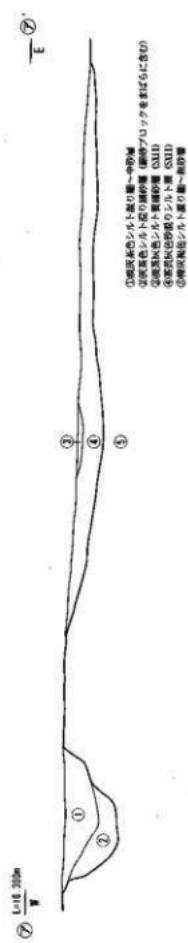
#### SDV48

SDV48は第V調査区南部、標高16.9mにおいて検出した溝状遺構で、ほぼ直線的にW-5°-Nとほぼ東西に流路を取る。

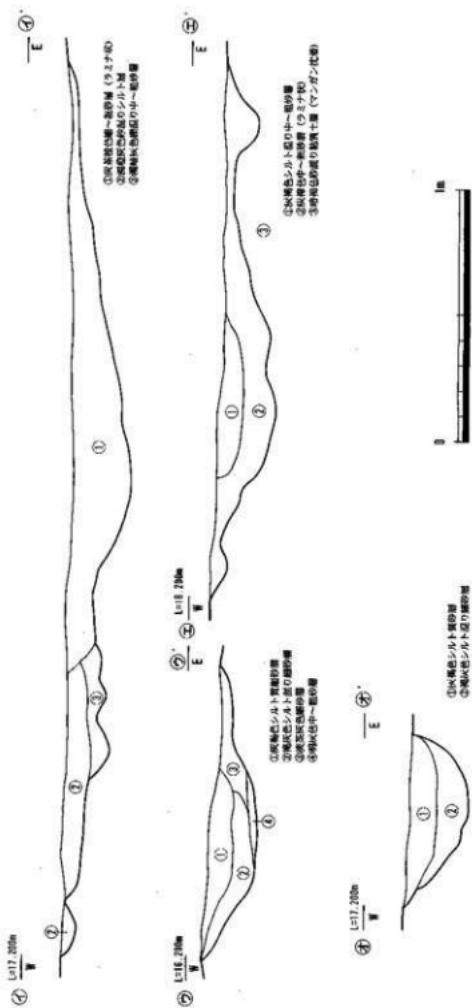
規模は幅約0.5～0.8mで、現存長約9mで検出した。溝は断面「U」字型を呈し、検出面からの深さは約0.10mを測る。

溝内から縄文土器・土師器が出土している（第329図2908・2909）。

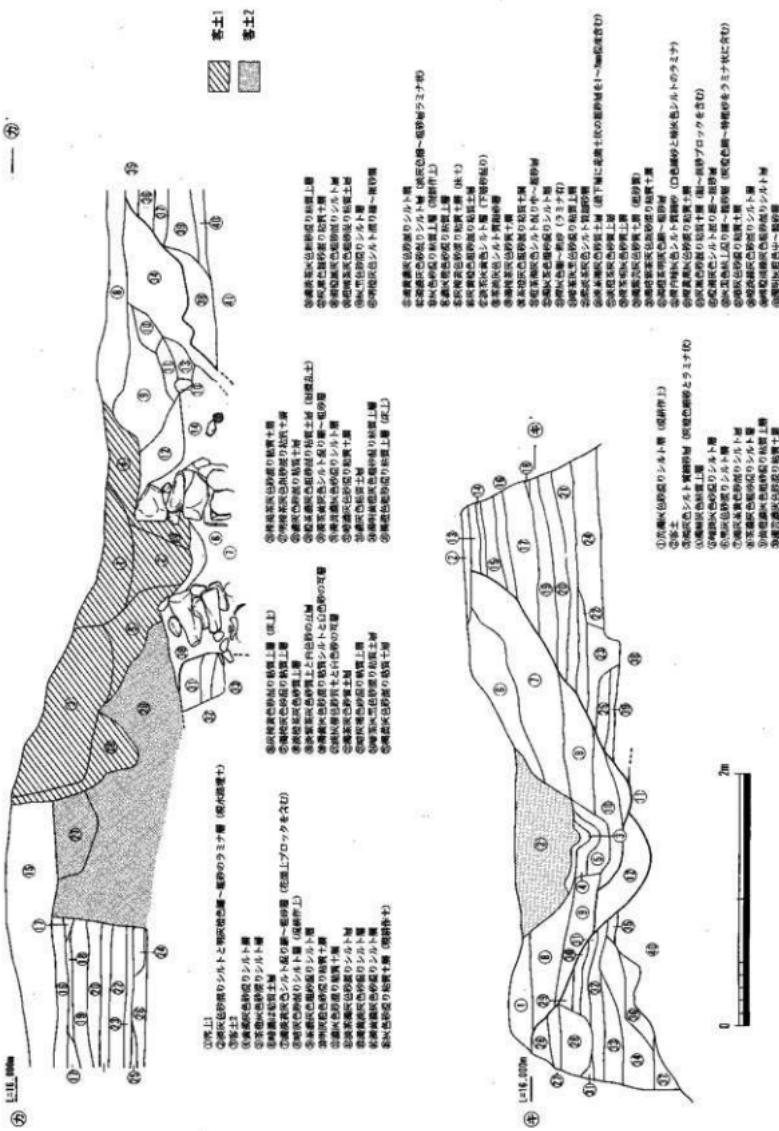
時期は出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね8世紀と考えられる。



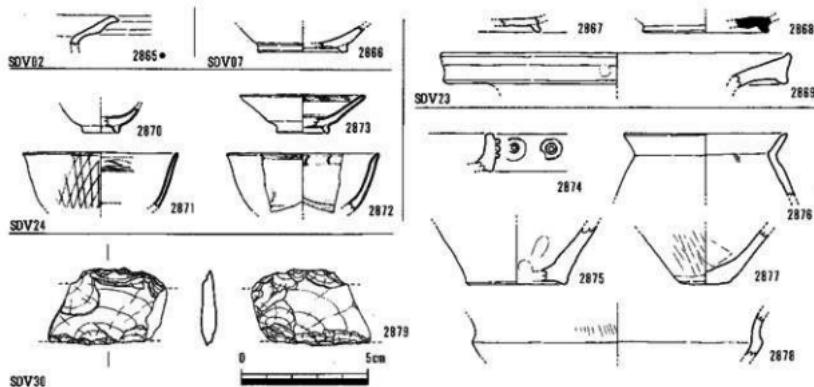
第319図 SDV22断面図(1/20)



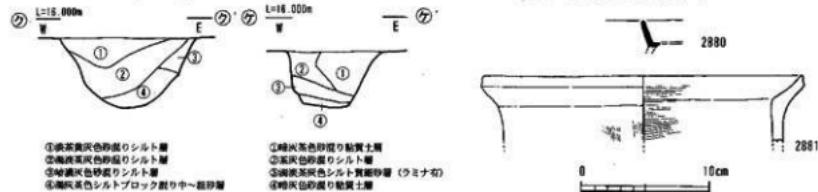
第320図 SDV30断面図(1/20)



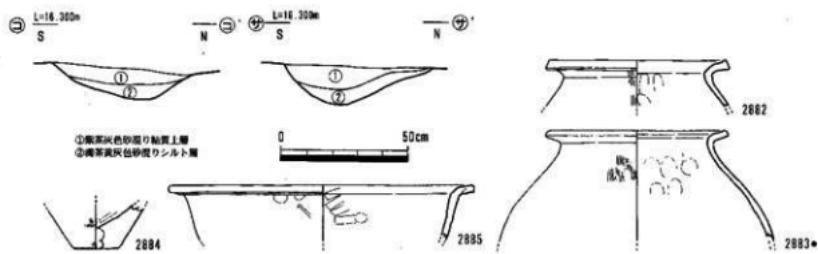
第321図 V区 土層断面図(1/40)



第322図 SDV02・SDV07・SDV23・SDV24・SDV30出土遺物実測図(1/4)



第323図 SDV36断面図(1/20), 出土遺物実測図(1/4)



第325図 SDV47断面図(1/20), 出土遺物実測図(1/4)

#### SDV53

SDV53は第V調査区南部、標高16.9mにおいて検出した溝状遺構で、ほぼ直線的にN-20°-Eに流路を取る。

規模は幅約0.3~0.8mで、現存長約27mで検出した。溝は断面緩やかな「U」字型を呈し、検出面からの深さは約0.30mを測る。

溝内から土師質土器が出土している(第329図2910・2911)。

時期は出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね12世紀と考えられる。

### SDV54

SDV54は第V調査区南部、標高16.9mにおいて検出した溝状遺構で、ほぼ直線的にW-12°-Nに流路を取る。

規模は幅約0.5～0.7mで、現存長約5.7mで検出した。溝は断面緩やかな「U」字型を呈し、検出面からの深さは約0.12mを測る。

溝内から土師器が出土している（第329図2912）。

時期は出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね12世紀と考えられる。

### SDV55

SDV55は第V調査区南部、標高17.1mにおいて検出した溝状遺構で、ほぼ直線的にW-28°-Nに流路を取る。

規模は幅約0.9～1.9mで、現存長約10.5mで検出した。溝は断面緩やかな「U」字型を呈し、検出面からの深さは約0.55mを測る。

溝内から弥生土器・須恵器・土師質土器が出土している（第329図2913～2917）。

時期は出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね8世紀と考えられる。

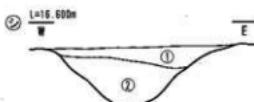
### SDV59

SDV59は第V調査区南部、標高17.3mにおいて検出した溝状遺構で、蛇行しながら南東から北西方に向流路を取る。

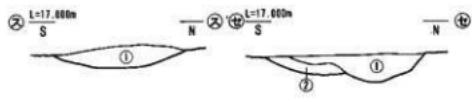
規模は幅約1.75～2mで、現存長約14mで検出した。溝は断面緩やかな「U」字型を呈し、検出面からの深さは約1.0mを測る。

溝内から土師器・石器が出土している（第330図2918・2919）。

時期は出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね7世紀と考えられる。

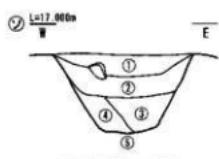


第324図 SDV54断面図(1/20)  
①高灰褐色砂質リシルト層  
②深茶褐色～黒褐色（ウミナ有）



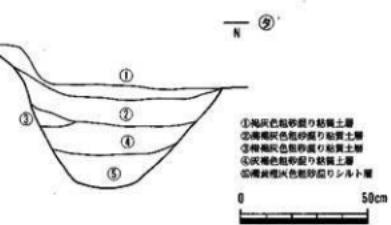
①高灰褐色砂質リシルト層  
②灰茶色砂質リシルト層

第327図 SDV54断面図(1/20)



①暗灰褐色砂質リシルト層  
②暗灰褐色砂質リシルト層  
③深灰褐色砂質リシルト層  
④深灰褐色砂質リシルト層  
⑤灰褐色砂質リシルト層  
※H表面（地盤）（ベース）

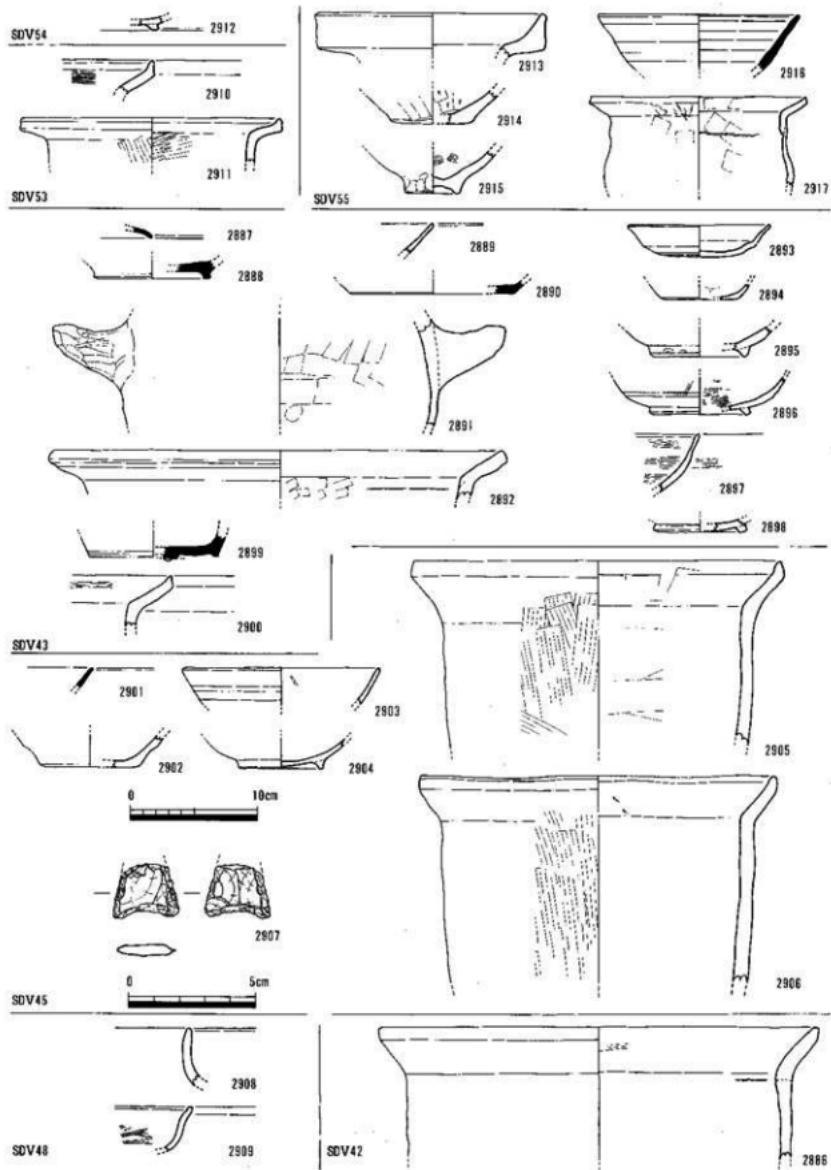
第326図 SDV53断面図(1/20)



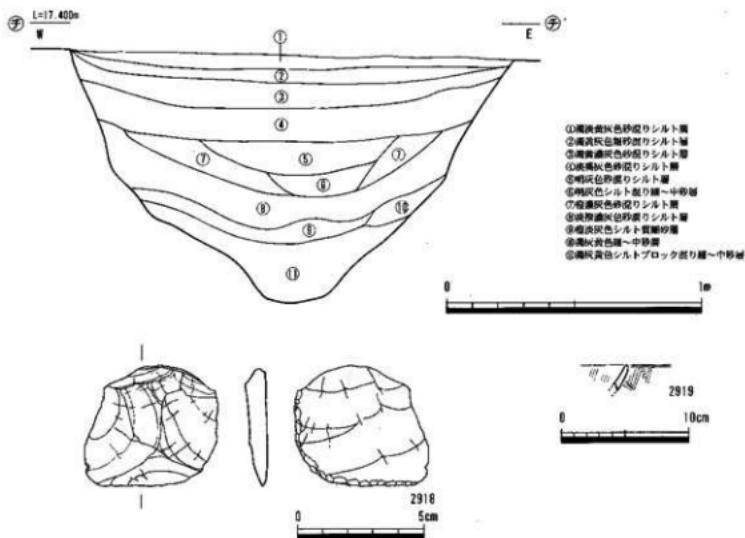
①褐色灰砂質リシルト層  
②褐色灰砂質リシルト層  
③褐色灰砂質リシルト層  
④褐色灰砂質リシルト層  
⑤褐色灰砂質リシルト層

0 50cm

第328図 SDV55断面図(1/20)



第329図 漢出土遺物実測図(1/4)



第330図 SDV59断面図(1/20), 出土遺物実測図(1/4)

## 不明遺構

### SXV02

SXV02は第V調査区北部、標高17.7mにおいて検出した不明遺構で、平面形態は楕円形を呈する。規模は最大幅2.96m、最小幅1.89m、検出面からの深さ0.2mを測る。掘り方断面は浅いレンズ状を呈し、土層は4層に細分できる。

出土遺物及び埋土の状況も合わせ、弥生時代後期と考えられる。

### SXV05

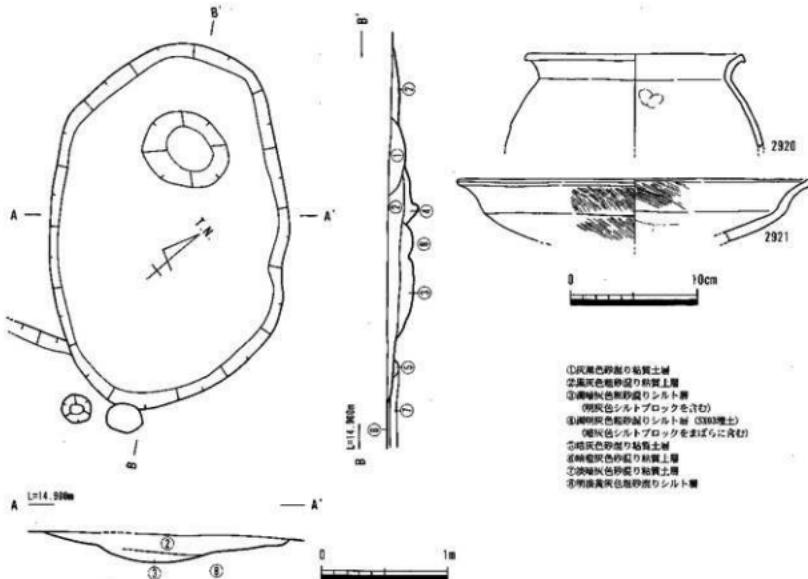
SXV05は第V調査区北部東、標高14.6mにおいて検出した不明遺構で、平面形態は東西に長い隅丸の長方形状を呈する。東側をSRV05によって切られているために全容は不明である。規模は東西(5.5m)、南北3.5m、深さ0.5mを測る。

出土遺物及び埋土の状況も合わせ、12世紀頃と考えられる。

### SXV06

SXV06は第V調査区北部東、標高15.1mにおいて検出した不明遺構で、平面形態は楕円形を呈し、規模は東西3.84m、南北3.26mを測る。断面は箱形で、底面はほぼ平らを呈する。検出面からの深さは0.36mを測る。土層はほぼ水平堆積で、徐々に埋没したことが確認できる。

出土遺物及び埋土の状況も合わせ、弥生時代後期と考えられる。

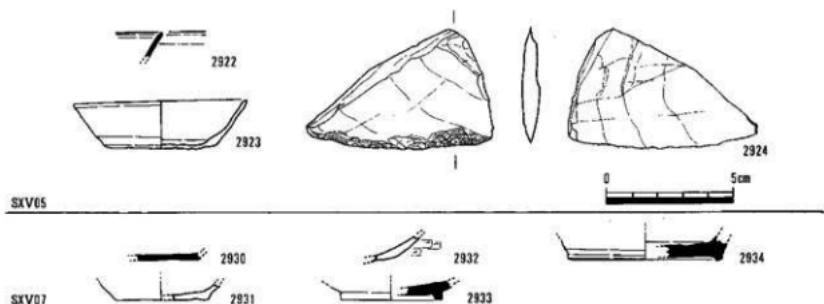


第331図 SXV02平・断面図(1/40), 出土遺物実測図(1/4)

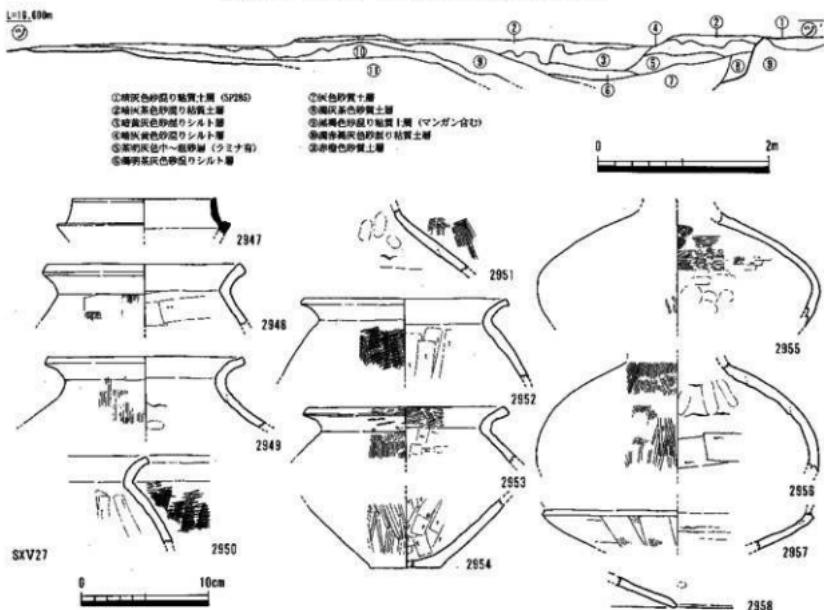
SXV07

SXV07は第V調査区中央北、標高16.0mにおいて検出した不明遺構で、平面形態は不定形を呈する。検出面からの深さは0.2mを測る。

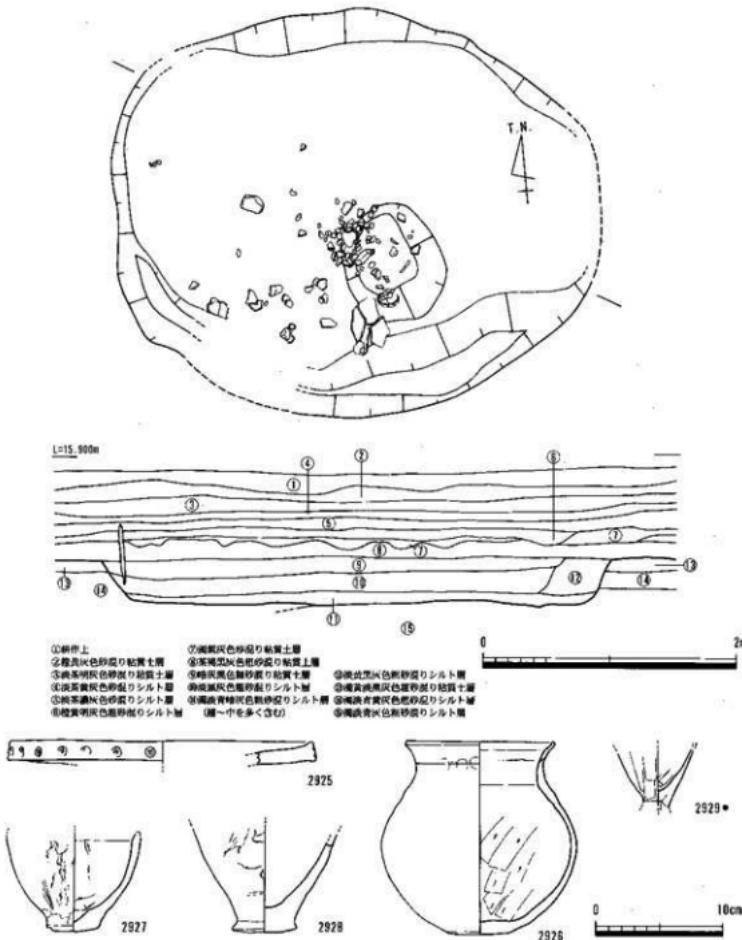
出土遺物及び埋土の状況も合わせ、古代と考えられる。



第332図 SXV05・SXV07出土遺物実測図(1/4)



第333図 SXV27断面図(1/60)、出土遺物実測図(1/4)



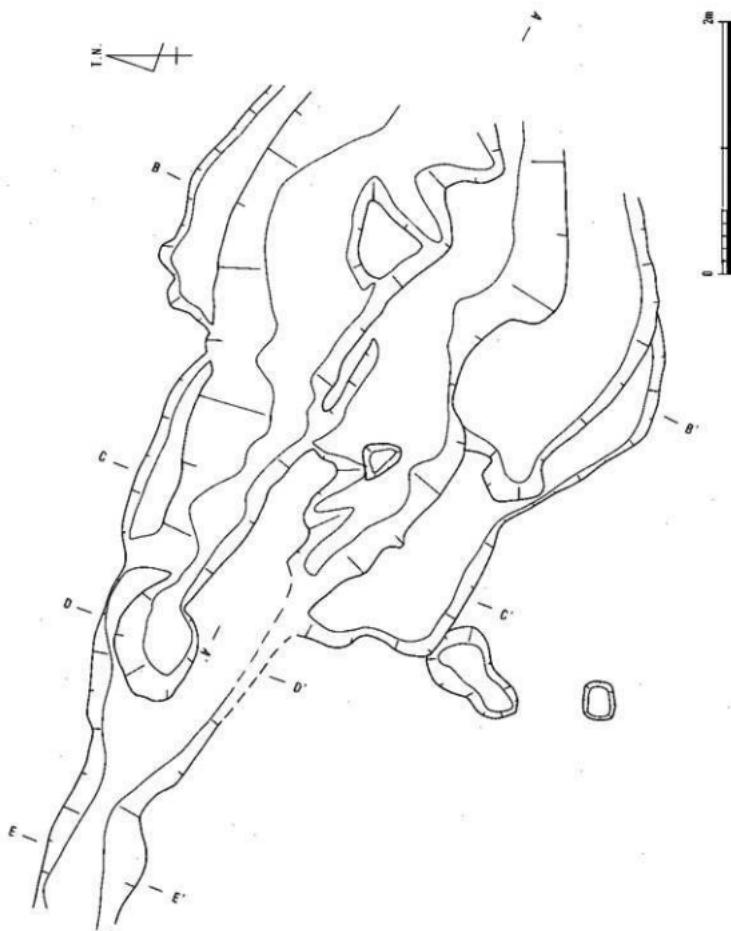
第334図 SXV06平・断面図(1/40), 出土遺物実測図(1/4)

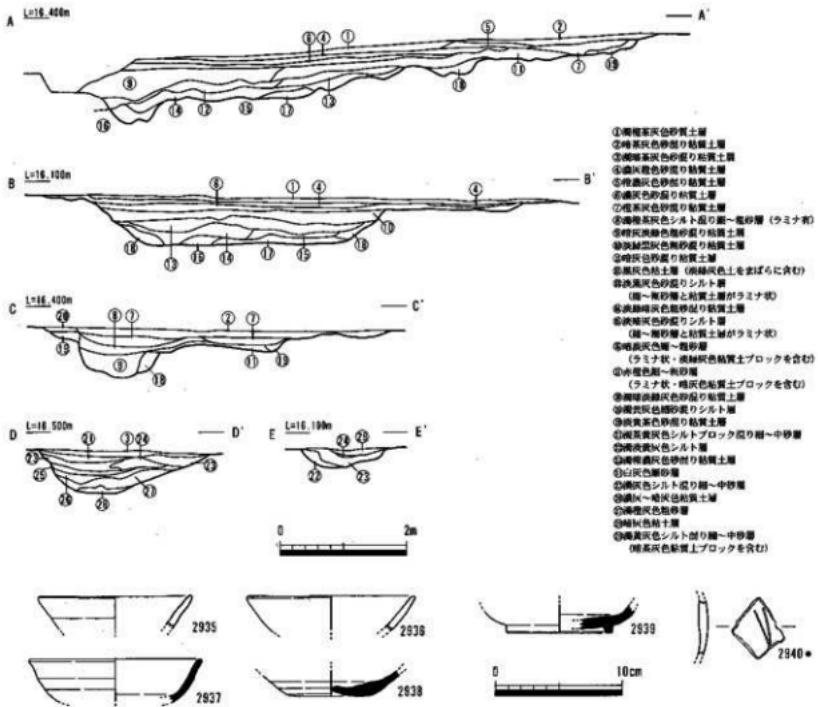
### SXV17

SXV17は第V調査区中央部、標高14.2mにおいて検出した不明遺構で、平面形態は東方向に扇形に広がる溝状を呈する。規模は検出面で西側約2.0m、東側約7.3mを測る。断面は西側から東側に向かい緩やかに傾斜する。

出土遺物及び埋土の状況も合わせ、古代と考えられる。

第335図 SXV17平面図(1/80)





第336図 SXV17断面図(1/80), 出土遺物実測図(1/4)

## SXV25

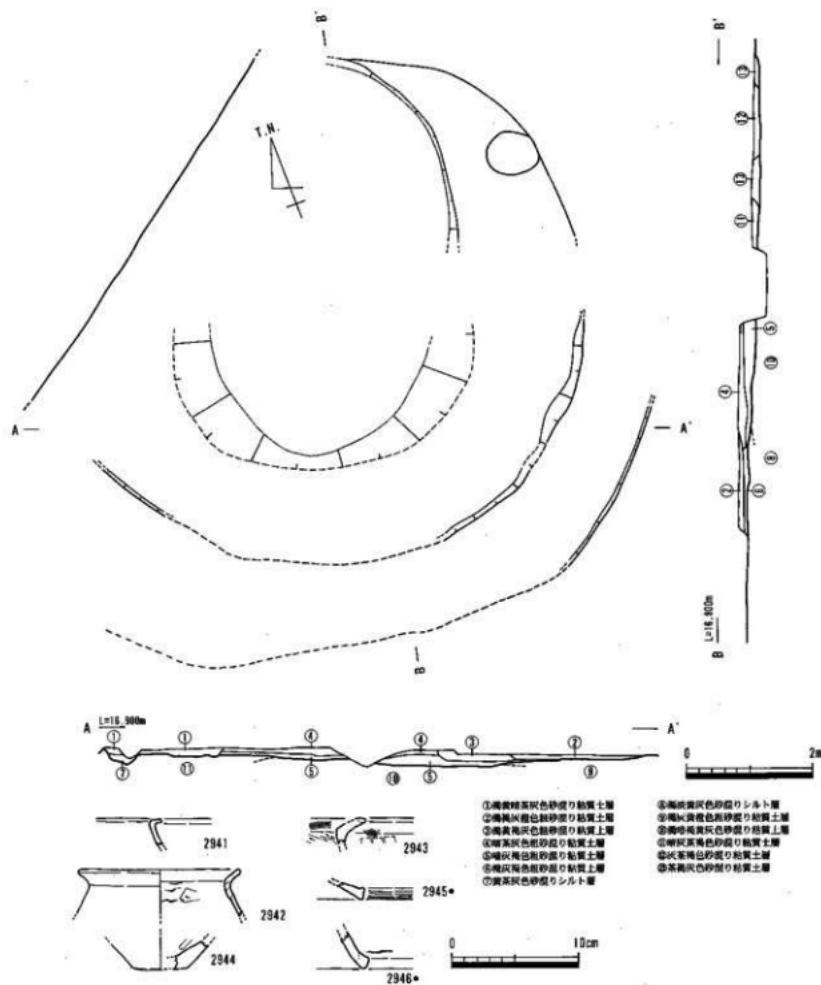
SXV25は第V調査区南部、標高16.7 mにおいて検出した不明遺構で、西側は調査区外に延びる。平面形態は円形を呈し、規模は直径推定で、(9.40 m)を測る。断面は緩やかなレンズ状を呈し、竪穴住居の様相を呈する。検出面からの深さは0.22 mを測る。土層はほぼ水平堆積で、徐々に埋没したことが確認できる。

出土遺物及び埋土の状況も合わせ、弥生時代と考えられる。

## SXV27

SXV27は第V調査区南部、標高17.5mにおいて検出した不明遺構で、北側が調査区外に延びる。平面形態は不定形で、規模は不明である。

出土遺物及び埋土の状況も合わせ、弥生時代と考えられるが、須恵器坏身（第333図2947）が出土しているので、確定できない。



第337図 SXV25平・断面図(1/80), 出土遺物実測図(1/4)

## 自然流路

第V調査区で検出した自然流路は計11条で、南北に長い調査区の北西部と東側に集中する。北西部で検出した流路は調査区西側に現在ある古川の山流路と考えられ、かなり蛇行していた様子が伺われる。一方東側で検出した流路は予備調査時に検出した原間池一湊川方向に流路を取る旧流路cで、山古川の支流と考えられる。

### SRV01・06

SRV01は第V調査区北西部、標高約15.1mで検出した自然流路で、北西側を蛇行しながら北流し、南部で南西方向に屈曲する。西側小調査区で検出したSRV06と同一流路と考えられるが、調査区が別であるためここでは流路名を分けて掲載した。

まずSRV01の規模は蛇行し、北流するために一定せず第353図上層断面①-④'部分で、幅約12.4m、深さ約1.8mを測る。SRV01・06の土層断面として第352図上層断面④-④'、⑤-⑤'（SRV06）、第353図上層断面④-④'、第354図上層断面⑦-⑦'、第355図上層断面②-②'（SRV01）がある。これらの土層から堆積埋土は灰色系のシルト層と橙～茶灰色系の砂層との互層で、粘質土層が無いことから短期間に掘削され、堆積した流路であることが解る。

時期は予備調査時に中世の遺物を出土し、今回の調査で弥生時代・古代・中世の遺物を出土している（第356図2969・2970）。従って時期は中世と考えられ、原間遺跡で検出した一番新しい旧古川（III流路b）と考えられる。第III調査区で検出した自然流路SRV01の対岸（東側）の肩部と考えられる。

### SRV02

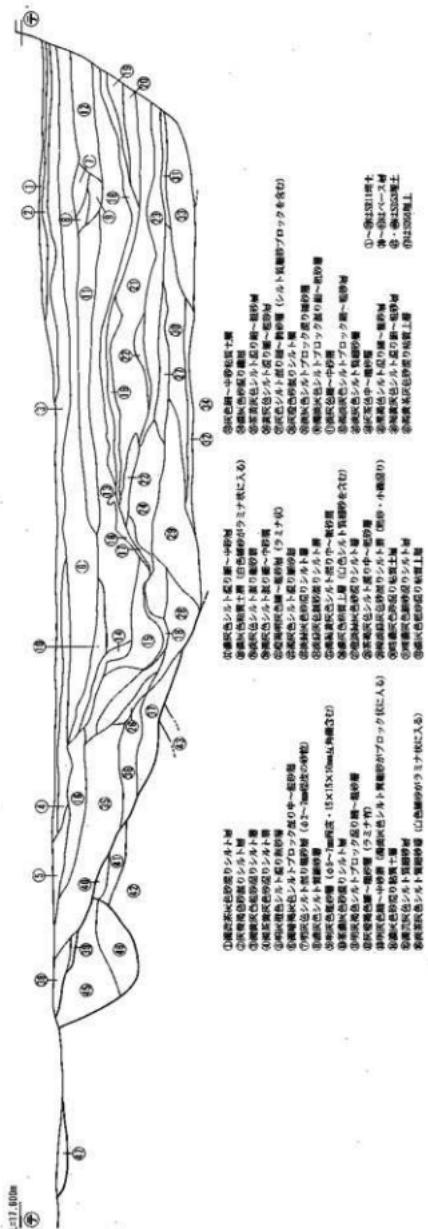
SRV02は第V調査区北部東、標高14.8mで検出した自然流路で、調査区内で蛇行しながら左右に支流を延ばし、流路を南から北方向に取る。平面的には南部でSRV05に繋がり、SRV05から北方向に派生する流路である。この流路はSRV03・04を切っている。

この流路からは須恵器・土師器などが出土している（第356図2969・2970）。これらの遺物からみると古代・中世となるが、SRV05と同一流路であることから、機能していた時期は中世（12～13世紀）と考える。

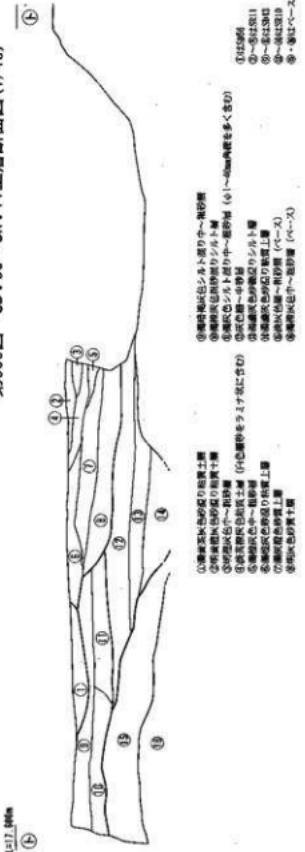
### SRV03

SRV03は第V調査区中央部、標高16.1mで検出した自然流路で、調査区内で蛇行しながら南北から北東に流路を取る。平面的には西部でSDV30に、東部でSRV02・04・05によって切られている。この流路の第349図上層断面⑨-⑨'をみるとSRV03は上位・下位に分けられる。また第350図上層断面③-③'では明確にSRV03が上位と下位に分離され、それぞれが溝状の落ち込みを呈する。上位は土層③～⑨が埋土で、規模は幅約3.6m、深さ約1.0mを測り、下位は土層⑩～⑪が埋土で、規模は幅約2.2m、深さ約1.0mを測る。この上位にSRV04が確認できる。

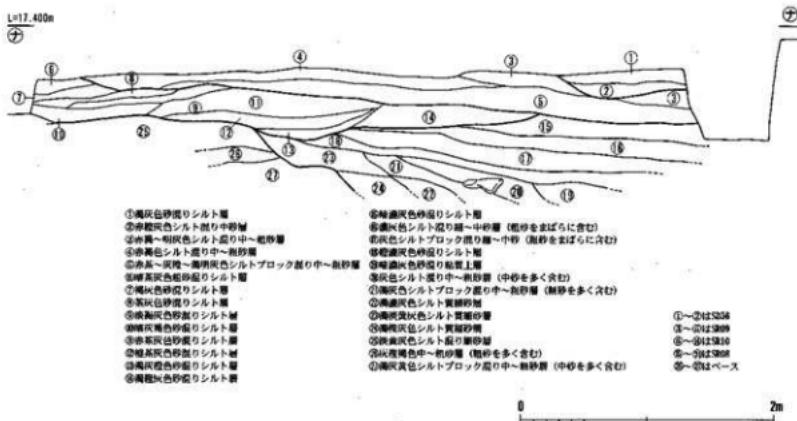
SRV03上位は西端で流路として発生し、ほぼ中央部で北方向に屈曲する。規模は中央部で幅約6.5mを測る。堆積土層は細～粗砂層を基本として、厚さ30cm程度で薄く広がる。屈曲後は流路幅を広げ、さらに堆積層は薄くなり消滅する。一方SRV03下位も上位と同様に西端から流路として発生し、西部で幅約5m、深さ約0.7mと浅い流路を呈しているが、徐々に幅を減じ、幅約1.6m程度の溝状になり、



第338図 S0V56・SRV11土層断面図(1/40)



第339図 S0V56・SRV11土層断面図(1/40)



第340図 SRV09~11土層断面図(1/40)

やや南に湾曲しながら東方向に流路を取る。検出長は約72 mを測る。この流路は第V調査区東端まで延び、調査区外に延びる。ただし東側の第VI調査区では検出していないことから、この流路も消滅するようである。第V調査区北東部には低湿地cが確認されていることから流路の機能が消滅したものと考える。

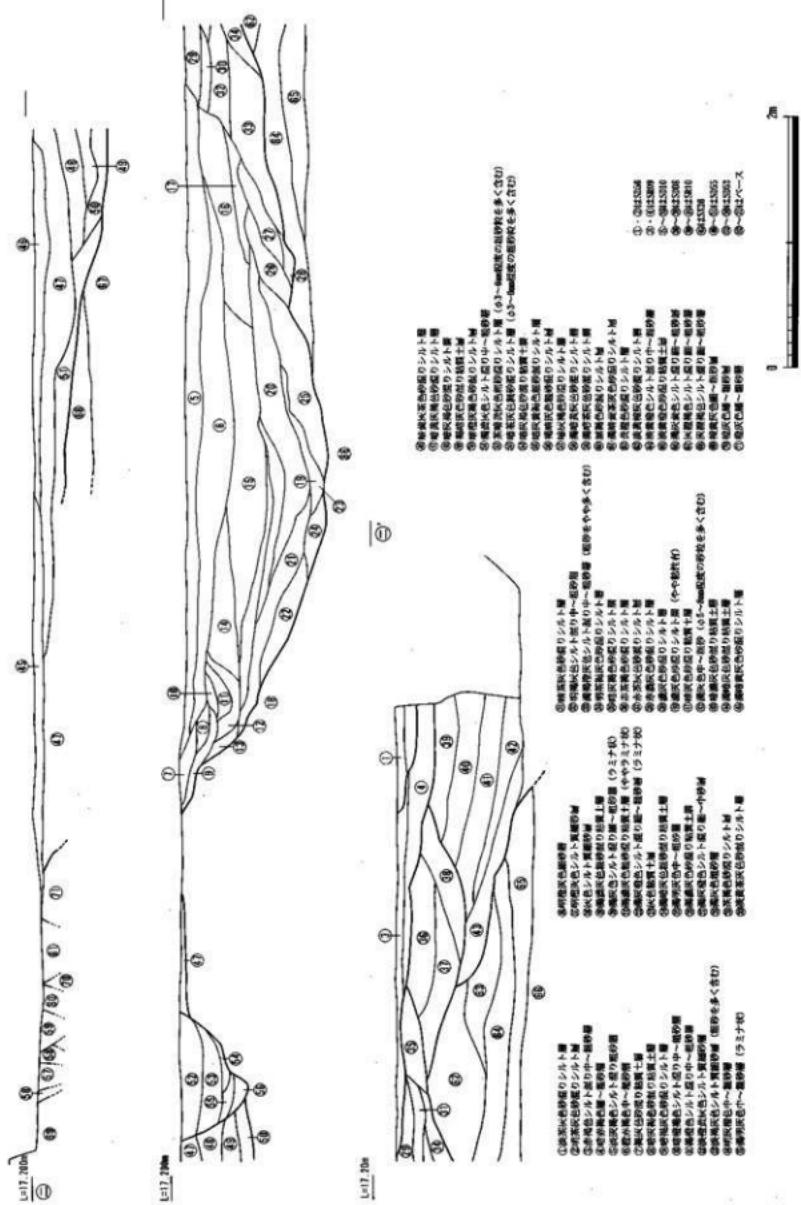
このSRV03はちょうど第V調査区の中央部であり、南北を2分している。時期は出土遺物から弥生時代後期で、SRV03下位から多量に遺物が出土している。北側には同時期の竪穴住居を中心として遺構があり、特にSRV03の第II群・III群とした部分において特に出土量が多い。この流路によって南の集落と北の集落が隔てられている。

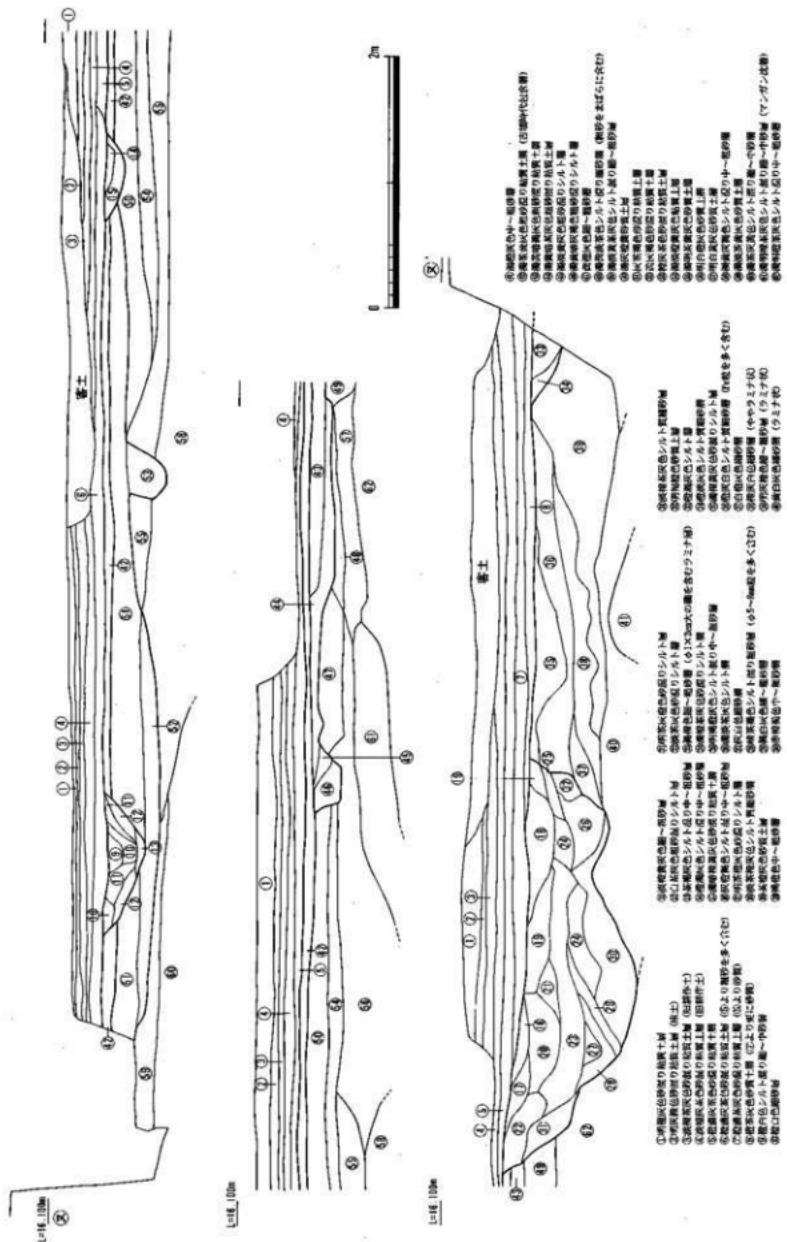
約72 mにも及ぶこの流路からは全ての地区において遺物が出土している。特に出土量が多いのは北側で検出している竪穴住居に近接する部分、後述する第II・III群である（第358・359図）。出土遺物の取り上げは掘削時に取り上げたものと最下位及び中位に集中して出土した遺物については平面実測（第357～360図）を行い、西から第I～VI群として取り上げた。

第361～365図 2987～3071はSRV03第I群とした部分の掘削時において出土した遺物である。弥生時代前期（2997）、中期（3003）の遺物も少量認められるが、主としては弥生時代後期後半を中心とする時期のものである。甕は口縁部の厚いものが多く、底部はしっかりとした平底で、体部最大径は上位にあるものである。小型の鉢は少なく、全体的に鉢の量も少ない。製塩土器は体部がやや内湾するもので、体部外面へラ削りが施されている。2996は滑石製？の勾玉で、一部欠損している。当調査区では南の集落の中心と考えられる大型（床面積56.7 m<sup>2</sup>）のSHV04から完形の勾玉が出土していることから、北側の集落の中心と考えられる大型（床面積78.5 m<sup>2</sup>）のSHV03との関係が注目される。また石製品は結晶片岩製の石庖丁が出土している。

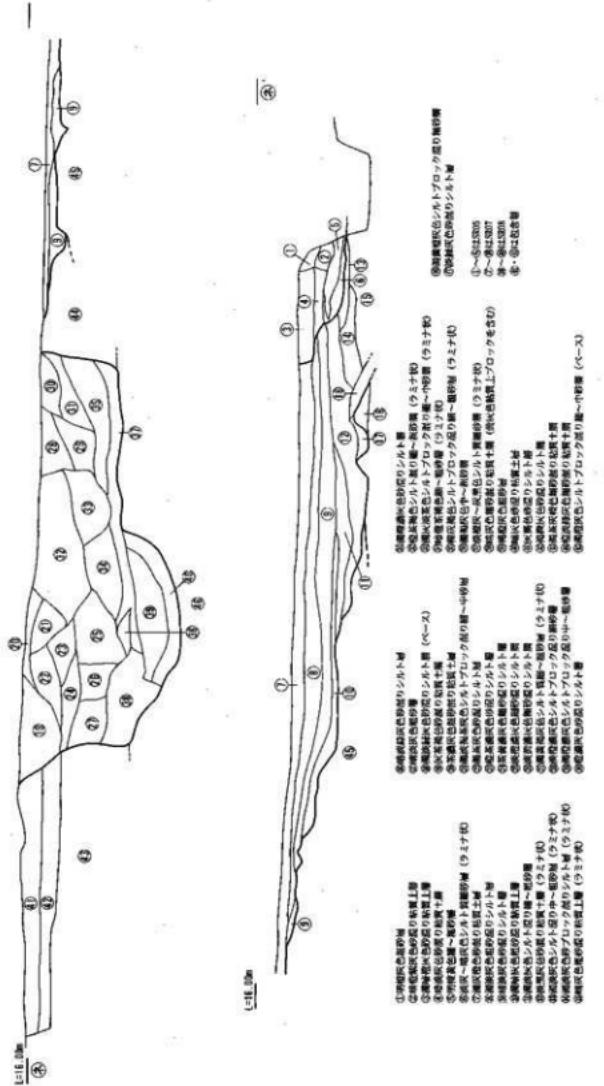
第366～369図 3072～3120は第I群として取り上げたもので、SRV03の最下層に位置し、完形に近いものが多数認められる。第366図 3072・3073は頸部と体部の屈曲部外面にヘラ先による刺突文が施されており、若干古い様相を呈している。しかし全体的にみると前述した第I群とほぼ同じ時期と

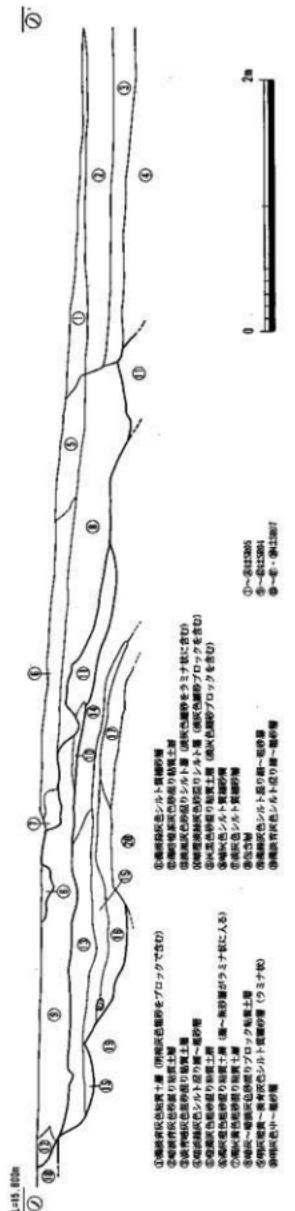
第341図 V区(○)一(○) 土層断面図(1/40)



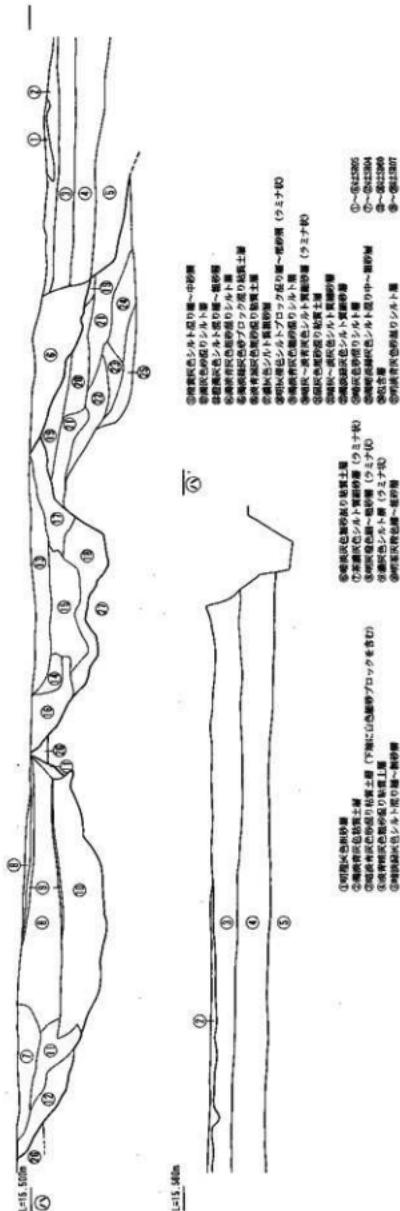


第343図 SRV05トレチ土層断面図(1/40)

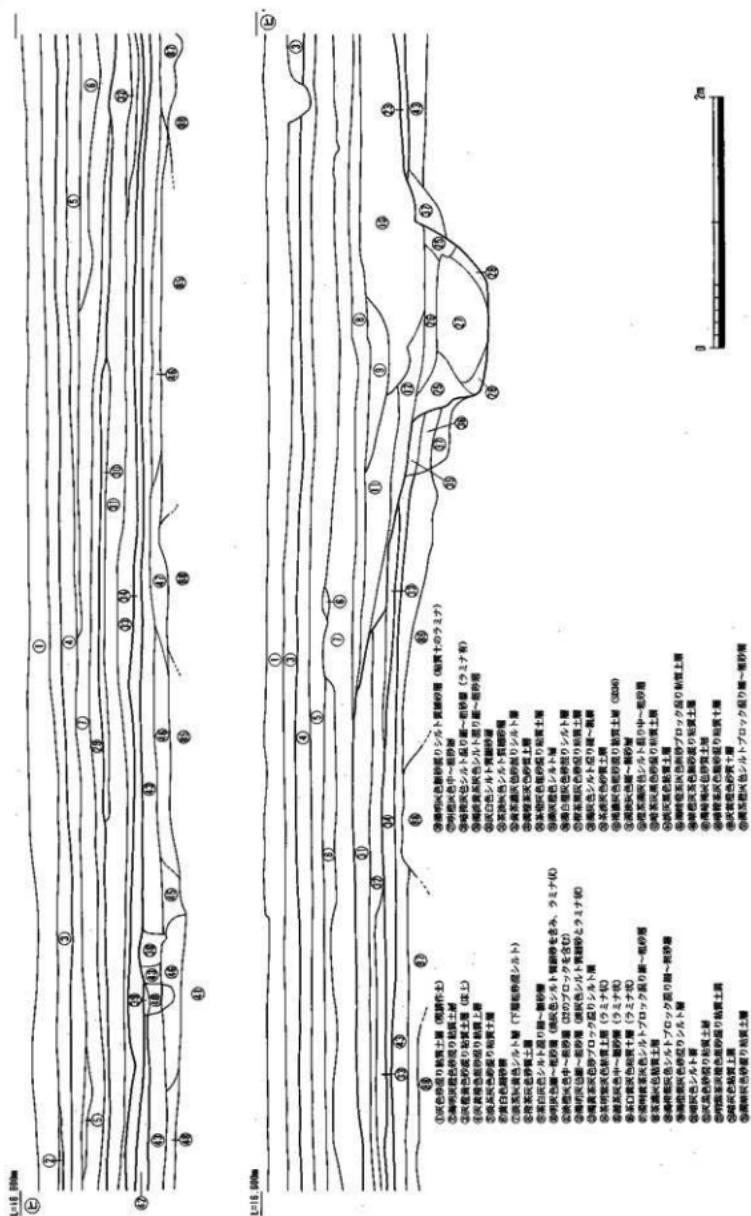




第344図 SRV05トレチ土層断面図(1/40)

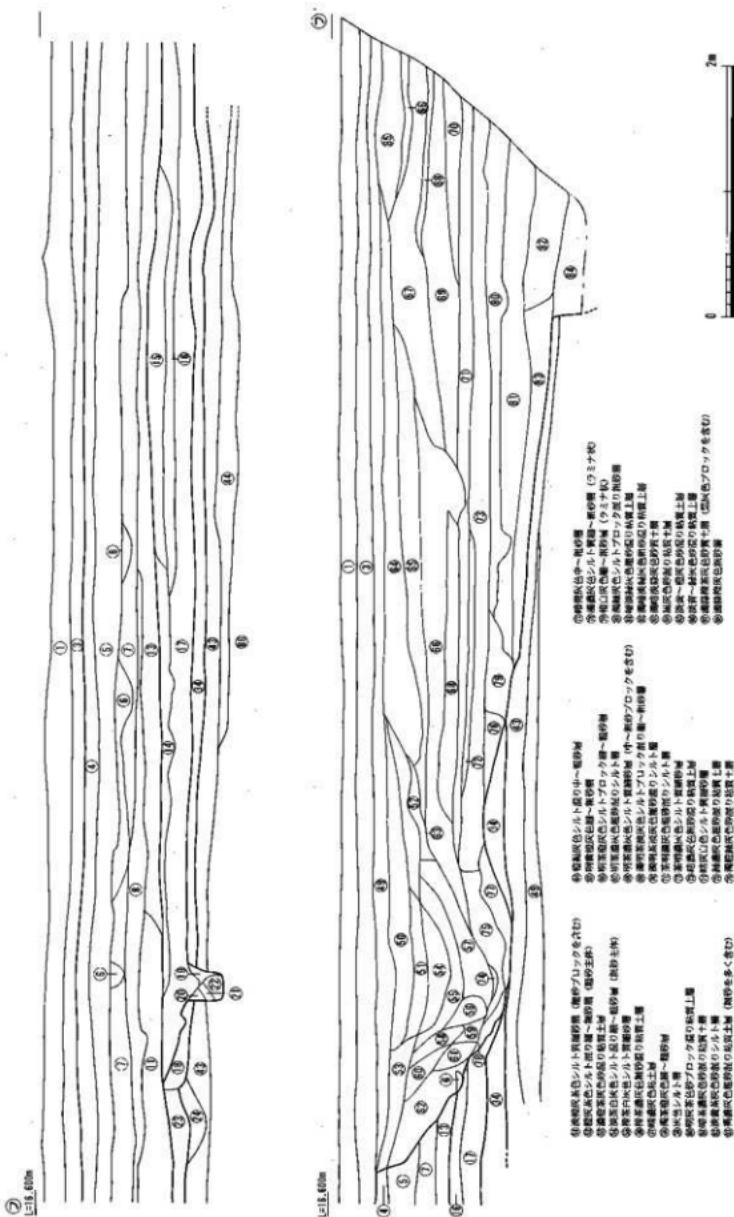


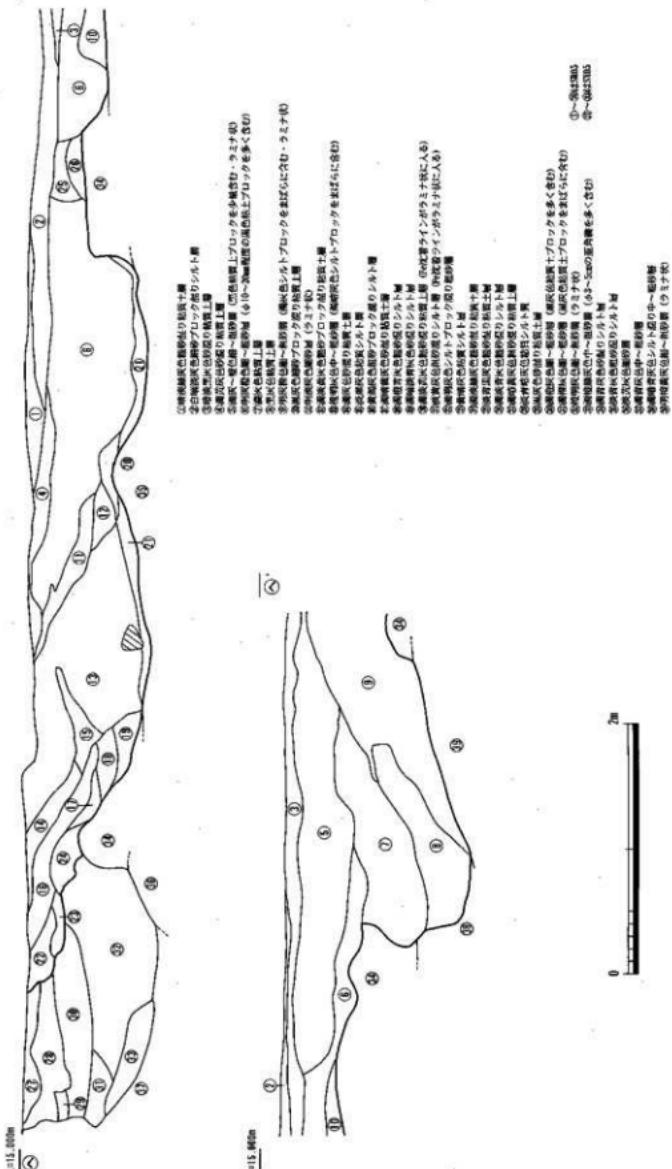
第345図 SRV05トレチ土層断面図(1/40)



第346図 V区(一)・土層断面図(1/40)

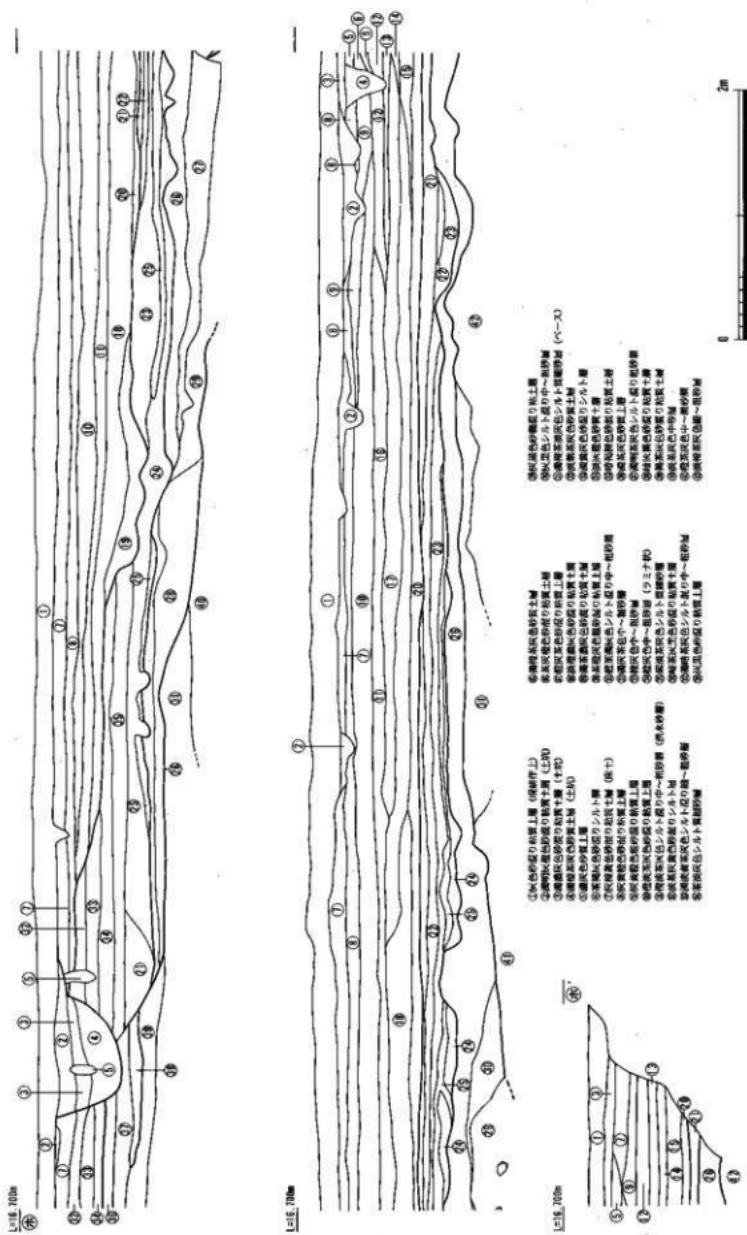
第347図 ⑦-⑦' 土層断面図(1/40)

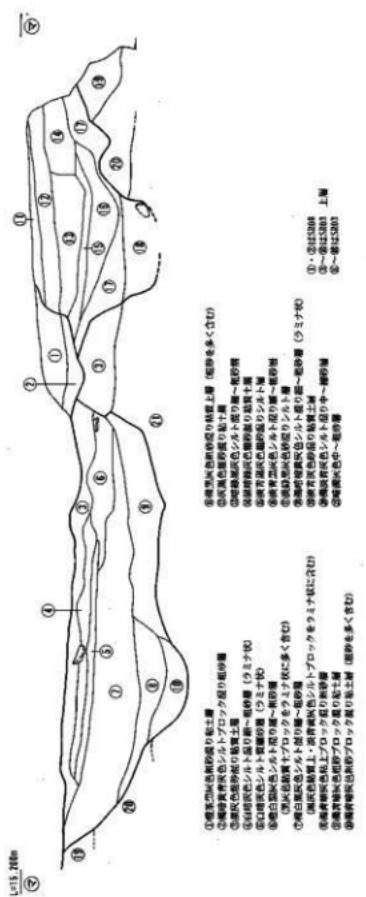




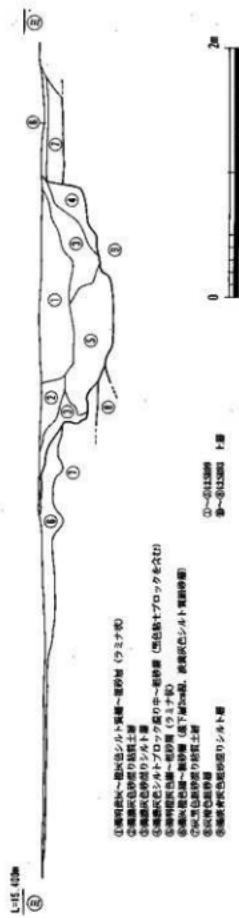
第348図 SRV05・SXV05土壌断面図(1/40)

第349図 SDV30・SRV03土層断面図(1/40)



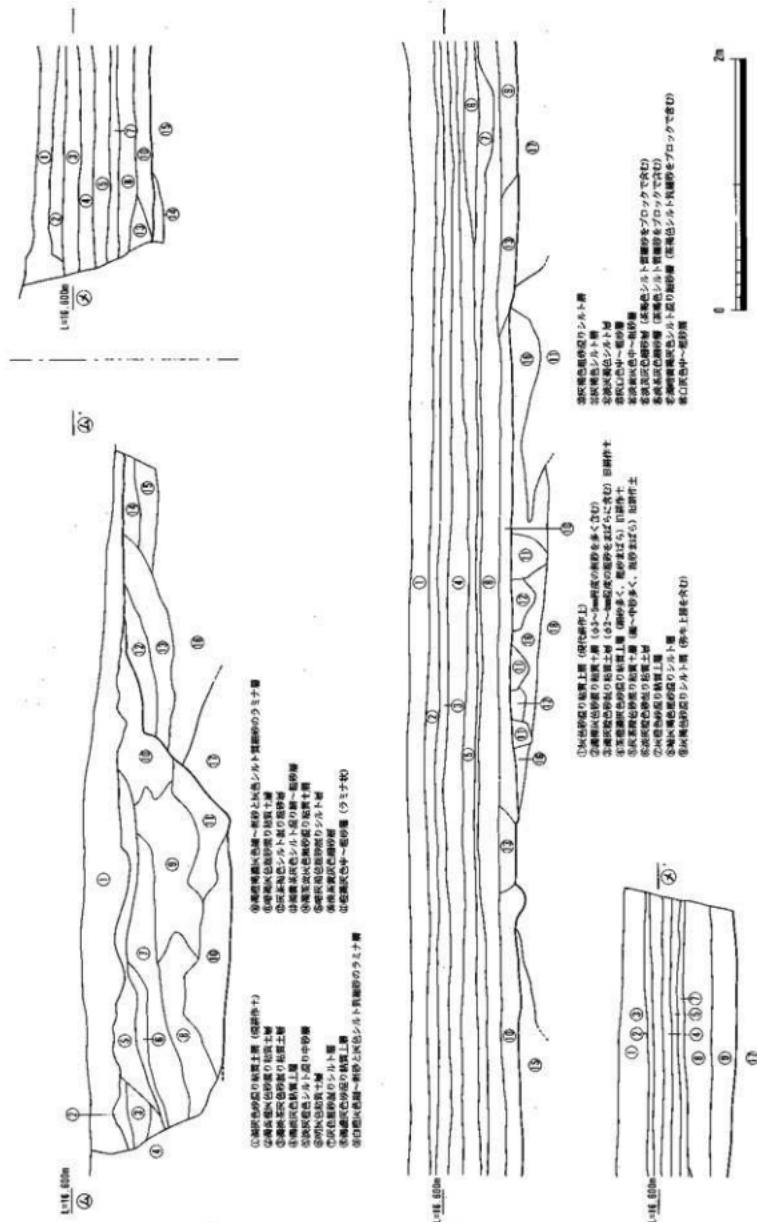


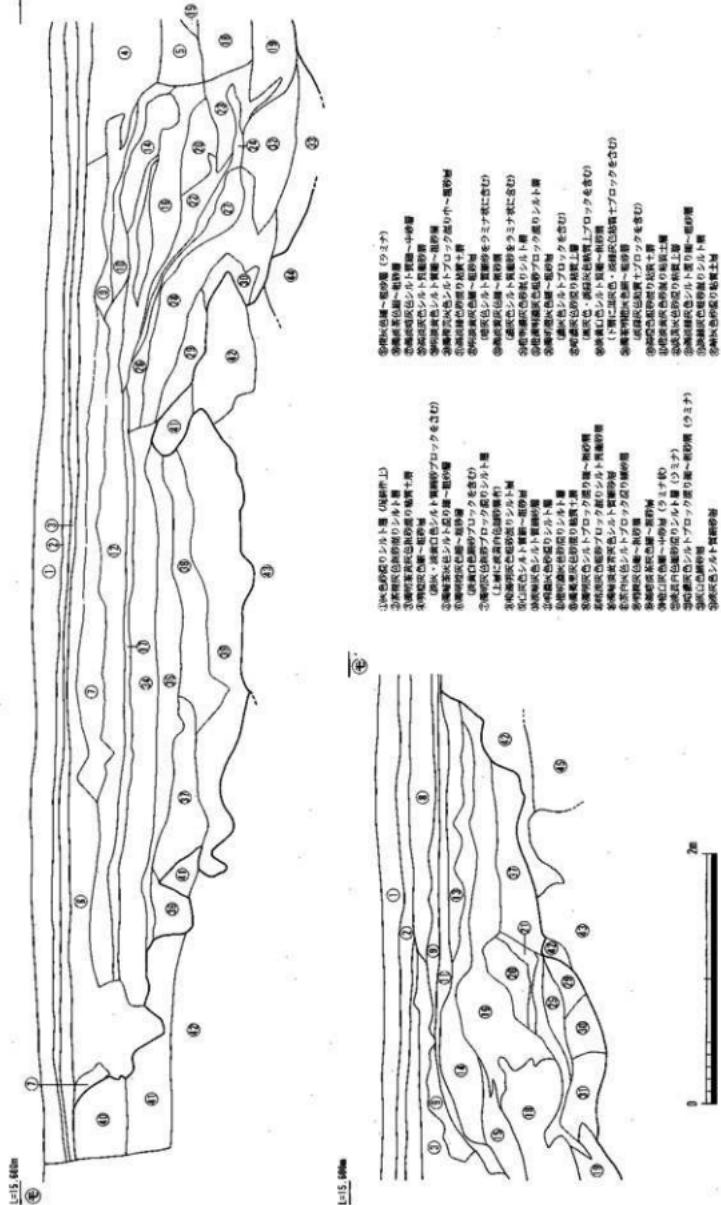
第350図 SRV03・04 土層断面図 (1/40)



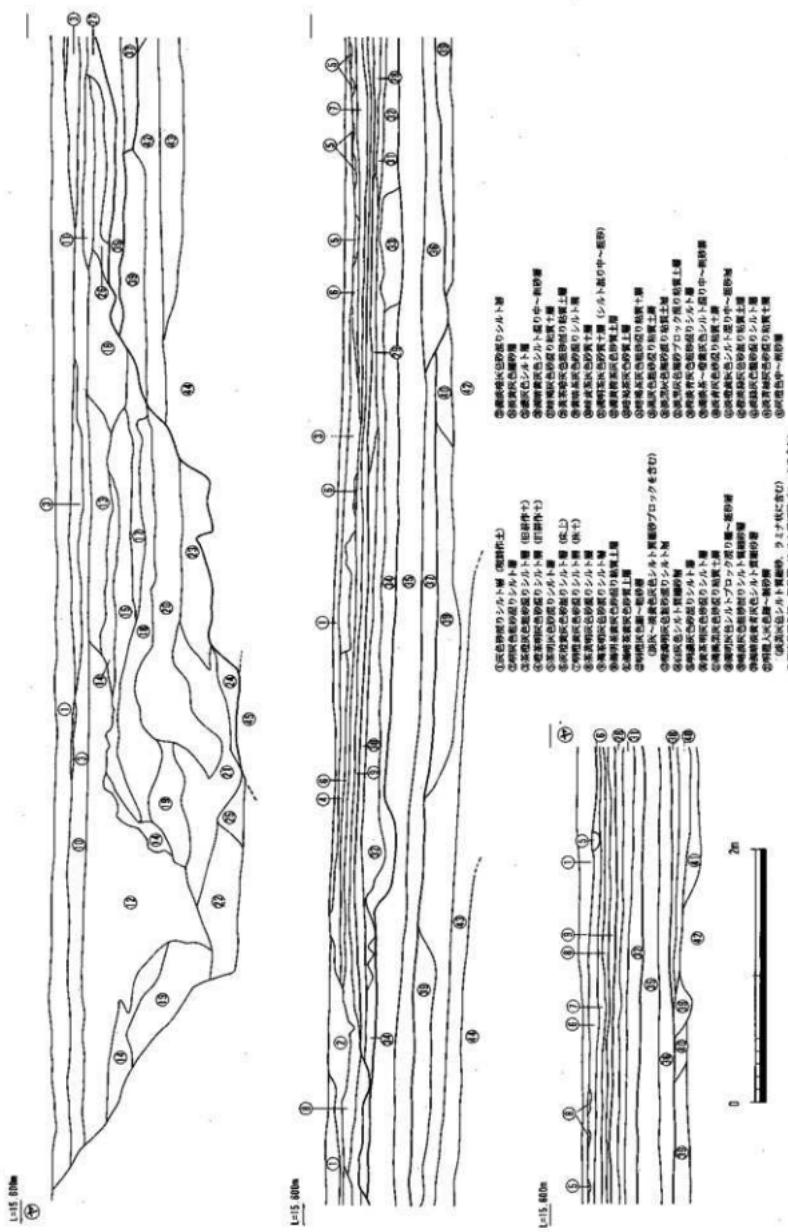
第351図 SRV03・04 土層断面図 (1/40)

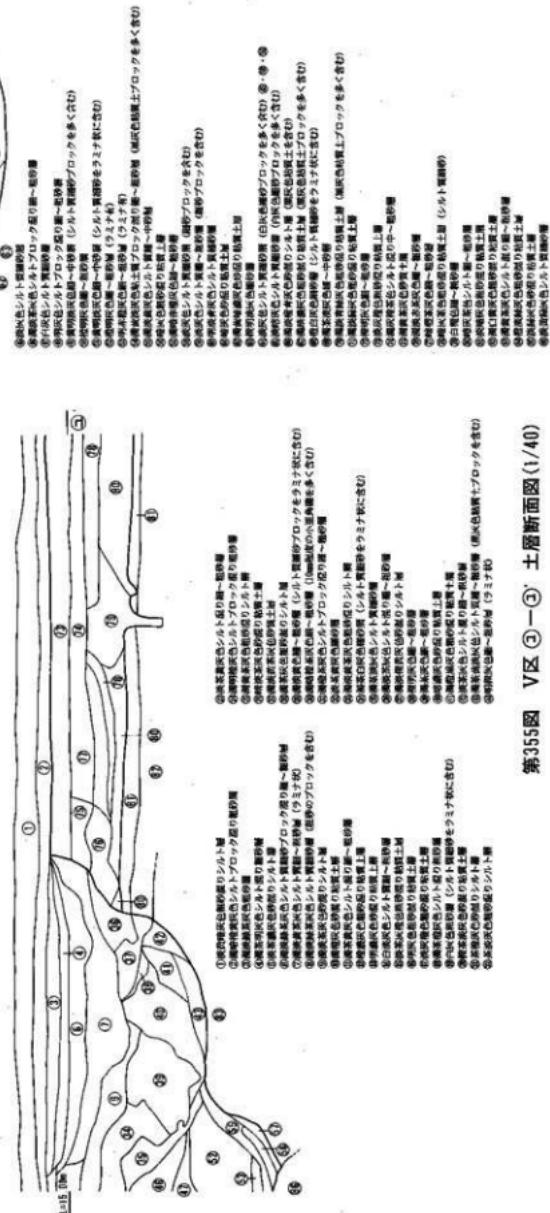
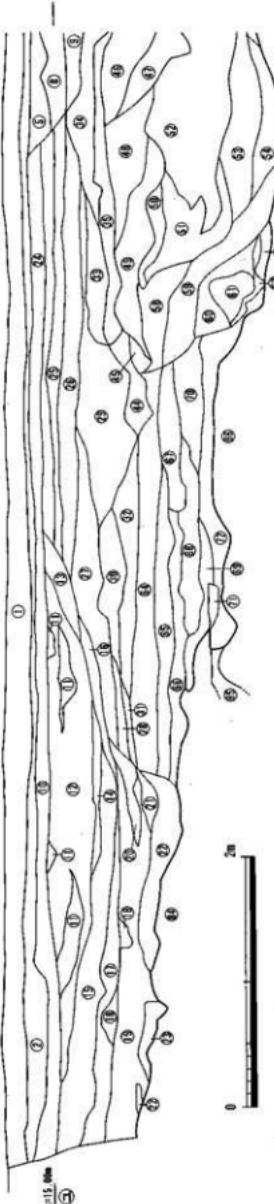
第352図 V&SRV06 ②—③' 土層断面図(1/40)



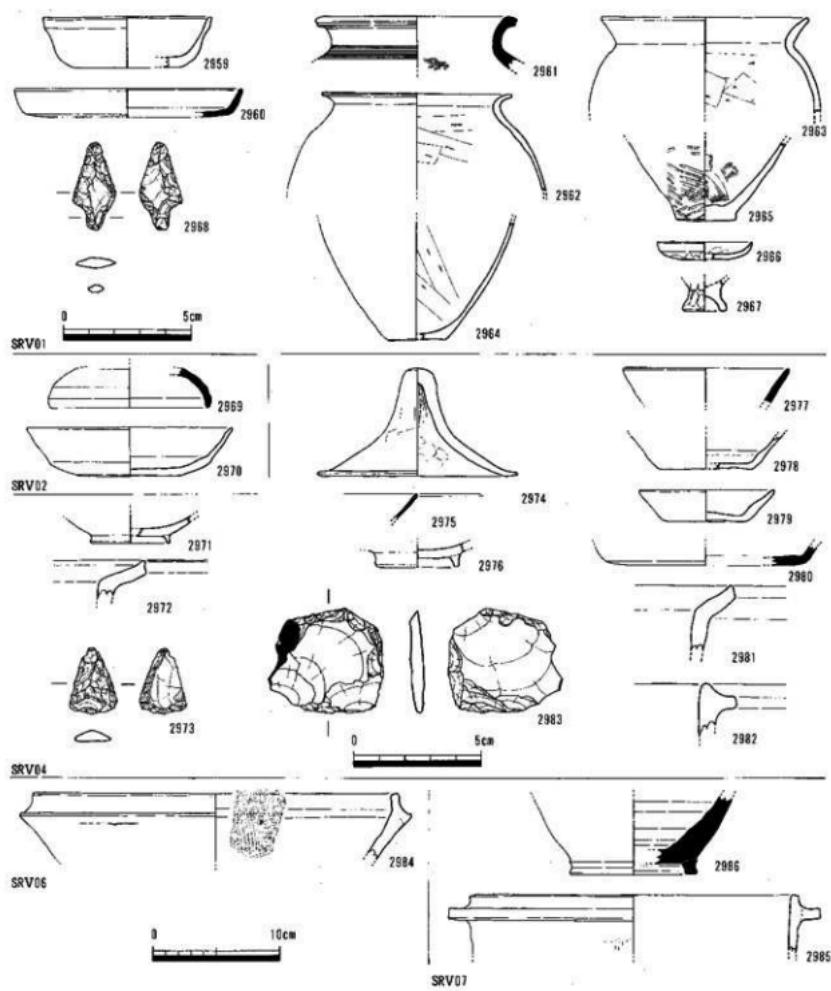


第353図 SRV01土層断面図(1/40)

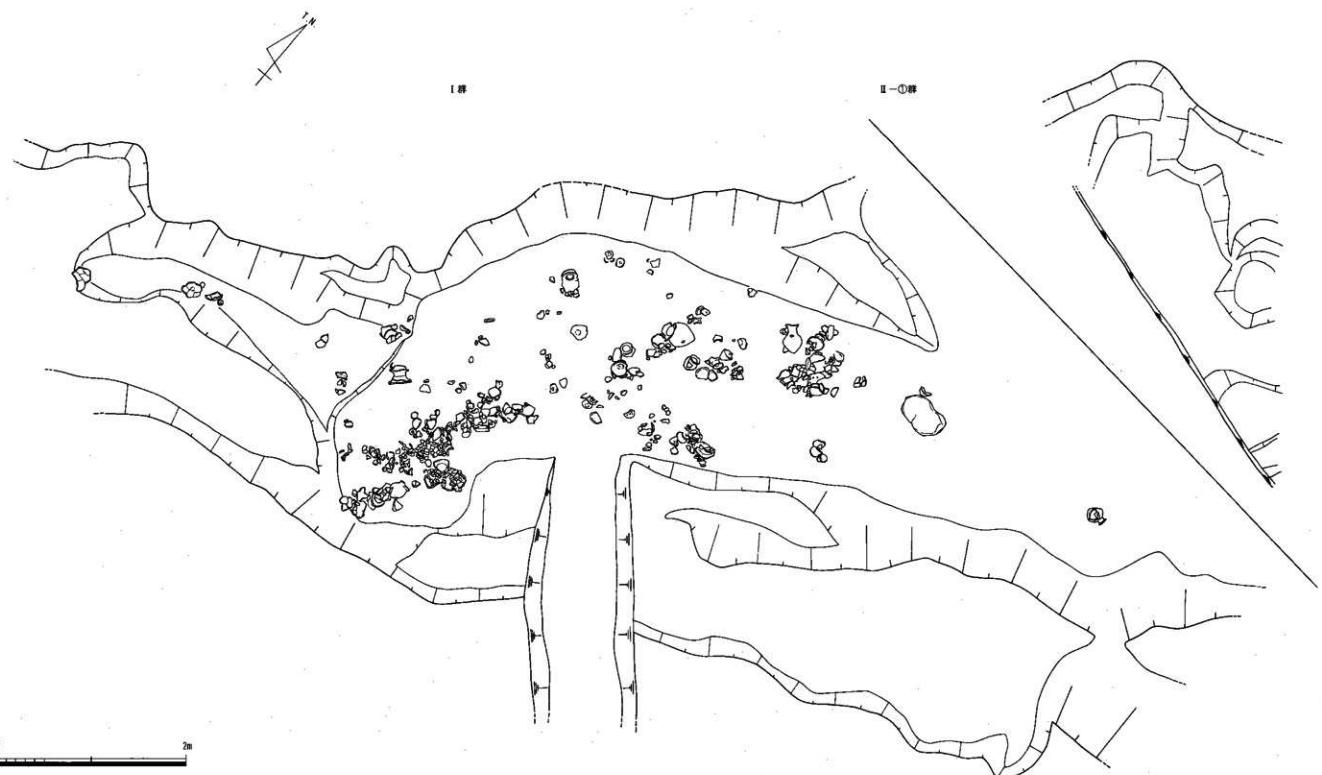




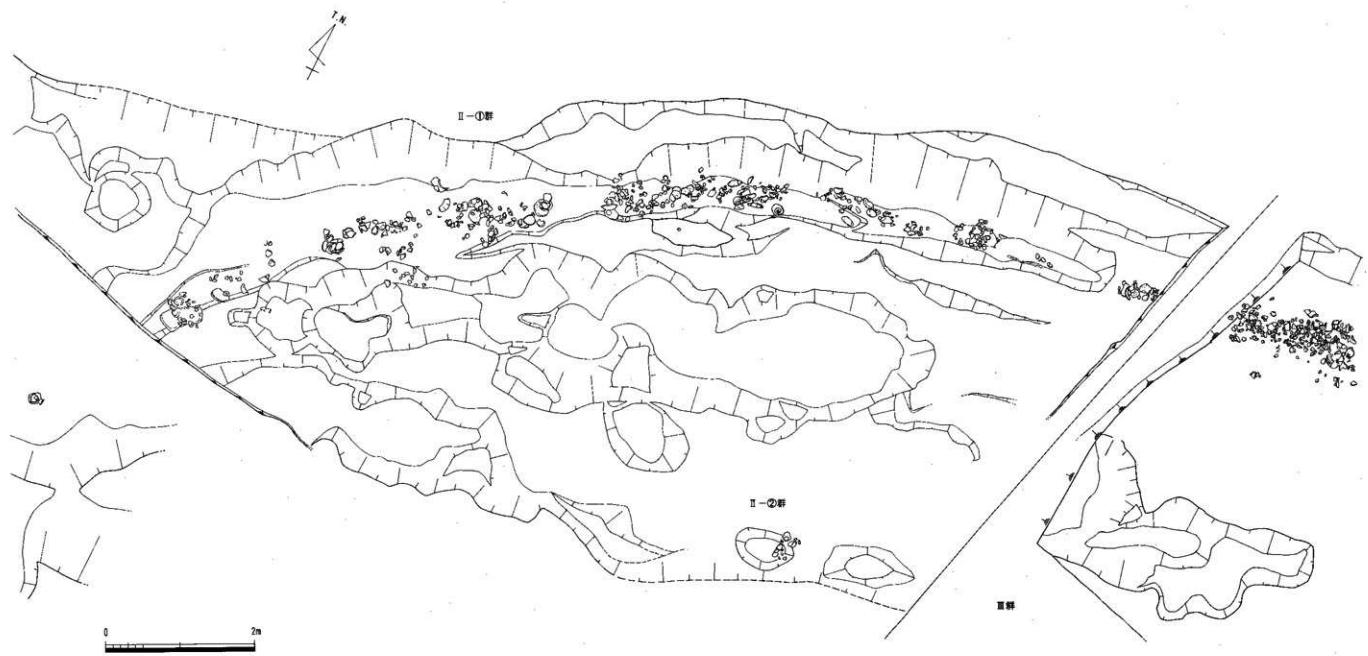
第355図 V-X (1)―(1) 土層断面図 (1/40)



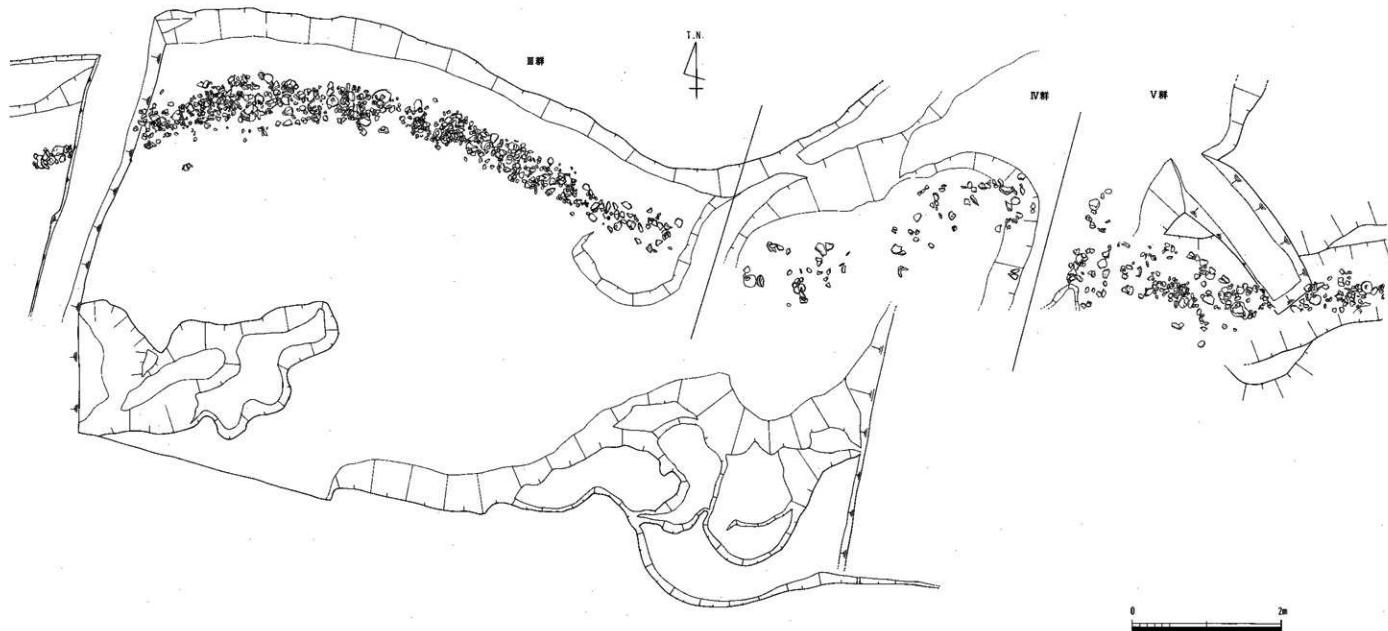
第356図 自然河川出土遺物実測図(1/4)



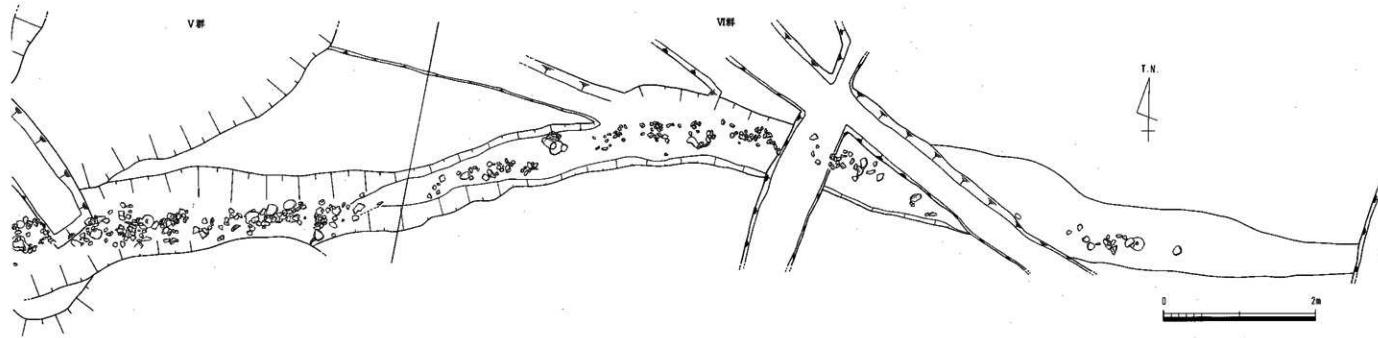
第357図 SRV03遺物出土状況①(1/40)



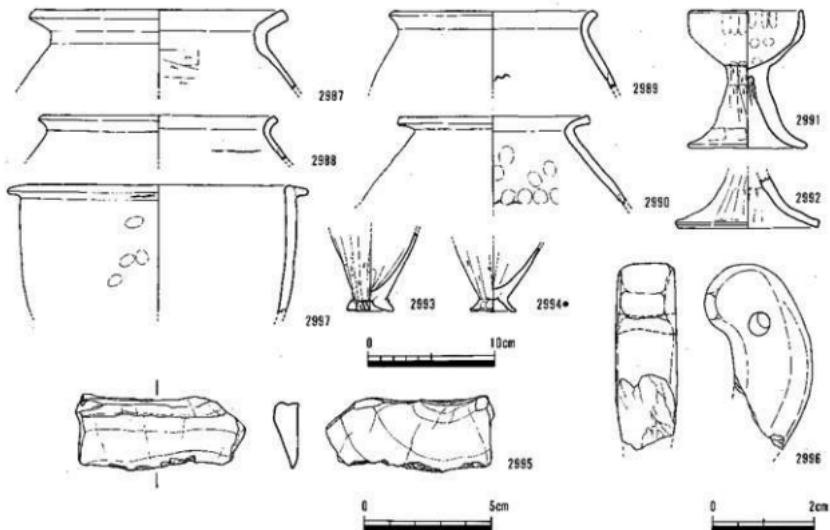
第358図 SRV03遺物出土状況②(1/40)



第359図 SRV03遺物出土状況③(1/40)



第360図 SRV03遺物出土状況④(1/40)



第361図 SRV03出土遺物実測図(1/4)①

考える。

第370・374図3121～3136、3185～3191は第II群とした部分の掘削時において出土した遺物である。

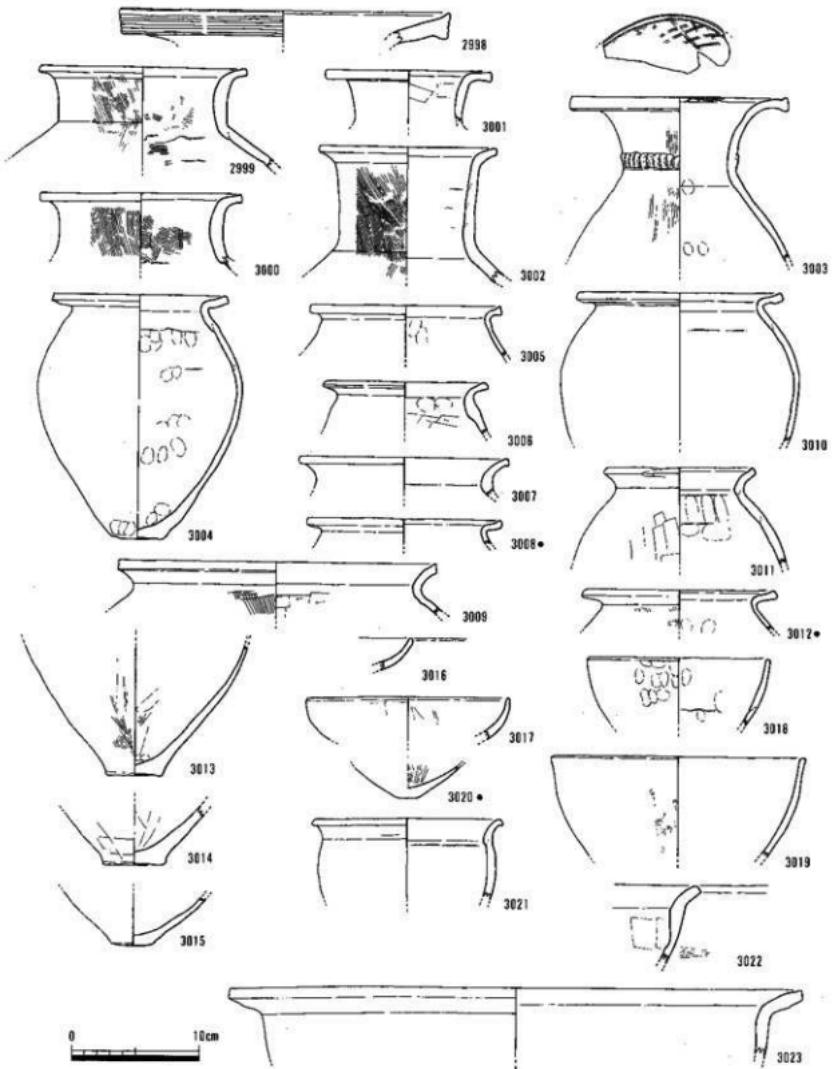
第371～373図3137～3184は第II-①・②群として取り上げた遺物である。第II-②群は南側に離れて出土した遺物群である。流路はこの部分から幅約1.6m程度の溝状になり、遺物の出土状況は第II-①群は第I群から継続し、部分的に纏まって出土している。出土遺物には第371図3138・3144などがあり、第I群と同様に古い様相を呈し、ほぼ同時期と考えられる。第372図3168は壺で、底部から体部下間にかけてヘラ先による線刻が認められる。表現内容は不明であるが、底部外面に線刻された円形状のものを中心に曲線と直線で線刻は構成されている。

第375～377図3192～3260は第III群として取り上げた遺物である。流路は第II群から継続して溝状を呈しており、遺物の出土状況はこのSRV03内では一番集中して出土している部分である。出土遺物は第I・II群と同様に全ての器種が揃っており、特にここでは製塙土器の出土が目立つ。図化した製塙土器は9点あり、その内4点が角閃石を含むものである。

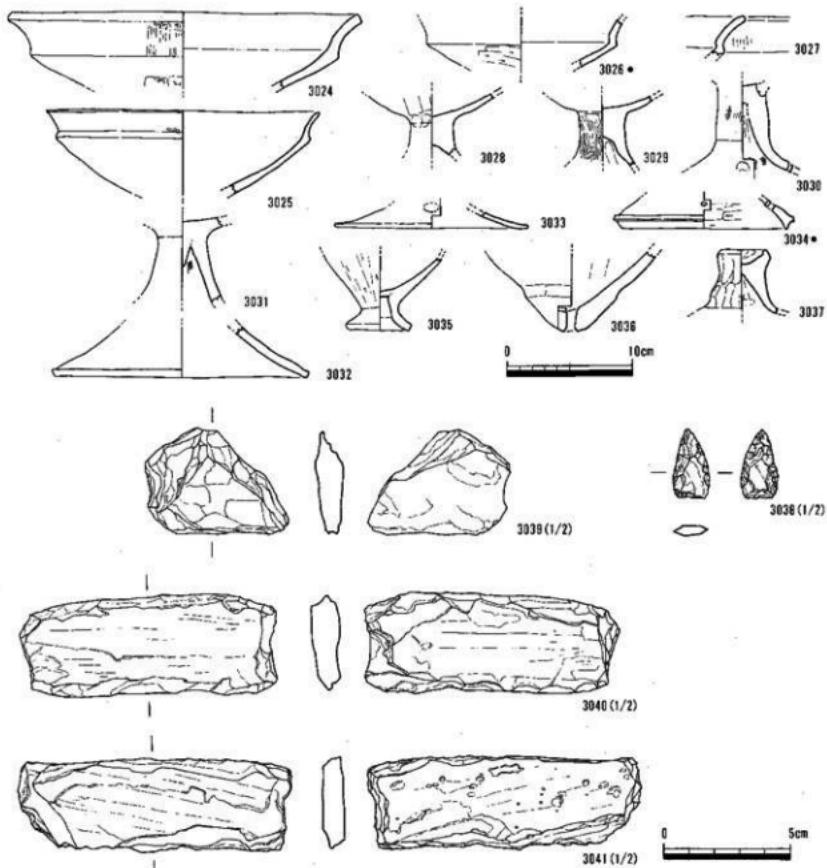
この第II・III群の北側には近接して竪穴住居を2棟検出しており、ほぼ同時期であることからSRV03から出土した遺物は北側に展開する集落の廃棄遺物と考えられる。

第378・379図3261～3281は第IV群として取り上げた遺物である。流路はこの部分で上位SRV03が北方向に屈曲し、若干深くなるために下位SRV03を掘削している。そのために遺物の出土状況は緩慢である。

第380・381図3282～3324は第V群として取り上げた遺物である。この当たりから出土遺物は少なくなる傾向が認められる。出土遺物の時期は同一時期と考える。



第362図 SRV03出土遺物実測図(1/4)②

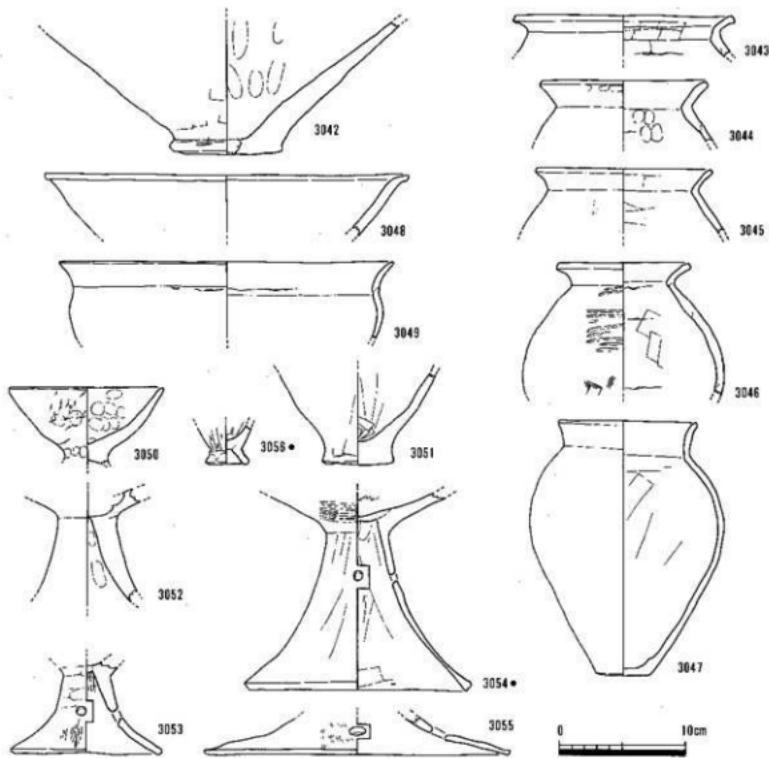


第363図 SRV03出土遺物実測図(1/4)③

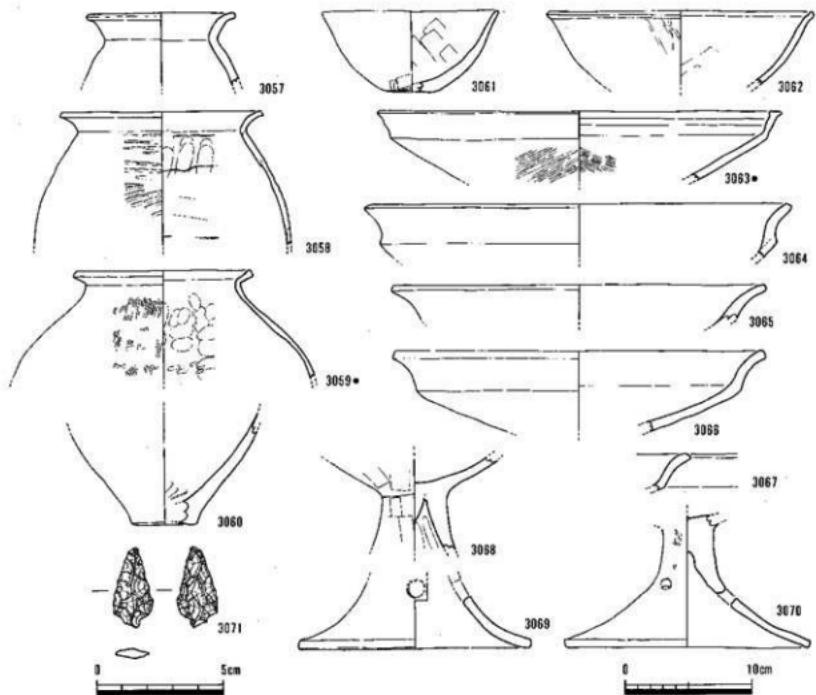
第382図 3325～3330は第VI群として取り上げた遺物である。流路はこの当たりから幅約1.3mと狭くなり、浅くなる。出土遺物はさらに少なくなる傾向が認められる。

第383～385図 3331～3395は第IV～VI群間に掘削時に出土した遺物である。

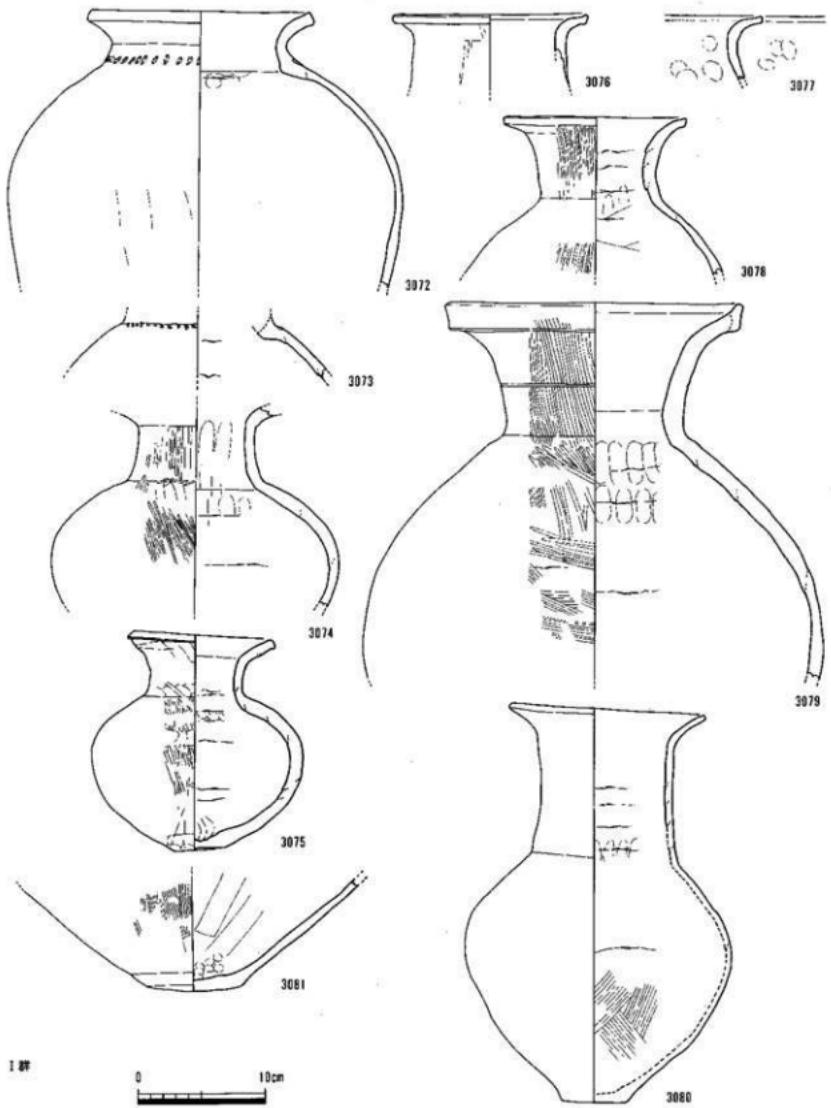
このSRV03から出土した遺物には壺・甕・鉢・高环・製塙土器・瓶と全ての器種が描っている。これら出土遺物から時期にあまり幅はない、概ね遺構II期（第III調査区の時期区分）に相当し、弥生時代後期後半（下川津I・II式併行期）と考える。ほとんどが在地産の土器と考えられるが、全体の約10%程度と比率的にはやや多く下川津B類土器を包含する。また第375図 3193、第383図 3335は広口の壺で、口縁端部が下方に拡張し、特に3335は口縁部外面に円形浮文が認められる。胎土には5mm程度のやや大粒の角閃石を含むことや器形から生駒西麓産の土器と考えられる。



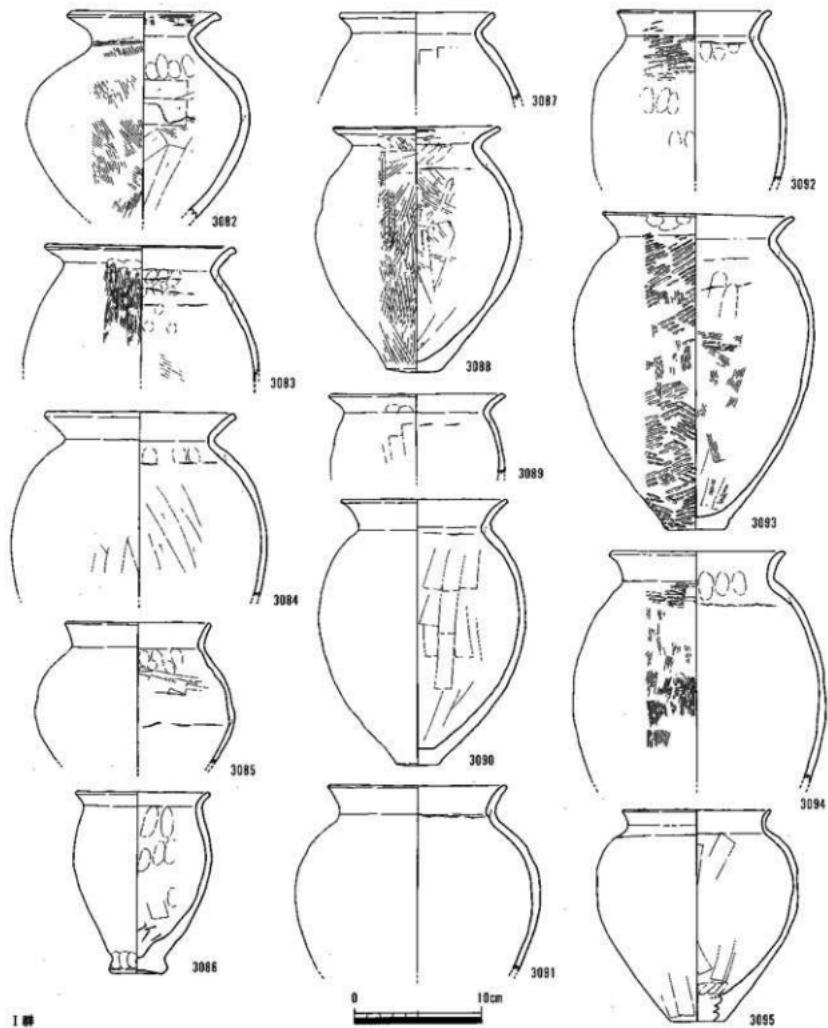
第364図 SRV03出土遺物実測図(1/4)④



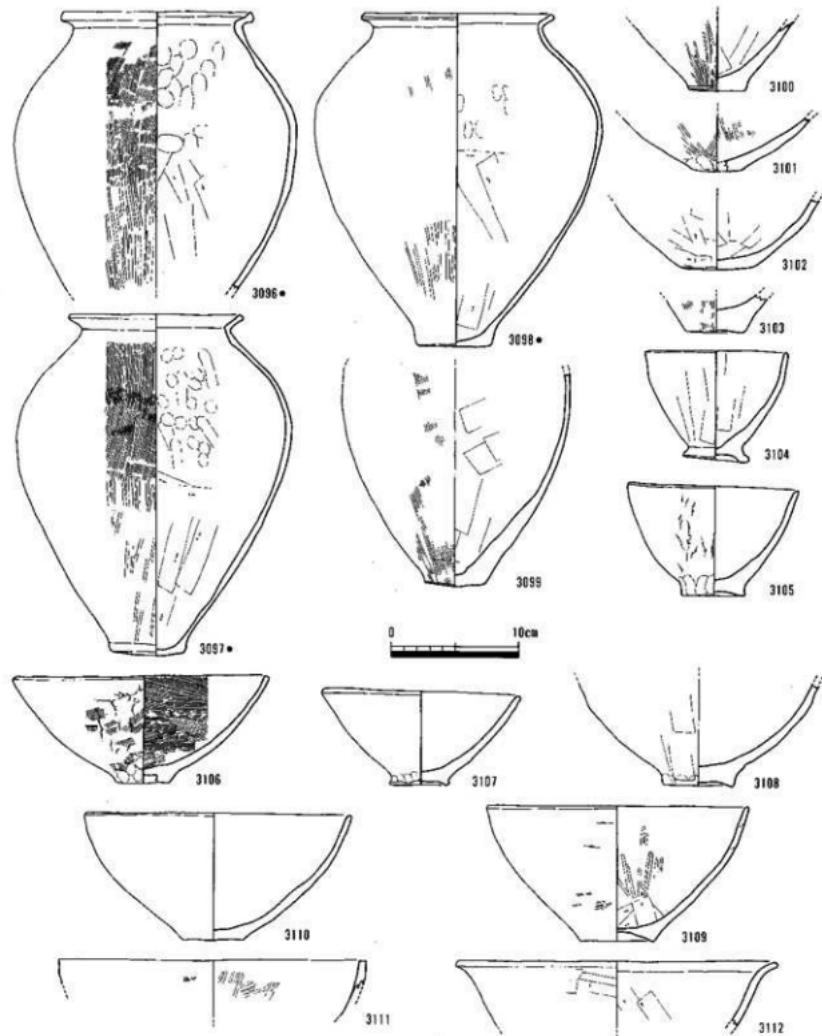
第365図 SRV03出土遺物実測図(1/4)⑤



第366図 SRV03出土遺物実測図(1/4)⑤

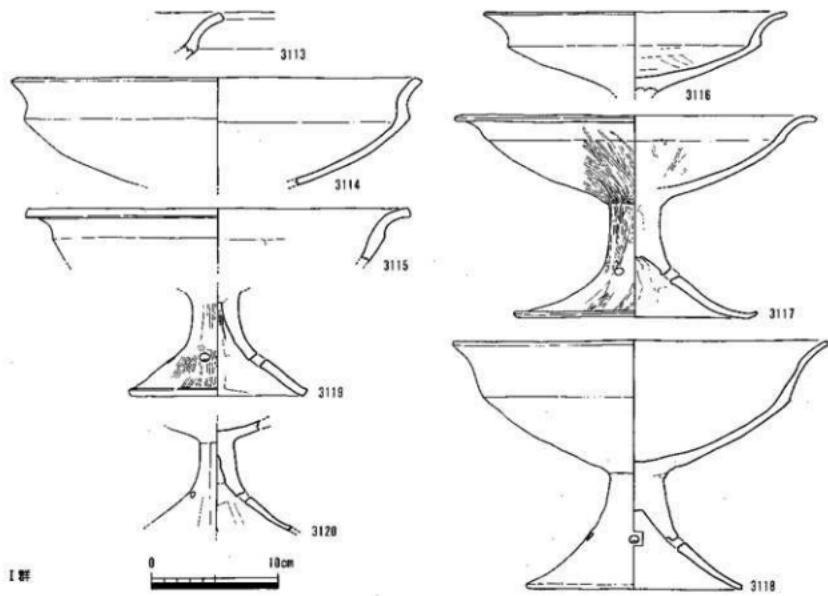


第367図 SRV03出土遺物実測図(1/4)⑦

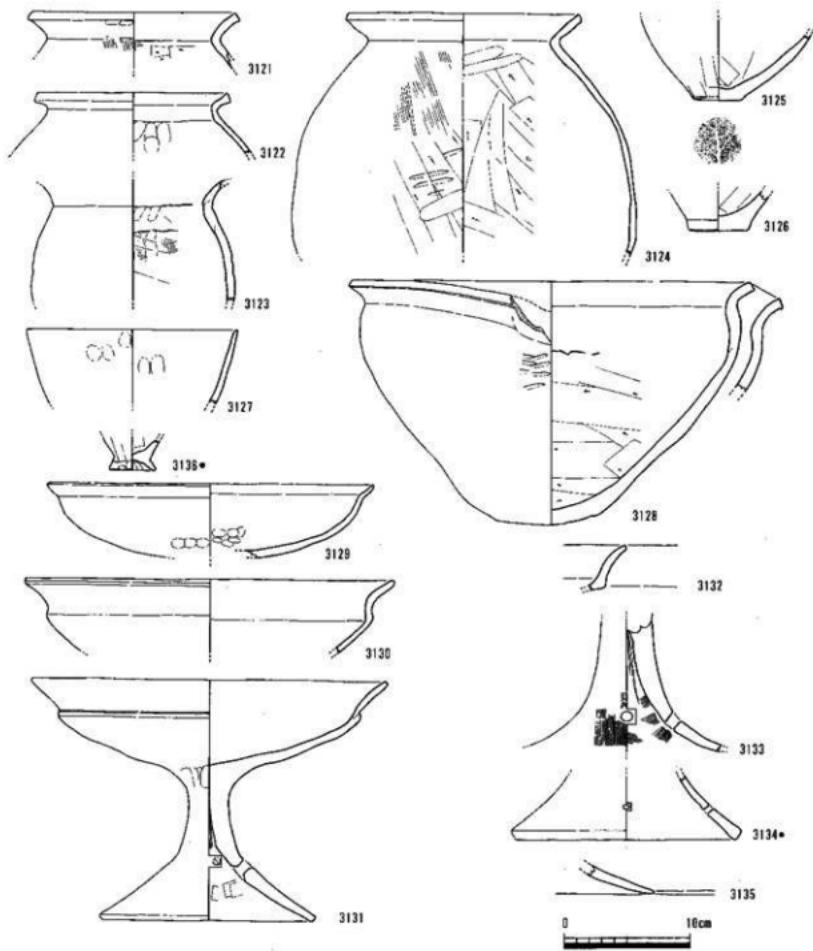


I群

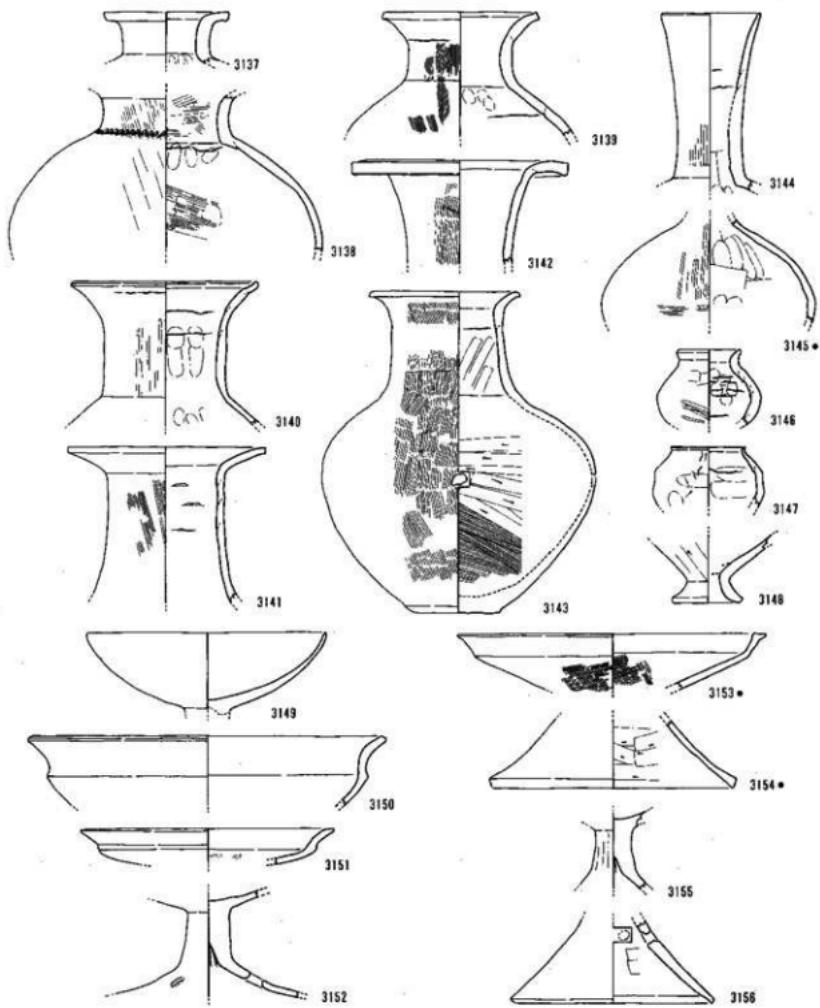
第368図 SRV03出土遺物実測図(1/4)⑧



第369図 SRV03出土遺物実測図(1/4)⑨

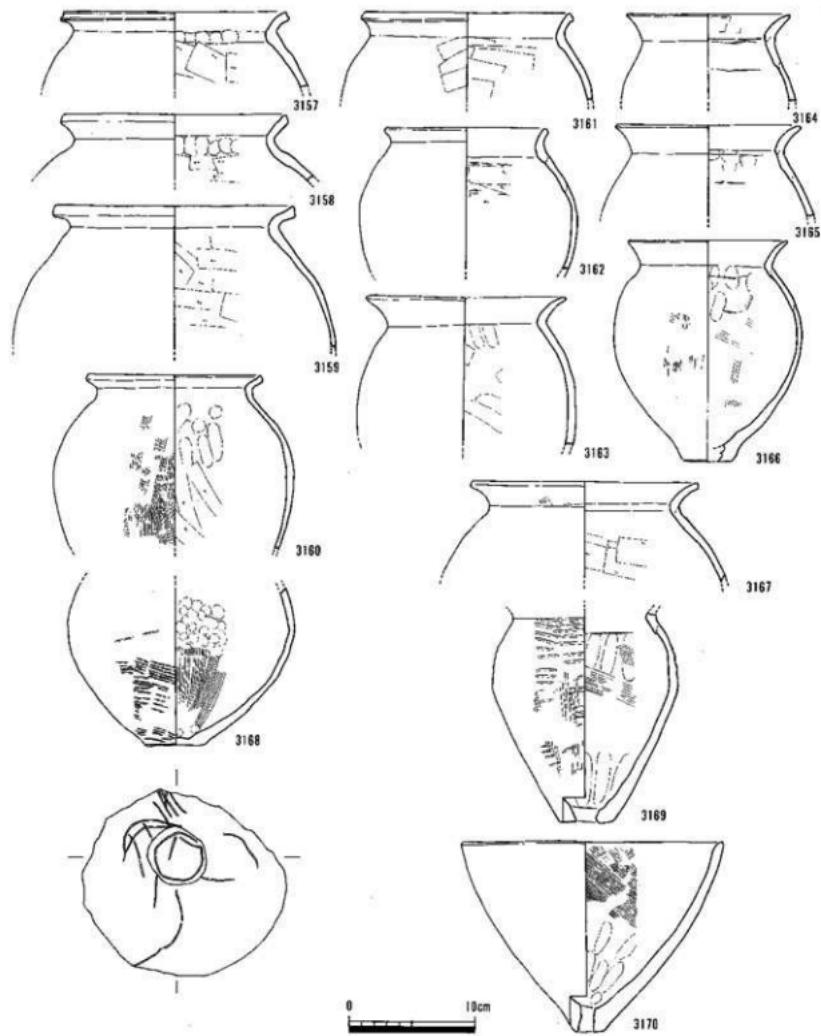


第370図 SRV03出土遺物実測図(1/4)⑩



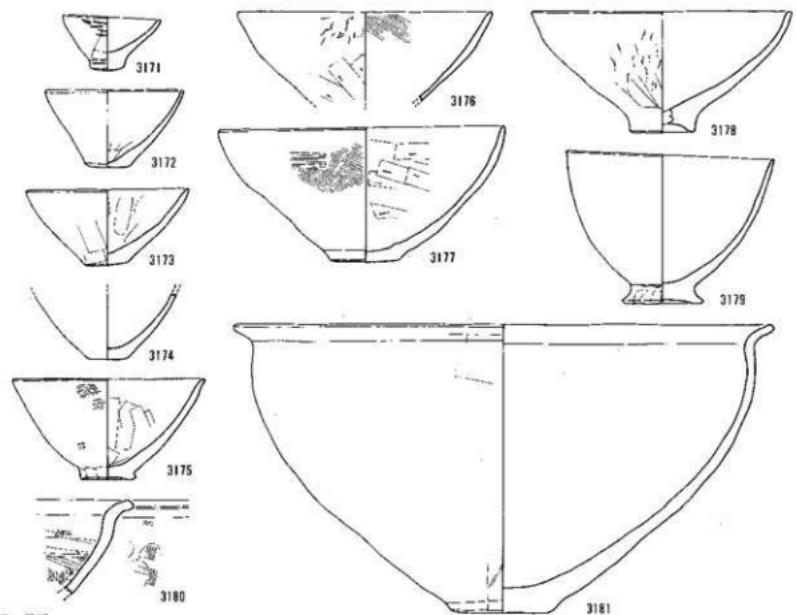
II-①群

第371図 SRV03出土遺物実測図(1/4)①

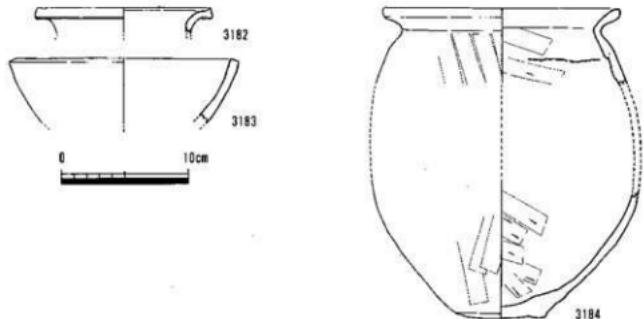


II-①

第372図 SRV03出土遺物実測図(1/4)②

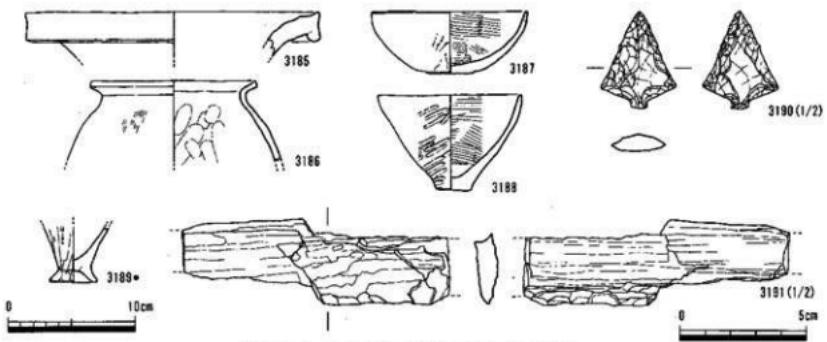


II-①群

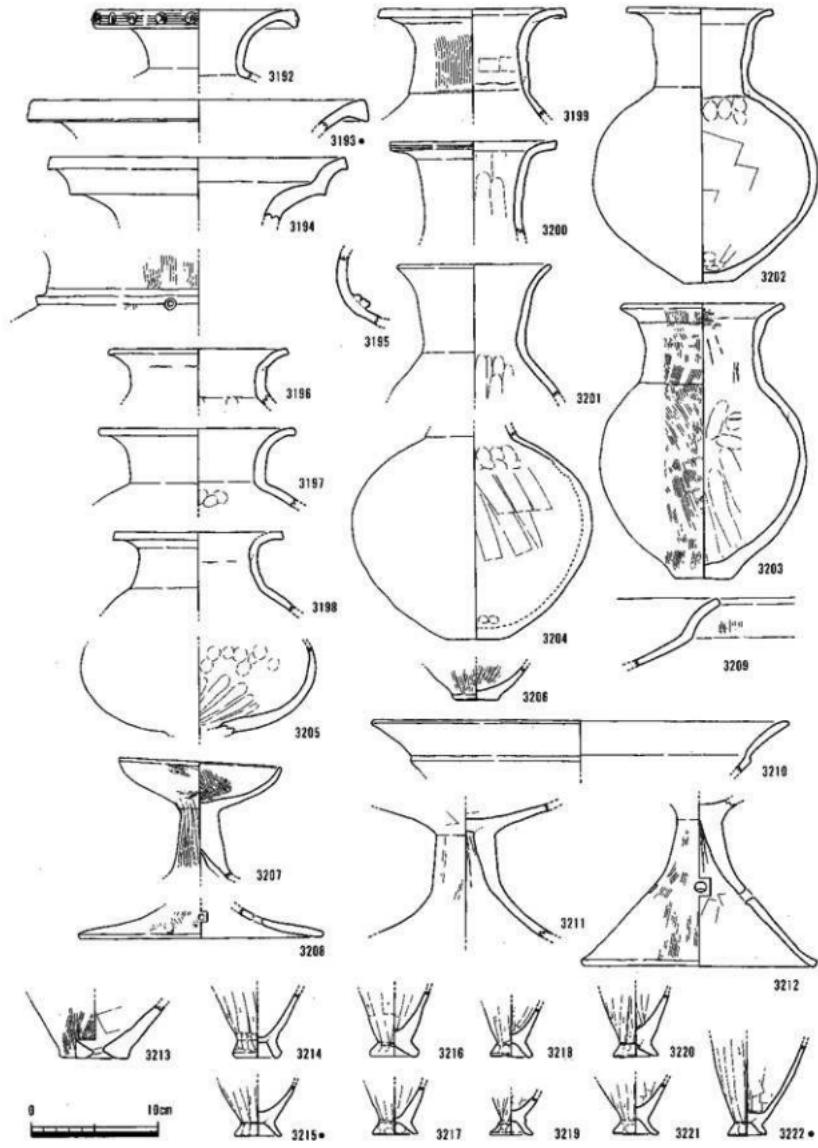


II-②群

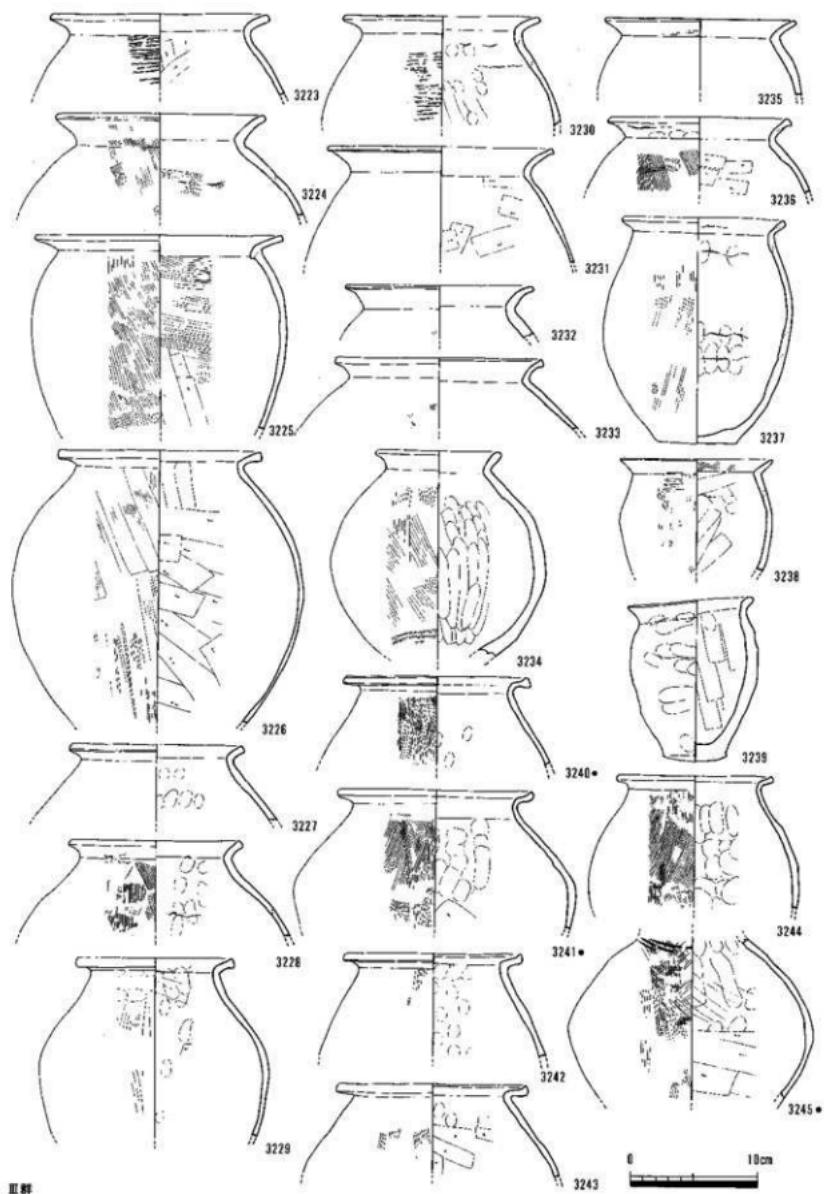
第373図 SRV03出土遺物実測図(1/4)③



第374図 SRV03出土遺物実測図(1/4)④

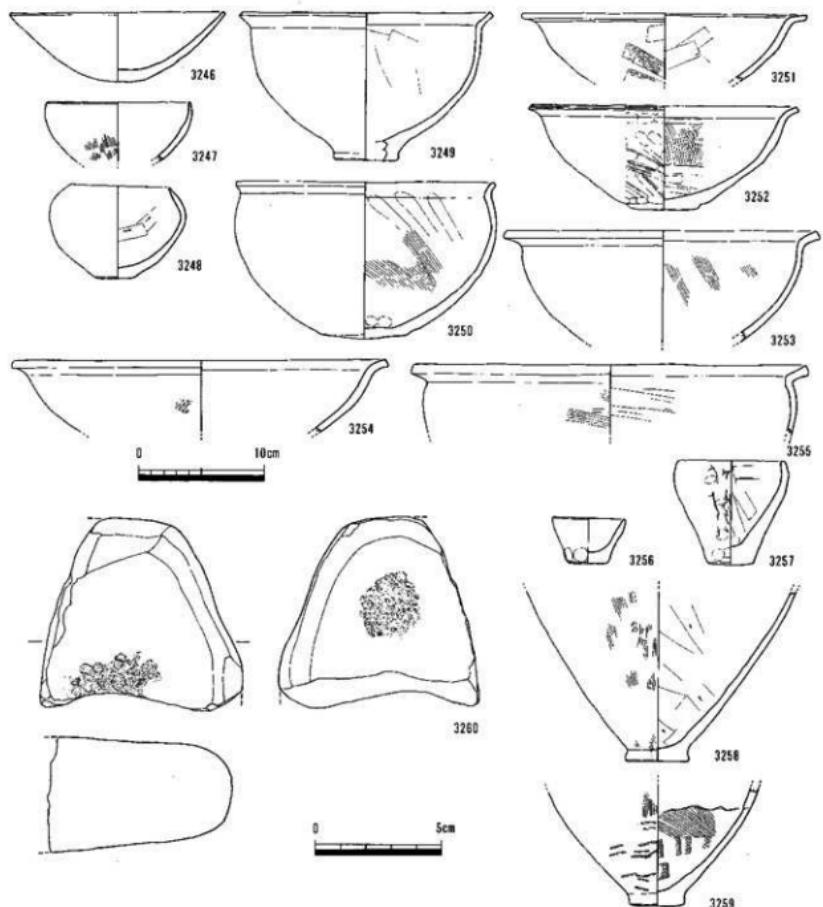


第375図 SRV03出土遺物実測図(1/4)⑯



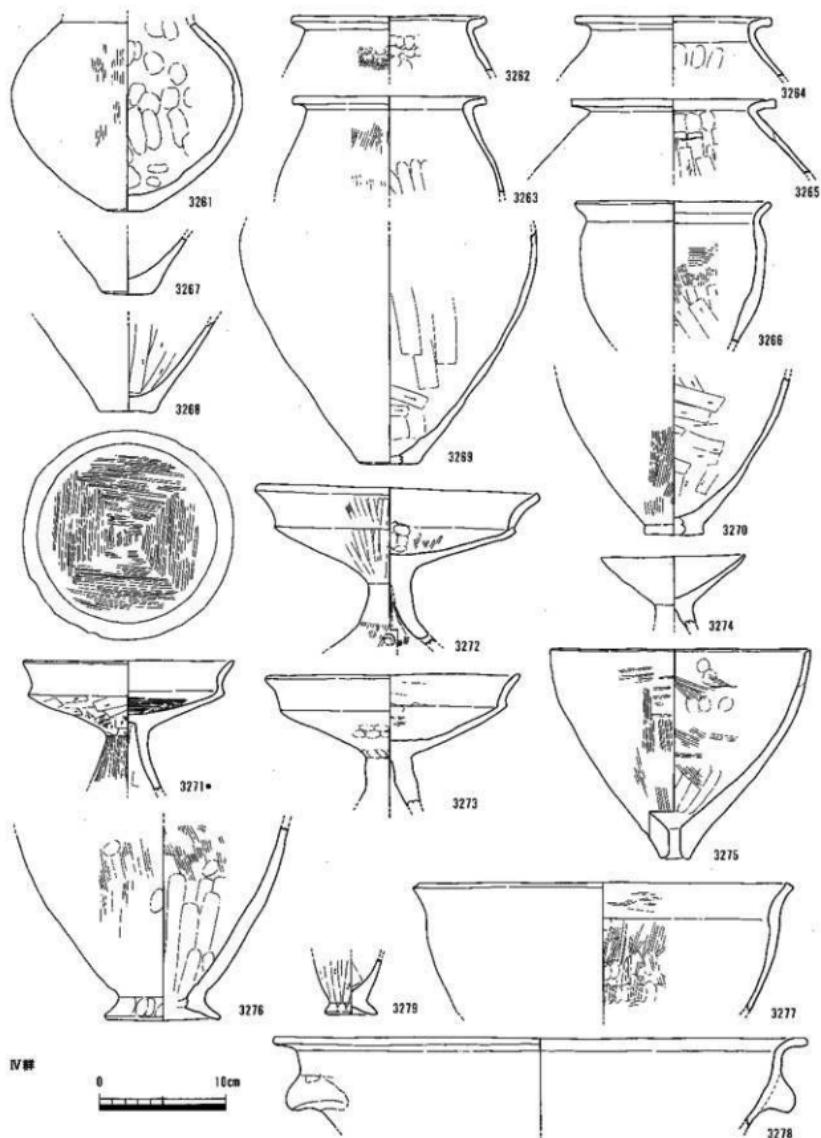
正群

第376図 SRV03出土遺物実測図(1/4)⑯

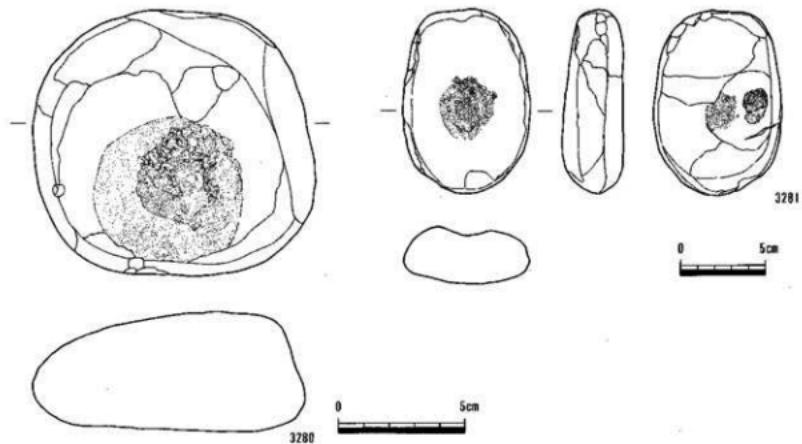


第377図 SRV03出土遺物実測図(1/4)⑦

日暮

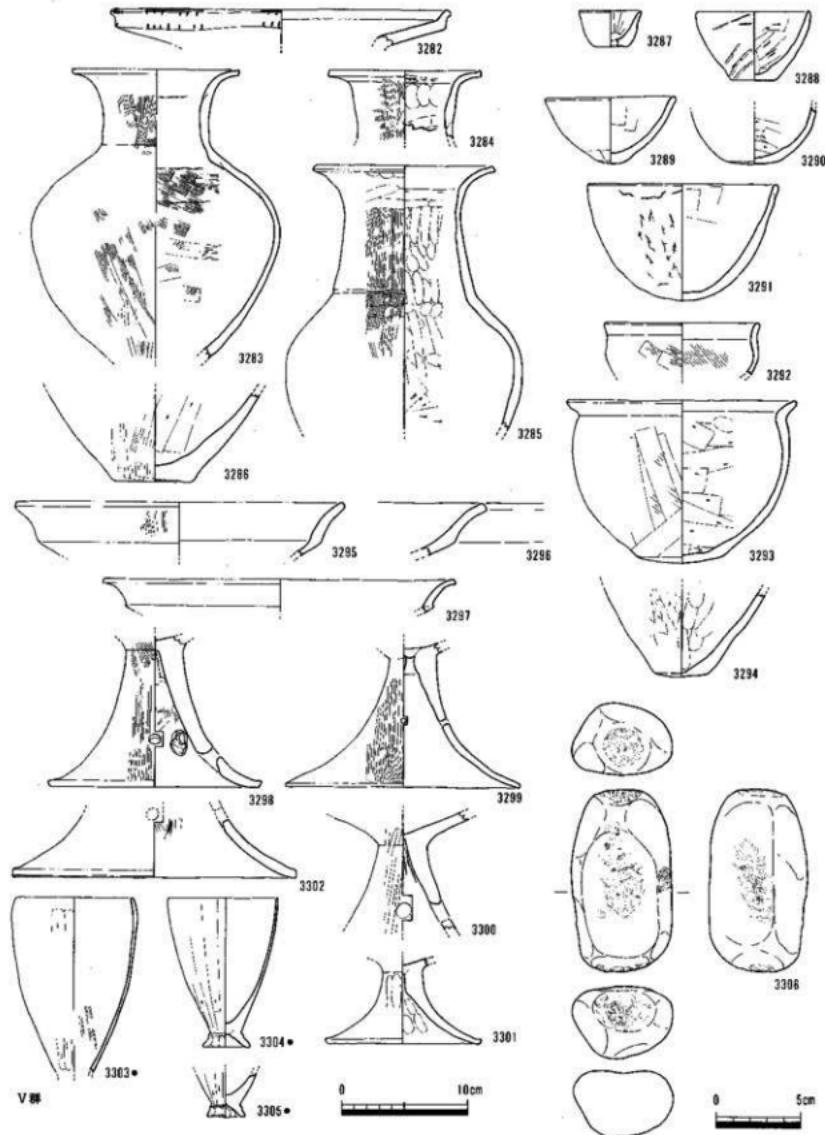


第378図 SRV03出土遺物実測図(1/4)⑩

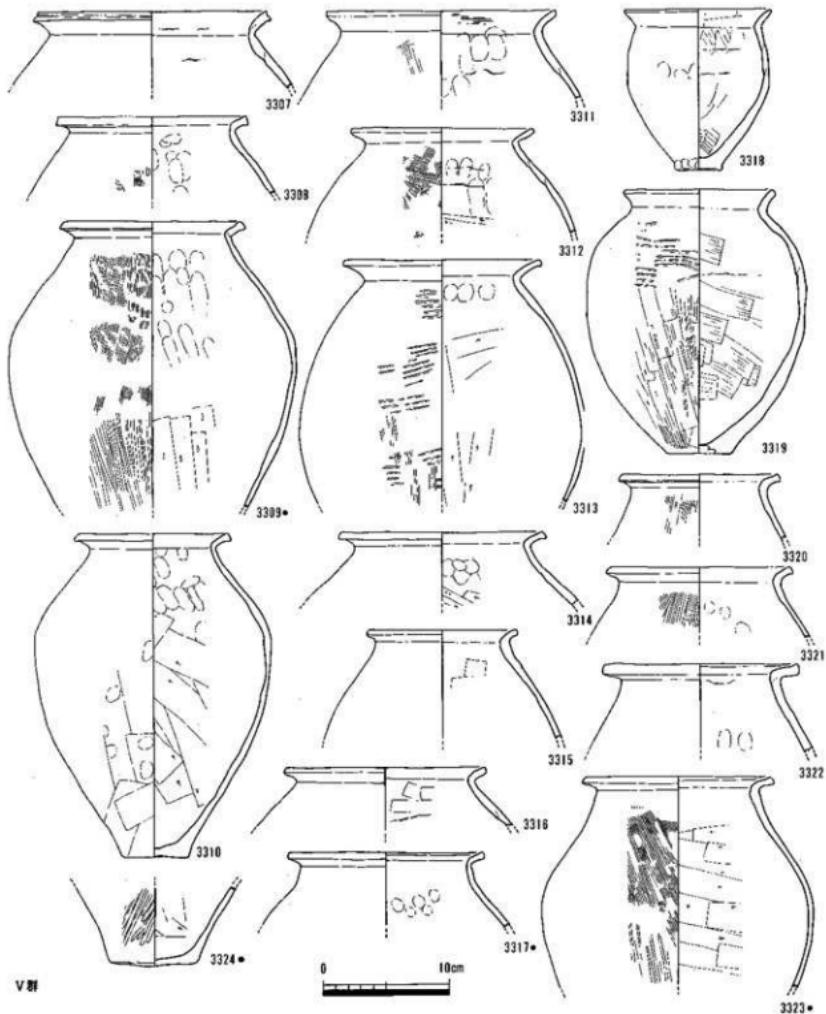


第379図 SRV03出土遺物実測図(1/4)⑨

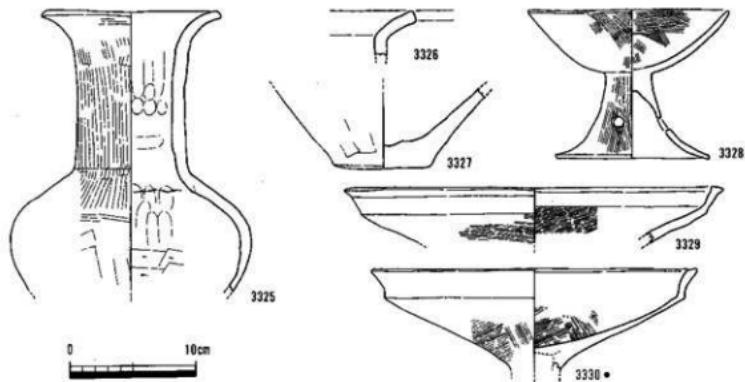
IV群



第380図 SRV03出土遺物実測図(1/4)②

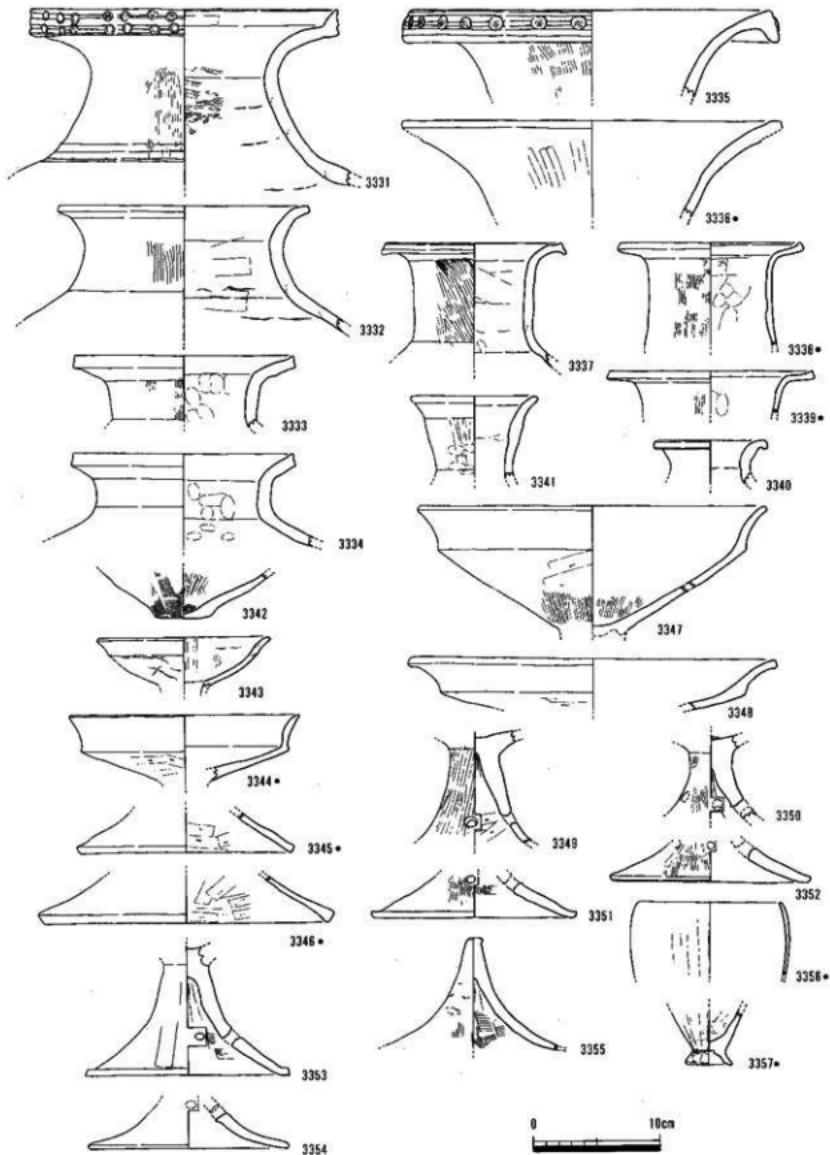


第381図 STV03出土遺物実測図(1/4)②

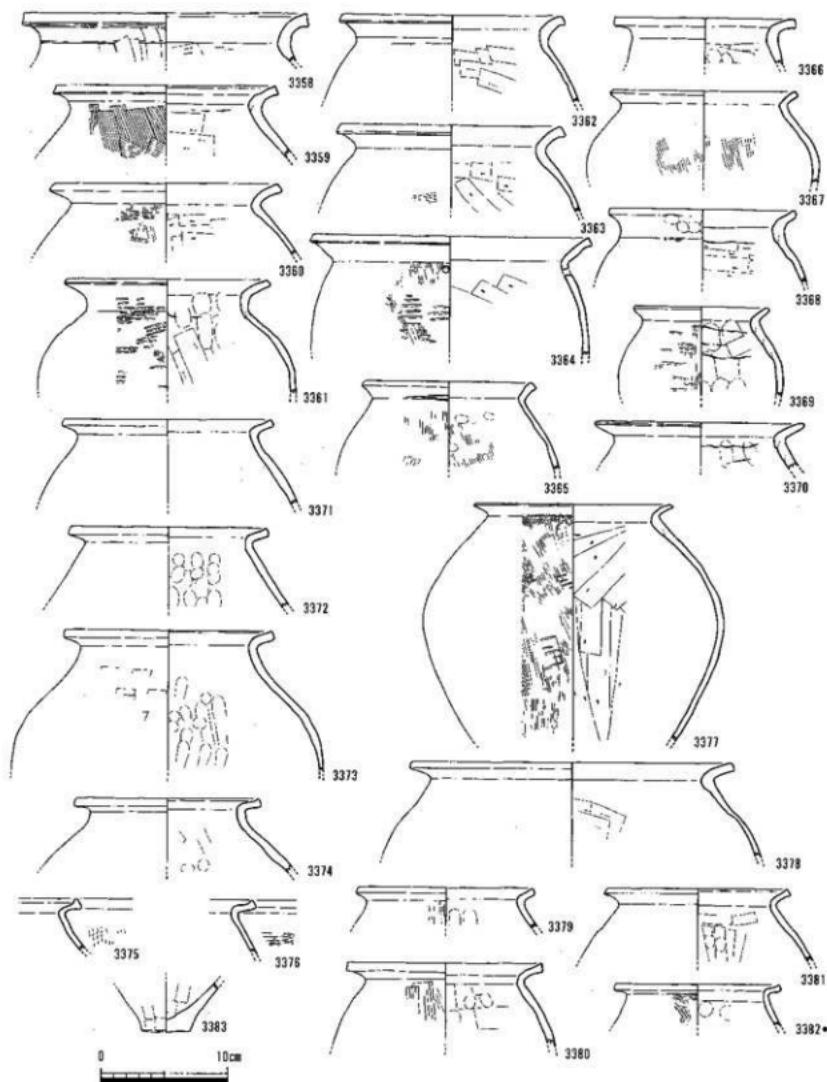


VII群

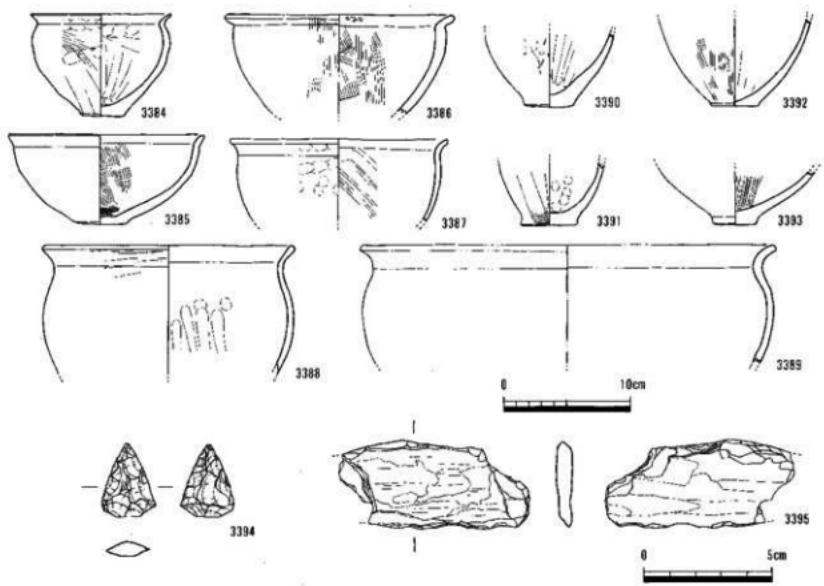
第382図 STV03出土遺物実測図(1/4)②



第383図 SRV03出土遺物実測図(1/4)②



第384図 SRV03出土遺物実測図(1/4)②



第385図 SRV03出土遺物実測図(1/4)②

#### SRV04

SRV04は第V調査区中央部東、標高15.6mで検出した自然流路で、調査区内で蛇行しながら流路を取り、平面的には南部でSRV05に、北部でSRV02によって切られ、中央ではSRV03を切っている。この流路に対して土層観察用畦畔を4ヶ所（第345図土層断面①-②'、第347図土層断面②-③'、第350図土層断面③-④'、第351図土層断面④-⑤'）に設定した。第345図土層断面①-②'では土層⑦～⑩がSRV04埋土として確認できる。土層断面からの規模は幅約3.24m、深さ約0.68mを測る。この土層断面にはSDV37、SRV05の埋土が確認できる。第347図土層断面②-③'、③-④'では明確に流路状の落ち込みが確認できず、土層⑦～⑪が埋土である。第350図土層断面③-④'では土層①・②としてSRV03の埋土を切っている。第351図土層断面④-⑤'では土層①～⑤が埋土で、溝状を呈し、規模は幅約2.7m、深さ約0.6mを測る。

この流路からは弥生土器・須恵器・土師器・土師質土器・石製品などが出土している。これらの遺物からみると弥生時代～古代となるが、機能していた時期は古代と考えられ、最終埋没は12世紀と考えられる。

#### SRV05

SRV05は第V調査区中央部東、標高15.7mで検出した自然流路で、調査区内でやや蛇行しながら流路を取る。この流路は予備調査段階で確認した旧流路cに当たるもので、当調査区内では西側の方の一部を検出したのみである。この流路に対して土層観察用畦畔を4ヶ所（第344図土層断面①-②'、第345図土層断面②-③'、第347図土層断面③-④'、第348図土層断面④-⑤'）に設定した。これらの土層断面の切り合いからみると最も新しい流路であることが解る。特に第347図土層断面③-④'から土層①（耕作土）・土層②（床土）直下にSRV05の掘削面が確認できる。土層は灰色系の砂混り粘質土・シルト層・砂層が互層となり、堆積している。砂層はラミナ状になっており、洪水砂層と若干の自然堆積の繰り返しによって形成されたものと考えられる。

この流路からは弥生土器・須恵器・土師器・土師質土器・瓦・石製品などが出土している。これらの遺物からみると弥生時代～中世とかなり時期幅が認められるが、最終埋没時期は中世（12～13世紀）と考える。

#### SRV07

SRV07は第V調査区中央部東、標高15.7mで検出した自然流路で、調査区内で蛇行しながら流路を取り、東部はSRV05によって切られ、北部ではSRV04によって切られている。この流路に対して土層観察用畦畔を1ヶ所（第344図土層断面①-②'）に設定した。第344図土層断面①-②'から堆積土層は砂粒を含むシルト質を基本とした土層（土層⑬～⑯）である。

この土層断面にはSRV04・05とSRV07が確認でき、SRV07はSRV04・05によって切られている。

この流路からは須恵器・土師質土器などが出土している。これらの遺物からみると機能していた時期は古代（11～12世紀頃）と考える。

## SRV08

SRV08は第V調査区中央部東、標高15.6mで検出した自然流路で、調査区内で蛇行しながら流路を取り、南部はSRV09によって、北部はSRV07によって切られている。ちょうどSRV07の西側で同じように蛇行する部分を検出した。この流路に対して土層観察用畦畔を2ヶ所（第342 国土層断面②-②'、第343 国土層断面②-②'）に設定した。第343 国土層断面②-②'から堆積土層はシルト質を基本とした土層である。断面は緩やかな「U」字状を呈している。規模は幅3.3m、深さ0.87mを測る。

この流路は蛇行するものの一定の規模や断面形状から人為的に掘削された可能性が指摘できる。

この第342 国土層断面②-②'にはSRV08とSHV04が確認でき、SHV04埋没後に全域に堆積した古墳時代遺物包含層（土層42）上面からSRV08は切り込んでいることが確認できる。

この流路からは弥生土器・須恵器・土師器・土師質土器・石製品などが出土している。これらの遺物からみると弥生時代～13世紀となるが、最も新しい東播系こね鉢（3448）が混入とすれば、機能していた時期は古代（7～9世紀）と考える。

## SRV09・10

SRV09・10は第V調査区南部東、標高17.0mで検出した自然流路で、ほぼ同位置を同方向で検出した流路である。調査区内では西側の肩部を検出したのみで、遺構全体図には上部にあるSRV09を図化している。

SRV09はSRV10の上位にある流路で、埋土は砂粒を含むシルト層を基本とする。SRV10は下位にある流路で、砂粒を含む粘土質土層を基本とする流路である。これらの流路に対して土層観察用畦畔を2ヶ所（第340 土層断面②-②'、第341 国土層断面②-②'）に設定した。

土層断面からも解るように流路の一部しか検出していないことから、規模は提示していない。

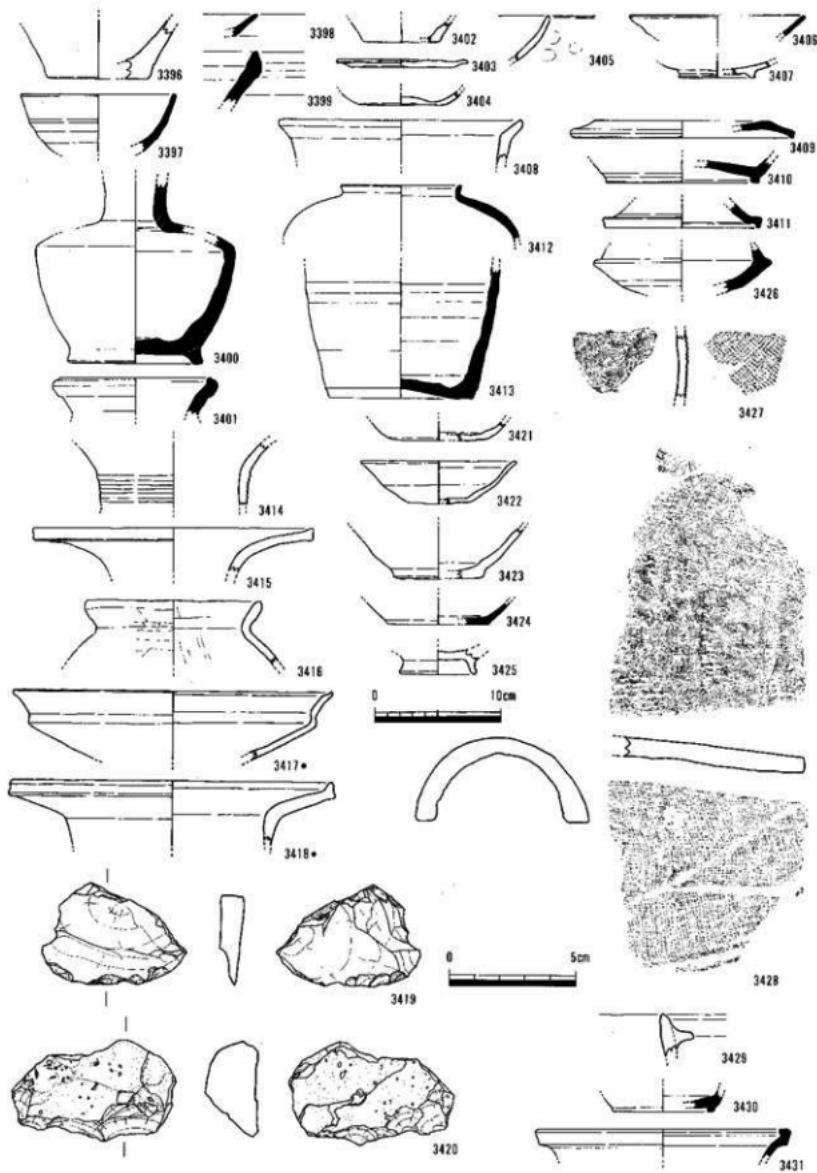
この第341 国土層断面②-②'にはSDV43・45・56、SRV09・10が確認でき、切り合い関係から古い順にSRV10→SDV45→SDV45→SDV43→SRV09→SDV56となる。

SRV09からは須恵器・土師質土器鍋が出土しており、時期は9・13世紀と考えられる。流路の機能していた時期は中世前半としたい。一方SRV10からは弥生土器・須恵器・土師質土器などが出土しており、時期は弥生時代後期後半・7・9世紀と考えられる。流路の機能していた時期は9世紀としたい。

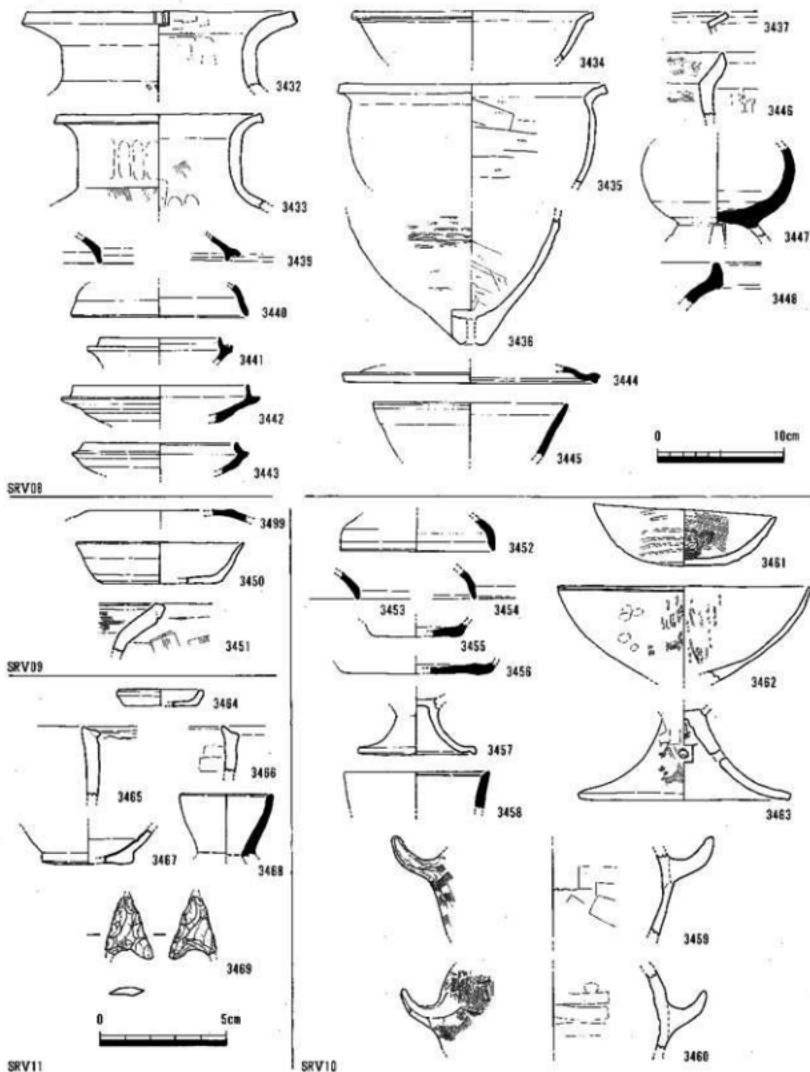
## SRV11

SRV11は第V調査区南部東、標高17.3mで検出した自然流路で、調査区内では西側の肩部を検出したのみである。この流路に対して土層観察用畦畔を2ヶ所（第338 国土層断面②-②'、第339 国土層断面②-②'）に設定した。第338 国土層断面②-②'から堆積土層はシルト質を基本とした土層と細～粗砂粒を多量に含む土層との互層であり、砂層はほとんどがラミナ状を呈する。下位は概ね水平堆積であるが、中位で浅い部分と深い部分が認められることからかなり荒れていたことが伺われる。断面は肩部から緩やかに深くなり、底はほぼ平らになっている。規模は調査区内の幅で8m、最深部で1.3mを測る。

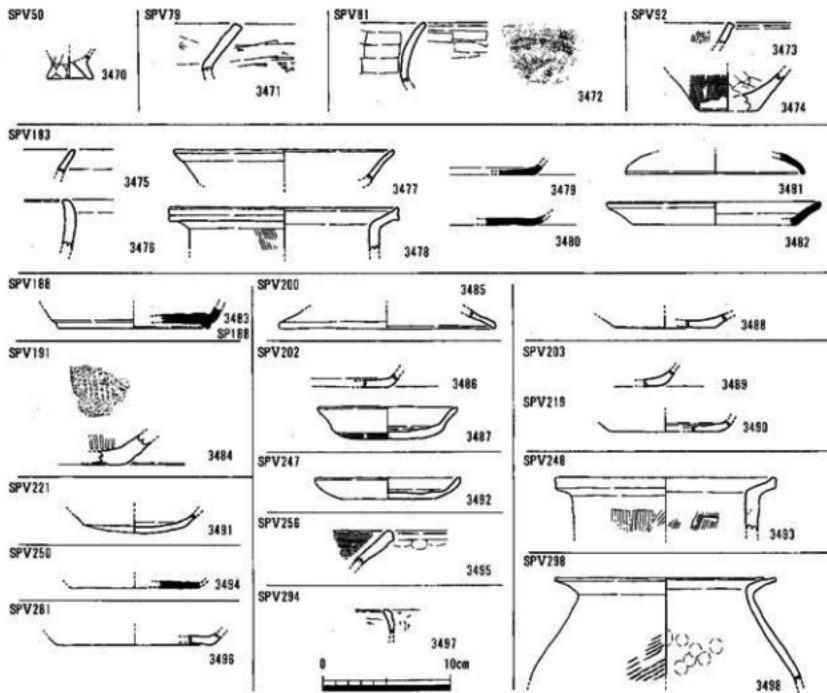
この第338 国土層断面②-②'にはSDV53とSDV56が確認でき、切り合いからSDV53はSRV11に



第386図 SRV05出土遺物実測図(1/4)



第387図 SRV08~SRV11出土遺物実測図(1/4)



第388図 柱穴出土遺物実測図(1/4)

先行することが解る。また土層断面④-④'ではSRV10・11、SDV43・56が確認でき、切り合い関係から古い順にSRV10→SDV43→SRV11→SDV56となる。

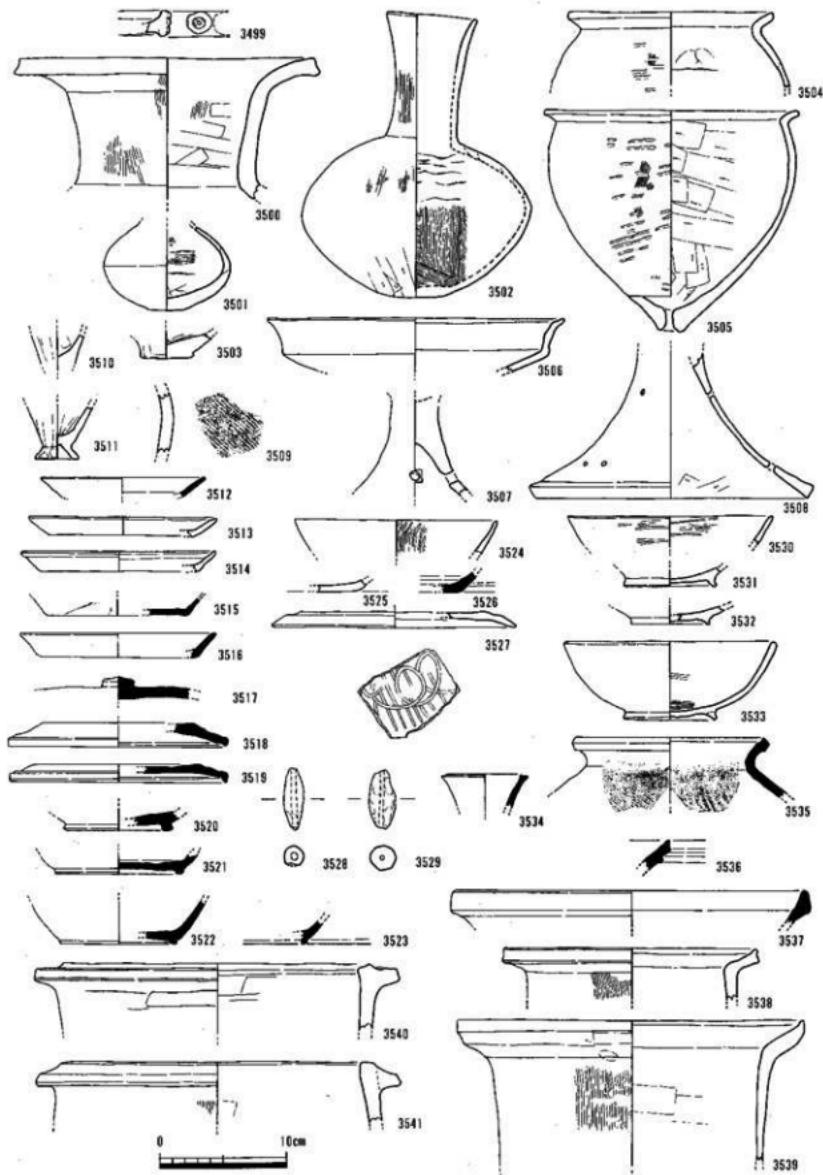
この流路からは土師器小皿・土師質土釜・白磁IV類碗・須恵器平瓶・石巖などが出土している。これらの遺物からみると弥生時代～中世となるが、機能していた時期は中世、特に中世後半頃(16世紀)と考える。

#### 柱穴出土遺物

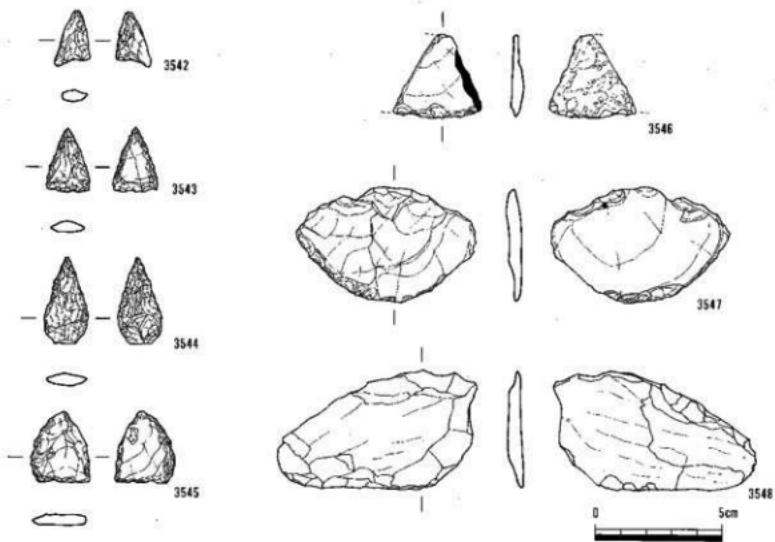
第V調査区で検出した柱穴は総数 個で、そのほとんどが30～40cm程度のものである。時期は弥生時代から古代・中世のものと考えられる。出土遺物は弥生土器・須恵器・土師器・土師質土器が多く確認できる(第388図 3470～3498)。

#### 包含層出土遺物

第389・390図は包含層出土遺物である。



第389図 包含層出土遺物実測図(1/4)①



第390図 包含層出土遺物実測図(1/2)②

出土遺物には弥生土器、製塙土器、須恵器、土師器、黒色土器、土師質土器、石製品が出土している。時期は弥生時代、古代（7世紀～9世紀）、10世紀、12世紀後半である。

第390図3509は体部外面に縄文が認められる土器である。

#### 第V区調査区 小結

第V調査区は原間遺跡発掘調査対象範囲の北部に位置し、調査区の形態が逆三角形状を呈している。これは予備調査の結果から北が低湿地bを境に、東部が川流路cを境に、西が調査範囲を境に設定されているためである。

そのため南部になるに従い調査範囲は狭くなっている原因である。

この第V調査区の予備調査では弥生時代の遺構を検出しており、遺跡の存在は確認されていた。調査の結果、予備調査どおりに弥生時代・古代・中世～近世の遺構を多数検出した。

検出面は調査区ほぼ中央部で洪水砂層等の包含層を挟み古代の第1面と弥生時代の第2面の計2面が確認でき、それ以外は中央部の第2面と同一面で遺構を検出した。

調査区中央部の第1面で検出した遺構は古代から中世にかけての遺構で、主として溝状遺構である。第2面で検出した遺構は弥生時代の遺構で、竪穴住居・自然流路である。

調査区北部では古代と弥生時代の遺構を同一面で検出した。古代の遺構は規則性のない溝状遺構を数条検出したのみで、主としては弥生時代の遺構である。検出した弥生時代の遺構は竪穴住居3棟、掘立柱建物1棟、井戸1基、土坑などである。

調査区南部では調査区が狭くなっているにもかかわらず、弥生時代・古代・中世の遺構を多数検出した。弥生時代の遺構は竪穴住居2棟、掘立柱建物1棟、土器棺墓2基、土坑などで、古代・中世の遺構は掘立柱建物5棟、溝などである。

さらに調査区の西側と東側で自然流路を検出している。西側で検出した自然流路は現古川の旧流路と考えられ、かなり蛇行を繰り返し、北方向に流路を取る。東側で検出した自然流路は幾条も流路を変えながら、原間池方向に流路を取っており、時期は古代から近世に機能していたものと考えられる。この自然流路は予備調査で推定した旧流路cに相当し、古川から北西方向に延び、原間池、渓川に流れを取るものである。この旧流路cを第V調査区では北側の肩を、第IV調査区北側ではこの流路の南側の肩を検出している。このことは第IV調査区で検出したSRIV01と第V調査区で検出したSRV11の検出状況から時期的にも、堆積土層からも同一流路と考えられ、その幅は約28mを測る。

以上の第V調査区で検出した遺構を遺構の切り合い、遺構埋土の土色・質及び出土遺物で細分すると弥生時代の遺構、8世紀を中心とする遺構（古代Ⅰ期）、12世紀を中心とする遺構（古代Ⅱ期）、中世から近世にかけての遺構の4つの時期に分けられる。

その結果が第391、392図の遺構変遷図である。

#### 弥生時代

弥生時代の遺構は概ね北部と南部に分かれて検出した。

北部で検出した遺構は竪穴住居3棟、掘立柱建物1棟、井戸1基、土坑などである。

竪穴住居は平面形態が円形のものと方形のものがあり、内訳は円形が2棟、方形が1棟である。円形のものの内SHV03は現在の水路（SDV24）により、削平を受けているものの平面形態は東側に張り

出しの付く、推定床面積は78.5 m<sup>2</sup>を測る原間遺跡の中で一番巨大な堅穴住居である。SHV01は平面形態が長方形を呈し、主柱穴が2本と特異な構造を持つ。この堅穴住居は焼失家屋で、内部の柱構造や上部の藁屋根構造が確認できた。堅穴住居はこの円形と方形のもので、円形同士は約6m、円形と方形は約20mとその間隔を異にしており、別のグループの可能性が考えられる。堅穴住居内出土遺物及び各住居の位置関係から、1集落内での円形と方形の堅穴住居に円形を主としたグループと方形のグループに格差があると推定する。さらに掘立柱建物SBV01はSHV02から東に20m程離れて1棟が確認でき、倉庫としての機能が想定できる。井戸は堅穴住居の北側にあり、SHV01から約20m程離れて検出している。円形の堅穴住居を中心にその他の遺構は緩慢な配置を取っている。

これら北部で検出した弥生時代の遺構は西側が自然流路によって削平を受けており、西への広がりについては不明であるが、北及び東は井戸・掘立柱建物を境にして遺構が希薄になる傾向がある。また予備調査段階で北及び東側に低湿地bを確認しており、この部分に遺構が無いことを確認している。南はSRV03があり、その南側と区画されている。以上の状況からこれらの遺構が直径約60mの範囲内に収まるように形成されていたことが伺える。またこれらの遺構は同時期であることから、これは第Ⅲ調査区で確認された集落での遺構の広がり、堅穴住居3棟、掘立柱建物1棟という構成要素の点で同じ様相を呈していることが解る。そのなかで第Ⅴ調査区北部では張り出し付・出土遺物に鉄製品を持つというSHV03を中心とした単位集団が形成されていることが解る。

一方南部で検出した遺構は堅穴住居2棟、掘立柱建物1棟、土器棺墓などである。

堅穴住居は2棟とも円形で、一部が調査区外であったり、自然流路により削平を受けていたりして完掘していないが、推定床面積が50～57m<sup>2</sup>と規模の大きいものである。掘立柱建物SBV07はSHV05から南へ20m離れて検出しており、この状況は北部と同様な配置を取っている。

これら南部で検出した弥生時代の遺構は、調査区が狭いものの現状から推定すると同調査区北部及び第Ⅲ調査区と同様に遺構が直径約60mの範囲内に収まることが解る。またこれらの遺構は同時期であることから、これは北部及び第Ⅲ調査区で確認された遺構の広がりと同じ規模を呈し、堅穴住居2棟、掘立柱建物1棟という構成要素もほぼ同じであることが解る。円形の堅穴住居には現状で張り出し付のものは確認されていないが、出土遺物の中に装飾品である勾玉、鉄製品が出土しているSHV04があることから、この堅穴住居を中心とした単位集団は形成されていたものと考えられる。

最後にそれぞれの単位集団の時期は出土遺物から下川津Ⅱ式併行期と考えられ、第Ⅲ調査区での遺構の変遷を見ると遺構Ⅱ期からⅢ期にかけての時期に相当する。この時期は第Ⅲ調査区において遺構数が徐々に増加する時期で、この時期においてのみ第Ⅴ調査区において集落が形成され、以後消滅する。これ以後集落が継続しないのは旧古川の氾濫で、第Ⅴ調査区が不安定になったものと考え、これは遺構面全体で確認された洪水砂によることから解る。

また弥生時代に古川がどこに流路を取っていたか不明であるが、予備調査で復元した旧地形に従うならば微高地bが第Ⅴ調査区に当たり、微高地aとは別の微高地になり、第Ⅳ調査区北部で検出した弥生時代の堅穴住居・土器棺墓とも別の単位になるものと考える。このことから微高地bに形成された集落の生産域は当然、低湿地bとなり、独自の水田経営を行っていたものと推定する。

#### 古代Ⅰ期

古代Ⅰ期の遺構は主として南部で検出している。検出した遺構は掘立柱建物2棟、溝、自然流路で

ある。掘立柱建物を検出した部分はこれ以外に柱穴を多數検出しており、この2棟以外に掘立柱建物を復元できるかと思われる。掘立柱建物SBV05は縦柱建物で、東辺と西辺が重複し、同一時期ではないが、南北主軸が真北から $1\sim 2^\circ$ 東偏とはほぼ真北を向くもの及び出土遺物から、両者とも時期は8世紀と考える。第IV調査区で検出した7世紀中葉（第IV調査区での古代I期に相当）と南北主軸の方向が同じであることと関連するが、時期的にはやや後出する。溝も南部で検出されているがやや蛇行し、これら掘立柱建物との関連性は認められない。自然流路は調査区東側で検出しており、予備調査で想定した旧流路cに当たる。この流路の出土遺物から旧流路cの上限が古代I期、8世紀頃まで遡ることを確認した。

## 古代II期

古代II期の遺構は古代I期と同様に主として調査区南部で検出している。検出した遺構は掘立柱建物3棟、溝5条、自然流路である。

掘立柱建物の南北主軸は真北から $13\sim 20^\circ$ 東を取っている。ほぼ同方向に流路を取る溝とは切り合ひ関係があり、掘立柱建物SBV02・03をSDV45が切っていることから、前後関係が確認できるが、出土遺物から若干の時期差であることが解る。また溝では特にSDV53・43・45がほぼ併行して検出されている。出土遺物からこれらは同時併存ではなく、SDV53が最も古く、SDV45、SDV43と新しくなる。時期は11世紀から12世紀に収まる。この3条とも直線的な流路を取り、流路主軸も真北から $15\sim 20^\circ$ 東に向くもので、掘立柱建物と同方向である。

この掘立柱建物・溝の主軸方向である真北より $13\sim 20^\circ$ の東偏は現在大内町で確認できる約 $7^\circ$ 東偏する条里地割より若干東に傾くが、この条里地割の延伸復元から見るとちょうどこれらの藩は、南北坪界線に合致することが解る。特に溝はちょうど調査区中央部、現在の東西に確認できる水路までしか検出されておらず、それより以北には延びていない。この現水路は条里地割の東西坪界線に合致することから、11～12世紀段階の条里地割の施工範囲及び施工時期について検討する資料となった。

自然流路は調査区東側で検出したもので、旧流路cに相当する。かなり蛇行し、7～9世紀のSRV08、11～12世紀のSRV07、12～13世紀のSRV05と細かい時期ごとに流路を変えていることが解る。

SDV53・43・45の溝はおそらく同時期であるSRV07を取り付くものと考えられるが、中世から近世にかけての流路SRV09・11によって削平を受けているため詳細は確認できない。またこれに関する導水施設等は検出していない。

また中央部でもほぼ同じ方向に流路を取る溝SDV23・41・36を検出しており、これらも同様に自然流路から導水する機能を有していたものと考えられる。

## 中世

中世の遺構は調査区東部で検出した自然流路と中央部で検出した井戸のみである。また中央部分で現在の水路下を調査したところ、下層から近世の溝を検出した。

自然流路SRV09～11は古代（8世紀）までの遺物を出土しているが、他の流路の出土遺物を検討した結果中世に機能していたことが確認できた。この自然流路の上限は中世前半で、下限は中世後半頃と考えられる。詳細な埋没時期は不明であるが、県内の溜池が修復・新規築造が盛んに行われた近世と考えられる。第VI調査区東に隣接する原間池は高松初代藩主松平頼重によって正保二（1645）年

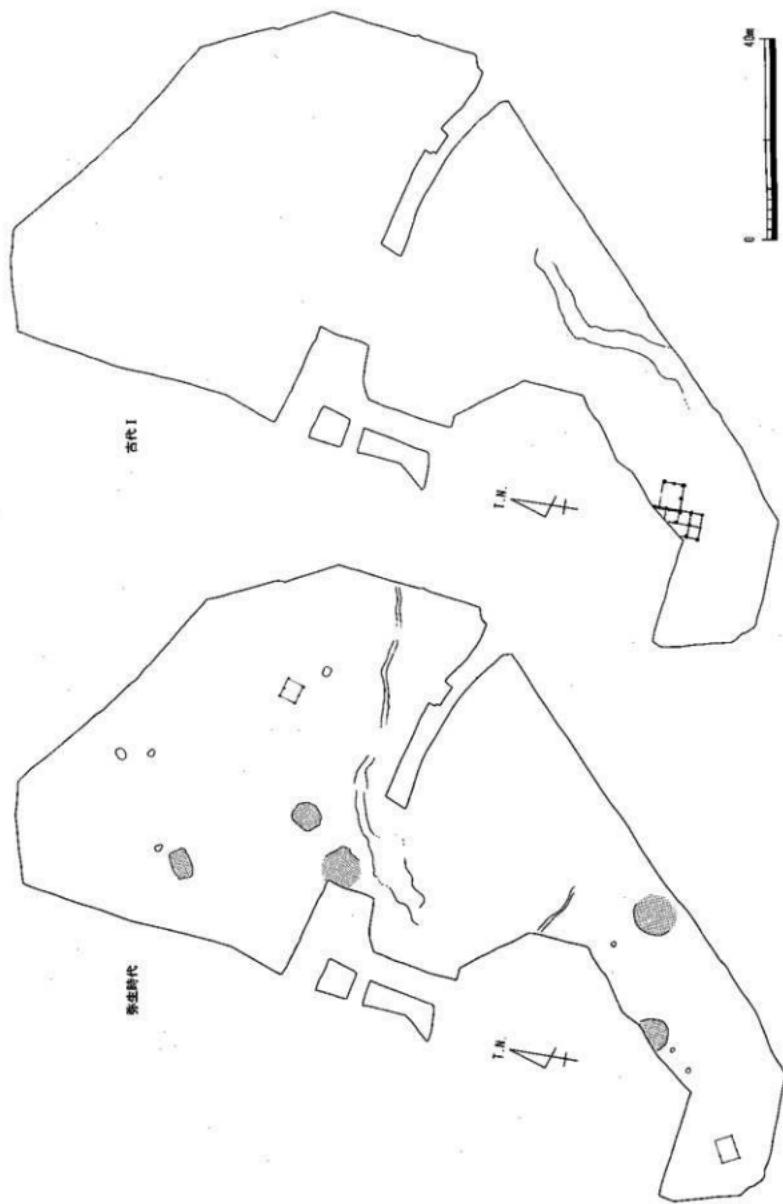
頃に築造されたといわれており、この原間池築造に伴い、流路変更を余儀なくされ、埋められたものと考える。これ以降古川は現位置に固定されたものと考える。

この自然流路は古代からかなり蛇行していたと考えられ、中世から近世の時期には護岸施設として多数の杭が肩部に打ち込まれていたのを確認した。

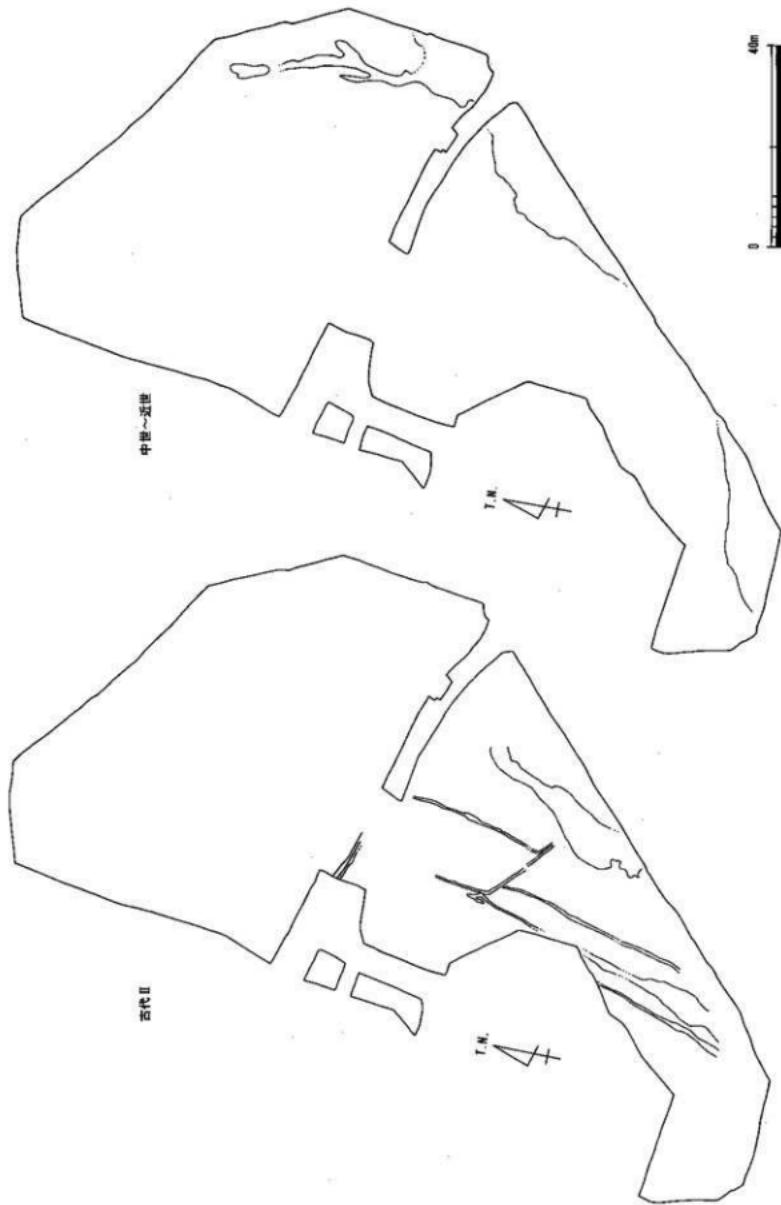
以上第V調査区で検出した4つの時期の検出遺構から、その変遷およびその利用が解る。

第V調査区で検出した遺構は主として南部において検出している。この微高地は現状で南北の高低差が約3mほどあり、北部より南部がより高所なだけに安定していたものと考えられる。その点を踏まえると特に古代以降南部を中心に遺構が形成されたことは理解できる。

第391図 V区遺構変遷図(1/1000)①



第392圖 V区遺構整理圖(1/1000)②



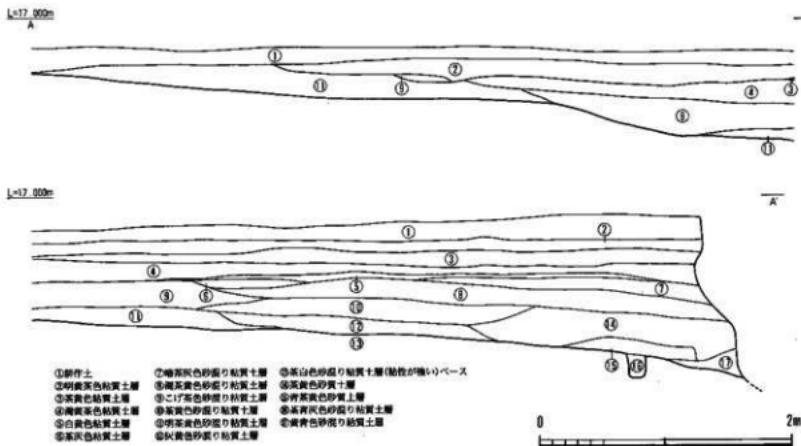
## 第VI調査区

第VI調査区は虎丸山から北方向に派生する丘陵、東丘陵の先端下北東部に広がる平野部分で、原間池の西側に位置する。調査区は西側を第IV調査区に東側を原間池に接する。予備調査の結果、原間池際は低湿地状を呈しており、遺構をほとんど確認していない。北部では第IV・V調査区から延びる流路があることが確認されている。遺構は東丘陵の北東裾部においてのみ検出した。

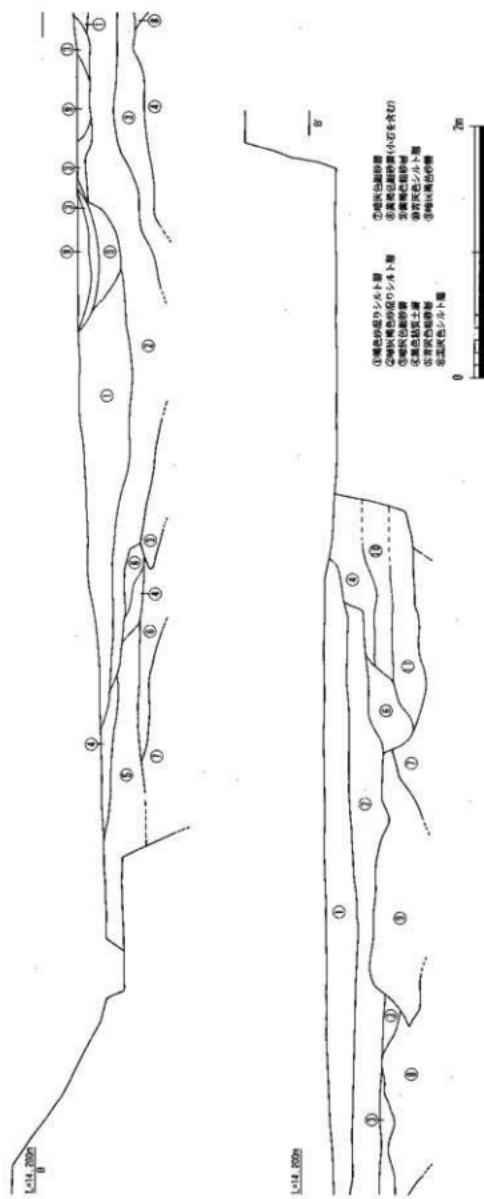
当初この調査区の南には白鳥町樋端から大内町原間に通じる古道があり、古来より人の行き来が確認されている。また從来樋端に架かる「神越橋（かんごしばし）」が名の由来の通りにこの周辺に主要な幹線道路の存在が指摘されていた。そのため主要幹線道路「南海道」との関係も視野に入れ、調査を開始した。

検出遺構面は二面で、古代・中世の遺構面と弥生時代の遺構面がある。

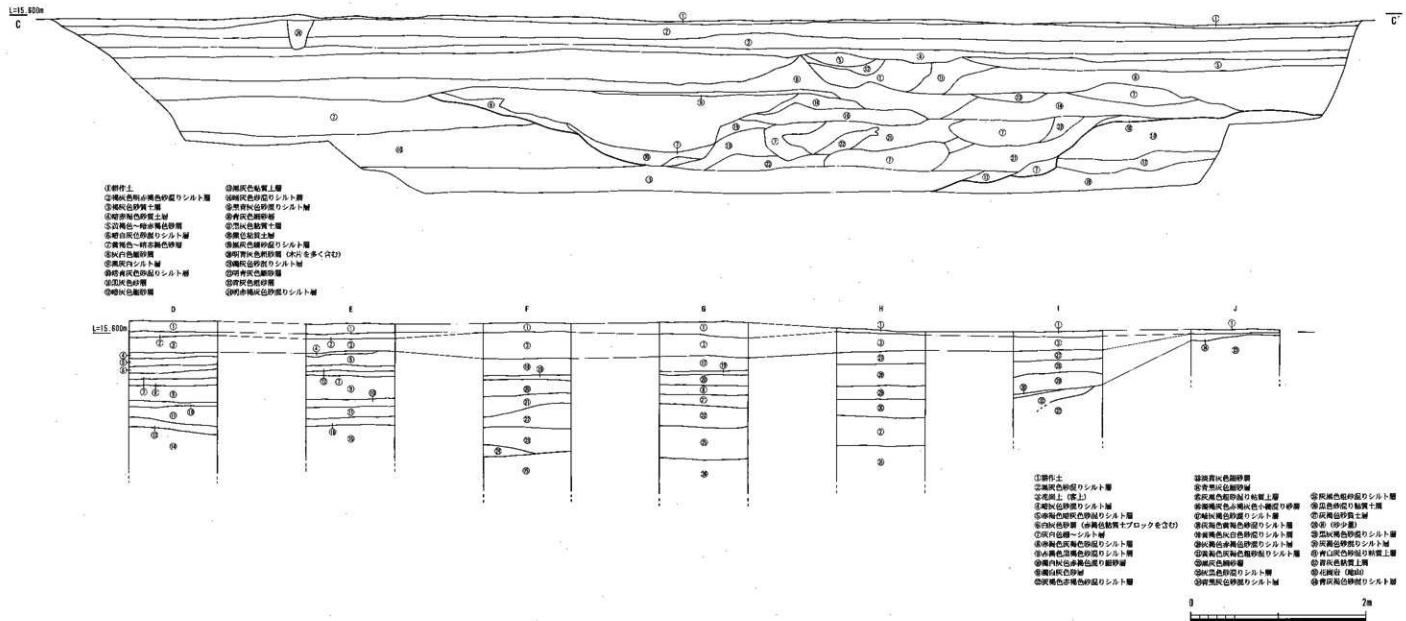
この調査区では竪穴住居跡 12 棟、掘立柱建物跡 14 棟、土坑 2 基、不明遺構 9 基、溝 16 条、柱穴多数を検出した。



第393図 VI区 A-A' 土層断面図(1/40)



第394図 VI区 B-B' 土層断面図(1/40)



第395図 VI区 C-C', D-J 土層断面図 (1/40)

## 竪穴住居跡

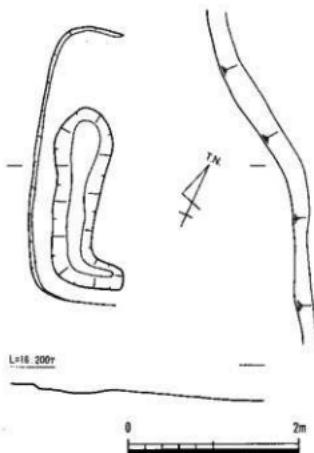
### SHVI01

SHVI01は第VI調査区中央、標高約16.0mにおいて検出した竪穴住居跡で、平面形態は東部が削平されているが、コーナー部が隅丸の方形を呈するものと考えられる。規模は西側の一辺で約3.1mを測り、床面積約(9.6)m<sup>2</sup>、検出面からの深さは約0.05mを測るもので、全体的にかなり削平を受けている。

東部がほとんど削平されているが、西部には掘り方内側に幅0.5m程度の溝が巡る。その他主柱穴等は確認できなかった。竪穴住居の南北主軸はN-19°-Wを取る。

竪穴住居内からほとんど遺物が出土していない。

時期は検出面及び近接する遺構の状況から古代と考える。



第396図 SHVI01平・断面図(1/60)

### SHVI02

SHVI02は第VI調査区中央、標高約16.4mにおいて検出した竪穴住居跡で、平面形態は東部が削平されているが、コーナー部が隅丸の方形を呈するものと考えられる。規模は西側の一辺で約4.95mを測り、床面積約(24.5)m<sup>2</sup>、検出面からの深さは約0.1mを測るもので、全体的にかなり削平を受けている。竪穴住居の南北主軸はN-18°-Eを取る。

竪穴住居内からほとんど遺物が出土していない。

僅かに出土している遺物(第397図3549)から時期は7世紀中葉と考える。

### SHVI03

SHVI03は第VI調査区中央、標高約16.4mにおいて検出した竪穴住居跡で、平面形態は東部が削平されているが、コーナー部が隅丸の方形を呈するものと考えられる。規模は西側の一辺で約7.05mを測り、床面積約(49.7)m<sup>2</sup>、検出面からの深さは約0.18mを測るもので、全体的にかなり削平を受けている。

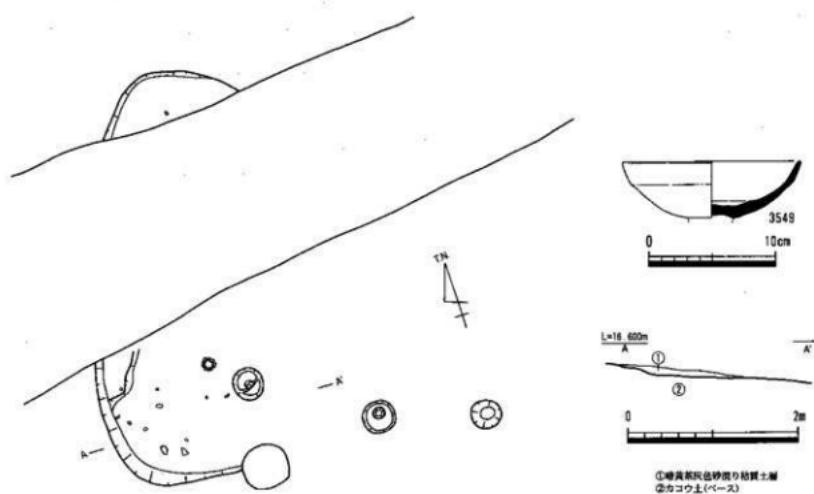
竪穴住居内から須恵器が出土している(第398図3550～3562)。

出土した遺物は壺身・壺蓋・高壺・壺などで、これらの遺物から7世紀後半と考える。

### SHVI04

SHVI04は第VI調査区北部、標高約14.9mにおいて検出した竪穴住居跡で、掘り方が削平され、主柱穴及び中央土坑のみの検出である。そのため規模は不明。主柱穴は平面形態が円形で、直径約0.45～0.6m、深さ約0.15～0.25mを測る。中央の土坑は平面形態が壺な円形を呈し、直径約0.55mで、2段に落ち込んでいる。主柱穴間は東西が2.2m、南北3.25mと南北間が長く、長方形を呈している。

主柱穴及び中央土坑から遺物は出土していない。そのため詳細な時期は不明であるが、竪穴住居内部構造から弥生時代と考える。



第397図 SHVI02平・断面図(1/60),出土遺物実測図(1/4)

#### SHVI05

SHVI05は第VI調査区中央、標高約16.1mにおいて検出した竪穴住居跡で、平面形態は東部及び北部が削平されているが、コーナー部が隅丸の方形を呈するものと考えられる。

竪穴住居内から須恵器が出土している（第400図3563・3564）。

出土した遺物は壺・皿で、時期は9世紀のものであることから竪穴住居でない可能性が考えられる。

#### SHVI06

SHVI06は第VI調査区中央、標高約16.35mにおいて検出した竪穴住居跡で、平面形態は東部及び南部が削平され、全容は不明であるが、コーナー部が隅丸の方形を呈するものと考えられる。

竪穴住居内から土師器が出土している（第401図3565）。

出土した遺物は壺・皿で、時期は9世紀のものであることから竪穴住居でない可能性が考えられる。

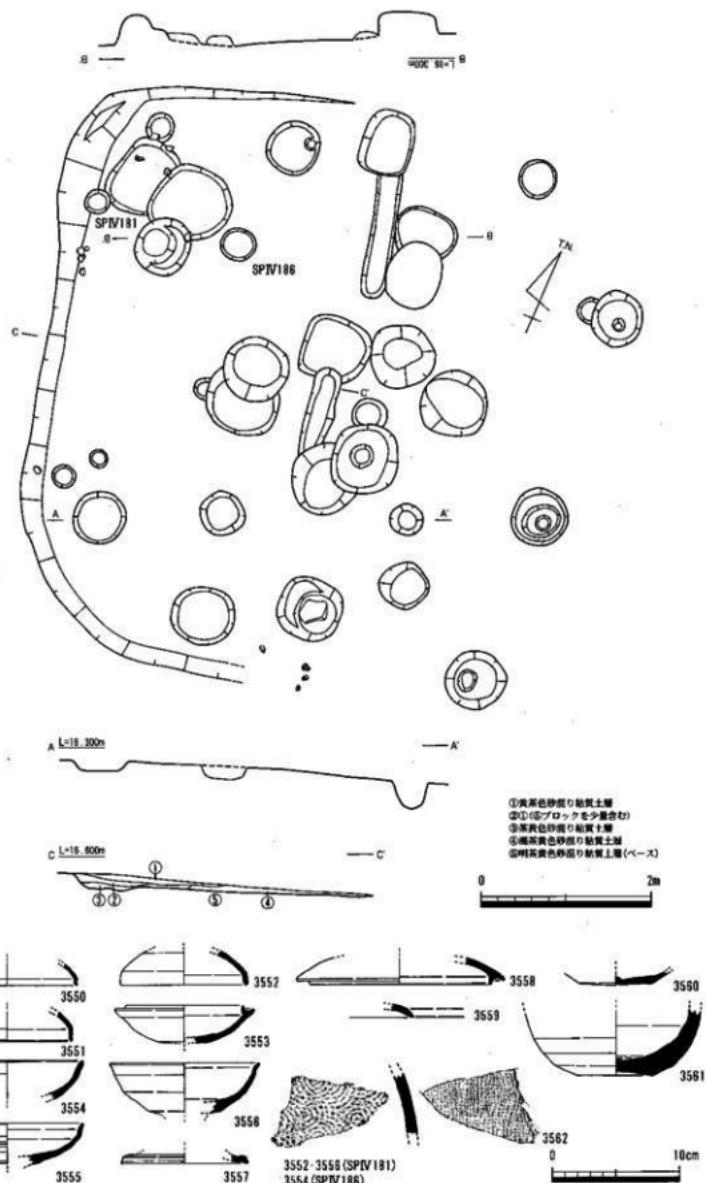
#### SHVI07

SHVI07は第VI調査区南部、標高約16.8mにおいて検出した竪穴住居跡で、南西隅のコーナー部と主柱穴4穴を検出した。平面形態は南西隅のコーナー部が隅丸を呈することから方形と考えられる。

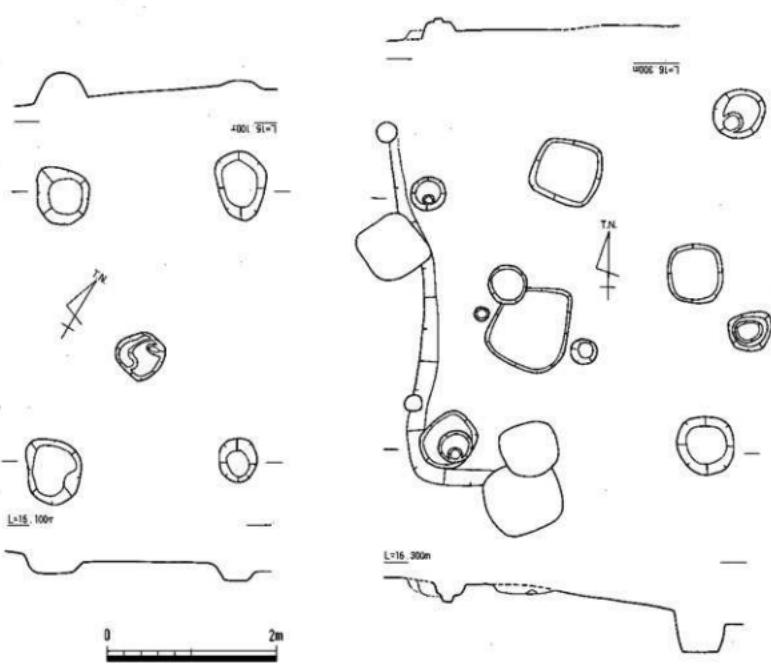
周囲には幅12～15cm程度の壁溝を巡らす。主柱穴は平面形態が歪な円形を呈し、直径約0.5m、深さ0.2～0.4mを測る。

竪穴住居内から遺物は出土していない。

竪穴住居の構造から弥生時代後期と考えられる。



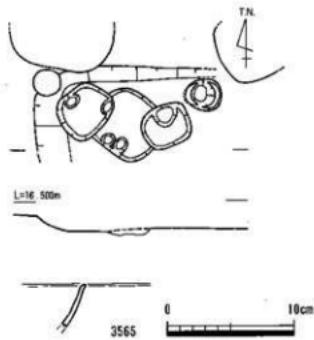
第399図 SHVI03平・断面図(1/60),出土遺物実測図(1/4)



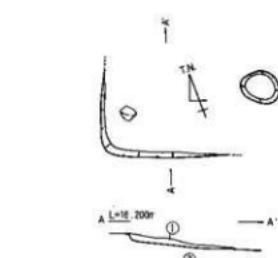
第399図 SHVI04平・断面図(1/60)



第400図 SHVI05平・断面図(1/60),出土遺物実測図(1/4)

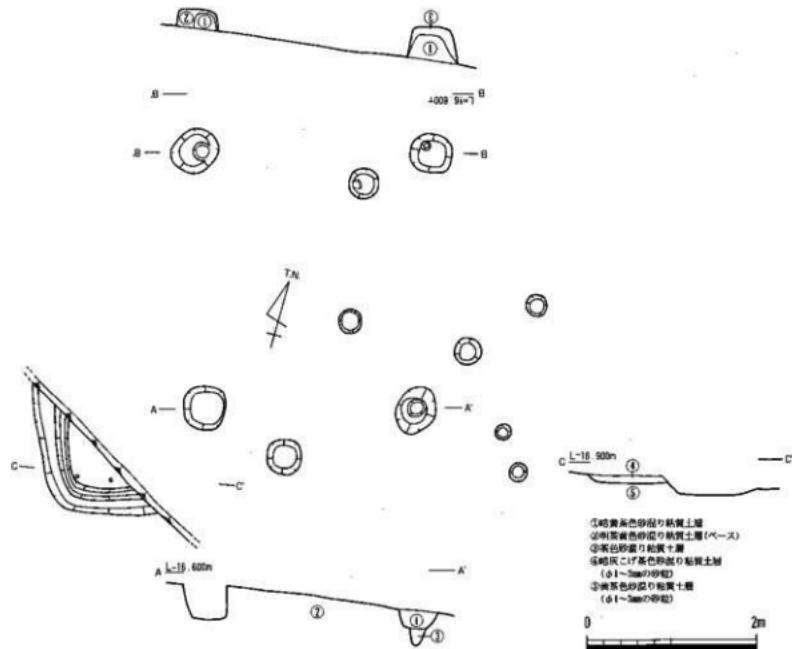


第401図 SHVI06平・断面図(1/60),出土遺物実測図(1/4)



①茶色砂部り粘質土層  
②淡青茶色砂部り粘質土層(ベース)

第403図 SHVI08平・断面図(1/60)



第402図 SHVI07平・断面図(1/60)

#### SHVI08

SHVI08は第VI調査区南部、標高約16.05 mにおいて検出した竪穴住居跡で、平面形態は東部及び北部が削平され、全容は不明であるが、コーナー部が隅丸の方形を呈するものと考えられる。

竪穴住居内から遺物は出土していない。そのため時期は不明である。

#### SHVI12

SHVI12は第VI調査区南部、標高約17.3 mにおいて検出した竪穴住居跡である。平面形態は北部が削平され、全容は不明であるが、隅丸の方形を呈するものと考えられ、西辺には方形の張り出しを持つ。内部には2重の壁溝及び主柱穴は推定4穴の内、2穴を検出した。また周囲あるいは斜面の高い部分に排水用の溝を持つ。竪穴住居内堆積土は土層②(暗青灰色粘質土)、土層③(暗灰色粘質土)の2層に細分される。断面から2条の周溝間がやや高く内側の周溝内がやや低い。

以上のことからすると当初張り出しと考えた部分が竪穴住居の主となる部分で、南側と東側を取り囲むように拡張部があると考えられる。

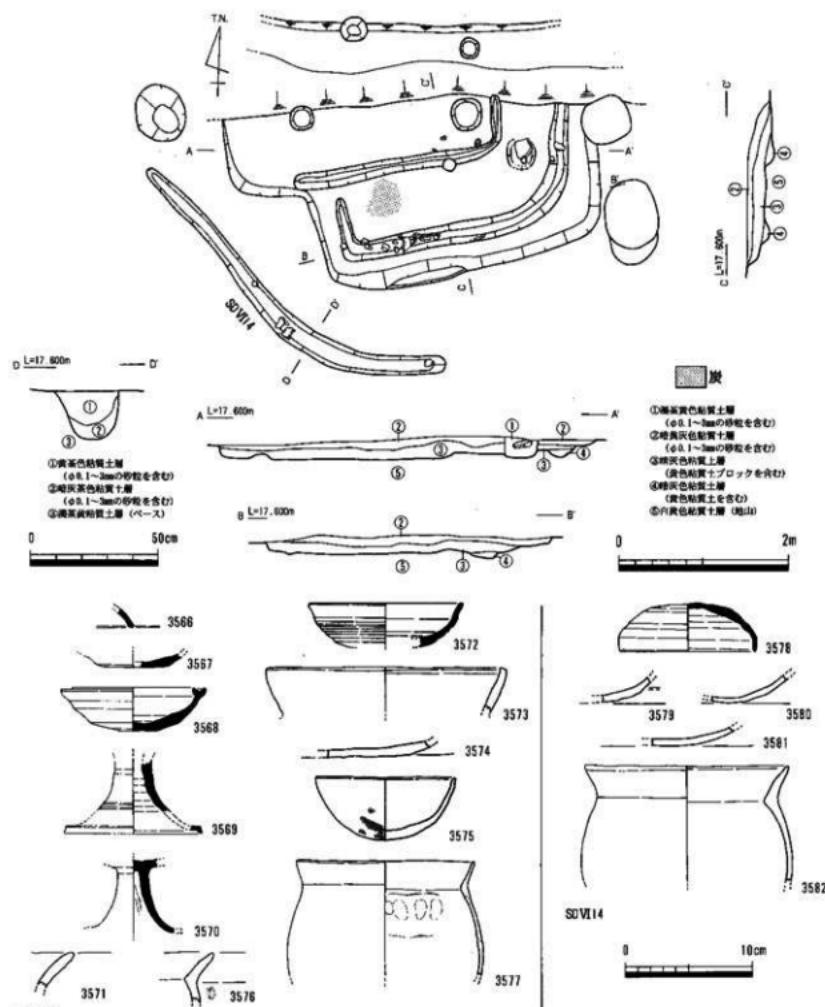
そうすると規模は一辺が約3.35 m、検出面からの深さ約0.28 mを測り、南側と東側には幅1.1~1.3 m、検出面からの深さ0.2 mの拡張部を巡らす。従ってその高低差は8 cm程度となる。

主たる部分（内側）の壁溝は幅 15 cm で、南側と東側で検出した。主柱穴は平面形態が円形で、直径 0.28 ~ 0.37 m、深さ約 0.05 m を測る。拡張部には幅 25 cm の壁溝が巡り、そこから遺物が多量に出土している。

竪穴住居南部分には幅 26 cm、深さ 19 cm の細い周溝 SDVII14 を検出した。

竪穴住居の南北主軸は N-12°-W をとる。

北半分が削平され、全容は判然としないが、推定する内部形態は特異な形態を持っていることが判



SHVI12

第404図 SHVI12・SHVI14平・断面図(1/60),出土遺物実測図(1/4)

明した。

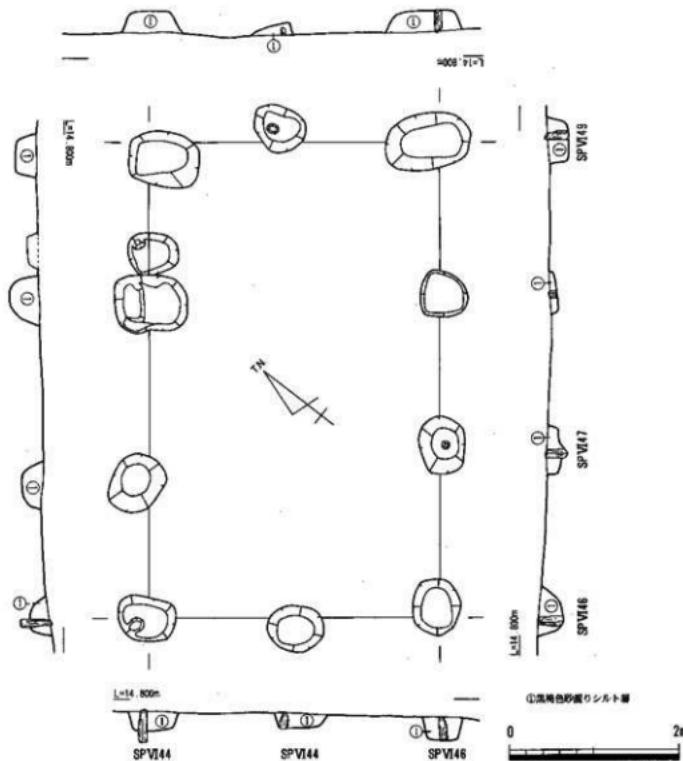
堅穴住居内から須恵器・土師器・土師質土器が出土している(第404図3566~3582)。

3566~3571は包含層出土、3572~3577は拡張部周溝出土、3578~3582は堅穴住居外側で検出した周溝出土遺物である。床面直上あるいは周溝に伴う遺物は拡張部に集中し、拡張部がベッド状遺構の様相を呈している。またそれは出土遺物が土師器壺・甕を主としていることからも伺える。

出土遺物の中で特に注目できるのは土師器の壺で、胎土が精良な3574~3579と3581が認められるが、3575のみ粗製の壺が出土しているということである。3575の胎土と土師質甕の胎土が近似することから、在地の系譜として出現した壺と畿内の影響下で成立した壺の差がでている。

時期は須恵器・土師器から7世紀中葉と考えられる。

一方周溝出土遺物は堅穴住居内出土遺物と同じ様相を呈しており、出土遺物からも同時期に機能していたことを確認できる。



第405図 SB VII 01平・断面図(1/60)

## 掘立柱建物跡

### SBVI01

SBVI01は第VI調査区北部、標高14.6mにおいて検出した2(梁間)×3(桁行)間で、東西棟の掘立柱建物である。規模は梁間3.45m、桁行5.67m、床面積19.6m<sup>2</sup>を測り、南北主軸はN-48°-Wをとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が隅丸の方形を呈し、規模は一辺0.55～0.85m、深さ0.17～0.28mを測る。

建物を構成する柱穴10穴の内、7穴で柱材が出土した。その内内化した柱材は5点で、全て芯持材ではなく1/4程度のみかん削材である。7穴から出土した柱材中6点を材質鑑定し、その結果、全てムクロジと判断された。それによるとムクロジは四国・九州・沖縄に分布する常緑の高木で、材は強靱・堅硬、建築・器具などに用いられるようである。

この掘立柱建物を検出した位置は現在でもかなり湧水が激しく、湿潤な低地の可能性が考えられ、その劣悪な環境に適応するように柱材が選定されたものと考える。

柱穴内から柱材の他に遺物は出土していない。そのため詳細な時期については不明であるが、ここでは周辺の状況から古代と考える。

### SBVI02

SBVI02は第VI調査区北部、標高16.1mにおいて検出した2(梁間)×3(桁行)間で、東西棟の掘立柱建物である。この掘立柱建物を検出した位置には他にSBVI03・04が所在し、数回の建て替えが想定できる。規模は梁間4.07m、桁行8.10m、床面積33.0m<sup>2</sup>を測り、南北主軸はN-6°-Wをとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が隅丸の方形を呈し、規模は一辺直径0.57～0.8m、深さ0.3～0.6mを測る。

この掘立柱建物の桁行を構成する柱穴間は等間隔でなく、中央2穴間が約2.1mで、それ以外は約3.0mを測る変則的な建物である。

柱穴から遺物が少量出土している(第407図3588・3589)。3588は須恵器壺で、3589は須恵器高脚である。

掘立柱建物の時期はこれらの遺物から7・8世紀と考える。

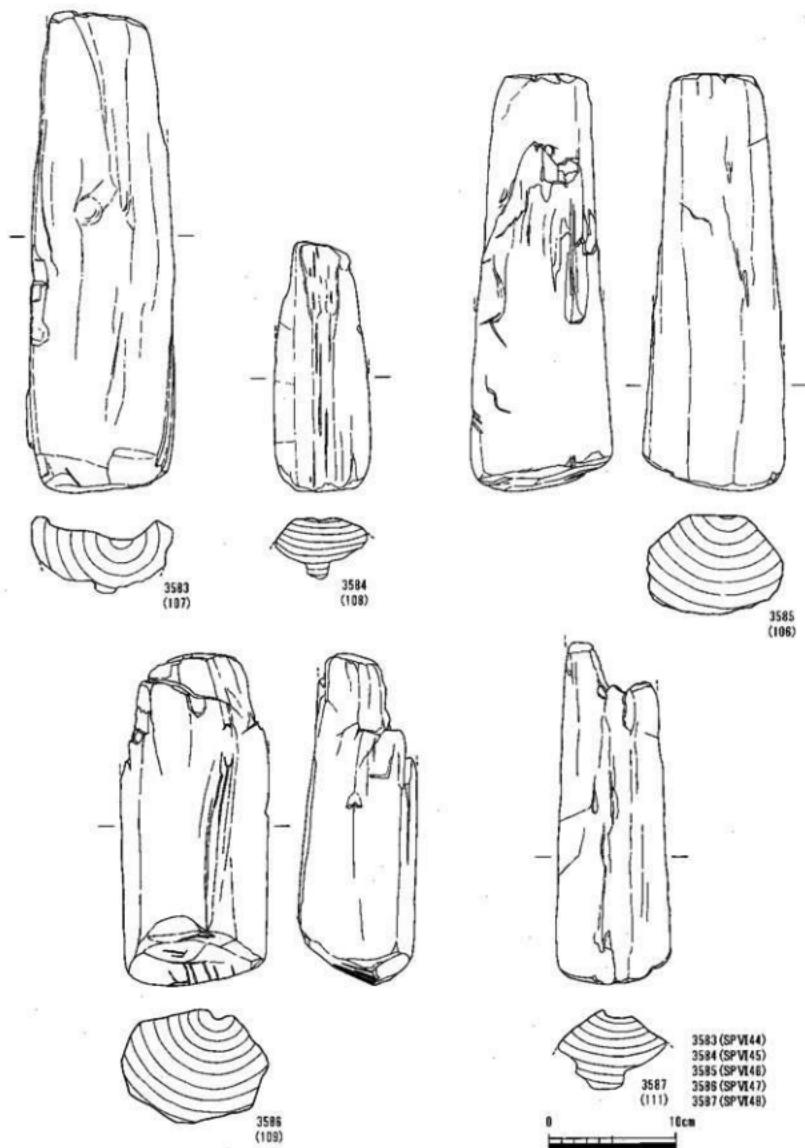
### SBVI03

SBVI03は第VI調査区北部、標高15.9mにおいて検出した2(梁間)×3(桁行)間で、東西棟の掘立柱建物である。規模は梁間4.25m、桁行6.67m、床面積28.3m<sup>2</sup>を測り、南北主軸はN-8°-Wをとる。この建物を構成する柱穴の平面形態は概ね隅丸の方形を呈し、規模は直径0.4～0.8m、深さ0.2～0.65mを測る。

この掘立柱建物もSBVI02と同様に桁行を構成する柱穴間は等間隔でなく、中央2穴間が約1.8mで、それ以外は約2.4mを測る変則的な建物である。

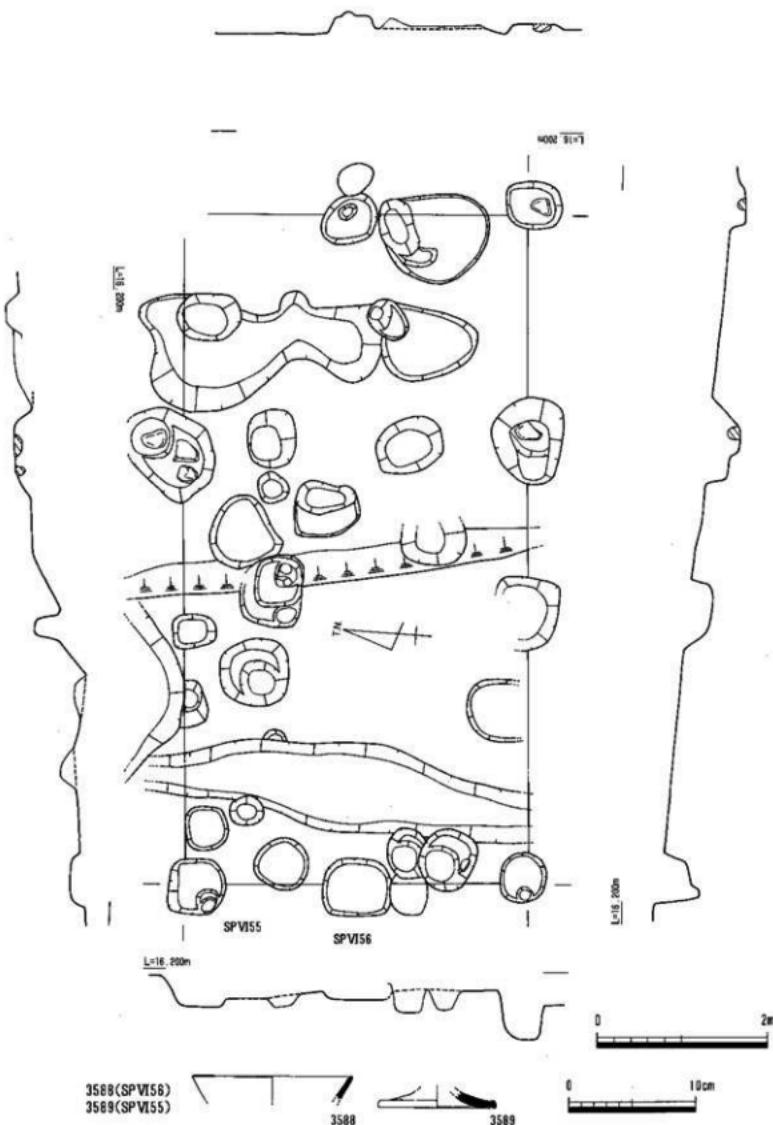
柱穴から遺物が少量出土している(第408図3590・3591)。3590・3591は須恵器蓋で、口縁端部の肩曲が明瞭でない。

掘立柱建物の時期はこれらの遺物から7・8世紀と考える。



( ) は樹種同定試料番号

第406図 SBVI 01出土遺物実測図(1/4)



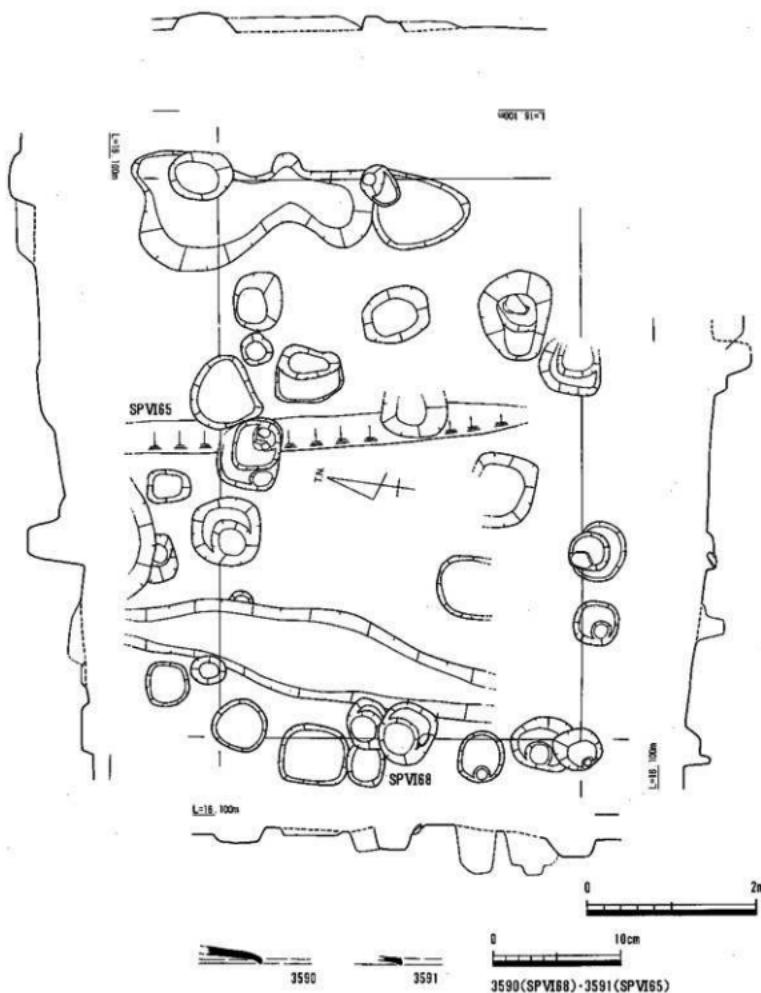
第407図 SBVI02平・断面図(1/60),出土遺物実測図(1/4)

## SBVI04

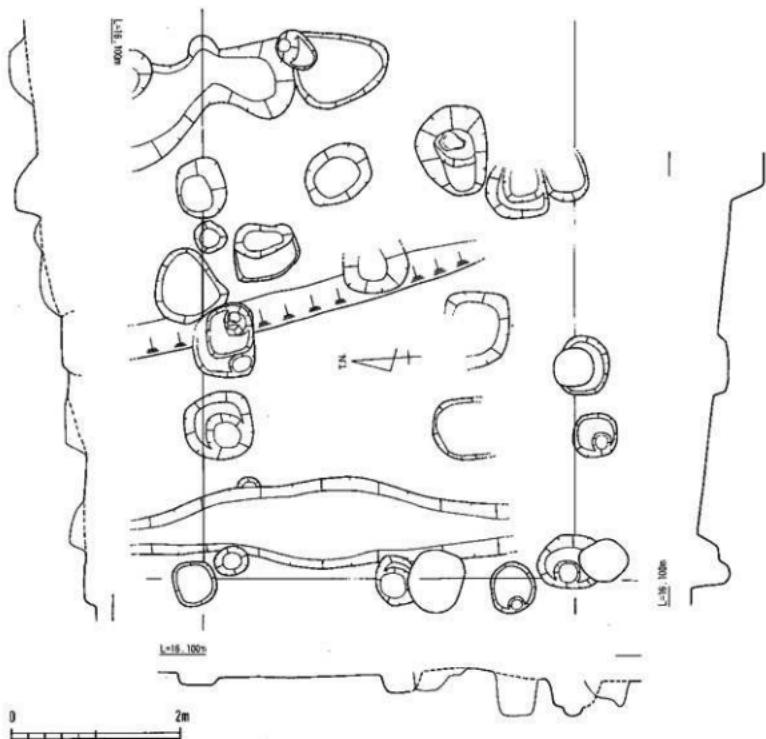
SBVI04は第VI調査区北部、標高15.9mにおいて検出した2(梁間)×2(桁行)間で、東西棟の掘立柱建物である。規模は梁間4.42m、桁行(4.8)m、南北主軸はN3.5°Wをとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が隅丸の方形を呈し、規模は直径約0.5~0.8m、深さ0.2~0.45mを測る。

柱穴から遺物が出土していないため、時期は不明である。

SBVI02・03はほぼ同じ位置で検出した。検出時の平面的な切り合いから前後関係をみるとSBVI04(古)



第408図 SBVI03平・断面図(1/60),出土遺物実測図(1/4)



第409図 SBVI04平・断面図(1/60)

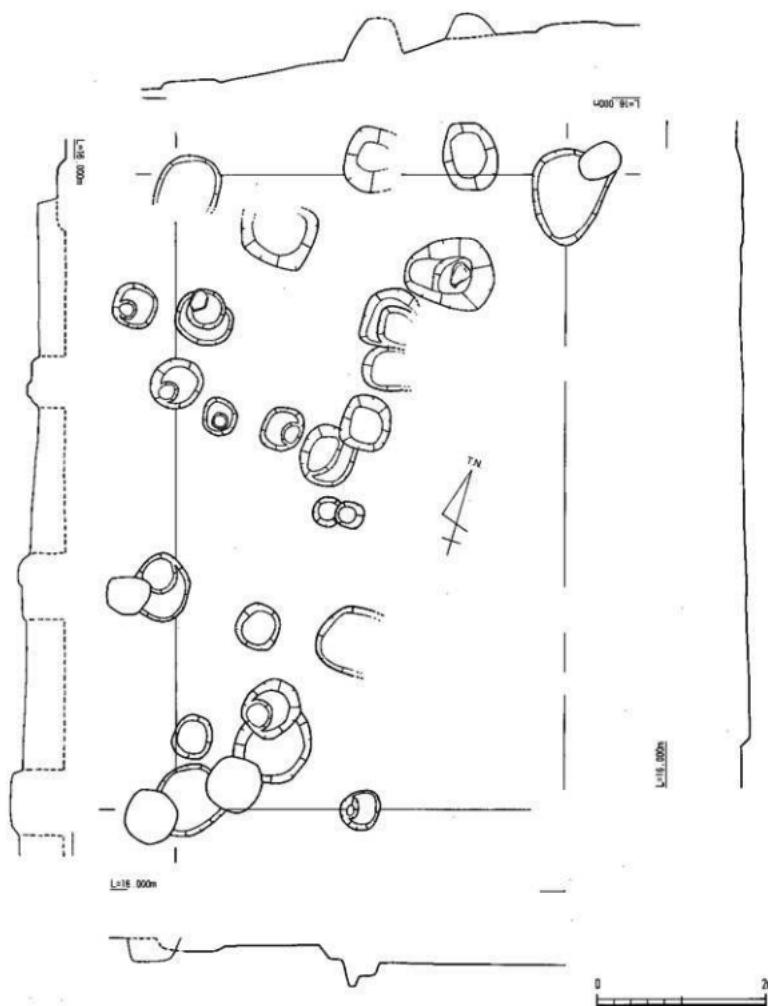
→ SBVI03(新)となり、柱穴出土遺物から概ね SBVI02・03 が同時期であることから SBVI04 → SBVI02・03 となる。またこれらの南北主軸は SBVI04 がほぼ真北を向き、SBVI02・03 が真北からやや西に振ることが確認されている。一方Ⅱ・Ⅳ区で検出した掘立柱建物は 7 世紀中葉のものが南北主軸がほぼ真北を向き、これ以降は南北主軸が真北をとる規則性がないことが確認されている。

以上から 7 世紀中葉段階の掘立柱建物は検出地区が違っても南北主軸が真北を向くことが確認でき、それ以降は地形などに規制を受け、主軸の規則性がなくなる。したがってⅥ区で検出した SBVI04 は 7 世紀中葉と考えたい。

#### SBVI05

SBVI05 は第Ⅵ調査区中央部、標高 15.45 mにおいて検出した 2(梁間) × 3(桁行)間で、南北棟の掘立柱建物である。規模は梁間 4.63 m、桁行 7.6 m、床面積 35.2 m<sup>2</sup>を測り、南北主軸は N-17°-W をとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が歪な円形を呈し、規模は直径 0.6 ~ 0.8 m、深さ 0.1 ~ 0.5 mを測る。

柱穴内から遺物が出土していないので時期は不明であるが、近接する掘立柱建物からほぼ同時期と考え古代と考える。

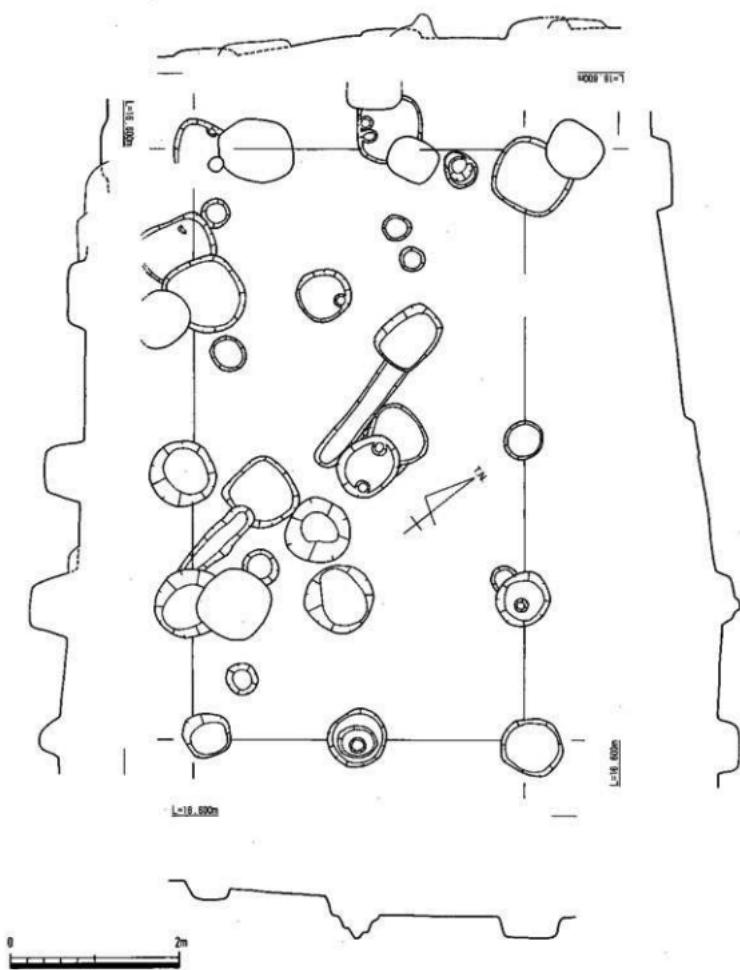


第410図 SBVI05平・断面図(1/60)

## SBVI06

SBVI06は第VI調査区南部、標高15.8mにおいて検出した2(梁間)×4(桁行)間で、南北棟の掘立柱建物である。規模は梁間3.96m、桁行7.04m、床面積27.9m<sup>2</sup>を測り、南北主軸はN41.5°Wをとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が歪な円形を呈し、規模は直径0.4~0.9m、深さ0.2~0.45mを測る。

柱穴から遺物が出土しておらず、詳細な時期決定は行えないが、古代と考える。

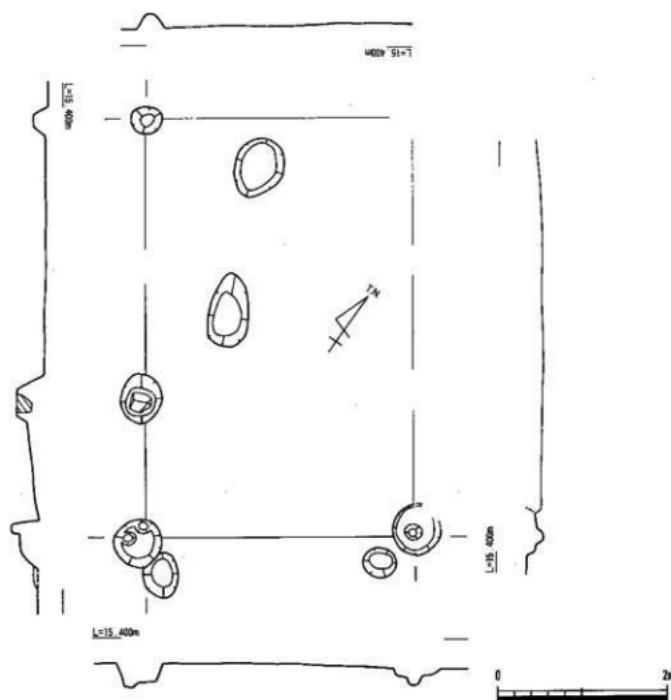


第411図 SBVI06平・断面図(1/60)

### SBVI07

SBVI07は第VI調査区南部、標高15.1mにおいて検出した1(梁間)×3(桁行)間で、北東部が予備調査トレンチによって削平を受けているが、南北棟の掘立柱建物である。規模は梁間3.15m、桁行5.0m、床面積15.8m<sup>2</sup>を測り、南北主軸はN-35°-Wをとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が円形を呈し、規模は直径0.3～0.5m、深さ0.15～0.2mを測る。

柱穴から遺物が出土しておらず、詳細な時期決定は行えないが、古代と考える。



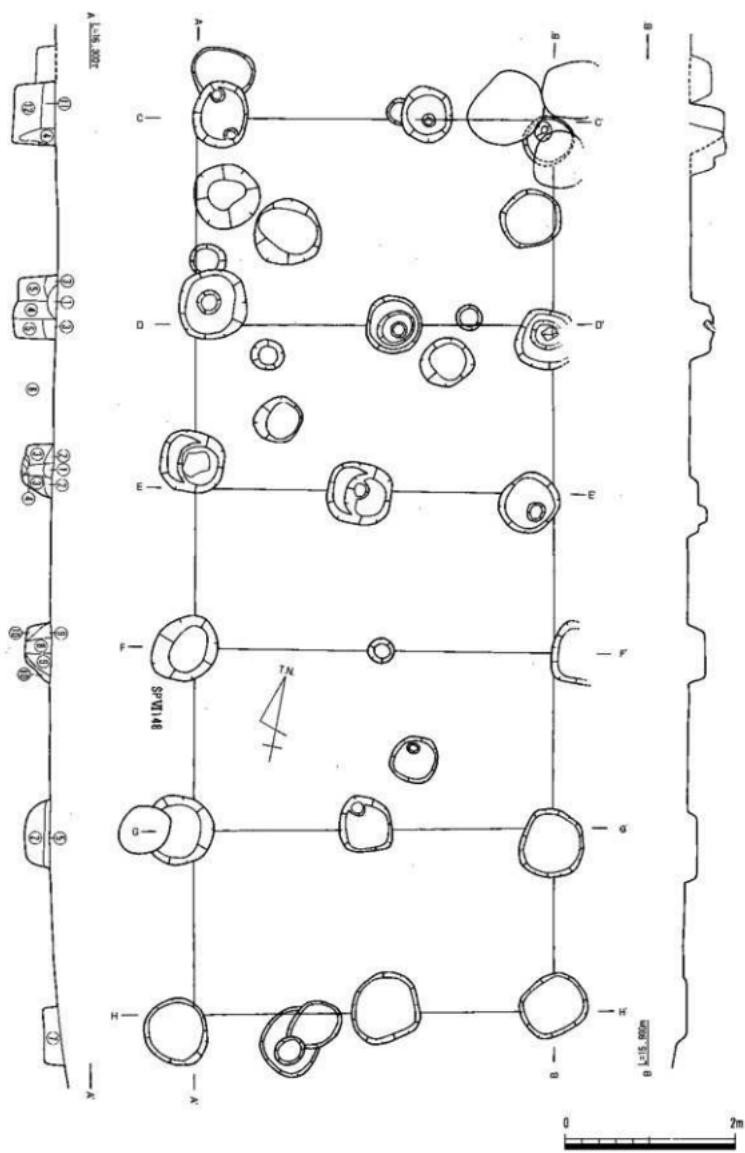
第412図 SBVI07平・断面図(1/60)

### SBVI08

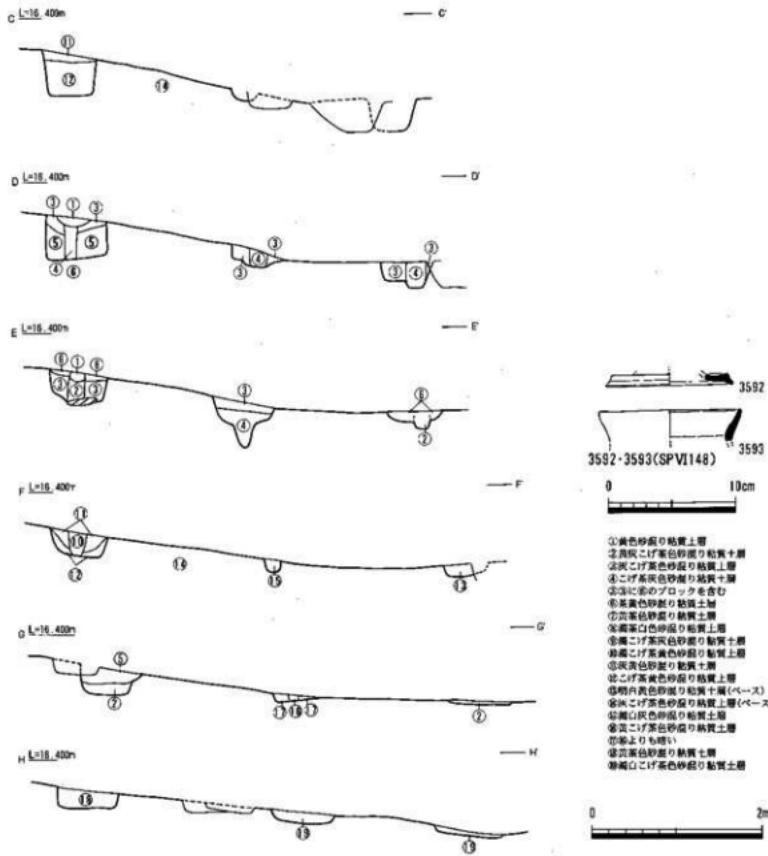
SBVI08は第VI調査区南部、標高15.9mにおいて検出した2(梁間)×5(桁行)間で、南北棟の掘立柱建物である。それぞれの梁間に柱穴を持ち、総柱の様相を呈する。規模は梁間4.27m、桁行10.7m、床面積45.7m<sup>2</sup>を測り、南北主軸はN-10°-Wをとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が隅丸の方形を呈し、規模は直径0.6～0.8m、深さ0.2～0.5mを測る。

柱穴内から須恵器・土師質土器が出土している(第414図3592・3593)。

3592は須恵器高坏の底部と考えられ、掘立柱建物の時期は7世紀頃と考えられる。



第413図 SBVI08平・断面図(1/60)



第414図 SBVI08断面図(1/60),出土遺物実測図(1/4)

#### SBVI09

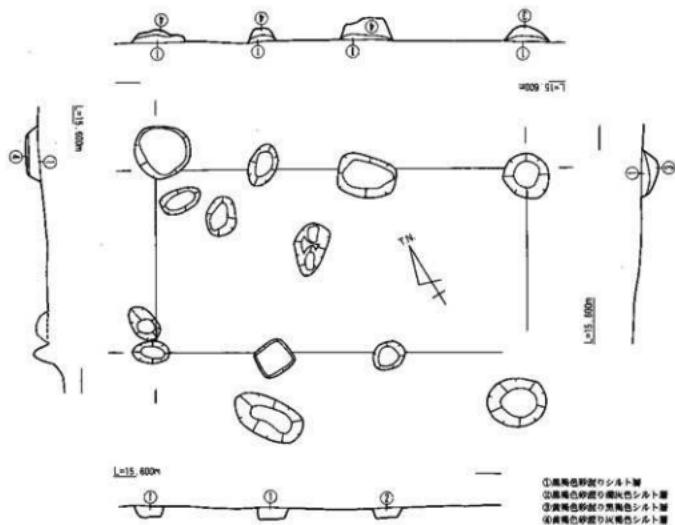
SBVI09は第VI調査区南部、標高15.2mにおいて検出した1(梁間)×3(桁行)間で、東西棟の掘立柱建物である。規模は梁間2.2m、桁行4.4m、床面積9.7m<sup>2</sup>を測り、南北主軸はN-31°-Wをとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が歪な円形を呈し、規模は直径0.3～0.65m、深さ0.1～0.15mを測る。柱穴から遺物が出土しておらず、詳細な時期決定は行えないが、古代と考える。

#### SBVI10

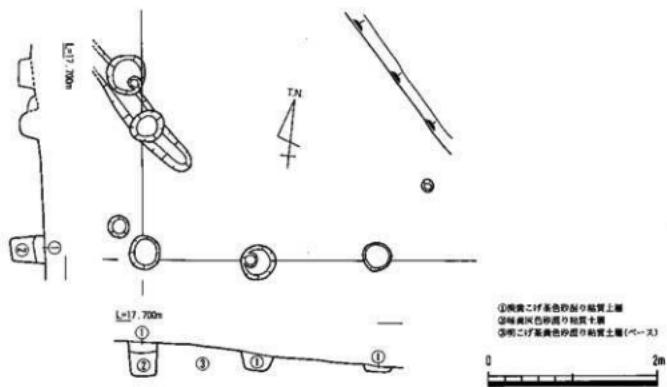
SBVI10は第VI調査区南部、標高17.5mにおいて検出した1(梁間)×3(桁行)間で、北東部が地形の傾斜によって削平を受けているが、おそらく東西棟の掘立柱建物である。規模は從って不明で、南

北主軸は N-6°-W をとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が円形を呈し、規模は直径 0.3 ~ 0.4 m、深さ 0.2 ~ 0.4 m を測る。

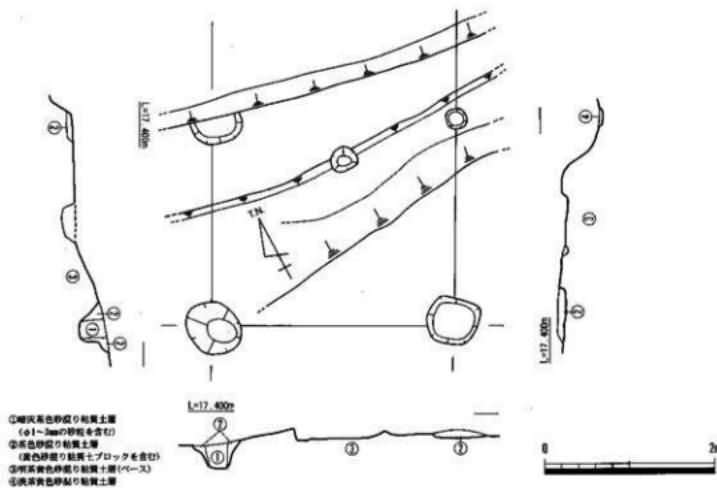
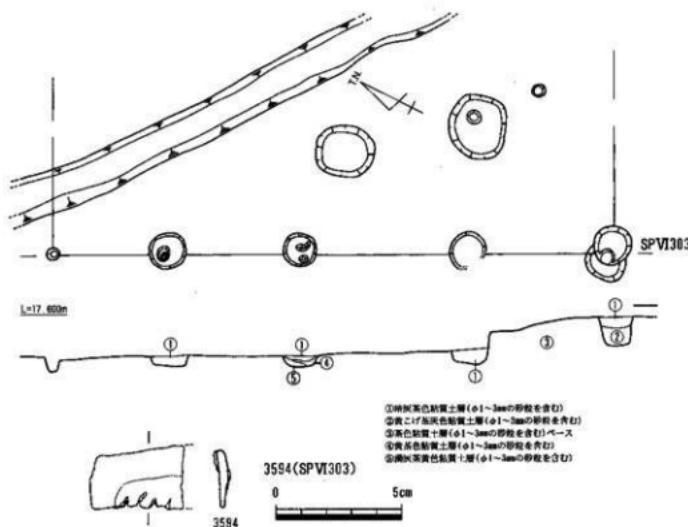
柱穴から遺物が出土しておらず、詳細な時期決定は行えないが、古代と考える。



第415図 SBVI09平・断面図(1/60)



第416図 SBVI10平・断面図(1/60)



### SBVI11

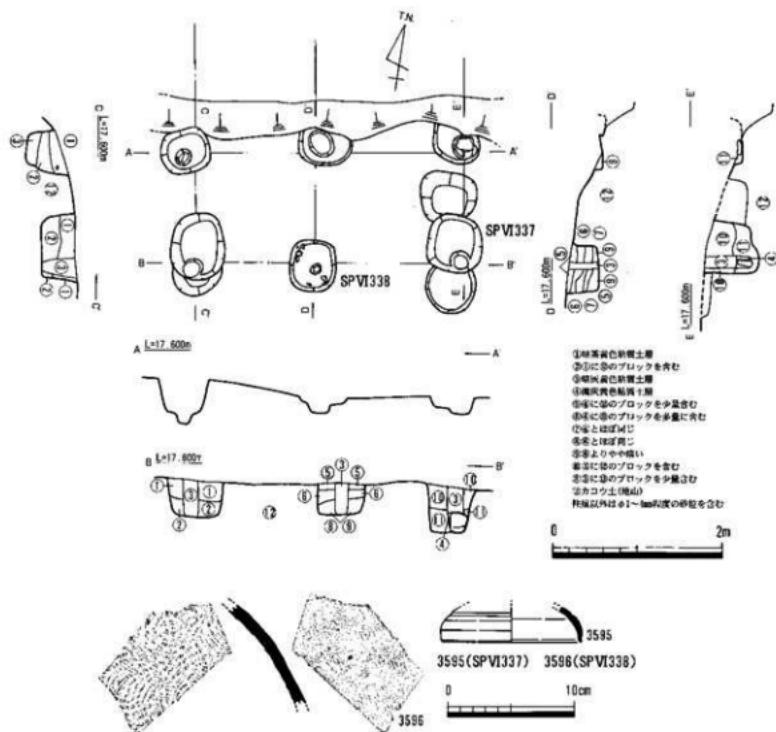
SBVI11は第VI調査区南部、標高17.5mにおいて検出した(2)(梁間)×3(桁行)間で、北側に庇の付く南北棟の掘立柱建物である。規模は桁行5.30(庇部分も含めると6.68)mを測り、南北主軸はN-26°-Wをとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が円形を呈し、規模は直径0.4m、深さ0.1~0.35mを測る。

柱穴からほとんど遺物が出土しておらず、詳細な時期決定は行えないが、唯一出土した鉄製鎌から考えて中世と考える。

### SBVI12

SBVI12は第VI調査区南部、標高17.2mにおいて検出した1(梁間)×(2)(桁行)間で、北部が地形の傾斜によって削平を受けているが、おそらく南北棟の掘立柱建物である。規模は從って不明で、南北主軸はN-6°-Eをとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が亜なり形を呈し、規模は直径0.6m、深さ約0.25mを測る。

柱穴から遺物が出土しておらず、詳細な時期決定は行えないが、古代と考える。



第419図 SBVI13平・断面図(1/60),出土遺物実測図(1/4)

### SBVI13

SBVI13は第VI調査区南部、標高17.4mにおいて検出した2(梁間)×2(桁行)間で、南北棟の総柱掘立柱建物である。規模は梁間3.18m、桁行1.33(1間分)mを測り、南北主軸はN-10°-Wをとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が隅丸の方形を呈し、規模は直径0.5~0.7m、深さ0.4~0.55mを測る。土層断面から柱旗が確認でき、直径15~19cmの柱材であることが解る。

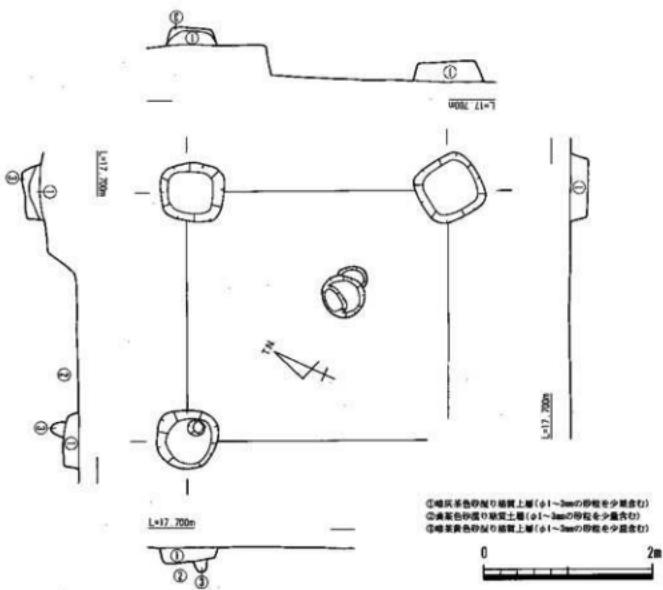
柱穴から須恵器が出土している(第419図3595・3596)。

3595は須恵器壺蓋で、3596は須恵器壺の体部である。これらの遺物から時期は7世紀の中葉と考えられる。

### SBVI14

SBVI14は第VI調査区南部、標高17.5mにおいて検出した1(梁間)×1(桁行)間の掘立柱建物である。規模は柱穴間が約3mで、南北主軸はN-25°-Wをとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が方形を呈し、規模は一辺約0.7m、深さ約0.2mを測る。

柱穴から遺物が出土しておらず、詳細な時期決定は行えないが、弥生時代と考える。



第420図 SBVI14平・断面図(1/60)

## 土坑跡

### SKVI01

SKVI01は第VI調査区北部、標高15.9mにおいて検出した土坑で、平面形態は東西に長い梢円形を呈する。規模は長軸が東側の削平により不明であるが、短軸約1.0m、検出面からの深さ約0.3mを測る。

断面は東になるに従い深くなり、溝状を呈する。

土坑内から須恵器・土師器・土師質土器などが出土した（第421図3597～3604）。

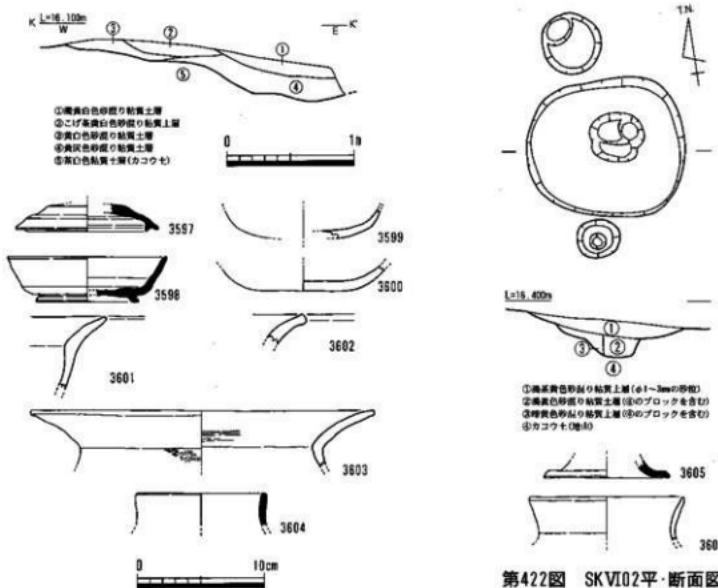
これらの出土遺物から時期は7世紀後半から8世紀前半頃である。

### SKVI02

SKVI02は第VI調査区北部、標高16.3mにおいて検出した土坑で、平面形態は円形を呈する。規模は直径1.26m、検出面からの深さは最深部で0.3mを測る。掘り方断面は上開きの「U」字状を呈し、中央部のみ1段深くなる。

土坑内から少量の遺物が出土した（第422図3605・3606）。

3605の須恵器高杯から7世紀中葉と考える。



第421図 SKVI01断面図(1/40),出土遺物実測図(1/4)  
第422図 SKVI02平・断面図(1/40)  
出土遺物実測図(1/4)

第421図 SKVI01断面図(1/40),出土遺物実測図(1/4)

## 溝状遺構

### SDVI01

SDVI01は第VI調査区北部、標高14.8mにおいて検出した溝状遺構で、ほぼ東西方向の流路が西部になり、北西方向に屈曲する。ちょうど弥生時代・古代の遺構の北限を画する溝である。

規模は幅約0.6~1.0mで、現存長約38.0mで検出した。溝は断面「U」字型を呈し、検出面からの深さは約0.3~0.4mを測る。

溝からは須恵器・土師器が出土している（第423図3607~3610）。

時期は溝から出土した須恵器から7世紀中葉である。

### SDVI03

SDVI03は第VI調査区中央部、標高17.1mにおいて検出した溝状遺構で、途切れてはいるがほぼ南北方向に流路を取る。

規模は幅約0.64~2.05mで、途切れてはいるが現存長約14mで検出した。溝は断面が浅い「U」字型を呈し、検出面からの深さは約0.20mを測る。

溝からは少量の須恵器が出土している（第425図3611）。

時期は溝から出土した須恵器及び埋土の状況も合わせ、7世紀中葉と考えられる。

### SDVI15

SDVI15は第VI調査区南部、標高14.9mにおいて検出した溝状遺構で、ほぼ東西に流路を取る溝がほぼ北方向に屈曲する。

規模は幅約0.4mで、途切れてはいるが現存長約13.0mで検出した。溝は断面「U」字型を呈し、検出面からの深さは約0.14mを測る。

### SDVI16

SDVI16は第VI調査区南部、標高14.9mにおいて検出した溝状遺構である。

規模は幅0.24~0.4mで、現存長約1.6mで検出した。溝は断面が浅い「U」字型を呈し、検出面からの深さは約0.08mを測る。

溝からは少量の須恵器が出土している（第425図3612）。

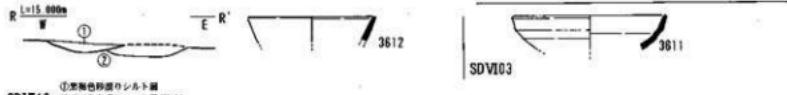
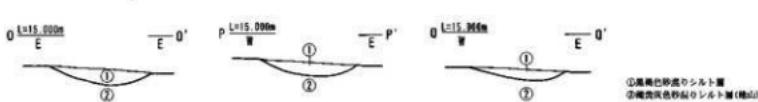
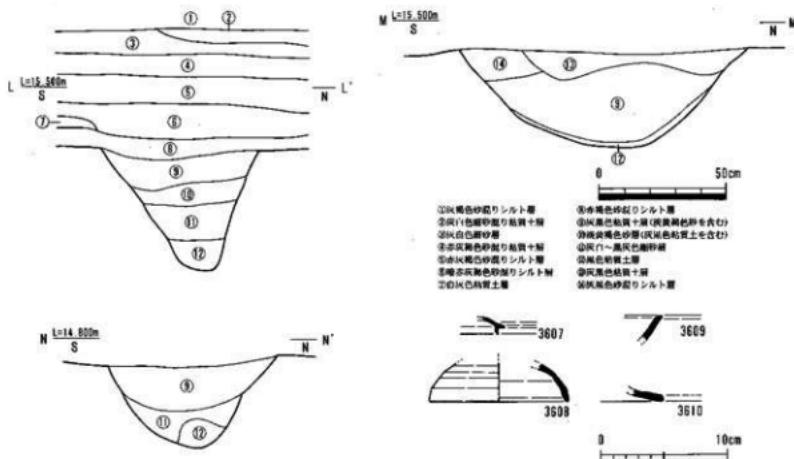
時期は溝から出土した遺物から古代と考えられる。

## 不明遺構

### SXVI01

SXVI01は第VI調査区中央部、標高15.4mにおいて検出した不明遺構で、平面形態は不定形である。規模は東西幅5.2m、検出面からの深さ0.83mを測る。掘り方断面は浅いレンズ状を呈し、土層は砂混りのシルト層で形成されている。SDVI01のすぐ南側で検出されており、この溝の拡張部分の可能性も考えられる。

遺構内から土師器・須恵器・瓦器・土師質土器・石製品などが出土している（第426図3613~3627）。出土遺物の時期は弥生時代後期、7・8世紀、10世紀、13世紀である。



第425図 SDVI03・SDVI16断面図(1/20)、出土遺物実測図(1/4)

#### SXVI04

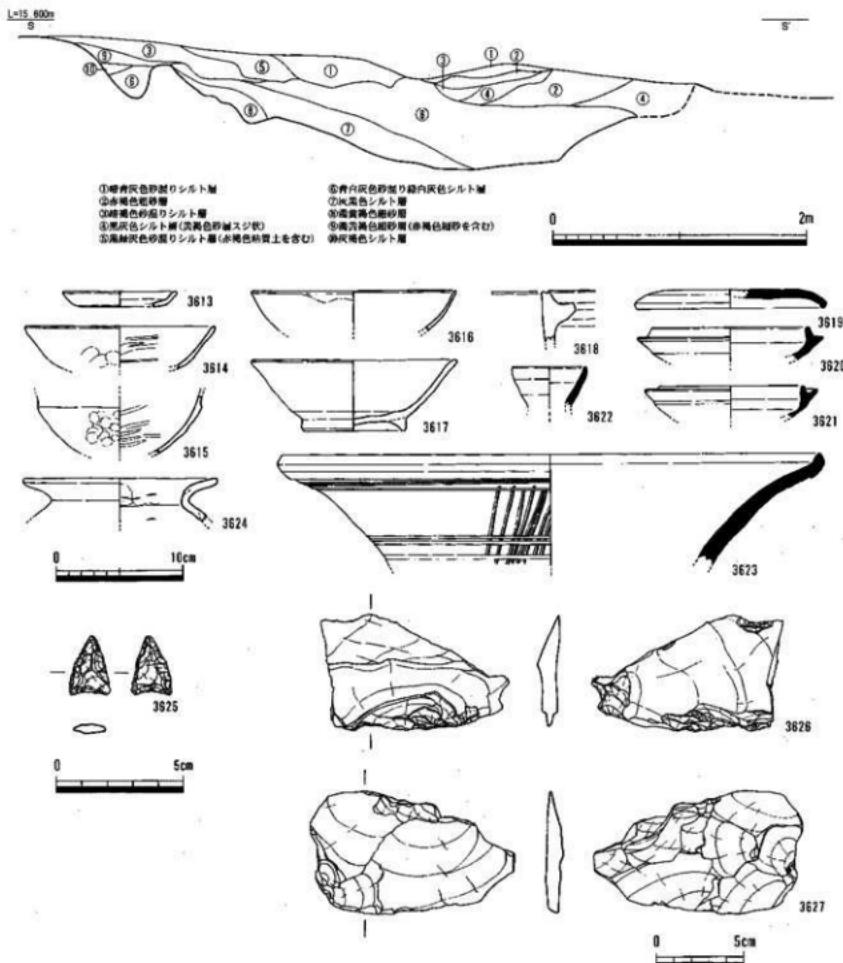
SXVI04は第VI調査区中央部、標高15.3mにおいて検出した不明遺構で、平面形態は南北に長い隅丸の長方形状を呈する。規模は東西2.7m、南北4.55m、深さ0.35mを測る。堆積土は上下2層に大別でき、両者とも砂混りのシルト質である。

遺構内から須恵器を中心として土師質土器・石製品が出土している（第427図3628～3638）。時期は須恵器から7世紀中葉と考える。

## SXVI05

SXVI05は第VI調査区中央部、標高15.8mにおいて検出した不明遺構で、平面形態は南北に長い亜楕円形を呈し、規模は東西1.92m、南北4.0mを測る。断面は箱形で、底面はほぼ平らを呈する。検出面からの深さは0.26mを測る。土層はほぼ水平堆積で、徐々に埋没したことが確認できる。

遺構内から須恵器・土師質土器が出土している（第428図3639～3642）。時期は須恵器から7・8世紀と考える。

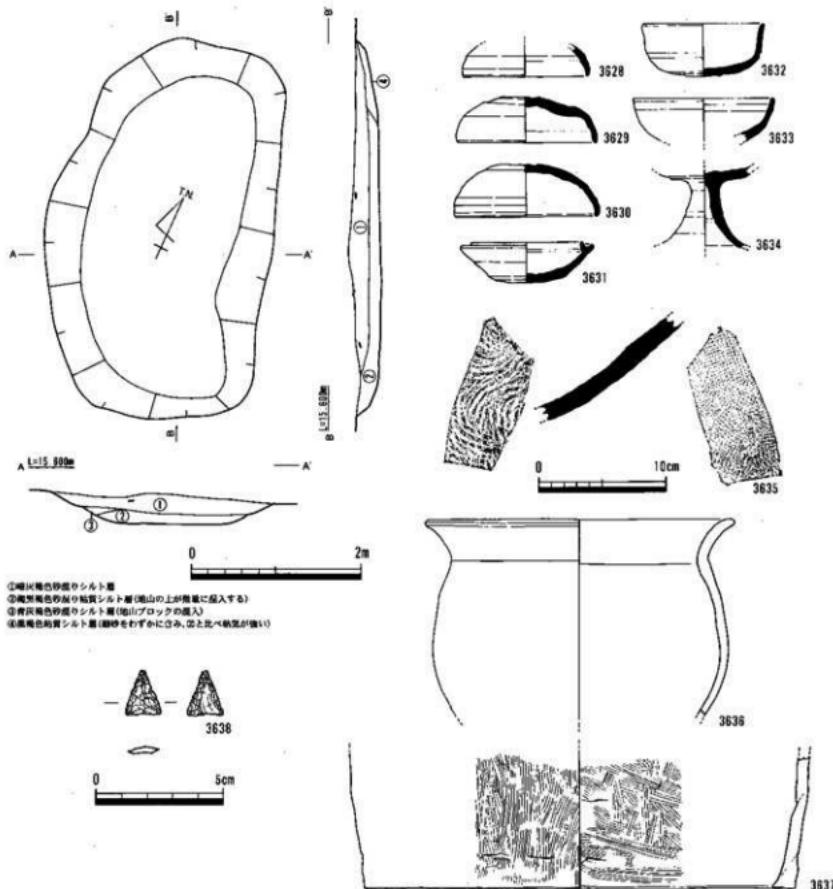


第426図 SXVI01断面図(1/40),出土遺物実測図(1/4)

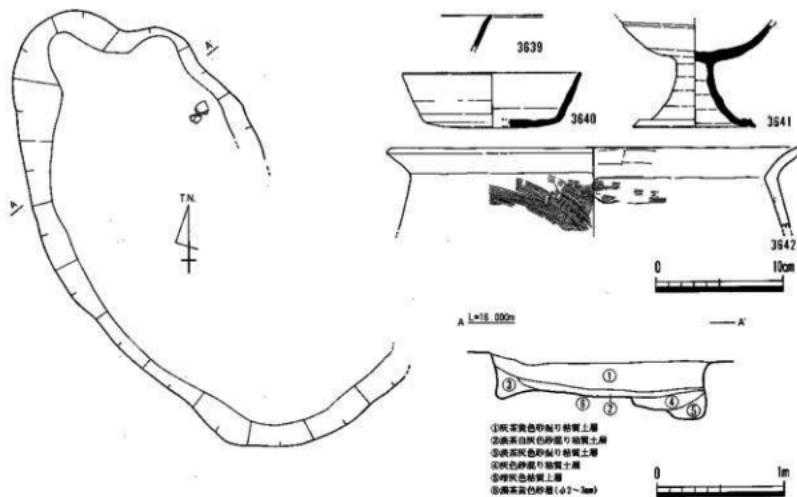
SXVI09

SXVI09は第VI調査区南部、標高14.9mにおいて検出した不明遺構で、平面形態は不定形を呈する。検出面からの深さは0.26mを測る。

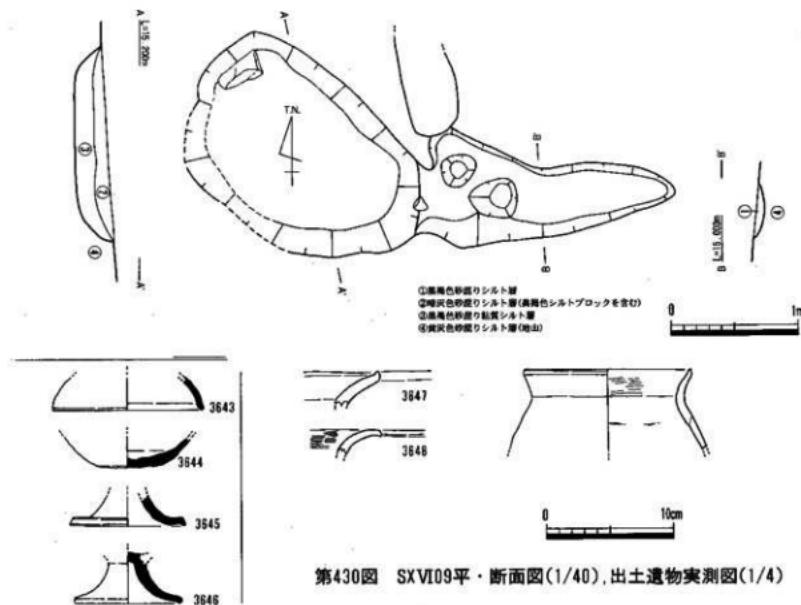
遺構内から土師質土器が出土している(第430図3647~3649)。時期は7世紀中葉と考える。



第427図 SXVI09平・断面図(1/60),出土遺物実測図(1/4)

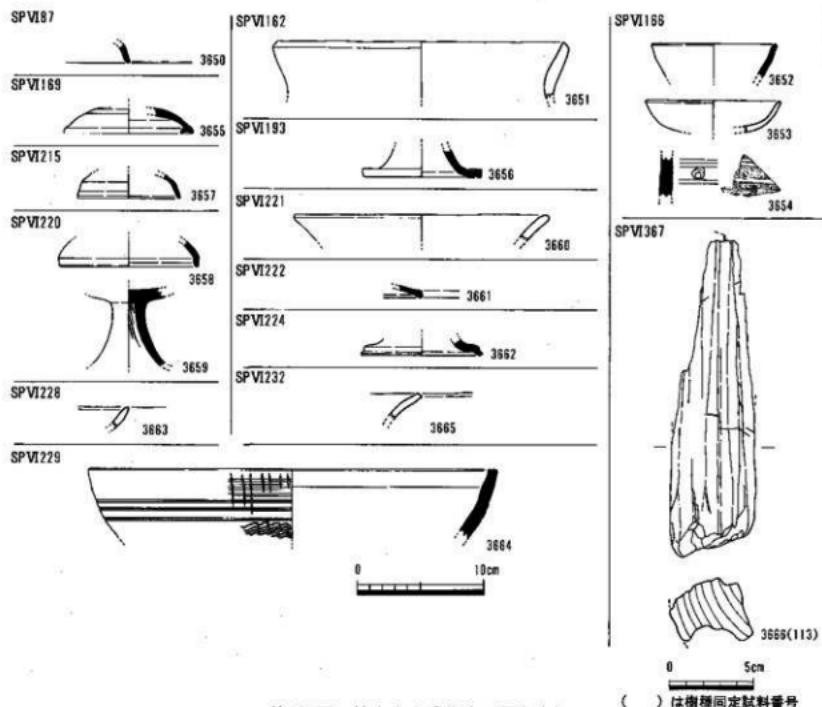


第428図 SXVI05平・断面図(1/40),出土遺物実測図(1/4)



第430図 SXVI09平・断面図(1/40),出土遺物実測図(1/4)

第429図 SXVI07出土遺物実測図(1/4)



第431図 桂穴出土遺物実測図(1/4)

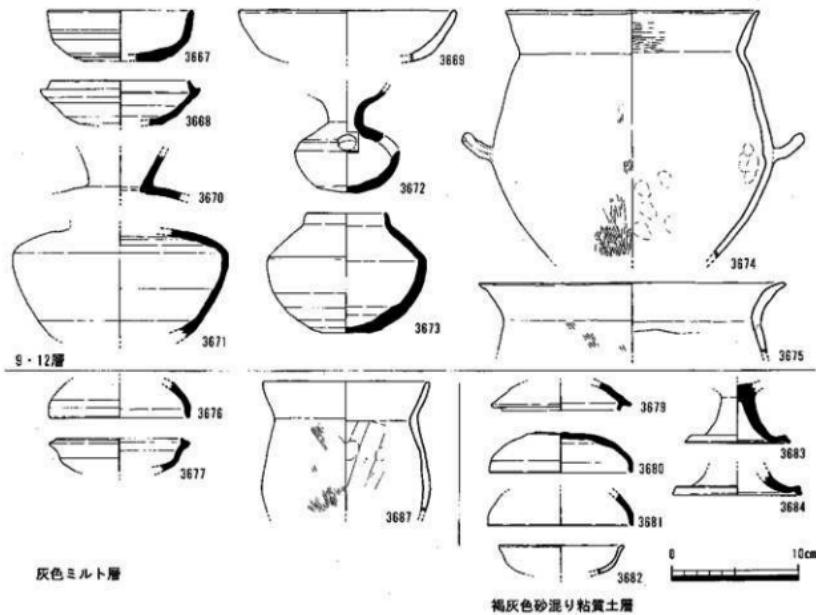
#### 柱穴出土遺物

第VI調査区で検出した柱穴は総数374個で、そのほとんどが約0.5m前後のしっかりしたものである。時期はほとんどが古代のものと考えられるために出土遺物は須恵器・土師器・土師質土器が多く確認できる。

第431図をみると柱穴出土遺物には7世紀中葉、7世紀後半の遺物が主体的である。

出土遺物は須恵器壺蓋を中心とし、壺蓋には口径の小振りなものが多い。高壺は短脚のものと長脚のものがみられる。

3666はSPV1367から出土した柱材で、掘立柱建物を構成しなかったものの周囲に柱穴を多数確認していることから掘立柱建物の可能性が考えられる。材質は樹種分析の結果、ヒノキであることが判明し、SBVI01の柱材であるムクロジと異なる結果が出た。しかしこの柱材も芯持材ではなく、1/4程度にみかん削した柱材であるという共通点を持っている。



第432図 包含層出土遺物実測図(1/4)①

#### 包含層出土遺物

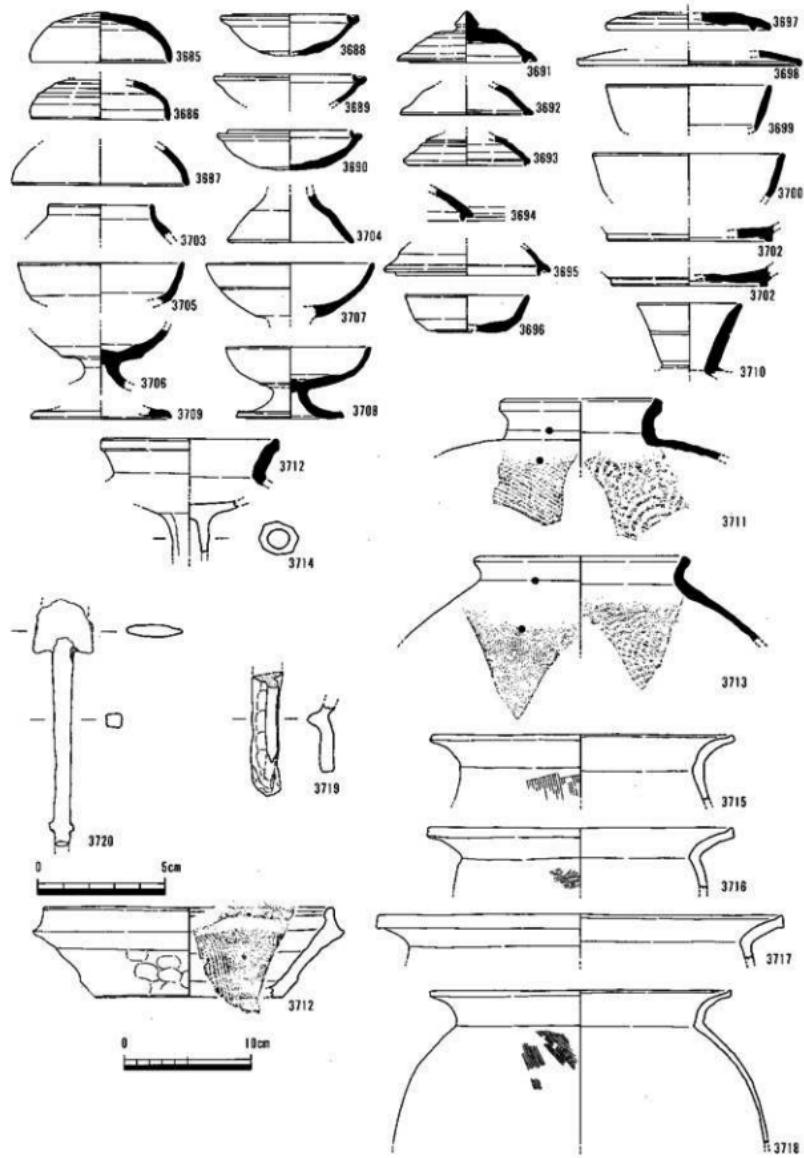
第432～437図は包含層出土遺物である。

第432図3667～3675は古代の遺構面上層に堆積するもので、時期的には7・8世紀のものを含んでいる。

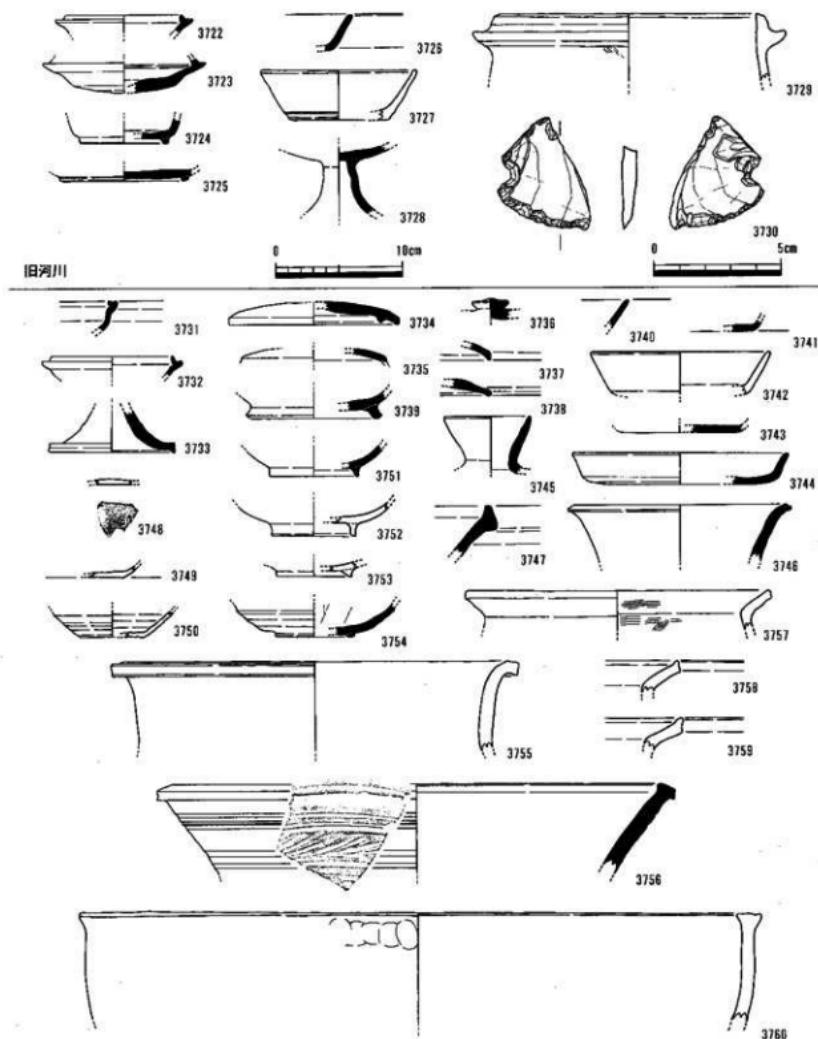
出土遺物には弥生土器・須恵器・土師器・瓦器・土師質土器・石製品・鉄製品、陶器が出土している。時期は弥生時代、古代（7世紀～9世紀）、12世紀末～13世紀初頭（瓦器椀）、13世紀後半（東播系こね鉢3747）、15世紀（備前焼擂鉢3721）である。

弥生土器はほとんどなく僅かに3760の前期の壺（鉢）が出土しているのみである。須恵器は壺身・壺蓋、高壺、高台付き壺・蓋、壺・皿、半瓶、壺、壺が出土している。須恵器壺身・壺蓋は口径が小振りのもので、壺身の立ち上がりも矮小化する。7世紀中葉（後半）と考える。また壺蓋には矮小化した返りが付き、天井部に宝珠形のつまみが付くもので7世紀後半と考える。高台付き壺は断面方形のしっかりした高台が付くもので、8世紀と考える。また皿は底部と体部の境にやや丸みを持つもので、8世紀後半頃か？壺・皿には9世紀代のものもみられ、時期幅はかなりある。出土量的には7世紀段階のものが多数を占め、継続的に8世紀前半まで出土量は多い。

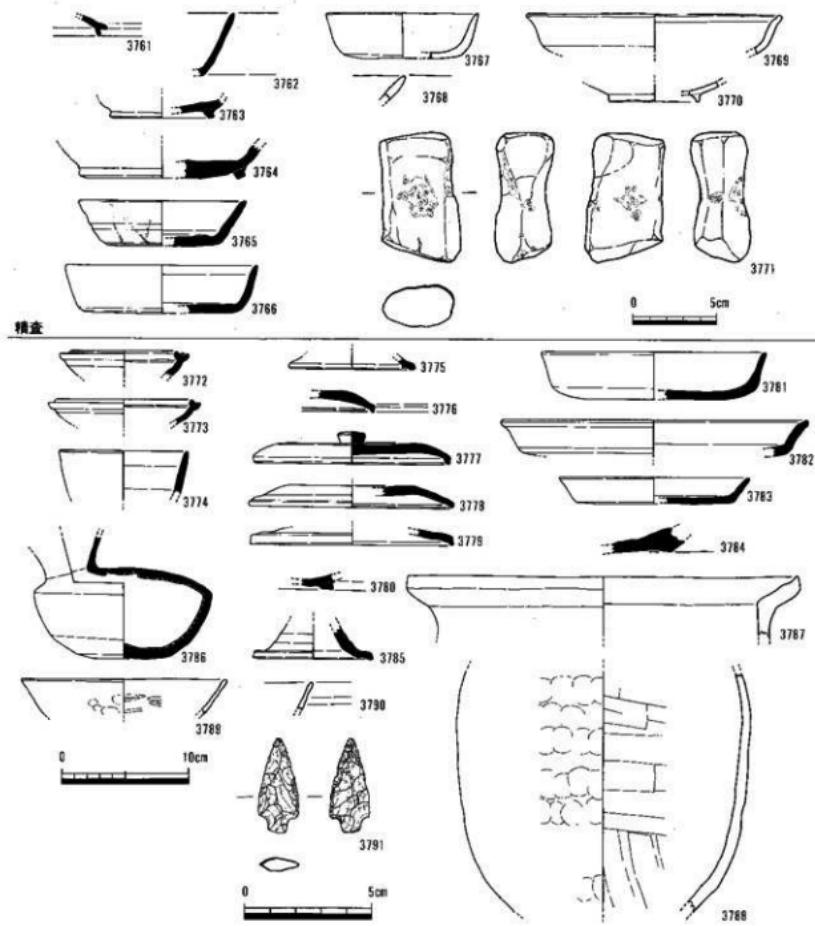
第438図は予備調査時出土遺物である。



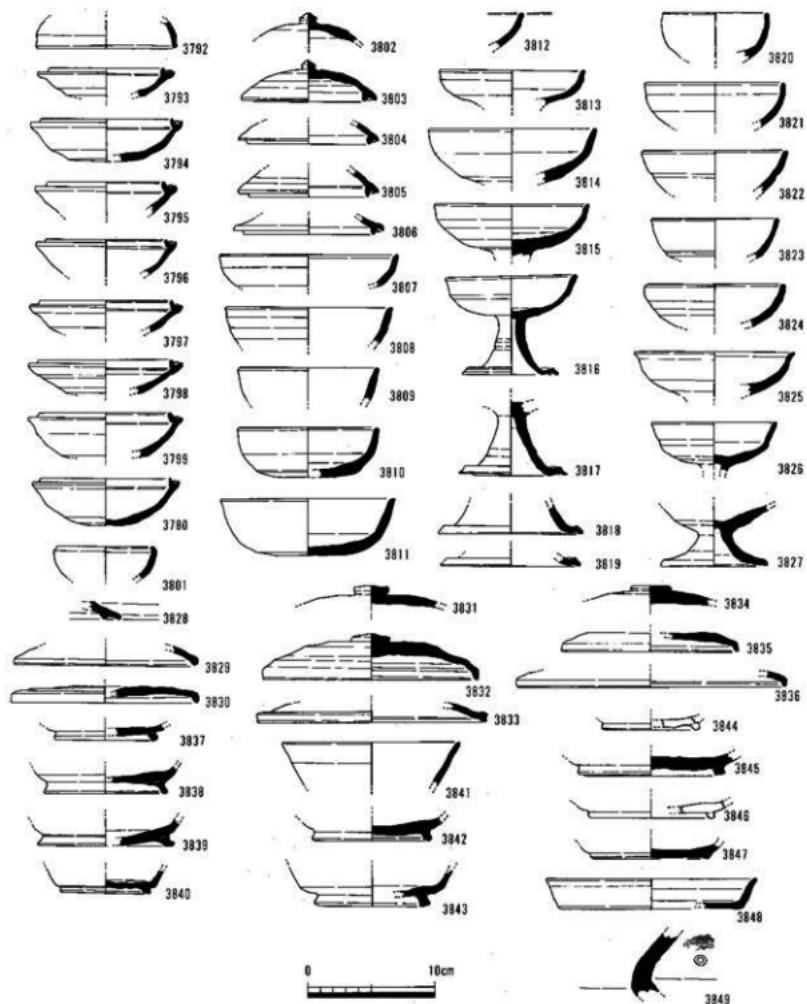
第433図 包含層出土遺物実測図(1/4)②



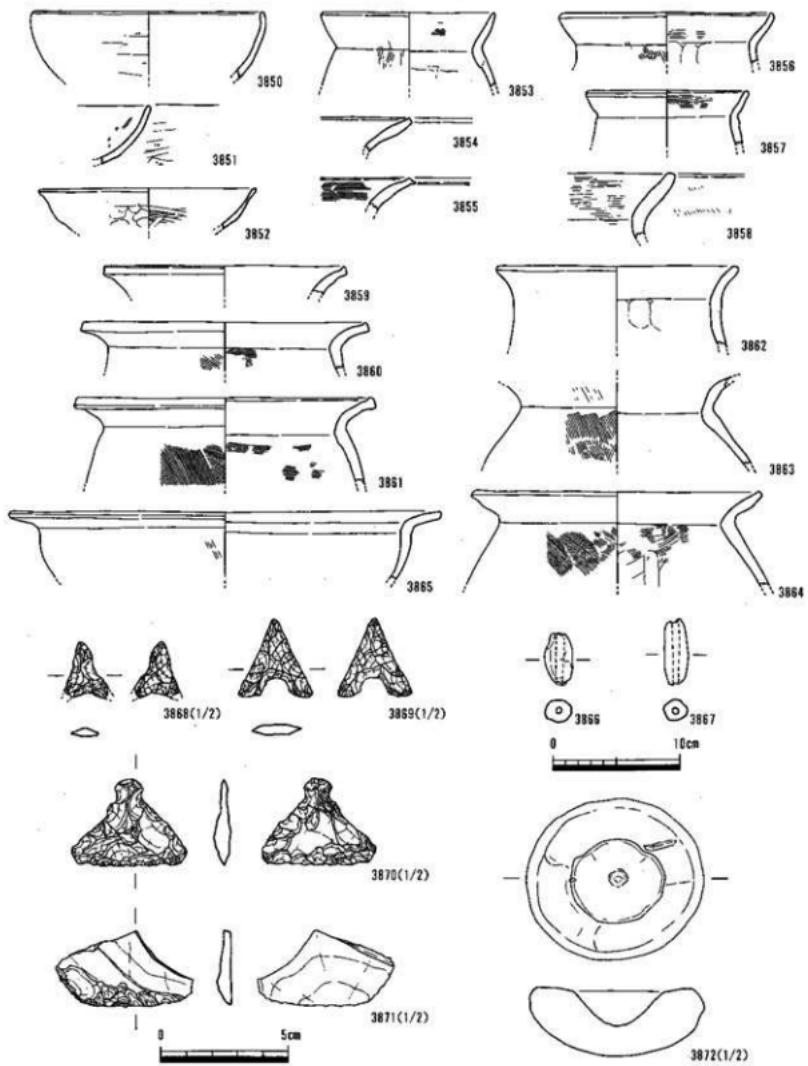
第434図 包含層出土遺物実測図(1/4)③



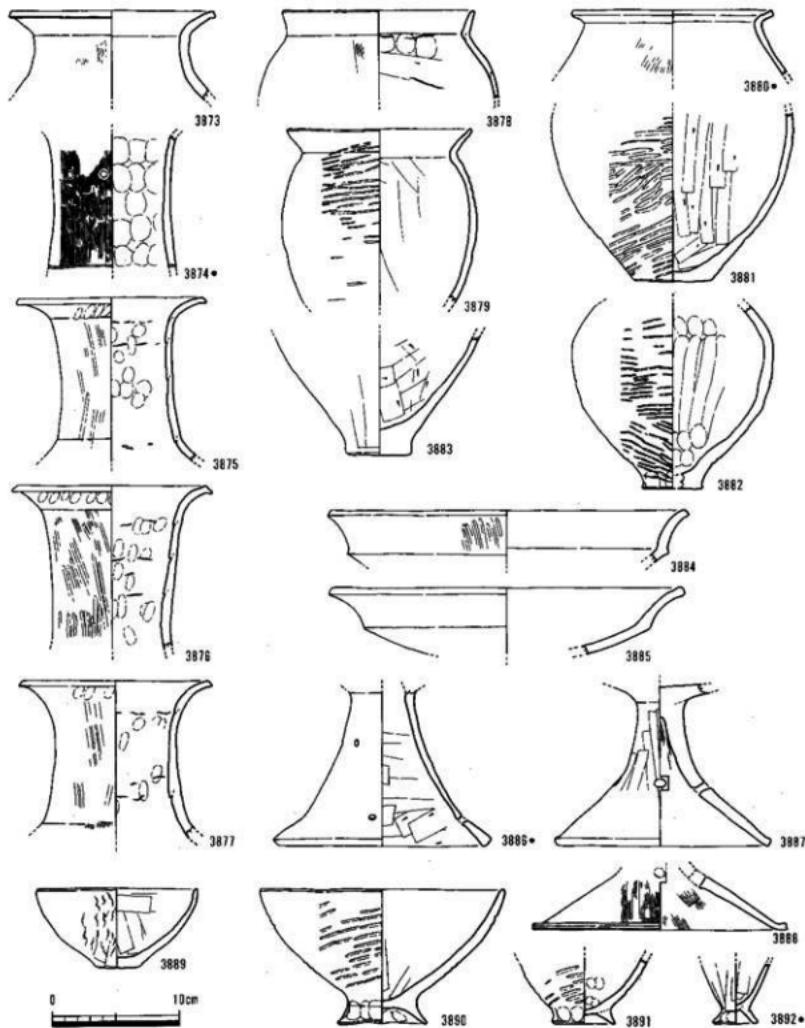
第435図 包含層出土遺物実測図(1/4)④



第436図 包含層出土遺物実測図(1/4)⑤



第437図 包含層出土遺物実測図(1/4)⑥



第438図 予備調査トレンチ出土遺物実測図(1/4)

## 第VI調査区 小結

第VI調査区は原間遺跡発掘調査対象範囲の北東部、東丘陵の先端部で第V調査区の東側に位置する。北側と東側は現原間池に接し、南は東丘陵裾部に当たる。

予備調査の結果から東丘陵前端部から原間池方向に傾斜していることが確認され、また旧地形復元により旧流路c及び低湿地bが想定されていた。

この第V調査区の予備調査では古代の遺構を検出している。

検出面は調査区南部、東丘陵先端部際の斜面部で、古代の遺物を含む包含層を挟み上面（第1面）で古代の遺構を、下面（第2面）で弥生時代の遺構を検出した。しかしそれぞれの面間の包含層は厚さが均一でなく、存在しない部分もあることから、明確に検出面を分け切れていないのが現状である。

遺構は主として南部でのみ検出した。北部は予備調査の想定通り、低湿地と自然流路となっており、遺構を確認していない。

調査区南部で検出した遺構は弥生時代の竪穴住居、溝で、古代の遺構は竪穴住居、掘立柱建物、土坑などである。

調査区北側では自然流路を検出している。第V調査区で検出した自然流路の延長部分で、予備調査時の旧流路cに当たるが、当調査区では明確な掘り方が検出できなかった。流路方向は現原間池方向に流路を取り、原間池築造以前の状況が低湿地状になる。幅の割には浅い流路を伴う深い谷筋であったことが解る。

以上の第VI調査区で検出した遺構を遺構の切り合いで、遺構埋土の色・質及び出土遺物で細分すると①弥生時代の遺構、②7世紀前半を中心とする遺構（古代I期）、③7世紀中葉を中心とする遺構（古代II期）、④7世紀末～8世紀前半を中心とする遺構（古代III期）、⑤中世の遺構の5つの時期に分けられる。

その結果が第439・440図の遺構変遷図である。

## 弥生時代

弥生時代の遺構は南部で検出した。

南部で検出した遺構は竪穴住居2棟、掘立柱建物1棟である。

竪穴住居SHVI04は削平を受けているために掘り方を検出していないが、4個の主柱穴及び中央土坑（炉）が確認されたことから竪穴住居と判断した。そのため掘り方の平面形態は不明であるが、おそらく方形と考えられる。また竪穴住居SHVI07は主柱穴と南東コーナーの掘り方を検出しているために方形の竪穴住居と考えられる。このように第VI調査区では方形の竪穴住居のみで集落が構成されていることになり、第IV調査区と同じ様相を呈している。掘立柱建物は調査区最南部で1(梁間)×1(桁行)間のものを検出した。

時期は遺物が出土していないために不明であるが、おそらく方形竪穴住居が増加する時期、第III調査区での遺構III期（下川津2式併行期）に当たるものと考えられる。

しかし弥生時代の遺構はこの時期のみで、継続して集落は形成されない。この点では第V調査区と同じ様相を呈している。

ここで検出した集落は竪穴住居2棟、掘立柱建物1棟で構成されている。この状況は第III調査区・第V調査区と同じであるが、竪穴住居間が約28.0m程離れていることと丘陵裾部に位置していることから集落範囲については判断できない。

## 古代Ⅰ期

古代Ⅰ期の遺構は南部で検出している。

検出した遺構は掘立柱建物5棟である。これらの南北主軸は東偏するSBVI09・12を除くとその他は全て西偏する。しかしこの2棟の主軸は主軸の取り方で変わり、全て西偏するものとして考えると南部から北部になるにつれて北から61°西偏するSBVI12、北から59°西偏するSBVI09、北から35°西偏するSBVI07とその角度が少なくなる。この傾向は立地する場所の違いで、ほぼ同じ方向に丘陵裾部が向いていることからかなり地形に制約された建物配置をしていることが解る。

時期は7世紀前半頃と考えられる。

## 古代Ⅱ期

古代Ⅱ期の遺構は古代Ⅰ期と同様に南部で検出している。検出した遺構は竪穴住居1棟、掘立柱建物4棟である。

掘立柱建物の南北主軸は真北から3~10°西を取っており、概ね南北に主軸を取る一群と考えている。この傾向は第IV調査区・第V調査区と共に通じており、原間遺跡では7世紀中葉頃に建物主軸を地形に制約された建物配置から南北に規制された建物配置に変化する様相が認められる。ただ大内町に認められる条里地割の方向と同じであることから、この関係も注目できるが、条里地割の規制がこの部分まで施工されていたかについては疑問が残る。

## 古代Ⅲ期

古代Ⅲ期の遺構は古代Ⅰ期と同様に南部で検出している。検出した遺構は掘立柱建物2棟である。南北主軸は真北から6~8°西偏し、ほぼ古代Ⅱ期の掘立柱建物と同じ主軸方向を取る。

## 中世

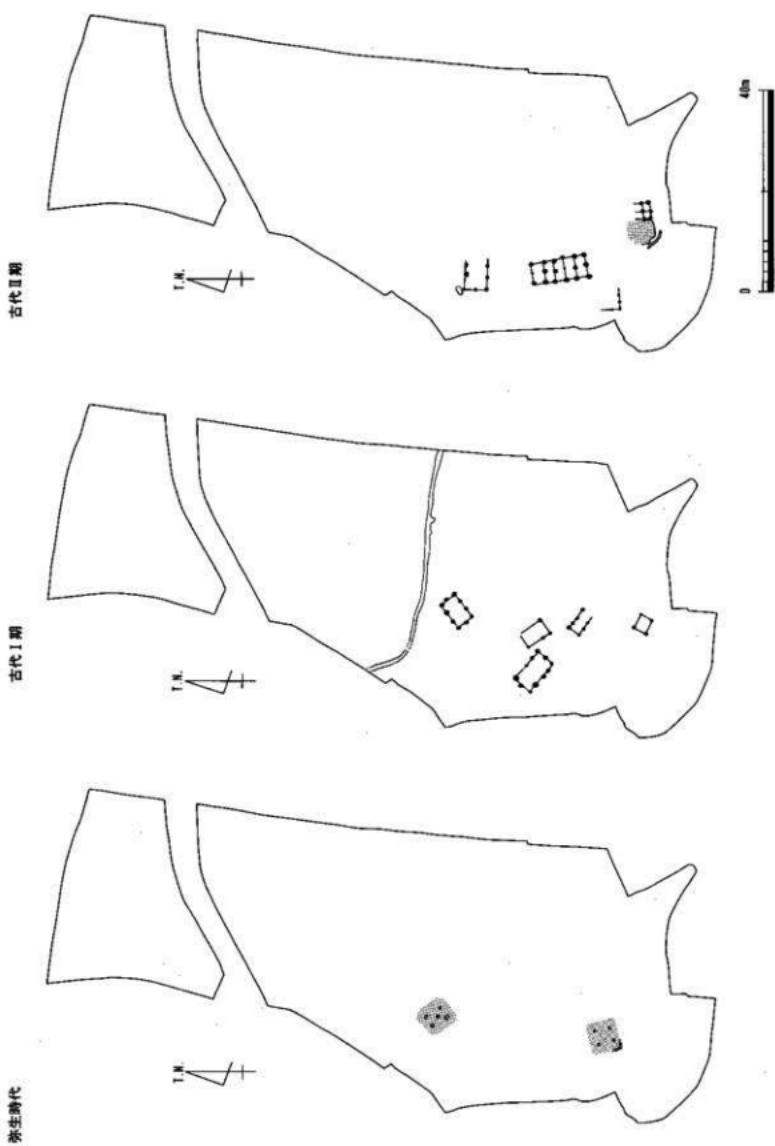
中世の遺構は南部で検出した掘立柱建物SBVI11のみである。南北主軸は真北から26°西偏しており、概ね現在の地形に合致する。

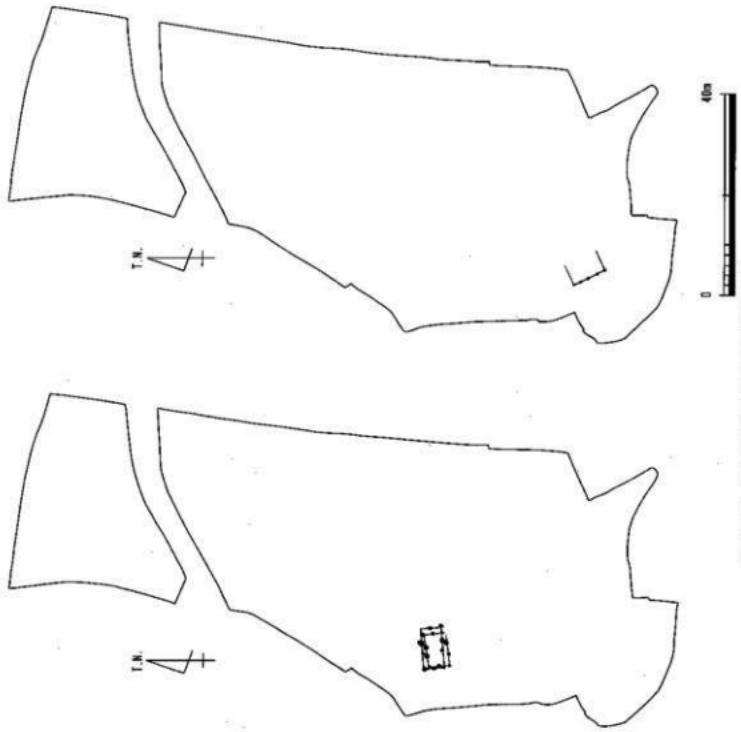
以上第VI調査区で検出した5つの時期の検出遺構から、その変遷およびその利用が解る。

ところでこの第VI調査区は南部調査区外に沿って現在の白鳥町樋端から大内町原間に通じる幅1m程の道が現在でも使用されている。この道は白鳥町樋端で、渓川に架かる橋が「神越橋（かんごしばし）」とあることから町史等では古代の官道である南海道ではないかと考えられている。この推定は川東原間の第Ⅲ調査区あるいは第V調査区あたりに「垣の内（かきのうち）」という地名が残ることも南海道説の根拠としている。また後期古墳の立地を見てもこの原間地区や樋端地区に集中しており、白鳥町と大内町を結ぶ主要な幹線であったことには違いないが、南海道である確証は無いのが現状である。しかし今回の発掘調査の結果、この道に沿って7~8世紀の掘立柱建物を多数検出したことから古墳時代から8世紀にかけて主要な幹線道路であった可能性は高くなってきたものと考える。

香川県（讃岐国）において南海道の研究は高松平野・丸亀平野を中心に金田氏によって行われており、それによると概ね8世紀中頃に施工されていたことが解る。大内町においても同じ時期に施工されたとすると第VI調査区で検出した掘立柱建物が7世紀前半から8世紀前半まで確認され、それ以降消滅してしまうという現象がこの幹線道路の付け替えにより、集落の移動が起った結果として理解できる。

第439图 VI区遗构变迁图(1/1000)①





## 第VII調査区

第VII調査区は虎丸山から北方向に派生する丘陵、東丘陵に位置する。調査範囲は丘陵上と東側斜面部にあたる。予備調査の結果、丘陵上に弥生時代の堅穴住居跡が、東斜面部に弥生時代の土坑等が確認された。

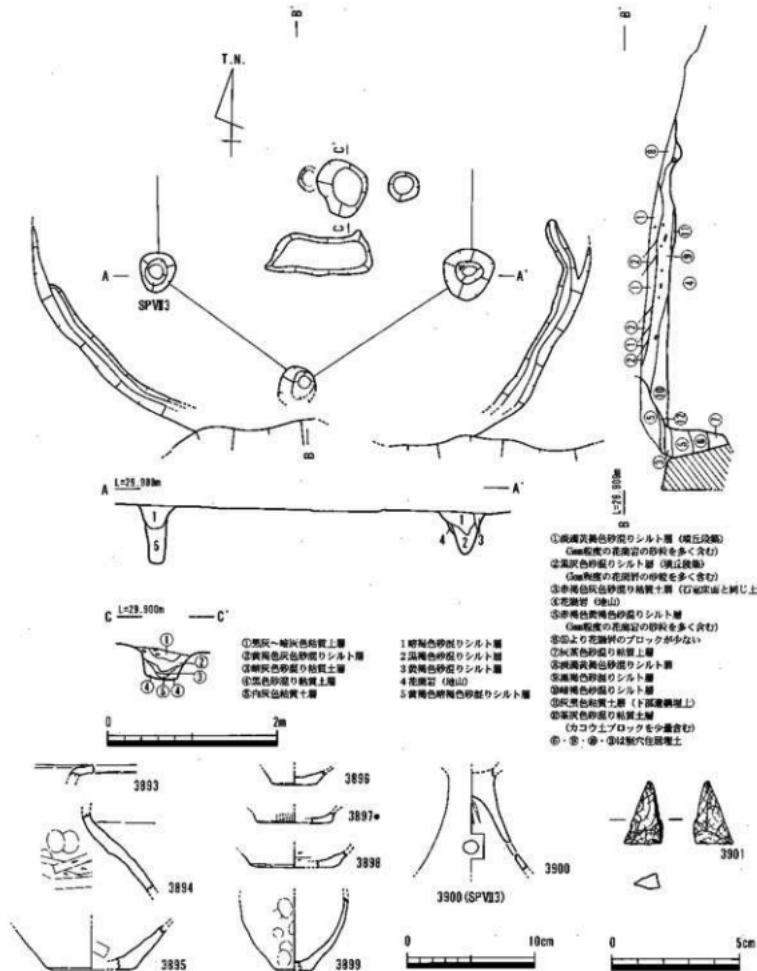
当調査区内には周知の遺跡として原間2号墳が所在した。そのためこれ以外の古墳の存在も考慮しながら調査にあたった。調査の結果東丘陵では原間2号墳（後期古墳）以外には、中期の古墳を2基検出したのみである。ここでは弥生時代の遺構のみ報告し、原間2号墳を含む古墳時代の遺構については別の報告書に譲る。従って検出遺構面は弥生時代の遺構のみである。

この調査区では堅穴住居跡2棟、土壙墓2基、土坑9基、不明遺構1基、溝2条、柱穴多数を検出した。特に堅穴住居は丘陵頂部で検出し、SHVII01は原間2号墳に南側の一部が切られていた。

## 竪穴住居跡

### SHVII01

SHVII01は第VII調査区丘陵先端部、標高約30.0mにおいて検出した竪穴住居跡で、平面形態は北部が土取りのため削平され、南部が原間2号墳築造のため削平されているが、復元すると円形を呈するものと考えられる。規模は壁溝外側で直径約7.0m、床面積約38.5m<sup>2</sup>、検出面からの深さは約0.20mを測る。堆積土層は大別して上下2層に分けられ、砂混りの粘質土で形成されている。上部には原間2

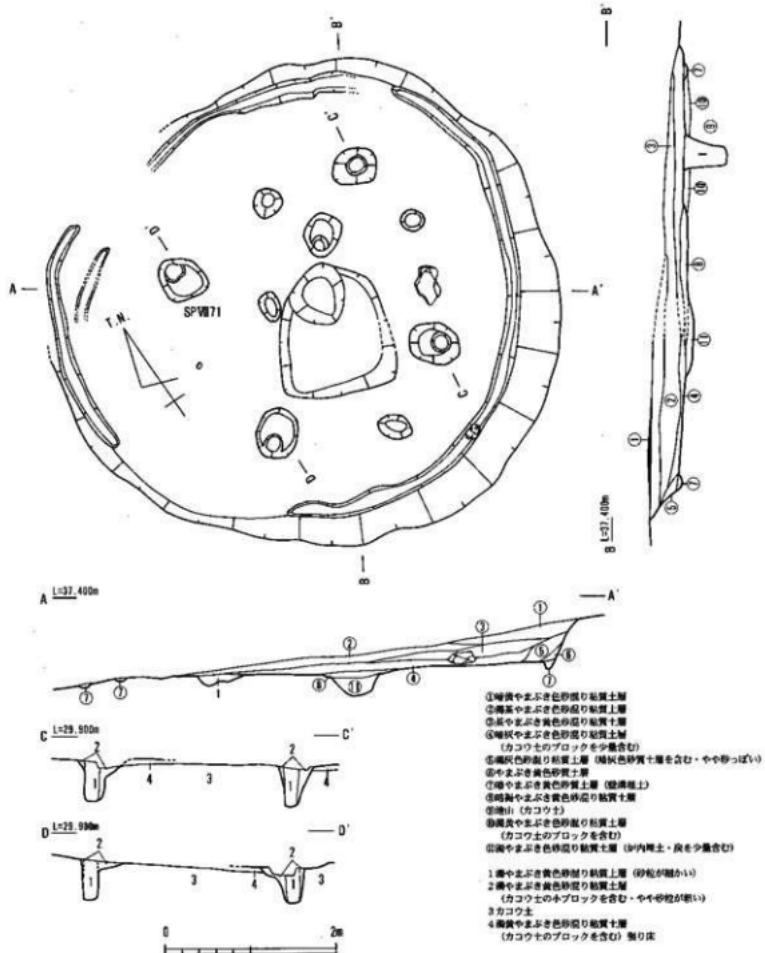


第441図 SHVII01平・断面図(1/60), 出土遺物実測図(1/4)

号墳の版築土層が残存し、南側には墓壙掘り方が認められる。

全体的にかなり削平を受けているが南側で壁溝を、ほぼ中央で土坑を2基、主柱穴は推定6穴の内3穴を検出した。

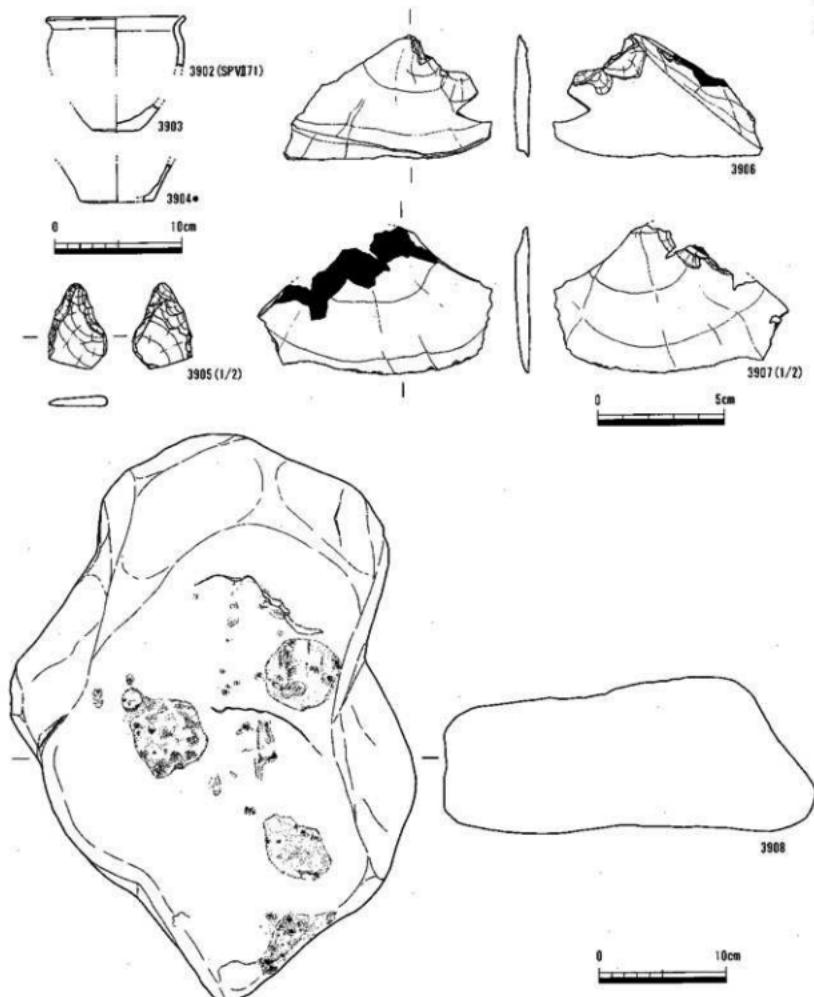
壁溝は幅20~25cmで、深さ約10cmで検出した。中央土坑は北側に歪な円形ものを、南側に東西に長い長方形のものを検出した。北側の土坑は直径約0.7m、断面箱形を呈し、深さ0.4mと平面の大きさに比べるとかなり深い。最下部に黒色砂混り粘質土が認められ、炭を含むことが確認されている。南側の土坑は東西（長軸）1.2m、南北（短軸）0.45m、深さ0.03mとかなり浅く、堆積土層は炭層



第442図 SHVII02平・断面図(1/60)

である。これら土坑の前後関係はなく、ほぼ同時期に炉として機能していたと考えられる。主柱穴は推定6穴と考えられ、その内3穴が確認されている。平面形態は円形で、規模は直径0.4～0.6mで、深さ0.5～0.7mを測るしっかりした柱穴である。

かなり削平を受けているために竪穴住居内からあまり遺物が出土していない(第441図3893～3901)。出土した遺物は小片ばかりで、壺・甕・高坏・石鎌が出土している。これらの遺物から時期は弥生



第443図 SHVII-02出土遺物実測図(1/4)

時代後期後半と考える。

ちょうど眼下で確認した堅穴住居群と同時期であり、この堅穴住居の性格を推定できる。

#### SHVII02

SHVII02は第VII調査区丘陵、SHVII01検出位置よりやや南のやや高い部分、標高約37.0mにおいて検出した堅穴住居跡で、丘陵傾斜のため高い部分（南部）では掘り方が残存するが、低い部分（北部）は壁溝のみの検出となったが、平面形態は円形を呈する。規模は壁溝外側で直径約5.7m、掘り肩部で6.6m、床面積約25.5（34.2）m<sup>2</sup>、検出面からの深さは約0.40mを測る。堆積土層は大別して上下2層に分けられ、ほぼ地山土層の流入土である。

北側が削平を受けているが周囲に壁溝を巡らし、ほぼ中央で土坑を1基、主柱穴は4穴を検出した。

壁溝は幅約20cm、深さ約10cmでほぼ周囲に検出した。北側で一部2重になる部分があることから拡張した可能性も考えられる。中央土坑は方形で、内部北側に歪な円形の落ち込みを検出した。土坑は南北1.6m、東西1.35m、深さ0.08m、断面は浅い落ち込みを呈する。北側の土坑は直径約0.7m、深さ0.2mを測り、断面はすり鉢状を呈する。円形土坑の堆積埋土には多量に炭を含む。これら土坑の前後関係はなく、ほぼ同時期に炉として機能していたと考えられる。主柱穴は4穴で、平面形態は円形を呈し、規模は直径0.4～0.5m、深さ約0.5mを測るしっかりした柱穴である。

堅穴住居内からあまり遺物が出土していない（第443図3902～3908）。

出土した遺物は小片ばかりで、甕・石製品が出土している。3908は台石で、住居内東側の床面直上に据えられたように検出した。上面3ヶ所程度に窪みが確認できる。

これらの遺物から時期は弥生時代後期後半と考える。

## 土塚墓

第VII調査区では墓と考えられる土塚を合計2基検出した。しかし内部より土器棺が出土していないもので平面形態が長方形を呈するものについてはどれも明確に墓と認定できる根拠がなく、推定の域を出ない。ここでは平面形態が長方形を呈し、長幅比（短軸÷長軸×100）が概ね50以下のもので、断面形態が箱形を呈する土坑を土塚墓として記述する。

### STVII01

STVII01は第VII調査区北部、標高31.7mにおいて検出した土塚墓で、上部は削平されている。平面形態は隅丸の長方形を呈している。規模は長軸1.79m、短軸0.84m（長幅比47）、検出面からの深さ0.10mを測り、南北主軸はN-11°-Wをとる。

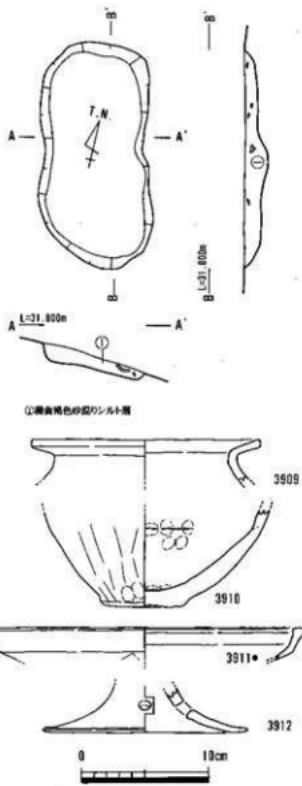
出土遺物は全て弥生時代の壺・高杯が出土している（第444図3909～3912）。

時期は弥生時代後期後半と考えられる。

### STVII02

STVII02は第VII調査区北部、標高31.6mにおいて検出した土塚墓で、上部は削平されている。平面形態は隅丸の長方形を呈する。規模は長軸1.48m、短軸0.72m（長幅比49）、検出面からの深さ0.17mを測り、長軸主軸はN-17°-Wをとる。STVII01と02はほぼ南北に継列するよう検出している。

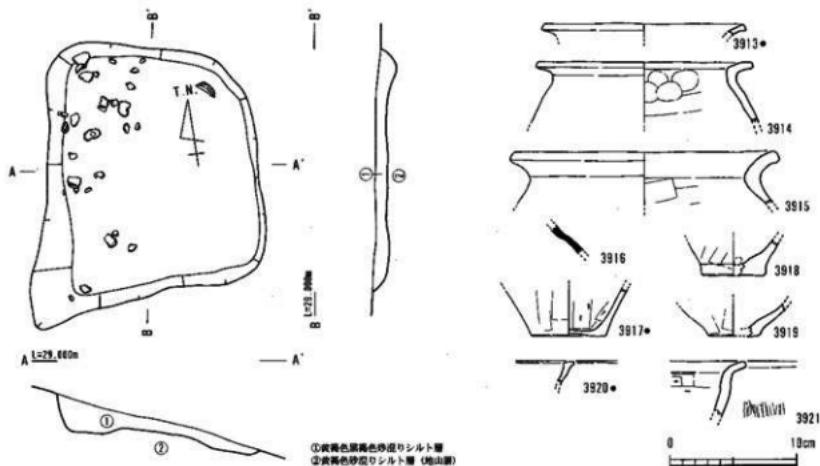
出土遺物は全て小片であることから詳細な時期決定までは至っていないが、埋土の状況から概ね弥生時代と考えられる。



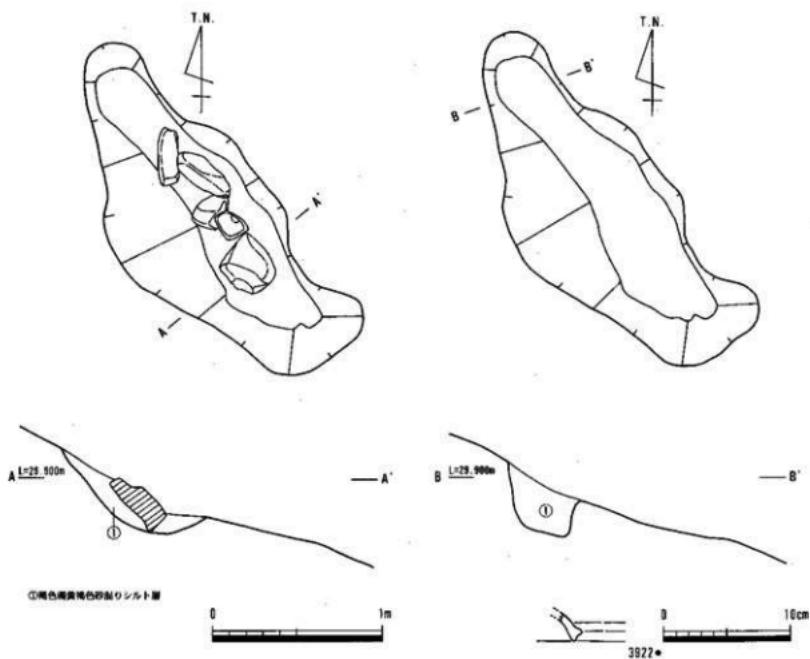
第444図 STVII01  
平・断面図(1/40), 出土遺物実測図(1/4)



第445図 STVII02平・断面図(1/40)



第446図 SKVII-07平・断面図(1/30), 出土遺物実測図(1/4)



第447図 SKVII-08平・断面図(1/30), 出土遺物実測図(1/4)

## 土坑

### SKVII07

SKVII07は第VII調査区西部、標高29.3mにおいて検出した土坑で、平面形態は隅丸の方形を呈する。規模は南北1.5m、短軸1.24m、検出面からの深さ0.08mを測る。

断面箱形を呈し、土層は単層である。

土坑内から多量の遺物が出土した(第446図3913~3921)。器種は弥生土器壺・高杯・鉢である。出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね弥生時代後期後半と考えられる。

### SKVII08

SKVII08は第VII調査区西部、標高30.1mにおいて検出した土坑で、平面形態は不定形である。規模は長軸2.3m、短軸0.97m、検出面からの深さ0.26mを測る。土坑内下部から人頭大の礫が出土している。しかしその配置状況から土坑の性格までは判断できない。

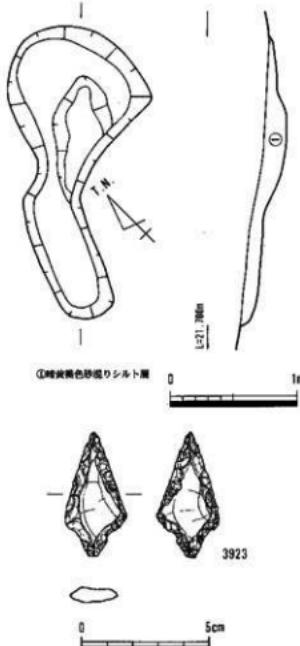
出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね弥生時代と考えられる。

## 不明遺構

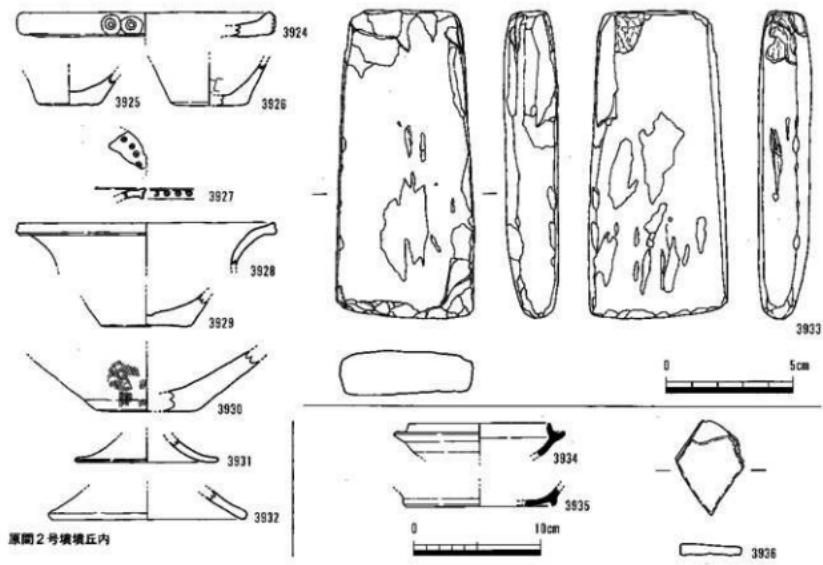
### SKVII01

SKVII01は第VII調査区東部、標高21.45mにおいて検出した不明遺構で、平面形態は不定形である。規模は長軸2.34m、検出面からの深さ0.20mを測る。完掘平面と掘り方断面から2段掘りと確認でき、土層は単層で、砂混りのシルト層で形成されている。

遺構内から石製品などが出土地している。時期は埋土の状況から弥生時代と考える。



第448図 SKVII01平・断面図(1/40), 出土遺物実測図(1/2)



第449図 包含層出土遺物実測図(1/4)

## 第VII区調査区 小結

第VII調査区は原間遺跡発掘調査対象範囲の東部、東丘陵の先端部と先端部東側斜面に位置する。北側は土取りのため旧地形が確認できないが、予備調査の結果からすると北方向へ丘陵は延び、最先端は第V調査区と第VI調査区が接する部分まで延びていたものと考えられる。

予備調査の結果から原間2号墳を確認し、丘陵高所で竪穴住居を、また東側斜面部で弥生時代の遺構を検出した。

検出した遺構は竪穴住居2棟、土壙墓などである。当報告書では原間2号墳については報告しない。以上の第VII調査区で検出した遺構はほぼ同時期で、下川津2式併行期と考えられる。

### 弥生時代

弥生時代の遺構は竪穴住居SBVII01・02で、平面形態が円形を呈する。この内 SHVII02は一部で壁溝が2重になっていることから、建て替えられたものと思われ、やや時期幅を考えられる。住居内からはあまり遺物が出土していないが、時期は前述したように下川津2式併行期と考えられ、第III調査区の遺構III期・IV期に相当する。竪穴住居の位置は東丘陵の先端部の頂部ではなく、その頂部から北西方向に丘陵が延び、さらに北方向に屈曲し延びる。その屈曲部分に SHVII02が、北方向に延びた先端に SHVII01を検出した。SHVII01が標高29.7m、SHVII02が37.2mを測り、第I調査区で検出した SHI01の標高43.4mより低いものの、どちらとも丘陵先端あるいは先端部付近に造られていることは類似する。この竪穴住居を検出した位置からは眼下に原間遺跡の集落が望め、また大内町の平野全てと白鳥町の平野のほとんどが一望でき、さらに広がる海上までもが一望できる。

この竪穴住居は調査対象内で確認した原間遺跡の集落内の竪穴住居数が面的に広がる時期に相当し、この時期に丘陵上に造られることに何らかの意味があるものと思われる。

第I調査区の小結でも述べたが、おそらくこの竪穴住居には防御的な施設、例えば見張り場的な性格を与えてもいいのではないかと考える。

## 第3章 自然科学分析の成果

### 第1節 原間遺跡出土弥生土器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所

白石 純

#### 1. 分析目的

原間遺跡は、香川県東部の大内町に広がる平野の南部に位置する。この遺跡の弥生時代後期中葉の堅穴住居跡、溝、土坑、旧河道などの各遺構からは、考古学的な分類（形態、技法、胎土の砂粒観察）により、遺跡周辺で生産された土器（在地産）と、他地域から持ち込まれた土器（搬入品）があることがわかっている。そして、この搬入品土器には、高松平野部で生産されたいわゆる「下川津B類土器」や、結晶片岩の砂粒を含む阿波地域の土器、生駒西麓で生産された土器がある。

そこで、この在地産および搬入品土器が蛍光X線分析法による胎土分析で、どのように分類できるか。また、実体顕微鏡による砂粒観察も併せて行い各生産地の胎土の差異について検討した。

#### 2. 分析方法

分析は、エネルギー分散型蛍光X線分析計（セイコーインスツルメンツ社製 2010 L）を使用し、胎土に含まれる成分（元素）分析と土器表面の肉眼観察（実体顕微鏡を用いて5倍～20倍程度で胎土中に含まれる岩石、鉱物などの種類、含有量を調べる）を実施した。

分析試料は、第5・6表に掲載した弥生土器147点で壺、甌、高杯、鉢、製塙土器の各器種である。また、蛍光X線で分析した試料は、土器を200メッシュほどの粉末にしたあと、加圧成形機でコイン状に加圧成形し測定試料とした。そして、胎土中に含まれるおもな元素はSi（珪素）、Ti（チタン）、Al（アルミニウム）、Fe（鉄）、Mn（マンガン）、Mg（マグネシウム）、Ca（カルシウム）、Na（ナトリウム）、K（カリウム）、P（リン）、Rb（ルビジウム）、Sr（ストロンチウム）、Zr（ジルコニウム）の13元素で、これらの定量値を測定した。

#### 3. 蛍光X線分析法による分析結果

分析の結果、Ca、K、Rb、Srなどの各元素に顕著な差がみられることから、これらの元素を用いてK-Ca、Rb-SrのXY散布図を作成し、胎土分析値の差異について検討した。

第450図 K-Ca、第451図 Rb-Srの散布図では、原間遺跡より出土した土器で考古学的な分類により大きく3つに分類（A、B、C）されており、この分類が胎土分析でどのように分類されるか検討した。この結果、第450・451図とも、A類（在地産）とB類（下川津B類土器）はほとんどが識別できた。しかし、第450図では、B類に分類された土器のうち試料番号1、55、91、95、98、103、112、140とB'類の115、B'類の3、10、77、90、99はA類（在地産）とB類（下川津B類土器）の中間域に分布した。またC類の生駒西麓土器は143がB類（下川津B類土器）に、133と147はA類（在地産）の分布域に分布した。しかし、第451図のRb-Sr散布図では、134と143のSr量が、下川津B類土器より多いところに分布していることから、識別できる可能性がある。

第452図K-Ca、第453図Rb-Srの散布図では、原間遺跡と高松平野部の上天神・空港跡地・中間西井坪・岡清水の各遺跡出土の下川津B類土器と比較した。この結果、第452図、第453図とも原間B類のほとんどが高松平野部の下川津B類土器と分布域が重なった。また第452図では、原間の79、118が下川津B類土器の分布域に入らなかった。

#### 4. 肉眼観察（実体顕微鏡）による胎土分析結果

実体顕微鏡により土器表面の岩石、鉱物の種類を同定し含有量についても大まかに調べた。その結果を第4・5表に示した。含有量が多いものから順番に左から右に並べてあらわした。なお、空欄の土器は観察していない。

砂粒観察では以下のように5つの胎土に分類された。

- (ア) 角閃石、黒雲母、石英、長石の砂粒を多量に含む土器 (Fig 1-1・2・3)
- (イ) 石英、角閃石、黒雲母、長石を含むが (ア) ほど角閃石、黒雲母を多く含まない土器 (Fig 1-5・6・7・8)
- (ウ) 石英を多く含み、長石、火山ガラス、黒雲母を少量含む土器 (Fig 2-1・2・3)
- (エ) 石英、結晶片岩を含む土器。 (Fig 2-4・5・6)
- (オ) 石英、角閃石、黒雲母、長石を多量に含む。 (ア) に比べ石英を多く含み角閃石の粒径が大きい特徴がある。 (Fig 2-7・8)

そして、(ア) は下川津B類土器 (閃緑岩の岩片が混入) が、(ウ) は在地産土器 (花崗岩の岩片が混入) が、(エ) は阿波地域の土器 (結晶片岩の岩片が混入) がそれぞれ類似している。

#### 5.まとめ

蛍光X線および実体顕微鏡観察による両分析結果を総合して整理すると、以下のことが指摘できる。

(1) 蛍光X線分析法では、K-Ca散布図から三つのグループに分類が可能であった。また、実体顕微鏡による胎土観察では5つの胎土に分類できた。そして、両者の胎土を比較すると以下のようになる。

蛍光X線分析による胎土分析	実体顕微鏡による胎土観察
原間遺跡B類土器 (いわゆる下川津B類土器である) はCa量が約3%以上でK量が約1%以下に分布する。	角閃石、黒雲母、石英、長石を多量に含む土器。
原間遺跡A類土器 (在地産) はCa量が約1.5%以下でK量が約1%以上に分布する。	石英を多く含み、長石、火山ガラス、黒雲母を少量含む土器。
原間遺跡A類とB類の中間に分布する土器類で、Ca量が約1.5%~3.5%、K量が約1%~2%の間に分布する。	石英、角閃石、黒雲母、長石を含むが、B類ほど角閃石、黒雲母を多く含まない土器。

このように複数の胎土分析をおこない、蛍光X線分析では3つに、胎土観察では5つに分類できた。また、蛍光X線分析法の3つの分類は、胎土観察による分類の(ア)(イ)(ウ)とほぼ類似することがわかった。

また、「下川津B類土器」の胎土中に含まれている砂粒 (角閃石、黒雲母、石英、長石) の産地と言われている高松市石清尾山丘陵南端付近 (北山・森下・奥田 1995) の砂粒をサンプリングし、図版1-4

第5表 胎土分析一覧表(%)ただし、Rb,Sr,Zrはppm

番号	鉱物名	種類	砂分	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr	胎土に含まれる鉱石・物質					
																	石英	長石	黒雲母	火成ガラス	結晶合計	
1	193	高嶺土	高嶺土	57.04	0.93	21.62	0.89	0.13	1.97	2.51	2.81	1.45	1.28	87	187	321	○	○	○	○	○	
2	194	高嶺土	高嶺土	68.76	0.57	18.26	2.03	0.02	1.51	0.59	2.74	3.04	1.21	1.74	125	238	308	○	○	×	○	○
3	195	高嶺土	Bt <sup>+</sup>	59.71	0.96	21.86	0.58	0.11	1.87	2.47	2.07	1.48	0.48	95	204	308	○	○	×	○	○	
4	196	高嶺土	A	61.95	1.81	22.40	7.03	0.08	1.87	0.46	2.29	5.66	1.17	1.20	60	452	308	○	○	○	○	○
5	201	高嶺土	A	61.89	0.93	21.30	0.35	0.07	0.76	1.30	2.88	2.05	1.09	175	151	329	○	○	○	○	○	
6	210	高嶺土	A	64.29	0.55	19.87	4.15	0.64	0.57	1.30	2.87	2.47	1.89	1.65	195	285	308	○	○	○	○	○
7	211	高嶺土	A	64.36	0.54	19.87	4.15	0.64	0.57	1.30	2.87	2.47	1.89	1.65	195	285	308	○	○	○	○	○
8	212	高嶺土	B	53.56	1.71	20.73	11.94	0.19	2.28	4.56	2.86	0.82	1.32	91	290	180	○	○	○	○	○	
9	214	高嶺土	A	64.97	1.03	18.47	0.15	0.97	1.58	1.21	2.93	2.42	1.02	169	183	369	○	○	○	○	○	
10	224	高嶺土	Bt <sup>+</sup>	59.99	0.81	20.05	0.47	0.11	1.89	2.24	2.81	1.85	0.69	129	199	311	○	○	△	×	△	
11	229	高嶺土	B	52.62	1.66	21.41	12.93	0.19	2.44	4.62	2.99	0.78	0.35	74	234	156	○	○	○	○	△	
12	230	高嶺土	A	67.49	0.77	18.49	3.00	0.03	1.45	1.41	2.89	2.49	1.11	182	183	480	○	○	○	○	○	
13	241	高嶺土	A	67.49	0.77	18.49	3.00	0.03	1.45	1.41	2.89	2.49	1.11	182	183	480	○	○	○	○	○	
14	242	高嶺土	A	59.99	1.06	21.34	9.82	0.04	1.58	1.06	2.41	2.39	0.29	175	171	348	○	○	○	○	○	
15	247	高嶺土	A	64.14	1.13	19.80	4.76	0.05	1.88	1.26	2.33	2.17	1.46	164	186	393	○	○	△	○	△	
16	256	高嶺土	B	59.79	1.13	21.44	4.03	0.06	1.87	1.14	2.49	2.07	0.58	181	197	229	○	○	○	○	○	
17	265	高嶺土	A	63.87	0.55	21.47	4.65	0.06	1.85	1.05	2.44	2.49	1.25	165	109	312	○	○	○	○	○	
18	270	高嶺土	A	64.14	0.74	21.47	4.65	0.06	1.85	1.05	2.44	2.49	1.25	165	109	312	○	○	○	○	○	
19	273	高嶺土	A	64.47	0.89	20.34	3.72	0.07	1.82	1.07	2.44	2.48	1.26	207	158	215	○	○	○	○	○	
20	274	高嶺土	A	66.22	0.86	20.37	3.72	0.03	1.53	1.10	2.45	2.48	0.77	140	120	274	○	○	×	○	△	
21	279	高嶺土	B	59.99	0.76	22.77	6.75	0.06	1.75	0.93	2.89	1.70	0.20	142	143	369	○	○	○	○	○	
22	280	高嶺土	A	62.88	0.77	22.77	3.75	0.06	1.84	0.93	3.71	1.87	1.50	130	199	291	○	○	○	○	○	
23	287	高嶺土	A	61.95	1.25	20.84	7.06	0.07	1.71	1.12	3.20	2.17	0.77	187	172	371	○	○	○	○	○	
24	290	高嶺土	B	53.91	0.92	21.29	10.55	0.19	2.49	4.06	2.96	0.87	1.83	70	147	191	○	○	△	○	△	
25	304	高嶺土	A	61.21	1.03	23.83	4.58	0.06	1.49	1.09	2.33	2.07	0.54	186	198	359	○	○	○	○	○	
26	305	高嶺土	B	50.90	1.84	22.97	12.14	0.16	2.89	4.17	2.89	1.21	0.21	97	139	121	○	○	○	○	○	
27	306	高嶺土	A	62.29	0.70	22.00	7.14	0.16	2.89	4.17	2.89	1.21	0.21	97	139	121	○	○	○	○	○	
28	312	高嶺土	A	66.11	0.73	20.88	2.81	0.02	1.84	0.85	2.45	2.48	1.59	178	106	257	○	○	○	○	○	
29	313	高嶺土	A	59.99	0.75	21.35	6.55	0.11	2.45	4.22	2.95	0.36	1.28	79	199	210	○	○	○	○	○	
30	316	高嶺土	A	64.77	0.77	18.64	2.59	0.11	1.88	1.24	2.45	2.48	0.77	129	128	210	○	○	△	○	△	
31	320	高嶺土	A	65.47	0.77	22.32	3.22	0.03	1.89	0.49	2.32	2.56	1.42	166	68	218	○	○	○	○	○	
32	334	高嶺土	B	52.99	2.28	21.46	13.33	0.23	1.91	3.33	3.05	0.62	0.65	48	209	291	○	○	○	○	○	
34	329	高嶺土	A	66.19	0.51	21.81	2.81	0.28	1.85	0.59	2.18	2.43	1.35	168	68	217	○	○	○	○	○	
35	331	高嶺土	A	67.59	0.63	21.73	3.45	0.23	1.89	0.74	2.39	2.46	1.05	109	107	210	○	○	○	○	○	
36	356	高嶺土	B	51.18	2.15	18.35	13.71	0.23	2.58	3.48	2.45	0.69	1.21	78	126	294	○	○	○	○	○	
37	378	高嶺土	B	52.29	0.72	22.00	7.01	0.08	1.58	0.35	2.32	2.32	1.14	180	143	423	○	○	○	○	○	
38	379	高嶺土	A	63.93	0.83	18.47	0.19	0.06	1.74	1.21	2.36	2.64	1.19	172	198	310	○	○	○	○	○	
39	388	合田隕石	A	63.94	1.28	21.81	4.84	0.58	1.54	0.86	2.56	2.14	1.08	125	128	213	○	○	×	○	○	
40	389	高嶺土	A	65.20	1.78	21.81	4.84	0.58	1.54	0.86	2.56	2.14	1.08	125	128	213	○	○	○	○	○	
41	415	高嶺土	A	64.05	0.83	18.43	0.55	0.03	1.71	1.21	2.36	2.64	1.19	172	198	310	○	○	○	○	○	
42	417	高嶺土	A	61.19	1.93	21.69	13.60	0.75	2.12	4.44	2.92	1.15	0.91	62	263	287	○	○	○	○	○	
43	419	高嶺土	A	65.41	0.88	20.81	4.29	0.08	1.82	0.91	2.89	3.33	0.81	172	137	284	○	○	○	○	○	
44	418	高嶺土	A	64.16	1.09	21.66	4.73	0.08	1.84	0.78	2.78	3.16	0.84	125	121	233	○	○	○	○	○	
45	419	高嶺土	A	65.22	1.11	21.68	4.56	0.11	1.81	0.70	2.78	3.16	0.97	171	126	289	○	○	○	○	○	
46	423	高嶺土	A	66.91	0.81	20.27	5.17	0.02	1.85	0.65	2.41	2.49	0.99	173	204	311	○	○	○	○	○	
47	424	高嶺土	A	61.32	1.17	22.75	6.92	0.14	1.85	0.63	2.42	2.49	0.98	185	119	207	○	○	○	○	○	
48	426	高嶺土	A	63.89	1.07	20.87	3.18	0.10	1.82	0.63	2.37	2.35	0.78	192	147	224	○	○	○	○	○	
50	529	高嶺土	A	66.07	0.88	20.68	2.96	0.05	1.90	0.87	3.17	2.23	1.26	180	124	262	○	○	○	○	○	
51	547	高嶺土	A	64.47	0.85	21.93	3.59	0.08	1.89	0.77	2.74	2.35	1.19	199	188	350	○	○	○	○	○	
52	549	高嶺土	A	61.70	0.99	17.36	3.54	0.03	1.80	0.68	2.18	2.76	1.32	163	98	456	○	○	○	○	○	
53	550	高嶺土	B	52.80	2.00	19.80	14.03	0.21	3.21	5.52	5.09	1.96	0.80	69	281	177	○	○	○	○	○	
54	584	高嶺土	B	57.27	1.33	20.31	8.97	0.15	2.71	4.81	2.98	0.74	1.21	31	208	104	255	○	○	○	○	○
55	592	高嶺土	A	62.05	1.34	20.34	8.54	0.15	2.66	4.82	2.98	0.74	1.21	31	208	104	255	○	○	○	○	○
56	604	高嶺土	A	69.29	0.55	21.94	13.45	0.24	2.45	4.66	3.08	0.59	0.59	128	98	212	○	○	○	○	○	
57	611	高嶺土	A	64.89	0.92	20.98	3.42	0.04	1.82	0.82	2.47	2.71	1.07	182	145	302	○	○	○	○	○	
58	612	高嶺土	A	62.70	0.81	21.23	4.15	0.04	1.79	0.91	2.31	2.44	1.07	183	145	282	○	○	○	○	○	
59	625	高嶺土	A	65.09	0.89	21.23	4.15	0.05	1.81	0.85	2.31	2.47	1.09	182	145	282	○	○	○	○	○	
60	632	高嶺土	A	64.82	1.74	21.23	3.22	0.04	1.74	0.88	2.31	2.47	1.09	182	145	282	○	○	○	○	○	
61	633	高嶺土	A	64.82	1.74	21.23	3.22	0.04	1.74	0.88	2.31	2.47	1.09	182	145	282	○	○	○	○	○	
62	634	高嶺土	A	64.82	1.74	21.23	3.22	0.04	1.74	0.88	2.31	2.47	1.09	182	145	282	○	○	○	○	○	
63	635	高嶺土	A	64.82	1.74	21.23	3.22	0.04	1.74	0.88	2.31	2.47	1.09	182	145	282	○	○	○	○	○	
64	636	高嶺土	A	64.82	1.74	21.23	3.22	0.04	1.74	0.88	2.31	2.47	1.09	182	145	282	○	○	○	○	○	
65	637	高嶺土	A	64.82	1.74	21.23	3.22	0.04	1.74	0.88	2.31	2.47	1.09	182	145	282	○	○	○	○	○	
66	638	高嶺土	A</																			

第6表 胎土分析一覧表(%)ただし、Rb, Sr, Zrはppm

番号	検査番号	胎土	砂粒分類	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Pb	Sr	Zr	胎土に含まれる鉱物・組成				
																	石英	長石	角閃石	黑雲母	高嶺石
110	2952	黒雲母	A	65.29	0.64	21.32	4.05	0.02	1.97	0.55	3.11	2.39	0.77	140	163	278	○	△	○	○	△
111	2112	黒雲母	A	65.13	1.01	22.54	5.54	0.04	1.71	0.64	2.83	2.11	0.36	162	138	261	○	△	○	○	△
112	2113	黒雲母	B	59.95	0.25	18.52	10.90	0.18	2.17	2.81	3.15	1.12	0.41	91	196	145	○	△	○	△	
113	1153	黒雲母	A	65.20	0.50	21.34	4.05	0.02	1.97	0.55	3.11	2.39	0.77	140	163	278	○	△	○	○	△
114	2145	高嶺石	B	56.68	1.96	18.45	13.91	0.21	2.77	3.81	2.41	0.84	0.30	84	196	220	○	△	○	○	△
115	2193	黒雲母	B	66.37	1.30	17.90	5.78	0.09	1.98	2.66	2.67	1.09	0.21	100	132	255	○	△	○	△	○
116	2202	黒雲母	A	65.88	0.93	19.77	4.27	0.02	1.97	0.91	3.32	2.39	0.49	162	152	273	○	△	△	△	△
117	2214	黒雲母	A	62.30	0.57	18.58	4.05	0.10	2.28	2.87	3.23	1.21	0.34	108	126	264	○	△	○	△	△
118	2249	黒雲母	A	65.20	0.50	21.34	4.05	0.02	1.97	0.55	3.11	2.39	0.77	140	163	278	○	△	○	○	△
119	2260	高嶺石	B	54.81	2.03	19.46	13.51	0.19	2.20	4.56	2.32	0.61	0.35	85	270	255	○	△	○	○	△
120	2288	高嶺石	B	54.55	1.69	20.66	12.82	0.20	2.54	4.82	2.01	0.68	0.29	54	209	152	○	△	○	○	△
121	2299	黒雲母	A	62.02	1.19	21.83	7.45	0.06	1.77	0.71	2.67	1.64	0.27	186	123	197	○	△	△	△	
122	2329	黒雲母	B	54.47	2.09	18.34	12.66	0.20	2.71	5.32	2.95	0.66	0.37	55	236	143	○	△	○	○	△
123	2340	黒雲母	A	65.20	0.50	21.34	4.05	0.02	1.97	0.55	3.11	2.39	0.77	140	163	278	○	△	○	○	△
124	2354	高嶺石	B	55.61	1.79	19.94	18.22	0.18	2.21	3.66	2.67	0.74	0.32	83	200	145	○	△	○	○	△
125	2369	黒雲母	B	53.58	1.99	21.16	12.01	0.18	2.29	4.90	2.28	0.62	0.22	72	118	160	○	△	○	△	△
126	2377	黒雲母	A	64.38	1.04	20.41	9.30	0.04	1.70	1.61	3.05	2.62	0.68	182	148	341	○	△	○	△	
127	2410	黒雲母	B	54.88	1.69	20.19	11.68	0.17	2.29	4.78	2.92	0.79	0.68	59	251	171	○	△	○	○	△
128	2411	黒雲母	B	54.30	1.91	21.44	13.04	0.21	2.22	3.18	2.81	0.68	0.44	87	208	273	○	△	○	○	△
129	2420	黒雲母	A	64.38	1.04	20.41	9.30	0.04	1.70	1.61	3.05	2.62	0.68	182	148	341	○	△	○	△	
130	2447	高嶺石	A	65.34	0.96	19.22	5.78	0.09	1.98	1.14	2.91	1.88	0.75	150	158	384	○	△	○	△	
131	2453	高嶺石	B	58.63	1.78	21.57	11.68	0.19	2.10	3.13	2.31	0.72	0.29	69	220	304	○	△	○	○	△
132	2832	黒雲母	B	57.00	0.70	21.35	10.11	0.15	2.72	4.67	1.65	0.79	0.70	34	227	124	○	△	○	○	△
133	2953	黒雲母	C	58.78	0.78	24.13	9.37	0.09	1.82	0.51	1.99	2.26	0.12	136	47	202	○	△	○	○	△
134	3031	黒雲母	B	67.86	0.50	18.95	10.13	0.18	2.28	3.09	2.85	0.76	0.35	85	337	117	○	△	○	△	
135	3033	黒雲母	B	67.74	0.72	22.95	10.49	0.06	1.87	0.69	3.70	1.89	0.34	164	188	171	○	△	○	○	△
136	3303	黒雲母	B	54.55	0.67	22.56	10.35	0.17	2.29	4.65	2.76	0.53	0.63	29	211	105	○	△	○	○	△
137	3309	黒雲母	B	54.27	2.49	22.11	11.69	0.18	2.11	3.49	1.82	0.68	0.71	132	206	220	○	△	○	○	△
138	3310	黒雲母	A	70.21	0.72	19.18	1.81	0.02	1.49	0.72	2.48	2.45	0.77	141	123	269	○	△	○	○	
139	3213	黒雲母	A	63.88	0.81	21.47	5.82	0.02	1.80	1.19	2.85	2.09	0.62	158	168	240	○	△	○	△	
141	3325	黒雲母	B	64.88	0.72	21.34	10.13	0.18	2.28	3.09	2.85	1.18	0.34	164	188	171	○	△	○	○	△
142	3320	黒雲母	B	61.05	2.36	22.24	12.90	0.22	2.99	5.28	2.08	0.37	0.94	48	115	112	○	△	○	○	△
143	3328	黒雲母	C	58.84	0.82	23.38	5.98	0.08	1.94	4.49	2.39	1.29	0.98	68	381	223	○	△	○	○	△
144	3328	高嶺石	B	55.08	1.89	23.39	12.42	0.20	2.29	4.28	2.05	0.48	0.87	23	209	168	○	△	○	○	△
145	3327	高嶺石	A	69.26	0.70	19.74	7.73	0.08	2.21	2.88	2.68	1.81	0.22	136	90	161	○	△	○	○	△
146	3328	高嶺石	B	55.27	1.87	23.39	12.42	0.20	2.29	4.28	2.05	0.48	0.87	23	209	168	○	△	○	○	△
147	3471	黒雲母	C	58.41	1.03	22.23	9.08	0.12	1.67	1.15	2.35	1.99	0.24	127	127	404	○	△	○	○	△

※砂粒分類のA類は各地、B類(B'を含む)は下川津B類土器、阿波地域、C類は生駒丘陵土と考被されている。

※岩石・鉱物の砂粒観察では、○:多い、△:普通、×:少い、×:僅かで多量を含んでいた。

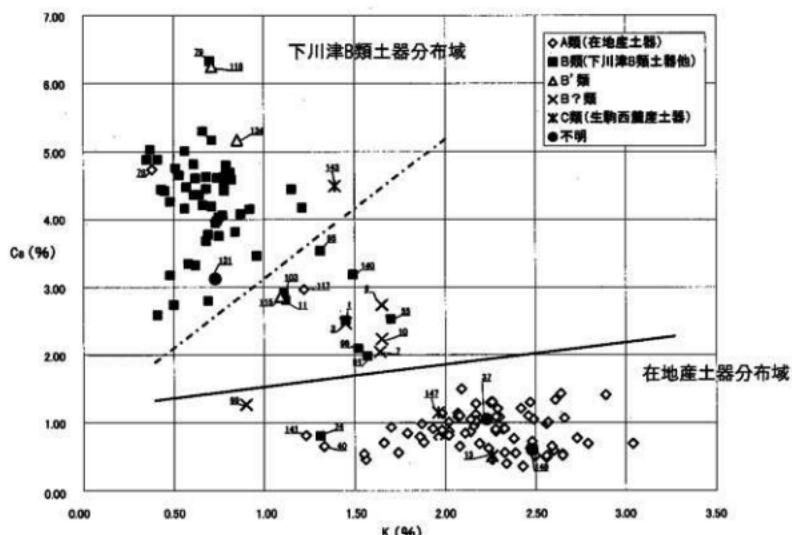
に示した。この産地で採集した砂粒を観察すると、採集地により角閃石の含有量が多い地点や黒雲母の含有量が多い地点など、採集地により角閃石と黒雲母の鉱物の割合が異なるようである。図版に示したものは、黒雲母を多く含む砂粒試料である。

以上のように、考古学的な分類と、胎土分析による分類結果とがほぼ一致し、原間 A 類は遺跡周辺で生産された在地土器、B 類 (B'を含む) は下川津 B 類土器に推定された。また、原間の B' 類とした土器は、下川津 B 類土器に比べ、角閃石・黒雲母の量が少ないことがわかった。これは、角閃石・黒雲母の鉱物砂粒混入量を意識的に変えたのかあるいは、生産地が異なるのか、この分析では明らかにすることできなかった。今後の課題である。

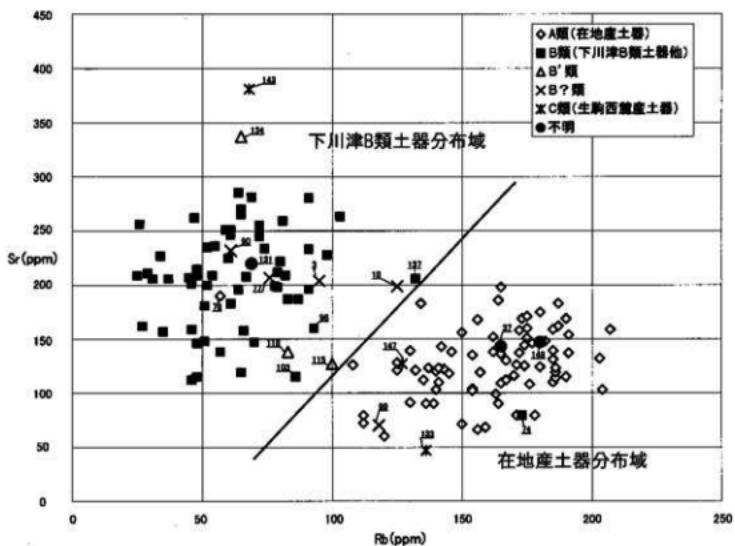
この分析の機会を与えて頂いた片桐孝浩氏をはじめ香川県埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 香川県教育委員会には、いろいろご教示頂いた。末筆ではあります記して感謝いたします。

## 参考文献

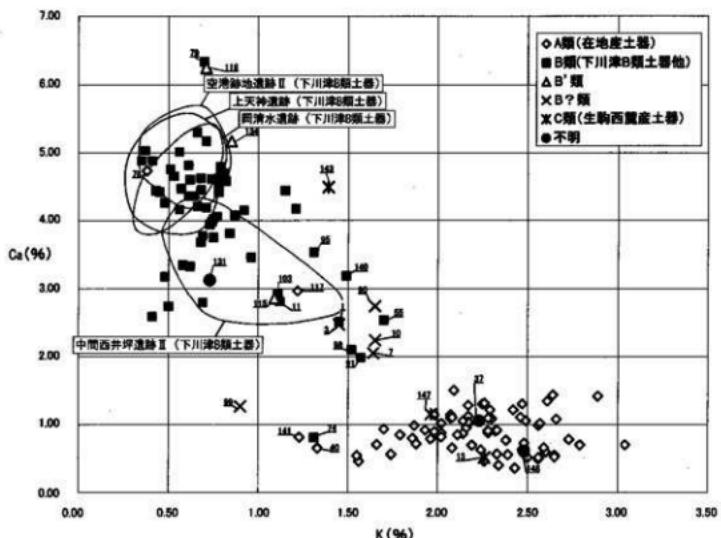
- 北山健一郎・森下友子・奥田尚ほか (1995) 『太田下・須川遺跡』高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 香川県教育委員会



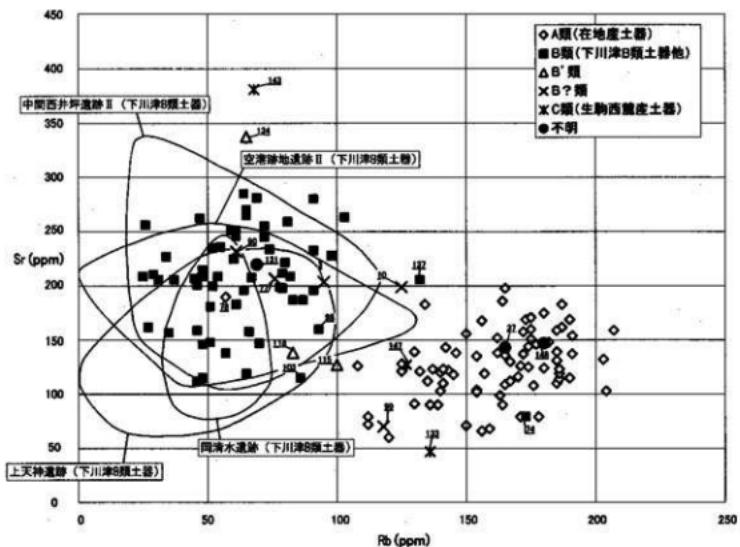
第450図 原間遺跡出土土器の胎土比較 K-Ca散布図



第451図 原間遺跡出土土器の胎土比較 Rb-Sr散布図



第452図 原間遺跡と高松市内各遺跡出土下川津B類土器の比較 K-Ca散布図



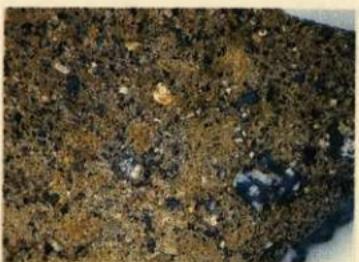
第453図 原間遺跡と高松市内各遺跡出土下川津B類土器の比較 Rb-Sr散布図



1. No. 79 原間B類



2. No. 118 原間B類



3. No. 73 原間B類



4. 原間B類



5. No. 1 原間B類



6. No. 98 原間B類



7. No. 77 原間B?類



8. No. 3 原間B?類

Fig 1 各生産地の胎土砂粒観察写真(8倍)



1. No.4 原間A類



2. No.48 原間A類



3. No.60 原間A類



4. No.113 結晶片岩が含まれる土器



5. No.115 結晶片岩が含まれる土器



6. No.117 結晶片岩が含まれる土器



7. No.134 生駒西麓産土器？



8. No.143 生駒西麓産土器？

Fig2 各生産地の胎土砂粒観察写真(8倍)

## 第2節 香川県、原間遺跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

### I. 原間遺跡における種実同定

#### 1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靭なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができます。

#### 2. 試料

試料は、原間遺跡の各遺構より検出された選別済み種実 19 試料と堆積物 2 試料の計 21 試料である。

#### 3. 方法

試料（堆積物）に以下の物理処理を施して、抽出および同定を行った。

- 1) 試料 200cc に水を加え放置し、泥化を行う。
- 2) 搅拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25mm の筋で水洗選別を行う。
- 3) 残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数を行う。

同定は形態的特徴および現生標本との対比を行い、結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

#### 4. 同定された分類群

樹木 12、樹木・草本を含むもの 1、草本 7 の計 20 が同定された。学名、和名および粒数を表 5 に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記す。

##### 【樹木】

モミ *Abies firma* 塚果（種子が塚果内に含まれていた） マツ科

円筒形を呈する。先が丸い。種子は倒卵状くさび形で、翼がある。

ヤマモモ *Myrica rubra* Sieb. et Zucc. 核 ヤマモモ科

茶褐色で梢円形を呈し、両端がややとがる。一端にへそがあり、表面は粗い。断面は扁平である。

コナラ属コナラ亜属 *Quercus* subgen. *Lepidobalanus* 堅果 ブナ科

黒褐色で梢円形を呈し、一端につき部が残る。本試料の堅果はマテバシイに類似している。

イチイガシ *Quercus gilva* Blume 堅果・殼斗・幼果 ブナ科

堅果は黒褐色で梢円形を呈し、先端に明瞭な花柱を持つ。花柱の先端は直上かやや内側に向き、殼斗壁が厚い。

殼斗は輪状紋をもち基部から先端に向かって直線的な椀状を呈する。

幼果は黒褐色で輪状紋の殼斗に包まれている。上端は明瞭な花柱が突出している。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* 堅果・殻斗・幼果 ブナ科  
堅果は黒褐色で橢円形を呈し、先端に花柱を持つ。

殻斗は黒褐色でゆるやかな椀状を呈し、輪状紋がある。

幼果は黒褐色で輪状紋の殻斗に包まれている。上端は花柱が突出している。

クワ属 *Morus* 種子 クワ科

茶褐色で広倒卵形を呈し、基部に突起がある。表面はやや粗い。

シキミ *Ilicium religiosum* 種子 シキミ科

楕円形や狭橢円形を呈し、やや扁平である。背面に凹みがあり、へその一端が嘴状に突出している。

腹面の正中線は稜をなす。へそは卵形で斜切形である。種皮は平滑。

クスノキ *Cinnamomum camphora* Sieb. 種子 クスノキ科

黒褐色で球形を呈す。一条の稜線が走りその中央が突起する。

モモ *Prunus persica* Batsch 核 バラ科

黄褐色～黒褐色で橢円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。

サクラ属サクラ節 *Prunus* sect. *Pseudocerasus* 核 バラ科

黄褐色で橢円形を呈し、下端が大きくくぼむ。側面に縫合線が走る。表面はやや粗い。

キイチゴ属 *Rubus* 核 バラ科

淡褐色でいびつな半円形を呈す。表面には大きな網目模様がある。

サカキ *Cleyera japonica* 種子 ツバキ科

広卵状円形、円形、橢円形などを呈する。へその一端近くは嘴状。側面は狭倒卵形、倒卵形、長橢円形（やや両凸レンズ状）である。種皮は平滑で表皮下に多数の小孔が見られる。

ヒサカキ *Eurya Thunb.* 種子 ツバキ科

黒褐色～茶褐色で不整形を呈す。表面に多数の小孔がある。

ハクウンボク *Styrax obassia* Sieb. et Zucc. 核 エゴノキ科

黒褐色で橢円形を呈し、下端にへそがある。表面に3本の浅い溝と、低い稜がある。

〔樹木・草本を含むもの〕

ウコギ科 Araliaceae 種子

淡褐色ないし茶褐色で、半月状を呈する。断面は扁平、向軸側はほぼ直線状になり、肺軸側には浅い溝が2～3本走る。表面はざらつく。

〔草本〕

ホタルイ属 *Scirpus* 果実 カヤツリグサ科

黒褐色で、やや光沢がある。広倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。表面には横方向の微細な隆起がある。

カヤツリグサ科 Cyperaceae 果実

茶褐色で倒卵形を呈す。断面は三角形である。

イラクサ科 Urticaceae 種子

黄褐色で狭倒卵形を呈す。粗面で光沢はない。

ミゾソバ *Polygonum Thunbergii* Sieb. et Zucc. 果実 タデ科

黄褐色で三角状広卵形を呈し、基部に小突起がある。表面には微細な網目模様がある。

タデ属 *Polygonum* 果実 タデ科

黒褐色で先端がとがる広卵形を呈す。表面には網目模様があり、断面は両凸レンズ形である。

シソ属 *Perilla* 果実 シソ科

つぶれた状態のものである。茶褐色で円形を呈し、下端にヘソがある。表面には大きい網目模様がある。

ヒヨウタン類 *Lagenaria siceraria* Standl. 果皮 ウリ科

木質化しやや厚みがある。表面はなめらかで裏面は粗い。

藤下がヒヨウタン仲間とするものには、ヒヨウタン・フクベ・カンビョウが含まれ、このうちフクベ・カンビョウは食用となる。

## 5. 結果

### (1) 選別済み種実

サンプルNo. 81～85、87～92、95～100は、モモ核であった。サンプルNo. 86は、コナラ属コナラ亜属堅果であった。サンプルNo. 93は、ヒヨウタン類果皮であった。サンプルNo. 94は、イチイガシ堅果、殻斗、幼果が多い。また、クスノキ種子、ハクウンボク核、サクラ属サクラ節核、モミ種果破片、ヤマモモ核、モモ核が同定された。他に、破片が多数含まれていた。

### (2) 堆積物 (サンプルNo. 101、102)

樹木ではヒサカキがやや多く、サカキ、コナラ属アカガシ亜属、キイチゴ属、草本では、シソ属がやや多く、タデ属、カヤツリグサ科、イラクサ科、ホタルイ属、ミゾソバが検出された。

## 6. 考察

選別済みの種実は、小型の種実が含まれておらず、大型で保存されやすい核果などの種実遺体であった。モモが多いが、モモは中国原産の栽培樹木で弥生時代以降の遺跡からはよく出土する。ヤマモモは果実が食用になる。暖地に生育する樹木であり、自然に生育していたヤマモモが採取されたものと考えられる。サクラ属サクラ節核も果実が食用になる。ヒヨウタン類は明らかな栽培植物である。イチイガシ、コナラ属コナラ亜属、クスノキは照葉樹ないし落葉樹であり、イチイガシとクスノキは特に暖温帯でも下部に多く分布する照葉樹林の主要構成要素である。ハクウンボクやモミは山地などに普通に生育する樹木である。

堆積物からは、樹木ではヒサカキ、サカキ、コナラ属アカガシ亜属は照葉樹林の主要構成要素が検出された。このうちやや多いヒサカキは低木相である。キイチゴ属は林縁周辺の林床に生育し、食用になる。草本のタデ属、カヤツリグサ科、ホタルイ属、ミゾソバはいずれも湿生植物から抽水植物であり、堆積地周辺に生育していたとみなされ、堆積地は湿地から浅水域の環境であったと考えられる。イラクサ科は林縁に生育し、近隣にはヒサカキ、サカキ、コナラ属アカガシ亜属などの照葉樹林が分布していたと推定される。

以上のことから、照葉樹林の分布が示唆され、堆積地は森林に隣接する湿生植物から抽水植物の生育する湿地から浅水域であったと推定される。

## II. 原間遺跡における樹種同定

### 1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から概ね属レベルの同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないとことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

### 2. 試料

試料は、原間遺跡において出土した自然木・杭 81 点と炭化材 15 点の計 96 点である。試料一覧を表 2 に示す。また、種実同定試料中の 1 試料（試料番号 94）に木材が混入しており、それについても同定を試みた。

### 3. 方法

生材は、カミソリを用いて新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、生物顕微鏡によって 60 ~ 600 倍で観察した。炭化材は、割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって 75 ~ 750 倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

### 4. 結果

主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

#### 1) イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* K. Koch イヌガヤ科 第 452 図①

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は非常に狭く、樹脂細胞が散在する。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、トウヒ型で 1 分野に 1 ~ 2 個存在する。仮道管の内壁にらせん肥厚が存在する。樹脂細胞が散在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1 ~ 10 細胞高程度である。仮道管の内壁にらせん肥厚が存在する。樹脂細胞が多く見られる。

以上の形質よりイヌガヤに同定される。イヌガヤは、岩手県以南の本州、四国、九州に分布する。常緑の低木または小高木で、高さ 10 ~ 15m、径 20 ~ 30cm である。材は、やや堅硬で木理は緻密であるが不整でしばしば波状を呈する。建築、器具、土木、ろくろ細工、薪炭などに用いられる。

#### 2) モミ属 *Abies* マツ科 第 452 図②

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的緩やかである。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で 1 分野に 1 ~ 4 個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、じゅず状末端壁を有する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質より、モミ属に同定される。モミ属は日本に 5 種が自生しており、その内ウラジロモミ、トドマツ、シラビソ、オオシラビソの 4 種は亜寒帯に分布し、モミは温帯を中心に分布する。常緑高

木で高さ 45m、径 1.5m に達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。

3) マツ属複維管束亞属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科

第 452 図③

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエビセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質より、マツ属複維管束亞属に同定される。マツ属複維管束亞属には、クロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する。常緑高木である。材は水温によく耐え、広く用いられる。

3) マツ属 *Pinus* マツ科

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエビセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質より、マツ属に同定される。マツ属には、ヒメコマツなどの単維管束亞属と、クロマツ、アカマツなどの複維管束亞属があり、放射仮道管内壁の鋸歯状肥厚の有無で同定できるが、本試料は保存状態が悪く、十分な観察が困難であるので、マツ属の同定にとどまる。

4) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科

第 453 図①

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で、1 分野に 2 個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1 ~ 15 細胞高である。

以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ 40m、径 1.5m に達する。材は木理通直、肌目緻密で強韌、耐朽、耐湿性も高い。良材であり、建築など広く用いられる。

5) ヒノキ属 *Chamaecyparis*

横断面、放射断面、接線断面共にヒノキ科の特徴を示し、分野壁孔は1 分野に 2 個存在するが、分野壁孔の型が不明瞭なものはヒノキ属とした。

6) ヒノキ科 *Cupressaceae*

横断面、放射断面、接線断面共にヒノキ科の特徴を示し、分野壁孔の型及び1 分野に存在する個数が不明瞭なものはヒノキ科とした。

7) 針葉樹 *conifer*

横断面、放射断面、接線断面共に針葉樹の特徴を示すが、保存状態が悪く、細部までの観察が困難であったので、針葉樹とした。

8) ハコヤナギ属 *Populus* ヤナギ科

横断面：小型で丸く、放射方向にやや長い道管が、単独あるいは 2 ~ 3 個放射方向に複合して散在

する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔であり、道管相互の壁孔は交互状で密に分布する。放射組織は同性である。

接線断面：放射組織は、単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりハコヤナギ属に同定される。ハコヤナギ属には、ドロノキ、ハコヤナギなどがあり、いずれも落葉の高木で、北海道、本州、四国、九州に分布する。

9) ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科

第 453 図②

横断面：小型で丸く、放射方向にやや長い道管が、単独あるいは2～3個放射方向に複合して散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔であり、道管相互の壁孔は交互状で密に分布する。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、単列の異性放射組織型である。

以上の形質よりヤナギ属に同定される。ヤナギ属には、マルバヤナギ、オオタチヤナギなどがあり、落葉の高木または低木で、北海道、本州、四国、九州に分布する。

10) クマシデ属イヌシデ節 *Carpinus sect. Carpinus* カバノキ科

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは数個放射方向に複合し、全体として放射方向に配列する放射孔材である。集合放射組織が見られる。

放射断面：道管の穿孔は、單穿孔である。放射組織は同性である。

接線断面：放射組織は、同性で1～3細胞幅のものと、集合放射組織からなる。

以上の形質よりクマシデ属イヌシデ節に同定される。落葉の中高木で、北海道、本州、四国、九州の山野に分布する。

11) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科

第 453 図③

横断面：大型の道管が、年輪のはじめに1～数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が火炎状に配列する。早材部から晩材部にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cm程度であるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性が強く水湿にもよく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸等など、広く用いられる。

12) ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* Schottky ブナ科

横断面：中型から大型の道管が、年輪のはじめにやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射組織は、単列のものと集合放射組織が存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなり、同性放射組織型である。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと集合放射組織が存在する。

以上の形質よりツブラジイに同定される。ツブラジイは関東以南の本州、四国、九州に分布する常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。耐朽性、保存性は低い。建築材などに用いられる。

13) シイ属 *Castanopsis* ブナ科

第 454 図①

横断面：中型から大型の道管が、年輪のはじめにやや疎に数列配列する環孔材である。晚材部で小道管が火炎状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で単列のものが確認できる。

以上の形質よりシイ属に同定される。シイ属は本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽性、保存性はやや低いが、建築、器具などに用いられる。

なおシイ属には、スダジイとツブラジイがあり、集合放射組織の有無などで同定できるが、本試料は小片であり、広範囲の観察が困難だったので、シイ属の同定にとどまる。

14) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科

第454図②③

横断面：中型から大型の道管が、1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靭、弾力性に優れ耐湿性も高い。特に農耕具に多く用いられる。

15) コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科

第455図①②

横断面：大型の道管が、年輪のはじめに1～数列配列する環孔材である。晚材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晚材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強靭で弾力性に富み、建築材などに用いられる。

16) コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科

第455図③第456図①

横断面：大型の道管が、年輪のはじめに1～数列配列する環孔材である。晚材部では厚壁で丸い小道管が、単独でほぼ放射方向に配列する。早材部から晚材部にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強靭で弾力性に富み、器具、農具などに用いられる。

17) ブナ科 *Fagaceae*

横断面：部分的ではあるが大型の道管と、火炎状に配列する小道管が見られた。 放射断面：放射

組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は單列の同性放射組織型である。

以上の形質よりブナ科の、クリ、シイ属、コナラ属コナラ節のいずれかである。なお本試料は小片であるうえに、保存状態が悪く、広範囲の観察は困難であったので、ブナ科の同定にとどまる。

18) ヤマグワ *Morus australis* Poiret クワ科

第456図②

横断面：年輪のはじめに中型から大型の丸い道管が、単独あるいは2～3個複合して配列する環孔材である。孔圈部外の小道管は複合して円形の小塊をなす。道管の径は徐々に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部の1～3細胞ぐらいたる直立細胞である。

接線断面：放射組織は上下の縁辺部が直立細胞からなる異性放射組織型で、1～6細胞幅である。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりヤマグワに同定される。ヤマグワは北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、通常高さ10～15m、径30～40cmである。材は堅硬、韌性に富み、建築などに用いられる。

19) タブノキ *Machilus thunbergii* Sieb. et Zucc. クスノキ科

第456図③

横断面：やや小型の道管が、単独および2～数個放射方向に複合して、散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に柔細胞が取り囲んでいる。これらの柔細胞の中には、油を含み大きく膨れ上がったものも存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔、または、少数ではあるが数の少ない階段穿孔が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～2細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞のなかには、しばしば大きく膨れ上がったものも存在する。

以上の形質よりタブノキに同定される。タブノキは、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、高さ15m、径1mに達する。材は耐朽性、保存性とともに中庸で、建築、家具、土木、器具、楽器、船、彫刻、薪炭などに用いられる。

20) ヤブニッケイ *Cinnamomum japonicum* Sieb. クスノキ科

横断面：小型の道管が、単独および2～数個放射方向に複合して、散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に柔細胞が取り囲んでいる。これらの柔細胞の中には、油を含み大きく膨れ上がったものも存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔および数の少ない階段穿孔で、道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～2細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞のなかには、大きく膨れ上がったものも存在する。

以上の形質よりヤブニッケイに同定される。ヤブニッケイは、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、高さ15m、径1mに達する。材は強さ中庸で、家具、器具、薪炭などに用いられる。

21) クスノキ科 Lauraceae

横断面：中型から小型の道管が、単独および2～数個放射方向に複合して、平等に分布する散孔材である。道管の周囲を鞘状に柔細胞が取り囲んでいる。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔のものが存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～3細胞幅である。上下の縁辺部のみ直立細胞である。

以上の形質よりクスノキ科に同定される。クスノキ科には、クスノキ、ヤブニッケイ、タブノキ、カゴノキ、シロダモなどがあり、道管径の大きさ、多孔穿孔および道管内壁のらせん肥厚の有無などで細分できるが、本試料は保存状態が悪く、広範囲の観察が困難なので、クスノキ科の同定にとどまる。なお、本試料は道管径の大きさから、クスノキ以外のクスノキ科の樹種のいずれかである。

## 22) ウルシ属 *Rhus* ウルシ科

横断面：年輪のはじめに大型の道管が単独あるいは2～3個複合して配列する環孔材である。晩材部で小道管が単独あるいは主に放射方向に2～3個複合して散在する。早材から晩材にかけて道管の径は徐々に減少していく。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、1～3細胞幅ぐらいである。

以上の形質よりウルシ属に同定される。ウルシ属にはヤマハゼ、ウルシ、ヌルデ、ツタウルシなどがあり、北海道（渡島半島）、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑または落葉の低木～高木、または藤本である。

## 23) ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn. ムクロジ科

第457図①

横断面：大型でやや厚壁の道管が、単独ときくに2個複合して、年輪のはじめに1～2列ならぶ環孔材である。晩材部では小型で薄壁の角張った道管が数個おもに放射方向に複合して散在する。木部柔組織は早材部で周囲状、晩材部では數列幅で帯状となって接線方向に連なる。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は同性である。小道管の内壁にらせん肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は、同性放射組織型で1～3細胞幅である。放射組織の外形はいびつである。

以上の形質よりムクロジに同定される。ムクロジは本州（茨城県、新潟県以南）、四国、九州、沖縄に分布する。落葉の高木で、高さ25m、径1mに達する。材はやや軽軟で脆弱な材で、器具、家具などに用いられる。

## 24) サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科

第457図②

横断面：小型の道管が、単独ないし2個複合して均等に分布する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く50を越える。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で単列である。

以上の形質よりサカキに同定される。サカキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑高木で、通常高さ8～10m、径20～30cmである。材は強靭、堅硬で、建築、器具などに用いられる。

## 25) ヒサカキ属 *Eurya* ツバキ科

第457図③

横断面：小型で角張った道管が、ほぼ単独で密に分布する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く50を越える。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、1～3細胞幅で、多列部と比べて単列部が長い。

以上の形質よりヒサカキ属に同定される。ヒサカキ属にはヒサカキ、ハマヒサカキなどがあり、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の小高木で、通常高さ10m、径30cmである。材は強さ中庸で、器具などに用いられる。

26) ハイノキ属 *Symplocos* ハイノキ科

横断面：小型で角張った道管が、単独あるいは2～4個不規則に複合して散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～50本ぐらいである。道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、1～3細胞幅である。道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりハイノキ属に同定される。ハイノキ属には、ハイノキ、クロバイ、サワフタギ、クロキなどがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑または落葉性の高木または低木である。

27) 環孔材 ring-porous wood

横断面：部分的ではあるが、年輪のはじめに大型の道管が配列する。

放射断面：道管と異性の放射組織が存在する。

接線断面：異性放射組織型で、多列幅の放射組織が存在する。

以上の形質より環孔材に同定される。なお本試料は保存状態が悪く、広範囲の観察が困難であったので、環孔材の同定にとどまる。

28) 広葉樹 broad-leaved tree

横断面：道管が存在する。

放射断面：道管と放射組織が存在する。

接線断面：道管と放射組織が存在する。

以上の形質より広葉樹に同定される。

なお本試料は極めて小片であり、広範囲の観察が困難だったので、広葉樹の同定にとどまる。

29) 樹皮 bark

鱗片状の組織が見られる。

## 5. 考察

同定の結果、原間遺跡の木材は、イヌガヤ1、モミ属7、マツ属複維管束亞属3、マツ属2、ヒノキ6、ヒノキ属1、ヒノキ科1、針葉樹1、ハコヤナギ属1、ヤナギ属6、クマシデ属イスシデ節1、クリ1、ツブラジイ2、シイ属2、コナラ属アカガシ亞属10、コナラ属コナラ節6、コナラ属クヌギ節13、ブナ科2、ヤマグワ2、ヤブニッケイ2、タブノキ5、クスノキ科2、ウルシ属3、ムクロジ6、サカキ2、ヒサカキ属3、ハイノキ属1、環孔材2、広葉樹1、樹皮1であった。また、種実同定試料に混入していた木材は、コナラ属アカガシ亞属の枝と樹皮であった。

多いコナラ属クヌギ節は、温帯下部に分布する落葉高木で、水はけのよい乾燥した台地や丘陵地に生育し、二次林要素としての性格ももつ。コナラ属コナラ節は主に温帯に分布する落葉高木であり、二次林要素の樹種を含む。ウルシ属は林縁や陽当たりよい裸地を好む。やや多いコナラ属アカガシ亞属やヤブニッケイ、タブノキ、サカキ、ヒサカキ、シイ属は、温帯下部の照葉樹林を形成する主要高

木である。モミ属やヒノキなどの針葉樹は温帯の森林内に混在する針葉樹である。マツ属複雜管束亞属には海岸林を構成するクロマツと二次林要素のアカマツが含まれる。ヤマグワ、ヤナギ属、ムクロジは谷沿いや小河川沿いの河辺に生育する樹木である。

以上から、台地や丘陵地のやや乾燥したところに生育する二次林要素の樹種が多く、次に照葉樹林要素がやや多く、河辺の湿润な環境を好む樹種へと続く。周辺の台地や丘陵地にはコナラ属クヌギ節やコナラ属コナラ節（コナラ）の二次林とシイ属やヒサカキなどの照葉樹林が分布し、平野部にはコナラ属アカガシ亞属（カシ）やヤブニッケイ、タブノキなどの照葉樹林が分布していたと考えられる。針葉樹はこれらの樹林の小さな要素として混在して生育していたと考えられる。周辺の河川沿いなどの湿润なところにはヤマグワ、ヤナギ属、ムクロジが生育していた。遺跡地周辺地域のスギやヒノキの造林を除く社寺林などに残存する森林植生と比較的よく類似する。

### III. 原間遺跡における植物珪酸体分析

#### 1. 試料

分析試料は、第V調査区 SHV01 の炭化物片および炭化物を含む土壌（比較試料）である。ここでは、植物珪酸体分析および灰像分析の手法を用いて灰化物の給源植物の同定を試みた。

#### 2. 分析法

炭化物については、電気炉灰化法（550°C・6時間）によって灰化し、オイキットで封入してプレパラートを作成した。検鏡は偏光顕微鏡を用いて、100～400倍の倍率で行った。なお、灰化物の内部を調べるために、植物組織の一部を破壊して観察を行った。

炭化物を含む土壌については、プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）をもとに、次の手順で処理を行った。

- 1) 試料を 105°C で 24 時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約 1 g に直径約 40 μm のガラスピースを約 0.02 g 添加（電子分析天秤により 0.1 mg の精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10 分間）による分散
- 5) 沈底法による 20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピース個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1 gあたりのガラスピース個数に、計数された植物珪酸体とガラスピース個数の比率をかけて、試料 1 g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位:  $10^{-5} \text{ g}$ ）をかけて、単位面積で層厚 1 cm あたりの植物体生産量を算出した。

ヒエ属（ヒエ）の換算係数は8.40、スキ属（スキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。

### 3. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

#### 〔イネ科〕

ヒエ属型、キビ族型、スキ属型（おもにスキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）

#### 〔イネ科-タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、未分類等

#### 〔イネ科-その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

#### 〔樹木〕

ブナ科（シイ属）、クスノキ科、その他

### 4. 考察

IV-③区SH04の炭化物片および炭化物を含む土壤について分析を行った。その結果、炭化物片ではイネ科植物の茎部に由来するとみられる組織片が多数確認された。茎部に由来する植物珪酸体や灰化組織の研究は、これまであまり行われていないことから確実な同定は困難であるが、ここで検出されたものはタケ亜科の茎部に類似している。また、一部の炭化物片ではヒエ属型の植物珪酸体が少量検出された。

炭化物を含む土壤では、ネザサ節型が多量に検出され、ヒエ属型、キビ族型、スキ属型、ウシクサ族A、ミヤコザサ節型なども検出された。また、樹木（照葉樹）起源のブナ科（シイ属）やクスノキ科も検出された。おもな分類群の推定生産量によると、ネザサ節型が卓越しており、ヒエ属も多くなっていることが分かる。

### IV. まとめ

原間遺跡で種実同定と樹種同定を行い植生の検討を行った結果、遺跡周辺の台地や丘陵地にはコナラ属クヌギ節やコナラ属コナラ節（コナラ）の二次林とシイ属やヒサカキなどの照葉樹林が分布し、平野部にはコナラ属アカガシ亜属（カシ）やヤブニッケイ、タブノキなどの照葉樹林が分布しており、周辺の河川沿いなどの温潤なところにはヤマグワ、ヤナギ属、ムクロジが生育していたと推定された。遺跡の周囲には、照葉樹林の分布が示唆され、堆積地はタデ属、カヤツリグサ科、ホタルイ属、ミゾソバの温生植物から抽水植物が生育し、森林に隣接した湿地から浅水域であったと考えられる。明らかな栽培植物として、モモとヒヨウタン類が同定された。

また、炭化物について植物珪酸体分析を行った結果、IV-③区SH04の炭化物は、おもにタケ亜科の茎部に由来していると考えられ、ヒエ属の茎葉も少量含まれていると推定される。炭化物を含む土壤の分析結果から、タケ亜科についてはメダケ属ネザサ節の可能性が考えられるが、現時点では確実なことはいえない。今後、茎部に由来する植物珪酸体や灰化組織の研究を進めることで、より確実な同定が可能になると考えられる。

## 参考文献

- 笠原安夫 (1985) 日本雑草図説, 養賢堂, 494p.
- 南木睦彦 (1992) 低湿地遺跡の種実, 月刊考古学ジャーナル No.355, ニューサイエンス社, p.18-22.
- 南木睦彦 (1993) 葉・果実・種子, 日本第四紀学会編, 第四紀試料分析法, 東京大学出版会, p.276-283.
- 渡辺誠 (1975) 縄文時代の植物食, 雄山閣, 187p.
- 金原正明 (1996) 古代モモの形態と品種, 月刊考古学ジャーナル No.409, ニューサイエンス社, p.15-19.
- 佐伯浩・原田浩 (1985) 針葉樹材の細胞, 木材の構造, 文永堂出版, p.20-48.
- 佐伯浩・原田浩 (1985) 広葉樹材の細胞, 木材の構造, 文永堂出版, p.49-100.
- 島地謙・伊東隆夫 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧, 雄山閣, 296p.
- 杉山真二 (1987) タケ亜科植物の機動細胞珪酸体, 富士竹類植物園報告, 第31号, p.70-83.
- 杉山真二・松田隆二・藤原宏志 (1988) 機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追究のための基礎資料として—, 考古学と自然科学, 20, p.81-92.
- 杉山真二 (2000) 植物珪酸体 (プラント・オパール), 考古学と植物学, 同成社, p.189-213.
- 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (I) —数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—, 考古学と自然科学, 9, p.15-29.

第7表 原間遺跡における種実同定結果

学名	和名	部位	通常品種実										被植物										
			81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	101
Arbor		樹木																					
<i>Abies firma</i>		モミ																					
<i>Alnus rubra Sieb. et Zucc.</i>	*	ヤマセモ																					
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>		コナラコナラ毛葉																					
<i>Quercus glauca Blume</i>	*	イチイガシ																					
		葉斗																					
		幼果																					
		被葉片																					
		1																					
<i>Quercus subgen. Cerris</i>		コナラ属アカガシ毛葉																					
<i>Ulmus religiosa</i>		シキミ																					
<i>Cinnamomum camphora Sieb.</i>		クスノキ																					
<i>Prunus persica</i> Brach.	**	モモ																					
		桃																					
		被葉片																					
		1/2枚																					
		3																					
<i>Prunus sect. Pseudocerasus</i>		サクラ属サクラ属																					
<i>Rubus</i>	*	キニナル属																					
<i>Cleyera japonica Thunb.</i>		サカキ																					
<i>Eurya Thunb.</i>		ヒサカキ																					
<i>Symplocos oblonga Sieb. et Zucc.</i>		ハツシボンバク																					
		被木・葉木																					
Arbor-Herb		ウコギ科																					
Araliaceae		根子																					
		1																					
Herb		草本																					
<i>Scirpus</i>		ホタルイ属																					
<i>Cyperaceae</i>		カヤツリグサ科																					
<i>Urticaceae</i>		イタクサ科																					
<i>Polygonum Thlaspioides</i> Sieb. et Zucc.		ミソリバ																					
<i>Polygonum</i>		タデ属																					
<i>Perilla</i>		シソ属																					
<i>Lagostachys sicula</i> Standl.	*	ヒヨウテン属																					
		被花																					
		1																					
Total		合計																					
		21																					
		** 被植物																					
		* 春月(金剛)被物																					

第8表 原間遺跡における樹種同定試料・結果

番号	調査区	遺構名	報文番号	結果(和名／学名)
1	Ⅲ区	SB02-SP513		ヒノキ科 <i>Cupressaceae</i>
2	Ⅲ区	SB02-SP505		ヒノキ <i>Chamaecyparis obtusa Endl</i>
3	Ⅲ区	SP45		ヒサカキ属 <i>Eurya</i>
4	Ⅲ区	SP45		タブノキ <i>Machilus thunbergii Sieb et Zucc</i>
5	Ⅲ区	SR03	937	コナラ属コナラ節 <i>Quercus sect. Pinus</i>
6	Ⅲ区	SR03		マツ属複維管束亞属 <i>Pinus subgen. Diploxylon</i>
7	Ⅲ区	SR03	936	コナラ属コナラ節 <i>Quercus sect. Pinus</i>
8	Ⅲ区	SR03	935	コナラ属コナラ節 <i>Quercus sect. Pinus</i>
9	Ⅲ区	SR03		ヤマグワ <i>Morus australis Poiret</i>
10	Ⅲ区	SR03		コナラ属アカガシ亞属 <i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>
11	Ⅲ区	SR03		ヒノキ <i>Chamaecyparis obtusa Endl</i>
12	Ⅲ区	SR03		ヤマグワ <i>Morus australis Poiret</i>
13	Ⅲ区	SR03		ヤナギ属 <i>Salix</i>
14	Ⅲ区	SR03		ヤブニッケイ <i>Cinnamomum japonicum Sied</i>
15	Ⅲ区	SR03		モミ属 <i>Abies</i>
16	Ⅲ区	SR03		コナラ属アカガシ亞属 <i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>
17	Ⅲ区	SR03		コナラ属アカガシ亞属 <i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>
18	Ⅲ区	SR03		ヤナギ属 <i>Salix</i>
19	Ⅲ区			コナラ属アカガシ亞属 <i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>
20	Ⅲ区			ヒサカキ属 <i>Eurya</i>
21	Ⅲ区			モミ属 <i>Abies</i>
22	Ⅲ区			コナラ属アカガシ亞属 <i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>
23	Ⅲ区			シイ属 <i>Castanopsis</i>
24	Ⅲ区	SR03		樹皮 <i>bark</i>
25	Ⅲ区	SR03		マツ属複維管束亞属 <i>Pinus subgen. Diploxylon</i>
26	Ⅲ区	SR03		コナラ属クヌギ節 <i>Quercus sect Aegilops</i>
27	Ⅲ区	SR03		環孔材 <i>ring-porous wood</i>
28	Ⅲ区	SR03		ウルシ属 <i>Rhus</i>
29	Ⅲ区	SR03		コナラ属アカガシ亞属 <i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>
30	Ⅲ区	SR03		タブノキ <i>Machilus thunbergii Sieb et Zucc</i>
31	Ⅲ区	SR03		コナラ属クヌギ節 <i>Quercus sect Aegilops</i>
32	Ⅲ区	SR03		クスノキ科 <i>Lauraceae</i>
33	Ⅲ区	SR03		コナラ属アカガシ亞属 <i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>
34	Ⅲ区	SR03		ウルシ属 <i>Rhus</i>
35	Ⅲ区	SR03		クマシテ属イヌシテ節 <i>Carpinus sect. Carpinus</i>
36	Ⅲ区	SR03		コナラ属クヌギ節 <i>Quercus sect Aegilops</i>
37	Ⅲ区	SR03		ウルシ属 <i>Rhus</i>
38	Ⅲ区	SR03		タブノキ <i>Machilus thunbergii Sieb et Zucc</i>
39	Ⅲ区	SR03		モミ属 <i>Abies</i>
40	Ⅲ区	SR03		クスノキ科 <i>Lauraceae</i>
41	Ⅲ区	SR03		ヤブニッケイ <i>Cinnamomum japonicum Sied</i>
42	Ⅲ区	SR03		コナラ属コナラ節 <i>Quercus sect. Pinus</i>
43	Ⅲ区	SR03		コナラ属クヌギ節 <i>Quercus sect Aegilops</i>
44	Ⅲ区	SR03		コナラ属コナラ節 <i>Quercus sect. Pinus</i>
45	Ⅲ区	SR03		マツ属複維管束亞属 <i>Pinus subgen. Diploxylon</i>
46	Ⅲ区	SR03		コナラ属クヌギ節 <i>Quercus sect Aegilops</i>
47	Ⅲ区	SR03		タブノキ <i>Machilus thunbergii Sieb et Zucc</i>
48	Ⅲ区	SR03	1532	サカキ <i>Cleyera japonica Thunb.</i>
49	Ⅲ区	SR03		コナラ属クヌギ節 <i>Quercus sect Aegilops</i>

番号	調査区	遺 構 名	報文番号	結 果 ( 和 名 / 学 名 )
50	Ⅲ区	SR03		ツブラジイ <i>Castanopsis cuspidata Schottky</i>
51	Ⅲ区	SR03	1520	ハイノキ属 <i>Symplocos</i>
52	Ⅲ区	SR03		ヤナギ属 <i>Salix</i>
53	Ⅲ区	SR03	1521	モミ属 <i>Abies</i>
54	Ⅲ区	SR03		サキカ <i>Cleyera japonica thunb.</i>
55	Ⅲ区	SR03		モミ属 <i>Abies</i>
56	Ⅲ区	SR03		イヌガヤ <i>Cephalotaxus harringtonia K. Koch</i>
57	Ⅲ区	SR03		ヒノキ <i>Chamaecyparis obtusa Endl</i>
58	Ⅲ区	SR03	1527	コナラ属クヌギ節 <i>Quercus sect Aegilops</i>
59	Ⅲ区	SR03	1531	コナラ属クヌギ節 <i>Quercus sect Aegilops</i>
60	Ⅲ区	SR03	1529	コナラ属クヌギ節 <i>Quercus sect Aegilops</i>
61	Ⅲ区	SR03	1530	コナラ属コナラ節 <i>Quercus sect. Prinus</i>
62	Ⅲ区	SR03	1526	ハコヤナギ属 <i>Populus</i>
63	Ⅲ区	SR03	1528	シイ属 <i>Castanopsis</i>
64	Ⅲ区	SR03		コナラ属アカガシ亞属 <i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>
65	Ⅲ区	SH08		ブナ科 <i>Fagaceae</i>
66	Ⅲ区	SH08		マツ属 <i>Pinus</i>
67	Ⅲ区	SH08		コナラ属クヌギ節 <i>Quercus sect Aegilops</i>
68	Ⅲ区	SH08		コナラ属クヌギ節 <i>Quercus sect Aegilops</i>
69	Ⅲ区	SH08		コナラ属クヌギ節 <i>Quercus sect Aegilops</i>
70	Ⅲ区	SH07		広葉樹 <i>broad-leaved tree</i>
71	Ⅲ区	SH07		コナラ属アカガシ亞属 <i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>
72	Ⅲ区	SH07		モミ属 <i>Abies</i>
73	Ⅲ区	SH07		ブナ科 <i>Fagaceae</i>
74	Ⅲ区	SH07		針葉樹 <i>conifer</i>
75	Ⅲ区	SH07		ツブラジイ <i>Castanopsis cuspidata Schottky</i>
76	Ⅲ区	SH07		マツ属 <i>Pinus</i>
77	V区	SH01 繩及びカヤ		ヒノキ <i>Chamaecyparis obtusa Endl</i>
78	V区	SH01		ヒノキ属 <i>Chamaecyparis</i>
79	V区	SH01		コナラ属クヌギ節 <i>Quercus sect Aegilops</i>
80	V区	SH01		ヒノキ <i>Chamaecyparis obtusa Endl</i>
103	V区	SH01-SP33		ヤナギ属 <i>Salix</i>
104	V区	SH01-SP34	2711	ヤナギ属 <i>Salix</i>
105	V区	SH01-SP30	2712	ヤナギ属 <i>Salix</i>
106	IV区	SB01-SP41	3585	ムクロジ <i>Sapindus mukorossi Gaerth.</i>
107	IV区	SB01-SP49	3583	ムクロジ <i>Sapindus mukorossi Gaerth.</i>
108	IV区	SB01-SP50	3584	ムクロジ <i>Sapindus mukorossi Gaerth.</i>
109	IV区	SB01-SP51	3586	ムクロジ <i>Sapindus mukorossi Gaerth.</i>
110	IV区	SB01-SP43		ムクロジ <i>Sapindus mukorossi Gaerth.</i>
111	IV区	SB01-SP44	3587	ムクロジ <i>Sapindus mukorossi Gaerth.</i>
112	IV区	SP364		クリ <i>Castanea crenata Sieb. et Zucc.</i>
113	IV区	SP367	3666	ヒノキ <i>Chamaecyparis obtusa Endl</i>
114	Ⅲ区	SR03	853	タブノキ <i>Machilus thunbergii Sieb et Zucc</i>
115	Ⅲ区	SR03	938	モミ属 <i>Abies</i>
116	Ⅲ区	SR03	1522	ヒサカキ属 <i>Eurya</i>
117	Ⅲ区	SR03	1523	コナラ属アカガシ亞属 <i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>
118	Ⅲ区	SR03	1525	環孔材 <i>ring-porous wood</i>
94	Ⅲ区	SR03		コナラ属アカガシ亞属 <i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i> 樹皮 <i>bark</i>

第9表 香川県、原間遺跡における植物珪酸体分析結果  
検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群	学名	地点・試料 IV-③区 SH04
イネ科	Gramineae (Grasses)	
ヒエ属型	Echinochloa type	14
キビ族型	Paniceae type	27
スキ属型	Miscanthus type	34
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	7
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)	
メダケ節型	Pleioblastus sect. Medake	41
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	468
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Miyakozasa	34
未分類等	Others	47
その他のイネ科	Others	
表皮毛起源	Husk hair origin	14
棒状珪酸体	Rod-shaped	129
未分類等	Others	231
樹木起源	ArboREAL	
ブナ科(シイ属)	Castanopsis	27
クスノキ科	Lauraceae	7
その他	Others	14
植物珪酸体総数	Total	1092

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m<sup>2</sup>·cm)

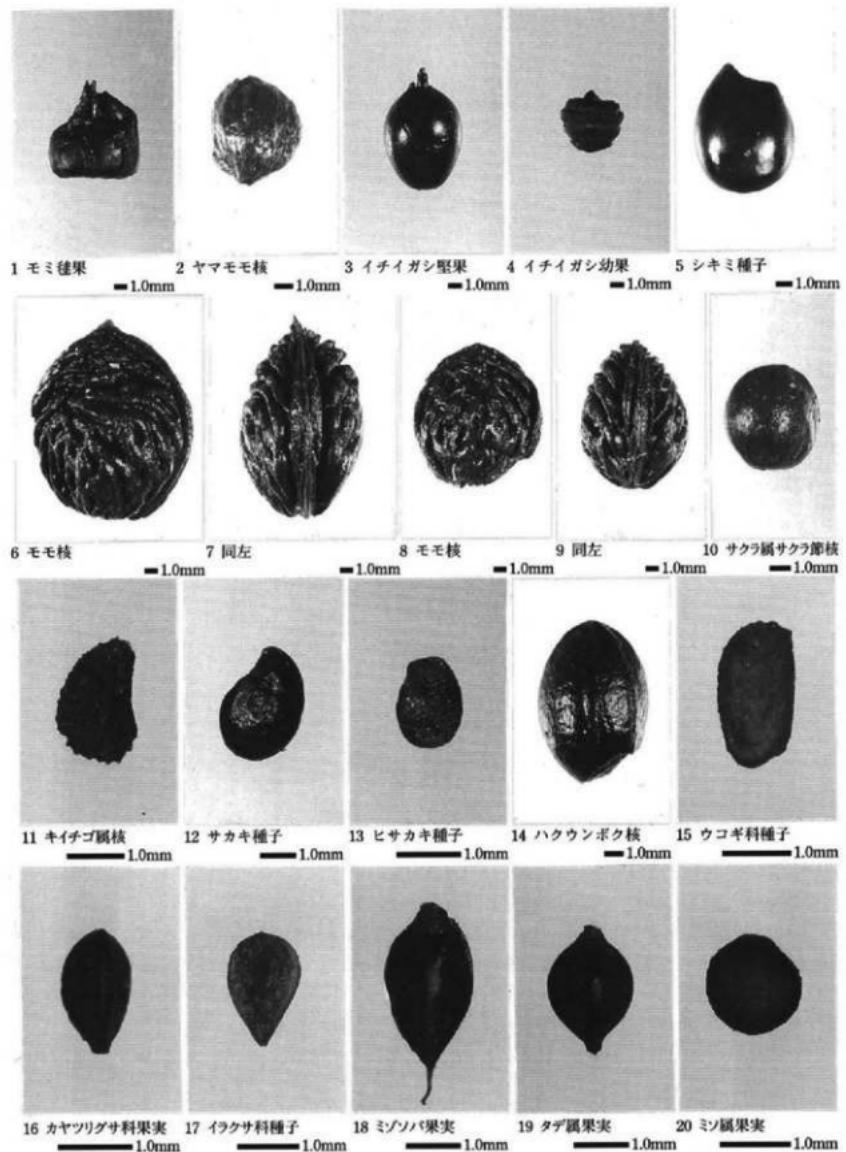
ヒエ属型	Echinochloa type	1.14
スキ属型	Miscanthus type	0.42
メダケ節型	Pleioblastus sect. Medake	0.47
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	2.25
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Miyakozasa	0.10

タケ亜科の比率 (%)

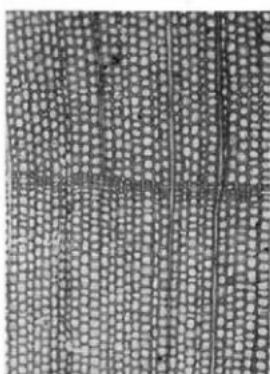
メダケ節型	Pleioblastus sect. Medake	17
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	80
クマザサ属型	Sasa (except Miyakozasa)	
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Miyakozasa	4



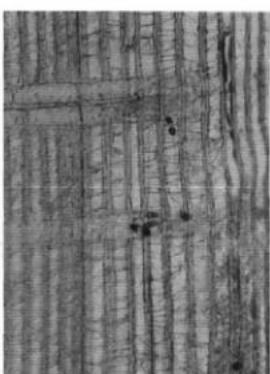
第454図 香川県、原間遺跡IV-③区SH04の植物珪酸体分析結果



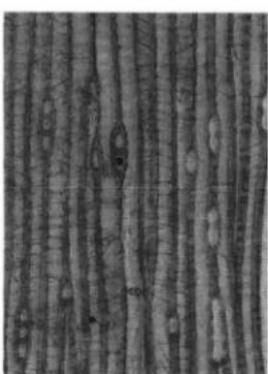
第455図 原間遺跡の種実



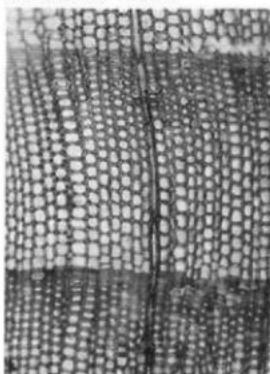
横断面 : 0.2mm  
① 試料番号56 イヌガヤ



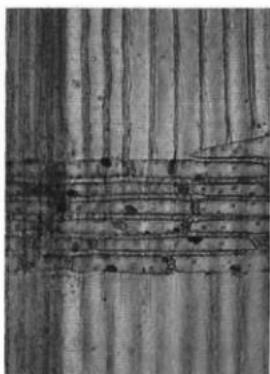
放射断面 : 0.1mm



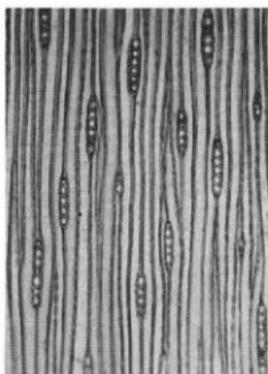
接線断面 : 0.1mm



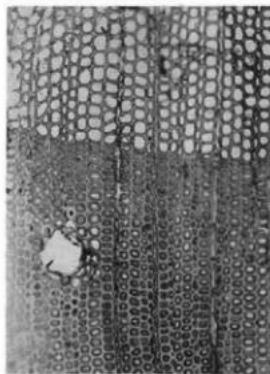
横断面 : 0.2mm  
② 試料番号53 モミ属



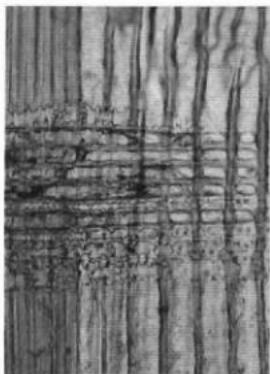
放射断面 : 0.1mm



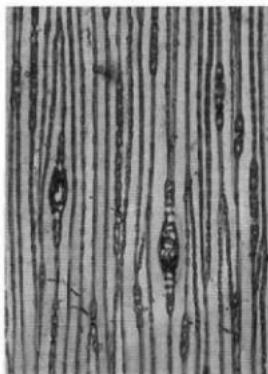
接線断面 : 0.2mm



横断面 : 0.2mm  
③ 試料番号25 マツ属複雜管束属

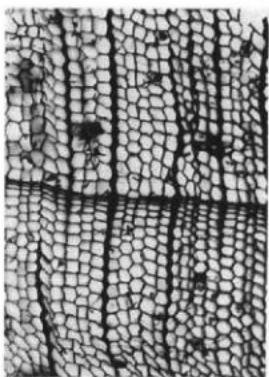


放射断面 : 0.1mm



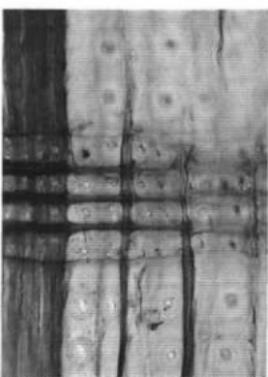
接線断面 : 0.2mm

第456図 原間遺跡の木材 I

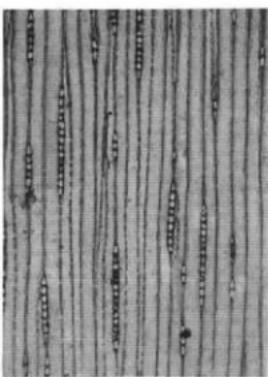


横断面 : 0.2mm

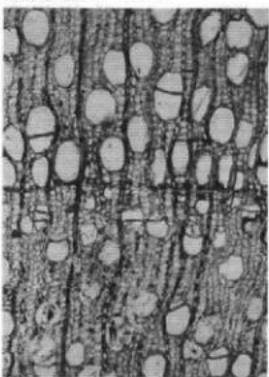
① 試料番号11 ヒノキ



放射断面 : 0.05mm

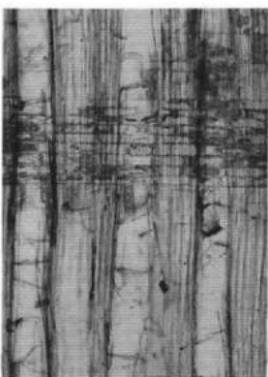


接線断面 : 0.2mm

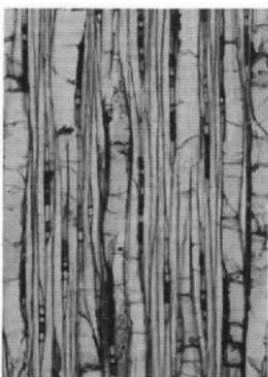


横断面 : 0.2mm

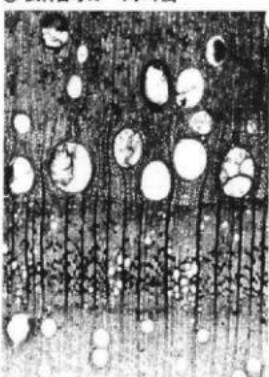
② 試料番号13 ヤナギ属



放射断面 : 0.2mm

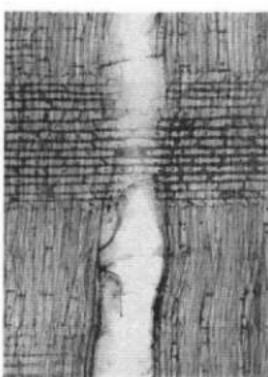


接線断面 : 0.2mm

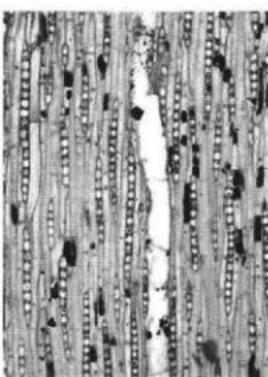


横断面 : 0.5mm

③ 試料番号112 クリ

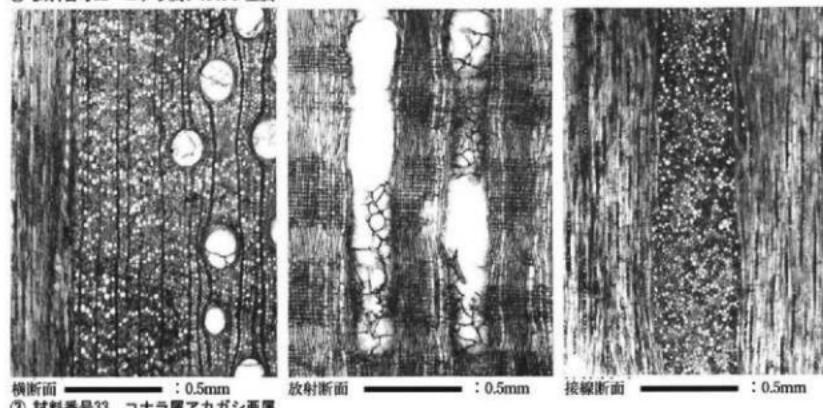
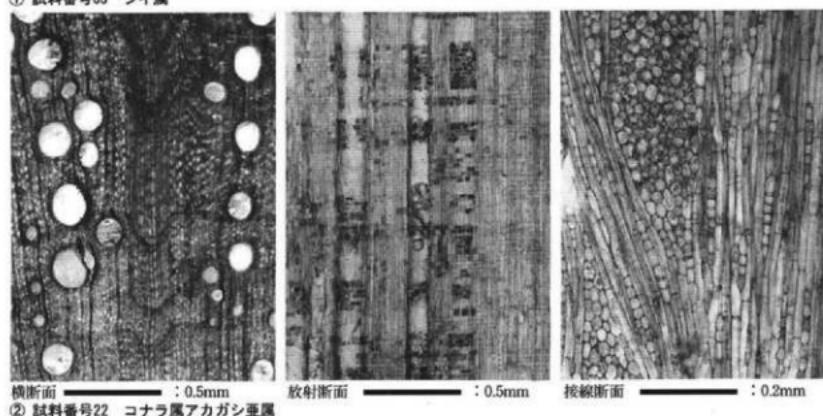
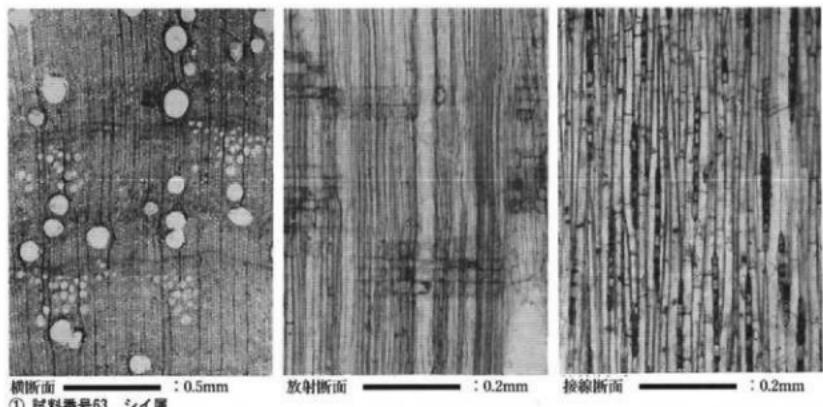


放射断面 : 0.2mm

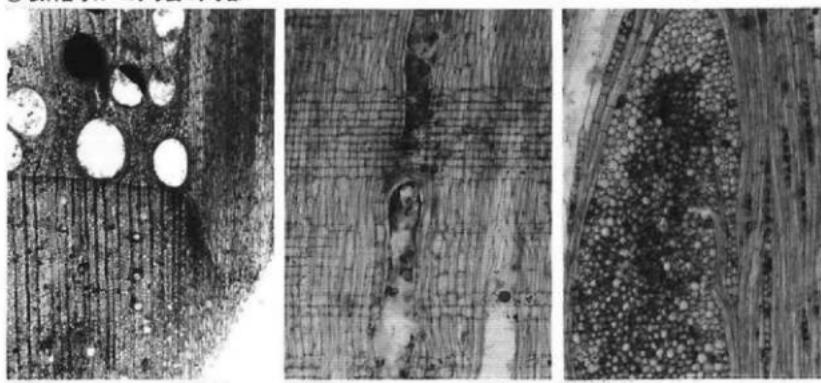
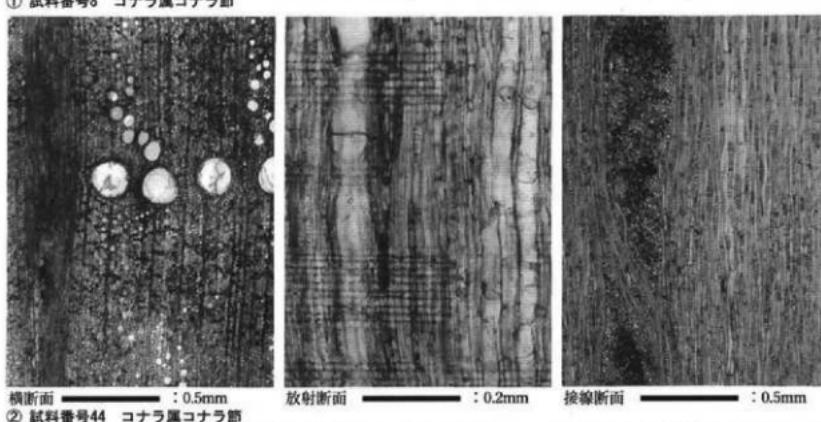
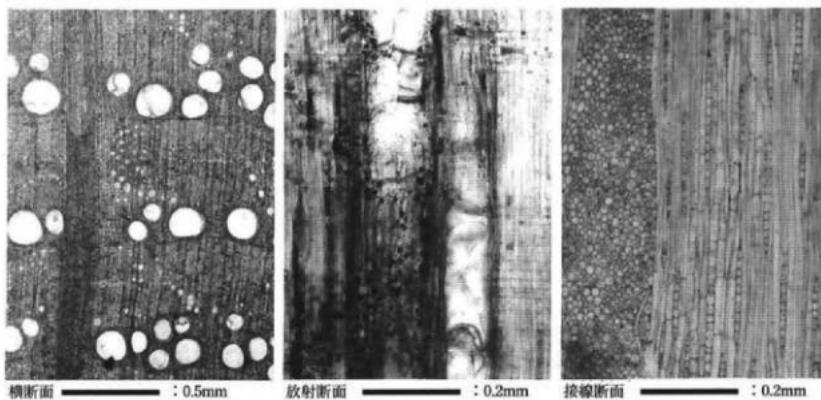


接線断面 : 0.2mm

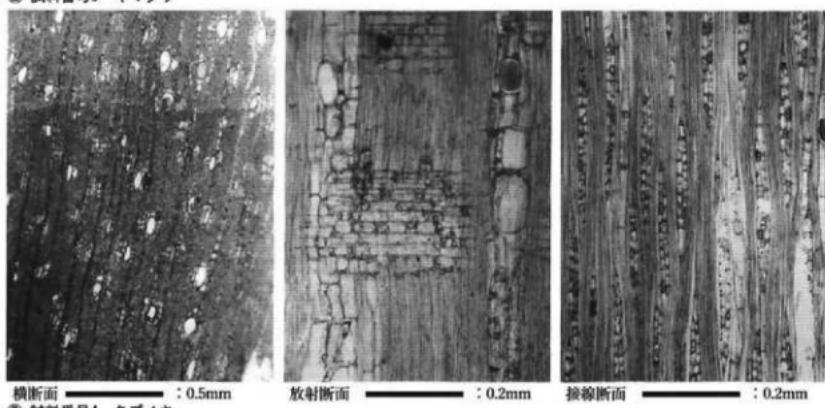
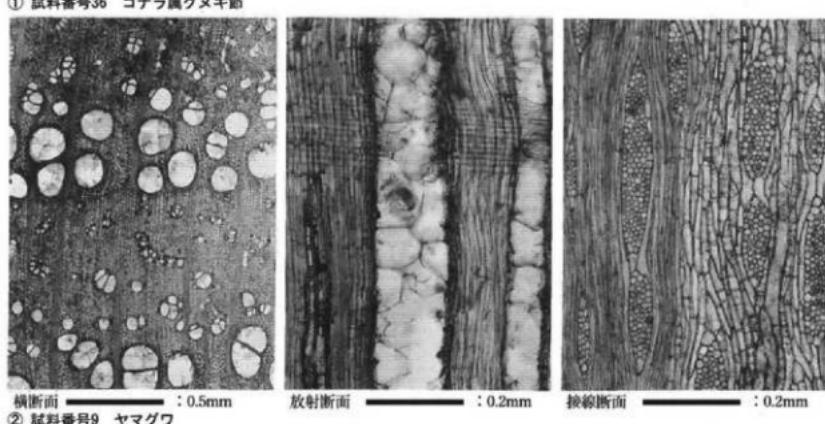
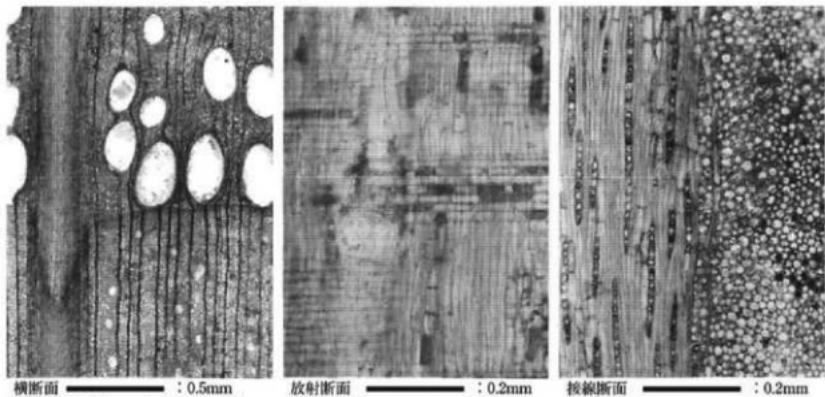
第457図 原間遺跡の木材 II



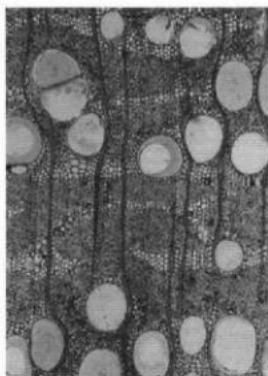
第458図 原間遺跡の木材III



第459図 原間遺跡の木材IV



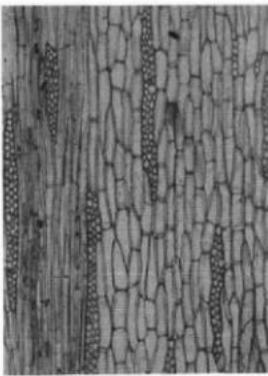
第460図 原間遺跡の木材V



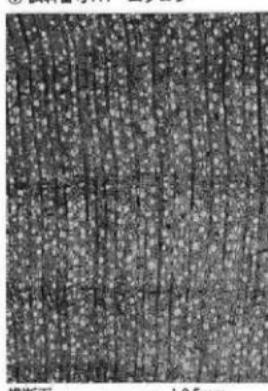
横断面 : 0.5mm  
① 試料番号111 ムクロジ



放射断面 : 0.5mm



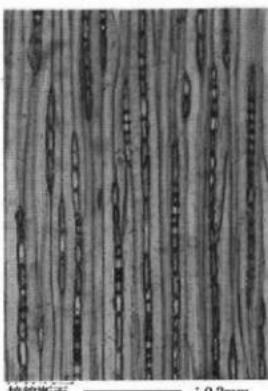
接線断面 : 0.2mm



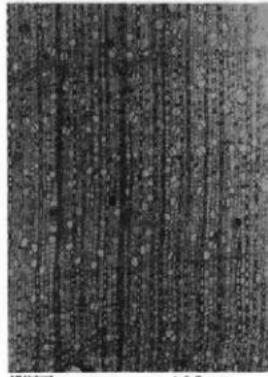
横断面 : 0.5mm  
② 試料番号48 サカキ



放射断面 : 0.2mm



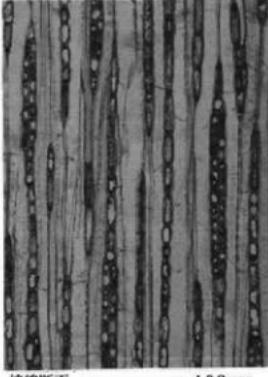
接線断面 : 0.2mm



横断面 : 0.5mm  
③ 試料番号3 ヒサカキ属

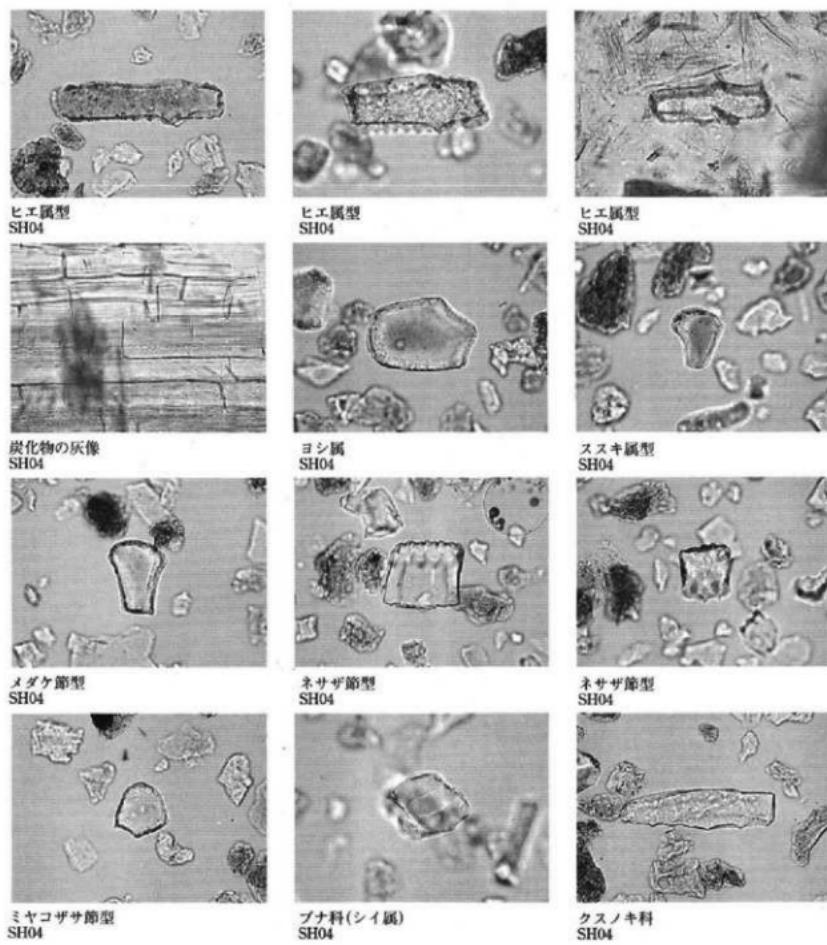


放射断面 : 0.1mm



接線断面 : 0.2mm

第461図 原間遺跡の木材VI



第462図 植物珪酸体の顕微鏡写真 ————— 50  $\mu\text{m}$

## 第4章まとめ

### 1. 旧地形の復元について

平成8年度から平成11年度にかけて実施された文化行政課による試掘トレンチ調査、香川県埋蔵文化財調査センターによる予備調査、さらに大川広域による圃場整備事業に伴う試掘トレンチ調査の結果、原間遺跡が所在する地域の旧地形が判明した（第463図）。

旧地形は微高地・低湿地・旧流路の3つに分類できる。

微高地は2ヶ所で確認し、現在の古川西側で確認した微高地を微高地aとし、東側で確認した微高地を微高地bとした。

この微高地aは調査区南部において平野部西側にある西丘陵の東方向に僅かに張り出す丘陵東裾から微高地は延び、占川手前で北方向にほぼ90°屈曲し、延びる。平成9年度に発掘調査が実施された県道原間遺跡になるとほとんどその痕跡が確認できることから北方向に延びるに従い徐々に微高地部分の高低差が無くなり、消滅するようである。

一方微高地bは平野部東側にある丘陵の北東裾に沿って旧古川の支流と考えられる旧流路が確認されているために独立した微高地に見えるが、当初は東丘陵の北裾から延びる微高地と考えられる。この微高地でも北部では高低差が無く、徐々に消滅する。

微高地では耕作土・床土下位に暗灰色砂混り粘質土・茶灰色砂質土層と砂粒を多量に含む洪水砂が厚さ5~20cm程度で全域に確認でき、この洪水砂層下の淡白黄茶色砂混り粘質土上で、濃密な弥生時代後期の遺構（堅穴住居、柱穴等）を検出した。

低湿地は2ヶ所で確認し、微高地aと西丘陵に挟まれた部分で確認した低湿地を低湿地aとし、微高地bの北側から現原間池の西部にかけて確認した低湿地を低湿地bとした。

低湿地aは西丘陵の東側にある僅かな谷部分から東に延びる開削低地と微高地aから北側に延びる開削低地が合流し、そこからの自然湧水によって形成されたもので、その範囲は推定南北約273m、東西約120m、面積32,760m<sup>2</sup>を測る。この低地部には暗灰色粘土層、灰黒色粘土層が水平堆積し、弥生時代遺構面から約20~50cm窪む低地が確認できる。この水平堆積土層にはほとんど遺物が包含されておらず、包含層下で遺構を検出していないので水田の可能性が指摘できるが、畦畔等は確認できなかった。

一方低湿地bは微高地bと北側にある丘陵と現原間池に挟まれた部分で確認し、旧古川（旧流路）からの自然湧水によって形成されたものである。

旧流路は2条確認し、現在の古川に重複するように確認した旧流路を旧流路bとし、東丘陵北裾部で確認した旧流路を旧流路cとした。

この旧流路bは現古川に沿って確認し、蛇行を繰り返し、北上する。発掘調査で確認したところでは古代~近世にかけての遺物が出土している。東丘陵北裾では弥生時代まで遡れる旧流路（SRIV02）を検出していることからこの平野においては最も古くからある旧流路と考えられる。

一方旧流路cは東丘陵の先端西付近で旧流路bから派生する流路と考えられ、東丘陵先端部を北東方向に流路を取り、現在の原間池、そして渓川方向に延びる。原間池西側では低湿地bと重複している。

この旧流路b・cとも幅の広い流路で、かなり蛇行しており、堆積土は主としてシルトあるいは砂礫層で構成されている。このことから旧古川はかなりの頻度で氾濫し、その洪水による堆積層であることが解る。旧流路cでは一部粘質土あるいはシルト層が堆積した幅の狭い流路も確認され、この流路



第463図 原間遺跡遺構立地分類図

から延びる溝を検出していることから安定期にはこの流路を取水源として水を取り入れていたことが解る。

また平野部分の地形復元と同時に、後世に削平された旧地形（特に丘陵）の復元も行った。

まず西丘陵から東に延びる丘陵先端部（第II調査区）では予備調査や地形復元の結果、丘陵先端部が北と南に分岐し、ほぼ中央が窪むような地形となっていたことが解った。一方東丘陵先端部（第VII調査区先端）は予備調査や地形復元の結果、土砂採取される前の地形は丘陵先端部が北方向と、北西方向も延びていることを確認した。その結果東丘陵の先端は3方向に分岐し、僅かに延びることが確認でき、第IV調査区北部は西に延びる丘陵と北に延びる丘陵に挟まれた窪み部分に位置し、第VI調査区は北に延びる丘陵と東に延びる丘陵に挟まれた窪み部分に位置することが判明した。

以上の結果を基にこの原間遺跡で調査範囲とした調査区をみると第I調査区が西丘陵上、第II調査区が西丘陵先端部（先端部に挟まれたやや窪んだ部分）、第III調査区が微高地a、第IV調査区が東丘陵西裾部（うち北部は東丘陵先端部に挟まれたやや窪んだ部分）、第V調査区が微高地b、第VI調査区が東丘陵先端部に挟まれたやや窪んだ部分、第VII調査区が東丘陵上にそれぞれ位置していることが解る（第版1図）。

## 2. 遺構の変遷について

原間遺跡の調査対象範囲内で検出した遺構は弥生時代から近世までの時期幅があるが、詳細にみると弥生時代から織続的に連綿と営まれておらず、偏った時期の遺構を検出した。一方出土遺物でみると縄文時代後期・弥生時代中期の遺物も出土しているが、この時期の遺構は検出しておらず、今後周辺で確認される可能性がある。

検出した遺構を時期ごとにみるとまず弥生時代後期の遺構がほとんどの調査区で確認でき、次に遺構を確認した時期は弥生時代後期から数百年の空白期をおいて古代（7～8世紀）、そしてさらに空白期をおいて古代（11～12世紀）、次に中世・近世の遺構を部分的に検出しているのみである。

これらの遺構を検出した調査区をみると弥生時代の遺構は調査区ほぼ全域に展開しているが、古代（7～8世紀）以降は丘陵裾部を中心に展開するという状況が伺われる。

この状況は原間遺跡が所在する大内町川東原間地区の集落の変遷を知る貴重な資料となるものである。

以下それぞれの時期ごとに遺構の状況を簡単にまとめたい。

### ①弥生時代

弥生時代の遺構は原間遺跡第I～VII調査区までの全ての調査区で検出した。検出した遺構は竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土壤墓跡、土坑跡、井戸跡、柱穴、溝、自然河川などである。

弥生時代の遺構は第III・IV・V調査区で特に遺構密集度が高く、なかでも第III調査区では3棟の張り出し付の円形竪穴住居を近接して検出したことから、第III調査区小結でこの竪穴住居を基準として遺構を遺構I期からVI期に細分し、その変遷を提示した。この内竪穴住居等の弥生時代の遺構は遺構IIからV期にあり、この各期を基準にそれぞれの調査区の遺構の変遷を見たい。

遺構II期には第III・IV調査区で遺構を検出している。

第III調査区では竪穴住居2棟を、第IV調査区では竪穴住居4棟を検出している。立地でみると微高地上と丘陵裾部というように偏差があり、平面形態にも微高地上では円形主体であるが、丘陵裾部で

は方形主体と偏差が確認できる。

遺構Ⅲ期には第Ⅰ調査区、第Ⅲ調査区、第Ⅳ調査区、第Ⅴ調査区、第Ⅶ調査区で遺構を検出している。遺構の広がりも拡大し、遺構数も最大になる時期である。第Ⅰ調査区、第Ⅶ調査区は丘陵上で、この堅穴住居は防御的な性格を有していたと考えられ、平野部集落とは若干性格を異にするため同一では扱えない。第Ⅲ～V調査区では、第Ⅲ・IV調査区が前時期から継続して営まれ、第V調査区では新たに集落が拡大し、居住域として機能する時期である。第Ⅱ・VI調査区で検出した遺構は共伴遺物がほとんどないために時期決定を行えなかったが、包含層出土遺物や堅穴住居の形態から当概期に属するものと考えたい。平面形態では平野部において徐々に方形の堅穴住居が増加する。

遺構Ⅳ期には第Ⅲ調査区、第Ⅳ調査区、第Ⅶ調査区で遺構を検出している。前時期で最大に集落は拡大するが、この時期になると再び遺構Ⅲ期の集落範囲とほぼ同じ様相になるものと考えられる。

遺構Ⅴ期には第Ⅲ調査区のみで遺構を検出している。

堅穴住居は1棟のみで、集落が縮小する時期である。

時期は遺構Ⅱ・Ⅲ期が下川津Ⅰ～Ⅱ式併行期と考えられ、遺構Ⅳ期が下川津Ⅲ式併行期、遺構Ⅴ期が下川津Ⅳ式併行期と考えられる。

## ②古代（7～12世紀）

古代の遺構は第Ⅱ・Ⅳ～VI調査区で検出した。遺構は堅穴住居跡、掘立柱建物跡を中心としており、土坑、自然流路は第Ⅳ・V調査区で僅かに検出しているのみである。弥生時代後期後半から末までの間に於いて維続的に集落を検出した第Ⅲ調査区（微高地a）では古代以降の遺構が検出されておらず、古川の氾濫の影響を受けにくい場所に集落が移動した結果ではないかと考える。つまり弥生時代以降古川の氾濫が頻繁にしかも激しくなったために平野部を避け、丘陵裾部という安定した場所に集落が営まれたものであろう。

これらの遺構は住居内出土遺物、掘立柱建物構成柱穴出土遺物から概ね下記の4つ（古代Ⅰ～Ⅳ期）に細分できる。

以下それぞれの時期ごとに説明する。

### 古代Ⅰ期（7世紀前半）

7世紀前半の遺構は第VI調査区のみで検出している。検出した遺構は掘立柱建物で、地形（丘陵裾部）に制約を受けた主軸方向を取っている。

第VI調査区小結の部分で述べたが、現在「四国の道」とされている白鳥町樋端の渓川に架かる神越橋から東丘陵の第VII調査区北東裾部を通り、第V・VI調査区間から大内町川東原間に抜ける古道は古代における官道（南海道）と考えられている。しかしその根拠は「神越橋（かんごしばし）」・第Ⅲ調査区東側から第V調査区西側にかけての地域に残る「垣の内（かきのうち）」という地名しかなく、確定するまでには到っていないのが現状である。今回の発掘調査の結果、大内町の平野に面する部分ではなく、しかも丘陵先端部に挟まれた狭い部分、また前方は北側の丘陵で遮断という建物立地としては悪い部分で7世紀前半の掘立柱建物を確認した。このような場所に掘立柱建物があるということは、ここが7世紀前半段階で重要な位置を占めていたことを裏付けるもので、即断的に官道の存在を肯定するものではないが、かなり有力な証拠と考える。また後期古墳～6世紀後半から7世紀前半にかけてが、この推定官道を中心として造営されていることは注目でき、官道説の傍証となるものである。

## 古代II期（7世紀中葉）

7世紀中葉の遺構は第IV・VI調査区で検出している。検出した遺構は掘立柱建物が中心である。掘立柱建物は南北棟が多く、第IV調査区 SBIV03・04は「L」字配置を取り、主軸方向が規格性を持ち、配置されている。

第VI調査区では地形（丘陵裾部）に制約を受けた主軸方向を取っているが、第IV調査区では南北主軸がほぼ真北を取っている。これは後述する地形分類の丘陵裾部aと丘陵裾部bという立地条件の違いと考えられ、狭い部分に建てられた掘立柱建物は地形の制約を受け、やや広い部分では南北主軸指向の規制を受けていると考えられる。

## 古代III期（7世紀後半～8世紀前半）

7世紀後半～8世紀前半の遺構は第II・IV・V・VI調査区と広範囲に遺構が広がる時期である。検出した遺構は堅穴住居、掘立柱建物で、堅穴住居は基本的に北側に作り付けの竈を持ち、10～20 m<sup>2</sup>とやや小型のものが多い。掘立柱建物は南北棟が多く、第V調査区 SBV05は総柱の建物で、原間遺跡では唯一のものである。微高地bが当概期の中心部分であった可能性を考えられる。

建物主軸は第V調査区という微高地部分（平野部分）では南北主軸をほぼ真北に向ける主軸規制が依然認められるが、丘陵裾部では地形に制約を受けて建てられている。

以上のように古代の遺構は7世紀前半から8世紀前半にかけて継続性が認められるが、8世紀中葉以降の遺構を検出していない。包含層出土遺物についてみても8世紀中葉以降の遺物はほとんど出土しておらず、明らかに集落の移動あるいは掘立柱建物造営主体の移動、造営場所選定意義の喪失等が考えられる。

現在大内町内で古墳時代後期（6世紀後半）の集落を検出している遺跡は川東住屋にある住屋遺跡と水主にある金毘羅山遺跡で、原間遺跡では検出していない。このように7世紀前半になり突如集落が出現するのはこの時期に原間遺跡周辺が重要な位置を占めるようになったためと考えられる。

その一つはやはり現在残る古道が7世紀前半段階に官道として整備された結果と考えられる。そして8世紀中葉以降は官道として「南海道」が整備され、主要な幹線道路が南海道になったため集落の移動が起り、原間遺跡での遺構の廃絶となったものと考える。

またこの時期の遺構の立地をみると第V調査区を除くと全て丘陵裾部において検出している。この限定された場所での遺構の検出は、遺構検出面上層に洪水砂層が堆積していたことと関係があり、この原間地区はかなり古川の洪水の影響を受けていたと考えられ、それを避けるために丘陵先端部に挟まれた部分を中心に洪水の影響を受けにくい安定した場所が選ばれた結果と考えられる。

## 古代IV期（11～12世紀）

8世紀前半以降、次に遺構が出現する時期は11～12世紀である。

11～12世紀の遺構は第V調査区でのみ検出した。検出した遺構は掘立柱建物・溝・自然流路で、特に掘立柱建物は第V調査区（微高地b）でも安定した南部分で検出し、ここでは古代III期の遺構を検出している。溝は現古川から分岐し、原間池から渓川方向に流路を取る自然流路から直線的に流れ出す。

これら掘立柱建物・溝の南北主軸及び流路方向は真北より15～20°東偏し、現在大内町の平野で確認できる条里型地割の南北の主軸、7°前後東偏よりさらに東偏する。掘立柱建物の時期は同時期と考えられ、溝は SDV43・45・53が併走するが、時期が11～12世紀と幅があり、SDV53→SDV45→SDV43と変遷する。

現在大内町に確認できる条里型地割の方向を取る遺構は第V調査区部分においては確認できない。ちょうどこの部分は平野の最奥部にあり、現在調査区付近に残る畦畔の乱れをみるとかなり古川の氾濫の痕跡が認められることから、大内町内ではあまり安定した部分ではなかったように思われる。しかし第V調査区で検出したこの11～12世紀段階の遺構では現在の条里型地割よりやや東偏するもののSDV43・45・53は概ね条里型地割を東に延伸した境界にあたり、当時期になって平野の最奥部である第V調査区まで条里型地割が延伸されたことを伺わせる資料である。この微妙なズレは条里型地割の規制の形骸化、古川という流路を越えて延伸する段階でのズレによるものと考えられる。

#### ③中世

中世の遺構は第V・VI調査区で検出した。第VI調査区で掘立柱建物を、第V調査区で自然流路を検出した。第V調査区で検出した自然流路は古代から中・近世にかけて継続して機能していたものである。掘立柱建物は2棟のみで、原間遺跡においては中世の集落としては確認していない。

#### ④近世

近世の遺構は第II・V調査区で検出した。主としては第II調査区で検出しており、遺構は掘立柱建物跡・溝・砂糖竈である。溝は近接して柱穴等を確認していないが、屋敷の区画溝あるいは雨落ち溝と考えられ、その区画面積は南北60m、東西約28m、面積1680m<sup>2</sup>（約50坪）を測る。この溝によって区画された周囲には覆い屋を伴う砂糖竈があり、主屋に対する作業小屋的な関係が伺われる。

この近世の遺構を検出した部分は調査時まで宅地が存在し、昭和初期まで砂糖生産を行っていたことから、今回の調査成果が近世以降継続的な東讃における砂糖業の盛行や砂糖竈の変遷が伺える資料である。

以上遺構の変遷から原間遺跡集落がどのように変遷したかが解る。

まず弥生時代後期には西と東の丘陵に挟まれ、谷筋からの川水・湧水等を利用し、大内町内では拠点的な集落が形成されるが、後期以降集落は営まれていない。しかし今回の調査区南側に位置する平成13年度県道原間遺跡において古墳時代初頭・古墳時代中期の遺構を検出していることから、調査区外ではあるが原間遺跡としては継続的に集落が古墳時代中期まで営まれていたことになる。古墳時代後期になると集落は大内町川東住屋に所在する住屋遺跡に移動するようで、次に集落が営まれるのは古代（7～8世紀）になってからである。この時期は前述したようにこの付近に古代の幹道があったものと推定されていることから、この官道沿いに集落が営まれていたものと考える。しかし古代の幹道（南海道）が大内町の平野部を東西に横切るように整備されたのに伴い集落の移動があったため、8世紀中葉以降の遺構が確認できないのはそのためである。この時期以降に限ったわけではないが、遺構面に堆積する洪水砂層でも解るようにかなり古川の洪水が頻繁にあったものと考えられ、このような不安定な場所でもあり原間地区は水田として機能していたものと考えられる。

### 3. 弥生時代集落について

弥生時代の遺構は原間遺跡第I～VII調査区までの全ての調査区で検出した。ここでは集落の立地場所や集落の構造について考えてみたい。

#### (1) 弥生集落の立地（第10表）

それぞれの遺構は検出した場所により①平野部、②丘陵上、③丘陵裾部の3つに大別できる。

## ①平野部

平野部に分類できるのは第Ⅲ・Ⅴ調査区で、弥生時代の遺構を密に検出した。原間遺跡の平野部は微地形復元の結果、微高地と低湿地、旧流路の3つに地形分類ができ、遺構を検出した微高地は第9図の微高地aと微高地bで、微高地aは第Ⅲ調査区に、微高地bは第Ⅴ調査区に当たる。一方低湿地部分は生産域と考えられるが、発掘調査対象から除外している。

第Ⅲ調査区（微高地a）では堅穴住居跡、掘立柱建物跡、土壙墓跡、土坑跡、井戸跡といった居住域を構成する遺構を検出した。これらの遺構は直径約60m内に遺構は集中し、遺構の切り合い・出土遺物によって4時期に分けられ、その変遷を確認した。

その変遷の結果、それぞれの時期に堅穴住居跡2～3棟、掘立柱建物跡1棟、土壙墓2～3基が確認でき、これらが1集団を構成していることが判明した。所謂この1集団が原間遺跡集落を構成する最低の単位集団であることが伺える。

また第Ⅴ調査区でも第Ⅲ調査区と同様な状況であることが確認されており、この単位集団の構成を裏付ける資料となっている。

原間遺跡集落の中心部分は第Ⅲ調査区から南の高所（微高地aの基部）にあると考えられ、この状況は平成11年及び平成13年度に実施された大内白鳥インター線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の原間遺跡（県道原間遺跡）で、弥生時代の遺構を多数検出していることからも解る。この南の高所（微高地aの基部）を中心として南限は現古川（Ⅲ流路推定地）と考えられ、北限は平成9年度に発掘調査が実施された県道原間遺跡で明確な遺構を検出していないことにより原間集落は南北約400mの範囲内に収まることが解る。つまり原間集落は微高地aの基部を中心に北方向に延びる微高地上と微高地b上に集落は展開し、微高地aは基部で東西幅約190m、東西幅50～90m、南北約400mの範囲で、微高地bは東西幅約80m、南北幅約140mの範囲を測る。

また集落の存続時期は調査結果から弥生時代後期後半から出現し、後期終末～古墳時代中期まで継続して営まれていることが解っている。この状況は第Ⅲ調査区の時期幅と概ね合致する。この調査区を基準として横断道原間遺跡の変遷をみると第Ⅴ調査区はここで検出した遺構は単時期で、概ね第Ⅲ調査区で設定した遺構Ⅱ・Ⅲ期に当たり、この時期に第Ⅴ調査区まで集落が拡大したことが解る。この遺構Ⅱ・Ⅲ期をピークとして原間遺跡の集落は徐々に縮小し、弥生時代後期終末～古墳時代初頭に消滅することが解る。

つまり平成13年度に調査が行われた部分、原間地区の最高所に中心集落があり、そこから北に長く延びる微高地を中心に集落は拡大、縮小を繰り返し、南北400m、東西140～190mの範囲の中で原間遺跡の集落は成り立っているものと考えられる。

## ②丘陵上

第Ⅰ・Ⅶ調査区で弥生時代の遺構を検出した。この調査区は原間遺跡の平野部を東側と西側で挟むようにある東西の丘陵上に位置し、どちらも堅穴住居を主として検出している。これらの堅穴住居は丘陵先端部、稜線上で検出されており、平野部に比べると①検出した堅穴住居数が1～2棟と少ないと=検出棟数、②住居内からの出土遺物量の少なさ、③中央土坑内の炭化物層が無いものもあること=炭化物（炭）層の有無、④高所に立地し、大内町・白鳥町に広がる平野及び瀬戸内海まで一望できる=立地などの状況から恒常的な居住域として集落が営まれたものではなく、これらの堅穴住居は平野に営まれた居住域と何らかの有機的な繋がりの中で築造されたものと考えられ、おそらく防御施設としての見張り台的な機能を有していたと考えられる。

### ③丘陵裾部

第II・IV・VI調査区で弥生時代の遺構を検出した。この3つの調査区のなかでも丘陵部先端によつて挟まれ、やや窪んだ部分で、あまり自然の影響を受けにくい部分である第II・IV北部、VI調査区(③a)と丘陵裾部で自然の影響を受けやすい部分(あまり居住域としては適さない部分)である第IV調査区中央及び南部(③b)とに分けられる。

まず③a地区の第II・IV北部、VI調査区で検出した遺構は竪穴住居1~2棟、土器棺墓、土壙墓で、若干の時期差を想定できるが、第III調査区で確認した単位集団構成要素から掘立柱建物が欠落しているだけである。これは居住域が概ね幅50m、奥行20m以内と狭いという地形的な制約によるものかあるいは微高地上で検出した集落との何らかの要因による偏差の結果なのかは不明である。時期は出土遺物量が少ないため明確な時期は不明であるが、おそらく原間遺跡において集落が拡大する時期、遺構Ⅲ期に相当するものと考えている。

また③b地区とした第IV調査区中央部と南部で検出した遺構は竪穴住居26棟を確認しており、これらは全て平面形態が方形で、かなり切り合があることから、建て替えを繰り返していたと考えられる。時期は遺構II~IV期を中心としており、第III調査区とほぼ同時期に集落として機能していたと考えている。

#### (2)円形の竪穴住居と方形の竪穴住居

次に前項で地形分類により設定した平野部、丘陵部、丘陵裾部(a・b)のそれぞれの地区における竪穴住居の平面形態についてみてみたい。

第10表でみると平野部、丘陵部、丘陵裾部aでは平面形態が円形基調で、中でも平野部(微高地)では張り出し付の円形竪穴住居を中心に円形・方形の竪穴住居が混在している状況が解る。一方丘陵裾部bは竪穴住居の平面形態が方形のみで、明らかに他の3地区とは状況が異なる。

ここで丘陵部を除外し、それぞれの地形により居住域としての安定度をみると平野部と丘陵裾部aは前者が微高地上と安定しており、また丘陵裾部bは居住面積が狭いものかなり安定しているものと考えられる。しかし丘陵裾部bは古川の洪水等の影響をかなり受けける場所で、この地区に平面形態が方形の竪穴住居が集中していることが解る。

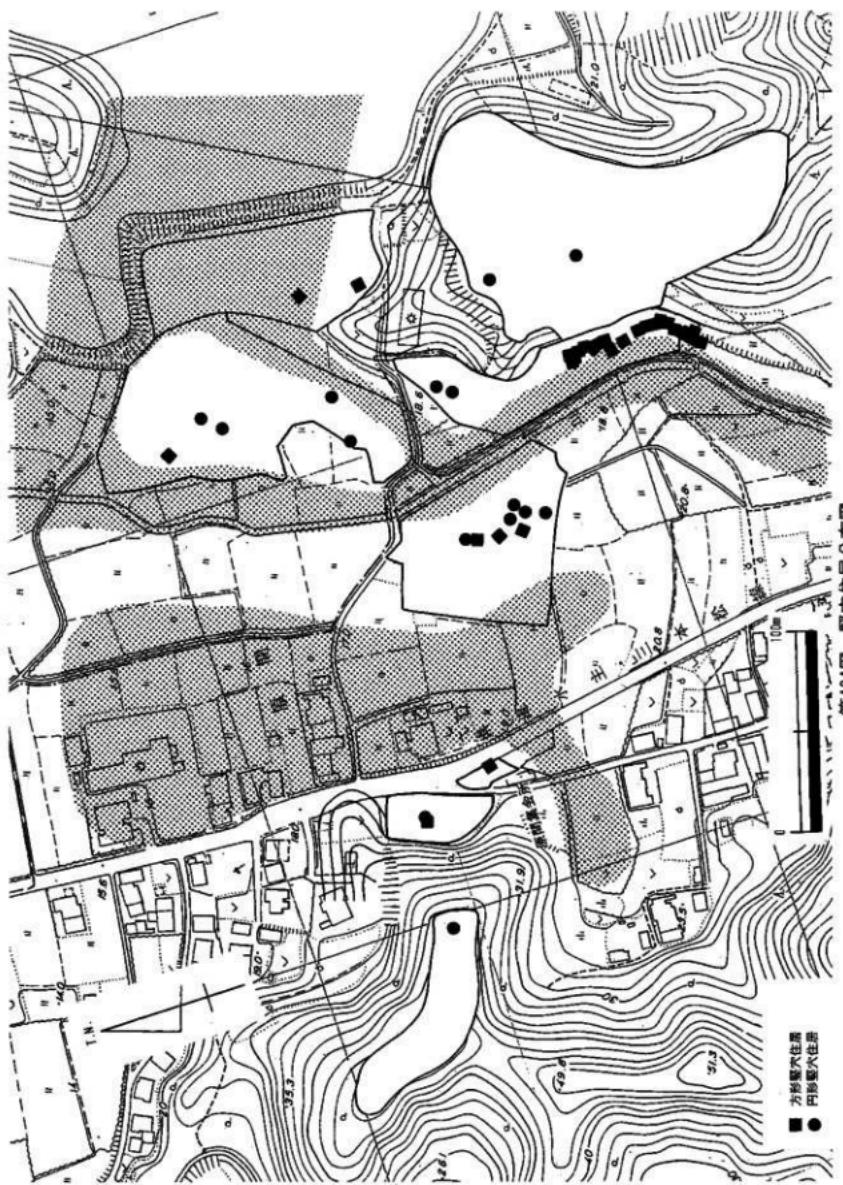
次に規模(床面積)についてみると丘陵裾部b(第IV調査区)は40m<sup>2</sup>以下の竪穴住居のみで、その他の地区では40m<sup>2</sup>以上の竪穴住居があるものの40m<sup>2</sup>以上の竪穴住居が存在することからも偏差が確認できる。

出土遺物についてみると円形の竪穴住居と方形の竪穴住居で土器の器種組成にあまり偏差が認められないが、円形の竪穴住居には有孔円盤・土玉・勾玉・鉄製品(鉄鎌)といった生産用具・祭祀用具・武器などが出土する傾向が強い。また下川津B類土器の出土頻度については丘陵裾部b地区の方形の住居に多いという傾向が認められる。

このような状況は違いは何に起因するのであろうか。

まず平野部、第III調査区での状況は方形の住居に床面積が45.1m<sup>2</sup>というやや大きめの竪穴住居があるが、出土遺物は円形の住居に比べると生産用具・祭祀用具などが出土しておらず、時期的にも円形住居に後出することが解っている。またSHIII-05~07の張り出し付の竪穴住居がこの調査区の家長であれば、それに従属あるいは下位に位置づけられる居住者ではないか。この状況は第V調査区でも確

第464圖 穩穴住居分布圖



第10表 壁穴住居一覧

第I調査区		平面形態	規模(m)	床面積(m <sup>2</sup> )	主柱穴	印	出土遺物	B類	時期	その他
Ⅰ-1		円形	直径 6.75	35.8	6	あり	壺・甕			
第II調査区		平面形態	規模(m)	床面積(m <sup>2</sup> )	主柱穴	印	出土遺物	B類	時期	その他
Ⅱ-1		円形	一边 4.5	推20.3	4		壺・甕・鉢・高坏	3.1%	Ⅱ期	
Ⅱ-2		円形	直径10.67	推89.4	6			12.8%	Ⅲ期	ベッド状遺構
Ⅱ-3		方形	一边 5.5	推30.1	推4					
第III調査区		平面形態	規模(m)	床面積(m <sup>2</sup> )	主柱穴	印	出土遺物	B類	時期	その他
Ⅲ-1		円形	直径 6.25	31.0	5	あり	壺・甕・鉢	3.1%	Ⅱ期	
Ⅲ-2		方形	一边 6.93×6.51	45.1	4	あり	壺・甕・鉢・高坏・ミニチュア土器	12.8%	Ⅲ期	
Ⅲ-3		方形	一边 4.0×4.47	19.0	4	あり	壺・甕・鉢・高坏	7.6%	Ⅳ期	
Ⅲ-4		方形	一边 3.4×2.9	9.9	なし	なし	壺・甕・鉢・高坏	0.5%	Ⅴ期	
Ⅲ-5		円形	直径 8.31	52.0	5	あり	壺・甕・鉢・高坏	1.5%	Ⅳ期	振り出し付
Ⅲ-6		円形	直径 6.9	37.0	4	あり	壺・甕・鉢・高坏	5.2%	Ⅳ期	振り出し付
Ⅲ-7		円形	直径 7.3	41.8	5	あり	壺・甕・鉢・高坏	2.3%	Ⅳ期	振り出し付・ベッド状遺構
Ⅲ-8		円形	直径 4.8	18.0	4	あり	鐵鋸車・土玉・石磨丁	2.3%	Ⅳ期	ベッド状遺構
Ⅲ-9		円形	直径 6.1	29.0						振り出し付
第IV調査区		平面形態	規模(m)	床面積(m <sup>2</sup> )	主柱穴	印	出土遺物	B類	時期	その他
Ⅳ-5		円形	直径 5.85	26.9	5					
Ⅳ-6		円形	直径 5.17	21.0	推6	あり				
Ⅳ-7		方形								
Ⅳ-8		方形								
Ⅳ-9		方形								
Ⅳ-10		方形								
Ⅳ-11		方形								
Ⅳ-12		方形								
Ⅳ-13		方形								
Ⅳ-14		方形	一边 5.64×4.76	26.8						
Ⅳ-15		方形								
Ⅳ-16		方形								
Ⅳ-17		方形	一边 4.1	推16.8						
Ⅳ-18		方形	一边 5.95	推35.4	4	あり	壺・甕・高坏・サヌカイト	9.8%	Ⅳ期	
Ⅳ-19		方形								
Ⅳ-20		方形	一边 6.40×6.05	38.7						
Ⅳ-21		方形	一边 5.0	推25.0						
Ⅳ-22		方形								
Ⅳ-23		方形								
Ⅳ-24		方形	一边 6.0	推36.0						
Ⅳ-25		方形	一边 4.9	推24.0						
Ⅳ-26		方形	一边 5.64	推31.8	4					
Ⅳ-27		方形								
Ⅳ-28		方形								
Ⅳ-29		方形	一边 4.7	推22.1						
Ⅳ-30		方形	一边 10.12	推102.4						
Ⅳ-31		方形	一边 4.7	推22.1			壺・甕	3.7%		
第V調査区		平面形態	規模(m)	床面積(m <sup>2</sup> )	主柱穴	印	出土遺物	B類	時期	その他
Ⅴ-1		方形	一边 5.62×3.80	21.4	2	あり	壺・甕・鉢・高坏・製台石	1.7%	Ⅱ期	
Ⅴ-2		円形	直径 5.85	26.9	4	あり?	壺・甕・鉢・高坏・石盆	12.0%	Ⅱ期	
Ⅴ-3		円形	直径 7.85	推78.5	8?	あり	壺・甕・鉢・石盤	5.1%	Ⅱ期	振り出し付・10上坑
Ⅴ-4		円形	直径 8.50	56.7	6	あり	壺・甕・鉢・高坏・陶器	16.4%	Ⅱ期	
Ⅴ-5		円形	直径 7.7	46.5	6	あり	壺・甕・鉢・高坏	5.5%	Ⅱ期	10上坑
第VI調査区		平面形態	規模(m)	床面積(m <sup>2</sup> )	主柱穴	印	出土遺物	B類	時期	その他
Ⅵ-1		方形			4	あり				
Ⅵ-2		方形			4					
第VII調査区		平面形態	規模(m)	床面積(m <sup>2</sup> )	主柱穴	印	出土遺物	B類	時期	その他
Ⅶ-1		円形	直径 7.0	38.5	6	あり	甕・高坏	13.8%	Ⅱ期	10上坑
Ⅶ-2		円形	直径 5.7	25.5	4	あり	甕・石盤・スクレイバ	24.4%	Ⅳ期	
Ⅶ-3							台石			

認でき、この平面形態の状況と同じように下川津B類土器の出土頻度も方形の堅穴住居に多いことが解っている。

一方丘陵裾部b、第IV調査区中央及び南部では方形の堅穴住居が主で、出土遺物及び立地にも偏差が認められ、しかも出土遺物に下川津B類土器が多量に出土している。

つまり立地及び出土遺物の偏差から円形の堅穴住居がこの原間地区（弥生時代原間集落）の伝統的な住居形態で、方形の堅穴住居は外来の住居形態の可能性が指摘できる。

### (3) 胎土分類からみた搬入土器の出土状況

ここでは原間遺跡から出土している多量の弥生土器を胎土から分類することにより搬入土器の出土状況を確認し、その出土状況から円形・方形堅穴住居出土B類土器の偏在性についても論及したい。

原間遺跡から出土した多量の遺物のほとんどは白色～黄茶色～褐茶色を呈し、石英・長石を多量に含む土器で構成されているが、これ以外に概ね10%前後の頻度で褐茶色を呈し、角閃石を含む土器、さらに僅かではあるが胎土中に結晶片岩等を含む土器など明らかに他地域からの搬入品と考えられる土器が出土している。これらの遺物は弥生時代後期後半を中心とする時期で、原間遺跡での土器の移動が解る資料である。

以下おおまかではあるがこれらの土器を分類した。また自然科学的な胎土分析については岡山理科大学白石純氏に依頼して、分析結果を本報告書に掲載しているので、合わせて参照されたい。

原間遺跡出土土器は肉眼観察で下記の5つに分類できる。ただしこの分類は肉眼観察のみの分類で、実体顕微鏡等についての詳細な分類ではない。

#### 分類I

壺・甕・鉢・高杯・製塙土器と通常の器種が揃っている。色調は白茶色～黄茶色～褐茶色系で、胎土に長石・石英を多量に含む。これらは原間遺跡出土土器の90%以上を占めるもので、原間集落の在地土器と考えても良い。観察表内の胎土分類では「A」としたものである。

#### 分類II

形態は長頸壺・細頸壺・甕・高杯・製塙土器である。色調は褐茶色系で、胎土に角閃石を多量に含む。遺構により出土量に1.3%～10%以上と差が認められるが、遺構内にはほとんど含まれ、形態及び色調、そして胎土に角閃石を含むことから高松平野（上天神遺跡周辺）で生産された所謂「下川津B類土器」と考えられる。観察表内の胎土分類では「B」・「B？」としたものである。

#### 分類III

形態的には壺のみで、口縁部がかなり長く延び、外面に凹線を施す所謂二重口縁壺である。色調は褐茶色系で、胎土に結晶片岩を含む。量的には遺跡全体で3点程度確認している。胎土に結晶片岩を少量含むことから徳島産の土器と考えられる。観察表内の胎土分類では「B'」としたものである。

#### 分類IV

形態的には甕のみで、松本氏が指摘するように頸部屈曲部に明瞭な稜線を持たないという口縁部形態と内面のヘラ削りが頸部屈曲部まで施されている特徴を持ち、土器表面はネットリした質感を持つもの、松本氏の砂粒6類に相当する。色調は明褐茶色系で、胎土に石英・長石を含み、土器表面が光沢を帯びる。量的には少なく、遺跡全体で3点程度確認している。原間遺跡では胎土

に結晶片岩を含まず、胎土的にはほとんど①と同じ様相を呈する。松本氏は岡清水遺跡の報告のなかで「胎土6類」として、徳島産の土器の可能性を指摘している。観察表内の胎土分類では「C」としたものである。

#### 分類V

形態的には壺のみで、口縁部端部が下方にのみ拡張するものである。色調は赤褐色系を呈し、胎土にはやや大きめの角閃石を含む。形態及び胎土中の角閃石の大きさから生駒西麓産の土器と考えられる。観察表内の胎土分類では「B'」としたものである。

この整理作業時に行った胎土による分類が、どの程度妥当性があるものかを自然科学的分析による胎土分析結果と比較・検討したい。

結果的には若干報告者の分類ミスもあるが、概ね白石氏の胎土分析と合致する結果が得られた。以下をそれぞれについてのまとめとしたい。

分類I（胎土A）としたものは胎土分析結果、第450図K-Ca散布図でみるとK量が1.5～3.0%の範囲に集中し、Ca量が1.5%以下であることから、かなり纏まっている。また第451図Rb-Sr散布図においてもRb量が100～200ppmの範囲に、Sr量が50～200ppm内に集中することからこれもかなり纏まっている。白石氏はそれぞれ他の土器とは明確に分布領域を異にしていることから、この纏まりを特定土器の胎土領域と考え、在地産土器分布域と位置付けている。このように自然科学的な分析結果が整理作業時の肉眼観察による分類を裏付けた。

分類II（胎土B）としたものは胎土分析結果、第452図K-Ca散布図でみるとK量が0.3～1.0%に、Ca量が3.0～5.0%の範囲に集中し、かなり纏まっている。また第453図Rb-Sr散布図においてもRb量が30～100ppmの範囲に、Sr量が100～300ppm内に集中することからこれもかなり纏まっている。胎土Aと対極の位置にある。白石氏はこの分布領域が上天神遺跡・空港跡地遺跡II・岡清水遺跡・中間西井坪遺跡IIで出土している下川津B類土器の分布領域と合致していることから下川津B類土器分布域と位置付けている。ここでも自然科学的な分析結果が整理作業時の肉眼観察による分類を裏付けた。

分類III（胎土B'）としたものは資料点数こそ少ないが、胎土分析結果、第452・453図とも前述した分類I・IIの領域外であることが確認できる。そのため再度胎土を観察した結果、そのなかにはやや大きめの角閃石を含む土器（資料番号134、報文番号3193 分類V）と結晶片岩を含む土器（資料番号115、報文番号2193 分類III）があることが判明した。この観察結果を基に分類IIIをみると分類Iと分類IIの分布領域間、分類IIの領域よりプロットされていることが解る。また分類IIとした資料番号103、報文番号1982にも胎土中に結晶片岩を含んでおり、資料番号134と近接することから僅か2点ではあるが今後資料点数が増加すれば領域設定が行えるものと考える。この土器は白石氏も指摘するように徳島産と考えられる。

分類IV（胎土C）としたものは胎土分析結果、分類Iの領域内に収まることが判明した。確かに肉眼観察の結果、胎土的には分類Iと同じであったが、ネットリした質感という「みため」と形態・調整上の特徴で敢えてここでは分類IVとして提示した。この時点において白石氏の胎土分析の結果と考古学的側面からの分類とに齟齬が生じた。

ここで在地土器を含め胎土分析を行った空港跡地遺跡II・岡清水遺跡の在地産土器の分布領域をみると下川津B類土器とは分布領域が明確に分離でき、在地産土器の分布領域はK-Ca散布図でみると

Ca量が2.0%以下、K量が2.0～3.0%内に、Rb-Sr散布図でみるとSr量が50～150ppm内、Rb量が130～200ppm内とほぼ原間遺跡で在地産とした土器群の分布領域と概ね合致していることが解る。このことは少なくとも香川県内のそれぞれの遺跡ごとの在地産土器とされる土器群は自然科学的分析によると概ね同じ領域に纏まるのではないだろうか。判断は出来ないがその可能性が非常に高いことが判明した。これは香川県が地質的な側面から花崗岩質土壤で成り立っていることと関係が深いものと考える。

したがって下川津B類土器（中間西井坪遺跡IIの下川津B類土器も含む）のように胎土的・形態的に特徴のある土器群において自然科学的分析は有効な手段と考えられるが、それ以外の土器についてはやはり從来からの考古学的に観察が有効な手段であることには間違いない。

分類V（胎土B'）としたものは胎土分析結果、第452図K-Ca散布図では下川津B類土器分布域に外縁部分にあり、明確に分離できないが、第453図Rb-Sr散布図ではSr量が330～400ppm内にあり、明らかに下川津B類土器と分離できることが出来た。資料点数は少ないが、分類IIIで再確認したやや大きめの角閃石を含む土器（資料番号134、報文番号3193と資料番号143、報文番号3335当初の分類ではC類とした）が相当し、今後資料点数が増加すれば領域設定が行えるものと考える。この土器は白石氏も指摘するように生駒西麓産のものと考えられる。

以上自然科学的分析と当初設定していた分類が概ね合致することを確認したが、數点前述した以外の領域にある土器群が認められる。ここでは特に分類Iと分類IIの間にある一群についてまとめたい。

この一群については白石氏の肉眼観察（実体顕微鏡）による胎土分析結果の（イ）に相当し、当初設定した分類IIに含まれるもので、形態的には非常に下川津B類土器に類似するが、細部において差が認められる。

この土器群について藤本氏は長尾町周辺に同様な形態・胎土を持った土器群の所在を指摘しており、今後この周辺との関係が重要になるものと考えられる。

以上の土器群を分類VIとして追加し、原間遺跡出土弥生土器は分類I～VIの6つに分けられることが確認できた。

この6つ分類により原間遺跡内の出土状況をみる。

分類IIとした下川津B類土器は遺構の位置的には微高地よりは丘陵裾部bとした調査区で検出した堅穴住居からの出土が多いという傾向にある。また堅穴住居の形態では円形の堅穴住居より方形の堅穴住居に多いという傾向が認められる。

この傾向は堅穴住居の形態に關係があるのではないだろうか。原間遺跡における住居の形態は第III調査区まとめでも指摘したように元々円形を基調とするものであった。それが遺構II期の段階に方形の堅穴住居が造られ初め、円形と方形が混在する集落となることが解っている。それに伴い徐々に下川津B類土器が増加し、しかも方形の堅穴住居から出土する比率が高いことが解る。これは方形堅穴住居の形態が居住者及び下川津B類土器を伴って移入されたもので、つまりひと・ものの移動の結果と考えられる。しかし方形の堅穴住居出土遺物に下川津B類土器を除くとそれを証明する土器及び住居内の構造等は確認されていない。

また方形の堅穴住居の中には立地場所の分類で示したように、やや不安定な丘陵裾部bに多く集中する傾向があり、移動したひとの中にも階層性を指摘できるものと考える。

## 註

- 松本和彦「分析試料説明」『国道 193 号改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 岡清水遺跡』香川県教育委員会、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 2001.10
- 松本和彦「弥生土器胎土について」『国道 193 号改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 岡清水遺跡』香川県教育委員会、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 2001.10
- 森木晋司「分析試料説明」『空港整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 空港跡地遺跡Ⅱ』香川県教育委員会、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 1997.9
- 森木晋司「在地土器と搬入土器」『空港整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 空港跡地遺跡Ⅱ』香川県教育委員会、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 1997.9
- 白石 純「空港跡地遺跡出土土器の胎土分析」『空港整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 空港跡地遺跡Ⅱ』香川県教育委員会、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 1997.9
- 白石 純「岡清水遺跡出土土器の胎土分析」『国道 193 号改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 岡清水遺跡』香川県教育委員会、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 2001.10

## (4) 単位集落の設定

今回の原間遺跡は高速道路のインター部分ということもあり、大規模に発掘調査を実施した。その結果、第Ⅲ調査区と第Ⅴ調査区で検出した遺構で、集落の構成要素である単位集団を想定出来る結果が得られた。

第Ⅲ調査区は微地形復元・予備調査により確認した南から北方向に延びる微高地上にある。またこの調査区の遺構の中心部は予備調査により西側で低湿地部分を確認し、また発掘調査によって東側で旧古川、北側でほぼ南東方向から北西方向へ流路を取る SRⅢ03 を確認したことによって西・北・東をこれら流路・低湿地によって区画されていることが解る。

この流路・低湿地により区画された調査区では竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土壙墓、井戸跡、土坑、溝、自然流路、柱穴などを検出した。これらの遺構は前述したように西を低湿地部、北を SRⅢ03 の溝、東を現古川（おそらくこの位置には旧の古川があったものと考えられる。）で囲され、南は SHⅢ08・09 から以南にかけて徐々に遺構が希薄になることを考慮すると直径約 60 m のほぼ円形の範囲に収まる集落であることが解る。

そのなかで竪穴住居跡は南から北方向に延びる微高地の高所にほぼ一直線になるように検出した。これらは中心部分と考えられる張り出し付の竪穴住居 3 栋以外は近接するが切り合いを持たず確認されていることから竪穴住居の築造位置に居住者の意図的な配置が読みとれる。

平面形態でみると円形のもの 6 栋（内張り出し付の円形のもの 4 栋）、方形のもの 4 栋がある。円形のものは規模（床面積）でみると大小に区分でき、張り出し付のものが 40 ~ 50 m<sup>2</sup> と大型で、それ以外のものが 20 ~ 30 m<sup>2</sup> と小型のものというように張り出しの付くものと付かないものという平面形態により規模（床面積）の格差が認められる。一方方形のものも規模（床面積）でみると大小に区分でき、40 ~ 50 m<sup>2</sup> の大型のものと、10 ~ 20 m<sup>2</sup> の小型のものとに明確に規模の格差が認められる。

内部構造についてみると削平を受けているが、規模の格差として明確に表れるようには構造差が認められない。しかし敢て言うならば張り出し付の竪穴住居は所謂「10 土坑」を炉として持ち、特に SHⅢ07 は北側の円形炉の周間に土手を持つことから機能的に充実した構造を持っていることが解る。ま

た小型方形堅穴住居は中央に炉を持つものもあるが、SHIII04 のように主柱穴もなく、炉を持たないものもある。これは用途の違いによるものか。

出土遺物からみるとそれぞれの堅穴住居出土土器には壺・壺・鉢・高杯を主とする器種組成が成立しており、個々の堅穴住居間に総合的な出土量の偏差及び器種ごとの偏差は確認できない。しかし石器及び土製品でみると張り出し付堅穴住居 SHIII07 では結晶片岩製の石庖丁、土器転用の紡錘車、土製土糸を持ち、他の堅穴住居と比べると少量ではあるが生産用具・祭祀用具の面で偏差を確認できる。また床面直上で台石が出土していることからも偏差性を指摘できる。

出土遺物を時期的にみると、この遺構は全て弥生時代後期後半の時期に比定できる。そのなかで小地域の中核となる張り出し付の堅穴住居 SHIII05・06・07 を基軸とし、後出する遺構の時期を含めⅡ期からⅤ期に細分した。これらは平面形態が同一を呈し、尚かつ近接することから若干の時期差を持ち、立て替えられたようである。

まずⅡ期は堅穴住居 SH01・02、土壙墓が、Ⅲ期には堅穴住居 SH06・09・03、掘立柱建物、土壙墓が、Ⅳ期には堅穴住居 SH08・04、掘立柱建物、Ⅴ期には堅穴住居、井戸が同時併存していたと考えられる。

この時期的な堅穴住居の同時併存関係からⅡ期には張り出し付の円形堅穴住居 1 棟に対し、やや小型の円形堅穴住居 1 棟が併存するように平面形態的には円形を基調とするもので占められ、規模に大・小が認められる。Ⅲ期になると張り出し付の円形堅穴住居 1 棟に対し、ほぼ同規模の方形堅穴住居 1 棟、小型の円形堅穴住居 1 棟、掘立柱建物 1 棟、土壙墓が併存するように平面形態的に中核となる堅穴住居は円形を基調とするが、併存する堅穴住居は平面形態が方形のものへと移行し、小型のものとの差が顕著になる。この小地域での最盛期である。Ⅳ期になると張り出し付の円形堅穴住居 1 棟、小型方形堅穴住居 1 棟、掘立柱建物 1 棟、土壙墓が併存するように平面形態的に中核となる堅穴住居の形態に変化は認められないが、併存する堅穴住居は小型の方形となる。Ⅴ期では小型の方形堅穴住居 1 棟と井戸 1 基となり、この小地域での集落の終焉時期で、以後集落は廃絶する。

のことから、この小地域の同時併存する堅穴住居は 2 ~ 3 棟ということになる。

最後に遺構の検出状況からの検証としてそれぞれの堅穴住居の切り合いからみると張り出し付堅穴住居跡 SH01・06・08 をほぼ同一地点で近接して検出している。この 3 棟は立て替えの可能性を指摘できるが、現水路が中央を開削していることから明確に判断できなかった。本来この項目は当然最初に検証するべきものであるが、如何せんかなりの削平でそこまでには至っていない。

掘立柱建物跡は微高地の高所から西側に若干傾斜する部分、一部墓域に重複するように検出している。掘立柱建物群も同様に堅穴住居群と明確に住み分けられている。

間数は 1 × 3 間を中心 2 × 3 間、1 × 4 間のものがそれぞれ 1 棟ずつ確認できる。また床面積では土壙墓の覆屋である SB05 と桁行が 4 間ある SB02 を除くと概ね 15 ~ 17 m<sup>2</sup> 程度に纏まりを持つ。柱穴掘り方の規模では掘り方が 50 ~ 90 cm と大きいものと 10 ~ 30 cm と小さいものがある。

このなかで堅穴住居群に伴い倉庫的な収納機能を持つ掘立柱建物は SB02・03 の 2 棟のみと考えられ、掘立柱建物 SB06 はこの小地域の中核となる堅穴住居が密集する部分にあることから、これらの堅穴住居が廃絶した後、シンボリックな建物かあるいは居住建物が堅穴住居から掘立柱建物に変化した結果のどちらかの可能性が伺える。

土壙墓は微高地の高所から西側に若干傾斜する部分、堅穴住居の西側に合計 9 基からなる纏まりが確認できる。それぞれの区域を画する溝等の施設はないものの堅穴住居群と土壙墓の纏まりが明確に

分けられることから住居群に隣接した墓域を構成しているものと考える。

平面形態では方形周溝状遺構もあるがほとんどは長方形の土壙墓で、長軸主軸を真北より東にとる一群と西にとる一群に分けられる。真北より東にとる一群をA群とし、さらに10°～15°東にとるA1群、30°～40°東にとるA2群とに細分する。また真北より西にとる一群をB群とし、これらは長軸主軸を真北より20°～60°西にとる。このB群は切り合いや若干の主軸方向に幅があるが、これを維続性ととした。特にB群とした土壙墓にはST01のように周間に掘立柱建物跡が確認できるものがあり、モガリヤを彷彿させる覆屋の可能性を指摘できる。

出土遺物からは明らかに土壙墓に供献された遺物がないために明確な時期を決定するまでには至っていないのが現状である。しかし埋土中からの出土した少量の遺物と切り合い関係からの時期決定及び前後関係を考えるとST03（B群）・06（A2群）・08（B群）が若干古く、ST05（B群）は若干新しいと考えられる。

同時期にA群とB群が併存することから長軸主軸方向でグルーピングした3群は同時併存していたことが解る。

井戸跡は微高地高所部の南北に列をなす状態で検出した竪穴住居群のほぼ中央部で検出した。検出した位置は高所であるが、ちょうど旧河道の流路に位置し、明らかに湧水地を選んでいることが解る。

以上第Ⅲ調査区で検出した弥生時代の遺構をそれぞれにおいて検討した結果、50m～60mの範囲内でこの集落は完結し、その中には微地形上の高所を選択し竪穴住居・掘立柱建物・井戸などの居住域と墓域が造られ、居住域と墓域は明瞭に分けられ、構成されることが解った。また出土遺物・切り合い関係で概ね2時期が設定でき、それぞれに竪穴住居2～3棟・掘立柱建物1棟・土壙墓2～3基がこの集落の最小単位集団であることが判明した。この最小単位集団は居住範囲外に隣接して推定できる水田域の経営を行っていたものと考えられる。

一方第V調査区で弥生時代の遺構は概ね北部と南部に分かれて検出した。

北部で検出した遺構は竪穴住居3棟・掘立柱建物1棟・井戸1基・土坑などである。

竪穴住居は平面形態が円形のものと方形のものがあり、内訳は円形が2棟、方形が1棟である。円形のものの内SHV03は現在の水路（SDV24）により、削平を受けているものの平面形態は東側に張り出しの付く、推定床面積は78.5m<sup>2</sup>を測る原間遺跡の中で一番巨大な竪穴住居である。方形のSHV01は長方形を呈し、主柱穴が2本と特異な構造を持つ。この竪穴住居は焼失家屋で、内部の柱構造や上部の薦屋根構造が確認できた。竪穴住居はこの円形と方形のもので、円形同士は約6m、円形と方形は約20mとその間隔を異にしており、円形と方形の立地差（集落内の配置差）が認められる。さらに掘立柱建物SBV01はSHV02から東に20m程離れて1棟が確認でき、倉庫としての機能を想定できる。井戸は竪穴住居の北側にあり、SHV01から約20m程離れて検出している。円形の竪穴住居を中心にその他の遺構は緩慢な配置をしている。

これら北部で検出した弥生時代の遺構は西側が自然流路によって削平を受けており、西への広がりについては不明であるが、北及び東は井戸・掘立柱建物を堀にして遺構が希薄になる傾向がある。また予備調査段階で北及び東側に低湿地bを確認しており、この部分には遺構が無いことを確認している。南にはSRV03があり、南側と区画されている。以上の状況からこれらの遺構が直径約60mの範囲内に收まるように形成されていたことが解る。またこれらの遺構は同時期であることから、これは第Ⅲ調査区で確認された集落での遺構の広がり、竪穴住居3棟・掘立柱建物1棟という構成要素の点

で同じ様相を呈していることが解る。そのなかで第V調査区北部では張り出し付・出土遺物に鉄製品を持つという SHV03 を中心に単位集団が形成されている。

一方南部で検出した遺構は竪穴住居 2 棟、掘立柱建物 1 棟、土器棺墓などである。

竪穴住居は 2 棟とも円形で、一部が調査区外であったり、自然流路により削平を受けていたりして完掘していないが、推定床面積が 50 ~ 57 m<sup>2</sup> と規模の大きいものである。掘立柱建物 SBV07 は SHV05 から南へ 20 m 離れて検出しており、この状況は北部と同様な配置を取っている。

これら南部で検出した弥生時代の遺構は調査区が狭いものの現状から推定すると同調査区北部及び第III調査区と同様に遺構が直径約 60 m の範囲内に収まることが解る。またこれらの遺構は同時期であることから、これは北部及び第III調査区で確認された遺構の広がりと同じ規模を呈し、竪穴住居 2 棟、掘立柱建物 1 棟という構成要素もほぼ同じであることが解る。円形の竪穴住居には現状で張り出し付のものは確認されていないが、出土遺物の中に装飾品である勾玉、鉄製品が出土している SHV04 があることから、この竪穴住居を中心とした単位集団は形成されていたものと考えられる。

最後にそれぞれの単位集団の時期は出土遺物から下川津 II 式併行期と考えられ、第III調査区での遺構の変遷で見ると遺構 II 期から III 期にかけての時期に相当する。この時期は第III調査区において遺構数が徐々に増加する時期で、この時期においてのみ第V調査区において集落が形成され、以後消滅する。これ以後集落が継続しないのは古川の氾濫で、第V調査区が不安定になったものと考えられ、これは遺構全体で確認された洪水砂によることから解る。

また弥生時代に古川がどこに流路を取っていたか不明であるが、予備調査で復元した旧地形に従うならば微高地 b が第V調査区に当たり、微高地 a とは別の微高地になり、第IV調査区北部で検出した弥生時代の竪穴住居・土器棺墓とも別の単位になるものと考える。このことから微高地 b に形成された集落の生産域は当然、低湿地 b となり、独自の水田経営を行っていたものと推定する。

つまりそれぞれの立地及び集落構成要素でみると立地で分類した 4 つがそれぞれ単位集団と考えられ、平野部で検出した遺構が最も安定した集落立地を呈する集落単位 1、丘陵裾部 a とした居住域が狭い部分に形成される集落単位 2、丘陵裾部 b とした最も安定の悪い集落立地を呈する集落単位 3、丘陵部に形成される集落単位 4 に分類できる。

#### 4. 大内町内の集落の消長

大内町内では古くは旧石器時代の石器が採集されている。採集された場所は与田川上流域の水主大社に所在する大社遺跡を中心として、遺構は確認されていないもののこの周辺に旧石器時代の居住域があったことを伺わせる貴重な資料である。また縄文時代では大社遺跡を中心に、さらに上流の水主西内に所在する西内遺跡が確認され、近年の発掘調査では与田川中流域の下屋敷に所在する金毘羅山遺跡、原間遺跡などで縄文時代晚期の遺物の出土が確認されている。

縄文時代は狩猟・採集を中心とした社会であったため、このような山間部に近く、洪水等による影響の少ない地域に居住していたものと考えられる。

次の弥生時代になると前期の遺跡では落合に所在する落合遺跡があり、水稻耕作の導入と共に水稻耕作に必要な水が容易に手に入り、耕作可能な土地を求め、やや海岸よりにその立地（居住域）が移動するようである。

この落合遺跡は平野の中ほどに位置する。落合遺跡では遺構は確認されていないものの多量の遺物

が出土しており、調査区に近接して集落の存在を伺わせる。遺跡は周りを那智山から北東方向に派生する低丘陵に挟まれた部分に位置し、矮小な谷筋部分からの湧水を利用し、水稻耕作を可能にしたようである。

川東原間に所在する原間遺跡では遺構は確認されていないが、遺物が少量出土しており、集落の存在を推定できる。

弥生時代中期になると中村に所在する仲善寺遺跡、金毘羅山遺跡、原間遺跡から遺物が出土しており、集落の想定が可能となる。前期に比べると自然環境の変化により平野部の奥に集落が営まれるが、徐々に治水技術は向上し、前期のように自然の湧水に頼る必要が無くなり、遺跡数は増加する。

弥生時代後期になると弥生時代中期の遺跡においても継続的に集落は営まれるが、さらに遺跡数は増え、以前までが3遺跡であったものが、6遺跡と倍になる。新たに増加した遺跡は西から土井にある土井遺跡、与田川の支流周辺、別所に所在する別所池田遺跡・別所遺跡・飛谷遺跡・城ノ内遺跡、川東住居に所在する住屋遺跡である。後期になると以前まで与田川・古川の上流域を拠点として集落が営まれていたものがその下流域へ、また小砂からの玉の池川と中山からの北川が合流する地域に新たに集落が形成される。

旧石器・縄文時代から弥生時代の集落の動向を見ると①大内町の平野と山間部の接点、②主要河川の上流域を中心として集落が形成されていたことが分かる。特に与田川の中流域で平野と山間部の接点、下屋敷から別所、大社にかけてと古川の上流域川東原間は旧石器・縄文時代から弥生時代にかけての中心地であったことが解る。弥生時代後期になるとこの中心地に加え平野内で耕作可能地を求めた結果、土井遺跡・住屋遺跡へと集落が展開したものと考えられる。

古墳時代になると前期では依然として弥生時代後期段階すでに成立していた地域で、集落の継続が確認でき、特に与田川中流域を中心地としていた集団が大日山古墳を築造したものと考えられる。

古墳時代中期になると遺跡数が極端に減少し、住屋遺跡と平成13年度に発掘調査が実施された県道原間遺跡において堅穴住居を検出したにとどまる。しかし墓としては川東原間に所在する原間古墳群が丘陵上に展開する。

原間古墳群の築造された時期は古墳時代中期（5世紀中葉から後半）を中心とする時期で、発掘調査で確認されたのは8基である。その中で原間6号墳は直径30mの円墳で、主体部に木椁構造で、内部に木棺を入れるという構造である。

古墳時代後期で集落が確認された遺跡は金毘羅山遺跡と住屋遺跡で、金毘羅山遺跡では堅穴住居が1棟、住屋遺跡では60棟確認されている。一方同時期の古墳は9基確認されており、その分布をみると弥生時代後期の集落が立地していた地域と重なることが解る。

近藤義郎「共同体と単位集団」『考古学研究第6巻1号』考古学研究会 1959

大久保敏也「上天神遺跡の集落構成」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告 第6巻 上天神遺跡』香川県教育委員会

他 1995

## 5. 銅鐸形土製品について

銅鐸形土製品は銅鐸を模倣した土製品で、銅鐸が弥生時代の祭祀の道具であることからこの銅鐸形土製品も祭祀行為に使用されていたものと考えられている。

銅鐸形土製品が現在何点出土しているかは不明であるが、1984 神尾段階で 37 点であったものが、1993 木村段階で 80 個以上であることから、出土個体数は年々増加しているようである。出土遺跡は基本的には西日本と伊勢湾周辺を中心に、なかでも特に伊勢湾周辺にその分布密度は高い。西から東に行くに従いその出土量は増加する。一方四国内では現在までに徳島県名西郡石井町の高川原遺跡から 1 点出土しているのみで、今回の出土例を合わせても 2 例と少ないので現状である。これは土製品祭祀として愛媛県・岡山県・香川県西部を中心として分銅形土製品の出土が圧倒的な出土例があることと関係するものと考えられ、これは祭祀形態の違いによるところが大きいと思われる。

今回香川県東部の遺跡である原間遺跡から銅鐸形土製品が 1 点出土している。

銅鐸形土製品は原間遺跡第Ⅲ調査区で、原間遺跡弥生時代集落の中でも安定した微高地上で、しかも継続的に営まれる中心的な集落の北側に近接して確認した自然流路 SRⅢ03 から出土している。調査区内で検出した SRⅢ03 のほぼ中央部、第 128 図 B-④地区と蛇行部分の最終部分である。出土土層は中央土層断面第 124 図 V-V' 第⑩層 (SRⅢ03 V 期) から出土し、前後層の出土遺物から時期は下川津Ⅱ式併行期に当たる。SRⅢ03 は前述したように古川から分岐した導水路で、ちょうど流路内の水圧をこの B 地区の 4 回の蛇行により和らげ、水田城に引き込む重要な部分である。

この銅鐸形土製品は一部破損するものの青銅製の銅鐸を模倣したことが伺われるような形態である。鐸身は隅丸の方形あるいはやや角のついた円形とどちらにも取れるよう作られ、左右に指頭痕が明瞭に残る鋸が付く。鋸を左右に見たときに前面と後に裂縫文等は認められない。鐸身上部は指を押し付けながら上下に摘み出しておらず、銅鐸のどの部分の模倣かは不明である。鐸身底部には直径 3 mm 程度の棒先で、深さ 1.7 cm 程の刺突が認められる。鉢は中央上部がやや尖りぎみの蒲鉾状を呈し、鋸と直交するように付けられ、ほぼ中央に穿孔が認められる。

大きさは高さ 4.6 cm (鐸身高 3.5 cm、鉢高 1.1 cm)、鐸身径 3 cm、鋸 6 mm を測る。

この銅鐸形土製品は青銅製の銅鐸を模倣したものであるが、

- ①鐸身が隅丸方形 (円形) に作られていること
  - ②鐸身が中空に作られず、底部から刺突しただけと形骸化していること
  - ③鐸身上部の前と後に摘み出した突起状のものがみられること
  - ④鋸と鉢が直交して作られていること
- などの違和感がある。

かなり無理はあるが③を裂縫文の形骸化したものとしたならば、①～③は忠実な模倣の中にも形骸化が認められ、また④は明らかに模倣ミスである。

このように原間遺跡内で出土した銅鐸形土製品は原間遺跡の弥生集落が最も継続的に営まれる第Ⅲ調査区、それも生産域へ水を取り込む流路の重要な部分から出土したことおよびほとんど完形で欠損していないことから「水」に係わる何らかの祭祀行為に使用されたものではないかと考えられる。しかしこの出土状況からはその具体性は確認できず、不明な点も多い。

また先学の研究による銅鐸形土製品の出土状況と分銅形土製品の出土状況を概観すると分銅形土製品の出土は大阪湾沿岸地域・瀬戸内海沿岸一帯・中国地方中央部の山地部や山陰地方、特に岡山県を